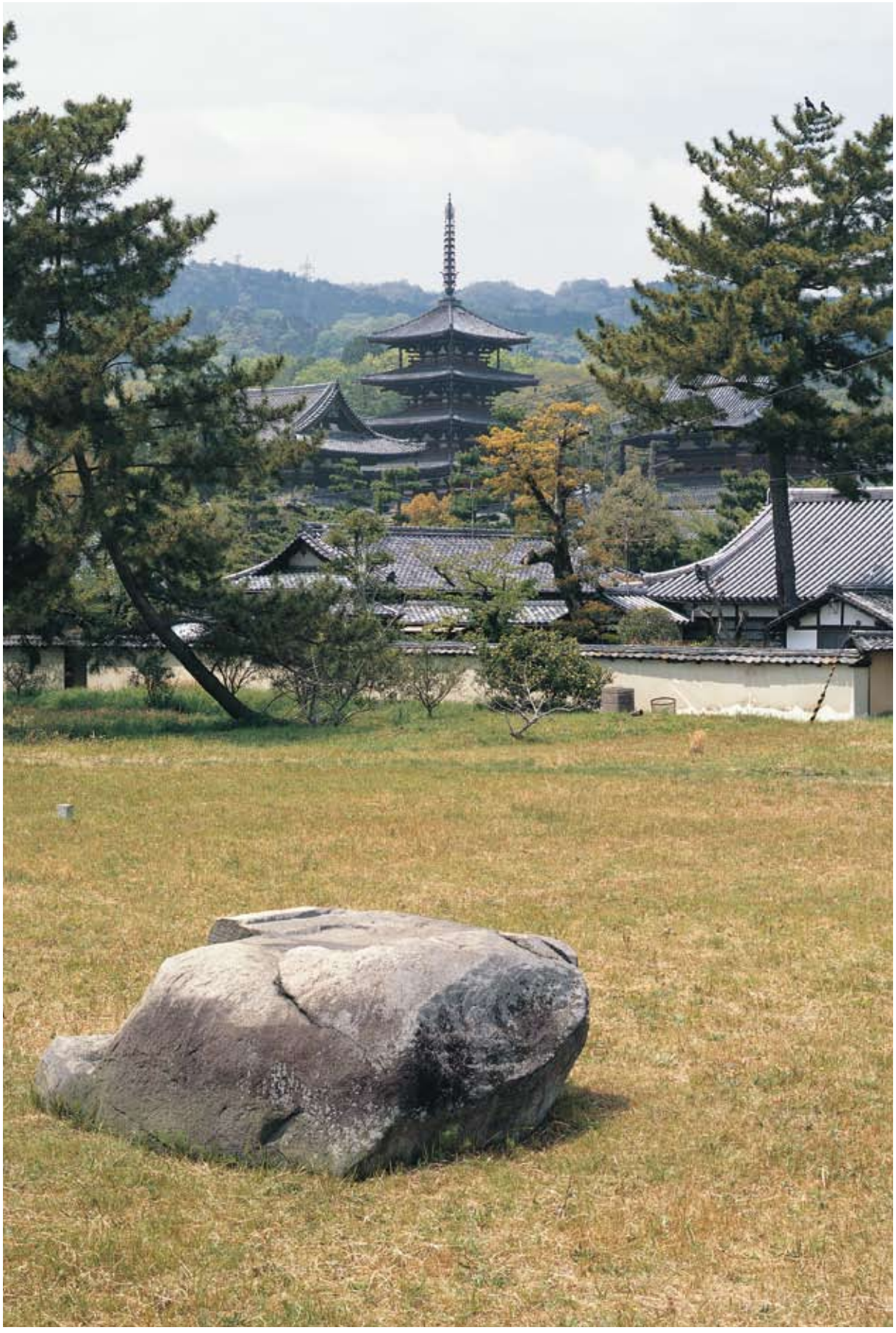
奈良文化財研究所学報第76冊

法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告

独立行政法人文化財研究所
奈良文化財研究所

2007



奈良文化財研究所学報第76冊

法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告

独立行政法人文化財研究所
奈良文化財研究所

2007

序

奈良県斑鳩の地にある法隆寺は、平成５年、わが国ではじめての世界文化遺産に登録されました。法隆寺は、現存する世界最古の木造建造物であり、またそこには仏像をはじめとする貴重な遺産が1400年もの長きにわたって守り続けられてきました。その多くはまた、国宝や重要文化財に指定されてもいます。

法隆寺は明治以降、学界において再建・非再建論争が長く論じられてきました。『日本書紀』には、法隆寺は飛鳥時代はじめに創建された後、天智天皇九年（670）に焼失したと記されています。しかし、法隆寺は様式的に創建当時のままだという説も強かったのです。この論争に一定の決着をつけたのが、境内地の一画にあった巨大な塔心礎です。昭和14年、その心礎は石田茂作博士等によって調査され、現在の法隆寺とは別の寺院跡が発見されました。「若草伽藍跡」です。これが創建法隆寺であり、現在の法隆寺は再建されたもの、つまり再建説が決定的になりました。

文化庁では、昭和25年以来、秋田県大湯環状列石（昭和26年）や奈良県平城宮跡（昭和29年）などの重要遺跡について発掘調査を実施し、学術上も保護行政上も貴重な成果を上げてきました。昭和43・44年には、法隆寺若草伽藍を対象にあらためて発掘調査を行いました。調査は奈良国立文化財研究所（当時）の全面的な協力のもと実施され、伽藍配置の詳細を明らかにするとともに、金堂と塔が並ぶ主軸の方向を、測量機器を用いて正確に測量するなど画期的な成果がありました。また瓦を中心とした出土遺物の検討も、その後の研究に大いに活かされることになりました。

この度、独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所（調査当時の奈良国立文化財研究所）のご尽力によって詳細な発掘調査報告書が刊行される運びとなりました。この報告書が法隆寺の歴史だけではなく、広く我が国の歴史を考えていただく上で一助となることを期待しております。

平成19年3月31日

文化庁文化財部長
土屋　定之

序

法隆寺若草伽藍跡の発掘調査報告書をお届けします。若草伽藍跡塔心礎は現在、中門の東南、実相院や普門院のある築地塀で囲まれた境内地にあります。昭和14年にこの地で石田茂作博士等が発掘調査をおこない、南北一直線上に並んだ金堂跡と塔跡を発見しました。金堂と塔が東西に並ぶ現西院伽藍とは異なった伽藍配置の寺院が、極めて近接した地にかつて実在していたことが明らかになったのです。この発見は、『日本書紀』天智天皇九年（670）条に記録された法隆寺焼亡記事を裏付けることになりました。その結果、建築史、美術史、文献史学において明治時代から論議されてきた法隆寺再建・非再建論争に、一定の終止符を打ちました。

それから30年ほどたった昭和43年と44年に、文化庁は、奈良国立文化財研究所などの協力のもと、石田博士を顧問として再度若草伽藍跡を発掘調査しました。この調査では、中心伽藍の金堂と塔の施工に時間差があることを示す決定的な証拠を発見しました。それによれば、まずさきに金堂を建ててから、次に塔の建設に取りかかったのです。さらには、金堂と塔の所用瓦に違いのあることも明らかになりました。こうした成果は、その後の寺院研究に多大な影響を与えることになりました。

ここに文化庁による法隆寺若草伽藍跡の国営発掘調査成果を報告書として公刊する運びとなりましたが、この作成は文化庁の依頼を受けた奈良文化財研究所がおこないました。とはいえ、発掘調査からすでに40年近くが経過しています。私事で恐縮ですが、昭和44年といえば、私、田辺が奈良国立文化財研究所に就職した年で、当時、法隆寺論争に重大な影響を与える発掘として新聞紙上等にも大きく報じられたため、新人ながらに興奮を覚えて調査に参加した記憶があります。一日も早い報告書の刊行が望まれたことはいうまでもありませんが、諸般の事情がそれを許さず今日に至ったことにつき、ご理解とご寛恕をたまわりたいと思います。今回、若い研究者が中心になって、精力的に遺構図や出土遺物の整理等を進め、刊行に漕ぎ着けたことを諒としていただければ幸いに存じます。ともあれ、本書が、広く国民の皆様の共有財産として迎えられ、活用いただければ、この上ない喜びであります。

最後になりましたが、本報告書の作成にあたりご理解・ご協力・ご支援をいただきました法隆寺、および法隆寺文化財保存事務所をはじめ関係各位・関係機関に厚く御礼申し上げます。

平成19年3月31日

独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所長
田辺　征夫

例　言

1．本書は、国営によって昭和43年（1968）・昭和44年（1969）におこなった法隆寺若草伽藍跡発掘調査の報告書である。本書では、昭和43年の調査を第1次調査、昭和44年の調査を第2次調査と称する。

2．本発掘調査は、文化庁を中心として、奈良国立文化財研究所（当時）、奈良国立博物館、奈良県教育委員会が共同で実施した。

3．本発掘調査は、下記の遺跡を対象として実施した。
法隆寺若草伽藍跡（奈良県生駒郡斑鳩町）

4．本報告書の作成にあたって、法隆寺・奈良県・斑鳩町・安堵町の全面的協力を得た。
特に、大野玄妙、古谷正覚、大野正法、林野了三各氏の御高配に感謝する。

5．本報告書の作成は、岡村道雄、川越俊一の指導のもとに、森郁夫（帝塚山大学）、深澤芳樹、次山淳、高橋克壽、中川あや、今井晃樹、林正憲、山本崇、島田敏男、大林潤、光谷拓実、大河内隆之、清水重敦、肥塚隆保、石村智、牛嶋茂、中村一郎、杉本和樹、鶴見泰寿（奈良県立橿原考古学研究所）、平田政彦（斑鳩町教育委員会）がおこなった。
編集は森・深澤がおこない、南部裕樹（立命館大学）がこれを補佐した。
各章・節の執筆者は、目次と本文末に名前を明記した。
遺物の実測、図面の浄書、本文・表の校正は、東仁美、上田元子、大谷寧子、岡田雅彦、小倉依子、掛本紀子、垣内拓郎、岸本泰緒子、北畑美知代、北野陽子、小池綾子、芝華恵、徳田真理、戸田英里砂、橋本美佳、福島昌恵、森下しのぶの助力をえた。

6．報告にあたっては、遺構との対応を心がけたが、遺構との対応が不明な遺物については、取り上げラベルごとに報告した。

7．塔心礎および出土遺物の石材鑑定は、肥塚隆保による。

8．本報告書に掲載した写真のうち、遺構写真は佃幹雄、巻首写真と遺物写真は牛嶋茂、考察で用いた写真はおもに牛嶋、中村一郎、杉本和樹が撮影した。

9．英訳は、石村智がおこなった。

10．出土資料は奈良文化財研究所にて保管しているが、軒瓦の一部については法隆寺と奈良県立橿原考古学研究所附属博物館にて展示されている。

11．現地調査および報告書の作成にあたっては、上記の方々の他に、多くの方々からのご指導、ご助言、ご支援をいただいた。明記して感謝する。（敬称略、順不同）

荒木浩司、粟田薫、出田和久、伊東隆夫、岩戸晶子、岩本次郎、河角龍典、木立雅朗、金田章裕、佐藤亜聖、鈴木嘉吉、関川尚功、高田美佳、高田良信、高宮邦寛、寺澤薫、野尻忠、橋本紀子、長谷川晋平、幹田秀雄、和田晴吾。

凡　例

1．　測量座標値は、世界測地系を用いた。標高はすべて海抜をあらわす。

2．　調査日誌は、原文をできるだけ忠実に転載した。なお日誌原本に書き込まれた図は、本報告では省略した。

3．　壁面図は、土層の連続性を理解しやすくするために、原図の一部を鏡像にしてトレースした。

4．　壁面の土層名は、基本的に原図記載のままだが、表現を一部補った。

5．　壁面図において、土層の性格に応じて以下のような色分けをおこなっている。

（挿図）　第２整地土　　版築土　　地山

6．　土器資料においては、実測図断面を以下のように表現することで種類の違いを示した。

（挿図）　土師器　　瓦器　　須恵器・陶磁器

7．　瓦の分類と時期区分に関しては、以下の文献で公表されているものに基本的に依拠した。
法隆寺昭和資財帳編集委員会 1992『昭和資財帳第 15 巻　法隆寺の至宝　瓦』小学館
なお、本文中でこれを引用する場合は『至宝』とのみ略する場合がある。

8．　軒瓦については、ほぼすべてを網羅して報告した。

9．　瓦の実測図の縮尺は、軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦を１：４、丸瓦・平瓦を１：５に統一している。

10．　軒丸瓦の丸瓦取り付き位置は、拓本に「▶」で示している。

11．　残存率の高い蓮華文軒丸瓦の実測図は、上半部で弁央、下半部で間弁を表現し、見通し部分を細線で描くことを原則としている。破片資料はその限りではなく、実測ラインを「｜」で示しているが、合成して復原したものには示していない。また、軒平瓦にはすべて実測ラインを示し、見通し部分を細線で描いている。

12．　瓦の調整を記述する際には、軒瓦、丸・平瓦ともに長軸方向を「タテ」、短軸方向を「ヨコ」としている。軒瓦の瓦当部の調整については、瓦を葺いた状態で上下方向を「タテ」、左右方向を「ヨコ」、また軒平瓦瓦当の部位表現については、瓦当面を正面から見た状態で「右」「左」としている。

13．　瓦の色調については、『新版 標準土色帖』を用いた。

法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告

目　　次

第Ⅰ章　調査の経緯と経過 · 1
1　調査対象地 ·（森）1
2　調査の経緯と目的 ·（深澤）2
3　調査組織 ·（深澤）7
4　1939年調査区、1968・1969年調査区の呼称 · · · · · · · · · · · · · · · ·（深澤）8
5　測量と地区の設定 ·（島田）10
6　調査概要 ·（深澤）12
7　調査日誌 · 13

第Ⅱ章　遺構・遺物 · 18
1　基本層序 ·（深澤）18
2　遺構・遺物解説 · · · · · · · · · · · · · · · ·（深澤・次山・高橋・中川・今井・肥塚）34
若草伽藍にかかわる遺構・包含層 · 34
地　　山 · 34
第1整地土 · 34
金堂基壇と掘込地業（SX 7100） · 36
金堂基壇外周の溝（SD 7040・SD 7050・SD 7055） · · · · · · · · · · · · · · · 38
第2整地土 · 56
塔基壇と掘込地業（SX 7000） · 58
金堂・塔と掘込地業 · 62
金堂・塔の中心軸の方位 · 62
その他の遺構・包含層 · 64
井　　戸 · 64
土　　坑 · 68
穴 · 68
東 西 溝 · 69
南 北 溝 · 72
斜 行 溝 · 75
瓦　　溜 · 75
その他の遺構 · 85
包 含 層 · 89
その他の包含層 · 124

第Ⅲ章　考　察 ・・ 141
1　若草伽藍の軒丸瓦・軒平瓦・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（中川） 141
2　若草伽藍の丸瓦・平瓦・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（今井） 165
3　若草伽藍から西院伽藍へ　－年代論の再整理－ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（林） 171
4　法隆寺再建・非再建論争史と若草伽藍・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（島田） 187
5　斑鳩地域の発掘調査と地割・・・・・・・・・・・・・・・・・・（山本・鶴見・平田・大林） 195
6　年輪年代法による法隆寺西院伽藍の年代調査・・・・・・・・・・・・・・・（光谷・大河内） 219
7　部材からみた法隆寺西院伽藍各建造物の建設年代・・・・・・・・・・・・・・・・・（清水） 239

第Ⅳ章　結　語 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（森・深澤） 249

English　Summary ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（森・深澤、石村訳） 251

写真図版目次

PL. 1　1　第１次調査区全景（北西から）
2　第２次調査区全景（北東から）
PL. 2　1　２－１区全景（西から）
2　２－２・３区全景（北東から）
PL. 3　1　２－４区SE 7074（北西から）
2　２－４区SE 7074（北から）
PL. 4　1　２－６区SD 7095（南東から）
2　２－６区SX 7097（南東から）
PL. 5　1　２－７・８区金堂SX 7100北西隅（南東から）
2　２－８区金堂SX 7100北西隅（南西から）
PL. 6　1　２－９区金堂SX 7100を横断するSD 7058（東から）
2　２－10区金堂SX 7100西辺の状況（北西から）
PL. 7　1　２－10・11区金堂SX 7100西辺および南西隅（北から）
2　２－11区北壁面に見える金堂SX 7100西辺（南東から）
PL. 8　1　２－12区金堂SX 7100北辺とSX 7065（南東から）
2　２－12区SX 7065とSD 7055（西から）
3　２－12区東壁面における金堂SX 7100北辺の土層（南西から）
PL. 9　1　２－13区完掘状況（北東から）
2　２－13区土坑内に見える金堂SX 7100版築土層（北西から）
PL. 10　1　２－15区金堂SX 7100南辺と1939北北西溝（南東から）
2　２－17区金堂SX 7100東辺およびSD 7040（北西から）
PL. 11　1　１－１・２区金堂SX 7100南西隅と塔SX 7000（北西から）
2　第１次調査区中心部全景（北から）
PL. 12　1　１－２区1939北溝２と東拡張溝（南西から）
2　１－２区1939北溝２東壁面における金堂SX 7100と瓦層（北西から）
PL. 13　1　２－18区上層調査状況（南東から）
2　２－18区上層調査状況（北から）
PL. 14　1　２－18区SD 7040の瓦出土状況（北西から）
2　２－18区金堂南東隅およびSD 7040・SD 7050（南東から）
PL. 15　1　２－18区SD 7040の瓦出土状況（南東から）
2　２－18区金堂SX 7100南東隅およびSD 7040・SD 7050（北東から）
PL. 16　1　１－２区塔SX 7000北東隅とSD 7040（北から）
2　１－２区塔SX 7000北東隅とSD 7040瓦出土状況（南西から）
PL. 17　1　１－２区SD 7040の瓦出土状況（北から）
2　１－２区SD 7040の瓦出土状況（西から）
PL. 18　1　１－２区塔心礎北側の基壇下で検出されたSD 7040（南西から）
2　１－２区塔心礎北側の基壇下で検出されたSD 7040（北から）
PL. 19　1　第１次調査区塔SX 7000全景（北東から）
2　第１次調査区塔SX 7000全景（北西から）
PL. 20　1　１－２区塔SX 7000北辺（西から）
2　１－２区塔SX 7000北西隅と1939西溝（西から）
PL. 21　1　１－３・４区塔心礎南側地山検出状況（南西から）
2　１－２区塔心礎西側地山検出状況（南東から）
PL. 22　1　塔心礎（北から）
2　塔心礎（西から）
PL. 23　1　塔心礎（南から）
2　塔心礎（東から）
PL. 24　1　塔心礎（北西から）
2　塔心礎（西から）
PL. 25　1　１－２区SX 7030内の版築の状況（南西から）
2　２－16区塔SX 7000断割状況（南西から）
PL. 26　1　第１次調査区全景（南西から）
2　第１次調査区全景（北東から）
PL. 27　1　１－10区調査状況（北西から）
2　１－10区東壁面における炭化物層の堆積状況（南西から）
PL. 28　1　１－11区調査状況（北西から）

	2　1－11区調査状況（北西から）	
PL. 29	1　1－12区調査状況（北西から）	
	2　1－13区調査状況（北西から）	
PL. 30	炭化物層・木炭層	鍛冶関係遺物（鞴羽口）
	炭化物層・木炭層	鍛冶関係遺物（鞴羽口、炉壁片）
PL. 31	炭化物層・木炭層	鍛冶関係遺物（半筒形土製品）
	炭化物層・木炭層	鍛冶関係遺物（椀形滓）
	各包含層	鍛冶関係遺物・土製品
PL. 32	炭化物層・木炭層	鍛冶関係遺物（鉄滓）
PL. 33	各遺構・包含層	金属製品・銭貨・石製品
PL. 34	SE 7074	黒色土器
	KH 62小穴	土師器
	KE 49東西溝	土師器
	KM 53南北溝	土師器
	TO 35南北溝	土師器
	炭化物層・木炭層	土師器
	KC 45瓦溜北凹み	土師器
	KC 46北落ち込み	土師器・磁器
PL. 35	KL 55凹み	土師器・陶器
	TO 28暗褐色土	土師器・瓦器
PL. 36	KA 55暗褐色土	土師器・瓦器
	暗褐色土	土師器・須恵器・瓦器・施釉陶器
PL. 37	褐色土・表土	土師器・須恵器・瓦器・施釉陶器
PL. 38	SD 7040	出土瓦
PL. 39	SD 7040	軒丸瓦・軒平瓦
PL. 40	SD 7040	軒平瓦・丸瓦
PL. 41	SD 7040	軒平瓦・丸瓦
PL. 42	SD 7040	平瓦
PL. 43	SD 7040	平瓦
PL. 44	SD 7040	平瓦・用途不明品
PL. 45	SE 7074・KA 61土坑	軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦
PL. 46	SE 7074	丸瓦・平瓦
	KG 49大穴	平瓦
PL. 47	SX 7065	軒丸瓦
	KE 47瓦溜	軒丸瓦
	KF 49東西溝	軒丸瓦
	KJ 46新瓦溜	軒丸瓦
	KA 46斜行溝上	軒平瓦
	SX 7096	軒丸瓦
	KG 53土坑	軒平瓦
	TS 47地山斜溝	軒平瓦
PL. 48	TO 35南北溝	平瓦
	KI 62瓦溜	平瓦
	KE 46新瓦溜	丸瓦
PL. 49	KE 46瓦溜	軒丸瓦・軒平瓦
	KC 45瓦溜	軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦
PL. 50	TR 51瓦溜	軒丸瓦・軒平瓦
	SX 7097	軒丸瓦・軒平瓦
	バラス土層	軒丸瓦
PL. 51	炭化物層・木炭層	軒丸瓦・軒平瓦
	黄褐色土	軒丸瓦・軒平瓦・平瓦
PL. 52	暗褐色土	軒丸瓦
PL. 53	暗褐色土	軒平瓦
PL. 54	暗褐色土	丸瓦・道具瓦
PL. 55	褐色土	軒丸瓦・道具瓦
PL. 56	TS 47地山直上	軒丸瓦
	KB 47石田トレンチ	軒丸瓦
	TO 30地山上暗褐色土	軒平瓦
	TP 48小礎石周辺	軒丸瓦
	TQ 47瓦層	軒平瓦
	TQ 50バラス混じり褐色土	軒平瓦
	表土	軒丸瓦・軒平瓦
	TP 50灰褐色土	軒平瓦

挿図目次

Fig. 1	法隆寺周辺の地形図（国土地理院1：25,000地形図『信貴山南東』部分）	2
Fig. 2	法隆寺境内全景図（1：5,000）	3
Fig. 3	若草伽藍跡調査位置図（1：2,500）	4
Fig. 4	1939年調査時調査区の呼称（石田1941に加筆）	8
Fig. 5	第1次調査区の呼称（1：500）	9
Fig. 6	第2次調査区の呼称（1：500）	9
Fig. 7	石柱位置および地区設定図	10
Fig. 8	打ち合わせ風景	13
Fig. 9	調査前の若草伽藍跡	13
Fig. 10	塔心礎周辺の調査状況	14
Fig. 11	塔心礎周辺の調査風景	15
Fig. 12	金堂北部の調査風景	16
Fig. 13	現地説明会	17
Fig. 14	SD 7040と多量に出土した瓦	17
Fig. 15	若草伽藍跡遺構全景図（1：500）	19
Fig. 16	若草伽藍跡遺構図1（1：250）	20
Fig. 17	若草伽藍跡遺構図2（1：250）	21
Fig. 18	若草伽藍跡遺構図3（1：250）	22
Fig. 19	若草伽藍跡遺構図4（1：250）	22
Fig. 20	若草伽藍跡土層模式図	23
Fig. 21	2－1区南壁面（1：50）	23
Fig. 22	2－2・3区南壁面（1：50）	23
Fig. 23－1	2－4・5区北壁面1（1：50）	23
Fig. 23－2	2－4・5区北壁面2（1：50）	24
Fig. 24	2－11区北壁面（1：50）	24
Fig. 25	1－2区1939西溝南壁面（1：50）	25
Fig. 26	2－15区北壁面（1：50）	25
Fig. 27	1－2区1939北溝2東拡張溝北壁面（1：50）	25
Fig. 28	1－2区塔心礎北側部分南壁面（1：50）	25
Fig. 29－1	1－3・13区南壁面・1－7～12区北壁面1（1：50）	26
Fig. 29－2	1－3・13区南壁面・1－7～12区北壁面2（1：50）	27
Fig. 30	1－5区1939東溝南壁面（1：50）	27
Fig. 31	2－18区南壁面（1：50）	28
Fig. 32	1－14・15区北壁面（1：50）	28
Fig. 33	2－7区西壁面（1：50）	28
Fig. 34	2－8区1939北西溝1東壁面（1：50）	29
Fig. 35	1－1区東壁面（1：50）	29
Fig. 36－1	2－12区西壁面・2－13～15区東壁面1（1：50）	29
Fig. 36－2	2－12区西壁面・2－13～15区東壁面2（1：50）	30
Fig. 37	2－15区西壁面（1：50）	30
Fig. 38	1－2区TS－KA 51ライン畦西壁面（1：50）	30

Fig. 39　2－16区西壁面（1：50）・・・・・・・・・・・・・ 31
Fig. 40　1－2区1939北溝2西壁面南側（1：50）・・・・・ 31
Fig. 41　1－2区1939北溝2東壁面（1：50）・・・・・・・ 31
Fig. 42　1－2区1939北溝2西壁面北側（1：50）・・・・・ 32
Fig. 43　1－2・5区東壁面（1：50）・・・・・・・・・・・・ 32
Fig. 44　2－17区西壁面（1：50）・・・・・・・・・・・・・ 33
Fig. 45　2－18区西壁面（1：50）・・・・・・・・・・・・・ 33
Fig. 46　土層図計測位置模式図　・・・・・・・・・・・・・ 35
Fig. 47　第1整地土（1：500）・・・・・・・・・・・・・・・ 36
Fig. 48　KB46整地層下端　須恵器（1：4）・・・・・・・・ 36
Fig. 49　金堂基壇掘込地業（1：500）・・・・・・・・・・・ 37
Fig. 50　SD7040　軒丸瓦・軒平瓦（1：4）・・・・・・・・ 40
Fig. 51　SD7040　軒丸瓦・軒平瓦細部　・・・・・・・・・・ 41
Fig. 52　SD7040　丸瓦1（1：5）・・・・・・・・・・・・・ 43
Fig. 53　SD7040　丸瓦2（1：5）・・・・・・・・・・・・・ 44
Fig. 54　SD7040　丸瓦細部　・・・・・・・・・・・・・・・ 45
Fig. 55　SD7040　平瓦1（1：5）・・・・・・・・・・・・・ 46
Fig. 56　SD7040　平瓦2（1：5）・・・・・・・・・・・・・ 47
Fig. 57　SD7040　平瓦3（1：5）・・・・・・・・・・・・・ 48
Fig. 58　SD7040　平瓦4（1：5）・・・・・・・・・・・・・ 49
Fig. 59　SD7040　平瓦5（1：5）・・・・・・・・・・・・・ 50
Fig. 60　SD7040　平瓦6（1：5）・・・・・・・・・・・・・ 51
Fig. 61　SD7040　平瓦7（1：5）・・・・・・・・・・・・・ 52
Fig. 62　SD7040　平瓦8（1：5）・・・・・・・・・・・・・ 53
Fig. 63　SD7040　平瓦9・用途不明品（1：5）・・・・・・・ 54
Fig. 64　SD7040　平瓦細部　・・・・・・・・・・・・・・・ 55
Fig. 65　第2整地土（TS51黄褐色整地土）丸瓦・平瓦（1：5） 56
Fig. 66　TS51地山面上　平瓦（1：5）・・・・・・・・・・・ 56
Fig. 67　第2整地土（1：500）・・・・・・・・・・・・・・・ 57
Fig. 68　塔基壇掘込地業（1：500）・・・・・・・・・・・・ 59
Fig. 69　塔心礎下層の状況　・・・・・・・・・・・・・・・・ 60
Fig. 70　塔心礎（1：40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61
Fig. 71　TR48基壇内の下面　丸瓦・平瓦（1：5）・・・・・ 62
Fig. 72　伽藍中軸の方位　・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63
Fig. 73　SE7074　黒色土器（1：4）・・・・・・・・・・・・ 64
Fig. 74　SE7074・KA61土坑　軒丸瓦・軒平瓦（1：4）・・ 64
Fig. 75　SE7074　軒丸瓦細部　・・・・・・・・・・・・・・ 65
Fig. 76　SE7074　丸瓦・平瓦（1：5）・・・・・・・・・・・ 66
Fig. 77　SE7074　平瓦細部　・・・・・・・・・・・・・・・ 67
Fig. 78　SE7074　道具瓦（1：4）・・・・・・・・・・・・・ 67
Fig. 79　KG53土坑　軒平瓦（1：4）・細部　・・・・・・・・ 68
Fig. 80　KG49土坑　銭貨（1：1）・・・・・・・・・・・・・ 68
Fig. 81　KC46土坑 土師器（1：4）・・・・・・・・・・・・ 68
Fig. 82　SX7065　軒丸瓦（1：4）・細部　・・・・・・・・・ 68
Fig. 83　SX7065　丸瓦（1：5）・・・・・・・・・・・・・・ 69
Fig. 84　KH62小穴　土師器（1：4）・・・・・・・・・・・・ 69
Fig. 85　KG49大穴　平瓦（1：5）・・・・・・・・・・・・・ 69
Fig. 86　東西溝　土師器・須恵器・瓦器（1：4）・・・・・・ 70
Fig. 87　KF49東西溝　軒丸瓦（1：4）・細部　・・・・・・・ 71
Fig. 88　KE49東石溝　丸瓦（1：5）・・・・・・・・・・・・ 71
Fig. 89　KG46東西溝　軒丸瓦（1：4）・細部　・・・・・・・ 72
Fig. 90　南北溝　土師器・須恵器・瓦器・陶磁器（1：4）・・ 73
Fig. 91　KM53南北溝　軒平瓦（1：4）・・・・・・・・・・・ 73
Fig. 92　TO35南北溝　平瓦（1：5）・細部　・・・・・・・・ 74
Fig. 93　TS47地山斜溝　軒平瓦（1：4）・細部　・・・・・・ 75
Fig. 94　KA46斜行溝上　軒平瓦（1：4）・・・・・・・・・・ 75
Fig. 95　SX7096　軒丸瓦（1：4）・・・・・・・・・・・・・ 75
Fig. 96　KJ46新瓦溜　軒丸瓦（1：4）・細部　・・・・・・・ 76
Fig. 97　KI62瓦溜　平瓦（1：5）　・・・・・・・・・・・・ 76
Fig. 98　KH48瓦溜　丸瓦・平瓦（1：5）・・・・・・・・・・ 77
Fig. 99　KE47瓦溜　軒丸瓦（1：4）・細部　・・・・・・・・ 77
Fig. 100　KE46新瓦溜　丸瓦・平瓦（1：5）・・・・・・・・ 78
Fig. 101　KE46瓦溜　軒丸瓦・軒平瓦（1：4）・・・・・・・ 78
Fig. 102　KC45瓦溜　須恵器（1：4）・・・・・・・・・・・・ 79
Fig. 103　KC45瓦溜　軒丸瓦・軒平瓦（1：4）・・・・・・・ 80
Fig. 104　KC45瓦溜　軒平瓦細部　・・・・・・・・・・・・・ 81
Fig. 105　KC45瓦溜　丸瓦・平瓦（1：5）・・・・・・・・・・ 82
Fig. 106　KC45瓦溜　道具瓦（1：4）・・・・・・・・・・・・ 83
Fig. 107　KC45瓦溜北凹み　土師器・瓦器（1：4）・・・・・ 84
Fig. 108　TR51瓦溜　軒丸瓦・軒平瓦（1：4）・・・・・・・ 84
Fig. 109　TR51瓦溜　軒丸瓦細部　・・・・・・・・・・・・・ 85
Fig. 110　TR51瓦溜　丸瓦（1：5）・・・・・・・・・・・・・ 85
Fig. 111　SX7097　軒平瓦細部　・・・・・・・・・・・・・・ 85
Fig. 112　SX7097　軒丸瓦・軒平瓦（1：4）・・・・・・・・・ 86
Fig. 113　TQ47瓦敷　平瓦・用途不明品（1：5）・・・・・・ 87
Fig. 114　KL55凹み・KC46北落ち込み
　土師器・陶磁器（1：4）・・・・・・・・・・・・・・・・ 88
Fig. 115　バラス土層　土師器・須恵器（1：4）・・・・・・・ 89
Fig. 116　バラス土層　軒丸瓦（1：4）・・・・・・・・・・・ 90
Fig. 117　炭化物層・木炭層　鍛冶関係遺物　・・・・・・・・・ 91
Fig. 118　炭化物層・木炭層　鍛冶関係遺物1（1：3）・・・・ 92
Fig. 119　炭化物層・木炭層　鍛冶関係遺物2（1：3）・・・・ 93
Fig. 120　炭化物層・木炭層　土師器・須恵器（1：4）・・・・ 94
Fig. 121　炭化物層・木炭層　軒丸瓦・軒平瓦（1：4）・・・・ 94
Fig. 122　炭化物層・木炭層　軒丸瓦細部　・・・・・・・・・・ 94
Fig. 123　黄褐色土　凝灰岩片（1：2）・・・・・・・・・・・・ 95
Fig. 124　黄褐色土　黒色土器（1：4）・・・・・・・・・・・・ 95
Fig. 125　黄褐色土　軒丸瓦・軒平瓦（1：4）・細部　・・・・・ 96
Fig. 126　黄褐色土　丸瓦・平瓦・用途不明品（1：5）・細部　・ 97
Fig. 127　暗褐色土　金属製品（1　2：3）・銭貨（2　1：1）・
　石製品（3～6　1：3）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 99
Fig. 128　TO28暗褐色土　土師器・瓦器（1：4）・・・・・・ 101
Fig. 129　KA55暗褐色土　土師器・瓦器（1：4）・・・・・・ 103
Fig. 130　暗褐色土　土師器・須恵器・瓦器・施釉陶器（1：4） 104
Fig. 131　暗褐色土　軒丸瓦細部　・・・・・・・・・・・・・・ 106
Fig. 132　暗褐色土　軒丸瓦1（1：4）・・・・・・・・・・・・ 107
Fig. 133　暗褐色土　軒丸瓦細部　・・・・・・・・・・・・・・ 108
Fig. 134　暗褐色土　軒丸瓦細部　・・・・・・・・・・・・・・ 109
Fig. 135　暗褐色土　軒丸瓦2・軒平瓦（1：4）　・・・・・・・ 110
Fig. 136　暗褐色土　軒平瓦細部　・・・・・・・・・・・・・・ 111
Fig. 137　暗褐色土　丸瓦・平瓦（1：5）・・・・・・・・・・・ 112
Fig. 138　暗褐色土　道具瓦（1：4）・・・・・・・・・・・・・ 113
Fig. 139　褐色土　金属製品（1　2：3）・銭貨（2　1：1）
　・石製品（3・4　1：3）・・・・・・・・・・・・・・・・ 114
Fig. 140　褐色土　土師器・須恵器・瓦器（1：4）・・・・・・ 115
Fig. 141　褐色土　軒丸瓦細部　・・・・・・・・・・・・・・・ 116
Fig. 142　褐色土　軒丸瓦1（1：4）・・・・・・・・・・・・・ 117
Fig. 143　褐色土　軒丸瓦細部　・・・・・・・・・・・・・・・ 119
Fig. 144　褐色土　軒丸瓦2（1：4）・・・・・・・・・・・・・ 120
Fig. 145　褐色土　軒丸瓦細部　・・・・・・・・・・・・・・・ 121
Fig. 146　褐色土　軒平瓦（1：4）・・・・・・・・・・・・・・ 121
Fig. 147　褐色土　丸瓦・平瓦（1：5）・・・・・・・・・・・・ 122
Fig. 148　褐色土　道具瓦（1：4）・・・・・・・・・・・・・・ 123
Fig. 149　表土　須恵器・施釉陶器（1：4）・・・・・・・・・・ 124
Fig. 150　表土　軒丸瓦・軒平瓦（1：4）・・・・・・・・・・・ 124
Fig. 151　その他の包含層　金属製品（1　2：3）・
　石製品（2・3　1：3）・土製品（4　1：3）・・・ 125
Fig. 152　その他の包含層　軒丸瓦1（1：4）・・・・・・・・・ 125
Fig. 153　その他の包含層　軒丸瓦細部　・・・・・・・・・・・ 126
Fig. 154　その他の包含層　軒丸瓦2・軒平瓦（1：4）　・・・・ 126
Fig. 155　その他の包含層　軒丸瓦3（1：4）・・・・・・・・・ 127
Fig. 156　その他の包含層　軒丸瓦細部　・・・・・・・・・・・ 128
Fig. 157　若草伽藍跡出土軒丸瓦の蓮弁　・・・・・・・・・・・ 142
Fig. 158　軒丸瓦接合部模式図　・・・・・・・・・・・・・・・ 143
Fig. 159　若草伽藍跡出土軒丸瓦型式（1：5）・・・・・・・・ 144
Fig. 160　若草伽藍跡出土軒平瓦型式1（1：5）・・・・・・・ 148

Fig. 161　若草伽藍跡出土軒平瓦型式２（１：５）・・・・・・・ 149
Fig. 162　軒丸瓦出土分布図１　・・・・・・・・・・・・・・・ 152
Fig. 163　軒丸瓦出土分布図２　・・・・・・・・・・・・・・・ 153
Fig. 164　軒平瓦出土分布図１　・・・・・・・・・・・・・・・ 154
Fig. 165　軒平瓦出土分布図２　・・・・・・・・・・・・・・・ 155
Fig. 166　玉縁の接合状況（玉縁基部・断面）・
　　玉縁接合法模式図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 165
Fig. 167　丸瓦凹面布目圧痕の分類（１：１）・・・・・・・・・ 166
Fig. 168　玉縁基部のヘラケズリ調整　・・・・・・・・・・・・ 166
Fig. 169　未調整の玉縁基部　・・・・・・・・・・・・・・・・ 166
Fig. 170　平瓦凹面布目圧痕の分類（１：１）・・・・・・・・・ 168
Fig. 171　平瓦凹面調整の分類　・・・・・・・・・・・・・・・ 169
Fig. 172　３Ｂｂ型式の変遷・・・・・・・・・・・・・・・・・ 171
Fig. 173　４Ａ型式の変遷　・・・・・・・・・・・・・・・・・ 172
Fig. 174　飛鳥時代中期の瓦　・・・・・・・・・・・・・・・・ 173
Fig. 175　７Ａ型式の変遷　・・・・・・・・・・・・・・・・・ 174
Fig. 176　37Ａ－216Ａ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 176
Fig. 177　37Ｂ－216Ｃ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 176
Fig. 178　雲肘木の変遷　・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 178
Fig. 179　中門および回廊所用瓦　・・・・・・・・・・・・・・ 179
Fig. 180　斑鳩地域の発掘調査位置図（１：20，000）・・ 206・207
Fig. 181　若草伽藍の関連遺構（１：２，500）・・・・・・・・・ 209
Fig. 182　法隆寺東院下層の斑鳩宮関連遺構（１：２，500）・・ 210
Fig. 183　法起寺下層の偏向する遺構（１：２，000）・・・・・・ 211
Fig. 184　心柱の標本　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 221
Fig. 185　心柱の形状　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 221
Fig. 186　法隆寺夢殿桁材（Ａ）および五重塔心柱（Ｂ）の
　　年輪成長曲線（西岡1974）・・・・・・・・・・・・・・・ 222
Fig. 187　心柱のソフトＸ線撮影写真　・・・・・・・・・・・・ 224
Fig. 188　心柱の角Ｃ部分における赤外分光撮影写真　・・・・・ 225
Fig. 189　ヒノキの暦年標準パターングラフと心柱の
　　年輪パターングラフ　・・・・・・・・・・・・・・・・・ 226
Fig. 190　法隆寺金堂・五重塔・中門の年輪年代測定結果　・・・ 230
Fig. 191　金堂外陣天井板の焼損古材　・・・・・・・・・・・・ 231
Fig. 192　金堂外陣天井板（スギ）から採取された内樹皮　・・・ 231
Fig. 193　金堂外陣天井板の内樹皮顕微鏡写真（×200）・・・・ 231
Fig. 194　現生スギの内樹皮顕微鏡写真（×200）・・・・・・・・ 231
Fig. 195　スギの暦年標準パターングラフと法隆寺金堂外陣天井板
　　（スギ）の年輪パターングラフ・・・・・・・・・・・・・ 231
Fig. 196　法隆寺金堂桁行断面図　・・・・・・・・・・・・・・ 232
Fig. 197　法隆寺金堂梁行断面図　・・・・・・・・・・・・・・ 232
Fig. 198　ヒノキの暦年標準パターングラフと金堂外陣天井板
　　（ヒノキ）の年輪パターングラフ・・・・・・・・・・・・ 232
Fig. 199　法隆寺金堂初重平面図　・・・・・・・・・・・・・・ 233
Fig. 200　法隆寺金堂初重見上図　・・・・・・・・・・・・・・ 233
Fig. 201　法隆寺五重塔立面図　・・・・・・・・・・・・・・・ 234
Fig. 202　法隆寺五重塔断面図　・・・・・・・・・・・・・・・ 234
Fig. 203　ヒノキの暦年標準パターングラフと
　　法隆寺五重塔雲斗雲肘木の年輪パターングラフ　・・・ 234
Fig. 204　法隆寺中門立・断面図　・・・・・・・・・・・・・・ 235
Fig. 205　ヒノキの暦年標準パターングラフと法隆寺中門大斗
　　（ハ－一）の年輪パターングラフ・・・・・・・・・・・・ 235
Fig. 206　雲肘木の比較（国宝・重要文化財建造物実測図、
　　奈良県所蔵建造物図面よりトレース、１：30）・・・・ 242
Fig. 207　法隆寺建造物の胴張りの比較（１：40）・・・・・・・ 243
Fig. 208　法隆寺金堂・五重塔・中門および法起寺三重塔の
　　建設過程と年代　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 244
Fig. 209　法隆寺金堂における規格材（復原図）・・・・・・・・ 246

表目次

Tab. 1　周辺地域の発掘調査一覧　・・・・・・・・・・・・・・・ 5
Tab. 2　新旧座標値の対照　・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
Tab. 3　地山標高値一覧　・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
Tab. 4　金堂基壇掘込地業の標高値　・・・・・・・・・・・・・ 37
Tab. 5　第２整地土の標高値　・・・・・・・・・・・・・・・・ 57
Tab. 6　塔基壇掘込地業の標高値　・・・・・・・・・・・・・・ 59
Tab. 7　鉄滓計測表　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 130
Tab. 8　銭貨計測表　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 130
Tab. 9　金属製品他遺物ラベル表　・・・・・・・・・・・・・・ 131
Tab. 10－1 土器ラベル表－１　・・・・・・・・・・・・・・・・ 131
Tab. 10－2 土器ラベル表－２　・・・・・・・・・・・・・・・・ 132
Tab. 10－3 土器ラベル表－３　・・・・・・・・・・・・・・・・ 133
Tab. 11－1 軒丸瓦観察表－１　・・・・・・・・・・・・・・・・ 134
Tab. 11－2 軒丸瓦観察表－２　・・・・・・・・・・・・・・・・ 135
Tab. 11－3 軒丸瓦観察表－３　・・・・・・・・・・・・・・・・ 136
Tab. 12　軒平瓦観察表　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 137
Tab. 13　丸瓦観察表　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 138
Tab. 14－1 平瓦観察表－１　・・・・・・・・・・・・・・・・・ 139
Tab. 14－2 平瓦観察表－２　・・・・・・・・・・・・・・・・・ 140
Tab. 15　道具瓦・用途不明品観察表　・・・・・・・・・・・・・ 140
Tab. 16　軒丸瓦各型式の特徴　・・・・・・・・・・・・・・・・ 146
Tab. 17－1 若草伽藍跡出土軒丸瓦型式一覧１　・・・・・・・・・ 158
Tab. 17－2 若草伽藍跡出土軒丸瓦型式一覧２　・・・・・・・・・ 159
Tab. 17－3 若草伽藍跡出土軒丸瓦型式一覧３　・・・・・・・・・ 160
Tab. 18－1 若草伽藍跡出土軒平瓦型式一覧１　・・・・・・・・・ 161
Tab. 18－2 若草伽藍跡出土軒平瓦型式一覧２　・・・・・・・・・ 162
Tab. 18－3 若草伽藍跡出土軒平瓦型式一覧３　・・・・・・・・・ 163
Tab. 19　SD 7040出土丸瓦の法量　・・・・・・・・・・・・・・ 167
Tab. 20　SD 7040出土平瓦の法量　・・・・・・・・・・・・・・ 168
Tab. 21　平瓦の型式属性一覧　・・・・・・・・・・・・・・・・ 169
Tab. 22　明治期における「再建」・「非再建」論の主張　・・・・ 188
Tab. 23　大正～昭和初期における「再建」・
　　「非再建」論の主張・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 189
Tab. 24　昭和期における「再建」・「新非再建」論の主張　・・・ 190
Tab. 25－1 斑鳩地域の発掘調査（１）・・・・・・・・・・・・・ 199
Tab. 25－2 斑鳩地域の発掘調査（２）・・・・・・・・・・・・・ 200
Tab. 25－3 斑鳩地域の発掘調査（３）・・・・・・・・・・・・・ 201
Tab. 25－4 斑鳩地域の発掘調査（４）・・・・・・・・・・・・・ 202
Tab. 25－5 斑鳩地域の発掘調査（５）・・・・・・・・・・・・・ 203
Tab. 26　斑鳩の偏向する遺構（抄）・・・・・・・・・・・・・・ 208
Tab. 27　法隆寺金堂・五重塔・中門の年輪年代測定結果　・・・ 229

第Ⅰ章　調査の経緯と経過

本書は、奈良県生駒郡斑鳩町史跡法隆寺旧境内の若草伽藍跡において、文化庁が1968年と1969年の両年にわたっておこなった国営発掘調査の成果をまとめたものである。

なお若草伽藍跡については、本調査以降2006年5月に至るまでに、奈良国立文化財研究所（現独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所）、奈良県立橿原考古学研究所、斑鳩町教育委員会が、合計9次におよぶ調査をおこなっている（Fig.3、Tab.1）。このうちには、若草伽藍寺域北・西を画する一本柱塀といった重要遺構および彩色壁画の発見を含んでいる。（深澤）

1　調査対象地

法隆寺は斑鳩の北東域、矢田丘陵の南西隅に位置し、法隆寺山内に所在する。斑鳩は、地勢的には矢田丘陵の南麓に位置し、竜田川（西）、富雄川（東）、大和川（南）に挟まれた地域である（Fig.1）。斑鳩の地域は古代政権によって重要視され、7世紀初頭に矢田丘陵の東南麓に上宮王家によって斑鳩宮が営まれた。そして、寺院としてはまず法隆寺が建立された。次いで中宮寺・法起寺・法輪寺が建立されていった。この地に最初に建立された法隆寺の創建年代に関して明確に記す史料はみられないが、この寺は『日本書紀』をはじめとする史料に天智天皇九年(670)に焼亡したことがみえる。しかし、火災を否定する強い見解もあり、明治20年代以来そのことに関する論争が約50年間続けられていた。

法隆寺内には若草寺、あるいは若草伽藍と呼ばれる一郭があり、巨大な塔心礎がみられる。そこは宝珠院の東、普門院と実相院の南で東面大垣の内側一帯であり、現在は畑地や空き地になっている。塔心礎は明治年間に法隆寺の近くに居住していた北畠男爵家に搬出された。心礎はその後、芦屋の久原邸を経て野村邸に移されたが、寺外に出されていたその塔心礎が、1939年に返還されることになった。それを機に、法隆寺は塔心礎を本来の位置に据える希望をもち、それに応えるべく発掘調査がおこなわれることになった。調査は同年12月、石田茂作・末永雅雄・澄田正一等によっておこなわれた。15日間にわたっておこなわれた調査では、トレンチの壁面での観察で土層の変化をとらえ、版築による2基の基壇の痕跡をみつけた。そして、それらが南北に配置された塔と金堂の掘込地業基壇であると考えられ、この地に西院伽藍に先行する寺が営まれたことが確認された。南北配置とはいうものの、軸線が磁北から西に約20°振れており、これは西院伽藍の造営方位とも異なるものであった。また、金堂基壇の周囲には幅12尺（曲尺）の小石敷きがめぐらされていた可能性も指摘された。それらの成果は、

石田茂作1941「法隆寺若草伽藍址の発掘に就て」『日本上代文化の研究』聖徳太子千三百廿年御忌奉讃記念論文集　法相宗勧学院同窓会

によって明らかにされている。この発掘調査によって明治以来長い間続けられてきた「法隆寺再建・非再建論争」に一応の終止符が打たれることとなった。（森）

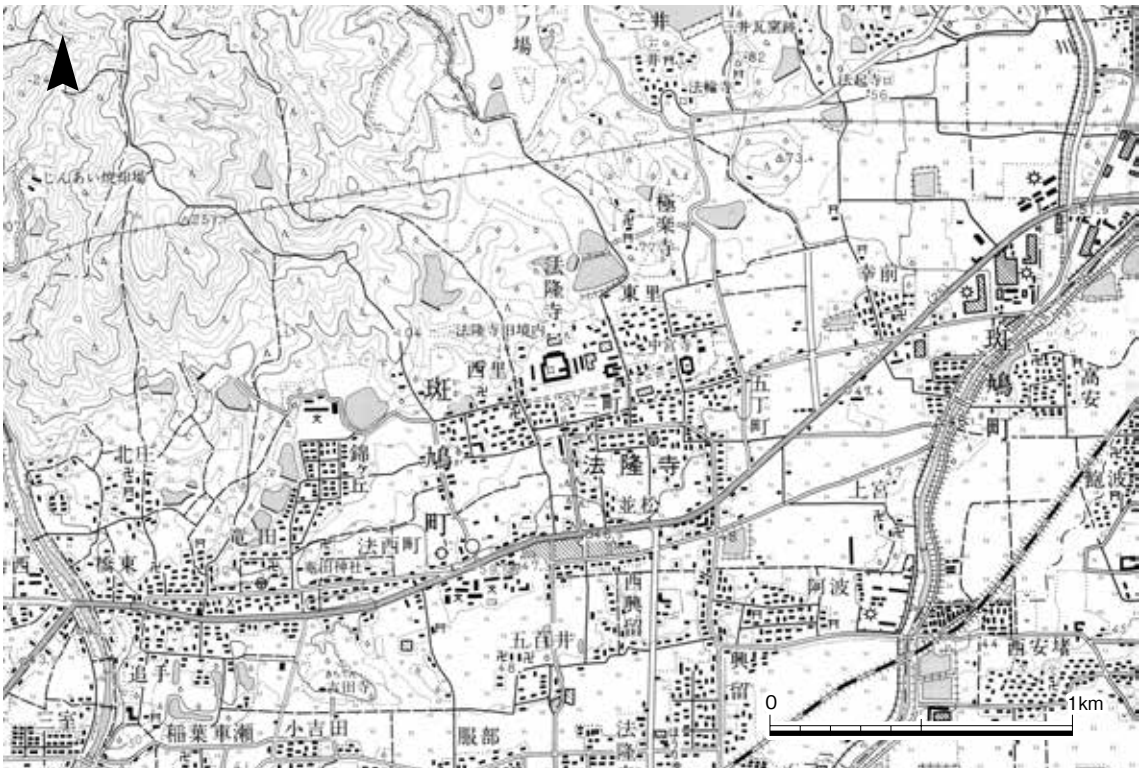


Fig. 1　法隆寺周辺の地形図（国土地理院１： 25,000地形図『信貴山南東』部分）

2　調査の経緯と目的

1939年 に発見された若草伽藍跡の南側において、これに一部重複する重要文化財法隆寺西院南面大垣が解体修理されるのを契機に、国営発掘として再度発掘調査が実施されることになった。本修理工事に先立って、若草伽藍跡の詳細を明らかにし、修理工事に資するとともに将来の保存整備のための基礎資料を得るのを目的とした。このうちには、1939年の調査では明らかにされなかった回廊や講堂の位置を確かめることも目的に含まれた。このために、南面大垣に沿った地域と普門院・実相院の一部についても調査対象地とした。

調査期間は1968年度から２ヵ年継続の予定で、実施することになっていた。２ヵ年それぞれの調査期間は、機材搬入から埋め戻し完了まで含めると、第１次調査が1968年８月16日から９月19日まで、第２次調査が1969年９月30日から11月25日までであった。

なお記者発表を、第１次調査は９月５日、第２次調査は10月９日、10月17日、10月25日におこなった。なお第１次調査では、８月31日にテレビ中継、同日現地説明会を実施した。また第２次調査では、10月17日にテレビ撮影、10月18日に現地説明会をおこなった。

また各調査成果は、

文化庁文化財保護部記念物課1968『法隆寺若草伽藍跡　昭和43年度発掘調査概報』

文化庁文化財保護部記念物課1969『法隆寺若草伽藍跡　昭和44年度発掘調査概報』

で、公表されている。（深澤）

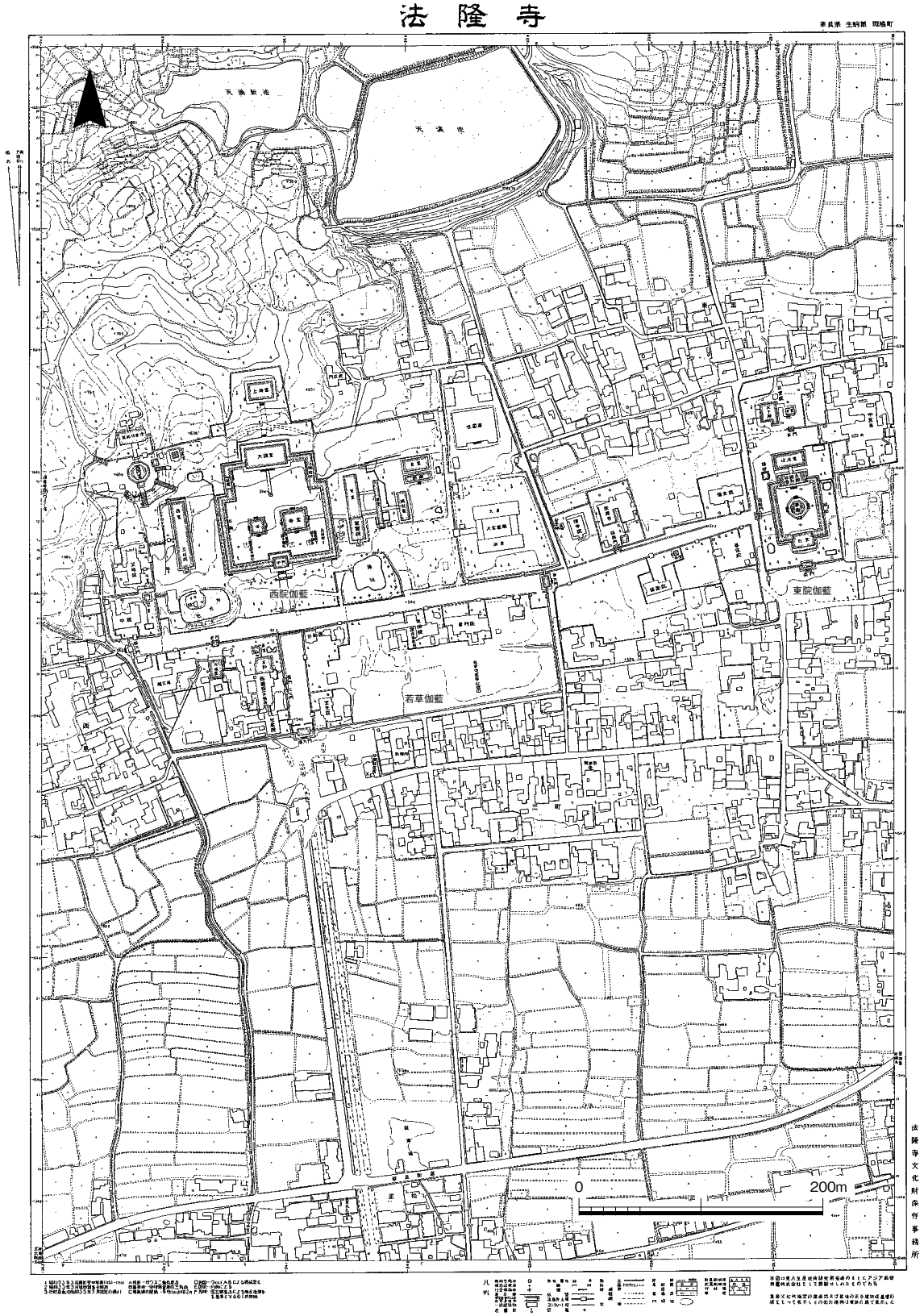


Fig. 2　法隆寺境内全景図（1： 5,000）

Fig. 3　若草伽藍跡調査位置図（1：2,500）

Tab. 1　周辺地域の発掘調査一覧

番号	調査機関	遺跡名	調査期間	報告書等
1	石田茂作・末永雅雄	若草伽藍跡	1939	石田1941
2	石田茂作・村田治郎	法隆寺福園院	1959.11－1959.12	石田・村田1959
3	国営調査	若草伽藍跡（68年度）（平城54－4次）	1968.8－1968.9	文化庁記念物課1968
4	国営調査	若草伽藍跡（69年度）（平城62－5次）	1969.9－1969.11	文化庁記念物課1969
5	奈文研	法隆寺境内（新宝庫建設予定地）（平城39－4次）	1966.1	—
6	奈文研・橿考研	法隆寺防災工事（78～83年度）	1978.12－1984.3	法隆寺1985
7	奈文研	法隆寺境内（収納庫建設）（平城151－38次）	1983.10－1983.12	法隆寺発掘調査小委員会1984
8	奈文研・橿考研	若草伽藍跡（平城225次）	1991.4－1991.7	奈文研1992
9	奈文研・橿考研	法隆寺境内北方子院跡（百済観音堂）（平城226次）	1991.6－1992.3	奈文研1992
10	奈文研・橿考研	法隆寺境内（喜多院東面築地）（平城226次補足）	1995.1	奈文研1996
11	橿考研	法隆寺旧境内（福園院山門および築地）	1978.3	橿考研1978
12	橿考研	法隆寺旧境内（律学院山門）	1978.3	橿考研1978
13	橿考研	法隆寺旧境内（寺務所西門および築地）	1978.3	橿考研1978
14	橿考研	若草伽藍推定地（試掘）	1986.1	橿考研1989 a
15	橿考研	法隆寺旧境内	1986.2	橿考研1989 b
16	橿考研	法隆寺旧境内（弥勒院庫裏）	1990.7－1990.8	橿考研1992
17	橿考研	法隆寺旧境内	1995.3	橿考研1996
18	橿考研	法隆寺旧境内（政南院跡）（旧、東茶所）	1999.6－1999.7 2000.3	橿考研2000
19	橿考研	法隆寺旧境内（県2003－1次）	2003.8－2003.9	橿考研2004
20	橿考研	法隆寺旧境内（県2003－2次）	2004.2－2004.5	橿考研2005
21	斑鳩町教委	法隆寺近接地（町93－1次）	1993.7	奈良県内市町村埋文報告会1994
22	斑鳩町教委	法隆寺近接地（町93－2次）	1993.8	奈良県内市町村埋文報告会1994
23	斑鳩町教委	若草伽藍跡（町93－1次）	1993.12	奈良県内市町村埋文報告会1994
24	斑鳩町教委	法隆寺東院近接地（町94－1次）	1994.6	奈良県内市町村埋文報告会1995
25	斑鳩町教委	斑鳩宮推定地（町94－2次）	1994.9	奈良県内市町村埋文報告会1995
26	斑鳩町教委	斑鳩宮推定地（町95－1次）	1995.1	奈良県内市町村埋文報告会1996
27	斑鳩町教委	法隆寺隣接地（町96－1次）	1996.1	奈良県内市町村埋文報告会1997
28	斑鳩町教委	斑鳩宮推定地（町97－1次）	1997.6	奈良県内市町村埋文報告会1998
29	斑鳩町教委	若草伽藍跡（町97－1次）	1997.1	奈良県内市町村埋文報告会1998
30	斑鳩町教委	若草伽藍跡（町97－2次）	1998.1	奈良県内市町村埋文報告会1999
31	斑鳩町教委	法隆寺隣接地（町98－1次）	1998.6	奈良県内市町村埋文報告会1999
32	斑鳩町教委	若草伽藍跡（町99－1次）	1999.9	斑鳩町教委2002
33	斑鳩町教委	法隆寺周辺遺跡（町00－1次）	2001.1	奈良県内市町村埋文報告会2002
34	斑鳩町教委	法隆寺周辺遺跡（町01－2次）	2001.4	奈良県内市町村埋文報告会2002
35	斑鳩町教委	法隆寺周辺遺跡（町01－4次）	2002.3	奈良県内市町村埋文報告会2003
36	斑鳩町教委	法隆寺周辺遺跡（町02－3次）	2002.12	奈良県内市町村埋文報告会2003
37	斑鳩町教委	若草伽藍跡西方（法隆寺周辺遺跡）（町04－1次）	2004.9－2005.3	斑鳩町教委2004
38	斑鳩町教委	法隆寺周辺遺跡（町04－3次）	2004.12－2005.3	—
39	斑鳩町教委	法隆寺周辺遺跡（町05－1次）	2005.6	奈良県内市町村埋文報告会2006
40	斑鳩町教委	法隆寺周辺遺跡（町05－2次）	2005.6－2005.7	奈良県内市町村埋文報告会2006
41	斑鳩町教委	法隆寺周辺遺跡（町05－4次）	2005.12	奈良県内市町村埋文報告会2006
42	斑鳩町教委	法隆寺周辺遺跡（町05－5次）	2006.1－2006.3	—
43	斑鳩町教委	法隆寺旧境内（町05－1次）	2006.2－2006.3	斑鳩町教委2006
44	斑鳩町教委	法隆寺周辺遺跡（町05－6次）	2006.2	—

周辺地域の発掘調査に関する文献一覧（年代順）

石田茂作　1941 「法隆寺若草伽藍址の発掘に就て」『日本上代文化の研究』聖徳太子千三百廿年御忌奉讃記念論文集　法相宗勧学院同窓会

石田茂作・村田治郎　1959 『法隆寺福園院址第２回発掘調査概報』

文化庁文化財保護部記念物課　1968 『法隆寺若草伽藍跡 昭和43年度発掘調査概報』

文化庁文化財保護部記念物課　1969 『法隆寺若草伽藍跡 昭和44年度発掘調査概報』

奈良県立橿原考古学研究所　1978 『奈良県遺跡調査概報 1977年度』

法隆寺発掘調査概報編集小委員会　1984 『法隆寺発掘調査概報Ⅲ』

法隆寺　1985 『法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書』

奈良県立橿原考古学研究所　1989ａ 『奈良県遺跡調査概報 1986年度（第２分冊）』

奈良県立橿原考古学研究所　1989ｂ 『橿原考古学研究所年報14 昭和62年度（1987）』

奈良県立橿原考古学研究所　1992 『橿原考古学研究所年報17 平成２年度（1990）』

奈良国立文化財研究所　1992 『1991年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』

奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会　1994 『平成５年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』

奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会　1995 『平成６年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』

奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会　1996 『平成７年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』

奈良県立橿原考古学研究所　1996 『橿原考古学研究所年報21 平成６年度（1994）』

奈良国立文化財研究所　1996 『1995年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』

奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会　1997 『平成８年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』

奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会　1998 『平成９年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』

奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会　1999 『平成10年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』

奈良県立橿原考古学研究所　2000 『奈良県遺跡調査概報 1999年度（第１分冊）』

斑鳩町教育委員会　2002 『斑鳩町内遺跡発掘調査概報 平成11年度』

奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会　2002 『平成13年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』

奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会　2003 『平成14年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』

斑鳩町教育委員会　2004 『若草伽藍跡西方の調査』

奈良県立橿原考古学研究所　2004 『奈良県遺跡調査概報 2003年度（第１分冊）』

奈良県立橿原考古学研究所　2005 『奈良県遺跡調査概報 2004年度（第１分冊）』

斑鳩町教育委員会　2006 『史跡法隆寺旧境内の調査』

奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会　2006 『平成17年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』

3　調査組織

第１次調査と第２次調査の調査組織は、次のとおりである。所属部署名等は、当時のものである。

第１次調査

顧　　問	石田茂作	（文化財保護審議会委員）
発掘施行責任者	中西貞夫	（文化庁文化財保護部記念物課長）
発掘調査主任	樋本亀治郎	（元奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長）
調 査 員	横山浩一	（文化庁文化財保護部記念物課）
	亀井正道	（文化庁文化財保護部記念物課）
	田村晃一	（文化庁文化財保護部記念物課）
	岡田茂弘	（文化庁文化財保護部記念物課）
	松下正司	（文化庁文化財保護部記念物課）
	三輪嘉六	（文化庁文化財保護部記念物課）
	工藤圭章	（文化庁文化財保護部建造物課）
	三宅敏之	（東京国立博物館学芸部考古課）
	稲垣晋也	（奈良国立博物館学芸課）
	坪井清足	（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長）
	佐原　真	（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部）
	栗原和彦	（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部）
	小島俊次	（奈良県教育委員会事務局文化財保存課）
	岡田英男	（奈良県教育委員会事務局文化財保存課）
	岡田宗治	（奈良県教育委員会事務局文化財保存課）
資金前渡官吏	新山忠弘	（奈良国立文化財研究所庶務課長）

第２次調査

顧　　問	石田茂作	（文化財保護審議会委員）
発掘施行責任者	中西貞夫	（文化庁文化財保護部記念物課長）
発掘調査主任	樋本亀治郎	（元奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長）
調 査 員	横山浩一	（文化庁文化財保護部記念物課）
	田村晃一	（文化庁文化財保護部記念物課）
	野口義麿	（文化庁文化財保護部記念物課）
	工楽善通	（文化庁文化財保護部記念物課）
	三輪嘉六	（文化庁文化財保護部記念物課）
	工藤圭章	（文化庁文化財保護部建造物課）

稲垣晋也　（奈良国立博物館学芸課）
坪井清足　（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長）
松下正司　（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部）
森　郁夫　（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部）
村上訒一　（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部）
小島俊次　（奈良県教育委員会文化財保存課）
岡田英男　（奈良県教育委員会文化財保存課）
岡田宗治　（奈良県教育委員会文化財保存課）
資金前渡官吏　石藤守雄　（奈良国立文化財研究所庶務課長）

なおこの他に、伊東太作、猪熊兼勝、河原純之、黒崎直、佐藤興治、田中哲雄、田辺征夫、佃幹雄、宮本長二郎、山沢義貴が調査に参加した。

4　1939年調査区、1968・1969年調査区の呼称

1939年には、北溝・北北西溝・北西溝・東溝・西溝と名づけた合計５ヵ所の調査区がある。1968・1969年の調査区と区別して、各調査区名の頭に「1939」をつける。だが『日本上代文化の研究』（石田1941）所収の報告に図示された調査位置によれば、北溝・北西溝に関しては連続しないので、本報告では、「北溝１・２」「北西溝１・２・３」と分け、「1939北溝１」などと呼称することにした（Fig.４）。

次に、第１次調査・第２次調査では、調査区を拡張しながら調査をおこなった。調査時に調査区は、それぞれ「47ライントレンチ」「金堂中央トレンチ」などと称されている。調査においてトレンチの拡張時には、間に未調査部分を畦として残した。これは、土層観察のための配慮であろう。そのため調査区がこの畦で分断されてしまうことから、今回新たに調査区名を付す。そして次数の違いは、第１次なら「１－」、第２次なら「２－」と、頭にアラビア数字を付して、区別した。すなわち第１次調査の調査区を「１－１区」、第

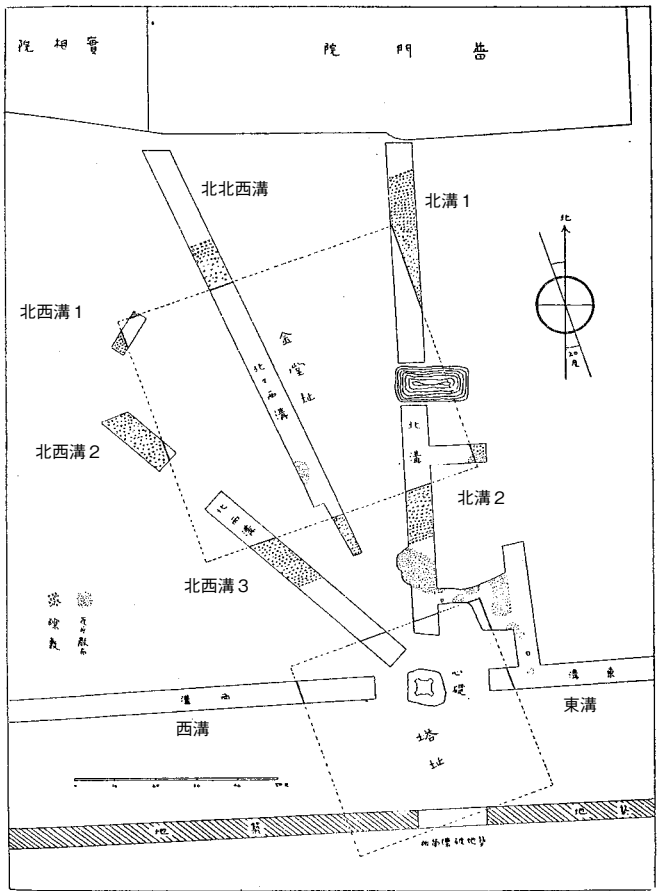


Fig.４　1939年調査時調査区の呼称（石田1941に加筆）

２次調査区を「２－１区」などと呼ぶ（Fig.５・６）。（深澤）

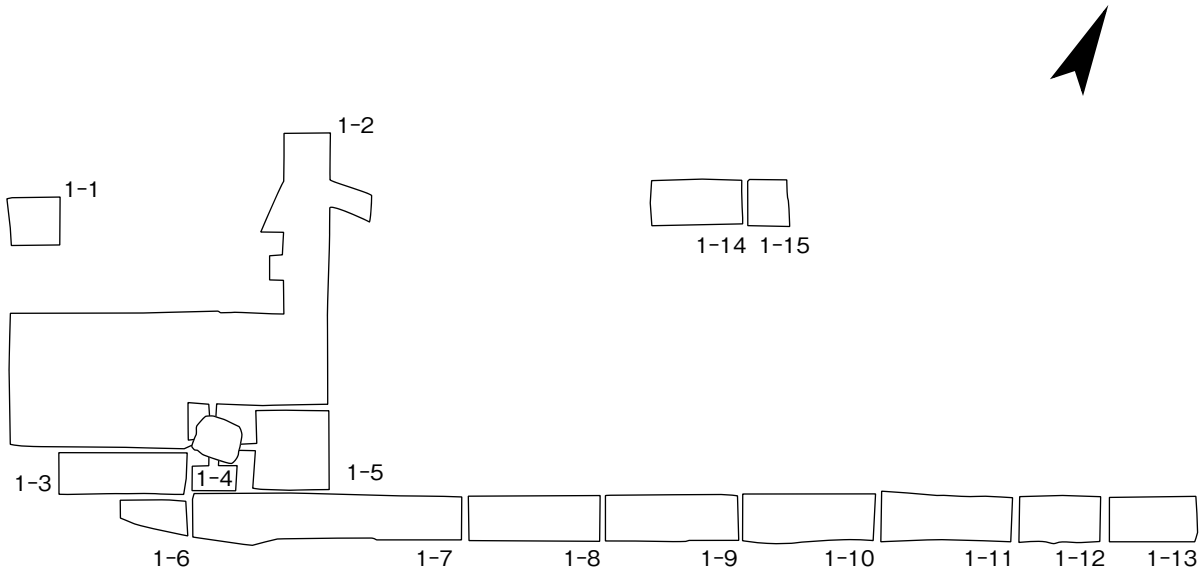


Fig. 5　第１次調査区の呼称（1： 500）

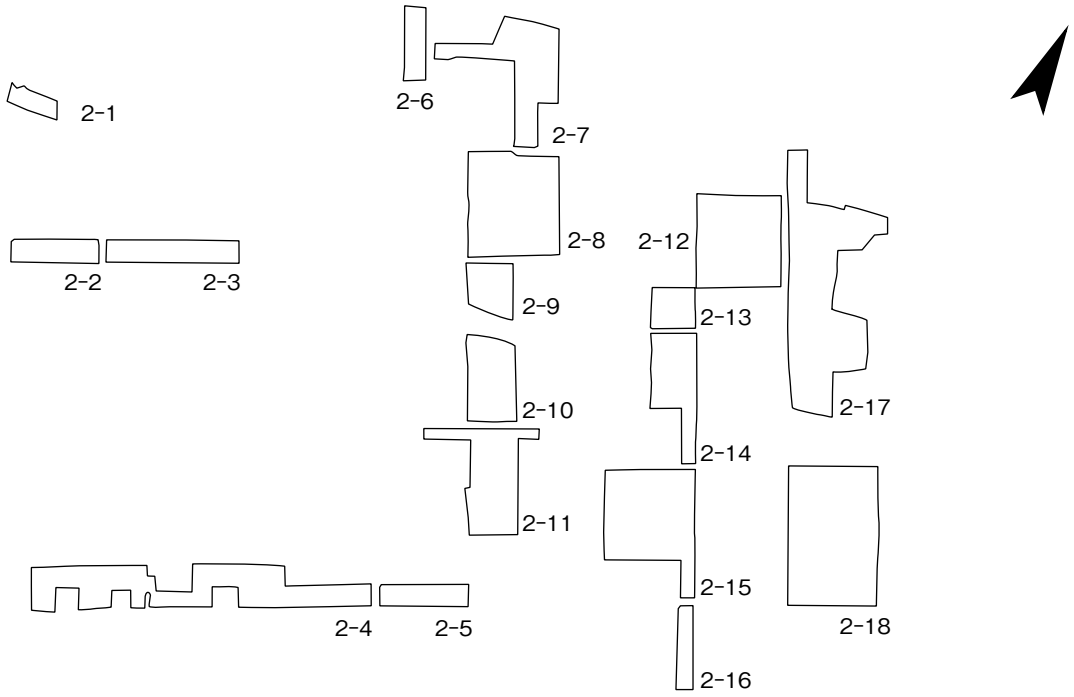


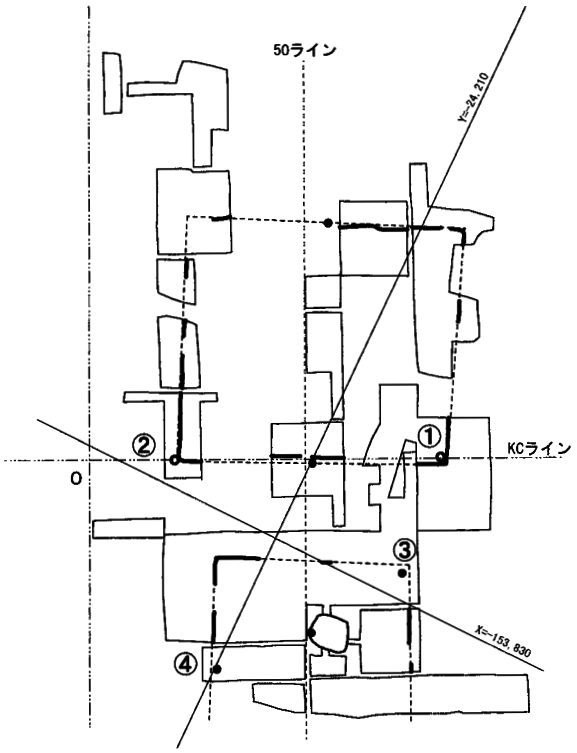
Fig. 6　第２次調査区の呼称（1： 500）

5　測量と地区の設定

実際の基準点

調査では、発掘調査開始前に金堂跡の南東隅（石柱①）と南西隅（石柱②）にあった２本の石柱（石柱間の距離、21．746ｍ）を基準に局地座標系を設定した。石柱①の南東角と石柱②の南西角を結ぶ線を、南北０ライン（NS：０）に設定した。東西方向は、上記の東西ラインの西延長上の任意の位置に杭を設置し、その点を東西０（Ｅ：０）とした。この杭位置は石柱②の西南角から西に、７．413ｍの位置にあたる。したがって、局地座標系において、石柱①東南角の座標はNS：０、Ｅ：29.159、石柱②西南角の座標はNS：０、Ｅ：７．413となる。なお、石柱①・石柱②ともに、第２次発掘調査の段階で一度取り外されて移動しており、現段階でかつての正確な座標値を改測することは不可能であった。

標高については、心礎を基準として実測をおこなった。



	局地座標		世界測地系座標	
	NS	EW	X	Y
石柱③	S：9.50	E：25.90	－153,827.88	－24,199.44
石柱④	S：17.08	E：10.58	－153,841.48	－24,209.86

Fig. 7　石柱位置および地区設定図

地区設定

地区設定も、石柱①・②を基準とした局地座標系上で設定した。石柱①東南角と石柱②西南角の中間地点（局地座標系：NS：０、Ｅ：18.286）をKC 50地区の南東隅として設定し、NS：０をKCライン、Ｅ：18.286を50ラインとして、３ｍグリッドを設置した（Fig.15）。なお、小地区はアルファベットラインと数字ラインの南東隅交点で呼称する。

2005年度の基準点の測量

上述のように発掘遺構の実測は局地座標系を設定しておこなったが、現在使用されている座標系（世界測地系）に対応させるため、2006年１月20日に、改測をおこなった。石柱①と石柱②は移動していたが、幸い発掘調査実測野帳に、心礎北東にある石柱③と、心礎南西にある石柱④が記されており、これらは発掘前から現在まで移動した痕跡はなく、石柱③と石柱④を改測することとした。測量

は、GPSを使用し、三等三角点「小泉」（5135－76－5001）を固定局としたRTK測量をおこなった。その結果をFig.7に示した。この2点からの計算上、局地座標系は世界測地系に対して北で西に26°13′58″振っており、地区割の基準となったKC50地区東南角の世界測地系での座標は、X＝－153,822.756、Y＝－24,210.492となる。

標高についても、調査時に基準となった心礎の標高を、現行の水準点から測量をおこなった。測量は、一等水準点（1290）から直接水準測量をおこなった。その結果、礎石標高は、55.556mであった。

報告書における座標の表記

報告書では、現在使用されている世界測地系に対応するよう、報告書内の座標表記は世界測地系に統一した。

ただし、近年まで使用されていた日本測地系との対応をはかるため、全体遺構図には日本測地系の座標を併記した。日本測地系から世界測地系への変換プログラム（TKY2JGD）が国土地理院ホームページに公開されており、定点の座標変換はこのプログラムで変換可能である。しかし、面的な遺構平面図全体の座標変換を厳密におこなうのは難しい。そこで、簡便に平行移動で対応できないかを確認するため、法隆寺周辺の二等～四等三角点の新旧座標を確認した（Tab.2）。その結果、確認した三角点の新旧座標値の差のばらつきは数cmであり、本報告では便宜上、別表の平均値のように平行移動するものとみなして、旧座標を表記した。

また、標高についても、2006年の測量成果にもとづいて、実測値を世界測地系の標高に換算して表記した。（島田）

Tab.2　新旧座標値の対照

基準点コード	基準点名	等級	新座標		旧座標		差（新座標－旧座標）	
			X	Y	X	Y	X	Y
5135－76－5401	若槻	二等	－151,725.269	－18,241.467	－152,071.710	－17,980.170	346.441	－261.297
5135－76－0201	下永	三等	－155,884.994	－20,055.224	－156,231.570	－19,793.920	346.576	－261.304
5135－76－5001	小泉	三等	－151,808.881	－22,584.904	－152,155.200	－22,323.560	346.319	－261.344
5135－76－6001	千日町	三等	－150,455.680	－22,248.711	－150,802.070	－21,987.400	346.390	－261.311
5135－75－5801	松尾山	三等	－151,228.256	－25,044.793	－151,574.720	－24,783.490	346.464	－261.303
5135－65－7701	白畑	三等	－158,988.119	－25,743.490	－159,334.540	－25,482.140	346.421	－261.350
5135－75－3701	一本松	三等	－153,186.975	－25,599.898	－153,533.340	－25,338.550	346.365	－261.348
5135－75－0901	北山	三等	－156,523.249	－24,223.071	－156,869.630	－23,961.720	346.381	－261.351
5135－65－7501	白鳳台公園	四等	－158,805.249	－27,801.894	－159,151.730	－27,540.580	346.481	－261.314
5135－75－4501	栗坪	四等	－152,318.185	－27,954.133	－152,664.640	－27,692.840	346.455	－261.293
5135－75－6501	西向	四等	－150,913.818	－27,907.197	－151,260.290	－27,645.910	346.472	－261.287
5135－75－5701	白石畑	四等	－151,927.910	－25,961.734	－152,274.360	－25,700.430	346.450	－261.304
5135－65－9701	大和	四等	－157,471.183	－25,708.559	－157,817.620	－25,447.190	346.437	－261.369
5135－75－4401	片福貴	四等	－152,216.330	－29,081.669	－152,562.790	－28,820.360	346.460	－261.309
5135－65－8901	池部	四等	－157,750.295	－24,107.395	－158,096.710	－23,846.050	346.415	－261.345
5135－75－1401	信貴山東	四等	－154,904.965	－29,143.308	－155,251.430	－28,881.990	346.465	－261.318
5135－75－4601	下垣内	四等	－152,267.240	－26,926.460	－152,613.680	－26,665.160	346.440	－261.300
5135－65－8601	上牧	四等	－158,498.837	－26,811.650	－158,845.250	－26,550.250	346.413	－261.400
5135－65－8801	佐味田	四等	－158,553.415	－24,790.874	－158,899.870	－24,529.520	346.455	－261.354
5135－75－7701	石仏	四等	－150,113.767	－25,653.276	－150,460.220	－25,391.950	346.453	－261.326
5135－75－6701	櫟原	四等	－150,942.437	－26,547.531	－151,288.890	－26,286.250	346.453	－261.281
5135－75－5901	三井	四等	－152,026.870	－24,045.355	－152,373.220	－23,784.010	346.350	－261.345
5135－75－4901	法輪寺	四等	－153,011.340	－23,628.041	－153,357.690	－23,366.700	346.350	－261.341
平均							346.431	－261.326
標準偏差							0.055	0.030

6　調査概要

２ヵ年にわたる調査の概要は、以下のとおりである。

第１次調査

塔の精査と回廊の確認を目的に実施した。

すでに1939年に石田茂作らがおこなった調査において、塔と金堂の位置を掘込地業版築土で把握し、北に金堂、南に塔が並び、かつその方位が磁北に対し西へ20°振れていたことがわかっていたので、この振れに合わせるように調査区を設定した。まず現状の塔心礎の南側に幅３ｍで、長さ66ｍの東西に長い調査区や塔と金堂を結ぶ南北に長い調査区を設け、かつ心礎周辺と南端部を除く塔部分、金堂の西南隅部などを調査した。

東側の長い調査区では、これまで未発見であった回廊にかかわる遺構の検出が期待された。だが、礎石あるいは礎石据付穴、また雨落溝やその据付痕跡、さらに金堂・塔でみつかっていた掘込地業など回廊にかかわる遺構はまったく発見されなかった。

今回の調査は、土層に関して特に注意深く、慎重であった。

その結果、金堂、塔の掘込地業や基壇土、さらに整地土の状況把握をおこない、それぞれの築成状況、両者の築成順序、塔心礎の据え付け状況などをより明確にした。ことに塔基壇が金堂基壇の築成に遅れて作られていること、塔の掘込地業に塔心礎据付穴がみつからないので、塔心礎は地面を深く掘り込むことなく現遺構検出面より高位に据え付けていたことを明らかにした。

第２次調査

金堂の規模把握、講堂および西回廊の検出を目的に実施した。

伽藍の方位に合わせて、調査区を設定した。調査区は、金堂の規模を把握するために、西側、中央部、東側に設定した。このうち西側の調査区を北の実相院の土塀ぎりぎりにまで拡張した。また西回廊を検出するために、金堂の西側で３ヵ所の調査をした。

その結果、金堂における掘込地業の規模を明確にするとともに、基壇部分の版築土と整地土の関係を把握した。

また､第１次調査においてすでにみつかっていた金堂南側の斜行溝（SD 7040）が､本次調査において、金堂掘込地業の東縁外側をめぐっており、これと同規模の溝がやはり金堂掘込地業の北縁や南縁の外側でみつかった。この溝は、金堂と塔の施工順に関して、整地土の解釈を補強する。

北側の子院においても調査をおこなったが、講堂にかかわる遺構はみいだせなかった。回廊について、第１次調査では東地域に力点を置いていたが、本次調査では西地域を調査した。しかし、回廊に関する遺構はまったく発見できなかった。

なお石田が、金堂と塔の空閑地の舗装と考えた礫敷にあたるバラス土は、バラス土中やこれに覆われた古い小穴から中世の瓦器やさらに新しい土器が出土しているので、時期的に礫敷は若草伽藍に伴わないことが明らかになった。（深澤）

7　調査日誌

第１次調査

1968年８月16日～９月19日

Fig.８　打ち合わせ風景

８．16（金） 横山、三輪、佐原、伊東、栗原。研修生15名。

地区杭打ち。略測（200分の１平板使用)。草刈り（平城、中田・森田)。地区杭打ちは、金堂・東南隅と西南隅の指示石柱を結んだ線をKCラインとし、それと直交するセンターラインを50ラインと定めた。平板測量責任者三輪。ガバン、カナヅチ、クギ、遺構カード100枚。県事務所から杭12（丸太)、クギ、カナヅチ借用。カナヅチと使用残しのクギは返した。

Fig.９　調査前の若草伽藍跡

８．17（土） 鍬入式。雨中決行11時終る。午後、テントのはりかえ、草刈り、ベルコンのならべかえ。

草刈りの結果、昭和14年12月に石田先生等の掘ったトレンチの跡と思われるものが見つかっている。トレンチの巾が１ｍ60、両はしがひくくなる。ベルコン試運転、良好。平城からハコ２、ガバン２、本２冊、地区杭50、アメ板10、ムシロ４枚、ビニール４枚。県修理事務所、五尺の丸太（２本)、ハリガネ（番線）借用。

８．18（日） 石田先生、樫本先生、横山、工藤、稲垣、三輪、佐原、栗原。

朝、雨。９時より作業。塔の東側基壇をさぐりあてるべく、TO47区を中心に東側へ掘り進む。TO47区の結果では、塔の基壇はつかめていない。TO47区南側の壁の略図は裏面のとおり。明日、TP47を掘って石田先生のトレンチをさぐる。

８．19（月） 樫本、横山、佐原、栗原、三輪。

昭和14年、石田顧問設定のトレンチを再発掘。目的は塔の基壇線（掘込地形？）を確認することにあったが結果としては不明である。ここでも昨日認められた灰褐色土層（瓦器含有層）が連続しているのみである。TO48を拡張、瓦器含有層確認のため。TN40附近までトレンチの拡張を行う。全体的にTN40附近で黄褐色土層を切る状態の土層がありそうである。本日までのところ塔基壇が未確認であるため、いささかのアセリあり。明日より、作業員増を宮崎建設にお願いする。

８．20（火） 石田、樫本、横山、亀井、三輪、佐原、栗原。伽藍論攷の塔基壇の写真は昨日あけた石田トレンチ（礎石の東側トレンチ）を東側から撮影したものと判明。その断面を精査するも、写真に撮影されているような塔基壇の実態はなく、瓦器を含むかたい土（灰褐色土層）を確認したものではなかろうか。TO48区でTO47区のセクションの続きを追った結果、瓦器を含むかたい土はだらだらとさがって、だらだらとあがっている。

８．21（水） Ｏラインを西に拡張する。途中南北に連なる溝数条が認められるが、明確に出すのは明日以降。またＯラインに地山の上がりを認める。昨日までの塔跡の状態が不明であるので新たにTR47より北方に向けて、石田トレンチの瓦層、礫層の状態を知るためのトレンチを設定。遺物等その他特に著しい変化なし。

８．22（木） 樫本、亀井、三輪、佐原、栗原。

①に於いては、TO34と35の境に地山と思われる巾９尺程のたかまりが検出され、その東では地山がさがり、その西では六条程の南北溝が検出されているが正体は不明（新しいものと思われた。掘り込んでいる土層がかなり高い)。

②褐色土を除き、石田トレンチを掘りはじめる。

③本日新たに設定、掘りはじめる。全体として、いまだに石田先生の言われる塔の基壇、回廊なるものは不明。三時より樫本・亀井・三輪、法隆寺と24日記者会見、その他の打ち合わせ。

８．23（金） 樫本、亀井、三輪、佐原、栗原。研修生15名。

①研修生によって南北溝の遺構の検出。染つけの陶器片等の出土があり、近世の遺構と判明。TO35に見られる９尺巾の高まりも南北溝と地山の高さでは同じものであり、上に粘土と黒土の層が10cm程のっている。

②石田トレンチの掘上げをめざし、平城作業員で掘る。

その結果、伽藍論攷に掲載の金堂の掘込が見つかっている。なお、バラス層はかなり高く、上面で平安と思われる土師器片が見つかっている。
③TR51区で瓦溜があり数点の軒瓦出土するも、瓦溜の時期は鎌倉頃にすてられたものと判明。石田西トレンチ、北トレンチ判明。

8．24（土） 樋本、亀井、佐原、栗原。
①東端から整理にかかる。東端では粘土層まで2尺程と深く、その上の層は瓦器を含んでいる。粘土層では小さな穴がいくつもあく。
②昨日の金堂基壇の落ち込みを西側（石田トレンチ）で出す。地業積土の状況。2cm～30cmの高さをもって残っている。
③石田トレンチの西壁によって塔基壇の西端の地業積土の状況が認められた。
④塔の北側の断面を石田トレンチでさぐるが、現在までのところ掘込は認めがたい。再度の検査の予定。
⑤②、③の結果をもとに⑤の石田トレンチを見るに、しいて認めるならば落込らしきものはある。今日まで石田トレンチの再検討を重ねてきたが、②1ヶ所では金堂は石田先生の言うとおり、塔については③、⑤の所で、苦しいが認められないことはない。しかし④では、まだなんとも言えないというのが今日までの結果である。

8．25（日） 樋本、亀井、田村、稲垣、佐原、栗原。
①東トレンチ、東大垣にむけて5コマ延長。そのうちTO32～TO31の2区を掘りさげはじめる。TO33～TO34の2区は、黄色面までさげて清掃。黄色土面は西側に行くにつれて高くなる。小穴パラパラ瓦、瓦器片をその中より検出。
②石田トレンチの清掃。KC46の石田トレンチ掘りおわりKC46区南壁にて金堂の基壇掘込（石田先生の言う）を検出。
③トレンチの清掃中。
④本日より掘りはじめる。

8．26（月） 日誌なし

8．27（火） 樋本、三宅、田村、佐原、栗原。
雨中決行。表土のみ平城作業員5。宮崎（女2）でやる。遺物整理ボチボチ。

8．28（水） 佐原、栗原、三宅、稲垣、田村、松下。
雨天のため一時中止。10時より研究所作業員5名。排水。午後、宮崎建設8名（男3、女5）加わる。排水及び表土はぎ。遺構カード整理。

8．29（木） 佐原、栗原、三宅、田村、稲垣、松下。
午前中作業。雨のため殆ど仕事はできない。午後作業中止。新聞発表資料等整理。

8．30（金） 樋本、工藤、三宅、稲垣、田村、佐原、栗原。
雨水の排除に午前中かかる。午前10時頃、石田先生の推定された塔の西北隅の石柱より約1m北に建物の基壇の西北隅を検出。西は推定線上にのる。TP47区で東端も検出できた。その結果16mの長さが東西でとれた。TR49、TO49、TP50の遺構については、明日をまつ。

8．31（土） 樋本、石田、三宅、工藤、田村、松下、和田、稲垣、佐原、栗原。
朝7：30より、NHKスタジオ102の為6：30出勤。昼2時より見学会。①心礎の据えつけのあとを探るも褐色土層あつく地山面まではおろせない（地表下30cm）。②版築の行われている範囲と石田トレンチでの落込みの再検討。石田先生の時の方位とは異なる。③TO35区で炭化物を含んだ層がTO49区の褐色土にもぐるクボミであることを発見。同層より多量の丸平瓦（ナワ目は1点もないか）と模様瓦3点、土器少々、フイゴの口等を発見。

9．1（日） 石田、樋本、工藤、稲垣、栗原、松下。作業員8名。
平城作業員休み。作業員が少ないため塔周辺に集中。TO35の昨日出土土坑（灰・フイゴ等）を清掃。塔心礎周辺の据えつけ痕跡及び抜き跡を検索。TQ50に広い土坑あり、地山を掘りこんでいる。中心に向かって斜めに下がっているため、心礎の据えつけてあったところか？ TP50の中心にむかっての下りも同様のものと思われる。TQ47の瓦堆積を半分取り除く。塔東南の基壇縁確認。新しくTO50、51を掘り始める。明日の作業、塔周辺の整理。東トレンチの清掃。塔心礎東のバラスを取り除く。TO50、51を掘り下げる。

Fig. 10　塔心礎周辺の調査状況

9．2（月） 樋本、稲垣、岡田、佐原、松下、栗原。作業員（平城5、男3、女7）。
①今回の発掘方針のとおり、金堂の基壇南西の隅をつかみ、伽藍のセンターラインをきめて、方位をつかむための①をあける。明日以後に結果はまつ。
②昨日、心礎の据え方をさぐるも、意外に塔中心部の落込みは新しいものばかりで地山が高いことを発見したが、本日は②により対照的なその場所をもとめるも時間切れなり。
③東端の5区に力を集中し、地山面までの遺構を二枚はぐ。明日をもって終了させるつもり。ヤリ方のくい、貫板発注す。東トレンチは、もうひといきで終了。

9．3（火） 樋本、岡田、佐原、松下、栗原、坪井、佃。作業員（平城5、男3、女9）。

①金堂跡西南隅の確認作業をつづけ、掘込地業を認めた。粘土質地山土を切って褐色砂質土で地業されている。なお、西南隅は石田博士推定の西南隅標石直下である。

9．4（水） 榧本、岡田、稲垣、佐原、松下、栗原。作業員（平城５、男３、女３）

①発掘地区内の排水作業。②塔東北隅の溝および地山面露出作業。③東トレンチのTO 35に東で地山の砂層面検出。④写真撮影。⑤５日午後１時半より新聞発表することについて、寺の了承をとる。

9．5（木） 榧本、佐原、栗原、稲垣、伊東、岡田、松下。午前中、写真撮影。午後、新聞発表。実測、やり方打ち、水糸配り。

9．6（金） 榧本、佐原、栗原、稲垣、岡田、松下、伊東、河原、山沢、佃。

水糸配り。実測開始。夕刻、写真撮影(セクション)チェック、夜打ちあげ、岡田氏の開会演説あり。猪熊参加。金堂南縁付近、状況は遺構カードを見よ。バラス層中、瓦・土器片少量、年代不明。黄褐色整地土層中、瓦・土器、同層上面よりピットあく。瓦ののる茶褐色土は、南にいくにしたがって、うすくなって、瓦は地山に直接のる。瓦破砕、火中？したものあり。塔北縁の整地土をとったが、地山面から穴２つ。瓦あり。

Fig. 11　塔心礎周辺の調査風景

9．7（土） 榧本、稲垣、岡田、松下、栗原、河原、山沢、佃、佐原。

実測。斜溝の軒丸瓦下から手彫り杏葉紋軒平瓦。火中するものらしく問題なり。

9．8（日） 岡田、松下、栗原、佐原。

実測。浅野先生、奥様、令息、横山氏。

9．9（月） 栗原。

9．10（火） 栗原、佐原。

器材、平城返却。杭抜き。本日現在宮崎の埋め戻し始まっておらず。12日からやる由。鈴木嘉吉氏連絡。瓦等員数、記念物課に報告。

（日誌の記載は以上）

第２次調査

1969年９月30日～11月25日

9．30（火） 横山、石藤、松下、森。

器材運搬。午前、午後各１回、草刈り。保存事務所にて事務事項の打合せを行う。森

10．1（水） 横山、稲垣、松下、宮本、森。

地区設定。昨年同様（金堂標柱を利用）。草刈り。森

10．2（木） 榧本、横山、稲垣、松下、森。

午前中、KH 53～KJ 53にトレンチを設定し、金堂跡の北西隅を追求。石田博士のトレンチを確認するとともに、「石敷」を追求する。「石敷」はさほど明瞭ではない。午後はトレンチをKE 53まで延長する。森

10．3（金） J－Line以南では「バラス下」の黄褐色土面を検出。KE 53では穴を４個検出したが、「南」の穴からは13C以降の瓦器片が出土している。KF 53の石田Trの南壁面で金堂基壇の掘込地業と思われる落ち込みを認めたが、他地区で同様の状況を確認した後に平面発掘を行うことにする。なお、本地区及びKG 53では、石田博士の「石敷」は検出できなかった。推定金堂北西隅以北の「石敷」を一部取り除いたが、バラス下層の黄褐色土から瓦片を数点発見した。森

10．4（土） 榧本、横山、松下、森。(夕刻、野口氏)。KF 53の石田Trの壁面に昨日表われた落ち込みは東壁面でも同様の状況を見つけたが、他地区では明瞭ではない。この落ち込み状のところに入っている土は、砂を混えた黄褐色土であるが、KH 53においては非常に薄く、その厚さは２cm未満である。しかもKF 53で出た位置よりも西へかなり張り出していく。KF 53と同様の状況を求めるため、KI 52で石田トレンチを追求することにする。KK 52以北の拡張区は、かなり後世の撹乱が行われている。「石敷」バラスはKK 52に若干認められる。金堂基壇南西隅にかけて、南部を拡張する。昨年のトレンチを再発掘し、南西隅を検出する。基壇の積土は、KF 53壁面に見える土と同質のものである。森

10．5（日） 榧本、野口、松下。　⑬

金堂の西南隅の検出を北に拡げる。金堂基壇と埋土の区別は北にゆくにしたがって不明確である。

金堂北西隅を検出した石田トレンチを完掘する。平面でつかめない。金堂基壇は、石田トレンチの南壁で版築状の基壇土が確認できた。バラスはその北端より約10m北に続いている。北西隅は石田トレンチの北壁にはみられない。KJ 52区拡張。KL～M 52地区ではMの端までバラスがみられ、それ以北はない。掘り下げるが遺構は明確でない。KE地区に小穴多数検出。西部地区の草刈りを行なう。

10．6（月） 榧本、野口、松下、森。

KA 58～63に東西トレンチ設定。表土直下の黄褐色土には、細石がかなり混入しており固い。この層の範囲は

まだ明確ではないが、ほぼA－Lineに沿ってその南限を示すかも知れない。KL以北では黄褐色の面を検出したが、東北隅は、若干固く地山風である。他はきわめて軟質であり上層には、瓦片を含んでいる。森

10．7（火） 榧本、野口、松下、森。

58Line以西のトレンチで、石田トレンチを検出する。石田トレンチの壁面の所見によれば、表土直下は、花崗岩細片を多量に含んだ土で、その下層は青色砂質粘土である。この何れの層も地山と考えられる。金堂跡東辺に南北トレンチを設定する。森

10．8（水） 榧本、野口、稲垣、松下、森、(坪井)。

金堂跡東辺トレンチでは、「石敷」面検出後、B－Line以北を掘り下げる。金堂跡西南隅では、推定位置にほぼ直角にCornerを検出した。昨年度の鈍角のCornerは、整地土の相異による見誤りであろう。西南方の東西トレンチでは、中世の遺物を含む南北溝を検出した。9日の新聞発表の内容については別紙のとおり。森

10．9（木） 榧本、野口、稲垣、松下、工楽、森。

金堂跡西南隅の層位を全員で検討。暗灰色土から掘り込み地業を行なっているが、この土は地山ではない。層位の状況は左図の如し。但し、②層のバラス土については他との関連によって再検討を行う。③、④には遺物を若干含んでいる。⑥は地山である。⑤は細砂を含んだ濃黄褐色土が主要成分であり、若干版築を行なっている。西方トレンチでは、60～61にかけて黄色粘土の堆積が認められる。金堂跡北東に南北トレンチ設定。表土排除。森。　新聞発表。

10．10（金） 祝日の為作業休み。

10．11（土） 榧本、松下、工楽、森。

金堂跡東南トレンチのバラス面は、左図のように、金堂の東縁以東では認められない。KC45においては、瓦の堆積が見られ、瓦溜と思われるが、輪郭は明瞭でない。金堂跡東北隅のトレンチでは、北方に黄褐色土が認められる。金堂跡北西のトレンチでは、東西石列を検出したが、中世以降のものである（江戸の燈明皿検出）。なお、実相院の南面築地の方向と一致している。西南トレンチは東方へ拡張。

10．12（日） 榧本、松下、工楽、森。

金堂東南トレンチでバラスを除去し、黄褐色土面を検出。KB45でバラスの下から中世の燈明皿を検出した。又、KC45の小穴には、焼土、木炭が見られた。KF45～KG46にかけて、石田博士のトレンチ以外のトレンチの痕跡を検出し、断面に金堂土壇の積土の状況が明瞭に現れたが、石田トレンチが重複しているために、掘込地業の状況は不明。なお、石田トレンチは地山面まで掘り込まれている。金堂跡北西トレンチで、金堂北側の黄褐土を追求するために東西トレンチを設定。KM54で南北方向の石積を4段検出、溝の西岸と考えられ、溝底から近世の陶器片が出土する。この埋土は、東側の黄褐土の下に入ることが判明。金堂跡西南の東西トレンチを東

Fig. 12　金堂北部の調査風景

へ（KA54まで）拡張した。表土直下の暗褐色土から多量の中世の土器が出土した。森

10．13（月） 石田茂作、榧本、松下、森、工楽。

中西課長、午後2時半来訪、読売テレビ打合わせ。金堂東面のトレンチでは、基壇土らしきものの東への続き具合をみるため東へ。井戸西半部にて、下層よりアスカ瓦出土のため、東半を掘り広げ、穴の全形を出す。それより下へ掘り下げ始め、深さ1.5ｍのところより曲物の井戸枠が出てくる。

10．14（火） 石田、榧本、松下、工楽、森。

KA45・46のバラス土を除去。黄褐色土面に多数の小穴を検出。バラス土中及び穴から出土する土器は、平安後期～鎌倉初期のものが多く見られる。金堂跡東面G－Lineに検出した基壇築成土の張り出しは、想定東縁から約15ｍ東へ張り出し、約60cmを隔てて再び東への張り出しが認められる。金堂跡西方トレンチでは暗褐色土が地山の直上まで堆積しており、地山面には方位が一定でない3条の溝が穿たれている。森

10．15（水） 石田、榧本、松下、工楽、森。

KM63に東西トレンチ設定。西方トレンチ内の小穴（KH62）から土師器の坏2点出土。この小穴は灰白色砕石混り土を切って穿っている。なお、この砕石混じりの土は、西方に設定した2本の東西トレンチ及び金堂跡西北方で検出し、その状況（明瞭な黄灰色地山の上に堆積しており、人為的な積み土とは考えられない）から、「自然堆積土」として結論づけた。金堂跡東南隅は平面的には極めて見分け難い。土層の状況は左図の如し。金堂跡北東隅では、バラス土が全面に見られ、バラスを排除すると黄褐色土面になり、中世の土器を埋め込んだ小穴が検出される。土層の状況を検討。結果は左図の如し。森

10．16（木） 榧本、工藤、松下、工楽、森。（石田、浅野、大岡）

金堂跡東南隅はプランでは見分け難い為、地山面（掘込面）まで掘り下げる。斜溝の輪郭はきわめて明瞭である。金堂跡南面は、バラスを除去。金堂跡東北隅は石田トレンチの西壁面では、検出できないため南へ拡張。実相院境内に2カ所トレンチを設定。講堂土壇の積土を追究したが、地山の上には約85cmの中世以降の積土が存在

するのみである。地山面のレベルは、金堂跡東南隅の地山面より20cm低い。

10．17（金） 榧本、工藤、松下、工楽、森。

金堂跡東北のコーナーを確認した。掘り込み地業は、他と比べると浅く行われている（約15cm）。掘込み上面の黄褐土は、1層ではなく左図のようにも見受けられるため、西方へ拡張して後日検討する。金堂東南隅の南北溝は金堂跡土壇南縁に沿って枝分かれする。但し、西南隅では検出できなかった。実相院北庭のトレンチの状況は左図の如し。森。新聞発表。読売テレビ撮影。実相院境内南トレンチは普門院西築地から4.5m西、実相院建物際。

10．18（土） 榧本、工藤、松下、工楽、森。

金堂中央トレンチは、基壇面（地山面）まで排土。金堂南縁に一部凝灰岩の細片を検出。金堂跡東南隅では、三又溝内の瓦を露出する。金堂跡東北隅地域のトレンチを西方に拡張。黄褐土まで排土。森。

現地報告会。

Fig. 13　現地説明会

10．19（日） 工藤、田村、松下、森。（高井）

10．20（月） 榧本、田村、松下、石井、伊東、森。（黒枝）

遣方設定。水糸配り。基準線のみで、雨にて中止。

10．21（火） 田村、松下、石井、田中、森。

北東部では、斜溝の延長部を検出。金堂の周囲をとりまくものであろうか。土壇中央に3×5mの南北トレンチを設定。水糸配り終了。森。実相院境内2カ所埋め戻し。

10．22（水） 田村、稲垣、松下、三輪、森。

北東トレンチの東西溝検出後写真撮影。KI47の穴には瓦が詰まっている。中心トレンチは基壇積土面まで掘り下げを行う。東西溝を検出。これは西で検出した室町の溝の延長部である。中央トレンチ、実測後地山を掘り下げる。プラン実測開始。

10．23（木） 三輪、森、松下。

プラン実測。

10．24（金） 榧本、三輪、森、松下、佐原。

プラン実測。

10．25（土） 榧本、横山、稲垣、森、松下。午後、坪井、石藤。

雨の為作業中止。現地にて検討会。午後2時より新聞発表（最終会）。

Fig. 14　SD 7040と多量に出土した瓦

10．26（日） 横山、稲垣、森、松下。午後、田辺。

プラン実測終了。レベル読み。各壁のセクション検討。金堂東南端の斜行溝、掘り下げる。

軒瓦は総て手彫りの杏葉文である。金堂中央トレンチを掘り下げる。

10．27（月） 榧本、横山、佐原、森、松下、河原。午後、坪井。

中央トレンチ他要所のセクション検討。基壇土が掘込地業外にはみ出、その上にのった整地層をきって、塔が作られていることを確認する。時々の雨及び少人数であるため、検討に時間がかかり、実測進まず。中央トレンチをほぼ全域掘り下げる。KG49は近世の土坑で破壊されている。底より寛永通宝出土。各壁のセクション用の削りを行なう。

10．28（火） 榧本、横山、佐原、森、猪熊、黒崎、松下、佐藤（午後）。

セクション実測。法隆寺テント、椅子（15）返却。

10．29（水） 佐原、猪熊、松下、黒崎、森。

東南斜溝、中心部写真撮影。土層状況撮影。土層検討。土層図作製。塔跡基壇中の穴の底には、花崗岩片が数個あり、穴自体は版築状に埋め戻している。

10．30（木） 榧本、佐原、松下、黒崎、森、（坪井）。

実測、土層図。塔の土壇に掘り込んだ穴について、全員で検討。性格については不明と言わざるを得ないので、掘り広げるべきという意見もあったが、調査期日もすでに数日延びているため、現状での実測、写真撮影に止める。

10．31（金） 松下。

全景撮影。器材撤収。第2次調査終了。

11．4 埋め戻し立合いの為、遺物点検。

11．8 埋め戻し立合い。第1次瓦箱入替え。

11．12 埋め戻し立合い。

（日誌の記載は以上）

第Ⅱ章　遺構・遺物

遺構の記録類には、実測図面・遺構カード・調査日誌・写真のほか、図・写真類に記入された文字情報がある。しかし、遺物取り上げラベルの記載事項から、その遺構を特定できたのはわずかである。本報告書では、ラベルを介して遺物と遺構を対応できない場合、ラベルの記載事項を基準として解説することにした。

また1969年10月16日の日誌によって、実相院内に調査区を２ヵ所設けて発掘調査したのは明らかであるが、遺構図面が残されていないため、これについては報告しない。

まず若草伽藍に関連する遺構・土層からできるだけその造営過程にそって報告する。それら以外については、まず井戸・土坑・穴・溝・瓦溜などの遺構を、次いでバラス土層・木炭層・暗褐色土・褐色土といった包含層について述べる。（深澤）

1　基本層序

本調査は、特に土層の堆積関係について慎重であった。これは、調査日誌から明らかになる。すなわち日誌によって、第１次調査では、1968年８月31日、第２次調査では、1969年10月15・27・30日に調査員が集まって検討を加えているのである。

第１次･第２次調査区の金堂･塔部分の基本層序は、上から順に、１;表土、２;褐色土･暗褐色土、３;バラス土（含礫暗褐色土)、４;塔基壇版築土･掘込地業版築土、５;第２次整地土（黄褐色整地土)、６;金堂基壇版築土・基壇地下版築土・掘込地業版築土、７;第１次整地土、８;地山土である。

このうち基壇に関わる土層は、第１整地土、金堂基壇版築土、基壇地下版築土、掘込地業版築土、第２整地土、塔掘込地業版築土の６層である。そして金堂基壇構築前におこなった寺地の整地にあたる置き土を「第１整地土」とし、整地土上面を「第１整地面」と呼ぶことにする。また金堂基壇の版築土は、掘込地業版築土・基壇地下版築土・基壇版築土の３層からなる。一般的に「掘込地業」は、地面を掘り下げて地固めをおこなう工法そのものを指す用語であるが（工藤1976)、本報告書では、掘り込み面以下の構造を示すものとして限定的に使用する。基壇地下版築土は、金堂基壇下層にあたり成形時は地上に露出しているが、基壇完成時には整地土で覆われて地表下となる部分である。基壇版築土は、金堂基壇で完成時に地表より上にある部分である。「第２整地土」は、金堂基壇構築後この周囲および周辺におこなった置き土である。調査時に名付けられた黄褐色整地土がこれにあたる。以下では、この整地土を「第２整地土」､上面を「第２整地面」と呼ぶ。「基壇地下版築土」と「第２整地土」それぞれ上面は、論理的には一致する。基壇版築土は、後世に完全に削平された。塔基壇の掘込地業は、第２整地面から掘り込んでいる（Fig.20)。（深澤）

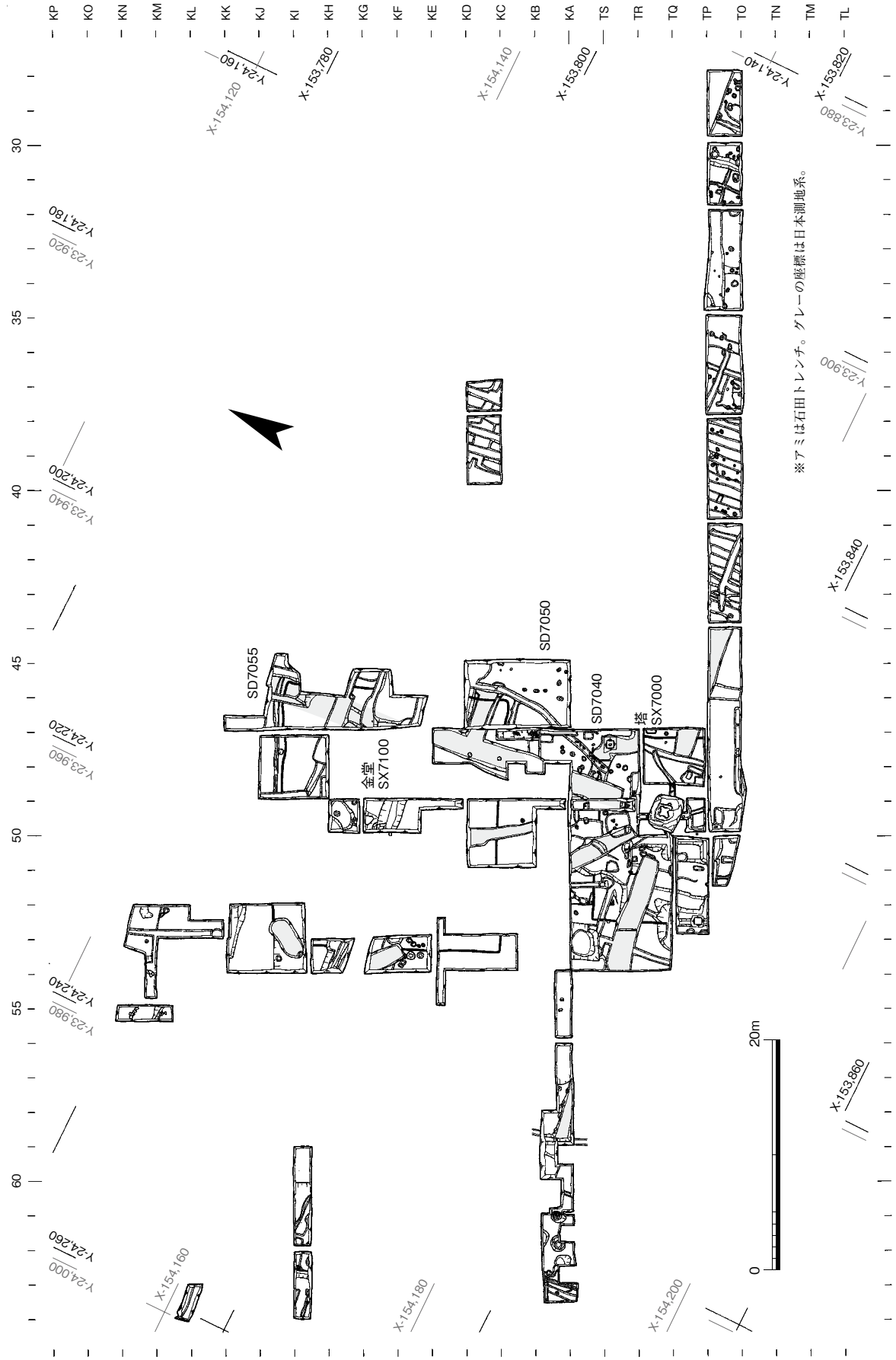


Fig. 15　若草伽藍跡遺構全景図（1：500）

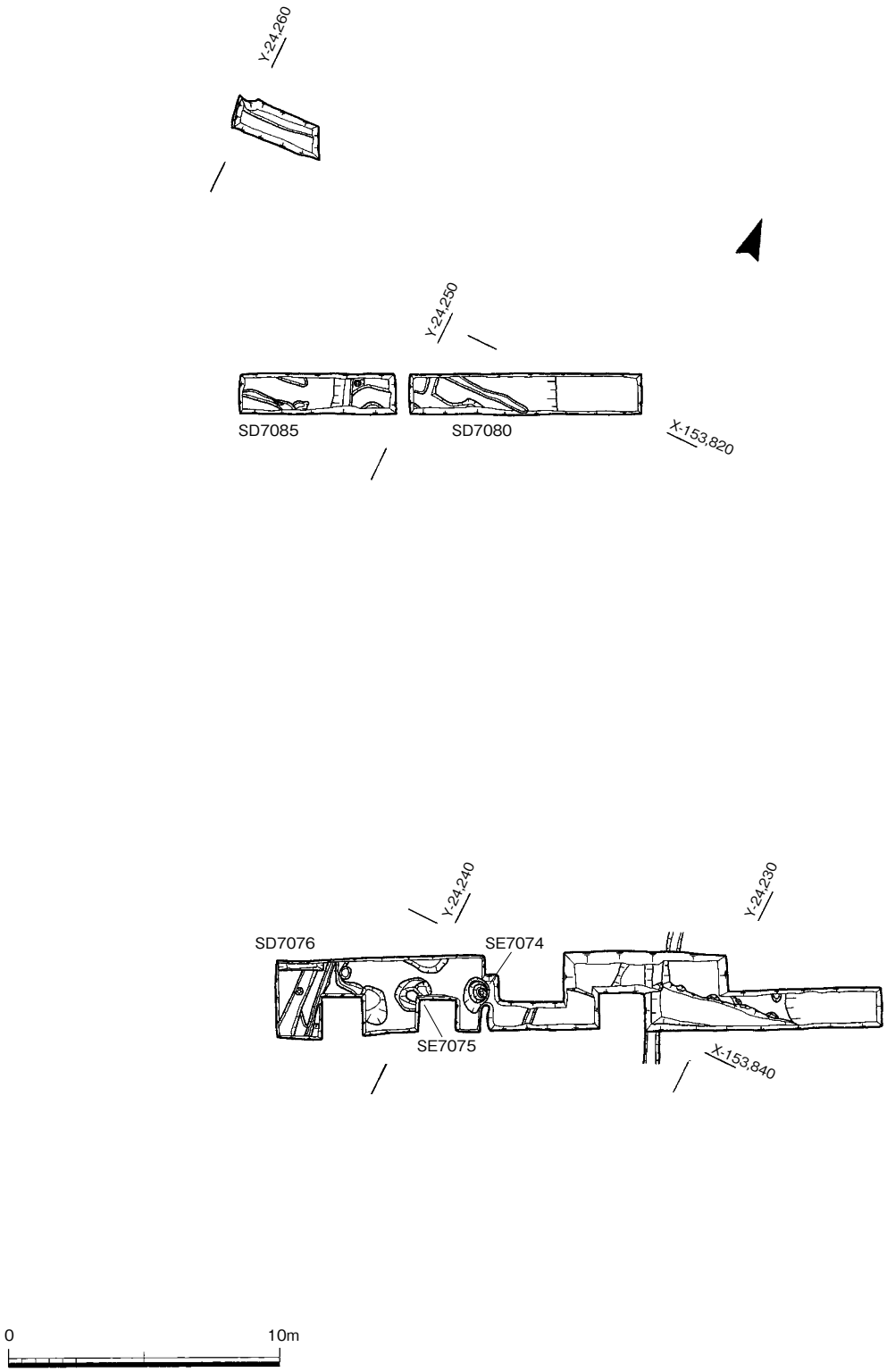


Fig. 16　若草伽藍跡遺構図１（１：250）

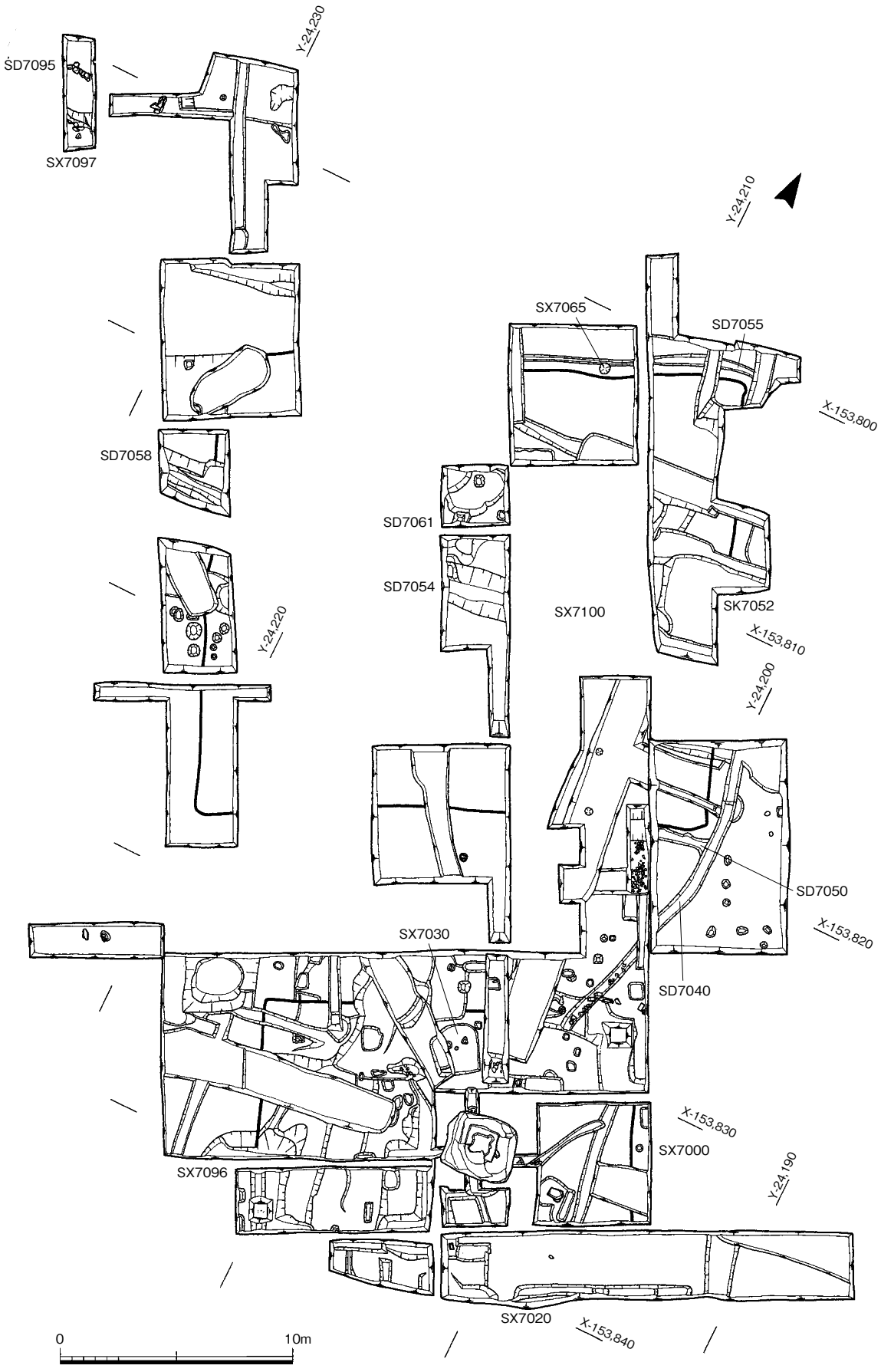


Fig. 17　若草伽藍跡遺構図２（１：250）

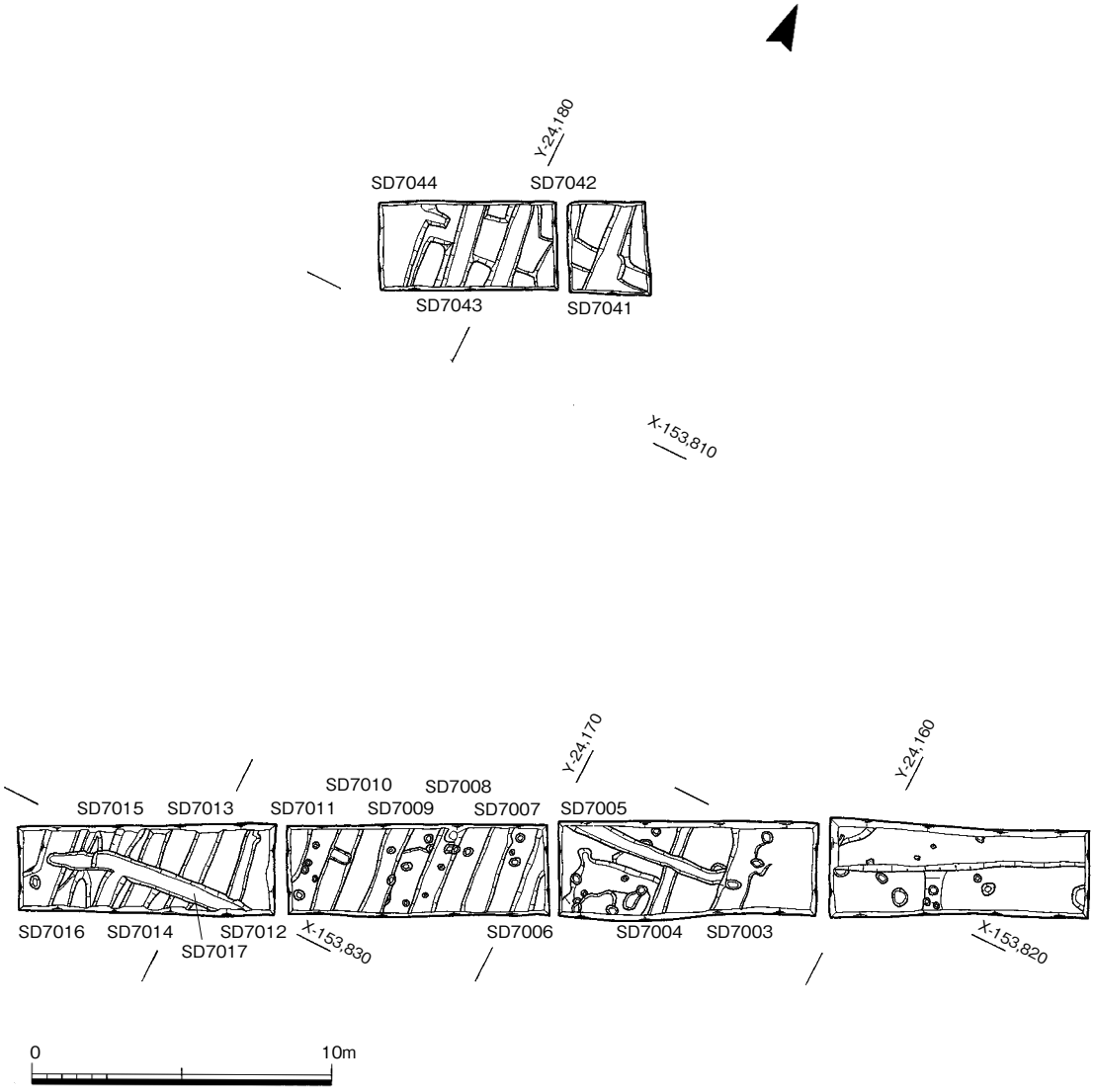


Fig. 18　若草伽藍跡遺構図３（1：250）

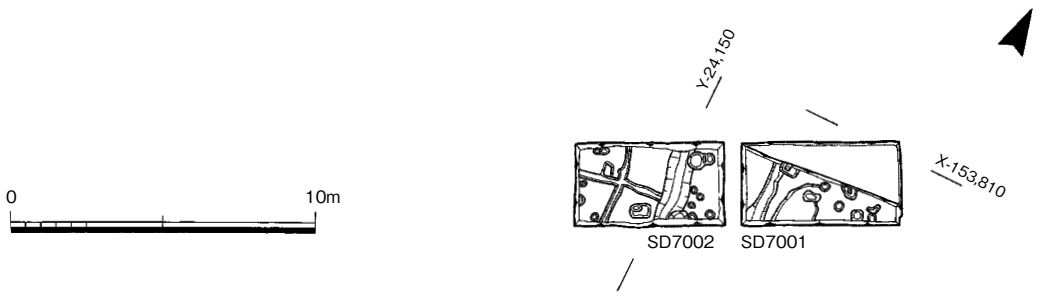


Fig. 19　若草伽藍跡遺構図４（1：250）

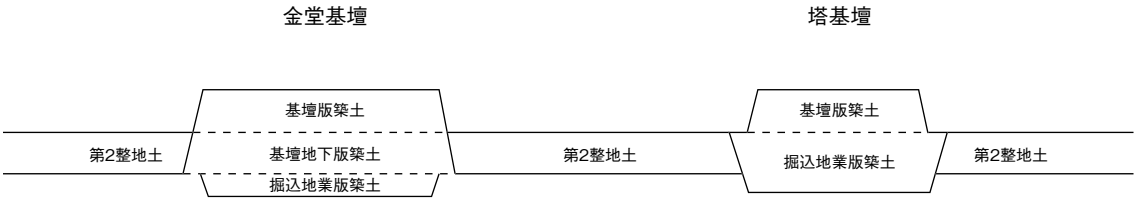


Fig. 20　若草伽藍跡土層模式図

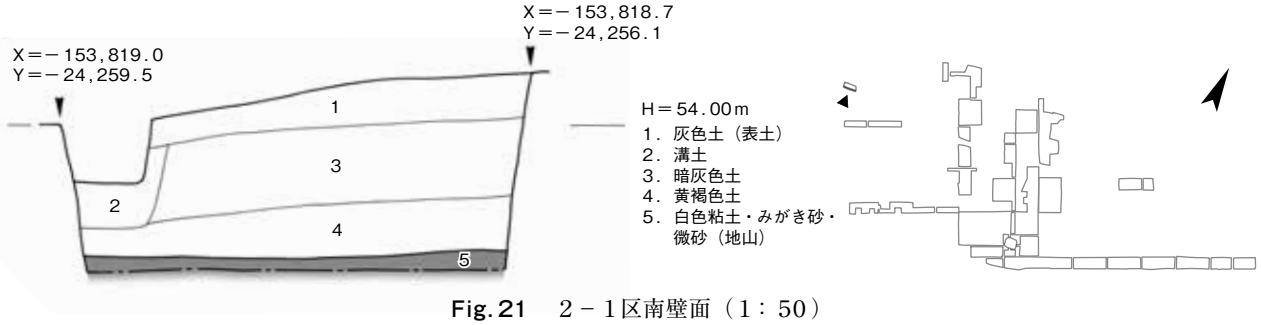


Fig. 21　2－1区南壁面（1：50）

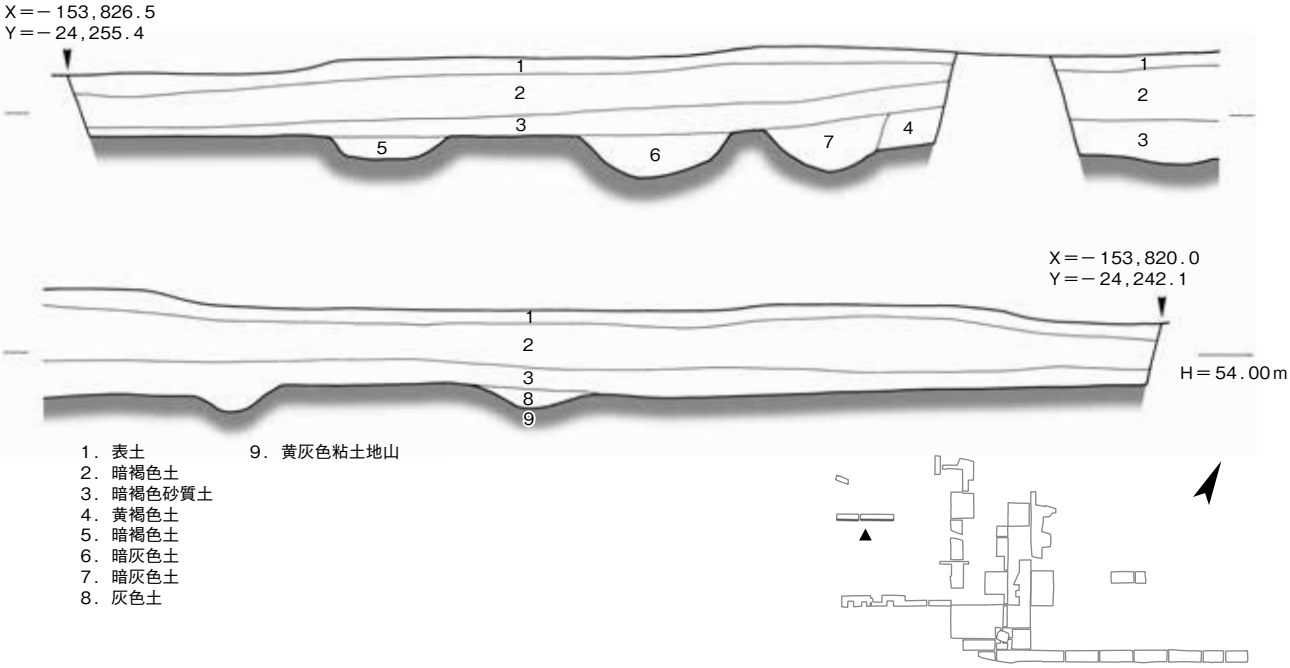


Fig. 22　2－2・3区南壁面（1：50）

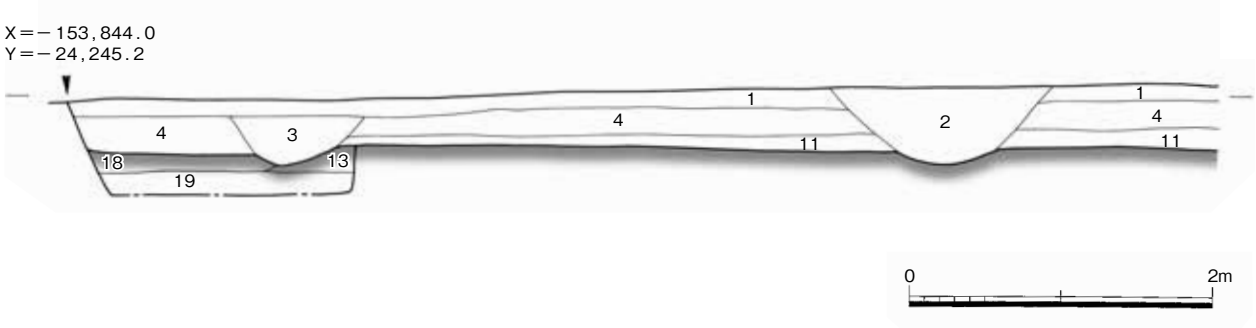
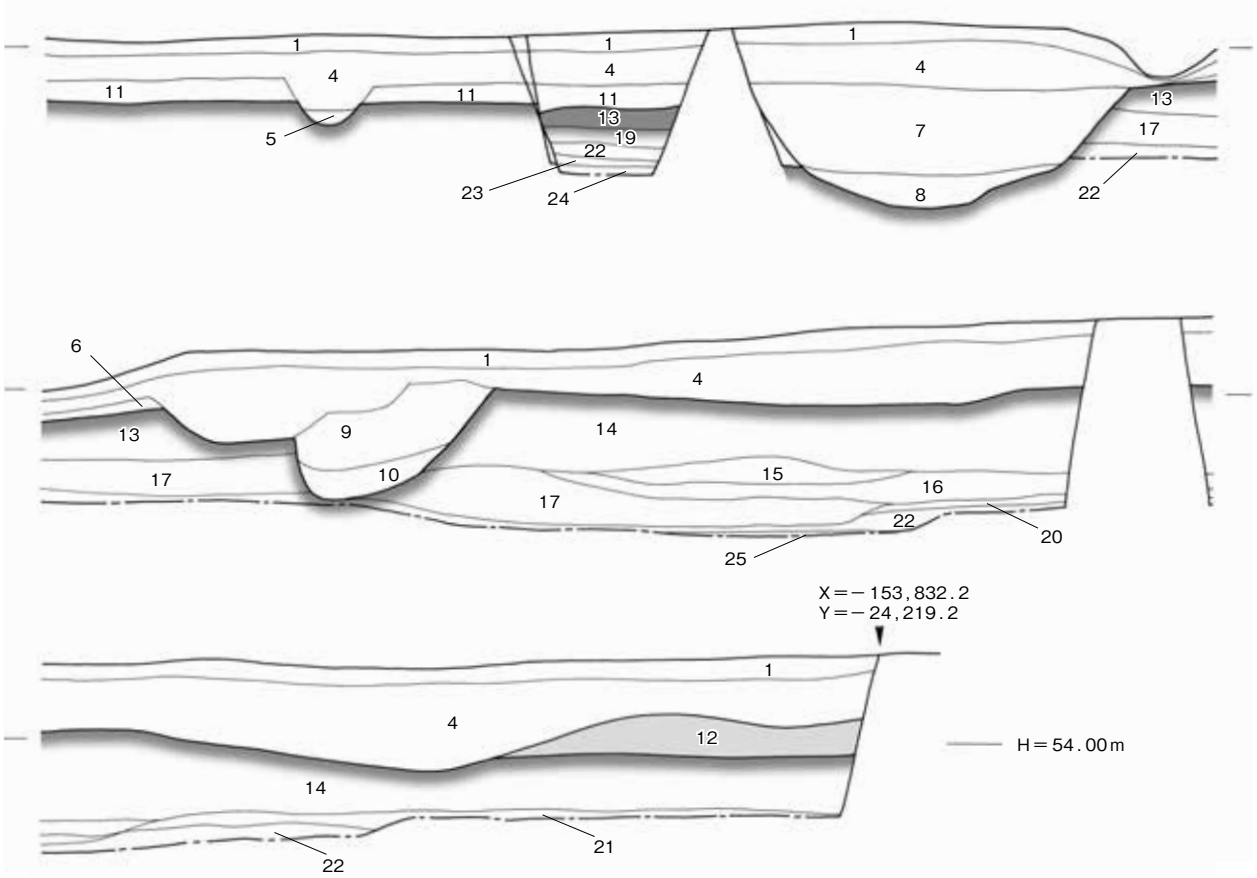


Fig. 23－1　2－4・5区北壁面1（1：50）



1．表土
2．暗灰色砂
3．暗
4．暗褐色土
5．暗褐砂土
6．《記述なし》
7．表土に類似する暗褐土
8．粘質強い暗灰土
9．小礫まじり黄褐土
10．灰褐色土まじり褐色土
11．黄灰砂土
12．黄褐色整地土
13．暗灰褐粗砂
14．褐色砂土・黄褐色粘質土
15．暗褐色細砂
16．暗褐色粗砂
17．灰褐色粗砂（花崗岩粒多し）
18．黄灰色地山
19．黄褐色砂バンド
20．赤褐色粗砂
21．黄灰褐粘質土
22．灰青色砂・青灰粘土
23．青灰粘土
24．青灰粘土
25．灰青色粘土

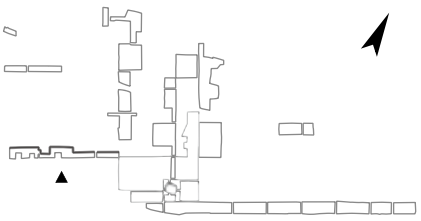
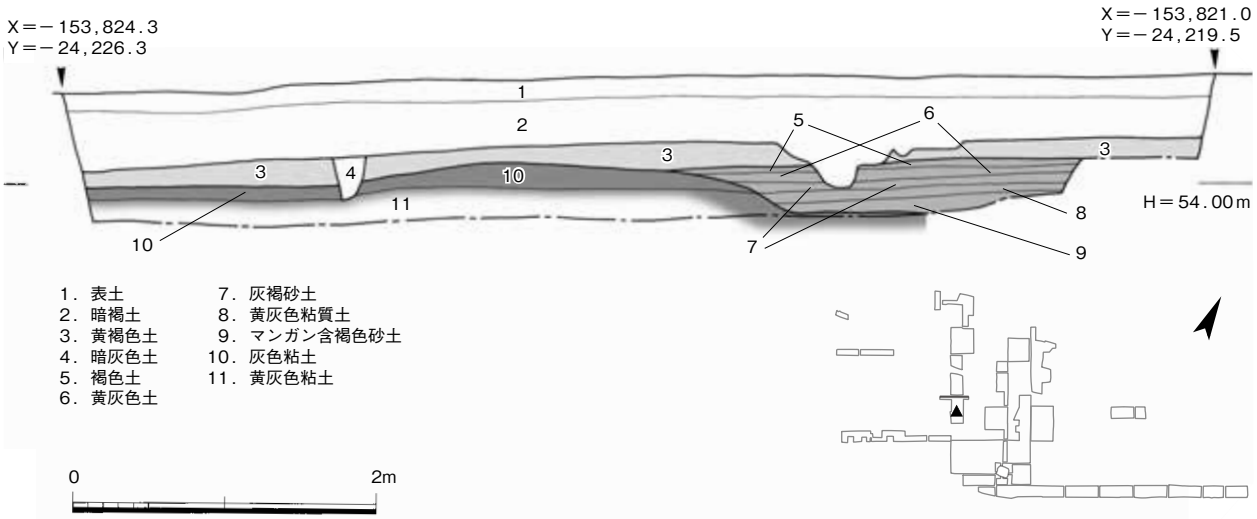


Fig.23－2　2－4・5区北壁面2（1：50）



1．表土
2．暗褐土
3．黄褐色土
4．暗灰色土
5．褐色土
6．黄灰色土
7．灰褐砂土
8．黄灰色粘質土
9．マンガン含褐色砂土
10．灰色粘土
11．黄灰色粘土

Fig.24　2－11区北壁面（1：50）

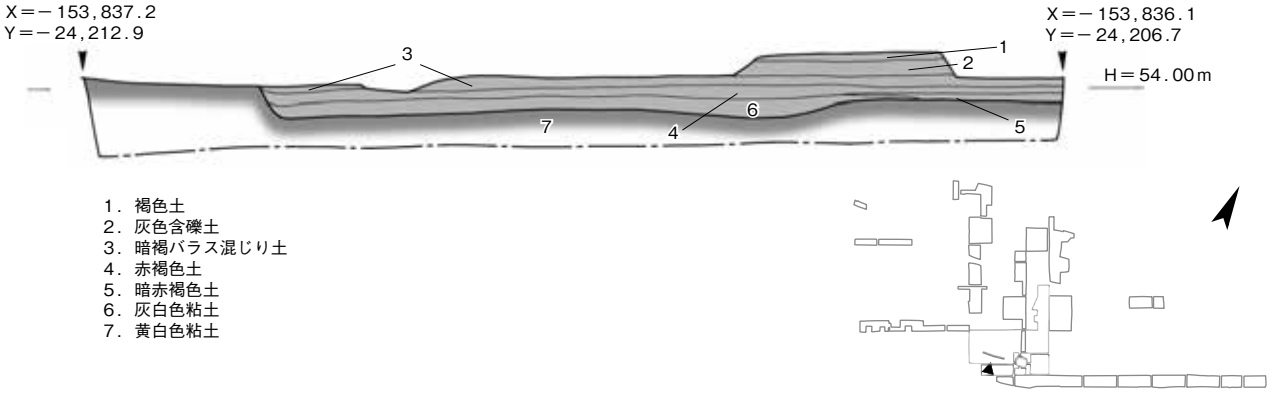


Fig. 25　1－2区1939西溝南壁面（1：50）

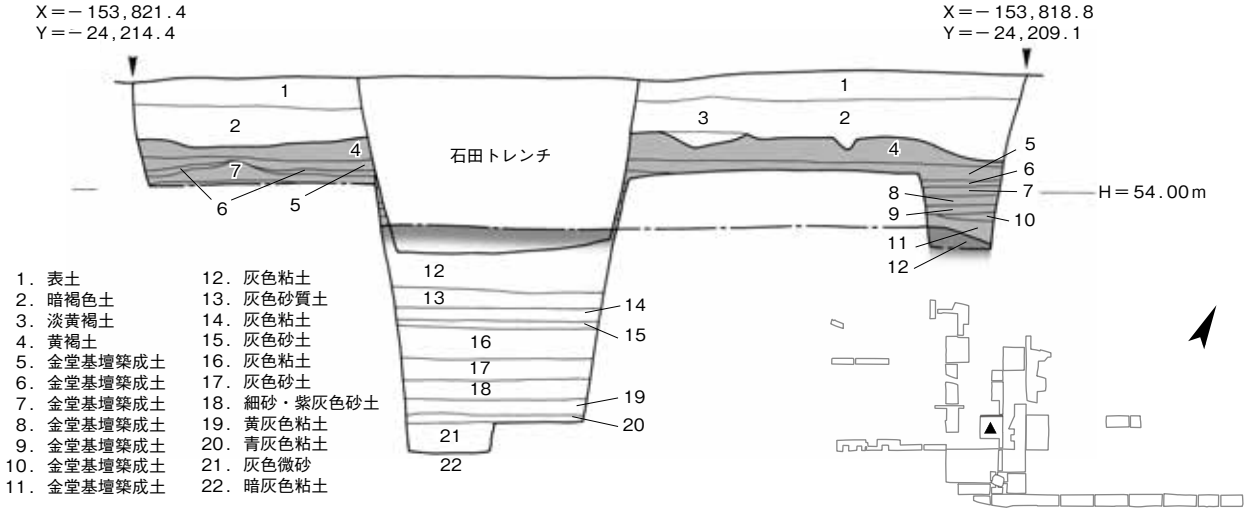


Fig. 26　2－15区北壁面（1：50）

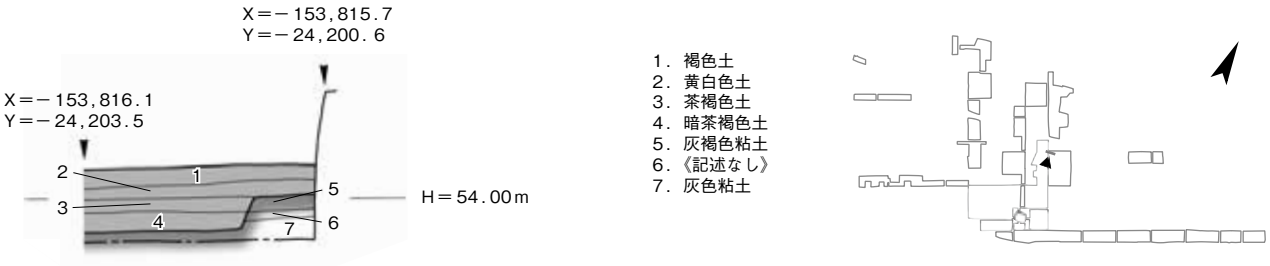


Fig. 27　1－2区1939北溝2東拡張溝北壁面（1：50）

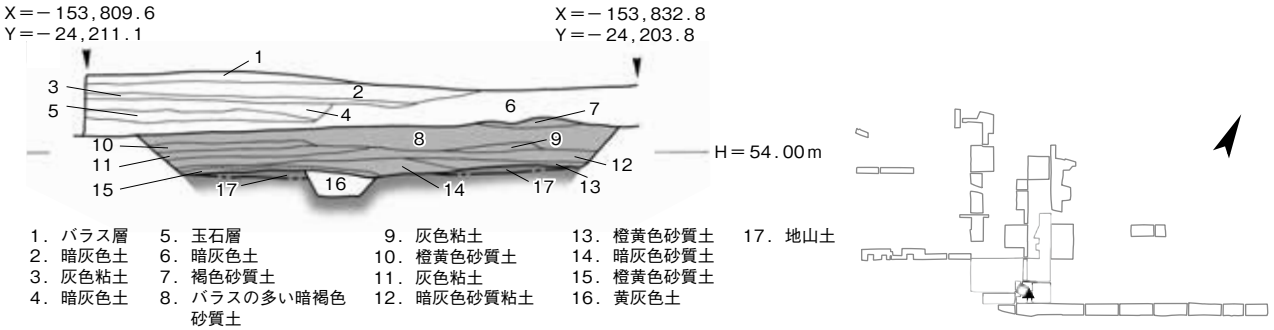


Fig. 28　1－2区塔心礎北側部分南壁面（1：50）

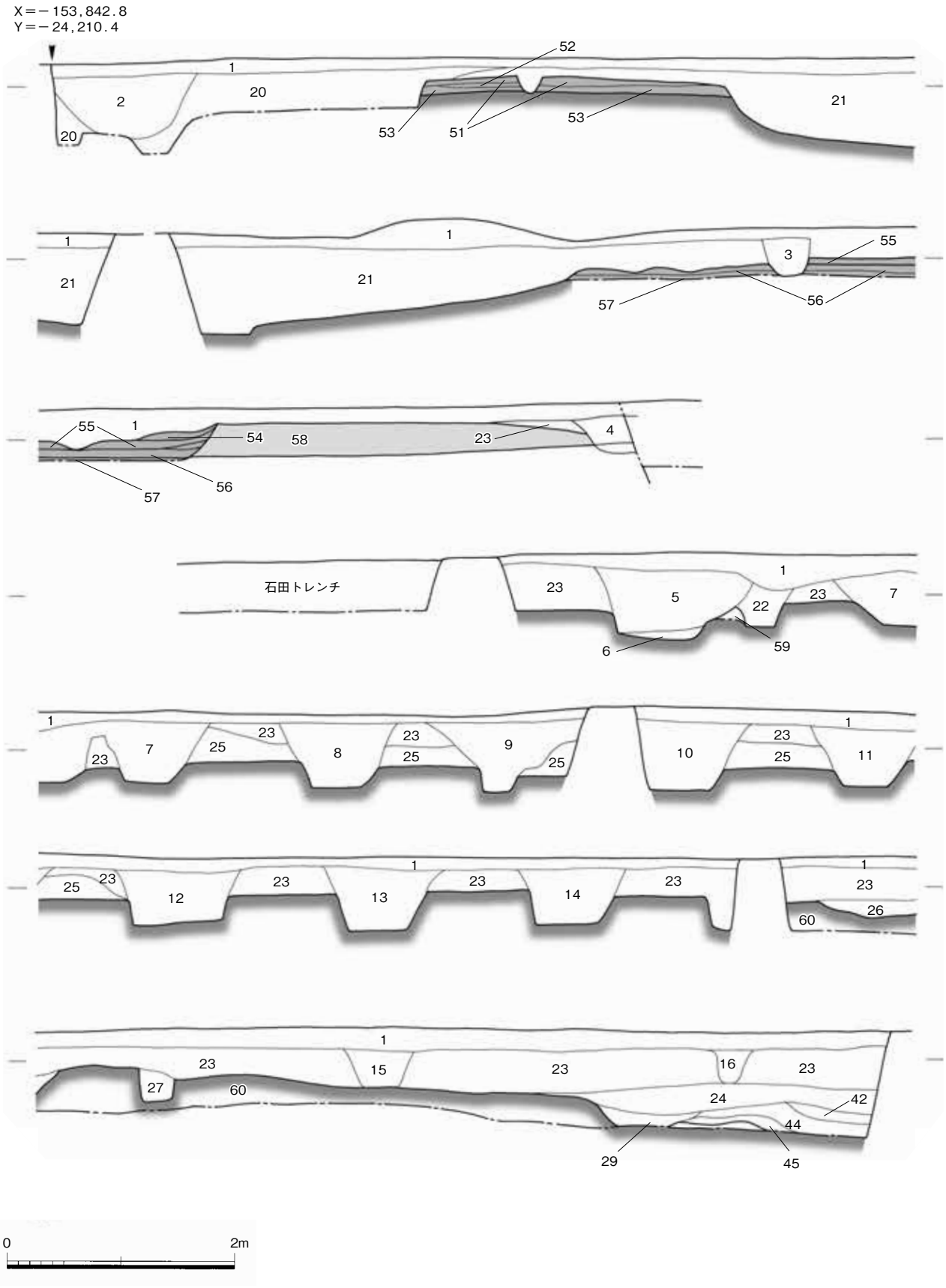
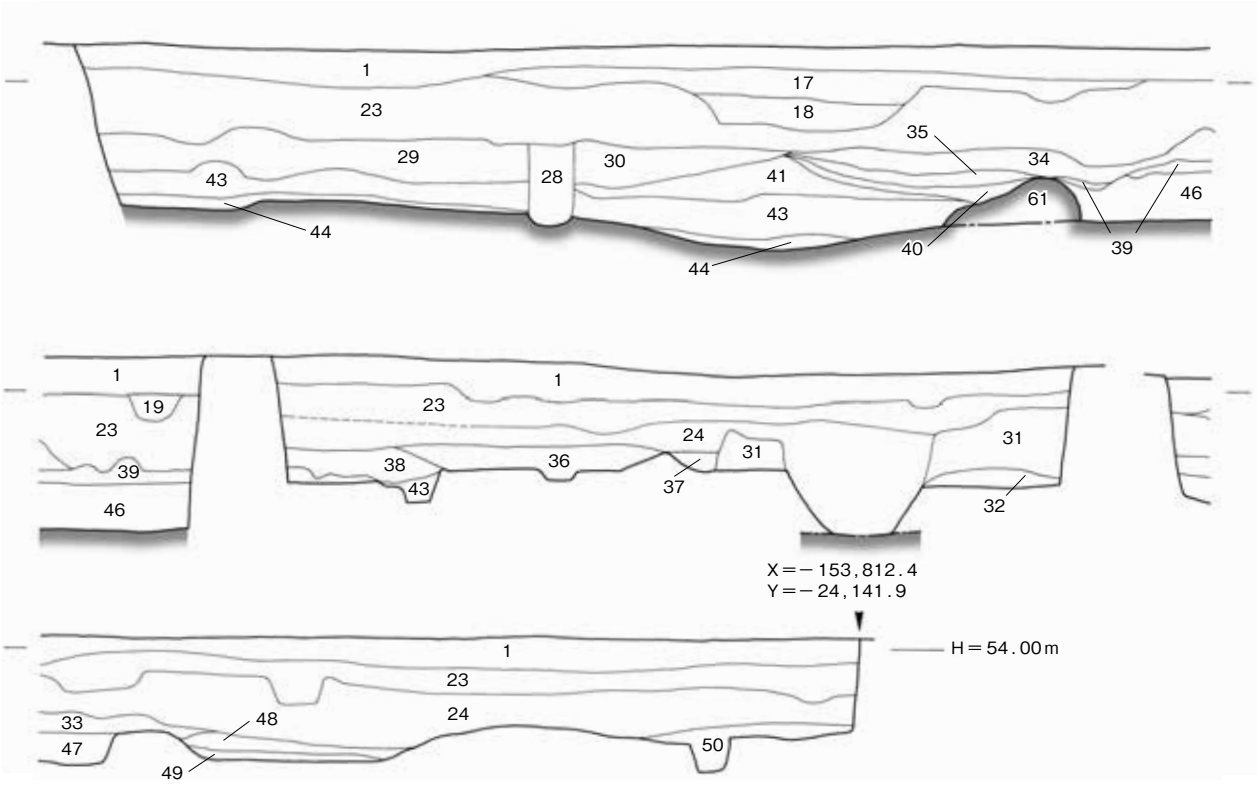
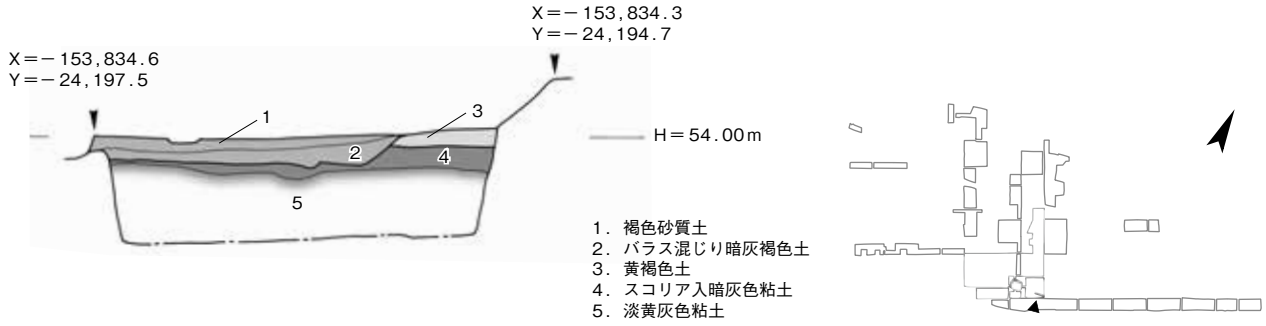


Fig. 29－1　1－3・13区南壁面・1－7～12区北壁面1（1：50）



1．表土
2．白粘土の斑点が入る褐色土
3．《記述なし》
4．《記述なし》
5．黒褐色砂質土
6．灰色粘土
7．黒褐色砂質土
8．黒褐色砂質土
9．黒褐色砂質土
10．黒褐色砂質土
11．黒褐色砂質土
12．黒褐色砂質土
13．黒褐色砂質土
14．黒褐色砂質土
15．黒褐色土
16．黒褐色土
17．淡褐色土
18．黒褐土
19．黒褐土
20．褐色土
21．黒色土
22．暗褐土
23．褐色土（軟）
24．褐色土（硬）
25．黄褐土
26．暗褐土
27．暗褐土
28．黄褐土
29．暗褐色土
30．淡灰色土
31．灰褐土
32．灰褐土
33．黒褐土
34．暗褐砂質土
35．淡灰色土
36．暗褐土
37．淡褐土
38．暗黄土
39．黒灰色粘土
40．暗褐土
41．灰褐砂質土
42．暗褐土（黄色ブロックあり）
43．黄灰粘質土
44．灰色粘土・黒色土（炭化物層）
45．黄色砂質土
46．黄白色粘土
47．黄灰粘質土
48．暗褐土
49．灰黒土
50．黄灰粘質土
51．基壇版築土
52．基壇版築土
53．基壇版築土
54．酸化物の多い砂
55．バラスまじり粘土
56．含バラス赤土
57．青白粘土
58．黄褐整地土
59．地山
60．青灰粘土
61．青灰色粘土

Fig. 29－2　1－3・13区南壁面・1－7～12区北壁面2（1：50）



1．褐色砂質土
2．バラス混じり暗灰褐色土
3．黄褐色土
4．スコリア入暗灰色粘土
5．淡黄灰色粘土

Fig. 30　1－5区1939東溝南壁面（1：50）

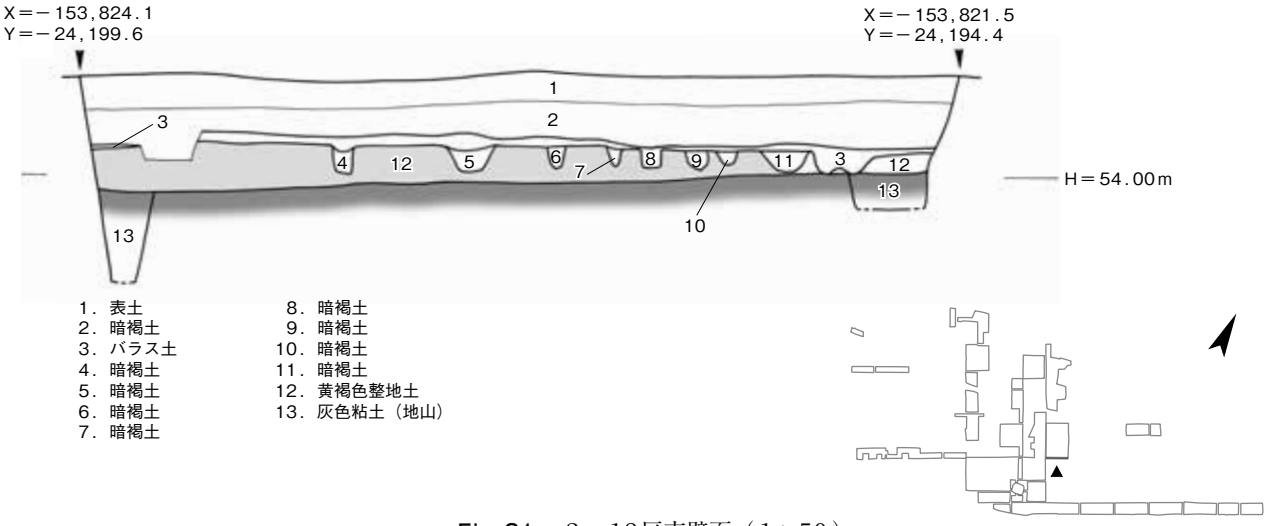


Fig. 31　2－18区南壁面（1：50）

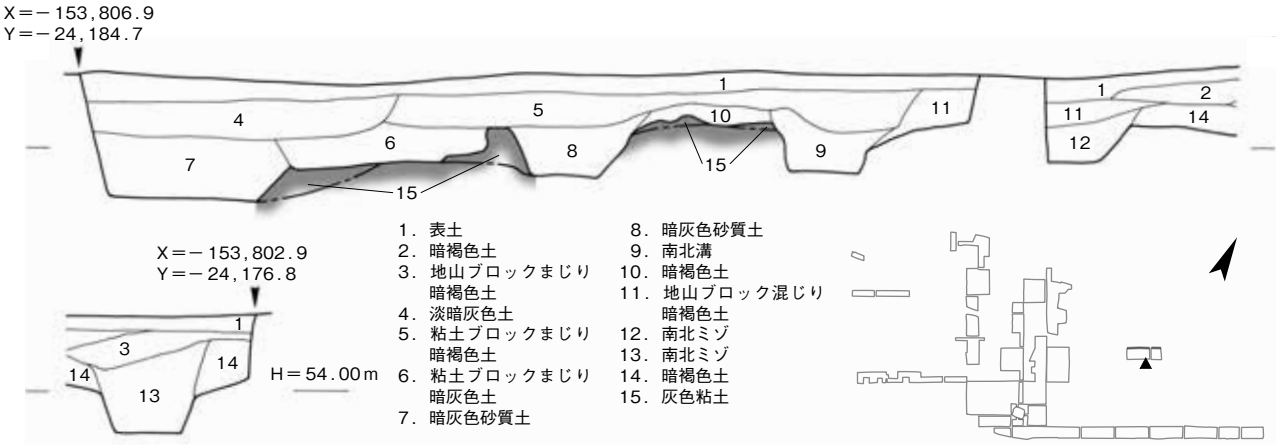


Fig. 32　1－14・15区北壁面（1：50）

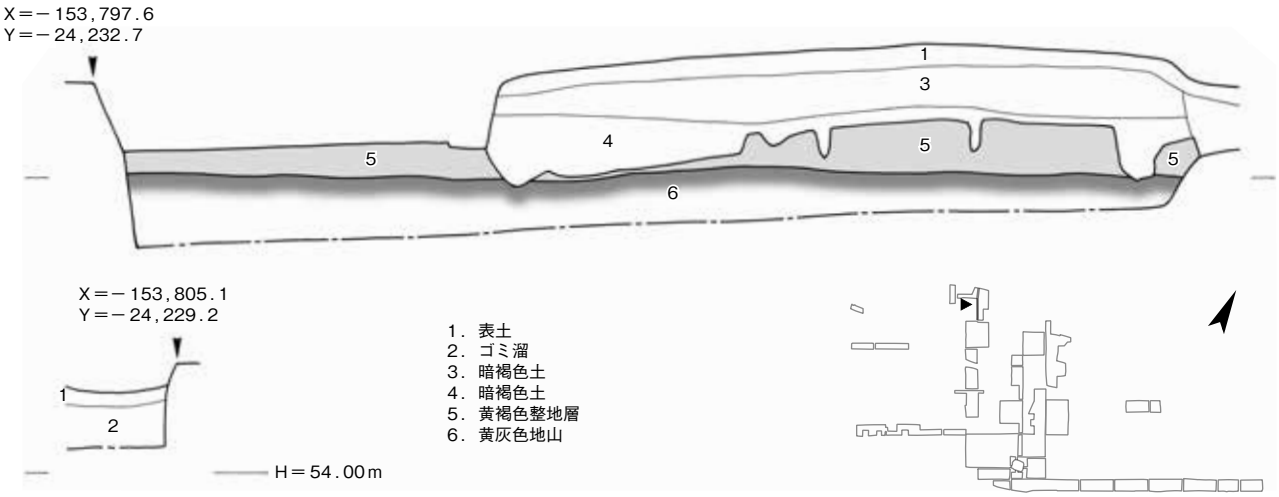


Fig. 33　2－7区西壁面（1：50）

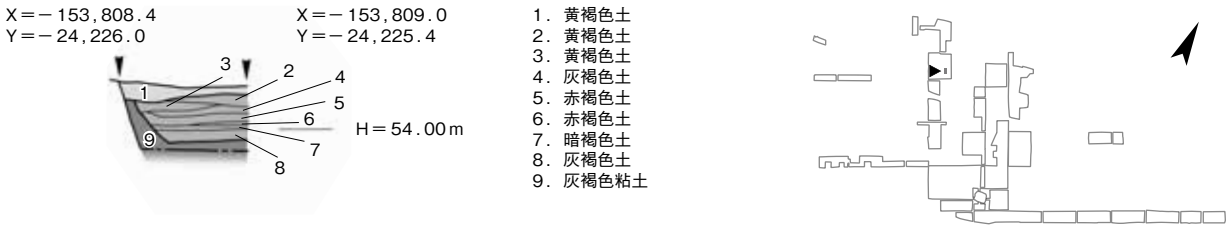


Fig. 34　2－8区1939北西溝1東壁面（1：50）

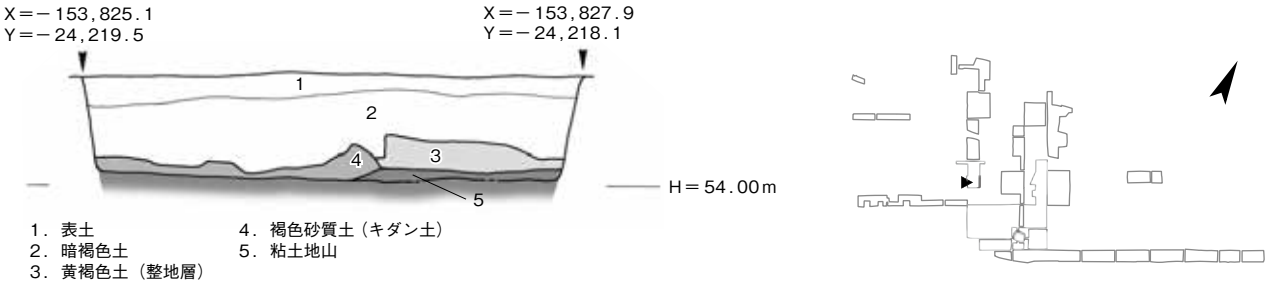


Fig. 35　1－1区東壁面（1：50）

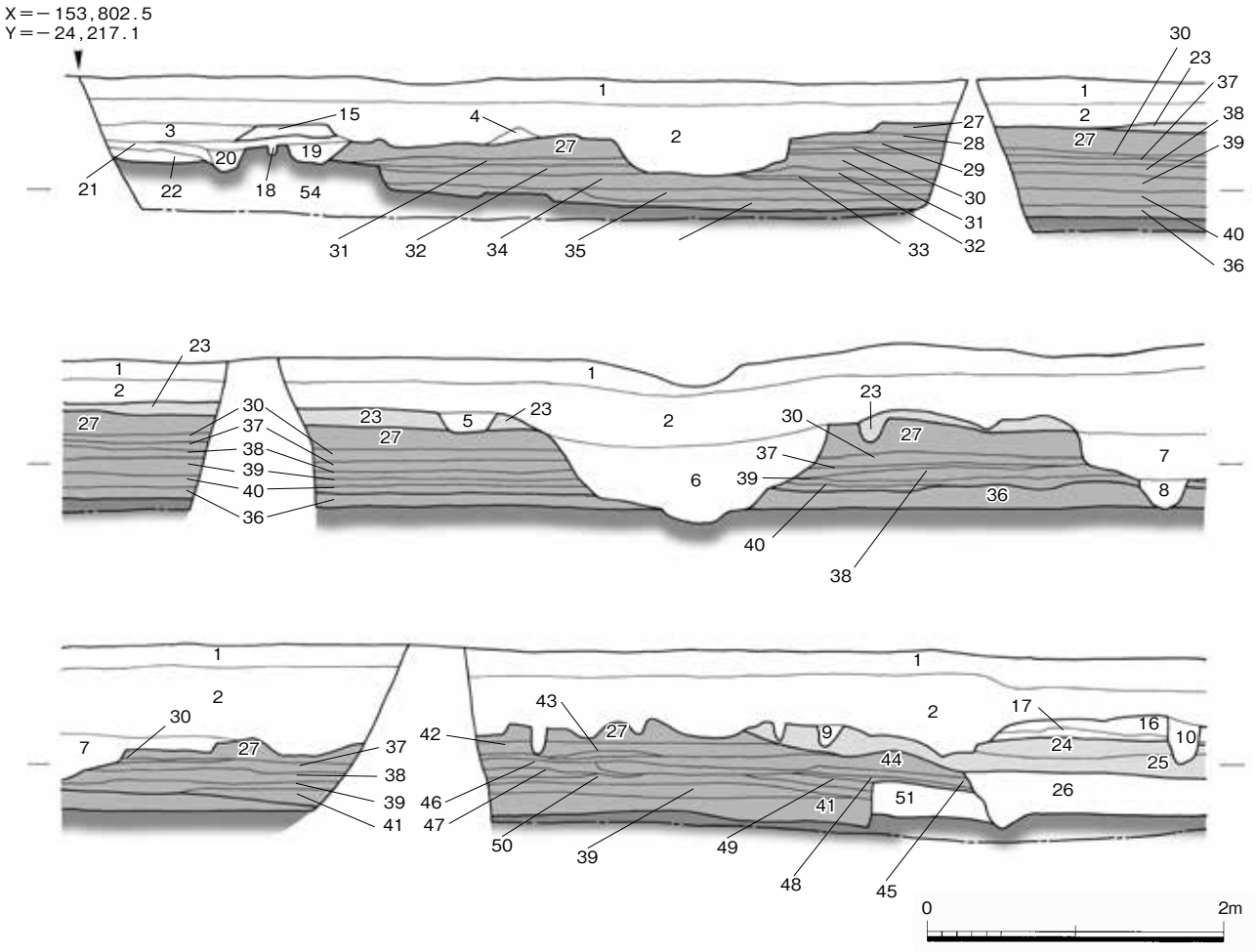
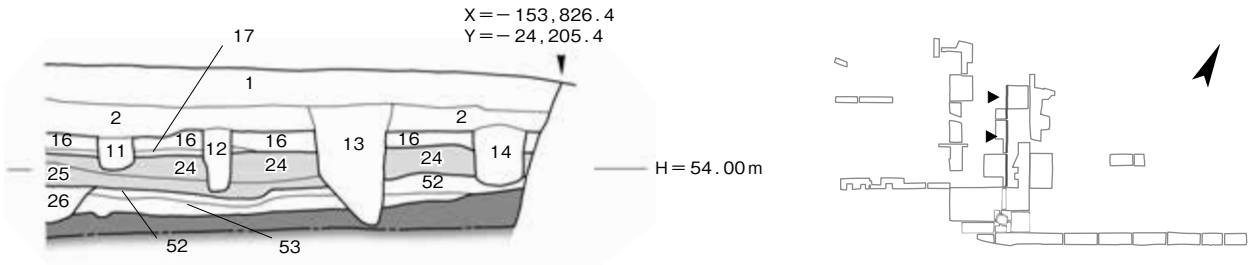
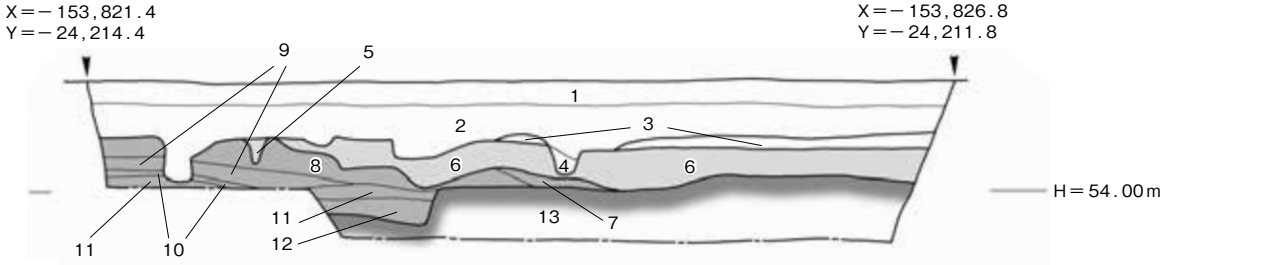


Fig. 36－1　2－12区西壁面・2－13～15区東壁面1（1：50）



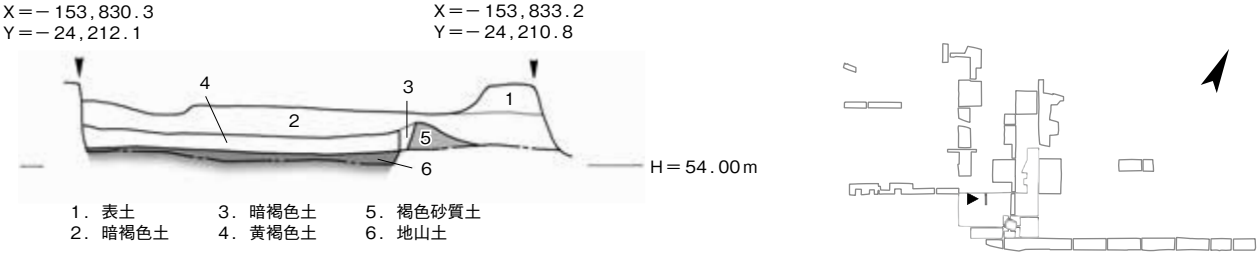
1．表土
2．暗褐色土・暗褐土
3．暗褐土
4．黄灰色土
5．暗褐土
6．黄灰色土・黄灰色土（粘質）・灰色粘土
7．暗褐色土（やや粘質）
8．灰色土（黄斑あり）
9．淡黄褐土
10．淡褐土
11．淡褐土
12．淡褐土
13．淡黄褐土（黄褐色土･灰色粘土のブロック･小礫を含む）
14．暗褐土（礫）
15．バラス層
16．暗褐バラス土
17．暗褐色バラス土
18．灰色粘質土
19．茶褐色砂質土
20．灰色土
21．暗《原文通り》
22．茶褐色砂質土
23．黄褐色整地層
24．黄褐色土（砂質）
25．黄褐色土（粘質）
26．灰褐色土（上部砂質・下部粘質、花崗岩粒あり）
27．黄灰色（粘質土）
28．灰色土（粘質土）
29．黄灰色（粘質土）
30．茶褐色粘質土、淡黄褐土（粘質）
31．灰褐粘質土（マンガン斑）
32．灰色土（砂質、マンガン粒）
33．黄灰粘質土
34．灰褐色粘質土（砂のブロック、マンガン斑入り）
35．灰色粘質土
36．灰褐色粘質土
37．黄灰色砂質土
38．淡灰褐土（砂質）
39．灰褐色土（粘質）
40．黄灰色砂質土
41．黄灰色土
42．淡黄灰色土（砂質）
43．淡褐土（砂質）
44．明褐色土（砂質）
45．褐色砂質土
46．灰褐色土（粘質）
47．淡褐色土（粘質）
48．淡灰色土（粘質）、黄斑
49．淡灰色土（砂質）、黄斑あり
50．明褐色土（粘質）
51．黄灰色層
52．灰褐色土（砂質）、黄斑あり
53．灰褐色（マンガン斑入り、砂質）
54．灰色粘土（地山）

Fig.36－2　2－12区西壁面・2－13～15区東壁面2（1：50）



1．表土
2．暗褐土
3．バラス土
4．暗褐土
5．暗褐土
6．黄褐色整地土
7．褐色砂土
8．黄灰色土
9．淡黄灰色土
10．灰色粘土
11．黄灰色粘土
12．灰褐色砂質土
13．地山

Fig.37　2－15区西壁面（1：50）



1．表土
2．暗褐色土
3．暗褐色土
4．黄褐色土
5．褐色砂質土
6．地山土

Fig.38　1－2区TS－KA51ライン畦西壁面（1：50）

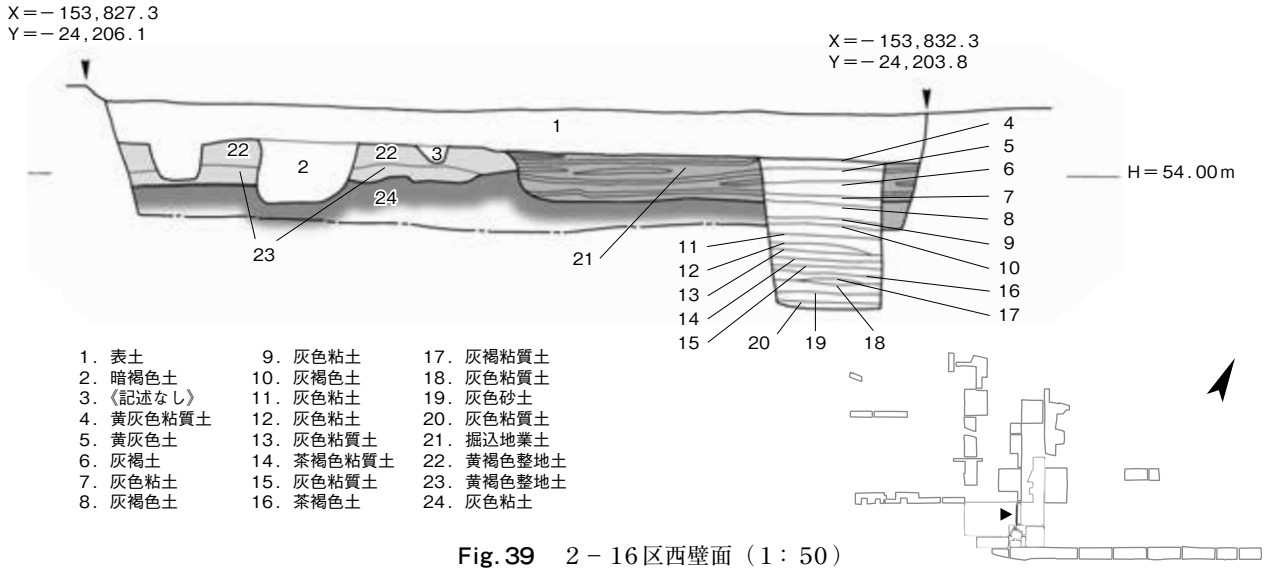


Fig. 39　2－16区西壁面（1：50）

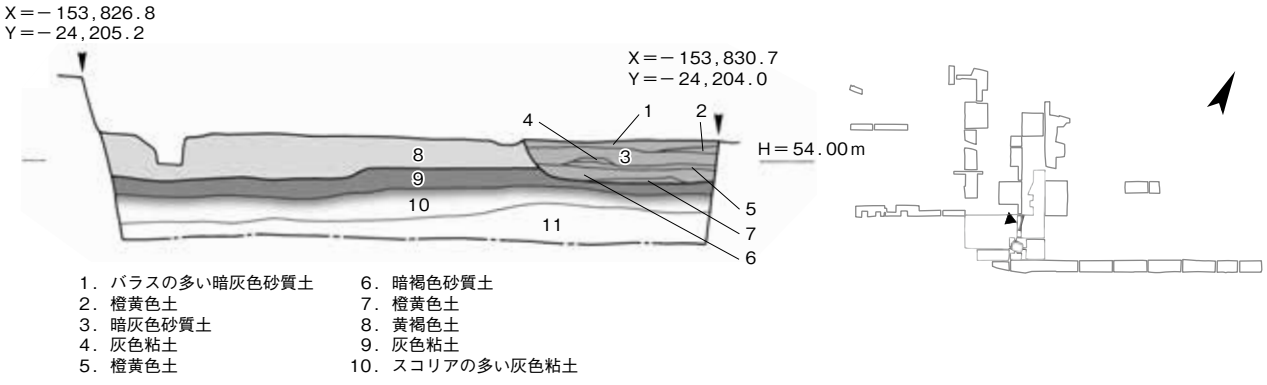


Fig. 40　1－2区1939北溝2西壁面南側（1：50）

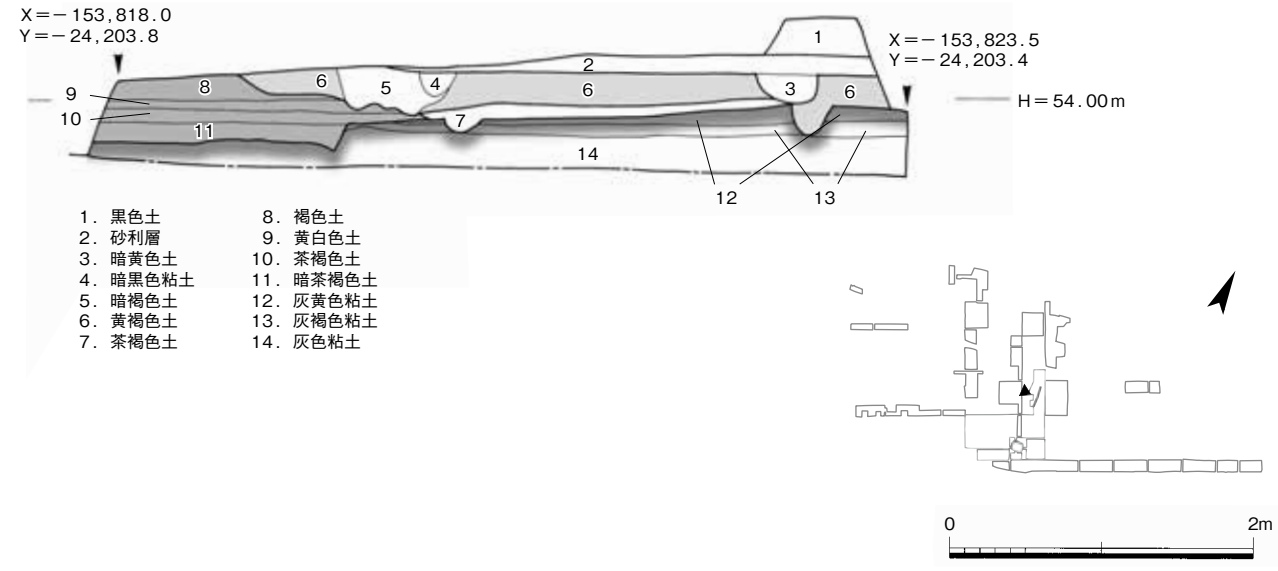


Fig. 41　1－2区1939北溝2東壁面（1：50）

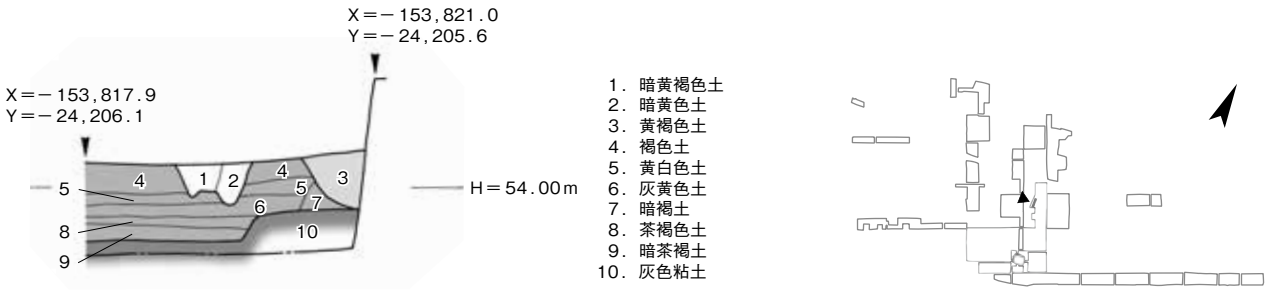


Fig. 42　1－2区1939北溝2西壁面北側（1：50）

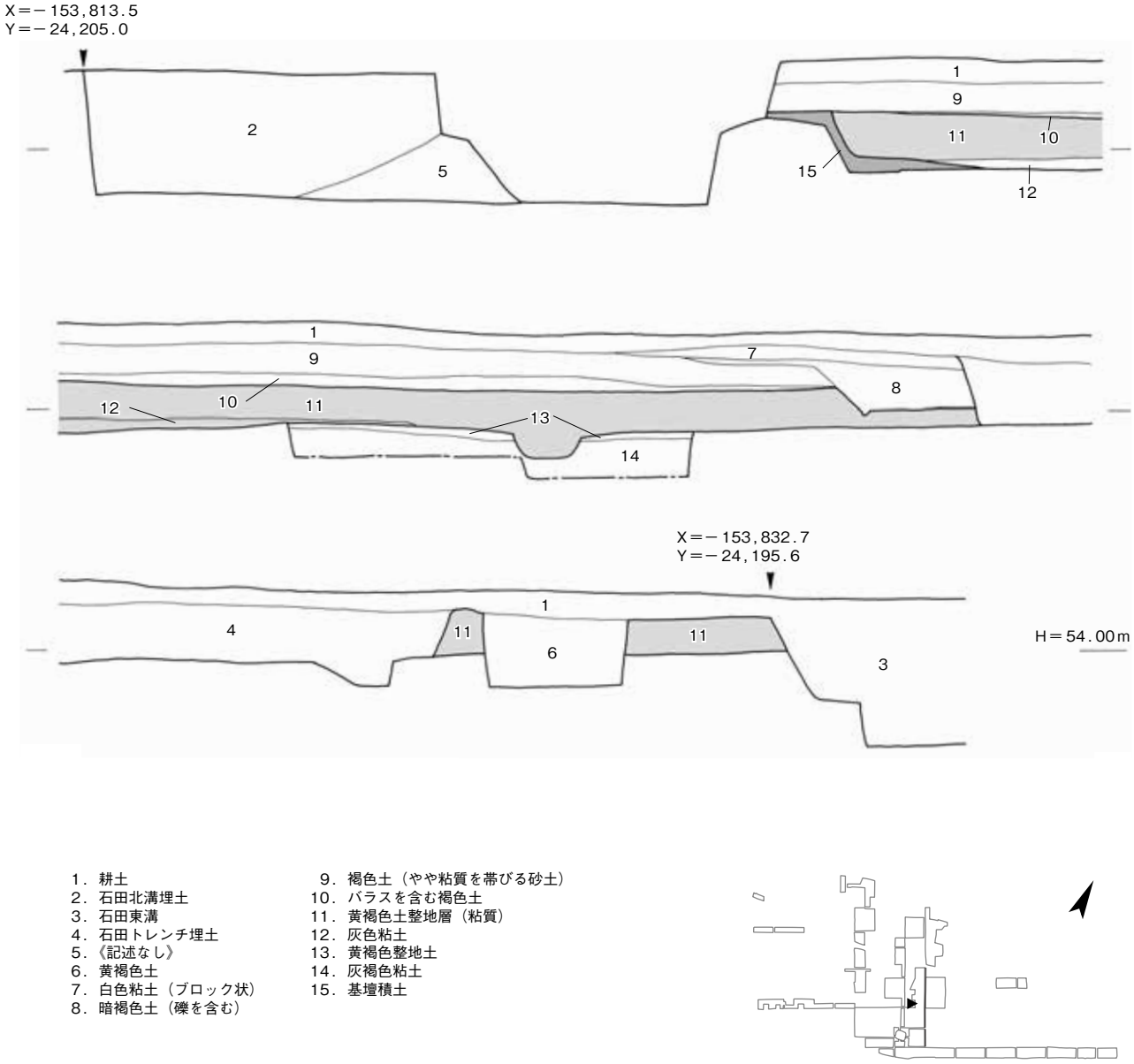


Fig. 43　1－2・5区東壁面（1：50）

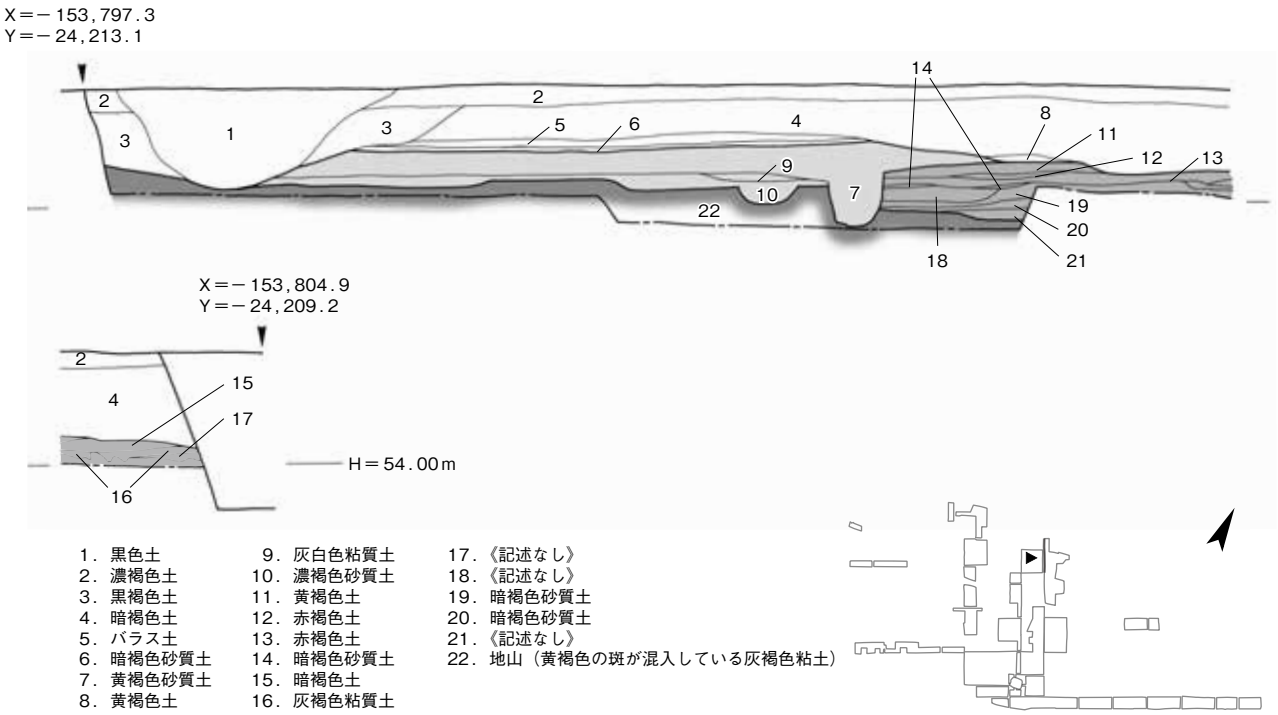


Fig. 44　2－17区西壁面（1：50）

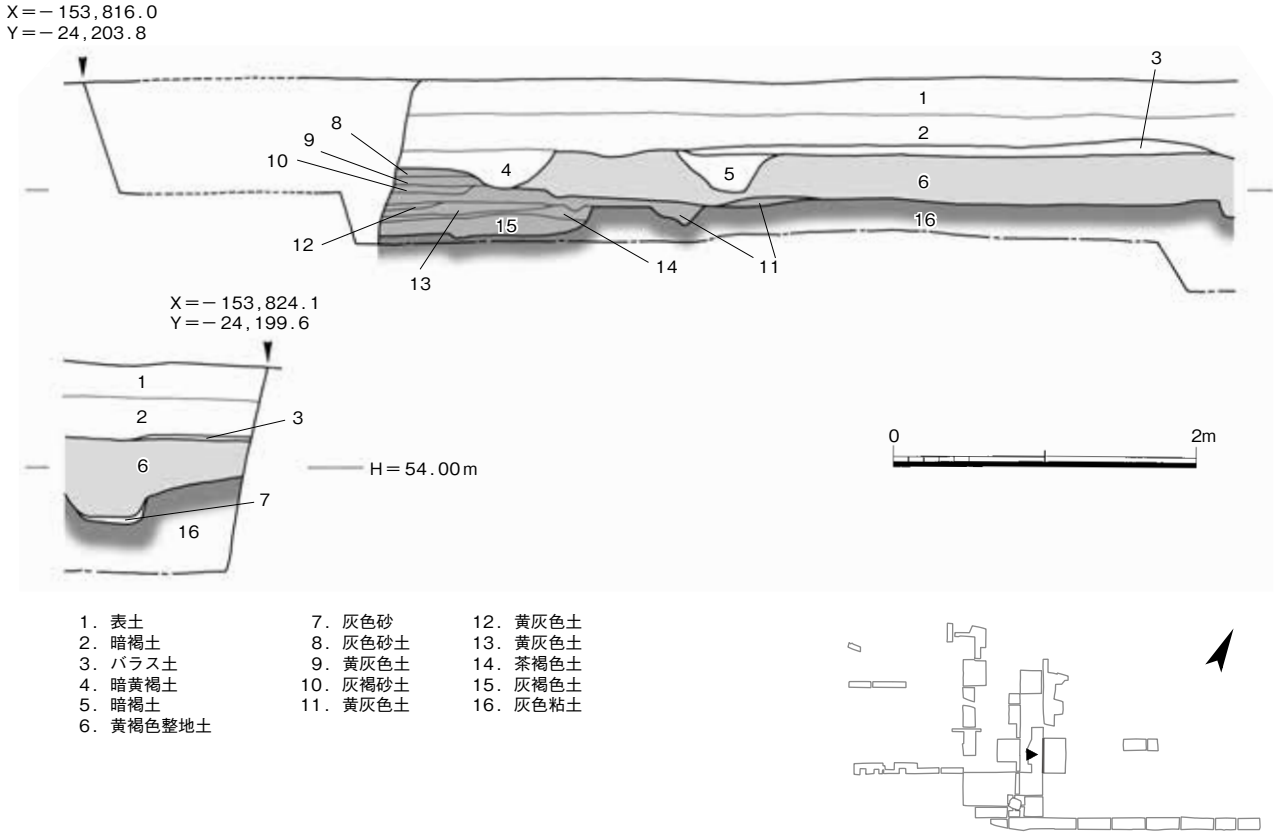


Fig. 45　2－18区西壁面（1：50）

2　遺構・遺物解説

若草伽藍にかかわる遺構・包含層

地　　山

２－15区（Fig.26）でおこなった断ち割り調査によれば、本調査区において遺物を一切含まない地山は、上から順に、灰色粘土、灰色砂質土、灰色砂土、紫灰色砂土、黄灰色粘土、青灰色粘土、灰色微砂、暗灰色粘土で、これらがほぼ水平に堆積していた。なお土層図には「地山」の注記があって、調査者の認識を知ることができる。この地点における地山の確認深度は標高53.30ｍである。地点ごとで、最上層の地山上面高をみると、北の２－１区では53.20ｍ、西の２－４区では54.00ｍ、南の１－７区では53.85ｍ、最も東に位置する１－13区では調査が地山層まで到達していないので、この西の１－12区で地山の標高をみると53.05ｍであった。

また地山上面高については、金堂掘込地業後になされた第２整地土が地山上面に残存していれば、若草伽藍造営当初の寺地造成の高さを知ることができる。調査地の中で、この条件を満たしているのは２－５区北壁（Fig.23）、２－11区北壁（Fig.24）、１－５区1939東溝南壁（Fig.30）、２－18区南壁（Fig.31）、２－７区西壁（Fig.33）、２－８区1939北西溝１東壁（Fig.34）、１－１区東壁（Fig.35）、２－13～15区東壁（Fig.36）、２－15区西壁（Fig.37）、２－16区西壁（Fig.39）、１－２区1939北溝２西壁南側（Fig.40）、１－２区1939北溝２東壁（Fig.41）、１－２区1939北溝２西壁北側（Fig.42）、１－２･５区東壁（Fig.43）、２－17区西壁（Fig.44）、２－18区西壁（Fig.45）で、地山上面高は53.85～54.15ｍの範囲におさまる（Tab.3）。したがって少なくとも金堂や塔部分を含めた南北約50ｍ、東西約30ｍにわたる範囲が、若草伽藍の造営時に、標高54.0ｍ前後に削土作業がなされたと推定できる。このほかに第２次整地土が分布しない地点で、地山上面のもっとも高い地点の標高は、伽藍推定中軸線から西に約39ｍにあたる２－２･３区の地点で53.90ｍ、伽藍推定中軸線から東に約38ｍの１－10区の地点で53.95ｍである。この数値は、伽藍中枢域で得た値に近い。後世の削平を考慮しなければならないとはいえ、中枢域の地山高をほとんど越えない数値である点を評価して、金堂・塔を含め今回の調査のおよんだ南北54.4ｍ、東西180.4ｍにわたる地域が、ほぼ標高54.0ｍで地ならしされた可能性を指摘しておきたい。

第１整地土

第１整地土は、２－15区東壁（Fig.36）に限って検出されている（Fig.46）。この壁面図によれば、掘込地業･版築土･金堂基壇地下版築土･第２整地土に先行する黄灰色土、灰色土、灰褐色土があって、後者には壁面実測原図（「２次26－１」）に、「旧整地土ａ」と注記されている。これらは、厚い部分で25cm、南北方向に少なくとも５ｍ広がっている。この整地土上面はほぼ版築土および第２次整地土によって覆われており、上面の標高は53.90ｍである。また同原図には、この土層のうち灰色土と灰褐色土に「瓦小片を包含する」とする注記があり、若草伽藍造営時の地ならし土とみなすことができる。なお上面の標高値は地山面のレベルにほぼ一致する事実とも整合する。つまり地ならしをおこなう

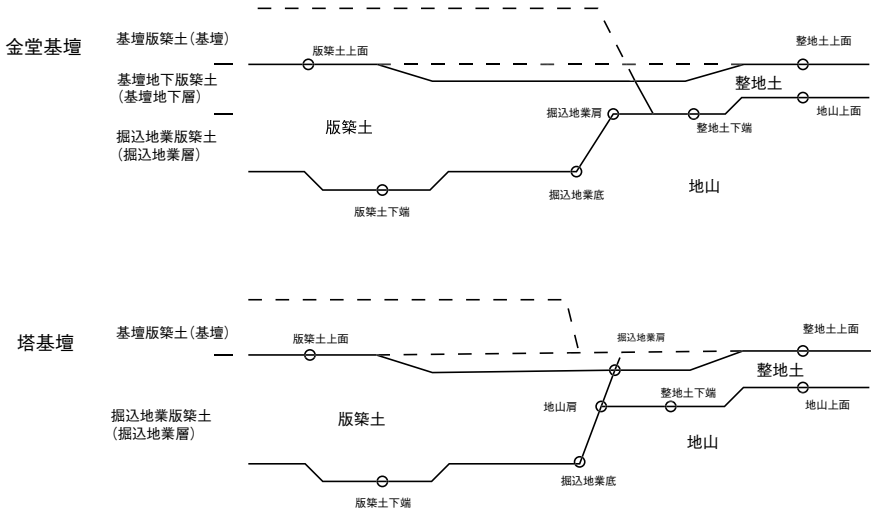


Fig. 46　土層図計測位置模式図

Tab. 3　地山標高値一覧

No.	土層断面位置	地山標高（最高値・m）	計測位置	備考
1	2－1区南壁面	53.20		
2	2－2区南壁面	53.90		
3	2－3区南壁面	53.80		
4	2－4区北壁面	54.00		
5	2－5区北壁面	54.05	第2整地土の外側	第2整地土下端は53.90m
6	2－11区北壁面	54.15	第2整地土下端、整地面	
7	1－2区1939西溝南壁面	54.05		
8	2－15区北壁面	53.75	版築土下端、掘込地業底	
9	1－2区1939北溝2東拡張溝北壁面	54.00	版築土下端、掘込地業肩	
10	1－2区心礎北側部分南壁面	53.85	版築土下端、掘込地業底	
11	1－3区南壁面	53.95	版築土下端、掘込地業底	
12	1－7区北壁面	53.85	第2整地土下端、整地面	
13	1－8区北壁面	53.95		
14	1－9区北壁面	53.95		
15	1－10区北壁面	53.95		
16	1－11区北壁面	53.35		
17	1－12区北壁面	53.05		
18	1－13区南壁面	地山面まで到達せず		
19	1－5区1939東溝南壁面	53.95	第2整地土下端、整地面	
20	2－18区南壁面	53.90	第2整地土下端、整地面	
21	1－14・15区北壁面	54.15		
22	2－7区西壁面	54.05	第2整地土下端、整地面	
23	2－8区1939北西溝3東壁面	54.20	第2整地土下端、整地面	
24	1－1区東壁面	54.10	第2整地土下端、整地面	
25	2－12区西壁面	54.30	版築土の外側	版築土下端は54.15m
26	2－13区東壁面	53.75	版築土下端、掘込地業底	
27	2－14区東壁面	53.70	版築土下端、掘込地業底	
28	2－15区東壁面	53.85	第2整地土下端、整地面	
29	2－15区西壁面	54.10	第2整地土下端、整地面	
30	1－2区TS-KA51ライン畦西壁面	54.10	第2整地土下端、整地面	
31	2－16区西壁面	54.05	第2整地土下端、整地面	
32	1－2区1939北溝2西壁面（南側）	53.95	第2整地土下端、整地面	
33	1－2区1939北溝2東壁面	54.05	第2整地土下端、整地面	
34	1－2区1939北溝2西壁面（北側）	53.85	第2整地土下端、整地面	
35	1－2・5区東壁面	53.95	第2整地土下端、整地面	
36	2－17区西壁面	54.20	第2整地土の外側	第2整地土下端は54.10m
37	2－18区西壁面	53.90	第2整地土下端、整地面	
38	1－2区南壁面	54.00	版築土下端、掘込地業底	報告書未掲載
39	1－2・3・6区50ライン東壁面	53.85	版築土下端、掘込地業底	報告書未掲載

No.	土層断面位置	第1整地土上面（m）	第1整地土下端（m）
1	2－15区東壁面	53.90	53.65

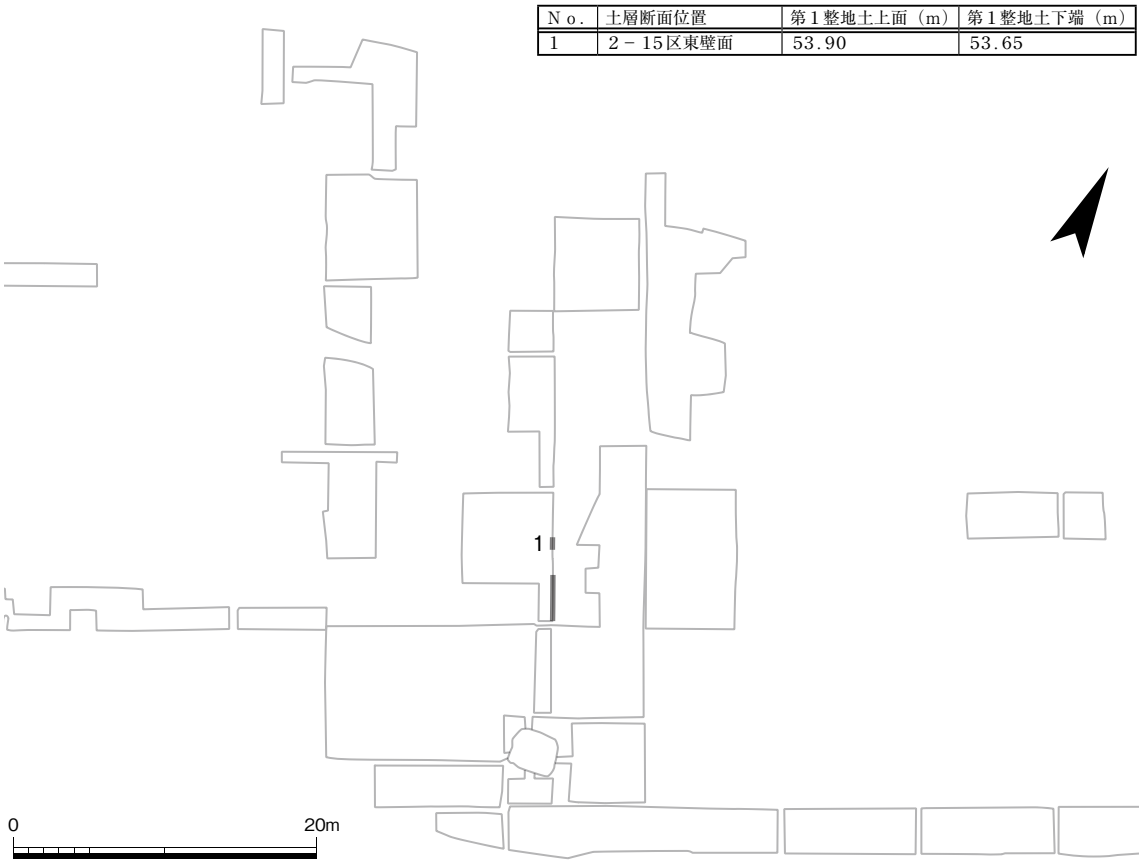


Fig. 47　第1整地土（1：500）

に際して、低い部分に土を入れて全体を平坦にした箇所と理解する。（深澤）

また、「KB46整地層下端」（ラベル）で取り上げた土器がある。若草伽藍造営以前にさかのぼる遺物なので、この地域の開発時期を示唆する資料として、報告する（Fig.48）。

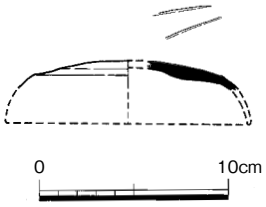


Fig. 48　KB46整地層下端　須恵器（1：4）

須恵器杯Hの蓋の破片とみられる。回転ヘラケズリの施された外面に2本の沈線からなるヘラ記号の一部をとどめる。天井部と口縁部との境につくべき稜や沈線をとどめず、径も13.0cmに復原できることなどから、陶邑編年のTK43型式、6世紀後半のものとみられる（田辺1966）。（高橋）

金堂基壇と掘込地業（SX7100）（PL.5～11）

金堂基壇については現在、地上に残存した遺構は認められず、基壇外装の痕跡もまったく残っていない。掘込地業版築土と基壇地下版築土の一部をとどめるのみである。したがってその基壇は、掘込地業などの版築土の存在によって金堂位置を確認し、その規模を推定しなければならない。

掘込地業は、北東隅（2－17区）・南東隅（2－18区）・南西隅（1－1、2－11区）の3隅および東（1－2、2－17・18区）・西（2－8～11区）・南（1－2、2－11・15・18区）・北（2－8・12・17区）の4辺、そして中央部（2－13・14区）で確認される。北西隅については1939年の調査（2－8区1939北西溝1）で掘削されており、遺構は残っていなかった。

掘込地業の規模は、掘込地業肩部によれば、その輪郭の形状は正確な長方形ではなく、やや不整形

金堂基壇掘込地業の規模

位置	規模（m）	備考
東西（北）	22.80	東辺・西辺ともに推定位置を計測
東西（中央）	22.50	東辺は推定位置を計測
東西（南）	22.00	全長
南北（東）	19.70	全長
南北（中央）	19.05	北辺は推定位置を計測
南北（西）	19.95	北辺は推定位置を計測

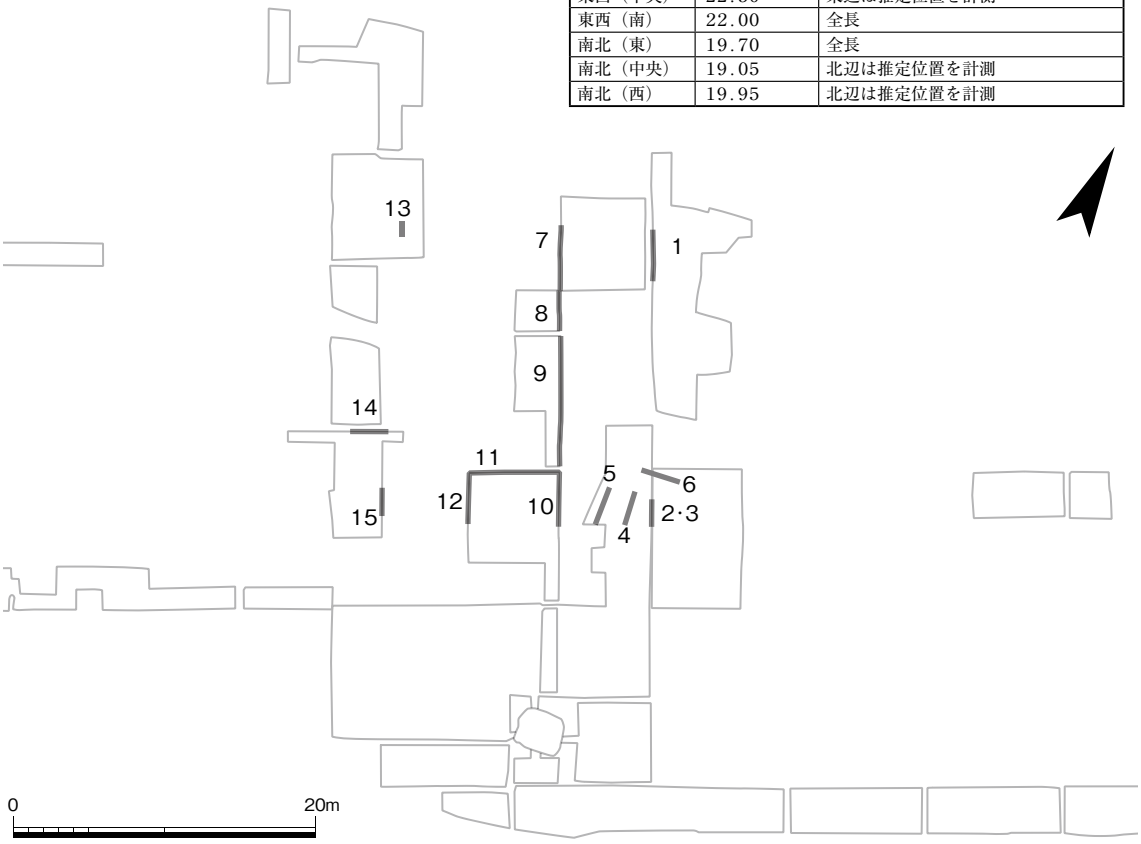


Fig.49　金堂基壇掘込地業（1：500）

Tab.4　金堂基壇掘込地業の標高値

No.	土層断面位置	掘込地業肩（m）	掘込地業底（m）	版築土上面（m）	版築土下端（m）	整地土上面（m）	整地土下端（m）	地山上面（m）	地山計測位置	備考
1	2－17区西壁面	54.10	53.95	54.25	53.90	54.40	54.10	54.20	第2整地土の外側、第2整地土下端標高は54.10m	
2	1－2･5区東壁面	53.85	53.85	54.30	53.85	54.30	53.85	53.95	第2整地土下端、第1整地面	掘込地業は底部まで掘削せず？
3	2－18区西壁面	53.90	53.70	54.15	53.70	54.25	53.90	53.90	第2整地土下端、第1整地面	
4	1－2区1939北溝2東壁面	53.85	53.65	54.20	53.65	54.20	53.90	54.05	第2整地土下端、第1整地面	
5	1－2区1939北溝2西壁面北側	53.80	53.65	54.20	53.65	54.25	53.85	53.85	第2整地土下端、第1整地面	
6	1－2区1939北溝2東拡張溝北壁面	54.00	53.80	54.20	53.80	－	－	54.00	版築土下端、第1整地面	
7	2－12区西壁面	54.15	54.00	54.40	53.85	－	－	54.30	版築土の外側、版築土下端標高は54.15m	
8	2－13区東壁面	－	－	54.40	53.75	54.40	54.30	53.75	版築土下端、掘込地業底	
9	2－14区東壁面	－	－	54.25	53.70	54.35	54.25	53.70	版築土下端、掘込地業底	
10	2－15区東壁面	53.90	53.55	54.30	53.55	54.30	53.90	53.85	第2整地土下端、第1整地面	
11	2－15区北壁面	－	－	54.40	53.75	－	－	53.75	版築土下端、掘込地業底	
12	2－15区西壁面	54.00	53.75	54.35	53.75	54.35	54.00	54.10	第2整地土下端、第1整地面	
13	2－8区1939北西溝3東壁面	54.20	53.90	54.20	53.90	54.35	54.20	54.20	第2整地土下端、第1整地面	
14	2－11区北壁面	54.10	53.80	54.15	53.80	54.25	54.00	54.15	第2整地土下端、第1整地面	
15	1－1区東壁面	54.10	54.00	54.25	54.00	54.30	54.10	54.10	第2整地土下端、第1整地面	掘込地業は底部まで掘削せず？

である。なお掘込地業肩部の平面実測図の輪郭位置は、２－12区西壁面図（Fig.36）および２－18区西壁面図（Fig.45）にみられる土層断面における掘込地業の肩部と一致していた。そしてこの輪郭やこれによって推定復原してえた数値によれば、東西は、北辺部が22.80ｍ、中央部が22.50ｍ、南辺部が22.00ｍ、南北は、西辺部が19.95ｍ、中央部が19.05ｍ、東辺部が19.70ｍである（Fig.49）。これらの数値は、概報が報告する東西約22ｍ、南北約19.5ｍを含む数値である。ともあれ東西にやや長い長方形を呈し、概報報告にしたがって東西長と南北長の比率をおおよそ1.1：１とすることができる。基壇そのものの大きさは、基壇外装等の痕跡が残っていないので手がかりをまったく欠くとはいえ、２－15区東壁面･同西壁面･２－18区西壁面などから、版築土の外周すべてを整地土が覆っている事実を根拠に、基壇規模を掘込地業とほぼ同じと想定すべきであろう。

金堂基壇の掘込地業は、地山あるいは第１整地土面からおこなわれており、その標高は54.0ｍあたりである。掘込地業の肩部は、北辺では２－12･17区、東辺では１－２区、南辺では１－１･２･２－15･18区、西辺では２－11区で確認できる。西辺では肩部が崩れており、北辺（２－12区）では溝に切られているため掘り込みの状況は不明である。比較的遺存状態の良い､東辺（１－２区）や南辺（２－15区）の断面でみるとやや傾斜するか、あるいはほぼ垂直に近く掘り下げている。

掘込地業底の標高には、場所によって53.55～54.00ｍまでの差異がある。しかし掘込地業の肩と底の比高差は多くが20～30cmで比較的浅い（Tab.4）。掘込地業は、肩部の高さまで版築する。版築には、灰褐色や黄褐色の砂質土が積まれており、１層の厚さは５～10cm程度で、掘込地業内で、２～６層を数えることができる。遺存状況の良い２－15区東壁面でみると、掘込地業の深さは35cmで、地業内の土層は、上から順に黄灰色土、灰褐色土、暗褐色土、淡褐色土の４層である。版築土内に瓦の小片を包含している（２－15区北壁面 （Fig.26）原図に記載あり）。

掘込地業をおこなってから、さらに第１整地面・地山上面より高く積み上げて基壇を形成する。間層を挟まないので、掘込地業から基壇土の積み上げは連続した工程であったと推定する。基壇土の積み上げは、掘込地業位置より外側に、0.7～1.2ｍほどはみでた位置から開始する（２－15区東西壁面(Fig.36･37)）。基壇土の積み上げ後に金堂周辺に整地したので、この整地土で覆われる部分が生ずる。この部分は金堂完成時には、地表下にあって下層基盤の一部となる。この基壇土部分が、基壇地下層である。

後世の削平を受けているため、基壇地下層の実際の高さは不明であるが、最も遺存状況のよい２－15区東壁面では、第１整地土上面から40cmの高まりを確認できる。灰褐色土、褐色砂質土、暗褐色土、淡黄褐色土、黄灰色土の５層からなる版築土である。２－15区東壁面の場合、掘込地業の分を合わせると、地業底から少なく見積もっても70cm以上の版築がおこなわれたことになる。したがって掘込地業の掘り下げの深さそれ自体は浅いのであるが、基壇地下層による量上げ分を足せば、地表下の版築層は決して浅くないことになる。なお基壇版築土と第２整地土の土質については、「金堂・塔と掘込地業」の項で後述する。

金堂基壇外周の溝SD7040・SD7050・SD7055（Fig.17、PL.14～18）

SD7040は、２－17区、２－18区、１－２区で検出した金堂掘込地業の東側にある素掘溝である。２－17区東張り出し部に位置する北端の上幅は65cm、深さ28cmである。金堂掘込地業南東隅

でSD７050に接続する。この付近の溝上幅は50cm、深さ20cmである。塔心礎付近の断割調査において塔掘込地業版築土の下で、SD７040の続きを検出している。ここでは、溝上幅50cm、深さ15cm（溝底標高53.70m）である。これ以南の状況は、明らかになっていない。北端から南端までの総長は27.5mあり、標高でみると、南端部が4cm低い。なおこの溝には、２－18区西壁で底部に砂の堆積が認められており、水を流す水路として機能していたことを示している。SD７050は、２－18区で検出した金堂掘込地業の南側にある素掘溝である。西端部は、上幅45cm、深さ6.5cm、西でSD７040に接続する付近では、上幅50cm、深さ8cmである。東西間２mで、西端が1cm低い。金堂掘込地業の西側で、これらに対応する素掘溝は検出されていない。SD７055は、２－12区と２－17区で検出した金堂掘込地業北側の素掘溝である。西端は、上幅20cm、深さ15cm（溝底標高54.15m）、東端は後世の溝に壊されており、その地点で上幅30cm、深さ8cmである。溝底は、東端と西端の間10.5mで、東が13cm低い。この３条の溝は、金堂基壇周辺の排水を目的にして一連で掘られており、南側に排水したと推定する。なお１－２区東南部のSD７040外東側において、完形の軒丸瓦や丸瓦などが東方向に並んでいるようにみえる箇所がある（PL.16・17）。

２－12区西壁面・２－17区西壁面によれば、SD７055が金堂基壇地下版築土より新しく掘削されているから、溝の掘削時期は金堂基壇構築後である。また１－２区東壁面・２－18区西壁面、２－17区西壁面ではSD７040が第２整地土層によって最終的に埋められたことが確認されている。さらに１－２区の東西調査区内においてSD７040が塔掘込地業版築土で覆われているのが確認されている（１－２区南壁面（Fig.28））。これらの土層の重複関係からSD７040・7050・7055は、金堂基壇土の造成後に掘られ、第２整地土で埋め立てられたことが確定する。（深澤）

SD７040から、瓦が多量に出土した（Fig.50～64、PL.38～44）。これらの瓦は、溝と土層の重複関係から、金堂で所用するべく調達された瓦であった蓋然性が極めて高い。

１は、３Bb。丸瓦と瓦当の接合部の構造が良好にみられる。接合方法は片枘形ａ（第Ⅲ章第１節、Fig.158参照）。内面接合粘土はほぼ全て残り（Fig.51－１）、ヨコ方向のナデツケがある。内面接合粘土と丸瓦の接する部分には、布目圧痕の転写をわずかにみとめる。瓦当裏面は中央にかけてやや高くふくらみ、調整は、ヨコナデを中心とした不定方向ナデで、さらに下半部周縁に沿ってナデ。瓦当裏面の筒部凹面に沿う部分が、一部溝状にくぼむ。瓦当側面の調整はナデ。外縁上に笵端痕を残す。

２は、３C。丸瓦も含めて完形。丸瓦全長38.2cm、筒部厚さ1.5～1.8cm、玉縁長5.0cm、幅20.2cm、厚さ1.1～2.1cm。焼成は軟質で全体的に摩滅。外縁上に笵端痕はない。狭端から約5.1cmの位置に径0.9cmの釘穴をあける。凸面から凹面方向の焼成前穿孔である。筒部凸面の調整は摩滅・剝離により不明。凹面は布目圧痕をタテ方向にナデ消す。玉縁凹面の調整は摩滅により不明。玉縁は筒部と別作りで、玉縁基部凹面の粘土を筒部狭端へナデつけた後、ナデツケ部分の一部にヨコ方向のヘラケズリを施す（Fig.51－２）。側面は分割破面と分割截面をともにヘラケズリするが、分割截面と破面の境はわずかに段差、もしくは線となって残る。凹面側縁には幅５mmほどの面取りあり。

３は、206Ａ。全長36.7cm。直線顎。焼成は軟質で全体的に摩滅し、瓦当面の調整は不明瞭である。唐草文中央にピン穴あり。文様の輪郭にケガキ線はみとめない。凹面、凸面、側面ともに狭端に向けてタテ方向のヘラケズリ。凹面は瓦当付近をさらにヨコナデ。凸面は瓦当付近をさらにヨコ方向のヘラケ

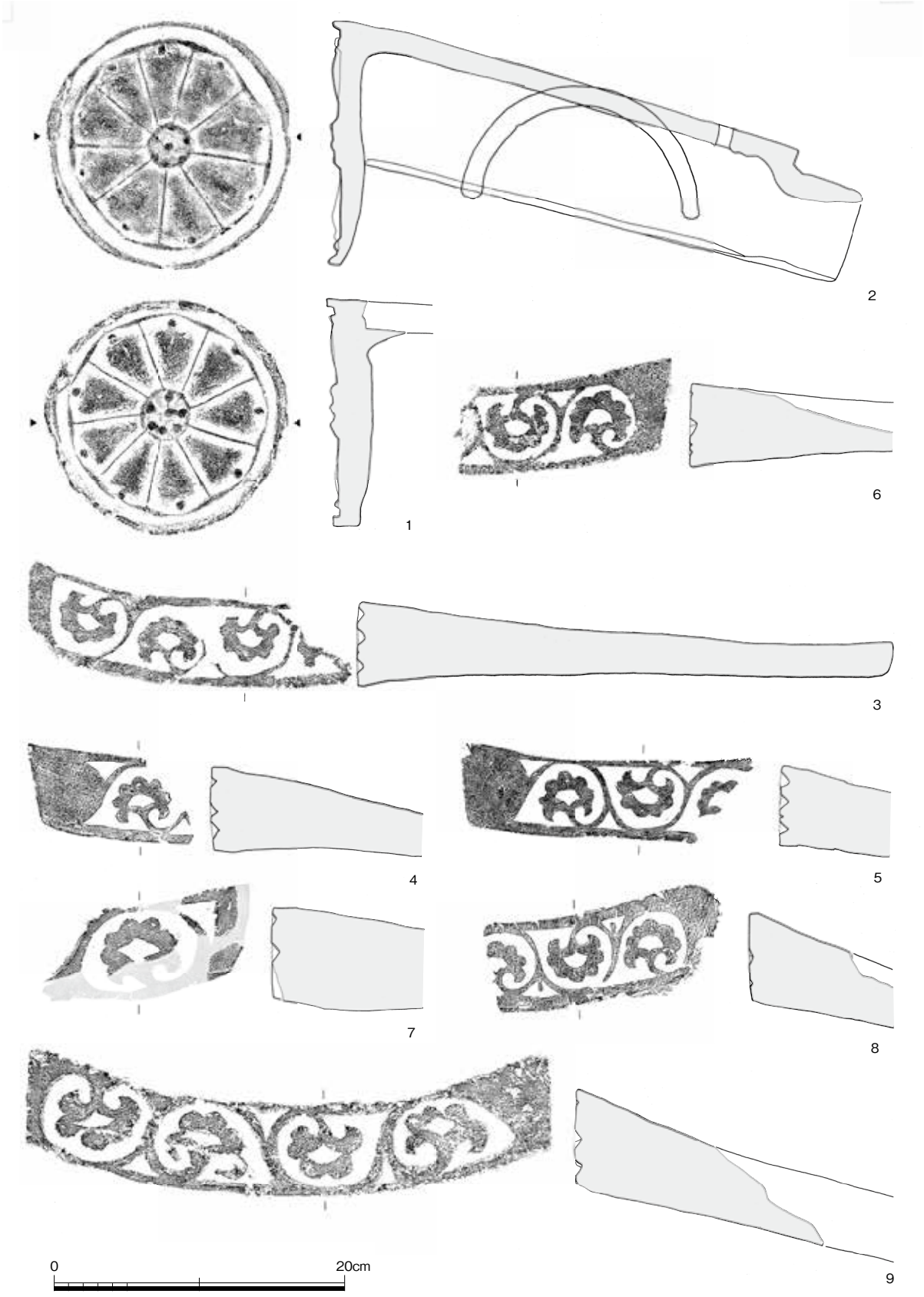


Fig. 50　SD 7040　軒丸瓦・軒平瓦（1：4）

1

2

4

8

Fig. 51　SD 7040　軒丸瓦・軒平瓦細部

ズリ後、ナデ。

4・5は、206C。4は直線顎。瓦当面をヨコナデ後に施文。唐草文中央にピン穴、文様の輪郭にケガキ線あり。粘土板合わせ目がみられる（S型〔用語は佐原1972に準拠〕、Fig.51－4、瓦当が下）。凹面はタテ方向のヘラケズリ後、ヨコナデ。とくに、瓦当から6cmほどは丁寧にヨコナデ。布目圧痕はみられない。凸面はほぼタテ方向のヘラケズリのみ。側面は狭端に向けてタテ方向のヘラケズリ。5は直線顎。瓦当面はヨコナデ後に施文。唐草文中央にピン穴、文様の輪郭にケガキ線あり。凹面には枠板痕あり（幅4cm）。凹面、凸面は狭端に向けてタテ方向のヘラケズリ後、瓦当付近をヨコナデ。側面は狭端に向けてタテ方向のヘラケズリ。

6は、206D。直線顎。焼成は軟質で、全体的に摩滅。瓦当面の調整は不明瞭。唐草文中央にピン穴あり。文様の輪郭にかすかにケガキ線が残る。粘土板合わせ目がみられる（Z型）。凸面・側面はタテ方向のヘラケズリ。凹面は摩滅により不明瞭だが、瓦当付近はヨコナデか。

7は、206か207。直線顎。瓦当面は施文前にヨコナデ。唐草文中央にピン穴はあるが、文様の輪郭にケガキ線はみとめられない。凹面はタテ方向のヘラケズリ後、粗くヨコナデ。布目圧痕は残らない。凸面はタテ方向のヘラケズリ後、両側面からそれぞれ幅4cmほど残してヨコナデ。側面は狭端に向けてタテ方向のヘラケズリ。

8は、207A。直線顎。瓦当面はヨコナデ後に施文。唐草文中央にピン穴あり。文様の輪郭にはケガキ線があるが、蕾の表現はフリーハンドか。右隅の三角窓はケガキ線のみで彫り残される（Fig.51－8）。凹面は欠損するが、少なくとも瓦当付近はヨコナデ。凹面側縁は1.2～2cmほど面取り。凸面はヨコ方向のヘラケズリ。側面は狭端に向けてタテ方向のヘラケズリ。

9は、210A。直線顎。焼成は軟質で全体に摩滅。瓦当面の調整は不明瞭。ピン穴、ケガキ線はない。凹面、凸面、側面はいずれも狭端に向けてタテ方向のヘラケズリで調整する。凹面は瓦当付近をさらにヨコ方向のヘラケズリで調整する。凸面は瓦当付近をさらにヨコナデか。凹面側縁は幅5mmほど面取り。

このほか、瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片が、9点出土している。（中川）

次に、丸瓦・平瓦を報告する。丸瓦の総出土量は30.4kgである。諸特徴から、すべて『至宝』における2IB型式に相当し、飛鳥前・中期に属する。

丸瓦の属性は模骨、布、粘土素材、タタキ、当て具、筒部凸面調整、玉縁接合、玉縁凹凸面調整、分割、筒部・玉縁の側面・側縁調整、胎土、焼成、色調に注目した。全て玉縁式で行基式はない。回転ヨコナデの方向は、玉縁側からみた状況を示した。

10は、筒部凸面不定方向のナデ。狭端部から玉縁凸面にかけて時計回りの回転ヨコナデ。広端面はヘラケズリで調整する。側面は分割後にヘラケズリで調整するが広端側に破面が残る。凹面側縁は面取りし部分的にタテナデ（Fig.54－10－1）、凹面広端縁も軽く面取りする。筒部凹面は未調整で糸切り痕跡や粘土板合わせ目が残る（Z型）。凹面玉縁接合部には布目の上からの指頭圧痕がある。玉縁凹面はヨコナデ後、基部を幅広くヘラケズリする（Fig.54－10－2）。

11は、筒部凸面が不定方向のナデ、側縁沿いに板状工具による無文タタキの痕跡がある（Fig.54－11）。玉縁凸面は回転ヨコナデ。広端面はヘラケズリで調整する。側面は分割後にヘラケズリで調整する。筒部凹面側縁を面取り後に凹面広端縁を面取り。凹面は未調整で糸切り痕跡、粘土板合わせ目が残る（Z型）。凹面玉縁接合部には部分的に帯状の窪みがある。玉縁凹面はヨコナデ後、基部、側縁の順でヘラケズリ調整する。

12は、筒部凸面が不定方向のナデ。狭端部から玉縁部凸面にかけては回転ヨコナデを施すが、方向は不明である。広端部は欠損している。側面は分割後にヘラケズリで調整し、筒部凹面側縁は面取りをする。凹面は未調整で糸切り痕跡が残る。玉縁凹面はヨコナデ後、基部と側縁をヘラケズリで調整する。

13は、筒部凸面が摩滅しているが、残存部にはナデ調整が確認できる。玉縁部は欠損しており、広端面も調整不明である。側面はヘラケズリで調整する。凹面側縁と凹面広端縁は面取り、凹面は未調整で糸切り痕跡が残る。凹面玉縁接合部は帯状に窪み、玉縁凹面基部はヘラケズリで調整する。

14は、筒部凸面が不定方向のナデ。玉縁、狭端部は欠損している。側面、広端面はヘラケズリで調整し、凹面側縁と凹面広端縁は面取りをする。凹面は部分的にナデ調整を施す。

15は、筒部凸面が不定方向のナデだが一部強くタテナデ調整する。玉縁、狭端部は欠損している。広端面はヘラケズリで調整し、筒部側面は分割後に破面をヘラケズリで調整する。凹面側縁と凹面広端縁は面取りがなされていて、凹面は未調整である。

16は、筒部凸面が不定方向のナデ。狭端部から玉縁凸面にかけては時計回りの回転ヨコナデを施す。狭端側に凸面側からあけた釘穴がある。玉縁凸面には明確な凹凸がある。筒部側面は分割後にヘラケズリで調整し、凹面側縁は面取りをしている。筒部凹面は未調整で粘土板合わせ目が残る（Z型）。凹面玉縁接合部には断続的な窪みがあり、玉縁凹面はヨコナデ後に基部と側縁を幅広くヘラケズリで調整する。

17は、筒部凸面がヨコナデ主体で一部不定方向のナデ。狭端部から玉縁凸面にかけては時計回りの回転ヨコナデで調整する。玉縁凸面には明確な凹凸がある。側面は分割後にヘラケズリ、ナデで調整する。筒部凹面側縁は面取り、凹面玉縁接合部には帯状の窪みがある（Fig.54－17）。凹面は未調整である。玉縁凹面はヨコナデ後に側縁、基部の順にヘラケズリで調整する。

18は、筒部凸面が不定方向のナデで、工具の痕跡が残る。狭端部から玉縁凸面にかけては時計回り

Fig. 52　SD 7040　丸瓦 1（1：5）

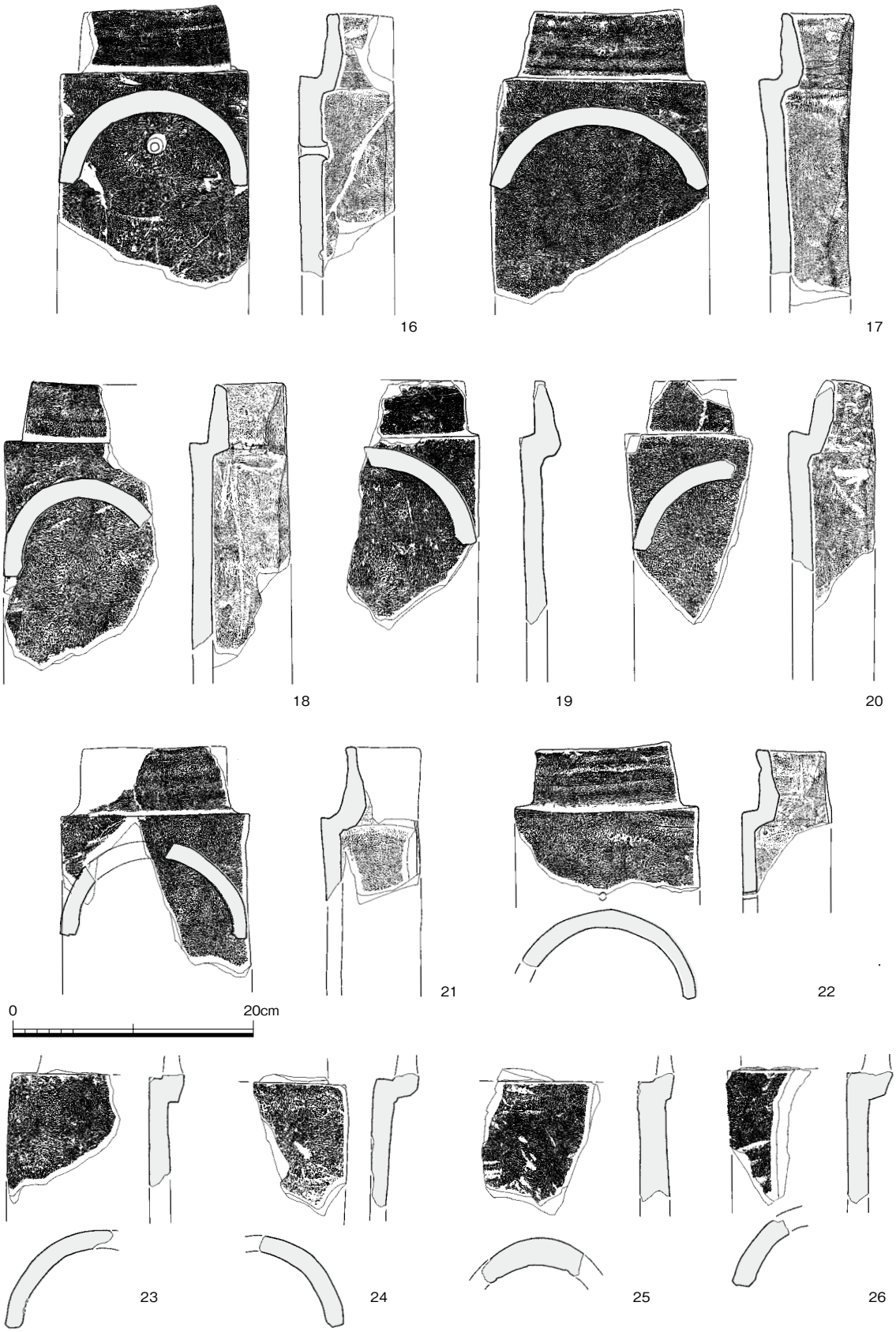


Fig. 53　SD 7040　丸瓦２（1：5）

Fig. 54　SD 7040　丸瓦細部

の回転ヨコナデで調整する。側面はヘラケズリ、筒部凹面側縁は面取り、凹面は未調整である。玉縁凹面はヨコナデ後、凹面側縁のみを幅広くヘラケズリ、基部は未調整である（Fig. 54 － 18）。

19 は、筒部凸面が不定方向のナデ。凸面狭端部から玉縁にかけて回転ヨコナデで調整する。側面はヘラケズリ、筒部凹面側縁は面取り、凹面は未調整である。玉縁凹面はヨコナデ、側縁と基部はヘラケズリで調整する。

20 は、筒部凸面が摩滅し調整不明である。側面はヘラケズリ、凹面側縁は面取り、筒部凹面は未調整、

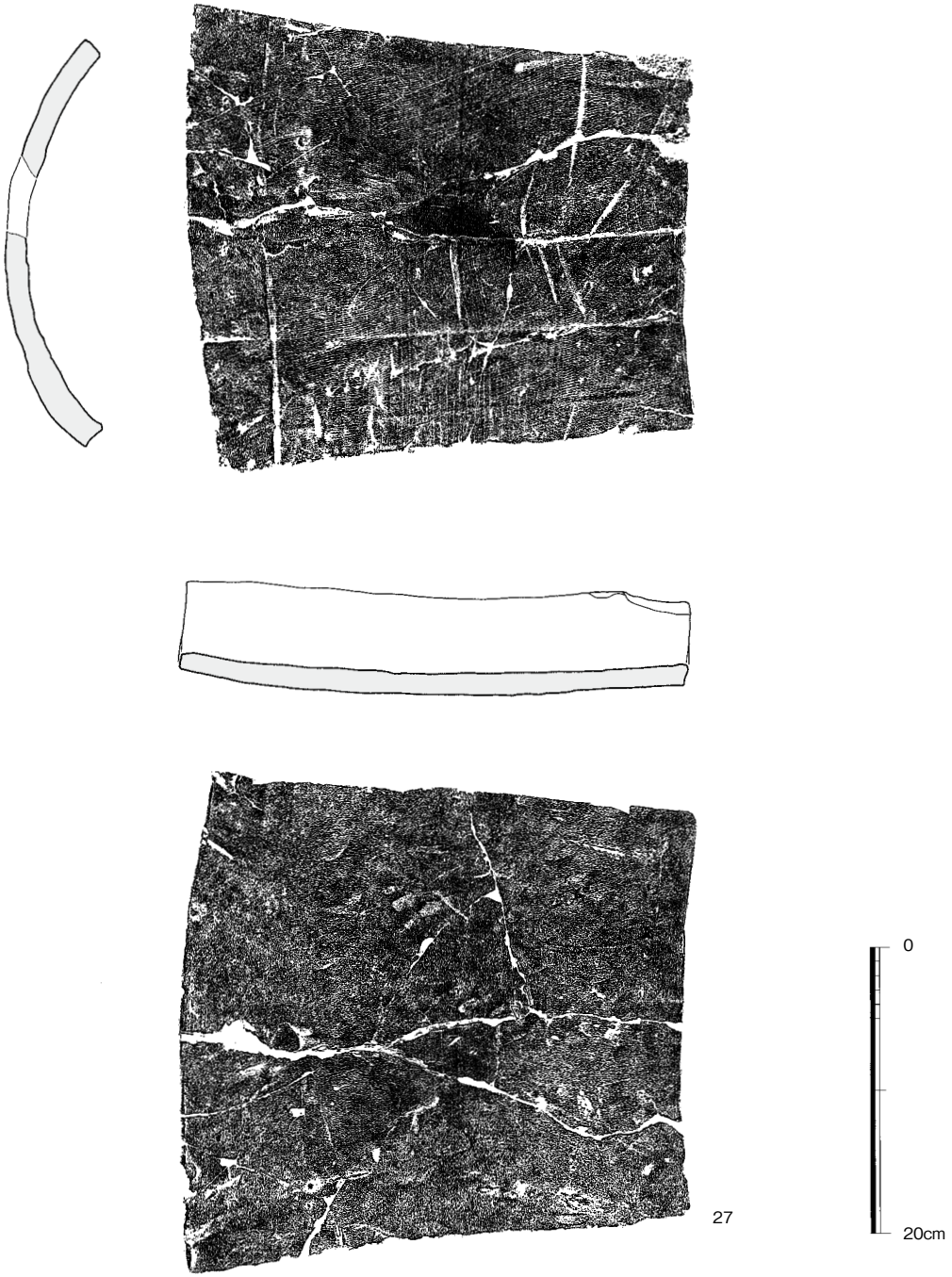


Fig. 55　SD 7040　平瓦１（1：5）

玉縁凹面側縁と基部はヘラケズリで調整する。

21は、筒部凸面がヨコナデ。狭端部から玉縁凸面にかけては時計回りの回転ヨコナデで調整する。側面は分割後にヘラケズリ、筒部側縁は面取り、凹面は未調整である。凹面玉縁接合部には帯状の窪みがある。玉縁凹面はヨコナデ後、基部と側縁をヘラケズリで調整する。

22は、凸面狭端部から玉縁にかけて回転ヨコナデ。玉縁凸面には明確な凹凸がある。側面は分割後ケズリ、筒部凹面側縁は面取り、凹面は未調整である。玉縁凹面はヨコナデ後に基部と側縁を幅広くヘ

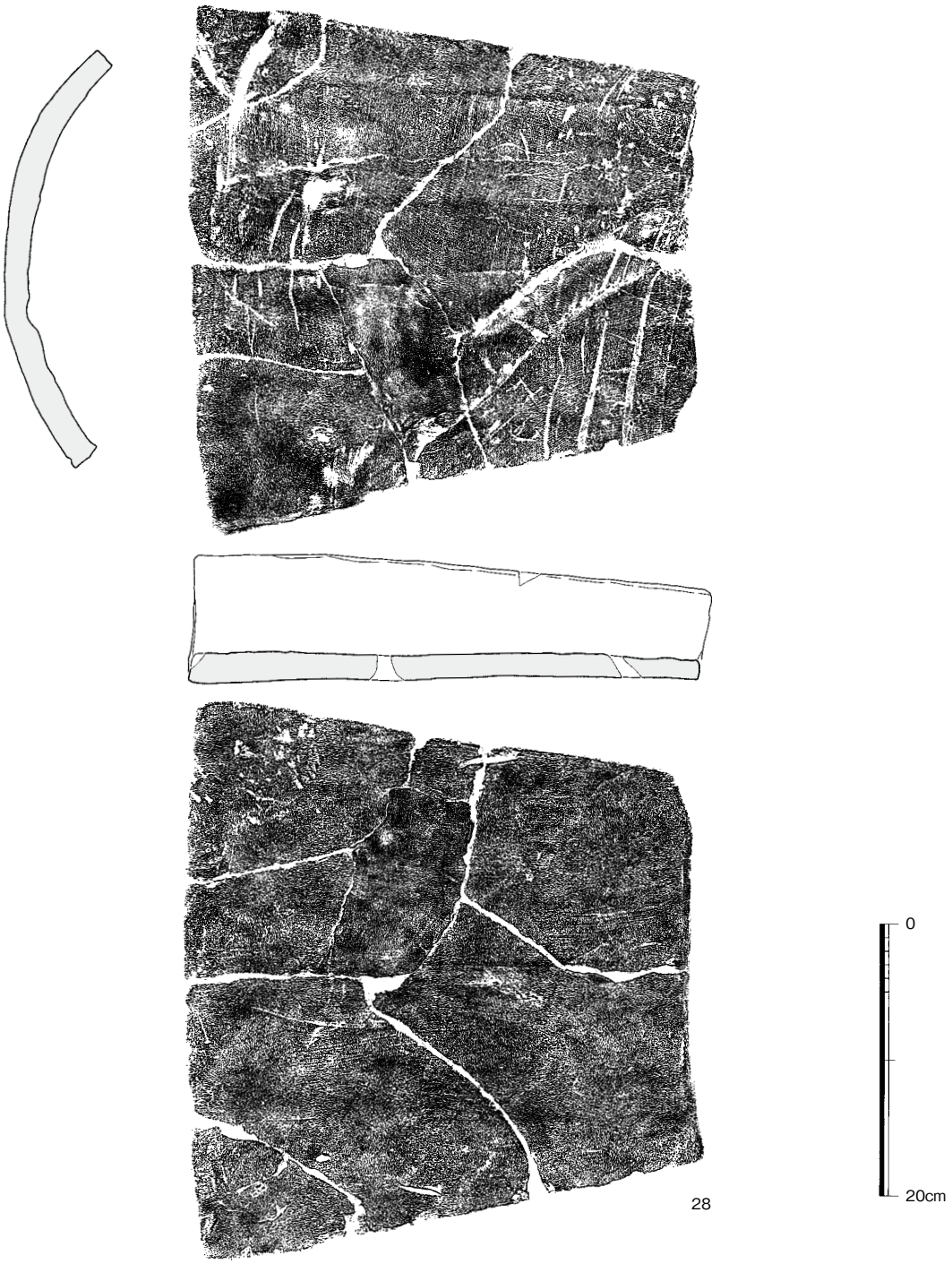


Fig. 56　SD 7040　平瓦２（1：5）

ラケズリ調整する。筒部の破断面に釘穴の痕跡が残る（Fig. 54 − 22）。

23 ～ 26 は、凸面が摩滅し調整は不明である。側面はヘラケズリ、玉縁凹面基部も幅広くヘラケズリで調整する。

平瓦の総出土量は 98.5kg である。粘土板の接合は、狭端側からみた状況を示した。

粘土紐の痕跡は一切みられず、凹面には糸切り痕跡と粘土板合わせ目、側面に分割痕跡があることからすべて粘土板桶巻作りである。『至宝』の１IA 型式に属する瓦の凹面の調整には違いがあり、１類：

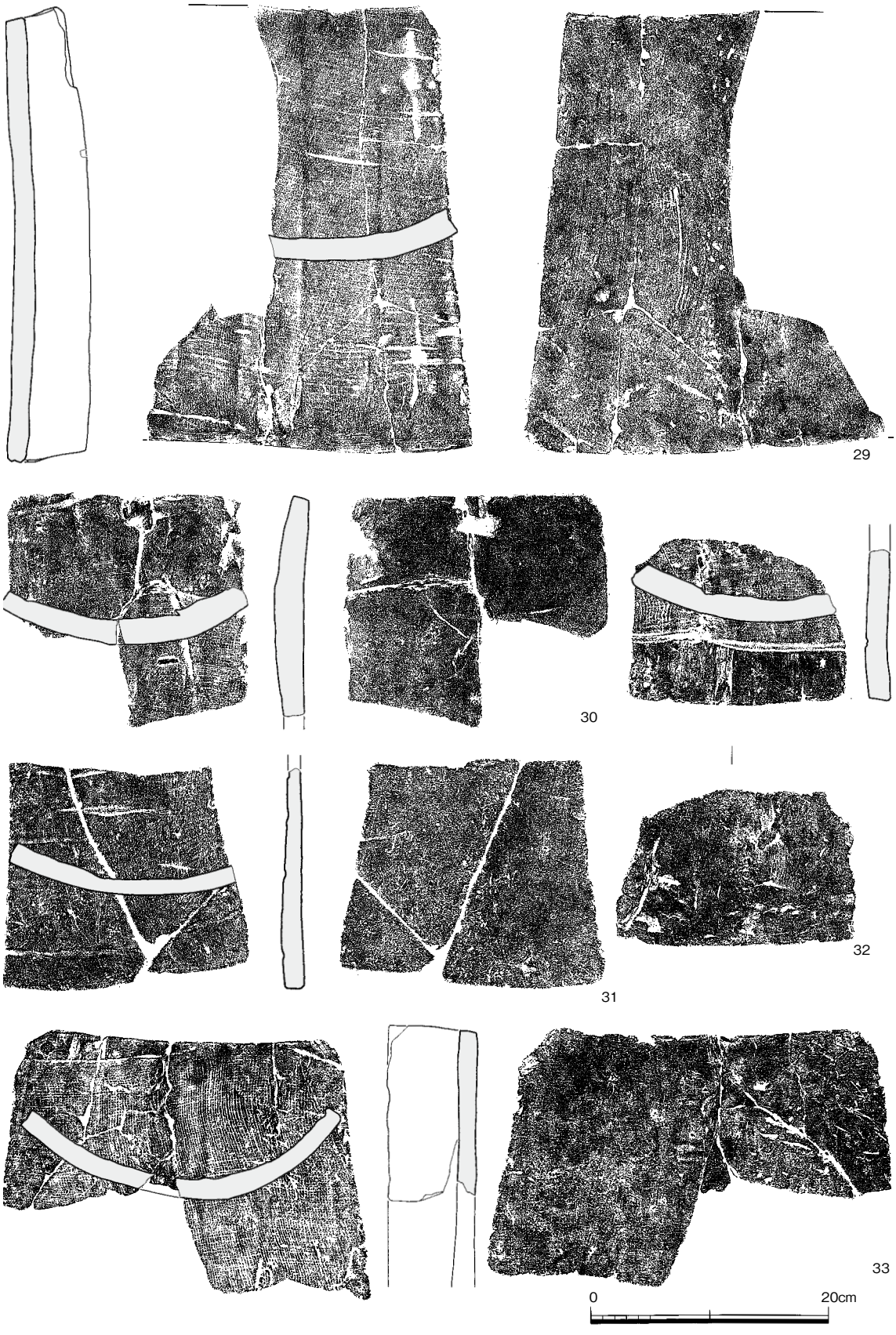


Fig. 57　SD 7040　平瓦 3（1：5）

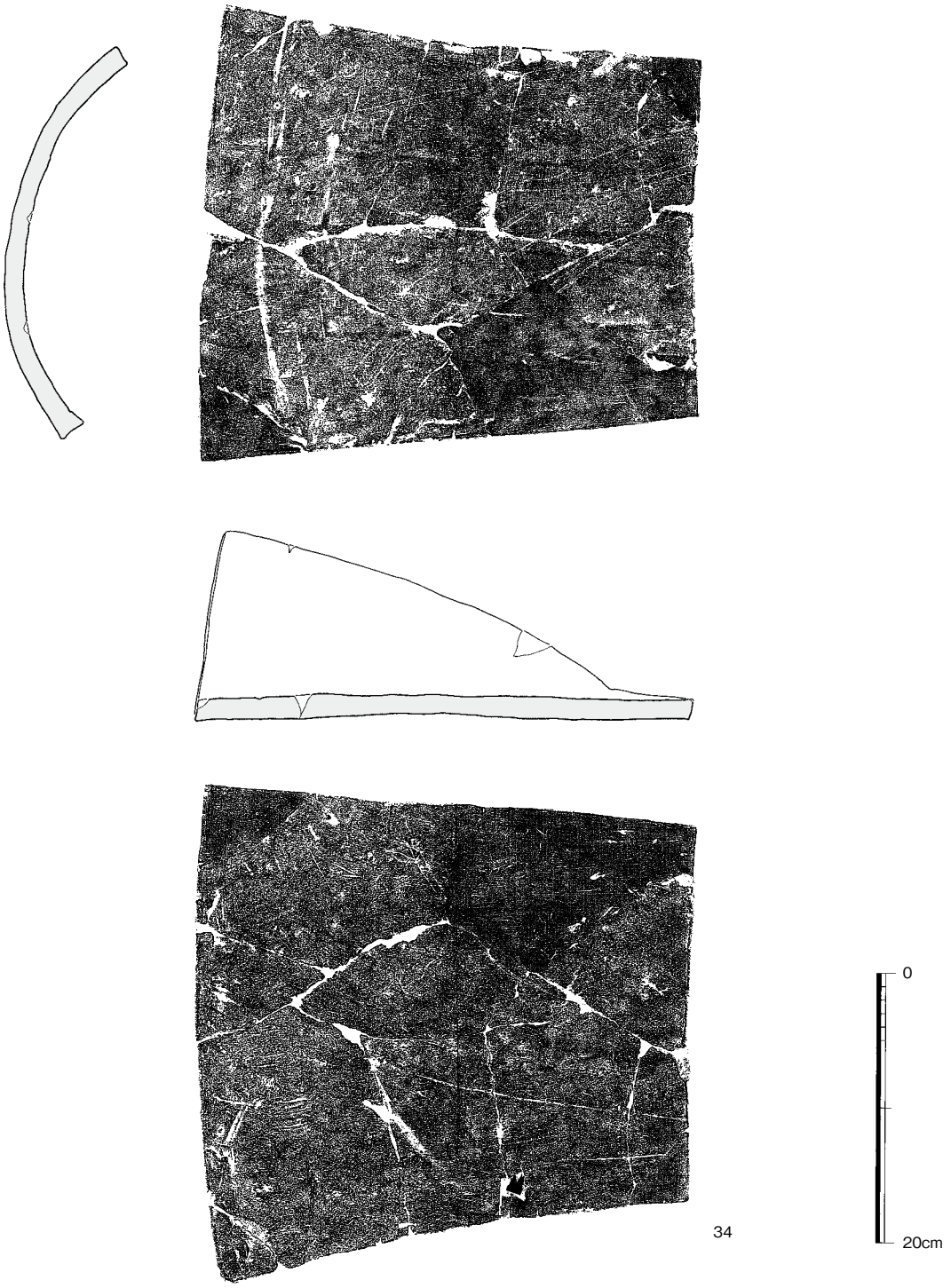


Fig. 58　SD 7040　平瓦４（1：5）

未調整の例、２類：一部タテナデをほどこす例、３類：強いタテナデをおこなう例の３つに分類できる。以下この順にしたがって記述する。すべて飛鳥前期に属する。

１ＩＡ型式１類　27は、凸面タテナデ。狭端縁は幅１cmほど、広端縁は幅２cmほどヨコナデする。広端面、狭端面はヨコナデをおこなう。側面は分割後未調整である。凹面は未調整で、枠板痕跡、粘土板合わせ目がみえる（Ｚ型）。狭端縁は幅１cmほどヨコナデ、広端から５cmのところに布端が残り、

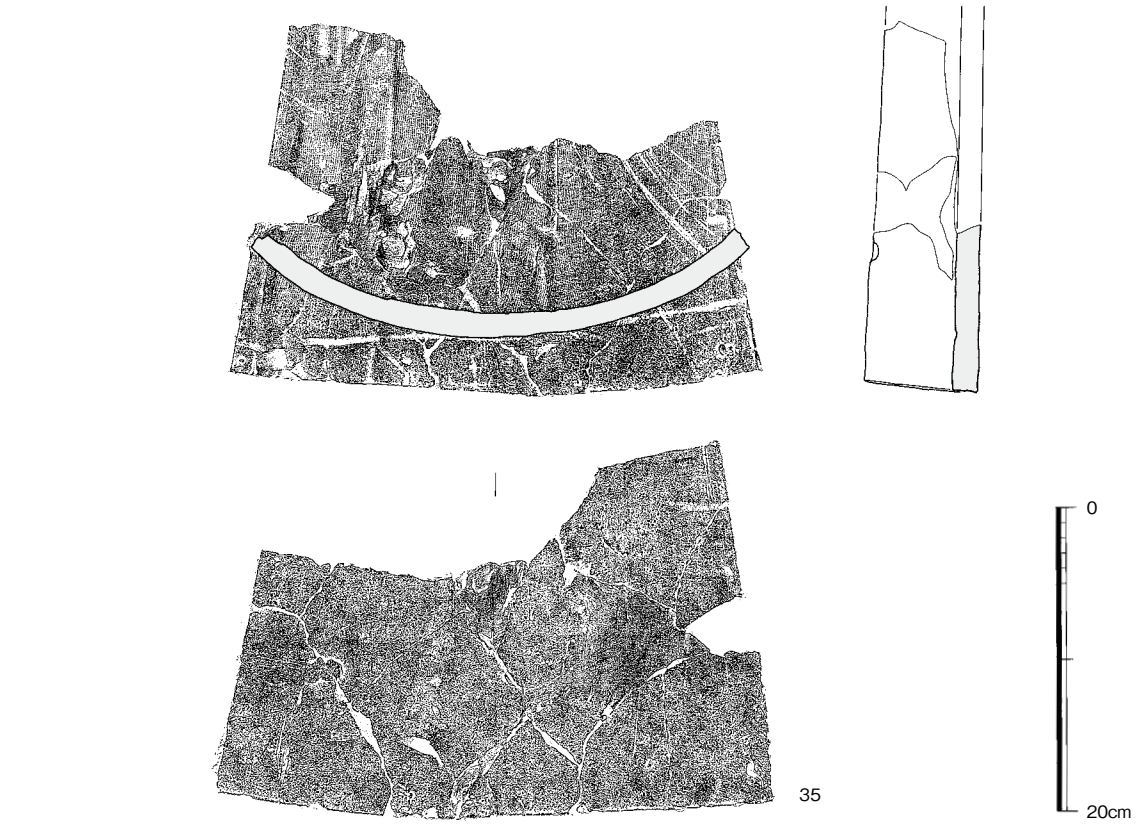


Fig. 59　SD 7040　平瓦５（1：５）

凹面側縁には分割界点がある。

28は、凸面タテナデ。狭端縁を幅３cmほどヨコナデで調整する。狭端面、広端面はヘラケズリで調整する。側面は分割後未調整である。凹面は枠板痕跡が残り、広端側隅を一部ヘラケズリで調整する。

29は、凸面がタテナデ。狭端沿いが幅２cmほどヨコナデ、広端面はヘラケズリ、狭端面はヘラケズリ後ヨコナデ、側面は分割後未調整である（Fig. 64 － 29）。凹面には枠板痕跡があり、広端沿いに布

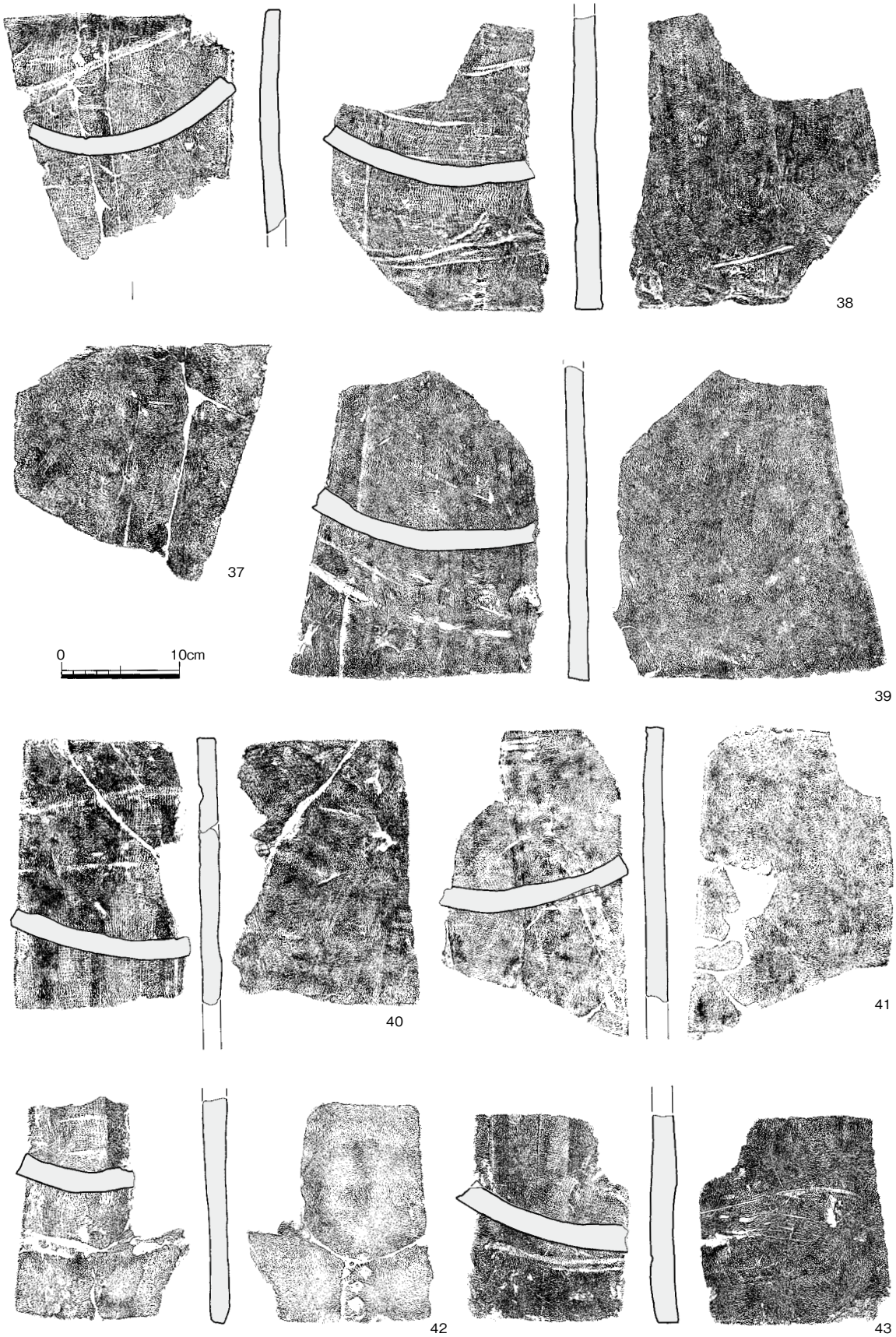


Fig. 60　SD 7040　平瓦 6（1：5）

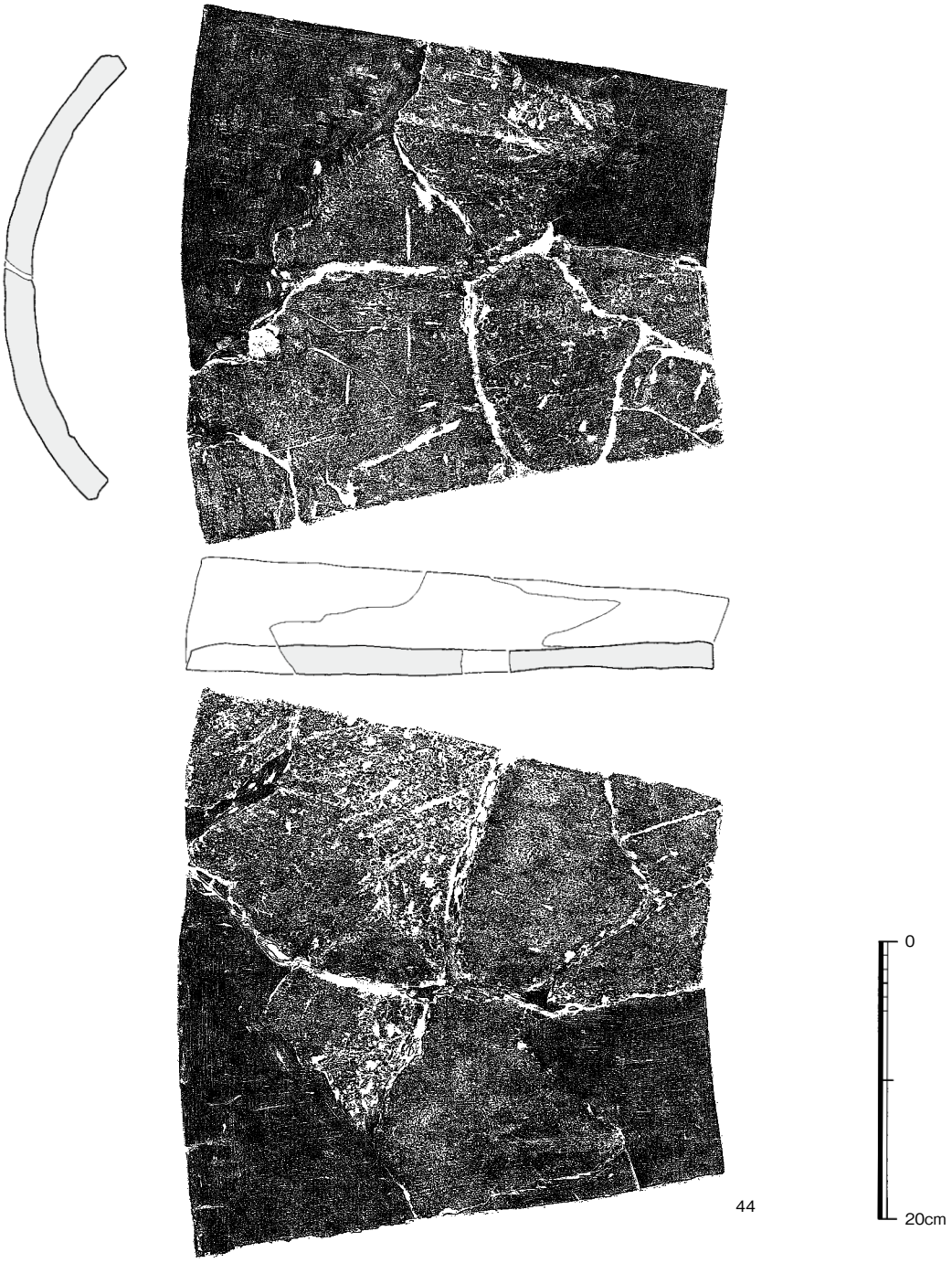


Fig. 61　SD 7040　平瓦７（1：5）

端が残る。広端縁は幅１cmほどヨコナデを施す。凹面右側縁沿いに分割界点があり、分割は界点からずれている。

30は、凸面タテナデ。側面が分割後未調整だが、切り込みは浅い。狭端面はヘラケズリで調整し、凹面には枠板痕跡と粘土板合わせ目が残る（Z型）。狭端側の布目を部分的にナデ消している。

31は、凸面タテナデ。側面が分割後未調整、広端面が調整不明である。凹面には広端より３cmのところに布端痕跡があり、10cmのところに点状の枠板綴紐痕跡がみられる。

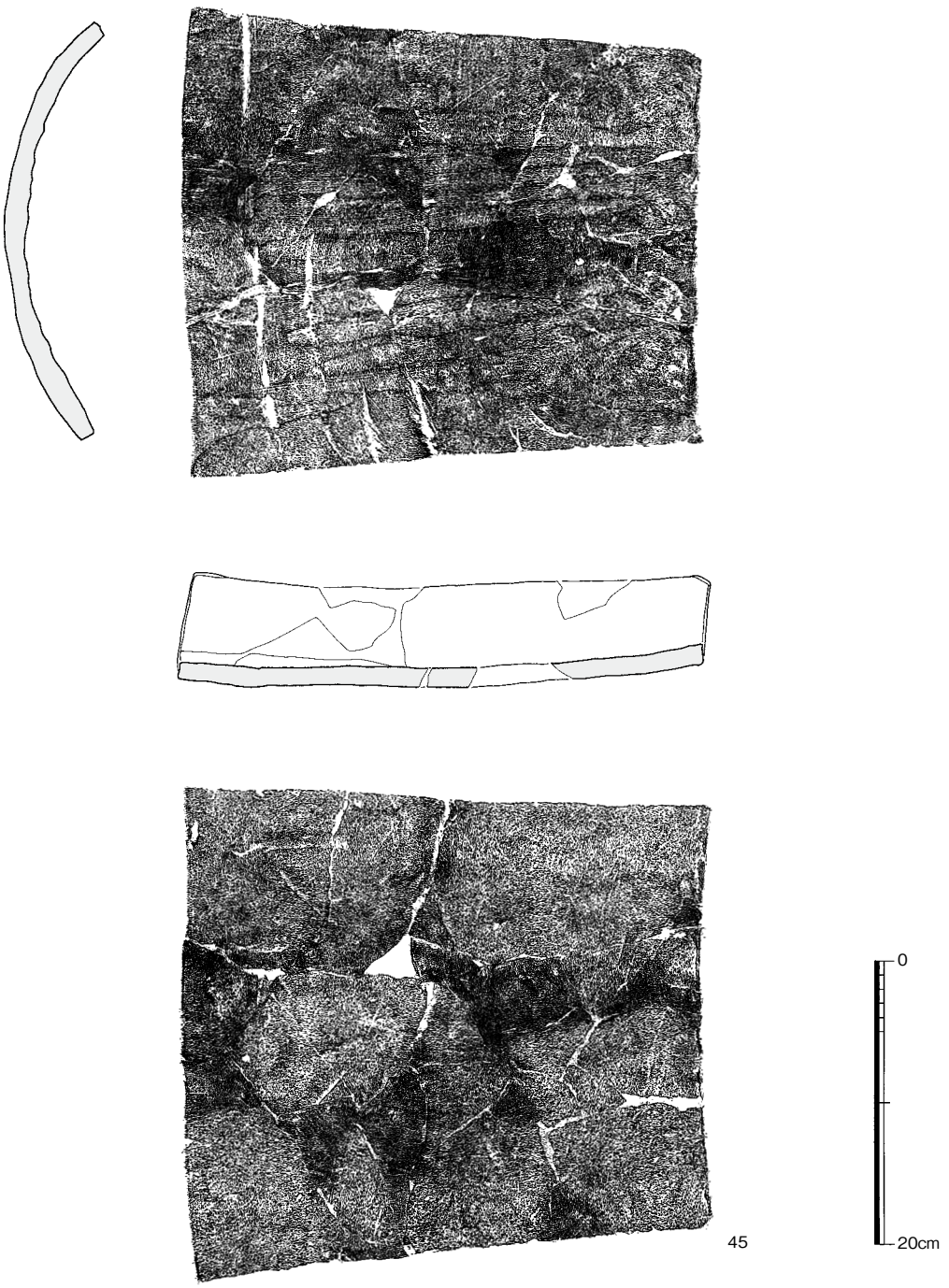


Fig.62　SD 7040　平瓦８（1：5）

32は、 凸面タテナデ。側面が分割後未調整、 広端面がヘラケズリ調整である。凹面には布綴じ目、枠板、布端痕跡が残る。

33は、 凸面タテナデ。狭端面が未調整、 側面が分割後未調整である。凹面には布端、粘土板合わせ目（Ｓ型）、側縁には分割界点が残る。

37は、凸面タテナデ。狭端沿いを幅５cmほどヨコナデする。狭端面はヘラケズリ、側面は分割後未調整。凹面狭端沿いも幅１cmほどヨコナデする。

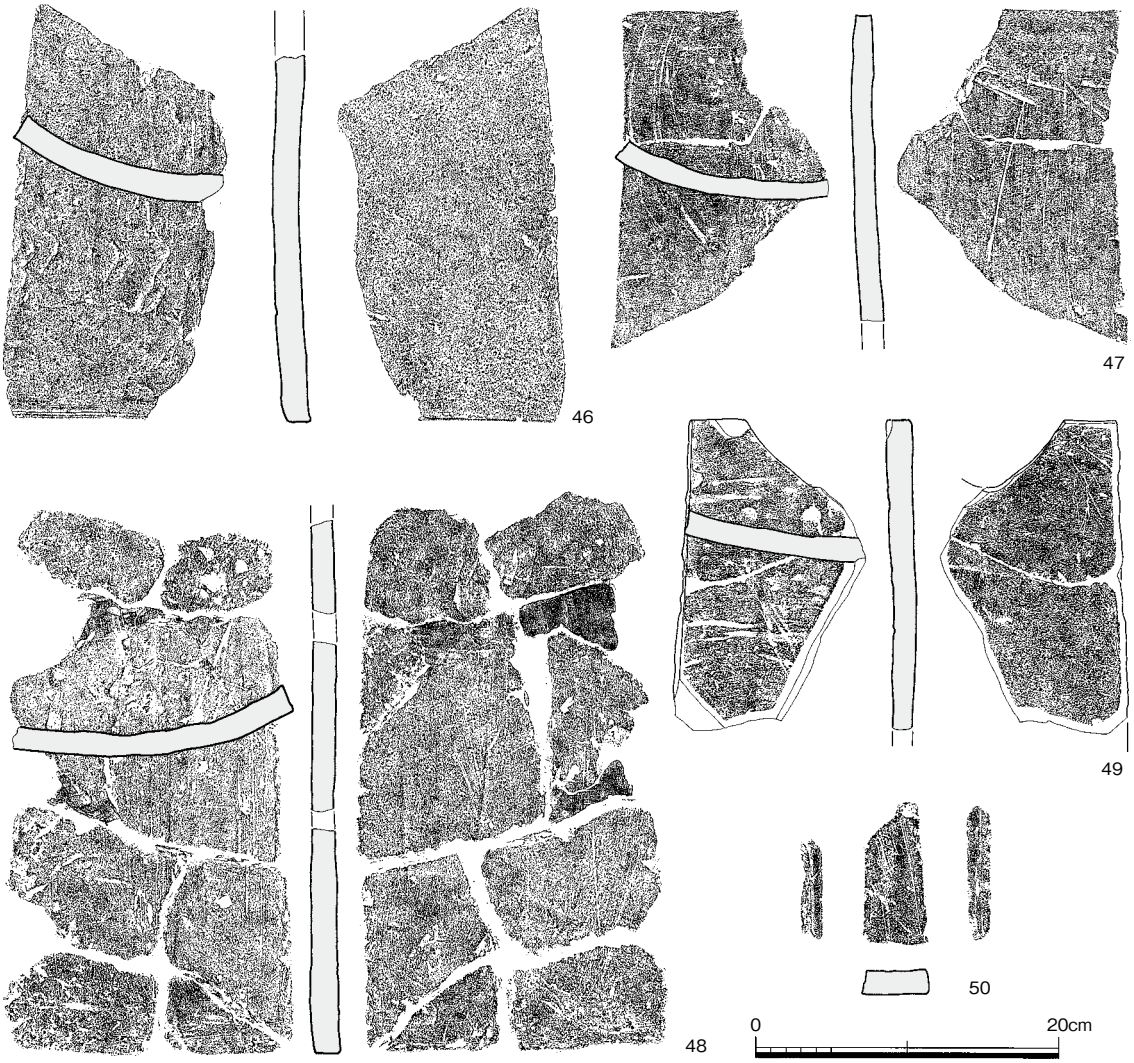


Fig. 63　SD 7040　平瓦９・用途不明品（1：5）

１ＩＡ型式２類　34は、凸面がタテナデ。広端沿いは幅２cmほどヨコナデを施す。側面は分割後未調整で（Fig. 64 − 34）、凹面側縁に分割界点が残る。広端面はヨコナデ、狭端面は未調整である。凹面は部分的にタテナデし、凹面広端から幅２cmほどはヨコナデを施す。広端から４～６cmのところに布端がみられる。全体に焼けひずみが激しい。

35は、凸面がタテナデ。広端面はヘラケズリ、側面は分割後未調整である。凹面側縁には分割界点が残る。凹面は部分的にタテナデ調整で、枠板痕跡、布端がみられる。広端縁より10cmほどのところに点状の枠板綴紐痕がある。

36は、凸面タテナデ。狭端縁は幅１cmほどヨコナデ、狭端面はヨコナデ、広端面はヘラケズリ調整である。側面は分割後未調整で、凹面側縁に分割界点がある。凹面は部分的にタテナデし、狭端縁は幅１cmほどヨコナデ。狭端側には布端が残る。この瓦は、当初は布端のある方が広端であったが、分割後に広端の幅を切り詰めるため、新たに切り込みを入れて割り取り、布端のある側を狭端として使用したと考えられる。

38は、凸面タテナデ。側面が分割後未調整である。広端面はヘラケズリで調整し、凹面には布端、

枠板痕跡がある。

39は、凸面タテナデ。広端面がナデ調整、側面が分割後未調整である。凹面には部分的に工具によるナデがあり、広端縁まで達する。広端縁には幅1cmほどのヨコナデがある。

40は、凸面タテナデ。狭端面はヨコナデ、側面が分割後未調整である。凹面側縁に分割界点がある。凹面は部分的にタテナデ、狭端縁から5～6cmのところに帯状の窪みがあり、これより狭端まで布目をナデ消している。

41は、凸面タテナデ。狭端面はヨコナデ、側面は分割後未調整で、凹面側縁に分割界点がある。凹面は部分的にタテナデ、狭端縁はわずかにヨコナデする。破面に、粘土板合わせ目（Z型）が残る。

42は、凸面タテナデ。広端縁を幅2cmほどヨコナデし、側縁は分割後未調整である。凹面は部分的なタテナデで、布端が残る。

43は、凸面タテナデ。広端面がヘラケズリ、側面は分割後未調整である。凹面は部分的にタテナデを施し、布端が残る。

29

34

45

Fig.64　SD7040　平瓦細部

1ⅠA型式3類　44は、凸面タテナデ。狭端面、広端面はナデ、側面は分割後未調整である。凹面は部分的に強くタテナデする。凹面狭端縁は幅2cmほどヨコナデを施し、凹面広端縁沿いは幅4cmほどのヨコ方向のヘラケズリで調整する。

47は、凸面タテナデ。狭端縁は幅2cmほどヨコナデ、狭端面もヨコナデをする。側面は分割後未調整であり、凹面側縁に分割界点が残る。凹面は部分的に強くタテナデする。

48は、凸面タテナデ。凸面広端縁は幅3cmほどヨコナデ、広端面はヨコナデ調整し、側面は分割後未調整である。凹面は大部分を強くタテナデする。凹面広端沿いは幅3cmほどヨコ方向のヘラケズリで調整する。

1ⅠBb型式　45は、凸面タテナデ。狭端側にわずかに無文のタタキ工具痕跡が残る。狭端面と広端面から凸面広端縁にかけてはヨコナデを施す。側面は片面が分割後未調整、もう一方の面はケズリ調整し破面を残さない（Fig.64－45）。凹面広端縁はヨコナデ後に凹面を強くタテナデし、右側縁沿いはヘラケズリで調整する。広端側には布端を残す。飛鳥前期に属する。

46は、凸面タテナデ。側面は分割後、部分的にヘラケズリで調整する。広端面から凹面広端縁にかけてヨコナデを施し、凹面はタテ方向のヘラケズリで調整、一部には布目が残存する。

道具瓦は2点出土した。49は、残片。1ＩＡの平瓦を加工したもの。凸面はタテナデ、端部に不定形の刳りがあり、凹面は布目が残る。飛鳥前期。

50は、最大幅4.6cmの小型品で、一方に向かって幅が減少する。両端は欠損しているため長さは不明。両側面は平瓦と同様、焼成前に切り込みを入れ分割後、未調整。凸面はナデ、凹面は部分的にタテナデ。残長9.4cm、厚さ1.6cm。1ＩＡの平瓦を利用して作成しており、飛鳥前期に属する。（今井）

第2整地土（Fig.67）

第2整地土は、基本的に黄褐色整地土と名付けられた土層で、調査区のかなり広い範囲に分布する。その範囲は、削平の著しい調査区南端部を除く南北50m、東西30mの範囲であって、金堂を中心とする伽藍中枢域にあり、さらに金堂の北方にも第2整地土が分布する点が注目される。第2整地土の存在が確認できないのは、東側で1－8～15区、西側で2－1～4区の調査区である。なお、第2整地土は瓦を包含する。（深澤）

ラベル名「TS51黄褐色整地土」で丸瓦・平瓦を取り上げているので、次に報告する（Fig.65）。

丸瓦の合計は1.0kgである。1は、筒部凸面不定方向のナデ。狭端沿いは幅2cmほど回転ヨコナデ

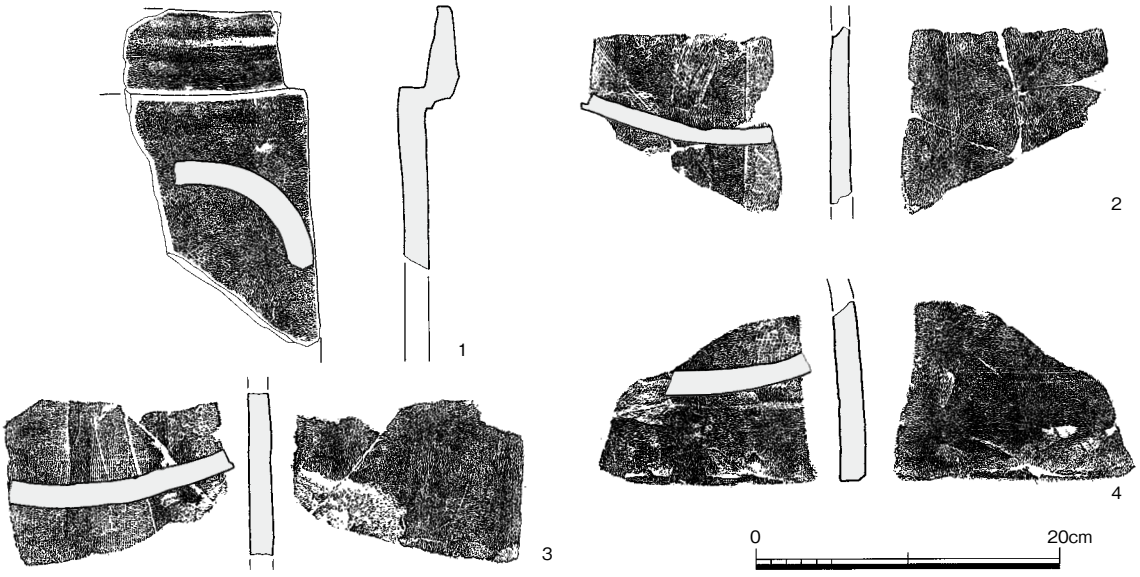


Fig.65　第2整地土（TS51黄褐色整地土）　丸瓦・平瓦（1：5）

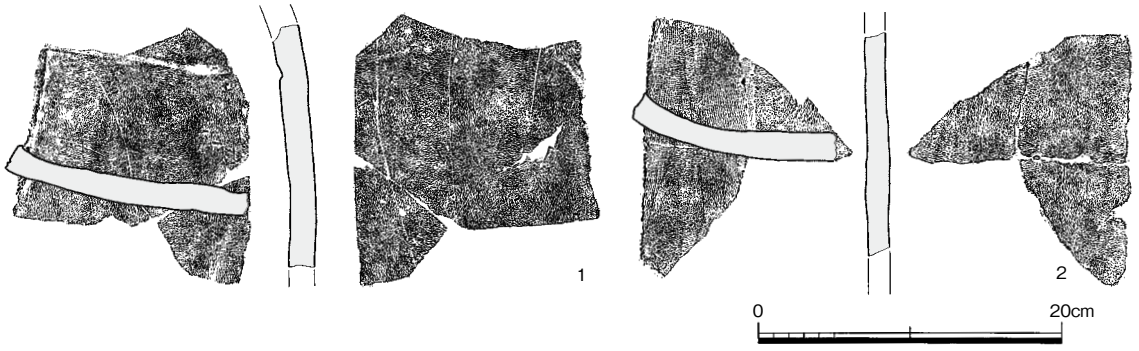


Fig.66　TS51地山面上　平瓦（1：5）

を施すが、回転方向は不明である。肩から玉縁凸面にかけては時計回りの回転ヨコナデを施す。側面はヘラケズリ調整で、凹面側縁は２度面取りをする。筒部凹面は未調整、玉縁凹面はヨコナデ後、側縁と基部を幅広くヘラケズリ調整する。2IB、飛鳥前・中期に属する。

平瓦の合計は３.３kgである。２は、凸面タテナデ。端部は欠損しており、側面は分割後未調整である。

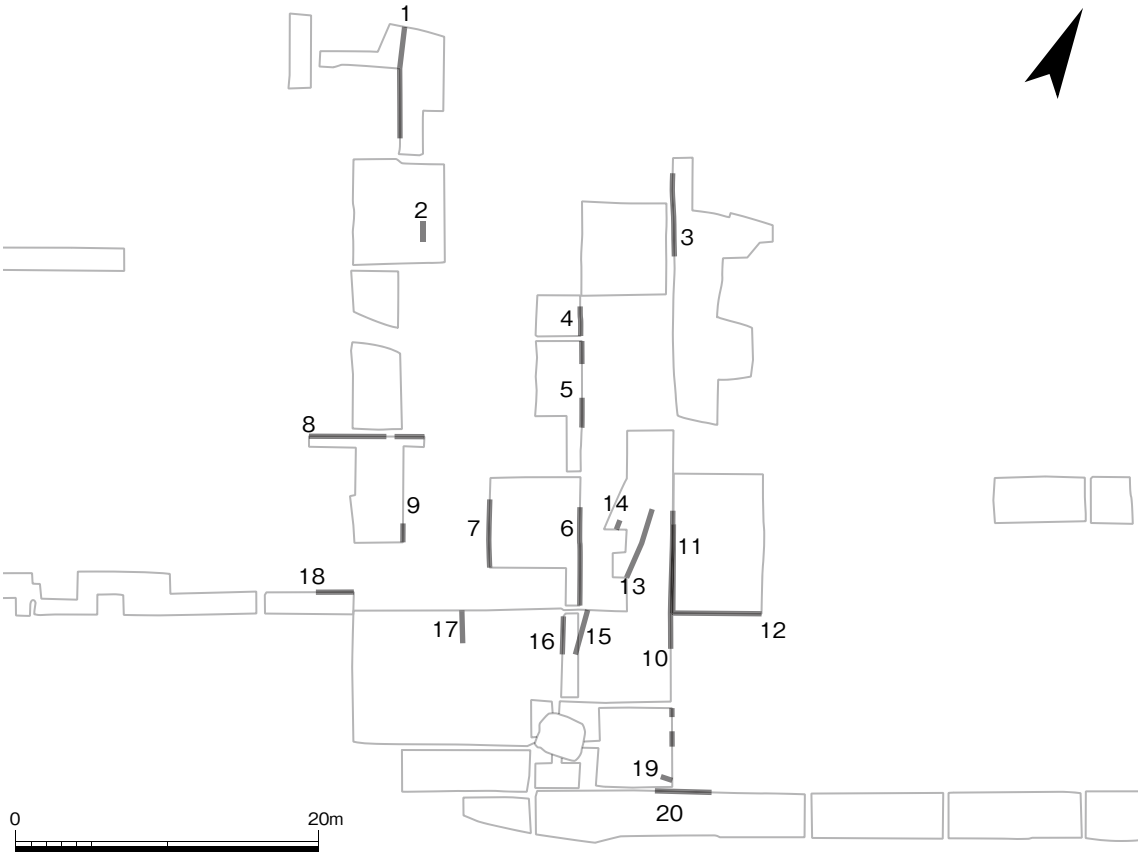


Fig.67　第２整地土（1：500）

Tab.５　第２整地土の標高値

Ｎｏ.	土層断面位置	第２整地土上面（m）	第２整地土下端（m）
1	２－７区西壁面	54.35	53.95
2	２－８区1939北西溝３東壁面	54.35	54.20
3	２－17区西壁面	54.40	54.10
4	２－13区東壁面	54.40	54.30
5	２－14区東壁面	54.35	54.25
6	２－15区東壁面	54.30	53.90
7	２－15区西壁面	54.35	54.00
8	２－11区北壁面	54.25	54.00
9	１－１区東壁面	54.30	54.10
10	１－２･５区東壁面	54.30	53.85
11	２－18区西壁面	54.25	53.90
12	２－18区南壁面	54.20	53.90
13	１－２区1939北溝２東壁面	54.20	53.90
14	１－２区1939北溝２西壁面北側	54.25	53.85
15	１－２区1939北溝２西壁面南側	54.20	53.85
16	２－16区西壁面	54.25	53.95
17	１－２区ＴＳ－ＫＡ51ライン畦西壁面	54.25	54.10
18	２－５区北壁面	54.20	53.90
19	１－５区1939東溝南壁面	54.05	53.95
20	１－７区北壁面	54.15	53.85

凹面は部分的にタテナデ調整している。１IA２類、飛鳥前期に属する。

３は、凸面タテナデ。端部は欠損しており、側面は分割後未調整である。凹面は、部分的にタテナデ。１IA２類。

４は、凸面タテナデ。広端沿いは幅約７cmほどをヨコナデする。広端面はヘラケズリで調整する。側面は欠損しており、凹面は部分的にタテナデする。１IA２類。

またラベル名TS51地山面上としてあげられた瓦がある。第２整地土ではないが、同じ小地区から出土したので、次に報告する（Fig.66）。平瓦だけで、合計６点、１.８kgが出土した。このうち、１と２は凸面タテナデ。端部は欠損しており、側面は分割後未調整である。凹面は部分的にタテナデ調整する。１IA２類。（今井）

また、金堂基壇にかかわる版築土と第２整地土との関係についてここで述べておく。２－13・14区東壁面図（Fig.36）、２－11区北壁面図（Fig.24）では、第２整地土が基壇周縁部ばかりか中央部にもおよんだことになっている。図面どおりに理解すれば、地ならし後、掘込地業をおこない、さらに基壇土の積み上げを開始するが、不可解にもこの積み上げ作業を中断して、この全面を平坦に整地するといった作業工程を想定しなければならない。しかし２－17区西壁面実測図に整地土が「土壇の築成土とよく似ている」とする注記に注目して、基壇中央部の整地土が版築土であったと考えれば、金堂基壇積み上げ後に整地をおこなったと理解することが可能になる。この立場にたって、SD7040・SD7050・SD7055は金堂建設時の基壇周りの排水溝であったのであり、さらにSD7040の多量の瓦は金堂で不要になって投棄された瓦と理解でき、様々な問題所見が整合する。そこで本報告では、基壇上の整地土を版築土であったと考える。つまり基壇の積み上げを中途で止めることなく続行し、この基壇を構築し金堂で不要になった瓦を排水用のこのSD7040に集中投棄した。それから第２整地土で基壇周囲を埋め立てて、SD7040などを覆ったとの作業工程を推定する。この推定は、基壇版築土が小片の瓦をわずかしか含まないという遺物の出土状況とも整合する。（深澤）

塔基壇と掘込地業（SX7000）（PL.20）

現在地上には巨大な塔心礎がある。しかし塔にかかわる基壇外装や礎石等は、本調査によっても検出されなかった。

塔心礎の周囲下層では塔基壇掘込地業を検出している。掘込地業は、北西隅（１－２区）および東（１－２・５区）・西（１－２・３区）・北（１－２区・２－16区）の３辺で確認した（Fig.68）。南東隅も１－２区では後世の攪乱がかなりはげしく遺構は残存しない。また南側は、後世の攪乱が著しく不明である。

掘込地業北肩は、金堂掘込地業南肩部から、東西中央位置で８.90m南、また金堂の南西隅と南東隅を機械的に結んだ線から南に８.25mの位置にあって、塔基壇掘込地業の東西長は、中央部で15.90mである。南側は後世の攪乱のため不明であるが、南北長は東辺部で北肩から南に８.５m残存する。なお基壇や基壇外装等の痕跡が全く遺存していない状況は金堂と同じであり、基壇そのものの平面規模はわからない。

塔基壇の掘込地業は、１－２・５区東壁（Fig.43）、や２－16区西壁（Fig.39）の調査成果から、第２整地土を掘り込んでいる事実が判明している。そしてこの第２整地土を介し、「金堂基壇の掘込地業→第２整地→塔基壇の掘込地業」の順序で作業がなされたことが確定する。これは、SD7040・SD

塔基壇掘込地業の規模

位置	規模（m）	備考
東西（北）	15.90	東辺は推定位置を計測
東西（中央）	15.90	全長
南北（東）	8.50	北辺推定位置からの残存長
南北（西）	6.45	北辺からの残存長

Fig.68　塔基壇掘込地業（1：500）

Tab.6　塔基壇掘込地業の標高値

No.	土層断面位置	掘込地業肩（m）	地山肩（m）	掘込地業底（m）	版築土上面（m）	版築土下面（m）	整地土上面（m）	整地土下端（m）	地山上面（m）	地山計測位置
1	1－2区1939北溝2西壁面南側	54.15	53.95	53.90	54.15	53.85	54.20	53.85	53.95	第2整地土下端、第1整地面
2	2－16区西壁面	54.20	54.05	53.85	54.20	53.85	54.25	53.95	54.05	第2整地土下端、第1整地面
3	1－2区南壁面東側	－	－	－	54.25	53.85	－	－	53.85	版築土下端、掘込地業底
4	1－2区TS－KA51ライン畦西壁面	－	－	－	54.30	54.10	54.25	54.10	54.10	第2整地土下端、第1整地面
5	1－2区1939西溝南壁面	－	54.00	53.80	54.20	53.80	－	－	54.05	
6	1－2区南壁面西側	－	－	－	54.20	53.90	－	－	54.00	
7	1－2・3・6区50ライン東壁面	－	－	－	54.10	53.85	－	－	53.85	版築土下端、掘込地業底
8	1－5区1939東溝南壁面	54.00	53.95	53.80	54.00	53.80	54.05	53.95	53.95	第2整地土下端、第1整地面
9	1－7区北壁面	54.15	－	53.85	54.15	53.85	54.15	53.85	53.85	第2整地土下端、第1整地面
10	1－3区南壁面	－	－	－	54.10	53.95	－	－	53.95	版築土下端、掘込地業底

※6・7は報告書未掲載

Fig. 69　塔心礎下層の状況

7050・SD 7055の状況とも良く整合する。掘込地業の掘り下げは、第２整地面から地山に達するまでなされている。１－５区1939東溝南壁面（Fig. 30）、２－16区西壁面（Fig. 39）でみれば、第２整地土の厚さに加えて、さらに地山も20cm程度掘削している。掘込地業からの版築は第２整地面上までつき固めており、６層程度を確認できる。版築土は灰褐色や黄褐色の砂質土であり、１層の厚さは５～10cm程度である。また、掘込地業底の標高は53.80～53.90ｍであり、金堂地業底と大きな差はない（Fig. 68、Tab. 6）。この事実は、塔基壇の掘込地業の深さが、金堂基壇の地表下の版築土にほぼ相当する厚さであったことを示している。（深澤）

塔心礎（SX 7020）（Fig. 70、PL. 22～24）　長軸で3.14ｍ、短軸2.63ｍを測る巨大なもので、全体的にみると直方体に近い形状である。高さについては1.36ｍ以上あることを確認している。北西部には後世に楔を入れて一回り小さくした痕跡をとどめており、さらに、その後に南西部分を大きく斜めに打ち欠いているが、上面加工部分は比較的残りがよい。平たい自然面を多少加工して水平に近い面を広く確保したのち、そのほぼ中央をまず四角く一段彫り下げている。その一辺は1.26～1.32ｍで、深さは５cm前後を測り、底面に敲打痕をよくとどめる。その後、中央部分に心柱穴とその四方にとりつく添木穴を同時に彫り込んである。ただし、添木穴の突出部を除いた心柱の輪郭は円形というより方形であり、方形の四隅に不正円形の添木穴を付加した形になっている。心柱穴の一辺は72cmなのに対して、添木穴は直径36cmとちょうど２分の１の長さになっている。ちなみに、一段下げた方形の一辺は添木穴径の3.5倍という関係である。この四角い面には、その北東側に幅、深さともに２～３cmほどの直線状の削り込みがみられるが、後世のものであろう。なお、露出している範囲においてはこの心礎には舎利孔は確認できない。（高橋）

塔心礎の石材　SX 7020の石材は、弱片麻状中粒黒雲母花崗岩である。全体としてほぼ等粒状組織を示す。おもな造岩鉱物は石英、長石、黒雲母で、各大きさはほぼ３mm前後である。ただし長石にはごく少量とはいえ１cm大に達する大型粒が散在する。これらの鉱物以外では、１mm以下の赤色透明な石榴石が、少量散在する。これら各鉱物は、一定方向に配列する傾向を示している。

この岩石は、付近一帯に分布する領家花崗岩類に属す。したがってこの地域においてはごく一般的に産出する花崗岩である。ただし一部加工や損傷を受けているが、自然面のあり方からみて、露頭の石材を切り出したのではなく、転石を利用したと推定される。（肥塚）

塔基壇掘込地業内の版築穴（SX 7030）（PL. 25－１）　１－２区で塔心礎の２m北に位置する（Fig. 17・38）。東西2.1ｍ、南北2.2ｍで、深さは現状で１m。東北隅と西北隅が丸い方形を呈する。こ

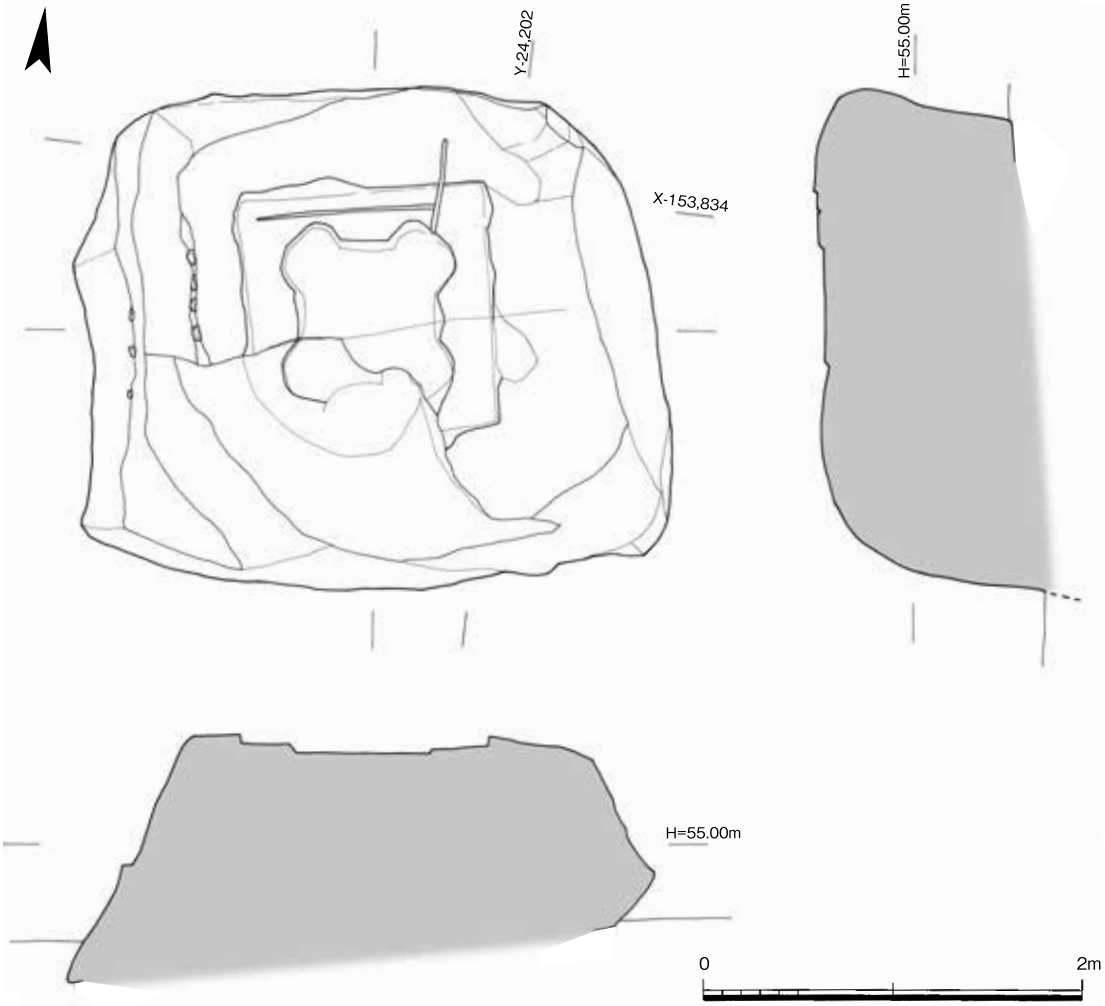


Fig. 70　塔心礎（1：40）

の穴は、残存する掘込地業の上面から掘り込まれている。埋土は２－16区西壁面で確認できる版築層は16層あり、灰色ないしは灰褐色の粘質土を主体とし、１層の厚さは５cmあまりである。その性格は1969年10月30日付けの日誌に、「性格については不明と言わざるを得ない」とあるとおり、この塔基壇に関わるものかどうかも含めて不明である。（深澤）

塔基壇掘込地業土からの出土とみられる丸瓦・平瓦がある。ラベル名「TR 48基壇内の下面」として取り上げられた。次に報告する（Fig. 71）。

丸瓦の総出土量は2.2kgである。１は、筒部凸面がタテナデ。狭端から玉縁凸面にかけては時計回りの回転ヨコナデを施す。側面はヘラケズリ調整で、筒部凹面は未調整である。玉縁凹面は回転ヨコナデ後に基部、側縁をヘラケズリ調整する。2IB、飛鳥前・中期に属する。

平瓦の総出土量は5.4kgである。２は、凸面タテナデで、側縁沿いに自然釉がみられる。広端面はヘラケズリで調整し、側面は分割後未調整で、凹面側縁に分割界点がある。凹面は一部タテナデを施す、凹面広端縁は幅２cmほどヨコナデをする。１IA２類、飛鳥前期に属する。

３は、凸面タテナデ。端部沿い幅1.5cmほどをヨコナデし、端面はヘラケズリ調整。側面は分割後

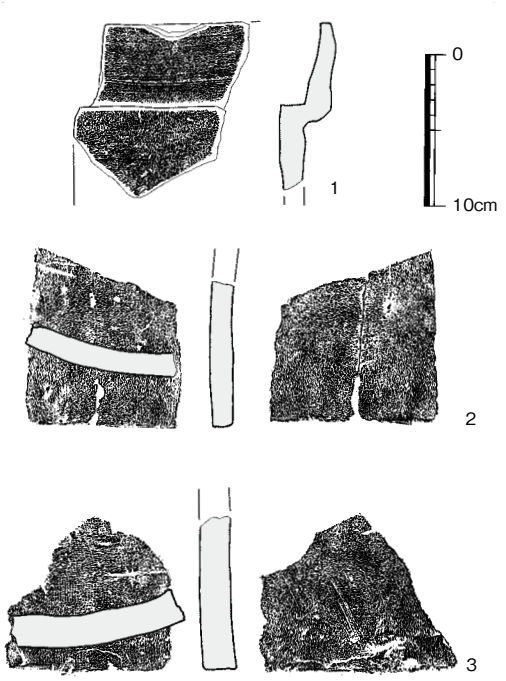


Fig. 71　TR 48基壇内の下面
丸瓦・平瓦（1：5）

未調整である。凹面は未調整で枠板痕跡が残る。１IA１類。（今井）

金堂・塔と掘込地業

それぞれの土層の重複関係から、①寺域地ならし（削土・第１整地土土入れ）→②金堂基壇の掘込地業（SX 7100）・基壇構築→③素掘斜溝掘削（SD 7040・SD 7050・SD 7055）→④第２整地→⑤塔基壇の掘込地業（SX 7000）・基壇構築、の作業工程を復原できる。

まず地形を削平することから始め、金堂基壇南側など低い部分（２－15区）には土を入れて平坦にする。この地ならしは、地山の標高最高値が近似した数値であることを根拠に、調査区のほぼ全域におよんだと推定することが可能である。次の段階に、金堂基壇の掘込地業がなされる。掘込地業の深さはだいたい30cm程度と浅いが、ここの版築は、地上部分の基壇土まで一気に積み上げていた可能性が高い。このうち基壇土の一部は第２整地土によって地下に埋まるので、掘込地業の上の基壇地下版築土の部分は基盤の強化にあてられたのであろう。金堂基壇構築後には基壇周囲に溝を掘って、金堂建設時の排水用とした。そして金堂の屋根の瓦葺きが終了してから、不要になった瓦をこの排水用の溝に投棄し、さらに第２整地土で完全に覆った。この整地は中心伽藍域の南北に分布する。それから第２整地土を切って塔基壇の掘込地業がおこなわれた。このように金堂と塔を構築した順序を発掘成果から推定することができる。（深澤）

金堂・塔の中心軸の方位

金堂と塔に関しては、礎石はもちろんのこと、地上部分の基壇土や雨落溝など外周の施設も完全に失われている。発掘時に確認できたのは地下部分の版築土だけであり、金堂と塔の完成時に目視できた部分は残ってない。金堂と塔の中心軸を出すに当たって、掘込地業の肩部でみた場合、塔は金堂の南8.25～8.90mにある。金堂基壇掘込地業の輪郭は正長方形をなさずかなり歪んでいる事実があり、また作業工程がまず金堂で、次に塔であって同時に着工されていない事実、さらに地上に突出した基壇部分の痕跡がまったく遺存しなかった事実から、本例が細かな数値による造営寸法を議論するには適さないことを示す。したがって、本例のような場合、金堂と塔の中心線の振れに接近するには、この作業工程から後で建設された塔の東西心を基点として算出するのが望ましいということになる。（深澤）

まず調査時に設定した局地座標系において、塔・金堂それぞれの東西中軸位置を設定した。Aは塔基壇の掘込地業中央付近での東西心、Bは金堂基壇掘込地業南辺での東西心、Cは金堂基壇掘込地業北辺での東西心で、その座標は表に示した。これに基づき、局地座標系における中軸線の振れを計算した。AとBを結んだ線（A－B）を中軸とした場合は北で東に1°11′52″、AとCを結んだ線（A－C）を中軸とした場合は北で東に3°8′15″振れる。前述のように、局地座標は、世界測地系に対して北で西に26°13′58″振れるので、世界測地系に対してA－Bは北で西に25°2′6″振れ、A－C

は北で西に23° 5′ 43″ 振れることとなる。このように中軸線の振れは、掘込地業のどこを東西心とみるかによって、2° 前後の幅が生じる。(島田)

掘込地業東西心座標

	S－N	E－W
A	S 14.60	E 18.50
B	S 0.25	E 18.80
C	N 19.15	E 20.35

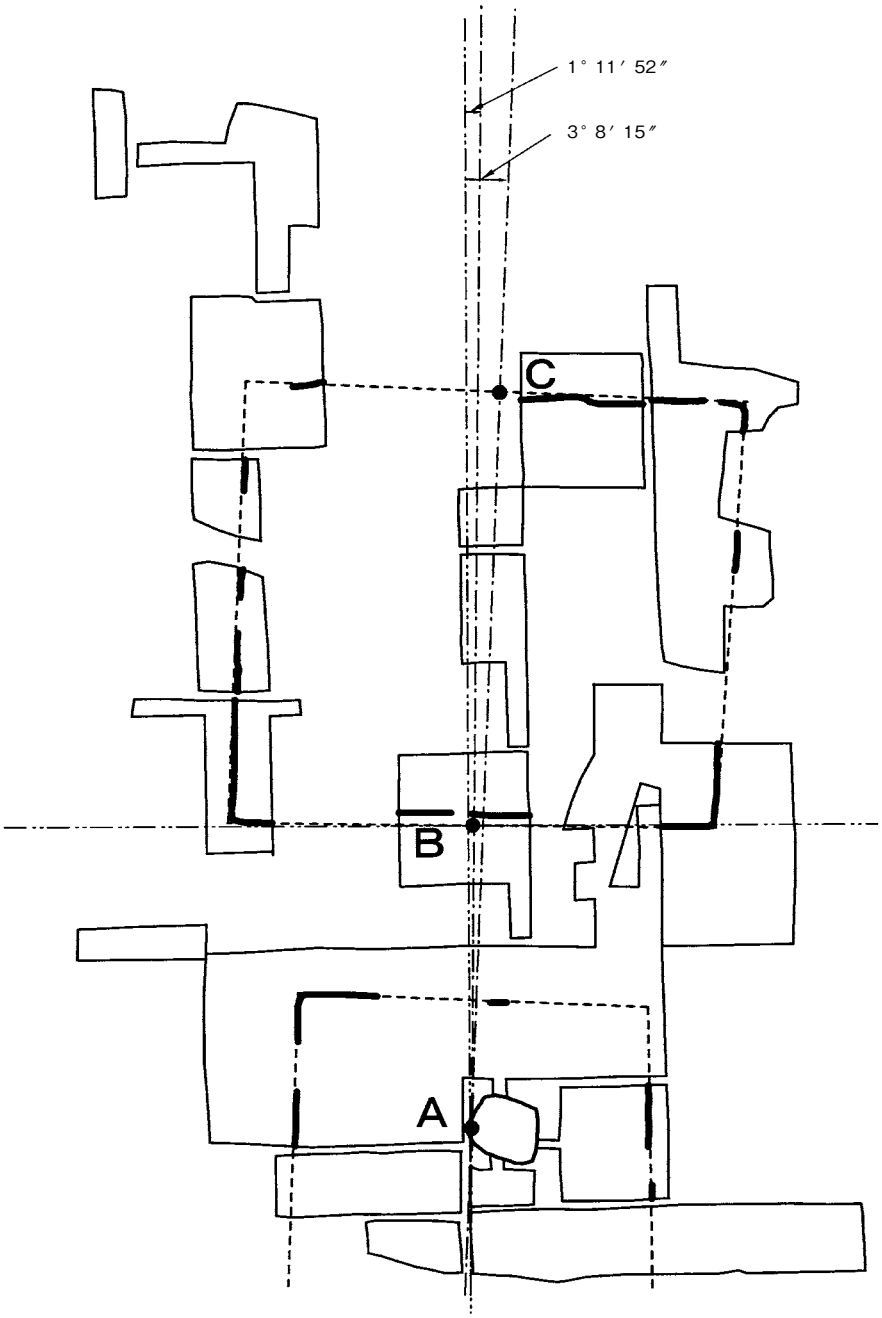


Fig. 72　伽藍中軸の方位

井　戸

SE 7074・KA 61土坑　２－４区西側にある井戸である（Fig.16、PL.３）。検出面の平面形は長円形を呈しており、南北１.３m、東西１.０m、現状の深さは１.６mで、掘削底は地山粘土層下層の砂層に達している。井戸の底部は円形を呈し、直径は50cmである。この底部には、曲物が二重にして据えられていた。（深澤）

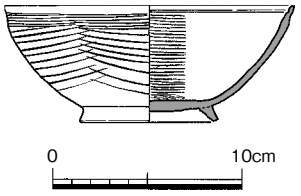


Fig. 73　SE 7074
黒色土器（1：4）

土器は、黒色土器Ｂ類椀が１点出土している（Fig.73、PL.34）。口径15.3cm、器高6.2cm、高台径7.2cmを測る。細いハの字状に開く輪高台の底部に内湾する体部をもつが、同種の製品の中では、浅めの器形に作られている。口縁は端部付近をやや強くヨコナデし、端面を丸く整え、その内側体部との境には沈線を施す。体部外面は口縁部が密な横方向のヘラミガキ、その他は静止状態での粗いヘラミガキを施し、内面はほぼ全面に細かいヘラミガキを平行に施す。底部外面のみミガキを施さない。

これは橋本久和のいう畿内系５類に属し、11世紀中ごろの最終段階の黒色土器に属するものであろ

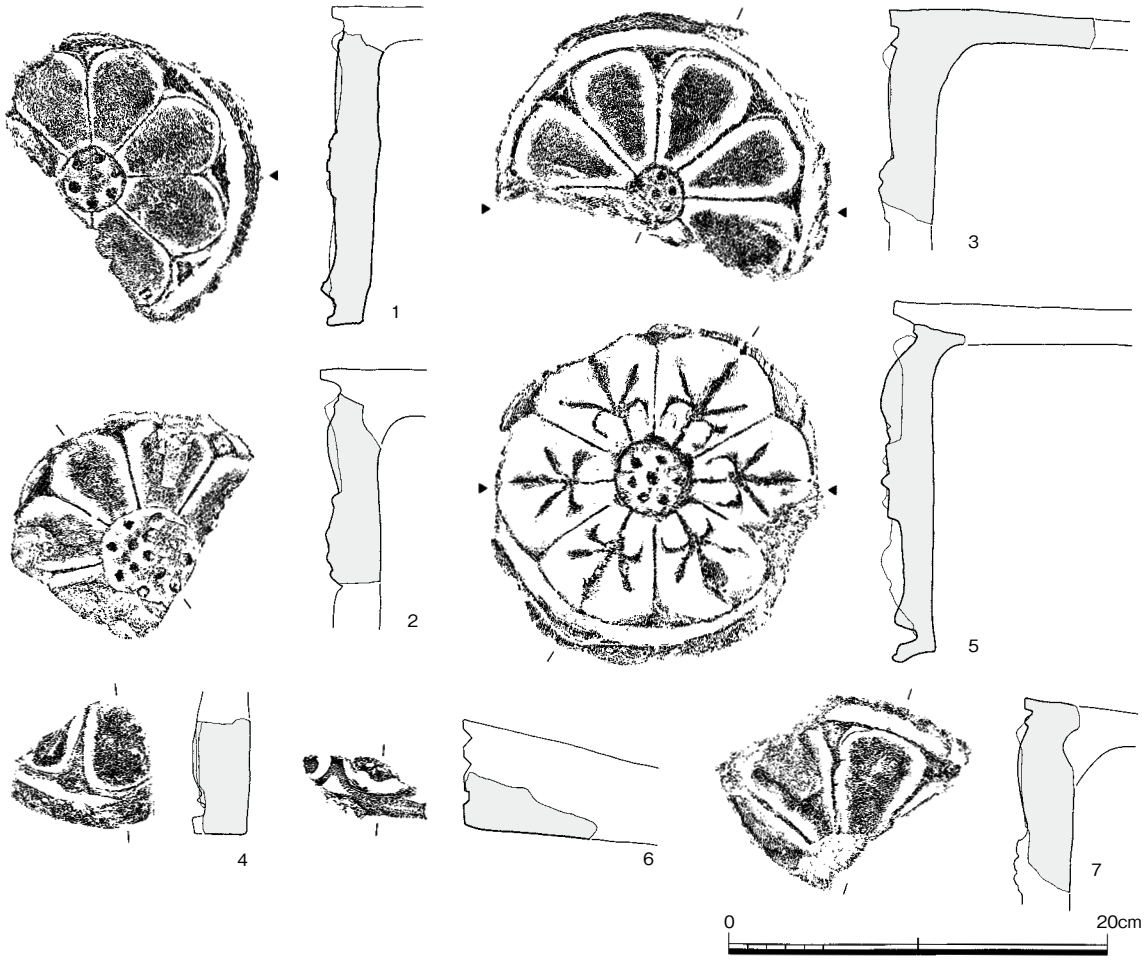


Fig. 74　SE 7074・KA 61土坑　軒丸瓦・軒平瓦（1：4）

う（中世土器研究会 1995）。（高橋）

また瓦類も出土した。そのうち、軒瓦から報告する。（Fig. 74・75）

1は、4A。丸瓦と瓦当の接合部が残るが、大部分は欠損している。接合方法は不明。内面接合粘土は部分的に残る。瓦当裏面はほぼ平坦で、調整はヨコナデを中心とした不定方向ナデ、下半部周縁に沿ってナデ。瓦当側面の調整はナデ。瓦当面では間弁部分の笵詰めが不十分である。外縁上に笵端痕は認められない。

2は、6Db。丸瓦と瓦当の接合部が残るが、半分は欠損する。接合方法楔形a。支持ナデツケあり。内面接合粘土はわずかしか残らない。瓦当裏面はほぼ平坦で、不定方向のナデ調整。瓦当側面は全く残らない。

3は、7Ab。丸瓦が幅20cm、長さ11cmほど残存する。接合方法楔形a。内面接合粘土が瓦当粘土とよく密着しており、丸瓦を立てた際に、支持ナデツケが施されたと考えられる。接合部にはタテ方向のキザミと布目が転写される（Fig. 75－3）。瓦当裏面はほぼ平坦で、調整は不定方向ナデ。内面接合粘土は横方向にナデつけている。瓦当側面の調整はナデ。筒部凸面の調整は瓦当に向けてナデ。凹面は布目圧痕を部分的に軽くナデ消す。布綴じ目がみられる。丸瓦の厚さは1.6～1.8cm。

4は、7A。中房が残らず、AaかAbかの判別は難しい。裏面はほぼ平坦で、調整は周縁に沿ってナデ。側面はナデ。瓦当面蓮弁先端は三重になり、笵ズレの可能性がある。

5は、33A。瓦当はほぼ完形に近い。接合方法楔形a。支持ナデツケ、タテ方向のキザミ転写がみられる（Fig. 75－5）。内面接合粘土は良好に残る。瓦当裏面はほぼ平坦で、不定方向ナデ。側面はナデで、大きく外反する。瓦当面の蓮弁と外縁の間には、木目に沿った笵傷が多数ある。蓮弁にも木目痕が認められる。

3

5

Fig. 75　SE 7074　軒丸瓦細部

6は、206A。直線顎。文様の輪郭のケガキ線が残る。凸面瓦当付近をヨコナデ。

この他に、ラベル名が「KA 61土坑」であるものもSE 7074の可能性が高いので、ここで報告する。

7は、7A。AaかAbかは不明。丸瓦との接合部にあたる。接合方法は楔形aかb。丸瓦は残存しない。内面接合粘土は剥離し、支持ナデツケを施した際に生じた溝のみ残る。溝の幅は1.5cm、深さは0.8cmほど。接合部の瓦当粘土には丸瓦のキザミが転写される。瓦当裏面は平坦で、調整は不定方向ナデ。側面はナデ。瓦当面では間弁の輪郭が二重になり、笵ズレ、もしくは間弁部分の笵詰めが不十分

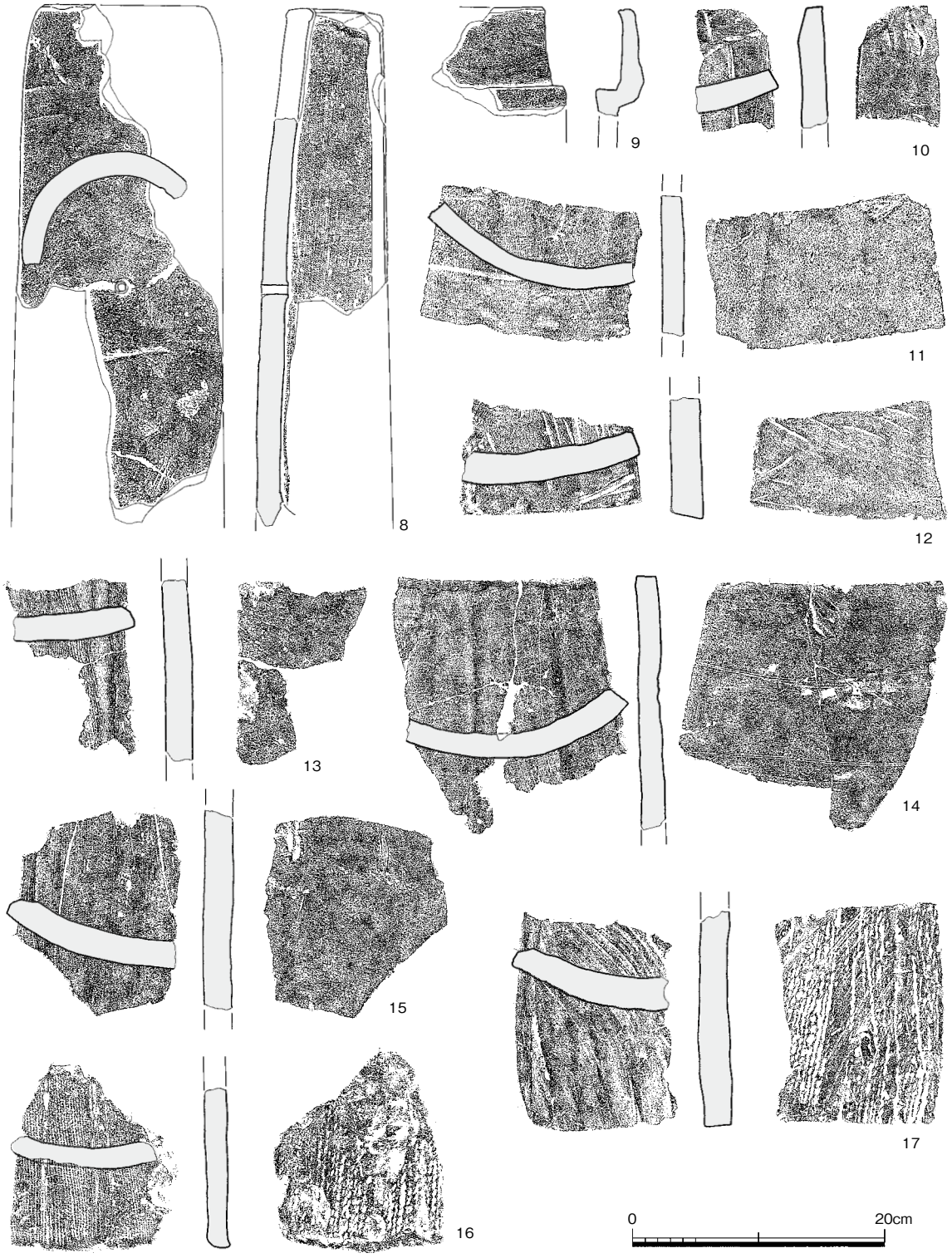


Fig. 76　SE 7074　丸瓦・平瓦（1：5）

であると考えられる。（中川）

次に丸瓦・平瓦を報告する（Fig. 76・77）。

まず丸瓦の総出土量は14.0kgである。

8は、行基式丸瓦。広端には瓦当に接合した痕跡がある。凸面はタテナデ、狭端から22.0cmのと

ころに凸面よりあけた円形の釘孔がある。狭端面は未調整。側面はヘラケズリ、凹面側縁は面取り。凹面は未調整で枠板痕がみられず、布綴じ合わせ目が残る。１ⅡＡ、飛鳥前期に属する。

９は、肩から玉縁凸面にかけて回転ヨコナデがみられる。玉縁側面はヘラケズリ、玉縁凹面は回転ヨコナデ後に側縁と基部をヘラケズリで調整する。２IB、飛鳥前・中期に属する。

平瓦の総出土量は39.0kgである。

Fig. 77　SE 7074　平瓦細部

１０は、凸面タテナデ。端面はヘラケズリ、側面は全面ヘラケズリ、凹面は未調整である。凹面側縁は幅３cm、凹面端縁も幅２.５cmがヘラケズリ調整。時期は不明である。

１１は、凸面タテナデ。側面は分割後未調整であり、端部は欠損している。凹面は未調整で、枠板痕跡が残る。また、枠板痕跡の稜線上に点状の枠板綴紐痕があり、横方向に等間隔に並ぶ。１IＡ１類、飛鳥前期に属する。

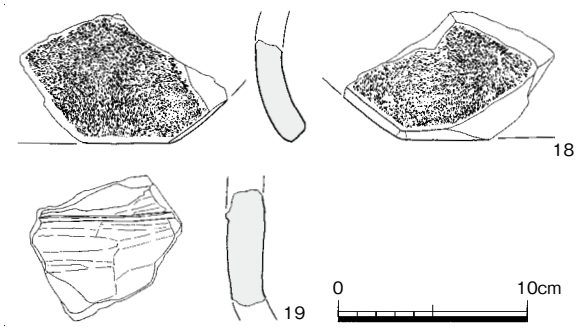


Fig. 78　SE 7074　道具瓦（1：4）

１２は、凸面はヨコナデ調整するがタタキメが残る。広端面はヨコナデ、側面は全面ヘラケズリで調整、凹面側縁は幅の狭い面取りをおこなう。凹面は縦方向に工具を使用したタテナデを部分的に施す。１ⅣＢ、白鳳前期。

１３は、凸面は不定方向のナデ。端部を欠いており、側面は分割後ヘラケズリ、凹面側縁は２度面取りをする。凹面は一部タテナデ。１Ⅳに相当し、白鳳時代にあたる。

１４は、凸面ヨコナデ。側面は分割後、破面をヘラケズリで調整する（Fig. 77）。狭端面はヘラケズリで調整し、凹面狭端縁と凹面側縁は面取りをする。凹面は枠板痕跡の稜部分をタテナデする。１ⅣＢ。

１５は、凸面ヨコナデ。端部を欠いており、側面は分割後、破面をヘラケズリで調整する。凹面側縁は２度の面取りする。凹面は部分的にタテナデ調整をおこなう。１ⅣＢに相当する。

１６は、凸面は粗いタテ縄タタキ。側面は欠損しており、端面は未調整である。凹面は未調整で、枠板痕跡が残る。平安時代か。

１７は、凸面はタテ縄タタキ。端面をナデて調整し、側面はヘラケズリで調整する。凹面側縁は面取りをおこない、凹面は布目がなく弧状の粗いナデ調整をほどこす。時期は不明である。

道具瓦は、２点出土している（Fig. 78）。

１８は、面戸瓦で舌部のみ残存している。器表が摩滅しているため調整は不明である。時期も不明。

１９は、鴟尾。鰭部の破片か、あるいは胴部の破片で表面にのみ正段をけずり出す。表面は丁寧なナデ調整。裏面は粗いナデ。飛鳥時代に属する。なお、この資料は『至宝』未掲載である。（今井）

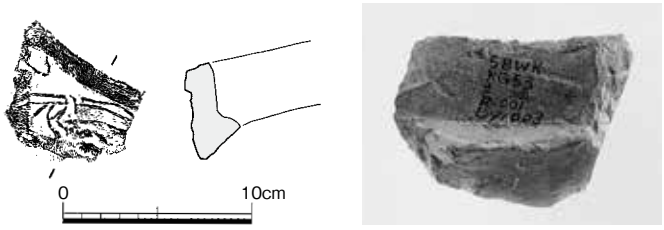


Fig. 79　KG 53土坑　軒平瓦（1：4）・細部

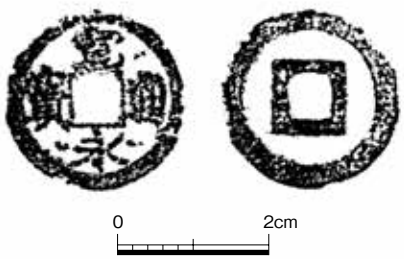


Fig. 80　KG 49土坑
銭貨（1：1）

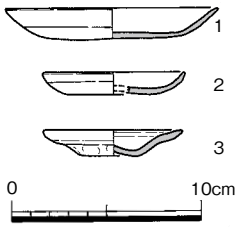


Fig. 81　KC 46土坑
土師器（1：4）

SE 7075　2－4区中央にある井戸で（Fig. 16）、平面形は楕円形を呈し、南北1.40m・東西0.95m、深さは現状で1.46mである。（深澤）

土　坑

SK 7052　2－17区南端の土坑である（Fig. 17）。調査区内に北辺･西辺が入っているが、他は調査区外にある。現状で、南北3.8m以上・東西4.8m以上、深さは現状で0.53mである。（深澤）

KG 53土坑　軒平瓦を取り上げている（Fig. 79、PL. 47）。217Bb。瓦当貼付曲線顎で、平瓦部貼付部分で剝離する。（中川）

KG 49土坑　寛永通宝を取り上げている（Fig. 80､PL. 33 b）。「寶」字の最終画を「ス」字状につくる「ス寶」とよばれるもの。1636年初鋳の古寛永。（次山）

KC 46土坑　図化しえた遺物は土師器皿3点である（Fig. 81）。そのうち2、3が小皿。1と2はヨコナデ痕を軽くとどめるもので、口縁端部は丸く収めるだけである。これに対して、3は赤褐色系のへそ皿に属し、口縁部も水平気味にヨコナデし、端部を細く尖らす。上げ底の底部外面には指頭圧痕が顕著である。1の口径11.2cm､器高1.7cm､2の口径7.4cm､器高1.2cm､3の口径7.3cm､器高1.4cmである。14世紀頃とみられようか。（高橋）

穴

SX 7065　2－12区で検出した小穴で、SD 7055と一部重複する（Fig. 17）。平面形は円形で、直径約45cm、深さは現状で13cmである（PL. 8）。瓦の出土状況を実測した図面がある。「KI 47穴」のラベルで取り上げた瓦がこれにあたる可能性がある。（深澤）

軒丸瓦3Cが出土している（Fig. 82、PL. 47）。接合方法片枘形aかb。内面接合粘土が瓦当・丸瓦に完全には密着せず、わずかに隙間を生じている（Fig. 82写真）。内面接合粘土は丸瓦凹面に沿ってナデつける。瓦当裏面は中央にかけてやや高くふくらみ、調整は不定方向ナデ。側面の調整はナデ。若

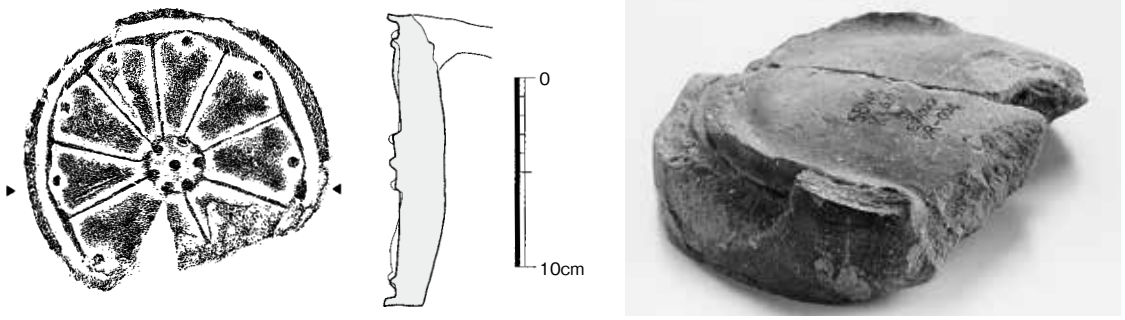


Fig. 82　SX 7065　軒丸瓦（1：4）・細部

干外反する。外縁上に笵端痕をわずかに残す。(中川)

丸瓦の総出土量は０.５kgである。Fig.83は筒部凸面がヨコナデ。肩から玉縁凸面は回転ヨコナデで調整する。凸面の狭端から６.５cmのところに釘穴がある。側面はヘラケズリ、筒部凹面側縁は面取りをおこなう。凹面は未調整だが、側縁よりに粘土板合わせ目（Ｚ型）があり強くナデつける。玉縁凹面基部と側縁はヘラケズリで調整する。２IB、飛鳥前・中期に属する。平瓦は細片のみの出土で、合計０.１kgである。(今井)

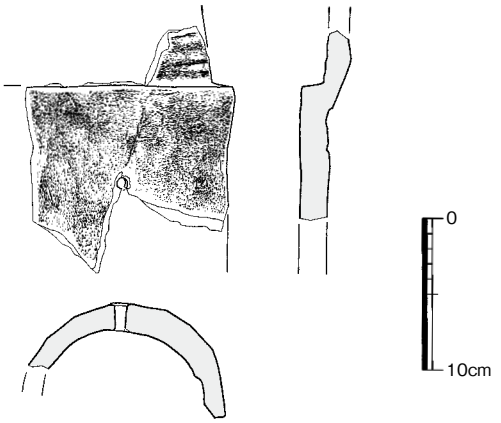


Fig.83　SX７065　丸瓦（１：５）

KJ４６東穴　軒丸瓦１点を取り上げている。型式は不明である。瓦当の３分の１ほど残存するが、瓦当面が完全に剝離している。裏面は中央にかけてやや高くふくらみ、調整はヘラケズリの後、回転ナデ。中心部分はさらに不定方向ナデ。側面はナデ。瓦当裏面の形状や調整から、飛鳥時代に位置付けられる可能性が高い。(中川)

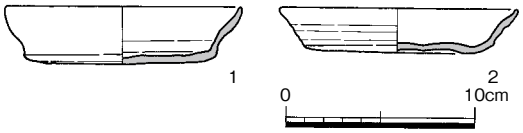


Fig.84　KH６２小穴　土師器（１：４）

KI６１穴　瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片１点を取り上げている。(中川)

KH６２小穴　完形の２点の土師器皿を取り上げている（Fig.84、PL.34）。ともに、平たく広い底面から体部が比較的急角度で立ちあがり、口縁端部をわずかにつまみ上げたものである。強めのヨコナデによって強調された体部と底部の境はかなり低い位置にあり、そこに明瞭な段をもつ。それゆえ、側面形は箱形に近くなっている。口径は１・２ともに12.４cm、器高は１が３.１cm、２が２.３cmを測る。淡褐色の胎土の製品である。１３～１４世紀のものであろう。(高橋)

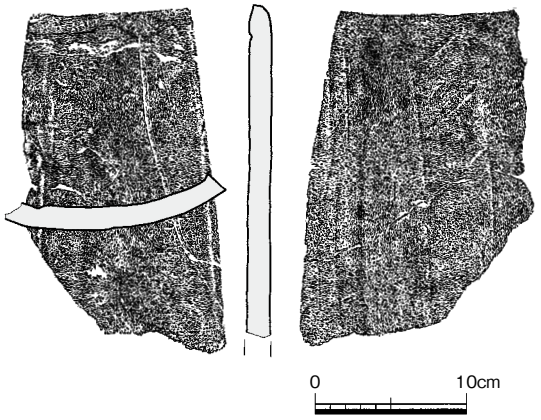


Fig.85　KG４９大穴　平瓦（１：５）

KG４９大穴　平瓦合計１.０kg分を取り上げている。このうちFig.85に図示した平瓦は、凸面タテナデ、狭端縁を幅２cmほどヨコナデ。狭端面はヨコナデ。側面は分割後に部分的に削るが、一部破面が残る。凹面は一部強いタテナデ、狭端縁は面取り後にヨコナデする（PL.46）。１IBb、飛鳥前期。(今井)

KA４６小穴　瓦当が欠損した軒平瓦の一部と考えられる破片を２点取り上げている。(中川)

東西溝

SD７０５８　２－９区にある溝で上幅１.３０m、深さ０.６７mである（Fig.17）。「KG５３東西溝」として、遺物を取り上げた可能性がある。ここでは土器を報告する（Fig.86－１・２）。

１は、須恵器大甕。肩部から口頸部にかけての破片で、頸部の器壁は２.０cmと非常に厚い。体部は内面に同心円の当て具痕、外面に格子目のタタキメをとどめるが、口頸部は回転ナデによる調整で仕上

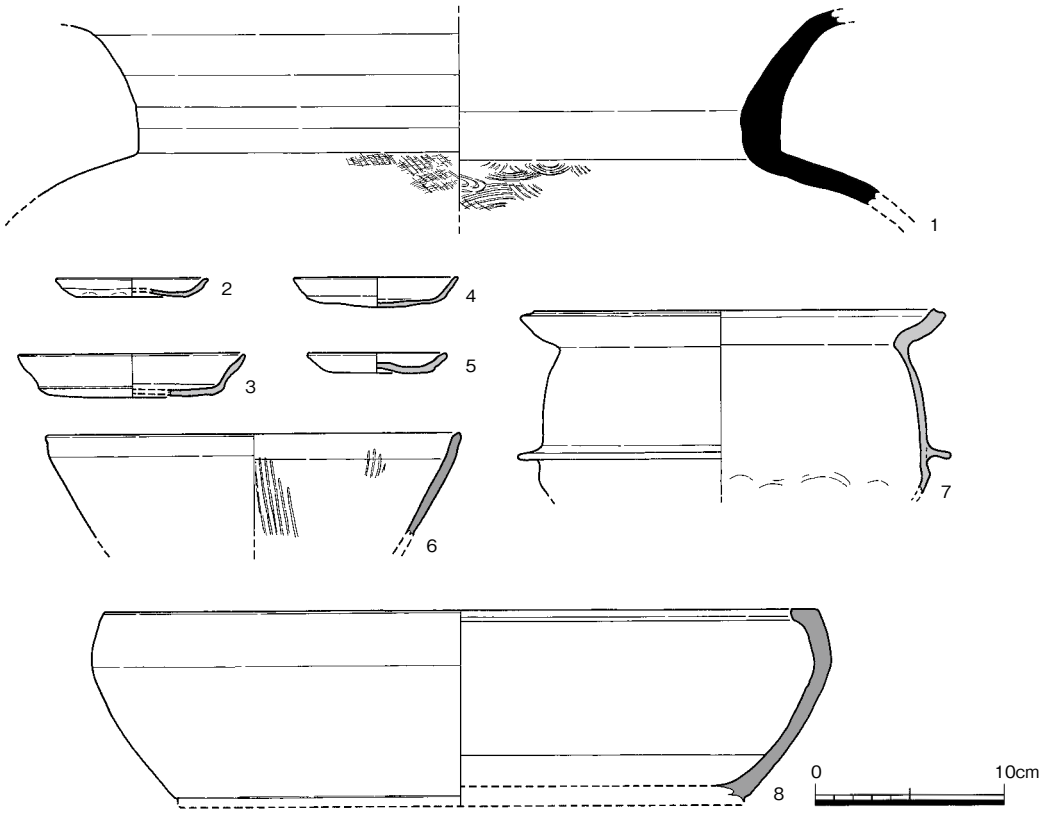


Fig. 86　東西溝　土師器・須恵器・瓦器（1：4）

げてある。外反の角度から考えて波状文等は施さないものだろう。頸部付け根での径は34.0cm、口頸部の残存高は6.4cmを測る。時代の限定は難しい。

2は、瓦器小皿。口径8.0cm、器高1.0cmで浅い器形である。底面は上げ底状を呈す。体部内外面はヨコナデ仕上げであるが、内面見込みにはジグザグ文の暗文を施してある。13世紀代のものであろう。（高橋）

SD 7054　2－14区中央の溝で、上幅1.85m、深さ0.48m（Fig. 17）。埋土は、上から順に、黄灰色土、灰色粘土、黄灰色土である。図面に、中世溝と注記している。ラベル「KF 49東西溝」や「KE 49東西溝」で、遺物を取り上げたか。土器と瓦が出土している。（深澤）

KF 49東西溝　瓦器擂鉢を取り上げている（Fig. 86－6）。上半部しか残っていない。大和では14世紀に須恵器こね鉢にとってかわるように生産され始めたもので、本例は15～16世紀頃のものであろうか。口縁端部付近をヨコナデし、端部を丸く収めただけの単純な形態で、内面には粗い櫛目の工具によっておろし目を、間隔をあけてつけている。おろし目の櫛の数は6本である。（高橋）

軒丸瓦は、3Bb（Fig. 87）。丸瓦が長さ6cm、幅11cmほど残存。丸瓦と瓦当の接合部の構造が良好にみられる。接合方法片枘形a（Fig. 87写真）。内面接合粘土はヨコ方向にナデつけられる。筒部凹面に沿って瓦当裏面が溝状にくぼむのは、内面接合粘土ナデつけの際に強く押圧したためか。瓦当裏面は中央にかけてやや高くふくらみ、調整は不定方向ナデを認める。側面の調整はナデ。外縁は残りが悪く、笵端痕は確認できない。筒部凸面は不定方向ナデ、凹面は布目圧痕を軽くナデ消す。丸瓦の厚さは1.7cm。（中川）

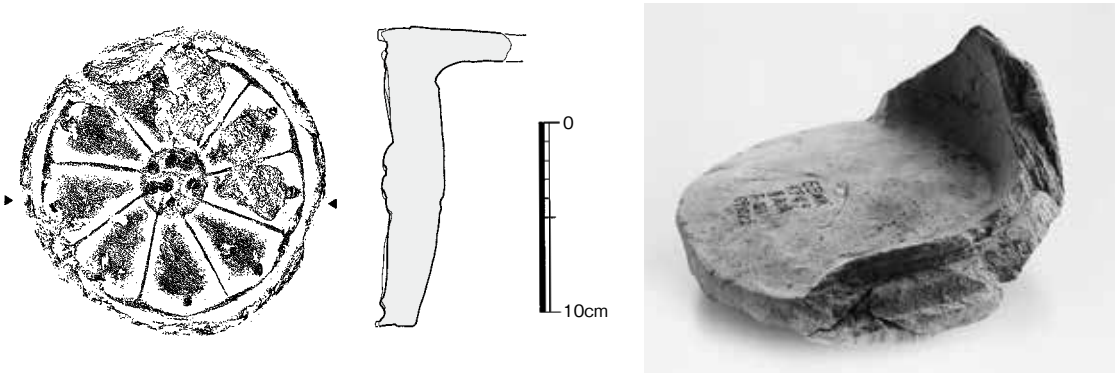


Fig.87　KF49東西溝　軒丸瓦（1：4）・細部

KE49東西溝　4・5の土師器皿と、7の土師器釜、そして8の瓦器火鉢を取り上げている（Fig.86、PL.34）。4は口径8.7cm、器高1.6cm、体部を一段のヨコナデで仕上げたもので、底部はやや丸みを帯びる。白色系の胎土である。

5は4よりさらに精良な白色系の胎土の小皿で、口径7.3cm、高さ1.1cmを測り、底部は中央がやや上げ底状となる。体部は一段ナデによる仕上げで、やや厚手の製品である。

7の羽釜は、鍔のすぐ下で、体部が丸く閉じる大和Ⅰ型の羽釜である。体部に比べて口縁部は厚く作られていて、内湾気味に立ち上がり、端面を整える。体部は底面に向かってすぼまる内面に当て具痕が認められる。鍔は薄く端部を丸めたもので、ほぼ水平に伸びる。元興寺旧境内食堂跡埋甕土坑SX06出土品と類似し、17世紀前半頃に比定できよう（奈良市教育委員会1983）。砂をわずかに含む橙褐色の胎土である。口径21.0cmを測る。

8は、瓦質土器の火鉢である。底部を完全に欠損している。大きく内湾する口縁の上面は平らな面をもち、端部は稜をもつ形に仕上げられる。すぼまった体部と底部の境にははっきりとした段がつく。この底部にどのような足が付いていたかはわからない。内面には重ね焼きしたときの痕跡が観察できる。体部最大径39.0cmを測る。これも7の羽釜と同じく近世に下るものであろう。（高橋）

このほか、瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片を、1点取り上げている。（中川）

KE49東石溝　瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片を、1点取り上げている。（中川）

このほか、丸瓦・平瓦も取り上げている。このうち丸瓦は、合計1.5kgあり、Fig.88に図示したものは、筒部凸面がタテナデ。肩から玉縁凸面にかけて回転ヨコナデ、側面はヘラケズリ、凹面側縁は面取りをする。凹面は未調整で、布袋の吊り紐痕跡がみえる。玉縁凹面側縁と端縁も面取り。室町時代。また平瓦は、合計1.2kgあった。（今井）

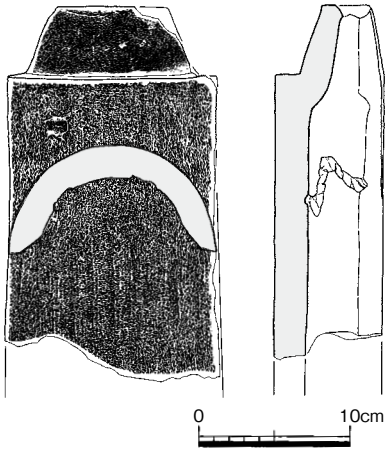


Fig.88　KE49東石溝
丸瓦（1：5）

SD7085　2－2区南西部にある溝である。上幅0.25m、深さ7.4cmで、埋土は暗褐色土である（Fig.16）。

SD7080　2－3区西半部にある溝で、上幅0.60m、深さ9.0cmである（Fig.16）。

SD7095　2－6区南端にある溝で、北肩のみ調査区内にある。

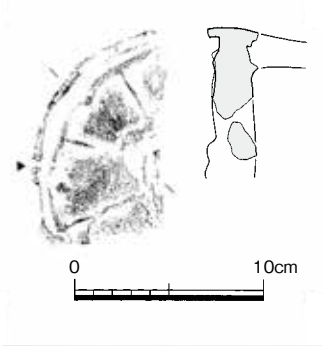


Fig. 89　KG 46 東西溝
軒丸瓦（1：4）・細部

上幅1.50m、深さ0.84mである（Fig.17、PL.4）。

SD 7061　2－12区南端にある溝で、上幅0.70m、深さ9.8cmである（Fig.17）。

SD 7017　1－8区にある溝で、上幅0.60m、深さ0.30mである（Fig.18）。

SD 7005　1－10区の溝で、上幅0.50m、深さ8.0cmで、埋土は暗褐色土である（Fig.18）。（深澤）

KF 53東西溝　土師器皿を取り上げている（Fig.86－3）。平たく広い底面から体部が比較的急角度で立ちあがり、口縁端部をわずかにつまみ上げたもので「KH62小穴」取り上げの2点（Fig.84）と同一の型式と言える。口径は12.0cm、器高が2.3cmを測る。13～14世紀のものであろう。（高橋）

KG 46東西溝　軒丸瓦3Bbを取り上げている（Fig.89）。接合方法は片枘形aかb。丸瓦の先端加工は凹面からの切り込みが深く、その部分で丸瓦が折れ、切り込みより先端が瓦当に貼りついて残る（Fig.89写真）。瓦当と丸瓦の間は完全に密着せず、部分的に隙間がみられる。内面接合粘土が残存し、横方向にナデツケられている。瓦当裏面は残りは悪いが、調整は不定方向ナデ、さらに周縁に沿ってナデ。側面の調整はナデ。外縁上には笵端痕がわずかに残る。

このほか、瓦当面が欠損した軒平瓦1点を取り上げている。（中川）

南 北 溝

SD 7001～7016　1－8～13区にある溝群で、上幅0.40～1.00m、深さは0.50m前後である。埋土は、多くが黒灰色砂質土である（Fig.18・19、PL.27～29）。

SD 7076　2－4区西端の溝で、上幅0.55m、深さ0.35mである（Fig.16）。

SD 7041～7044　1－14区と1－15区にある溝群で、上幅約0.50～0.90m、深さは0.30m前後である（Fig.18）。（深澤）

KA 59南北溝　土師器小皿2点を取り上げている（Fig.90－1・7）。

1は丸みをもって大きく広がる皿で、口縁部付近のみヨコナデして整えたもの。体部下半には指頭圧痕が明瞭に残る。口径11.6cm、器高2.0cm。7は体部下半で一度屈曲しながら口縁が広がるもので、ともに白色系の胎土の製品で、15～16世紀頃のものであろう。口径10.8cm、器高2.1cm。（高橋）

KM 53南北溝　土師器皿2、陶磁器皿1、須恵器壺1、瓦器擂鉢3を図化した（Fig.90－2・3・8・9・14・16・17、PL.34）。

2・8は、ともに厚手丸底の小皿だが胎土が異なる。2は白く精良な胎土の製品で、口縁部の一部にタール状の煤が付着していることから燈明皿として利用されたことがわかる。近世に下るものであろう。8は表面が荒れていて淡褐色を呈する。2の口径7.2cm、器高1.4cm。8の口径7.0cm、器高1.3cm。

3は内面に水引き痕を明瞭に残す須恵器壺の下部の破片である。輪高台がはずれている。青灰色で内面に一部自然釉が認められる。

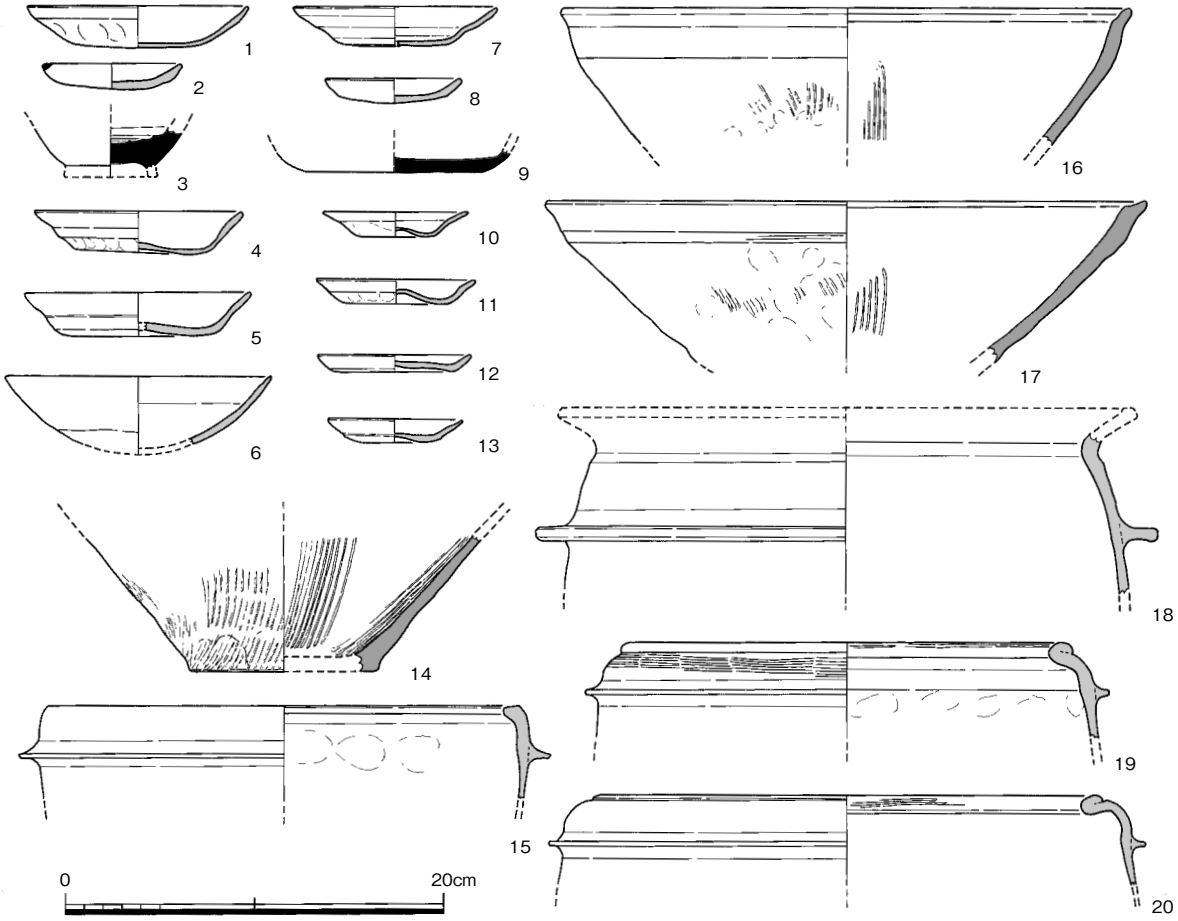


Fig.90　南北溝　土師器・須恵器・瓦器・陶磁器（1：4）

9は全形をうかがい知りえないが、平底から丸く緩やかに体部が立ち上がることがわかる陶磁器である。底部外面は糸切り痕を明瞭にとどめ、内面には緑がかった透明な釉が厚くかかっている。

14・16・17は、いずれも瓦器擂鉢で、16・17が口縁部を残し、14が底部を残す。外面はすべてハケメ調整だが、それが不完全なため指頭圧痕が見え隠れする。体部下半がほぼ45度の角度で直線的に立ち上がった後、口縁近くで内湾し、最後に外側に端部をつまんで引き伸ばしている。その際、端部内面は浅くくぼむ。おろし目の本数は16が6本、17が5本以上、14が10本である。16の口径29.8cm、17の口径31.6cmを測る。古市城跡出土品に類し、16世紀中ごろに年代を求められる（奈良市教育委員会1981）。（高橋）

また軒平瓦も取り上げられている。

Fig.91は210。AかBかは不明。直線顎。凸面の調整は瓦当に向けてタテ方向のヘラケズリ。瓦当付近のみナデか。

このほか、瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片が、1点ある。（中川）

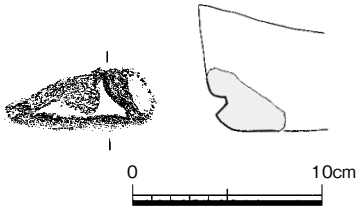


Fig.91　KM53南北溝　軒平瓦（1：4）

TO35南北溝　土師器の杯、皿類とともに、鍋、甕類を取り上げている（Fig.90－4～6・10～13・15・18～20、PL.34）。

4～6が大皿である。4・5は一段ナデによって体部外面中位か

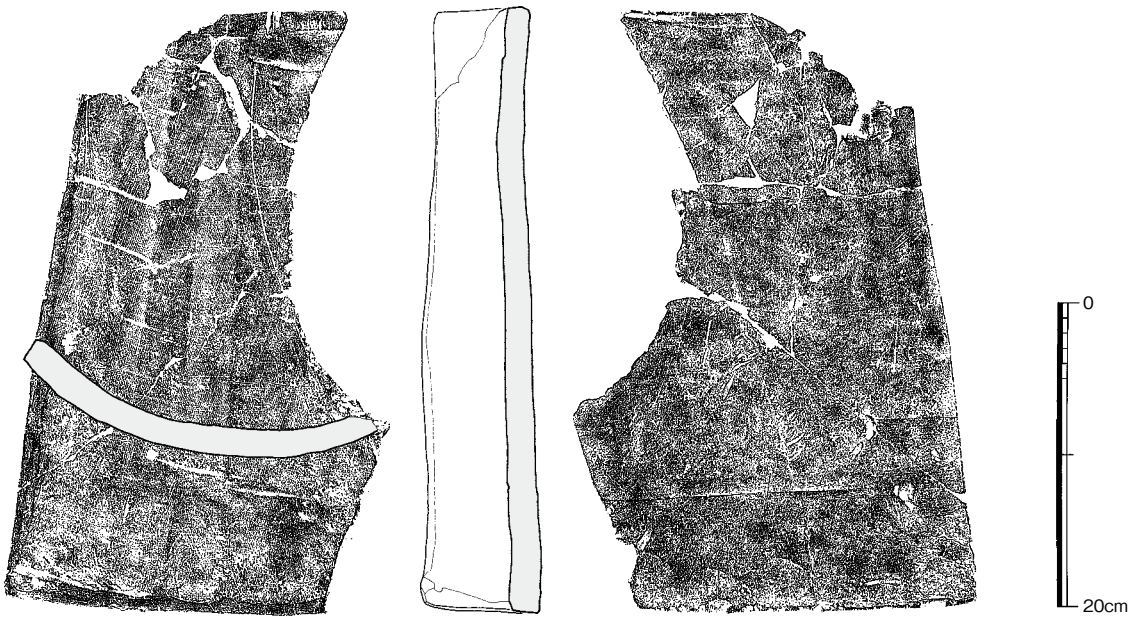


Fig. 92　TO 35南北溝　平瓦（1：5）・細部

ら外反する口縁をもち、底面はわずかに上げ底状になる皿である。橙褐色の胎土の製品である。これに対して、６は摩滅のため調整の詳しい観察はできないが、丸底気味の底部からやや内湾気味に口縁が立ち上がる異なる形態を呈する。胎土も白色系で相違する。４の口径10.8cm、器高2.3cm、５の口径11.8cm、器高2.3cm、６の口径14.0cm。

10～13は、小皿に相当する。そのうち、13のみ白色系の胎土で、10～12は赤褐色系の胎土で作られている。いずれも底部を下から上にくぼませているが、10・11がとくに顕著で、典型的なへそ皿となっている。12は器高の低い皿である。10の口径7.8cm、器高1.3cm、11の口径8.3cm、器高1.3cm、12の口径8.2cm、器高0.9cm、13の口径7.1cm、器高1.3cmを測る。

18は、大和Ｂ２型釜とみられ、大きく突出した鍔部の最大径は32.8cmを測る。鍔下面以下に煤状の付着物がある。淡褐色の胎土を有する。

15は、端部がわずかに内側に肥厚するだけで、上面が平坦に仕上げられた羽釜で、本遺跡では類例の少ないものである。大和Ｈ２型に該当するのであろうか。砂粒をわずかに含んだ精良な淡褐色の胎土で、鍔下半以下に煤をつけている。口径28.0cm。

19・20がいわゆる大和Ｈ１型釜で、19では肩部外面や口縁部、そして20も口縁部にハケメをとどめる。また、19の内面には成形の際の当て具痕が観察できる。鍔は15に比べて薄くて小さいもので、折り返された口縁端部は丸められて肩部と一体化して玉縁状を呈する。20は鍔より下に煤が付着している。19・20ともに胎土は白っぽい精良なもので、15世紀に下るものだろう。

以上の遺物は、総じて14～15世紀頃のものとみられ、同一地点の褐色土として発掘された土層出土品の中では新しい遺物群にほぼ並行する。（高橋）

平瓦は合計5.5kgである。Fig.92は、凸面は板状工具によるヨコナデ。狭端面は未調整で、広端面はヘラケズリで調整する。側面は少なくとも3度に分けてヘラケズリで調整し（Fig.92写真）、凹面側縁を面取りする。凹面には枠板痕跡が残り、部分的にタテナデ、凹面広端縁は面取り、凹面狭端縁はヨコナデ。1ⅣB、白鳳前期に属する。（今井）

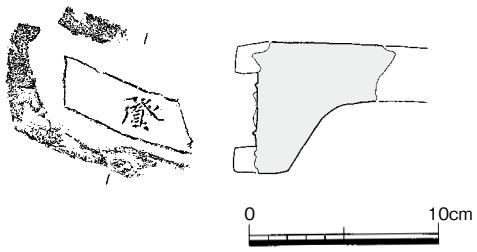


Fig.93　TS47地山斜溝
軒平瓦（1：4）・細部

斜 行 溝

TS47地山上溝　瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片を、1点取り上げている。（中川）

TS47地山斜溝　軒平瓦は、292A（Fig.93）。段顎。顎部粘土と平瓦部粘土の接合状況は不明瞭。凹面は布目圧痕をナデ消し、瓦当付近のみヨコ方向のヘラケズリで調整する。顎面はヨコナデし、顎裏面側縁の面取りはない。顎裏面はタテナデで、凹型調整台痕が残る（Fig.93写真）。凹面側縁は幅5mmほど面取りをしている。側面はタテ方向のヘラケズリ後ナデか。（中川）

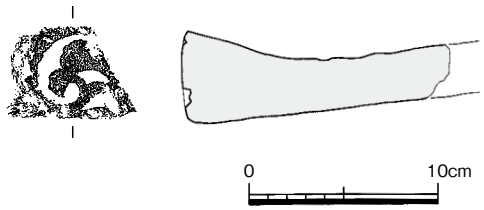


Fig.94　KA46斜行溝上　軒平瓦（1：4）

KA46斜行溝上　軒平瓦は、208か（Fig.94）。直線顎。唐草文にピン穴、ケガキ線はみられない。凹面は布目圧痕を残し、瓦当付近のみヨコ方向のヘラケズリで調整する。凸面の調整は摩滅により不明瞭である。（中川）

瓦　　溜

SX7096　1－2区と1－3区にまたがる瓦溜で、南北3.8m以上、東西4.0m、深さは0.15mである（Fig.17）。

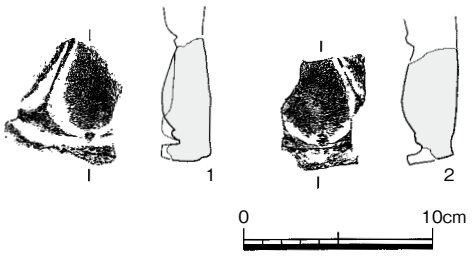


Fig.95　SX7096　軒丸瓦（1：4）

ラベルは、「TQ52西南瓦溜まり」と「TQ53瓦溜まり」である。（Fig.95）

1は、6C。瓦当下半部にあたる。裏面はほぼ平坦。調整は大部分はユビオサエで仕上げ、さらに周縁に沿ってナデをおこなう。側面にはナデを認める。

2は、6D。瓦当下半部にあたる。裏面はほぼ平坦で、調整は不定方向ナデ。周縁に沿ってナデが強く施され、わずかに凹む。側面はナデ。瓦当面の蓮弁には掌文を認める。（中川）

KJ46新瓦溜　軒丸瓦3Bbが取り上げられている（Fig.96）。丸瓦と瓦当の接合部の構造が良好にみられる。接合方法片枘形aかb（Fig.96写真）。丸瓦先端が一部残り、瓦当と隙間なく密着。内面接合粘土が一部残る。瓦当裏面は中央にかけてやや高くふくらみ、調整は回転ナデの後、不定方向ナデ、下

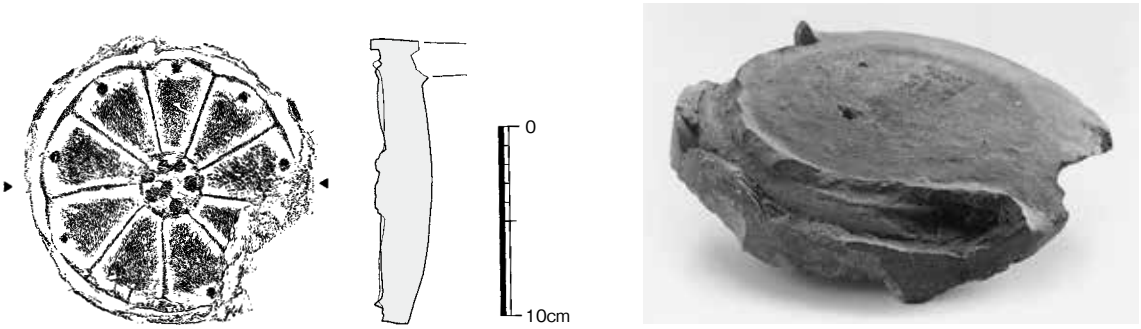


Fig.96　KJ46新瓦溜　軒丸瓦（1：4）・細部

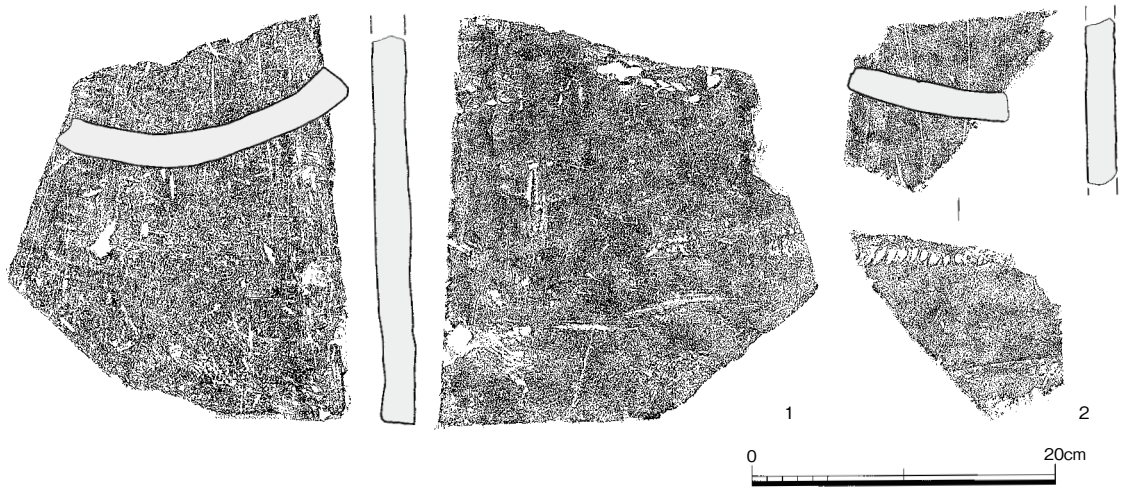


Fig.97　KI62瓦溜　平瓦（1：5）

半部周縁に沿ってナデ。側面の調整はナデ。瓦当面全面に掌文あり。外縁は遺存状況が良くない。（中川）

KI62瓦溜　瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片を、1点取り上げている。（中川）

その他には、平瓦2点（合計0.36kg）を取り上げている（Fig.97）。

1は、凸面不定方向ナデ。広端面はヘラケズリで、側面も全面ヘラケズリで調整する。凹面は全面ナデ調整、凹面広端縁をわずかに面取りする。室町時代に属する。

2は、凸面を工具によるヨコナデ後、棒状の工具で刻みを施す。側面はヘラケズリ、凹面は部分的にタテナデ、凹面側縁はヘラケズリで調整する。時期は不明である。

このほか二次的に被熱し、焼け膨れた瓦片が数点あるが、時期は不明である。（今井）

KH48瓦溜　丸瓦・平瓦を取り上げている（Fig.98）。

丸瓦の合計は6.1kgである。

1は、筒部狭端から玉縁凸面にかけて時計回りの回転ヨコナデ。玉縁凸面にはヨコ方向の明確な凹凸がある。玉縁と筒部の側面はヘラケズリで調整する。玉縁凹面は回転ヨコナデ後に、基部と側縁をヘラケズリ、さらに基部を指押さえする。2IB、飛鳥前・中期に属する。

2は、筒部凸面から玉縁凸面にかけて時計回りの回転ヨコナデ。側面はヘラケズリ、凹面側縁はタテナデで調整する。筒部凹面は未調整であり、側縁よりに粘土板合わせ目がみえる（Z型）。玉縁凹面は回転ヨコナデ後、側縁と基部をヘラケズリで調整する。2IBに属する。

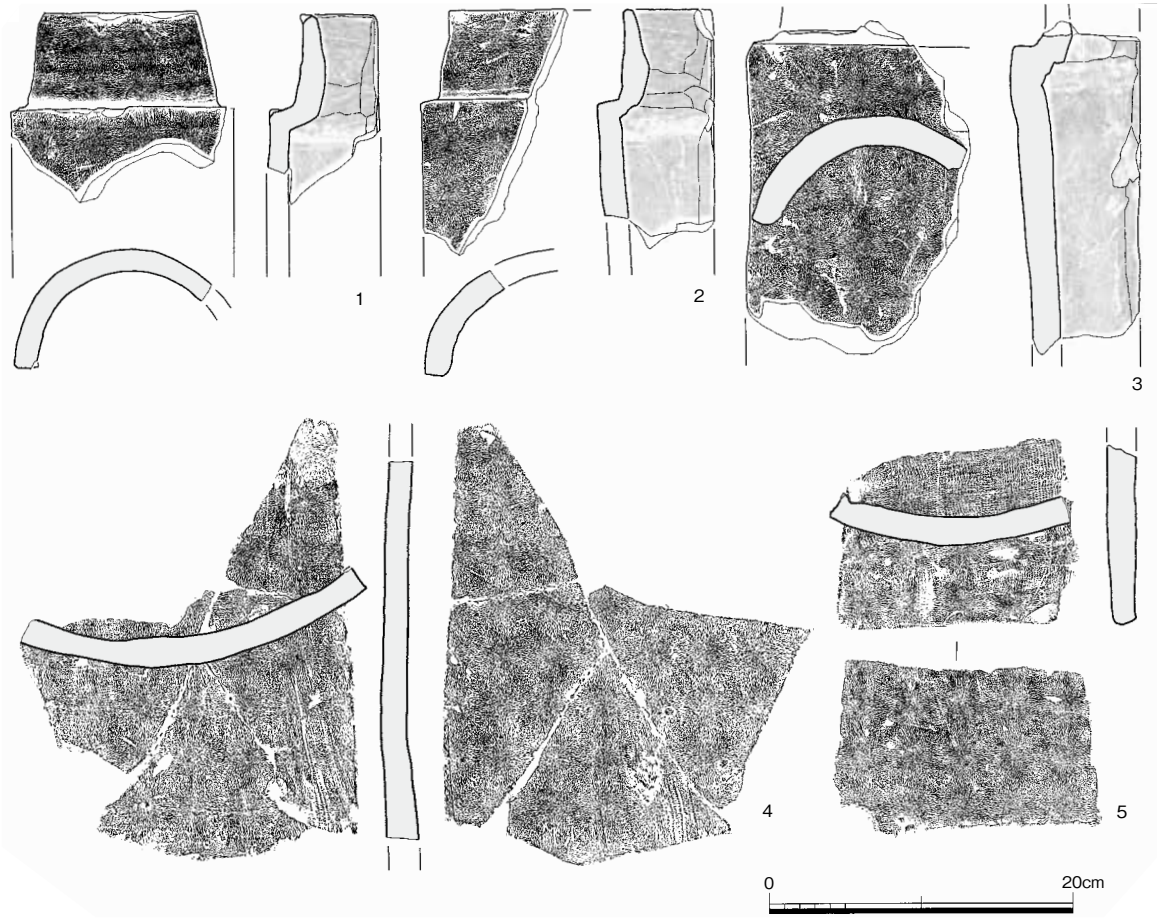
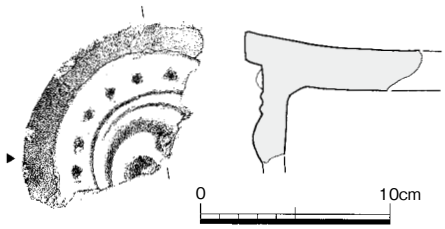


Fig. 98　KH 48瓦溜　丸瓦・平瓦（1：5）

３は、筒部凸面タテナデ。狭端沿いはヨコナデで、玉縁は欠損している。側面はヘラケズリで調整し、凹面側縁は面取りをしている。筒部凹面は未調整である。玉縁凹面基部はヘラケズリで調整する。２IB。

平瓦は、合計で18.0kgである。

４は、凸面タテナデ。狭端がわずかに残存する。側面は分割後未調整で、凹面側縁広端よりに分割界点が残る。凹面は部分的に強いタテナデ調整をおこなう。１IA３類、飛鳥前期にあたる。



５は、凸面タテナデ。広端沿いを幅５cmほどヨコナデ。側面は分割後未調整であり、凹面側縁に分割界点が残る。凹面は未調整である。１IA１類。（今井）

KE 47瓦溜　Fig. 99は、89 V。丸瓦が幅12cm、長さ９cmほど残存。丸瓦先端は未加工で、キザミの有無は不明。接合粘土は外面・内面ともに付加（Fig. 99写真）。瓦当裏面は平坦で、調整は不定方向ナデ。筒部凸面はタテ方向のヘラケズリ後、ナデ。また、側面はナデ、凹面側縁は丸く面取りをしている。筒部凹面の布目圧痕は、斜め方向に走る糸切

Fig. 99　KE 47瓦溜
軒丸瓦（1：4）・細部

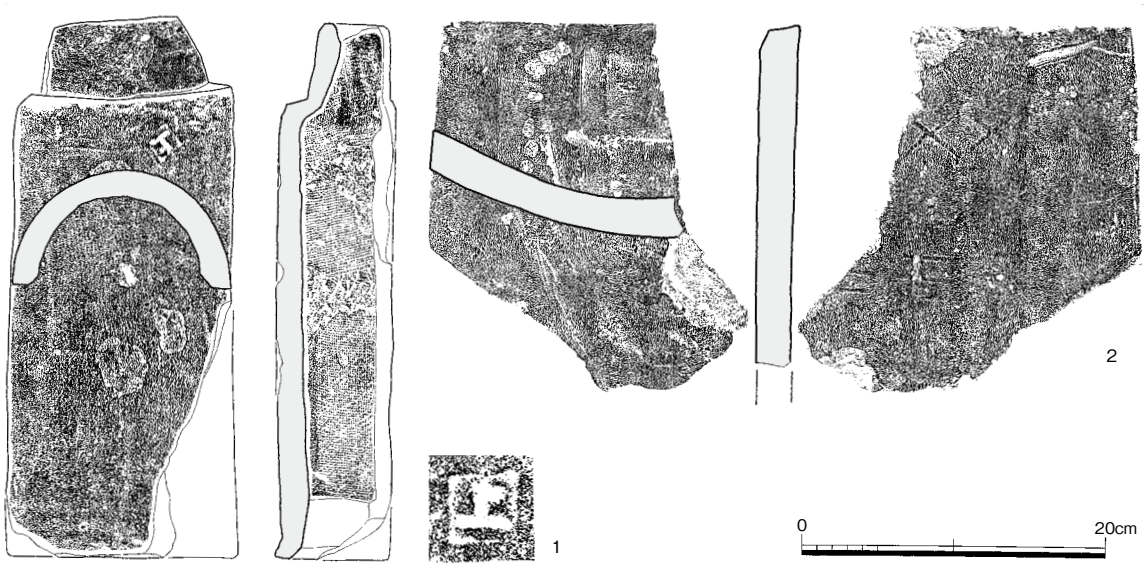


Fig. 100　KE 46新瓦溜　丸瓦・平瓦（1：5）

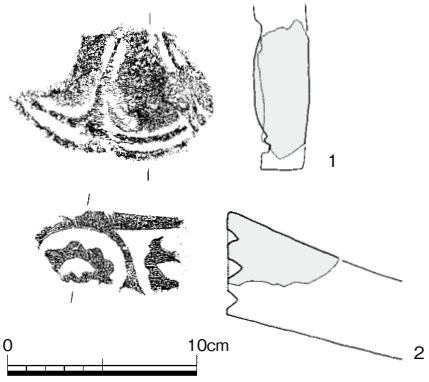


Fig. 101　KE 46瓦溜
軒丸瓦・軒平瓦（1：4）

り痕により不明瞭である。瓦当外縁角は面取りをしていない。丸瓦は厚さ2.1cm。（中川）

KE 46新瓦溜　瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片を、2点取り上げている。（中川）

丸瓦は、合計1.8kgである（Fig. 100）。

1は、筒部凸面がタテ縄タタキ。凸面狭端付近に「上」字の刻印がある。肩から玉縁凸面の調整は摩滅のため不明である。側面はヘラケズリで調整し、凹面側縁は面取りをおこなう。凹面は未調整であり、広端縁を面取りする。玉縁凹面側縁も面取りを施す。平安前期に属する。

また平瓦は、合計3.8kgを測る。

2は、凸面が「×」文と「三」文のタタキ後にタテナデする。側面と狭端面はヘラケズリで調整し、凹面は全面タテナデ、凹面狭端縁は面取りをする。鎌倉時代。（今井）

KE 46瓦溜　軒丸瓦・軒平瓦を取り上げている（Fig. 101）。1は7A。AaかAbかは不明である。焼成は軟質で全体に摩滅が激しい。瓦当下半部か。瓦当裏面は平坦。裏面、側面ともに調整は不明瞭である。

2は、206A。唐草文の中央にはピン穴があり、破損面の観察によって深さが0.5cmにも及ぶことがわかる。文様の輪郭にはケガキ線あり。凹面瓦当付近はヨコ方向のヘラケズリで調整する。（中川）

KC 45瓦溜　土器類が取り上げられている（Fig. 102）。

1は、須恵器杯H身の小破片から復原したもの。立ち上がりは内傾した短いもので、身も浅くなった段階のもの。復原した口径は立ち上がり端部で11.6cmを測る。TK 43型式に相当しよう（田辺1966）。

2は、体部と平底の境に退化した小さな高台を貼り付けている。底部と体部の境は肥厚し、体部に向

かって薄くなる山茶碗の形態に似る。高台付け根外面に重ね焼きに由来する不要な粘土が貼り付いている。12～13世紀の製品であろうか。

3は、須恵器広口壺の口頸部。下端は壺胴部にほとんど接しているとみられる。残存部分ではほぼ直立しているが、上方では外反する勢いをみせている。残存範囲下半には格子目タタキを斜めにかけたようなかすれた波状文が観察できる。1と同様に、6世紀の須恵器の混入とみなせよう。

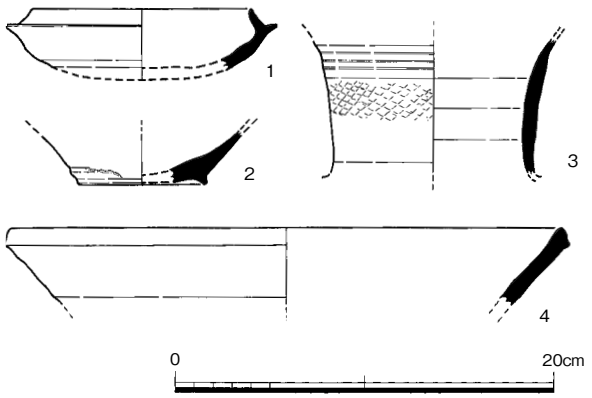


Fig. 102　KC45瓦溜　須恵器（1：4）

4は、須恵器鉢である。口縁端部は三角形にととのえられ、端面はそれほど広く拡張されていない。13世紀頃の製品か。復原口径29.2cm。（高橋）

瓦類も多量に取り上げている（Fig.103～106、PL.49）。

1は、3Bb。丸瓦との接合部にあたり、内面接合粘土ともに残る。接合方法片枘形b。内面接合粘土には、筒部凹面の布目圧痕が転写されている。瓦当裏面は中央にかけてやや高くふくらみ、調整は不定方向ナデ。側面は不定方向ナデ。瓦当面中房部分に掌文を認める。外縁上に笵端痕を残す。

2は、3Bbか。丸瓦との接合部が残るが、内面接合粘土は剝離痕跡のみである。接合方法片枘形a。瓦当裏面は大部分剝離し、調整は不明である。側面には不定方向のナデを施す。瓦当面にはわずかに掌文を認める。外縁上に笵端痕を残す。

3・4は、3C。3は、瓦当下半部。焼成は軟質で、全体的に摩滅がはげしい。丸瓦先端部のアタリがわずかに残る。接合方法は不明。瓦当裏面は中央にかけてやや高くふくらみ、調整はナデ。側面の調整は不明。瓦当外縁は大部分欠損しているが、残りの良い部分で笵端痕はみられない。4は丸瓦との接合部を大部分欠いている。接合方法片枘形bか。瓦当裏面は中央にかけてやや高くふくらみ、調整は不定方向のナデである。回転台を用いている可能性があるが、明瞭ではない。粘土が部分的に層状に剝離している。瓦当側面はナデ調整をしている。外縁上にわずかに笵端痕を残す。

5～8は、4A。5は、丸瓦との接合部にあたる。接合方法片枘形bか。瓦当裏面の調整は不定方向ナデ。側面の調整はナデで、若干外反する。外縁上に笵端痕は認められない。6は、丸瓦との接合部にあたる。接合方法片枘形b。内面接合粘土は部分的に残る。側面の調整はナデ。外縁上に笵端痕は認められない。7は、瓦当裏面が全体に剝離。側面はナデで調整する。外縁上に笵端痕は認められない。蓮弁先端は二重で、笵ズレの可能性あり。弁端の珠点に笵傷あり。8は瓦当下半部。裏面は中央にかけてやや高くふくらみ、調整は周縁に沿ってナデ。側面の調整はナデで、外反する。外縁上に笵端痕は認められない。

9・10は、6Cか。9は丸瓦との接合部にあたるが、接合方法は不明。内面接合粘土は剝がれて痕跡のみかすかに残る。支持ナデツケは施されていない。瓦当裏面の調整は不定方向ナデ。側面は全て欠損。10は外縁部が欠損しており、どの部分にあたるか不明。瓦当裏面には不定方向ナデ。

11は、6D。瓦当下半部か。裏面は不定方向ナデで調整する。側面は大部分欠損するが、わずかにナデが認められる。

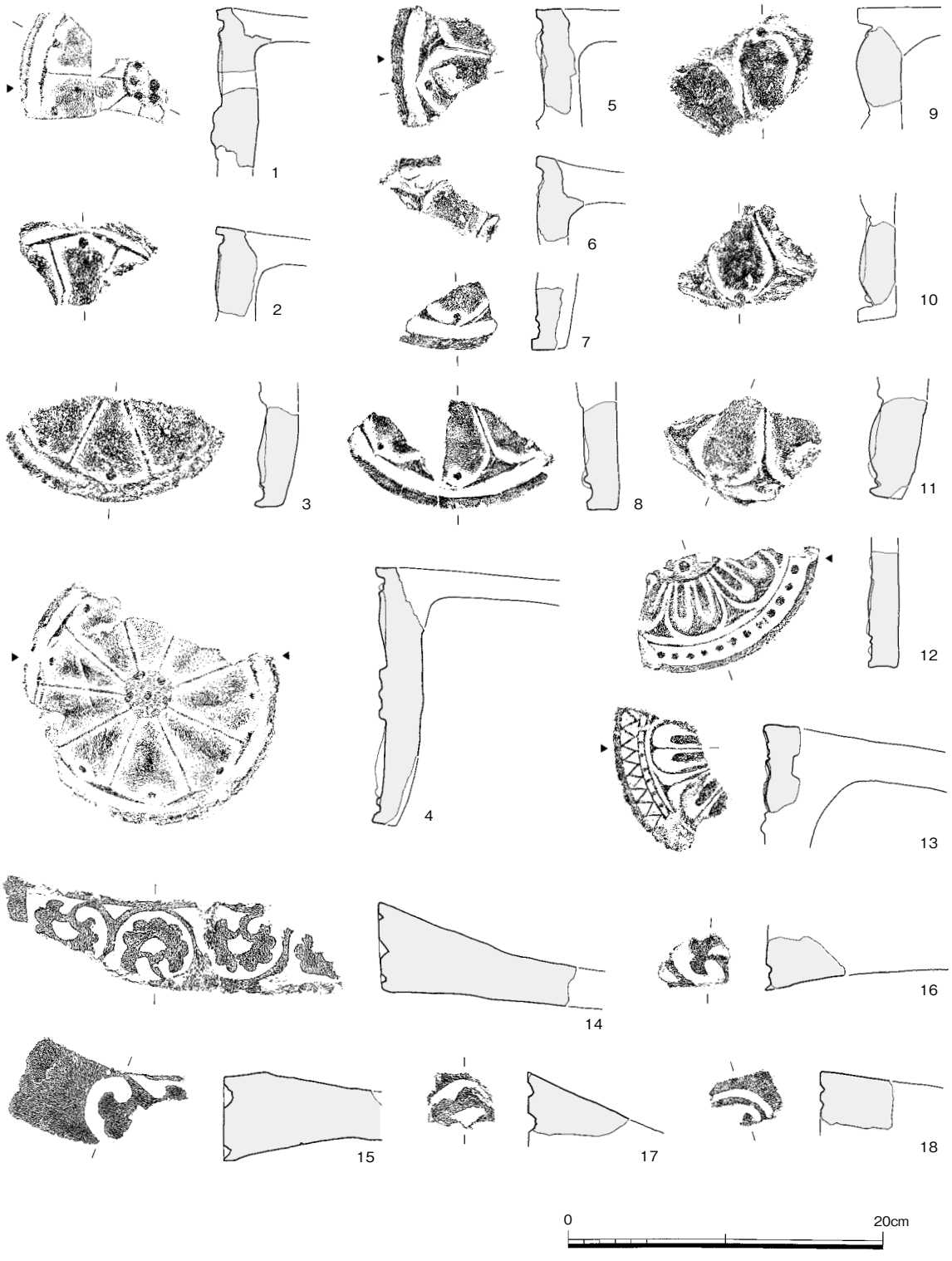


Fig. 103　KC 45瓦溜　軒丸瓦・軒平瓦（1：4）

12は、37Db。瓦当下半部で、丸瓦先端部のアタリがわずかに残る。裏面は平坦で、調整は不定方向ナデで、周縁に沿ってナデ。側面の調整はナデである。外縁上に笵端痕が認められる。瓦当面蓮弁には掌文あり。

13は、53A。丸瓦との接合部が残る。丸瓦接合溝は瓦当外縁から2cmほど内側に位置する。摩滅により調整は不明である。側面に残る笵端痕から、笵は側面にかぶるタイプと推測される。

14は、206A。法隆寺所蔵品と接合。直線顎。唐草文中央にピン穴、文様の輪郭にケガキ線があり、右端の唐草文下部には彫り残しがある（Fig.104－14）。凹面はタテ方向のヘラケズリ後にユビオサエを施しており、布目圧痕がわずかに残る。瓦当付近は斜め方向にヘラケズリ、凸面は狭端に向けてタテ方向のヘラケズリ、瓦当付近はヨコ方向のヘラケズリ、側面は狭端に向けてタテ方向のヘラケズリで調整する。

15は、208B。直線顎。ピン穴、ケガキ線ともになし。凹面には枠板痕が残る。また、ほぼ全面に布目圧痕を残し、側縁付近のみタテナデで調整する。瓦当付近はヨコ方向のヘラケズリで調整する。凸面は板状工具でヨコナデを施した後、ヘラ描き文を施す（Fig.104－15、瓦当が上）。瓦当付近のみヨコ方向のヘラケズリ、側面はタテ方向のヘラケズリで調整し、凸面側縁はわずかだが面取りをおこなう。

14

15

Fig. 104　KC45瓦溜　軒平瓦細部

16は、208か。直線顎。ピン穴、ケガキ線ともになし。凸面瓦当付近はヨコ方向のヘラケズリで調整する。

17は、210か。施文前にヨコナデ。凹面は狭端に向けてタテ方向のヘラケズリで調整し、瓦当付近はヨコ方向のヘラケズリ後、瓦当から幅2cmほどをヨコナデで調整する。

18は、211Aか。凹面はタテ方向のヘラケズリ。凹面側縁は幅1cmほど面取りをおこない、側面はタテ方向のヘラケズリ後、ナデ調整する。

このほか、瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片2点を取り上げている。（中川）

丸瓦は、合計6.5kgである。

19は、筒部凸面ナデ調整。狭端から玉縁凸面にかけて回転ヨコナデ、側面はケズリで調整し、筒部凹面側縁は面取りをおこなう。凹面は未調整であり、玉縁凹面はヨコナデ後、側縁と基部をヘラケズリで調整する。2IB、飛鳥前・中期。

20は、筒部凸面狭端から玉縁凸面にかけては時計回りの回転ヨコナデ。側面は2度のヘラケズリをおこない、筒部凹面側縁はナデ調整、凹面は未調整である。凹面玉縁接合部には紐状の窪みがある。玉縁凹面はヨコナデ後、側縁と基部をヘラケズリで調整する。2IB。

21は、筒部凸面ナデ。狭端沿いから玉縁凸面にかけては回転ヨコナデで調整する。側面は欠損しており、凹面は未調整である。玉縁凹面はヨコナデ後、基部をヘラケズリで調整する。2IB。

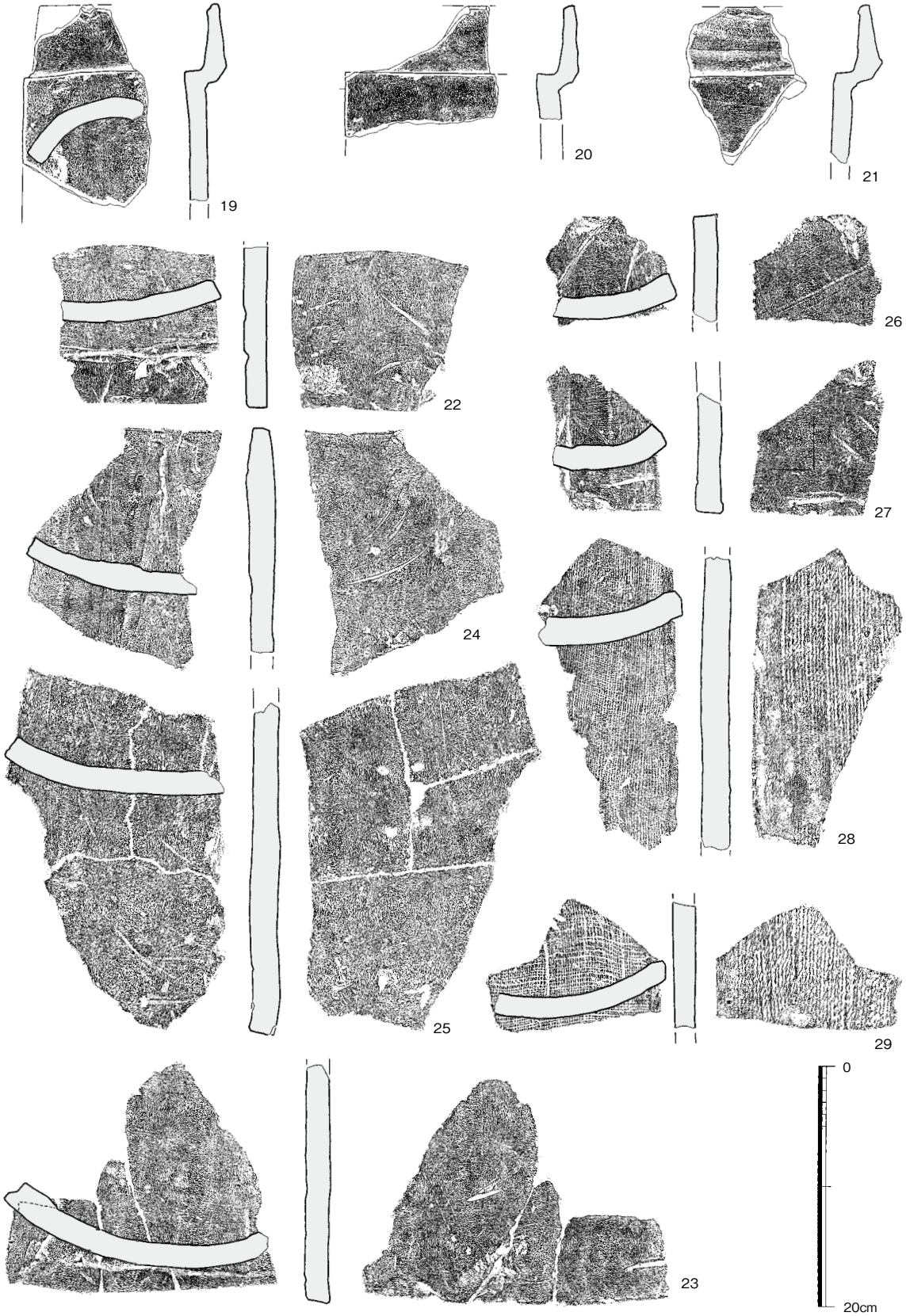


Fig. 105　KC45瓦溜　丸瓦・平瓦（1：5）

平瓦は、合計45.8kgである。

22は、凸面タテナデ。側面は欠損しており、広端面はヨコナデ、凹面は部分的にタテナデで調整する。端部より3cmほどのところには布端痕が残る。1IA2類、飛鳥前期に属する。

23は、凸面タテナデ。側面は分割後未調整、凹面左側縁沿いを幅広くヘラケズリで調整する。広端面はヨコナデ調整、凹面は一部ナデ調整で粘土板合わせ目（S型）、布端痕が残る。凹面中央には径1cmほどの窪みが3点、5.5cmの等間隔で並ぶ。ただし、広端からの距離は一致しない。1IA2類に相当する。

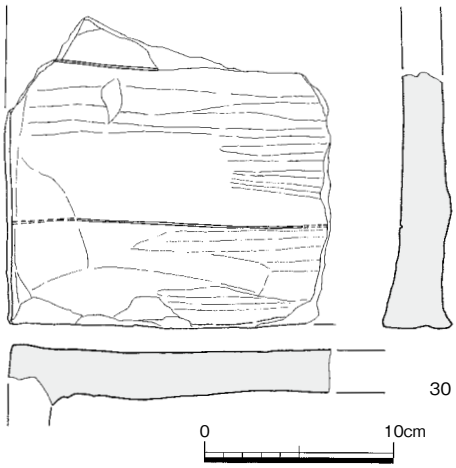


Fig. 106　KC45瓦溜　道具瓦（1：4）

24は、凸面タテナデ。側面は分割後未調整、狭端面も未調整である。凹面は部分的にタテナデ、特に粘土板合わせ目（S型）を狭端から広端方向へナデツケする。1IA2類に属する。

25は、凸面タテナデ。側面は分割後未調整、広端面は調整不明である。凹面は部分的に強いタテナデで調整する。1IA3類。

26は、凸面は斜行ナデ。分割後、破面をヘラケズリで調整、凹面側縁を軽く面取りする。狭端面はヘラケズリで調整する。凹面には枠板痕跡が残り、一部タテナデで調整する。1Ⅳ、白鳳時代に属する。

27は、凸面ヨコナデ。側面は分割後、破面をヘラケズリで調整し、凹面側縁を軽く面取りする。広端面はヘラケズリで調整する。凹面は一部タテナデで調整し、枠板痕跡が明瞭に残る。1Ⅳに相当する。

28は、凸面はタテ縄タタキ。端部を欠いており、側面はヘラケズリで調整する。凹面側縁は2度の面取りをおこなう。凹面は粗い布目圧痕で未調整である。平安時代。

29は、凸面はタテ縄タタキ。端部を欠いており、側面はヘラケズリで調整する。凹面側縁は幅のある面取りをおこなう。凹面は未調整で、粗い布目圧痕が残る。平安時代に属する。

道具瓦は1点を取り上げている（Fig.106）。

30は、鴟尾の胴部側面部分。側面はヨコナデ後に横位の細い沈線を描く。沈線の間隔は8．5cm。そのほか底部と頭部面の一部が残存している。裏面は軽いナデ調整。『至宝』の鴟尾5で、飛鳥中期に属する。（今井）

KC45瓦溜北凹み　土器を取り上げている（Fig.107、PL.34）。

土師器皿はいずれも小皿に相当し、1はいわゆるへそ皿で口縁部は大きく広がり、底径の2倍以上の口径をもつ。口径8.8cm、底径3.7cm、器高1.0cmを測る。胎土は淡褐色で15～16世紀頃のものとみられる。2は、平底に一段ナデの口縁をもつ小皿である。

3は1にくらべて口縁は短いが、底部は上げ底に作られており、4の方がさらに上げ底が顕著となっている。2～4は白色系土器に相当する。全体的にみて14世紀頃の年代を与えうる。2は口径8.0cm、器高1.4cm、3は口径7.5cm、器高1.0cm、4は口径6.8cm、器高1.3cmを測る。

5は、瓦器擂鉢である。片口部分の一部を残している。おろし目は8本でそれをかなり疎に付けてあっ

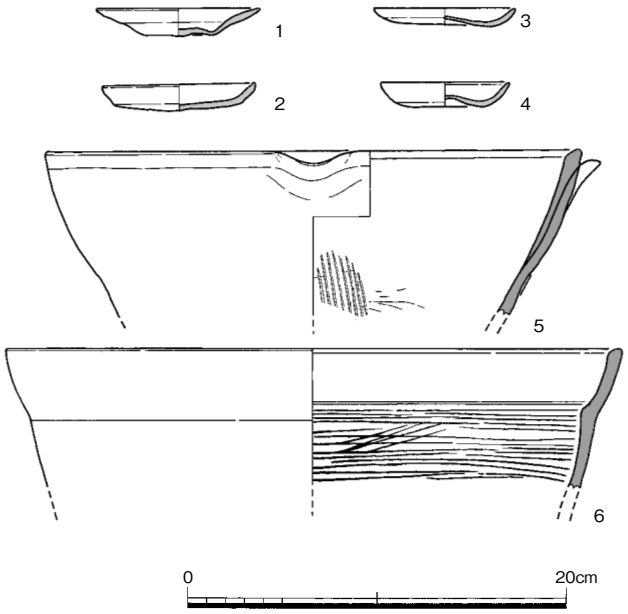


Fig. 107　KC 45瓦溜北凹み　土師器・瓦器（1：4）

たと思われる。ほぼ直線的に開く体部の口縁は他の例と異なり内傾する面をなす。体部外面はナデやオサエの痕跡しか認められない。畿内では瓦器擂鉢は14世紀後半以後みられるようになる。

6は、瓦器鍋で鉄鍋の形態を移した器形とされる。この種の器形は13世紀以後、16世紀までみられる（菅原1989）。口縁は直線的に開く体部から屈曲部をもって内湾気味に開いて、端部を単純に収めるもので、内面の屈曲部より下位には横方向のミガキが施される。また、内面の屈曲部のすぐ上に一条の沈線がめぐる。口径は32.4cmに復元される。（高橋）

TR 51瓦溜　瓦類を取り上げている（Fig. 108～110）。

1は、6D。丸瓦との接合部にあたるが、接合部をほぼ欠いている。接合方法は不明で、支持ナデツケは施されない。裏面は平坦で、調整は丸瓦凹面に沿ったナデ。側面は欠損している。

2は、37C。法隆寺所蔵品と接合する。接合方法楔形b。内面接合粘土は剝離して残っていない。支持ナデツケはない。接合部で丸瓦先端があたる部分にはナナメ方向のキザミ、凹面があたる部分にはタテ方向のキザミが転写される（Fig. 109）。瓦当裏面はほぼ平坦で、調整は不定方向ナデ。側面はナデ。外縁上には笵端痕。線鋸歯文帯に笵ズレがみられる。

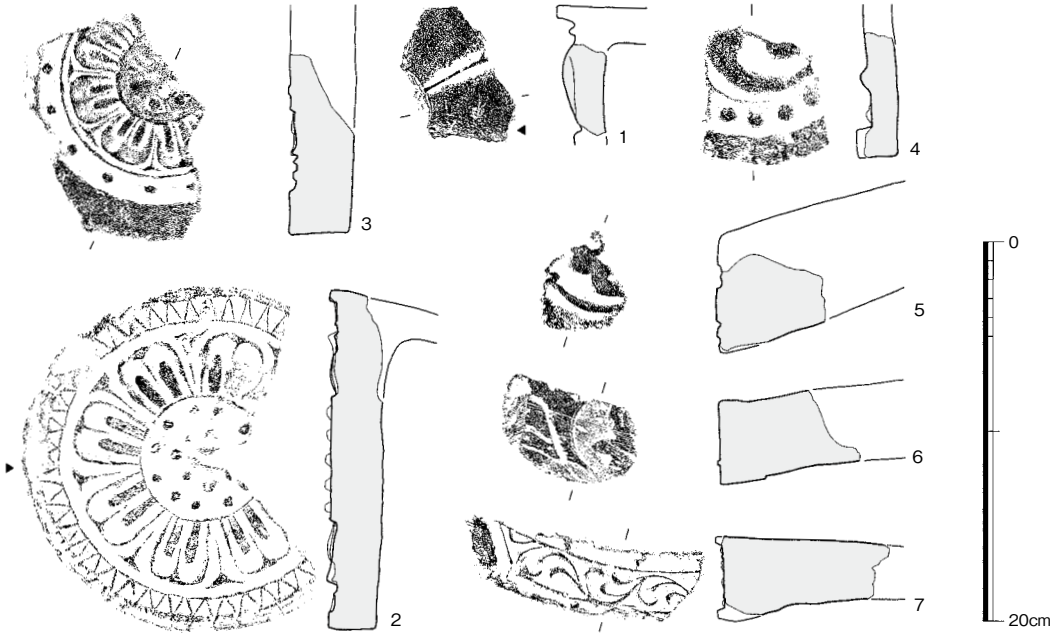


Fig. 108　TR 51瓦溜　軒丸瓦・軒平瓦（1：4）

３は、４８Ａ。焼成は軟質で全体的に摩滅。瓦当下半部にあたるか。裏面は平坦で調整は不明瞭である。側面にはかすかにナデが認められる。

４は、91Ｆ。瓦当下半部にあたる。裏面は平坦。裏面、側面ともに摩滅しており、調整は不明瞭である。

５は、２１３Ｂ。右側面を残す。側面、凸面の調整は摩滅のため不明瞭である。

６は、２１４Ｂ。左側面を残す。瓦当面はヨコ方向のヘラケズリ後、施文。凹面には布目圧痕が残るが、側面・瓦当付近はナデ消す。凸面の調整はヨコナデ。側面の整形は粗雑で、調整は不明瞭である。

７は、２４６Ａ。曲線顎。凹面は大きく破損するが、布目圧痕が残り、瓦当付近のみヨコナデをおこなう。凸面はタテ縄タタキ。側面はタテナデを施す。（中川）

丸瓦は、合計１.１kgである。

８は、筒部、玉縁とも凸面は回転ヨコナデ、方向は不明。凸面の肩部が剝離しており、筒部から玉縁まで成形したのちに、肩部を貼り足したことがわかる（Fig.１１０）。側面はヘラケズリで調整する。凹面は未調整で、筒部から玉縁にかけて布目圧痕が連続する。玉縁凹面基部には布をしぼる紐の痕跡が残る。２ⅡＡａ、白鳳前期に属する。

平瓦は、合計で２.４kgあったが、細片のみであった。（今井）

Fig. 109　TR 51瓦溜　軒丸瓦細部

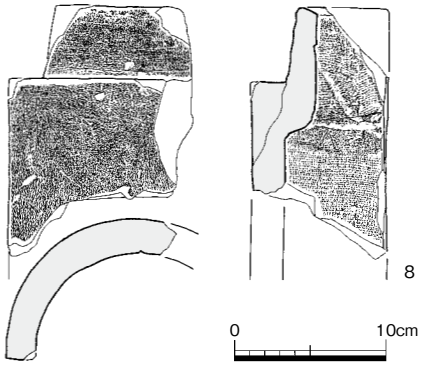


Fig. 110　TR 51瓦溜　丸瓦（1：5）

Fig. 111　SX 7097　軒平瓦細部

その他の遺構

SX 7097　２－６区南端にある凹みで、南北１.５０ｍ、深さは南端で０.８４ｍである（Fig.１７）。

軒丸瓦は、７２Ａ（Fig.１１２）。瓦当下半部にあたる。断面観察により、瓦当の成形粘土を２回に分けて笵詰めしたと推測される。裏面はほぼ平坦で、不定方向ナデが認められる。側面は、不定方向のナデで調整する。瓦当面には離れ砂が付着している。

２は、２１５Ａの大型品。焼成は軟質で、全体的に摩滅している。凸面で斜めに剝離がみられ、粘土板合わせ目（Ｚ型）の可能性がある（Fig.１１１）。凹面にはかすかに布目圧痕をとどめる。瓦当付近が一段高くなっているのは、笵の押圧時に生じたと考えられる。凸面の調整は不明瞭である。

３は、２４０Ａｂ。直線顎。凹面は瓦当付近まで布目圧痕を残し、未調整。凹面側縁は４mmほど面取り。凸面はナデか。側面はナナメ方向にナデ。（中川）

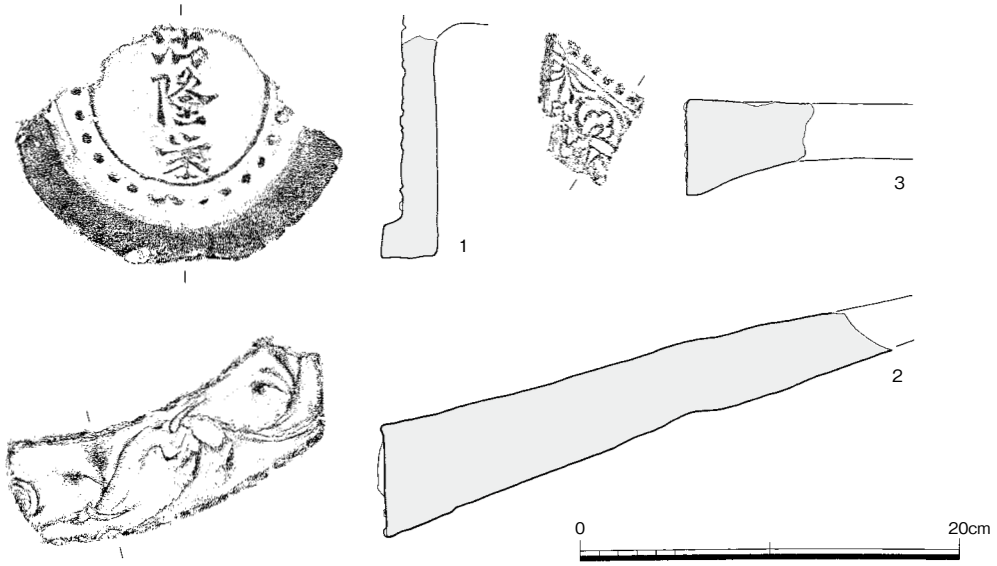


Fig. 112　SX 7097　軒丸瓦・軒平瓦（1：4）

TQ 47瓦敷　丸瓦・平瓦を取り上げている（Fig. 113）。このうち、丸瓦は、4.6kgあるが、細片のみであった。

また平瓦は、合計28.5kgである。

1は、凸面タテナデ。狭端面はナデで調整している。側面は分割後未調整であり、凹面側縁に分割界点がある。凹面は未調整であり、枠板痕跡が残る。凹面広端縁は幅1.5cmほどをヨコナデ。1IA1類、飛鳥前期に属する。

2は、凸面タテナデ。広端面はヘラケズリで調整し、側面は分割後未調整である。凹面側縁には分割界点がある。凹面は部分的にタテナデで、布端痕が残る。凹面広端縁は幅1cmにヨコナデが施される。1IA2類。

3は、凸面タテナデ。端部は欠損しており、側面は分割後未調整である。凹面は部分的にタテナデで、枠板痕跡が残る。1IA2類。

4は、凸面タテナデ。端部は欠損しており、側面は分割後未調整である。凹面は部分的にタテナデで調整する。1IA2類。

5は、凸面タテナデ。側面は分割後未調整であり、狭端面はヘラケズリで調整する。凹面は広端から狭端への強いタテナデで、部分的に布目圧痕が残る。1IA3類。

6は､凸面タテナデ。側面､端面は欠損している。凹面は部分的に強いタテナデで調整する。1IA3類。

7は、凸面は摩滅のため調整不明である。狭端面はヨコナデで調整し、側面は分割後未調整である。凹面は布目圧痕がほとんど残らず、粘土板合わせ目がある（S型）。飛鳥時代に属する。

8は、凸面端部沿いを幅4cmほどヨコナデする。側面は欠損している。凹面端縁は幅3cmほどの明確なヨコナデ、凹面は強いタテナデ、凹凸面のヨコナデ後に端面をヨコナデ調整している。1IA3類。

9は、凸面はナデ。端面と側面はヘラケズリで調整する。凹面は強いタテナデで、端縁を幅2cmほどヨコナデする。飛鳥時代に属する。

10は、小型品残片でSD 7040出土用途不明品（Fig. 63－50）と同類である。一方に向かって幅

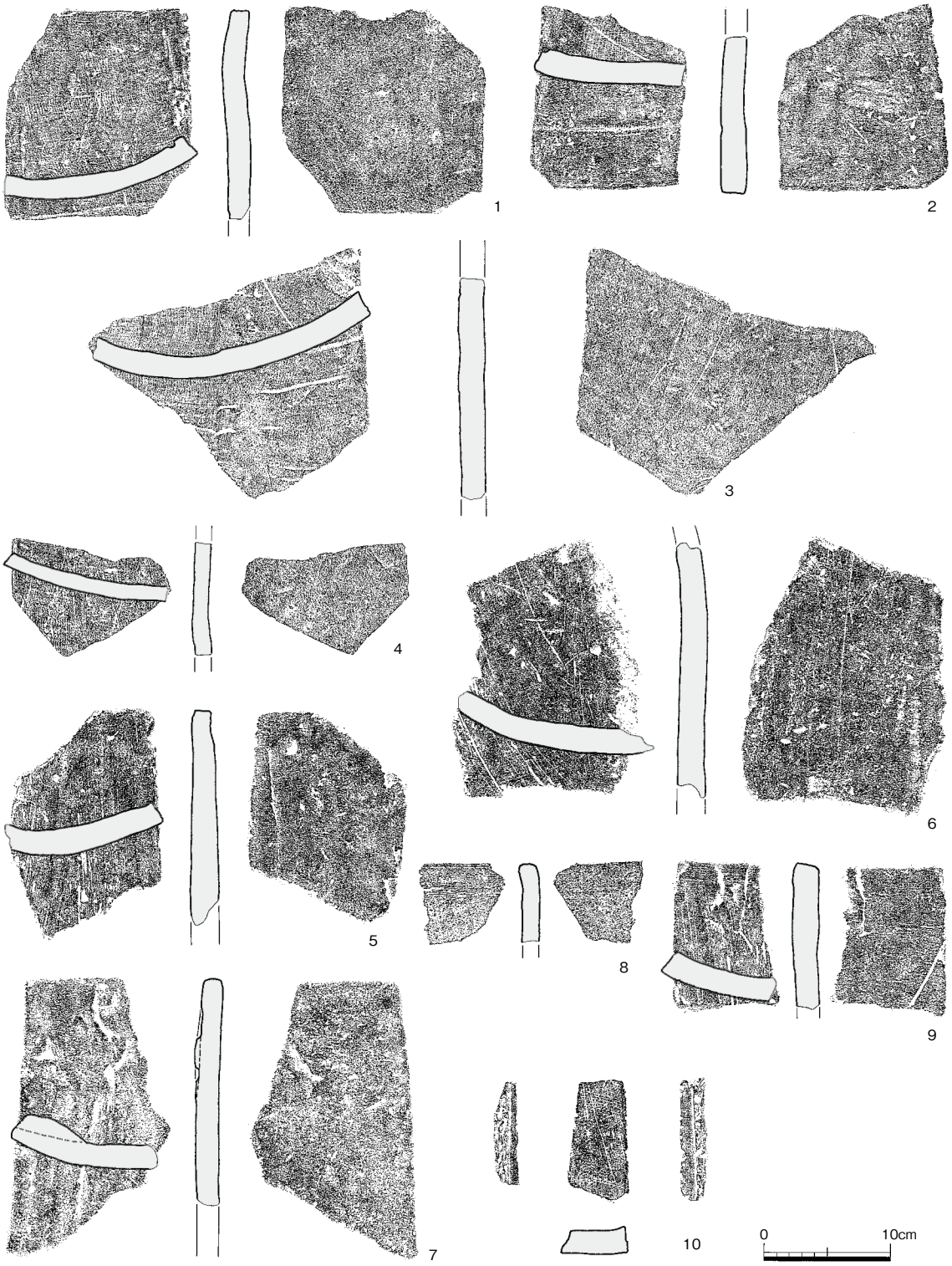


Fig. 113　TQ 47瓦敷　平瓦・用途不明品（1：5）

を縮小させ、凸面はタテナデ、両側面は分割後未調整であり、凹面は布目圧痕を残す。最大幅５.５cm、残長10.０cm、厚さ１.９cm。1IAの平瓦を使用して製作したと考えられる。飛鳥前期に属する。（今井）

KL 55凹み　土師器皿７点と肥前系陶磁器椀１点を図化しえた（Fig. 114－１～８、PL. 35）。

１は、平たい底部と段をもってヨコナデ調整された体部が立ち上がるもので、復原された口径10.０

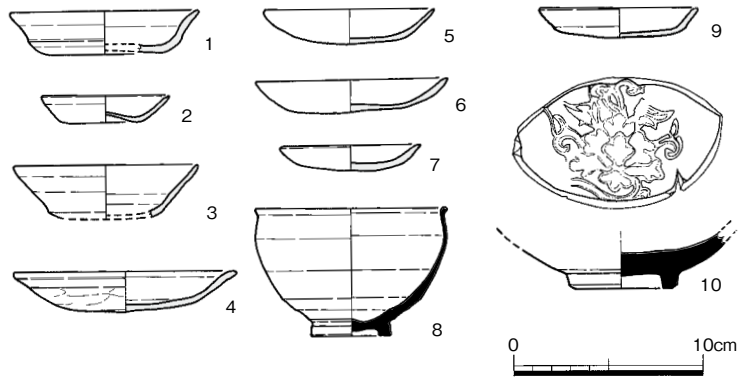


Fig. 114　KL 55 凹み・KC 46北落ち込み　土師器・陶磁器（1：4）

cm、高さ2.3cmを測る。赤褐色の胎土で、残存率も悪い。12～13世紀代の製品と思われる。

2・3は、いずれも白色系の胎土で3はとくに白い。2はいわゆるへそ皿で、口径6.8cm、器高1.5cm、1よりは新しく14～15世紀頃のものであろうか。3は口径9.6cm、深手の大皿に復原できるもの。平らな底部からほぼ外側45度の角度で体部が開く。体部はヨコナデし、口縁端部は薄く仕上げる。15世紀に下るものとみられる。

4～7は、いずれも水簸した精良な胎土の製品である。

4は、底部と体部の境が不明瞭なもので、口縁部付近のみヨコナデによって整えており、口縁端部を少し外反させ、その部分が若干肥厚する。口縁以下の部分はナデやオサエの痕が残る。16世紀以後のものであろう。口径11.8cm、器高2.2cmを測る。5と6は、薄手の小皿で、6が口径9.0cm、器高1.9cm、7が口径10.2cm、器高1.8cmである。これも底部から口縁部にスムーズに移行する器形をもち、口縁端部を薄く整える。7は、小型ながら厚手の単純な器形で、全体をナデにより仕上げている。口径7.4cm、器高1.4cmの小皿である。いずれも近世に下るものであろう。

8は、唐津焼とみられる椀。断面ほぼ正方形の輪高台に半球形に近い胴部を載せるもので、口縁端部のみ外側へ短く折り返し丸めている。体部下半にはロクロケズリ痕が明瞭である。淡灰褐色の胎土で、内面全面と外面上から3分の2の範囲には薄く灰緑色の釉を漬け掛けしている。器壁は薄く17世紀前半のものだろう。口径9.9cm、底径4.2cm、器高6.8cmである。（高橋）

TO 37中央凹み　大和H1型の土師器釜を取り上げている。肩部の長さが比較的長く、口縁端部の折り返しは小さい。体部はあまり球形に膨らまず、直線的なプロポーションをみせる。14世紀のものであろう。

KC 46北落ち込み　土器を取り上げている（Fig. 114－9・10、PL. 34）。

9は、土師器小皿で比較的丸みをもつ底部に短い口縁部がとりつく。一段のヨコナデによって、底部と体部の境にわずかな段がつく。口径8.4cm、器高1.6cmを測る。白色系の胎土で14～15世紀のものであろう。

10は、白磁椀の底部破片である。断面が外側の隅を面取りした五角形の削りだし輪高台を有し、鉢ないし椀形の器形になるものと思われる。底部中心付近の器壁は1.2cmと厚く、重い。内面にはスタンプによる陰刻で複雑な文様を付加している。表現は細く流麗な線によるものではなく、しっかりとした幅のある陰刻である。この文様は、中心にクローバー状の文様単位を十文字に配し、渦のように巻く蔓状の文様を左右に、角状の文様とからまりながら蔓状に伸びる文様を上方に左右対称に続けるというものだが、どのような全体像になるかは不明である。この内面のすべてと、外面の高台を少し離れたところまで透明な釉をかけている。付け掛けしたときにできる露胎部分との境界が外面にはっきり確認で

きる。底径５.０cm。（高橋）

包 含 層

バラス土層（含礫暗褐色土層）　バラス土層は、1939年の調査では、金堂伽藍に伴う「小石敷」とされており、金堂の周囲に幅12尺で廻ると判断された。今回の調査においても金堂基壇北側の２－12・17区および南側の１－２区、２－15・17・18区で検出されている。金堂周辺に限って分布しており、塔基壇周囲を含め、他には分布しない。バラス土層は１－２区1939北溝２東壁面（Fig.41）、２－18区西壁面（Fig.45）では第２整地土層の直上に、また、２－17区西壁面（Fig.44）では第２整地土層の上に間層（暗褐色砂質土層）を挟み、その上に堆積する。調査開始当初から、このバラス土層の検討が重要課題の一つであった。日誌によれば、開始間もない1969年10月２日、「石田博士のトレンチを確認するとともに、「石敷」を追求する」と、記録されており、当初からその実体解明を目指していたことは明らかである。実際、バラス土層をめぐって特に綿密な検討がなされている。第２次調査では、この礫層の下からも中世の土器が出土しており、また、この下層の第２整地土層面で検出した穴（遺構）から平安時代より下る時期の土器が出土している。たとえば1969年10月12日の日誌には「KB45でバラスの下から中世の燈明皿を検出した」、あるいは1969年10月14日の日誌に「バラス土を除去。黄褐色土面に多数の小穴を検出。バラス土中及び穴から出土する土器は、平安後期～鎌倉初期のものが多く見られる」などとある。以上の検討からも、このバラス土層は若草伽藍創建当初の遺構とは結びつかない。しかしその分布状態から、バラス土層の内側にバラスのない範囲があり、この範囲がほぼ掘込地業の範囲に一致している点に注意したい。バラスがある原因については、不明としなければならないものの、出土遺物の検討によってバラス土層を敷いた年代が14～15世紀を遡らないので、その頃まで若草伽藍の金堂基壇がある程度の高まりとしてあった可能性を指摘できよう。（深澤）

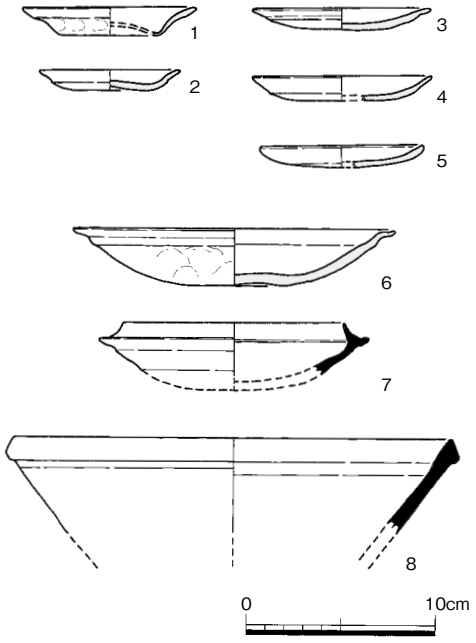


Fig. 115　バラス土層
土師器・須恵器（1：4）

KB45バラス土下　土器を取り上げている（Fig.115－1・2）。

１は、口縁部が外反しながら広がるへそ皿で、体部外面に指頭圧痕が顕著にみえる。赤褐色の胎土で、他の地点でも出ている同種の土器と同様14～15世紀頃のものとみられる。口径９.０cm、器高１.５cm。

２は、短い口縁をもつ一段ナデ調整の小皿で、白色系の胎土をもつ。底部がやや上げ底になる小皿で、１に共伴したとみなしてさしつかえない。口径７.４cm、器高１.１cm。（高橋）

KA46・KB45・46バラス　鉄滓は、２点が取り上げられている。大小あり、大きいものは477.４ｇをはかり、内実質である（PL.31－ｄ、Tab.７）。（次山）

土器も出土している（Fig.115－３～８）。

３～５は、各種小皿。３は「て」の字状口縁の小皿が摩滅により断面の輪郭が甘くなったもの。口径９.２cm、器高１.２cm。橙褐色の胎土で、６とほぼ同時期のもの。

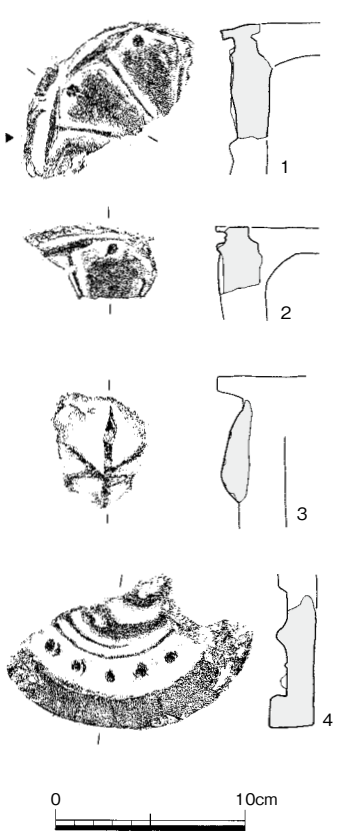


Fig. 116　バラス土層
軒丸瓦（1：4）

４～５は、それより後出する型式で赤褐色系の土器。４の口径９.４cm、器高１.３cm、５は口径８.６cm、器高１.２cm。底部に指頭圧痕がよくみえる。

６は、古代の杯Ａの系譜を引く土師器大皿。口径は17.0cmで器高３.０cmと浅い杯形。口縁端部は強めのナデを施し、端部は軽くつまみ上げる。口縁を除く体部外面はユビオサエが顕著に残る。橙褐色の胎土で器壁は荒れている。11世紀に遡るとみてよい。

７は、古墳時代の杯Ｈの小片を図化したもの。先のKC45瓦溜出土品とほぼ同様なものである。そして８が須恵器鉢。拡張された口縁端部が若干下方に垂れる特徴をもち、14世紀に下るものであろう（宇野1984）。（高橋）

次に瓦を報告する（Fig.116）。

１は、３Bb。丸瓦と瓦当の接合部の構造が良好に残る。接合方法片枘形ｂ。丸瓦先端の一部が瓦当に貼りついて残る。内面接合粘土は剝離して痕跡のみである。瓦当裏面は中央にかけてやや高くふくらむ。調整は不定方向ナデ。側面はナデ。外縁上に笵端痕を残す。

２は、３Bbか。丸瓦との接合部にあたる。内面接合粘土は残っていない。接合方法片枘形ａ。裏面は剝離しており、調整は不明である。側面はナデ。外縁は欠損しており、笵端痕の有無は不明である。

３は、33Ａ。焼成は軟質で全体的に摩滅している。裏面は剝離しているため、調整は不明であり、側面も欠損している。

４は、89Ｖ。瓦当下半部にあたる。裏面は平坦で、調整はヨコナデを中心とした不定方向ナデである。周縁は回転ナデ、側面はナデが施される。外縁角に面取りはほとんど施さない。

このほか、瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片を、３点取り上げている。（中川）

KB50バラス上面　鉄製品を、２点取り上げている。うち１点は完形の角釘で、長さ５.０cm、幅０.８cm。頭のつくり出しのない平釘。（次山）

炭化物層・木炭層　木炭層と炭化物層は、調査途上にある1968年８月３日と同年９月１日の調査日誌によれば、土坑と認識されているが、その後作図された図面をみる限り、１－10区と１－11区にまたがって検出された包含層とされており、東に低い傾斜堆積をなしている（Fig.29）。東西方向で、５.５mにわたって検出されている。西で厚く20cmあり、東にいくにしたがって次第に薄くなり、土層としては消滅する。壁面原図には、１－10区は、「黒色土（炭火物層）」とし、「瓦（古い）」、「フイゴ口、鉄滓、木炭片等、焼土層」と注記する。１－11区では、「灰色粘土（木炭片、遺物を含む）」とし、「遺物は地山にはりついている」と注記する。なお壁面原図の１－10区と１－11区の間にある畦畔部分に、赤線で東西の土層の対応が示しており、これによるとここに挙げた両層は同一の層位と認識されていたことが明らかである（PL.27－２）。（深澤）

遺物は、まず鍛冶関係のもので、鞴羽口、半筒形土製品、炉壁片、鉄滓が出土している（Fig.117

～119）。

１～８は、鞴羽口である。８点を図示したが、このほかに小片が13点ある。全体の形状は、先端にむかってわずかに径を減じ基部が広がるもので、いずれも共通の特徴が認められる。もっとも遺存状態のよい１で、残存長17.8cm、外径約7.5cm、内径約3.4cmを測る。外面は長軸方向に沿った幅２cmほどの匙面により構成されるが、簾状の明瞭な痕跡は認められない。２では、親指の指腹の圧痕を２箇所に残し、３では、ひねったような粘土の皺を器面にとどめる。表面には被熱による変色がみられ、先端から、黒灰色の溶融部、灰褐色、灰白色、橙褐色となる。胎土は、全体に粘土質で大粒の砂粒を含む。

Fig. 117　炭化物層・木炭層　鍛冶関係遺物

９および10は、半筒形の土製品である。同一個体片と考えられる２点を図示した。残存長17.5cm、高さ約９cmとなる。外面の変色の様子が羽口と共通し、灰褐色、灰白色、橙褐色となることから、灰褐色の側を先端、橙褐色の側を基部とする。長軸方向で厚さが異なり、基部は厚みを減じながらわずかに外反する。また両側縁は薄くおわる。外面は長軸方向に沿ったナデ調整をおこない、部分的に粘土を塗り足した箇所がある。灰白色部には帯状の器面の荒れが認められ、内面は全体が著しく風化している（PL.31－ｂ）。羽口に較べ胎土中の砂礫の粒が大きく含有量も多い。この半筒形品は、全体の形状や被熱の様子から、羽口と組み合わせて用いられたと考えられる。間宮林蔵の口述をもとに編纂された『北蝦夷圖説』には、「鍛冶図」として、羽口先端および炉にかかる位置にアーチ状の覆いが描かれており、本資料の性格を考えるうえで参考になる。

11は炉壁片で、６cm四方、厚さ3.0cmの三角柱状の小片である。強く熱を受けたと考えられる面を内面とすると、内面は暗赤色でガラス化した溶融状態がみられる。外面は暗灰色を呈し、気泡もわずかである。胎土内には藁スサの痕跡をとどめる箇所が認められる。

鉄滓は、全体で17点出土した（PL.32、Tab.7）。大きさは３cm未満のものから、15cmほどのものまでがある。このうち、14～17は、底側に曲面をもち浅い皿状を呈する椀形滓である。１は表面にガラス質の溶融箇所があり、10・15・16には、底面に灰白色を呈する炉底土の溶融固着層の付着が認められる（PL.31－c・32－ｂ）。また、2・4・12・13・17は、重量感のある内実質の滓である。（次山）

TO34とTO35といった隣接する調査グリッドからそれぞれ以下の土器が出土している。

TO35炭化物層出土土器で図化しえたのは土師器２点と須恵器１点である（Fig.120）。１は、口縁

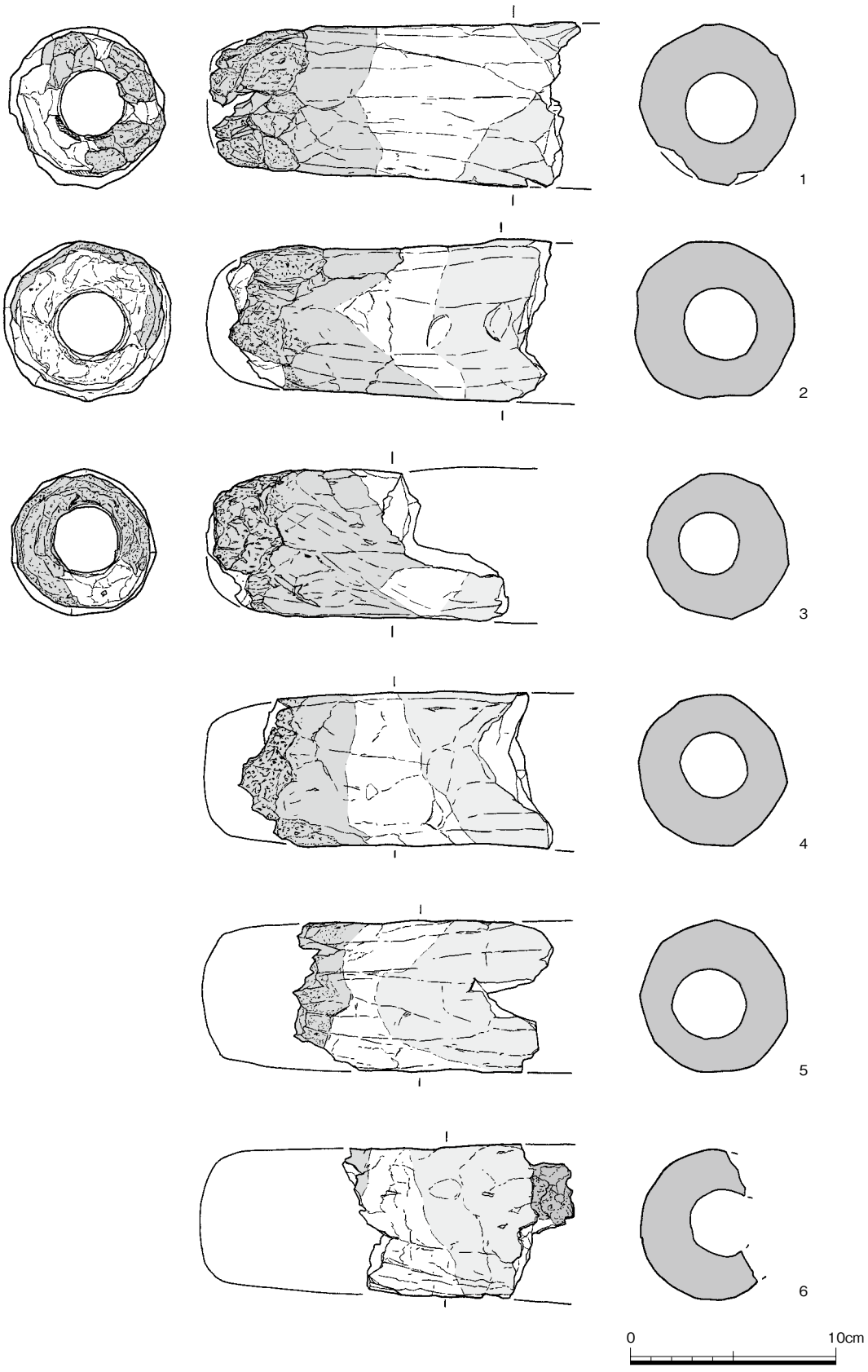


Fig. 118　炭化物層・木炭層　鍛冶関係遺物１（1：３）

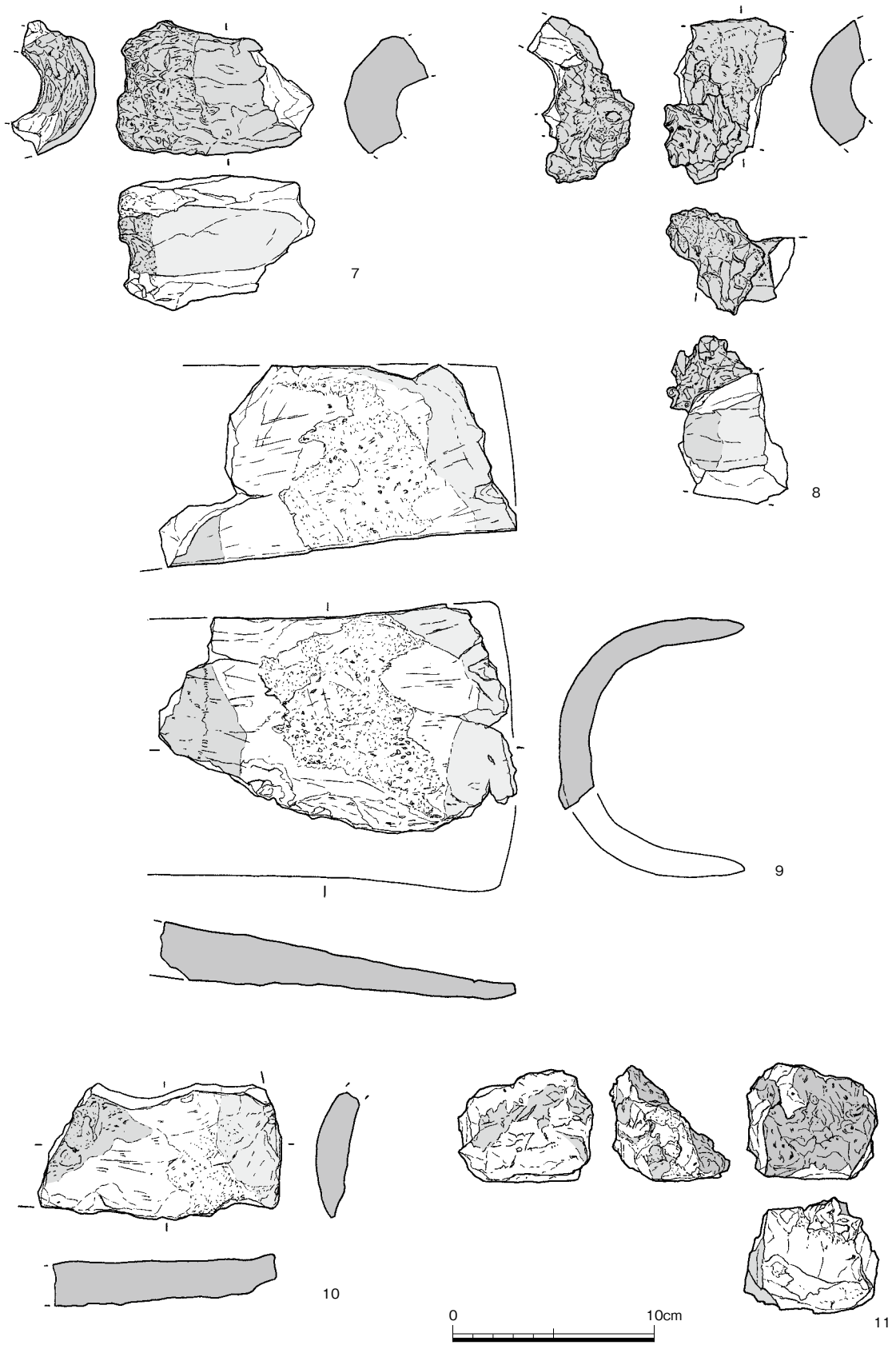


Fig. 119　炭化物層・木炭層　鍛冶関係遺物２（１：３）

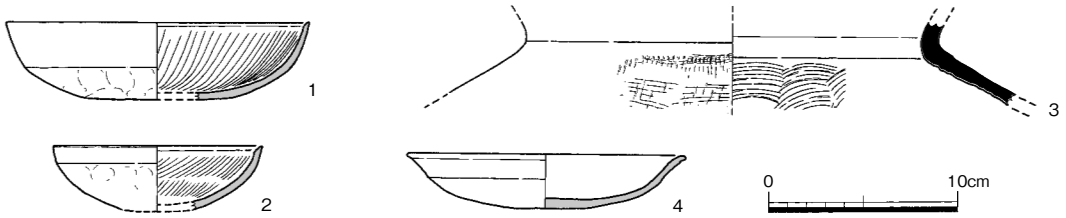


Fig. 120　炭化物層・木炭層　土師器・須恵器（1：4）

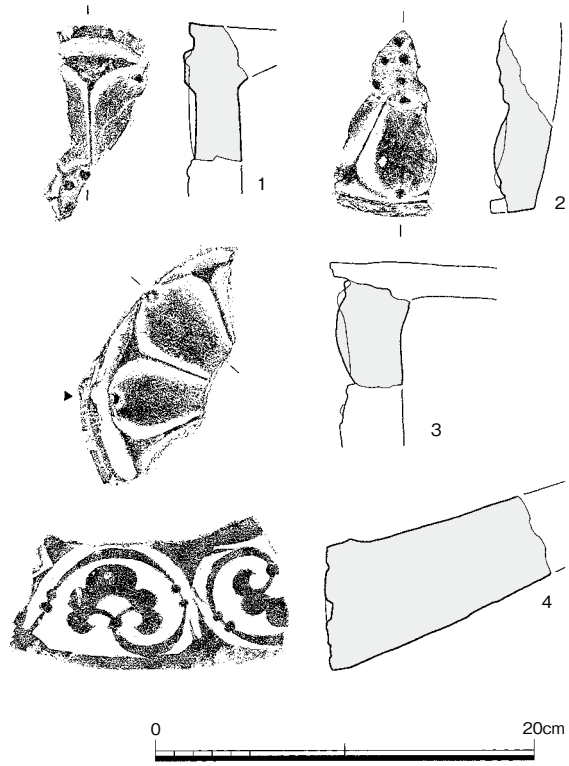


Fig. 121　炭化物層・木炭層　軒丸瓦・軒平瓦（1：4）

Fig. 122　炭化物層・木炭層　軒丸瓦細部

端部に内傾する面をもち、丸味のある杯形の体部をもつ杯Ｃである（PL.34）。口径は16.0cm、器高4.1cmを測る。外面下半にはユビオサエの痕跡が残るが、内面には一段の放射状暗文を施してある。一方、２は径11.0cmの小型の杯Ｃ小片から図化したものである。内面に二段の放射状暗文がかろうじて確認できる。１･２とも、橙褐色の胎土の製品である。

このほかにも放射状暗文をもつ別個体の破片もあるが、図示しえない。

３は、須恵器甕の頸部片を図化したもの。体部外面は格子目タタキ、内面は同心円の当て具痕をとどめる。体部の破片はほかにもある。

これらの資料は、飛鳥Ⅲあるいは Ⅳにほぼ該当し（西1986）、７世紀後半の一括資料とみなせよう。

ＴＯ34木炭層出土土器である４は、土師器の皿で、丸みをもった底部と外反する口縁からなるもので、外面は一段のヨコナデで仕上げている（Fig.120、PL.34）。砂粒を含む橙褐色の製品であり、特徴にとぼしく時期を限定するのが難しい。10世紀後半～11世紀前半頃のものであろうか。ＴＯ35炭化物層の土器群とは一括性において明らかに区別される。口径14.8cm、器高2.9cm。（高橋）

また瓦も出土した（Fig.121）。

１は、４Ａ。丸瓦との接合部が残る。接合方法は、片枘形ａかｂ。内面接合粘土は大部分が剝離し、わずかに残る部分にヨコナデが認められる。瓦当裏面はほぼ平坦で、ナデが認められる。側面の調整はナデであり、瓦当縁端に笵端痕は認められない。

２は、６Ｄb。瓦当下半部が残る。裏面は中央にかけて高くふくらみ、中心寄りは不定方向ナデで、

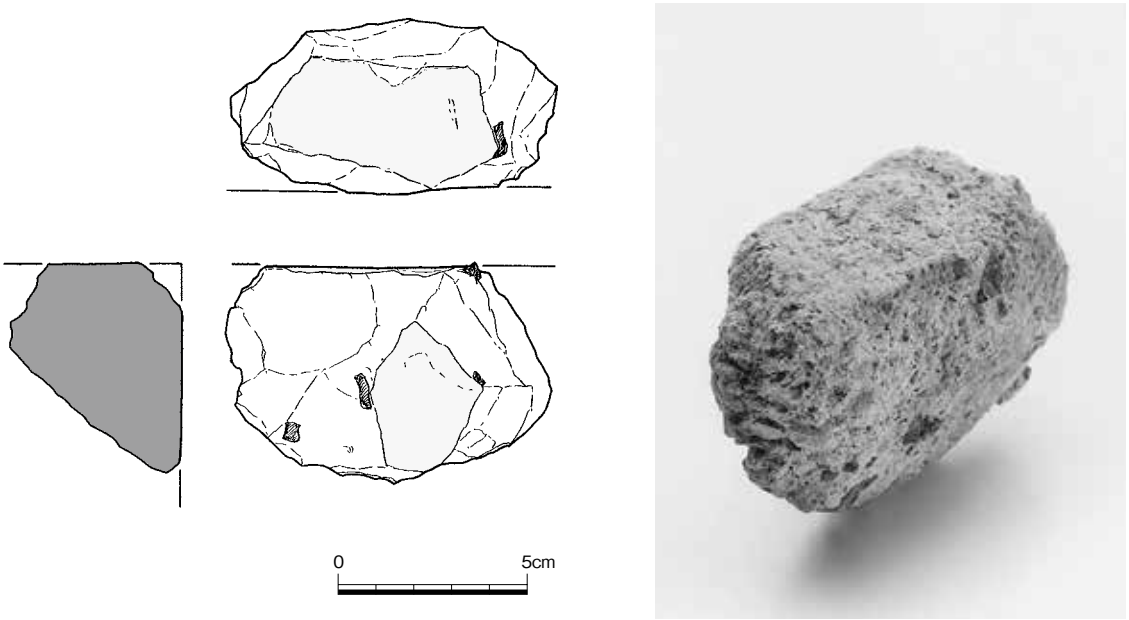


Fig. 123　黄褐色土　凝灰岩片（1：2）

さらに周縁に沿ったナデが認められる。側面にはナデが施される。

３は、６Ｄ。丸瓦との接合部が残る。接合方法は楔形ａ。内面接合粘土は一部残る。支持ナデツケは施されていない可能性が高い。瓦当裏面は中央にかけてやや高くふくらみ、中央寄りには不定方向ナデで、さらに周縁に沿ったナデが認められる。内面接合粘土は横方向にナデつけられる。側面はナデ。瓦当面にはわずかに掌文を認める。

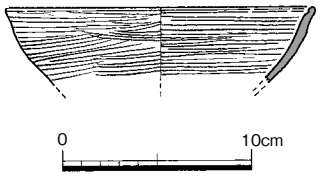


Fig. 124　黄褐色土
黒色土器（1：4）

４は、213Ｂ。焼成は軟質で、全体的に摩滅。唐草文の施文方向は左から右か。笵傷あり。凹面の調整は不明瞭。凸面はヨコナデか。凹面の瓦当付近が一段盛り上がっているのは、スタンプの押圧によるためと考えられる。（中川）

黄褐色土　黄褐色土あるいは黄褐土とされた土層から凝灰岩切石片と土器、それに瓦が取り上げられているが、土層の性格は不明である。（深澤）

凝灰岩切石片は、長さ８.２cm、厚さ４.５cmの凝灰角礫岩の破片である（Fig.123）。全体に破損が著しいが、加工痕を残す２面はほぼ直角をなす。KB50出土。調査日誌によれば、第２次調査金堂南面中央トレンチにおいて、金堂南縁にあたる位置で出土したものであることが知られる。同様の凝灰角礫岩の砕片は、金堂東側で検出したKC45瓦溜からも出土しており、金堂の基壇外装を知るうえで重要な資料である。（次山）

また黒色土器椀が出土している（Fig.124）。口縁部はヨコナデによってわずかに外面がくぼむ。端部内面には痕跡的に沈線が施されている。外面は比較的密に静止状態でのヘラミガキ、内面にも平行するヘラミガキが密に施されている。調査区からの黒色土器の出土は非常に少なく、SE7074井戸出土品とともに11世紀に下る頃のものであろう。復原口径16.２cm。（高橋）

次に軒瓦を報告する（Fig.125）。

１は、３Bb。瓦当完存。接合方法は片枘形ａ。丸瓦はわずかに一部が貼りついて残るが、内面接合

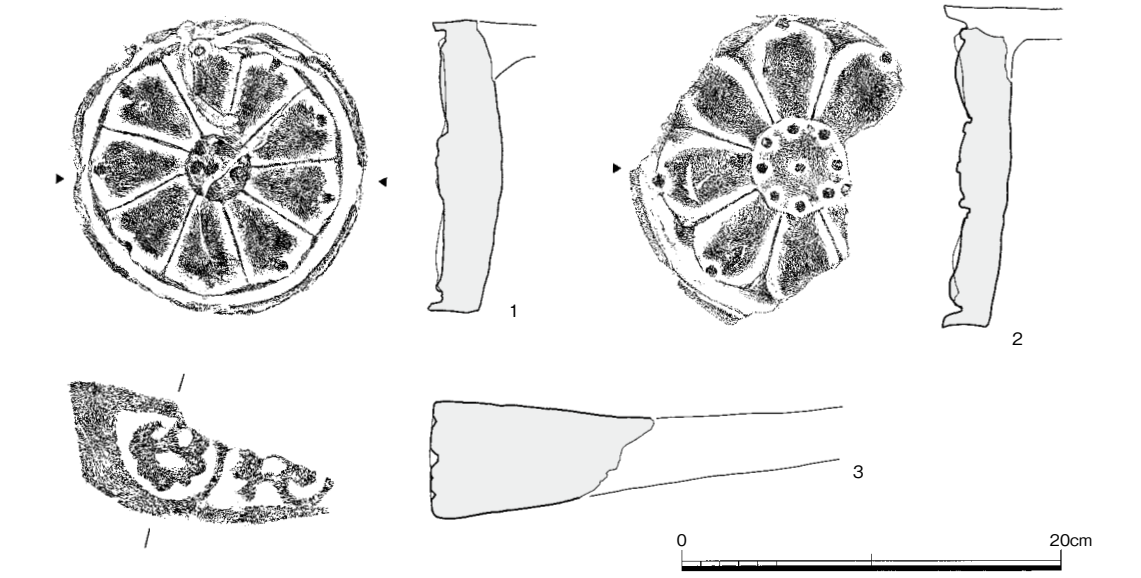


Fig. 125　黄褐色土　軒丸瓦・軒平瓦（1：4）・細部

粘土は痕跡のみである（Fig. 125写真１）。瓦当裏面は中央にかけて高くふくらみ、中心は粘土が寄せられてやや突出する。調整は不定方向ナデ。側面の調整はナデ。瓦当面には一面に掌文があり、外縁上には笵端痕が残る。

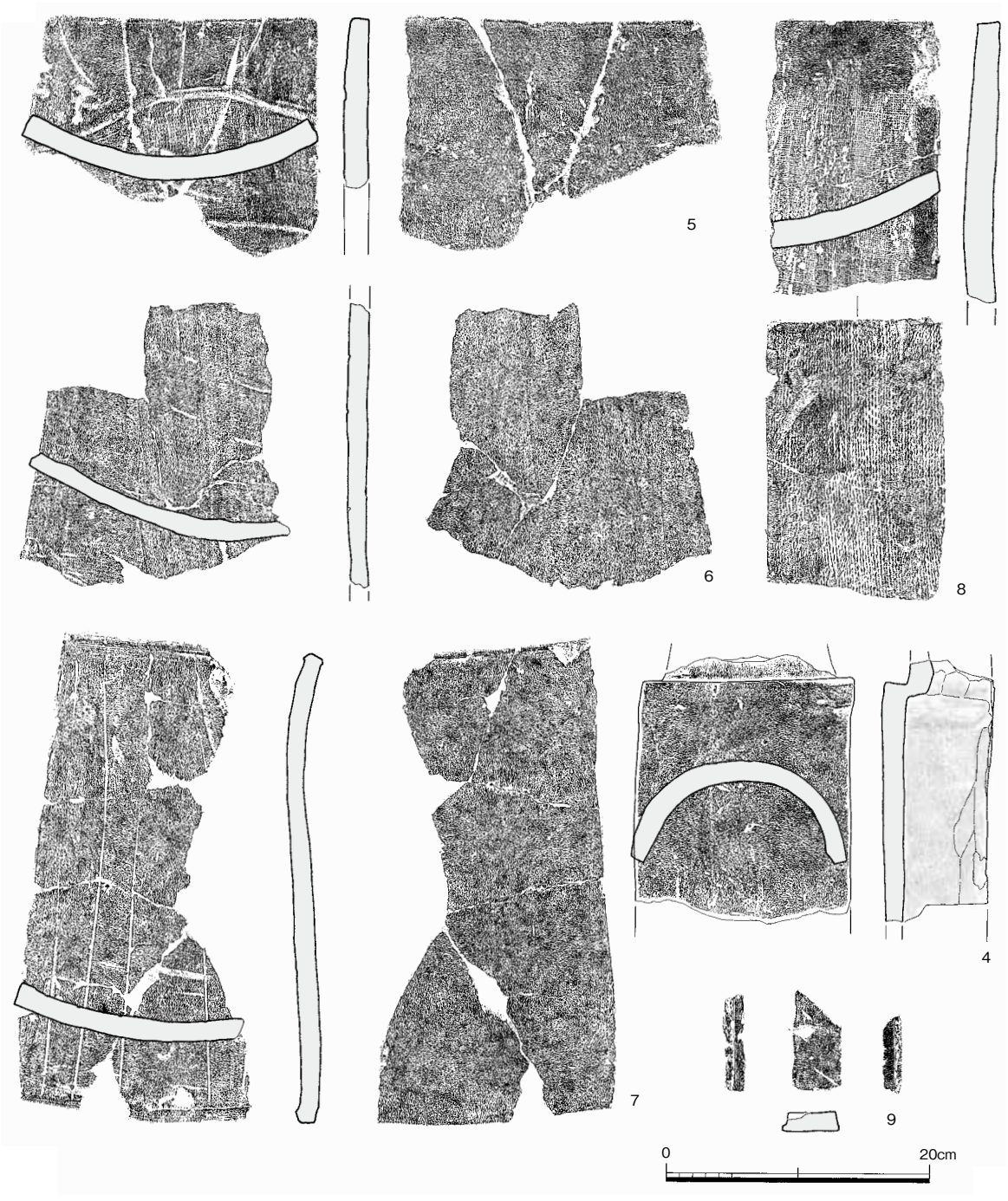
２は、６Da。接合方法は楔形ａかｂ。内面接合粘土に丸瓦凹面の布目圧痕が転写されておらず、ｂの可能性が高い。内面接合粘土は瓦当粘土と隙間なく密着しており、丸瓦接合の際に支持ナデツケが施されていると考えられる（Fig. 125写真２）。瓦当裏面は中央にかけてやや高くふくらむ。調整は不定方向ナデで、さらに周縁に沿ったナデが認められる。下半部では同心円状に砂粒が動いているため、回転台を使用している可能性がある。内面接合粘土は横方向にナデつけられている。側面調整はナデで、瓦当面に向けて外反する。瓦当面には部分的に掌文がある。

３は、206Ａ。直線顎。焼成は軟質で、全体的に摩滅している。唐草文中央にピン穴があり、文様の輪郭にはケガキ線は認められない。凹面・側面・凸面ともに調整は不明瞭である。

このほか、瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片が、４点出土している。（中川）

丸瓦・平瓦も出土している（Fig. 126）。

丸瓦の総出土量は、７.９kgである。



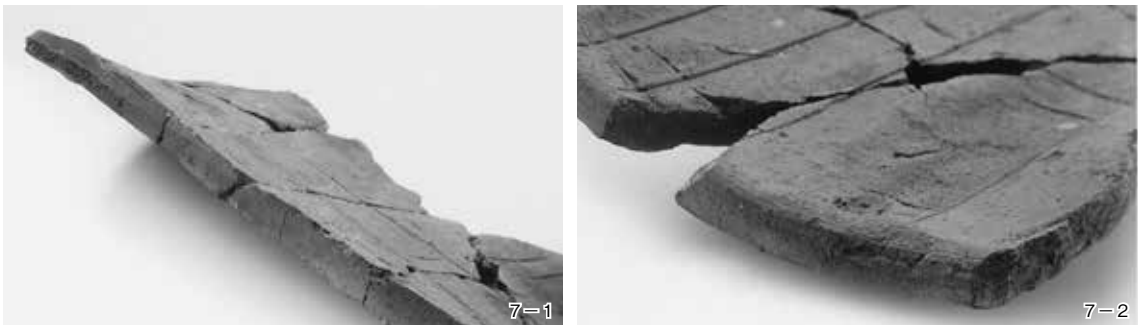


Fig. 126　黄褐色土　丸瓦・平瓦・用途不明品（1：5）・細部

４は、筒部凸面タテナデ。狭端沿いは幅２cmほど回転ナデが施され、肩から玉縁凸面にかけても回転ヨコナデで調整される。側面はヘラケズリで調整し、凹面側縁は面取りをする。凹面は部分的にタテナデ、玉縁凹面基部はヘラケズリ調整である。２ＩＢ、飛鳥前・中期に属する。

平瓦の総出土量は27.９kgである。

５は、凸面タテナデ。側面は分割後未調整、狭端面はナデ調整である。凹面は未調整で布端痕がみえる。１ＩＡ１類、飛鳥前期に属する。

６は、凸面タテナデ。側面は分割後未調整で、広端側に分割界点がある。凹面は部分的にタテナデ。１ＩＡ２類。飛鳥前期に属する。

７は、凸面タテナデ。狭端と広端沿いは幅２cmほどをヨコナデする。側面は分割後、破面をヘラケズリで調整するが、一部破面を残す（Fig.126－写真７－１）。狭端面と広端面はそれぞれヨコナデし、丸みを帯びた端部に仕上げる（Fig.126－写真７－２）。凹面は強いタテ方向のヘラケズリを施した後、縦方向に沈線を入れる。布目圧痕が残る。１ＩBb、飛鳥前期。

８は、凸面タテ縄タタキ。側面はヘラケズリで調整し、凹面側縁を幅広くナデ調整後面取りをおこなう。凹面は未調整で、やや粗い布目が残る。奈良時代。

９は、破片。凸面ナデ。側面は分割後未調整で、分割界点がある。凸面は部分的にタテ方向のヘラケズリで調整する。残長７.７cm、幅４.３cm。1IAの平瓦を加工した用途不明品。飛鳥前期に属する。（今井）

暗褐色土　本土層は、第１次･第２次調査区の表土直下等に広く分布する。金属製品、銭貨、石製品、鉱滓、土器、瓦が出土している。

金属製品には、銅製品と鉄製品があるが、図示しえたのは銅製品１点である（Fig.127－１）。１は現存長４.２cm。鏃に似た形状を呈するが、本来は厚みのある本体に弓状の部分が附属するものであったとみられる。ＫＥ53出土。鉄製品は、金具片など４点あるがいずれも錆化が著しい。

銭貨には、寛永通宝が１点ある（Fig.127－２）。２は全体に錆化が著しく銭文が不鮮明であるが、「永」字の４画目の筆頭にかぎをもつ。背文はない。1697年初鋳の新寛永とよばれるもの。ＫＭ55出土。

石製品には、石鍋の転用品、方形板状品、敷磚状石製品がある（Fig.127－３～６）。３は、滑石製石鍋を再加工した破片で１辺に口唇部をとどめる。残存長７.５cm。全体に曲面をなす。鍔は削りおとしたのであろう。中央に径８cmほどの円孔が貫通する。破断面にさらに１ヶ所貫通孔の痕跡があり、本来は２孔あけられていたものと考えられる。また、内面側に未貫通の深さ２cmほどの窪みがある。上端の厚さ１.６cm、下端の厚さ１.０cm。温石に転用したものであろう。KD49出土。４は、全体に曲面をなすこと、曲面の外側にあたる側に煤状の付着物のみられることから、３と同様に滑石製石鍋の転用品であろう。残存長９.９cm。95°をなす隅と、斜めに面取りをし、130°をなす隅を残すことから五角形状に加工されていた可能性がある。２側面にはほぼ垂直な切断面を残す。ＫＭ55出土。５は、方形の板状の破片。幅６.１cm、残存長７.１cm、厚さ０.９cm。両側縁は直線的な擦りきりにより作る。端部はわずかに厚みを増し、敲打痕を残す。結晶片岩類。KB46出土。６は、厚さ２.１cmの流紋岩製板石の破片である。残存長14.５cm。端部を欠くが２側面を加工し、約45°の隅部をもつ。側面は弱い「逃げ」をとる。これらのことから、方磚を二分したかたちの直角二等辺三角形の敷磚の破片と推定される。断面を逆台形となるようにおくと、上面は丁寧に研磨され、下面は斜方向のケズリ痕を多数残す。また、

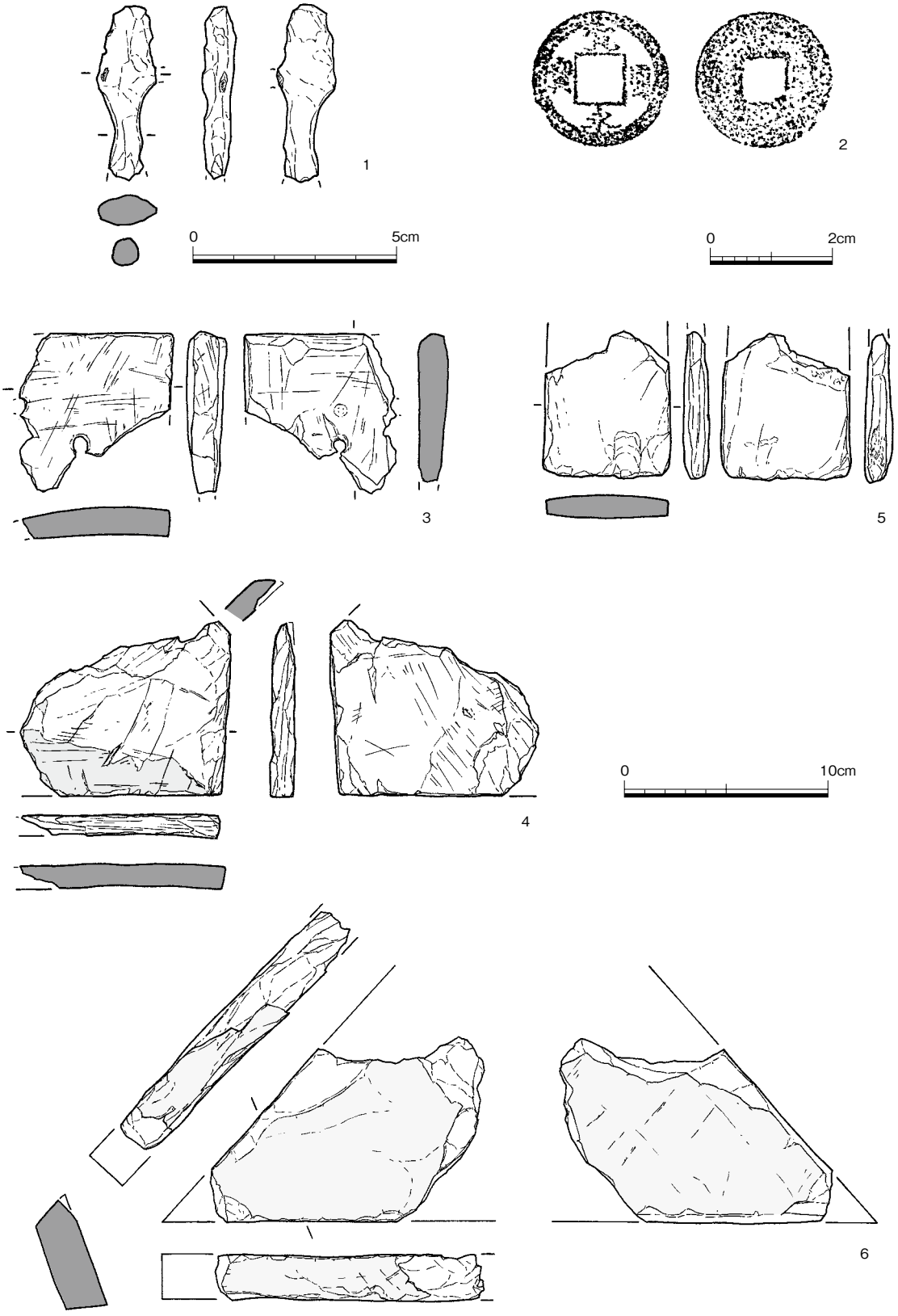


Fig. 127　暗褐色土　金属製品（1　2：3）・銭貨（2　1：1）・石製品（3～6　1：3）

側面の加工も下端に近い部分にケズリ残しが認められ、上下の面の加工に意識の差をうかがうことができる。ＫＥ53出土。本資料は、包含層からの出土品であるが、後述の三角柱状石製品（Fig.151－３）とともに、金堂西辺のトレンチより出土しており、石材および形状（厚み）の点からも他の石製敷磚類とは異なり、須弥壇等に用いられた材料である可能性を考慮する必要があろう（PL.33－ｅ）。（次山）

次に土器を報告する。

暗褐色土とされた包含層は調査区の各地点に存在し、それぞれで土器が出土しているが、それらが厳密に同一時期に形成されたものか明らかでなく、かつ、上下の層と明確に掘り分けられているとは言い切れない。実際、古代から近代以後にいたるまで各時代の土器が含まれている。このうちで、以下に掲げる２地点での土器の集中的出土状況は、それ以外での土器の出土傾向に照らしてみると特異である。それはTO28とKA55の２地点である。そこで、この２地点のみを他とは分離して扱い、続いて1969年に暗褐色土層から採集された他地点のものを、暗褐色土層を代表するものとして報告する。また、TO28暗褐色土直下で検出された遺構出土品もあわせて報告する（Fig.128、PL.35）。

それらは土師器皿（１～22）と瓦器椀・皿類（23～35）からなり、以下に示すように時期的にはかなりまとまりがあるものと思われる。

１～５は、いわゆる「て」の字状口縁をもつ土師器の皿である。口径が8.8～10.6cm、器高は1.0～1.5cmのあいだにおさまり、口縁端部を上方に丸く折り返す。褐色の胎土をもつ。１は比較的薄手に作られているが、それ以外は器壁がやや厚い。また、５は「て」の字状の形態はやや鈍い。11世紀後半～12世紀前半を中心とする年代におさまるものであろう。

６･７に示したのが、体部に２段のヨコナデが施されたもの。６は口径10.4cm、器高1.8cm、７は口径10.0cm、器高2.0cmである。

８～10に示したのが、ヨコナデが１段施され、外面にナデの範囲が明瞭にわかるもので、口縁端部をつまむようにして尖らせる。前２者は、先の「て」の字状口縁の皿とほぼ同じ時期とみられるのに対して、後３者はそれよりやや遅れる時期のものとみられる。８は口径9.6cm、器高1.7cm、９は口径8.9cm、器高1.2cm、10は口径9.4cm、器高1.8cmである。

11～19までのものは、型式的にまとまりを強くみせないもの。口径9.2～10.3cm、器高1.5～2.2cmにおさまる。11～15は、外面にナデによる明瞭な稜線は認められず器形としては比較的類似した小皿であるが胎土はさまざまである。その中でも13･14は、ともに器壁の厚い鈍重な感じを受けるものであり、15は水簸したような精良な胎土をもち他と区別される。

16･17は、口縁が外反気味に開くもので、器高もやや高い。16は、体部に比べて口縁部が厚くなり、底部はやや上げ底となっている。いずれも赤褐色の胎土で、16は、口径10.3cm、器高2.2cm、17は口径10.0cm、器高2.3cmを測る。ともに14ないし15世紀に下るものであろう。18･19は丸い底部に大きく開く口縁を有し、端部を薄く仕上げる。一群の中でもっとも新しく近世に下るものであろう。胎土は白っぽい。18の口径は10.2cm、器高2.1cm、19の口径は12.2cm、器高2.3cmである。

20～22は、体部に明瞭な２段ヨコナデが認められる土師器の大皿である。体部下半外面には指頭圧痕が明瞭に観察できる。口径は15.6～16.6cm、器高は2.5～3.4cmにまとまり、「て」の字状

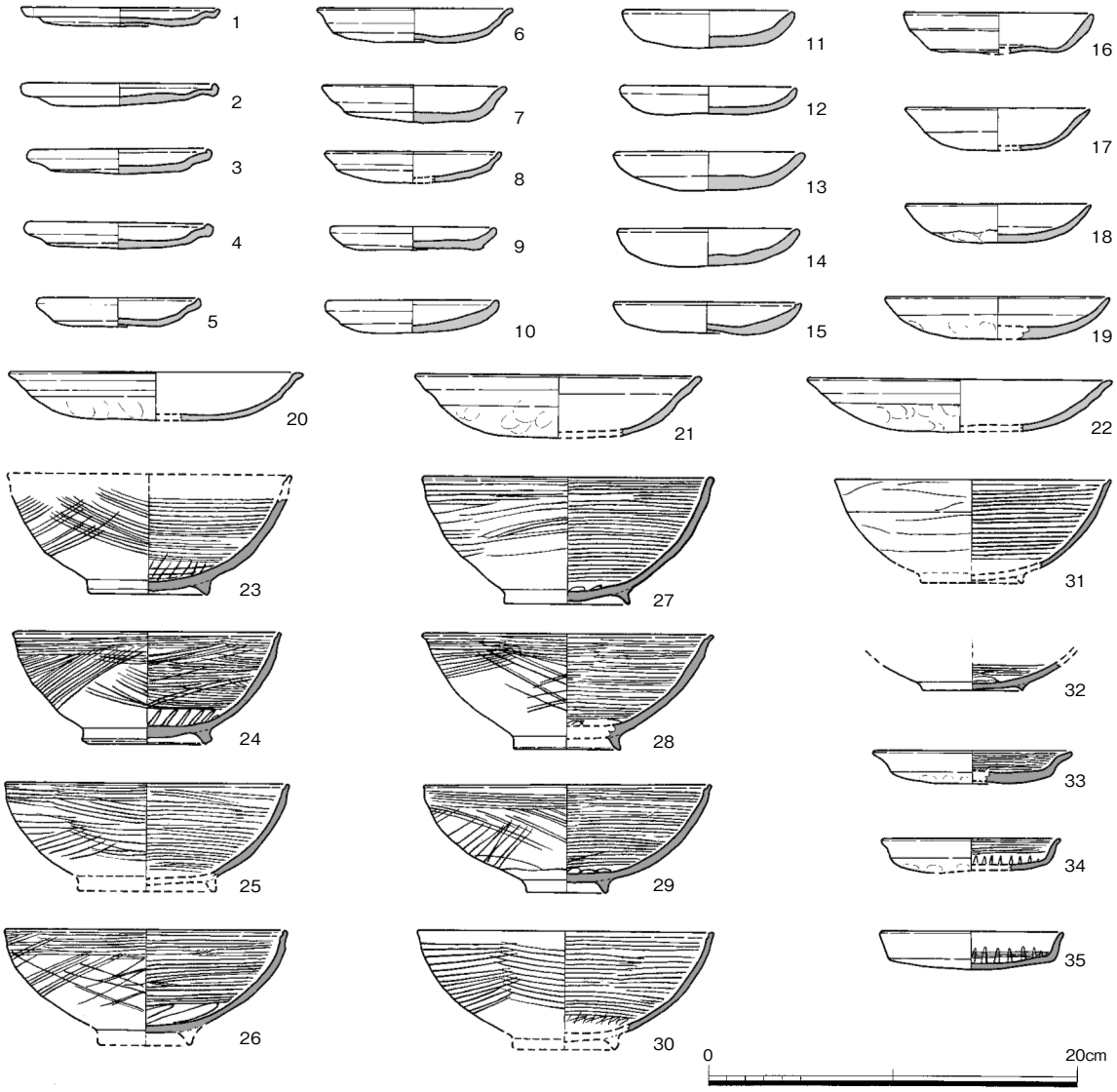


Fig. 128　TO 28暗褐色土　土師器・瓦器（1：4）

口縁の皿と同時期のものとみなせる。褐色の胎土をもつ。

23～32の瓦器椀のうち、30～32の3点だけが下層の小ピットなどの遺構出土品である。いずれも、口縁端部内側に沈線を引くように段を有する大和型瓦器椀である。体部は比較的膨らみをもって立ち上がり、器壁も平均で5mmほどの厚いものである。このうち23がもっとも厚手に作られている。これに対して高台は断面台形で重厚なものから断面が三角形に近い薄いものまでばらつきがあるが、いずれも十分な高さをもつ。川越俊一による分類の第1段階CないしD型式にほぼ相当するであろう（川越1983）。24～29の平均口径は15.3cmである。

暗文については、23と30のように内面見込み部分に格子目状の暗文を施し、その後に体部内面の圏線状のミガキを施すものは少数で、多くは体部内面のミガキの後に、内面見込みにジグザグ状の暗文を施す（24・26・27）か、螺旋状の暗文を施す（28・29・32）ものである。とくに後者は、外面の横方向のミガキがまばらで、成形の際の凹凸がそのまま認められる。高台も断面三角形で径が小さめなものとなっているうえ、器形も丸みがやや少ない形で川越分類の第2段階B型式に該当しようか（川越

1983）。相対的に新しいものといえよう。そうした目でみると26にも新しい様相がすでに読み取れる。

ジグザグ文の椀と螺旋文の椀を比較すると、後者の器形には深みがないことがわかる。ただし、口径に大きな違いはない。

これらと比べて遺構出土の瓦器椀はどういう特徴をもっているだろうか。

小ピットから出土した31は器壁の厚さが平均で3mmに満たない薄手の製品で、復原口径、器高ともに小さい。外面のミガキは非常にまばらで内面のミガキも単位のあいだにすきまがあく。川越分類の第3段階に属するもので、上述の製品に明らかに後出し、12世紀後半～13世紀前半のものであろう。

32は「凹みの穴」で取り上げられたもの。底部のみの遺存であるが､螺旋状の暗文をもち､器壁も薄く､高台が三角形の小さな貼り付けとなりほとんど用をなさないものにまで矮小化していることから、やはり、31同様、暗褐色土出土品より新しいものといえる。

これに対して、東小ピットから出土した破片と西北ピットから出土した破片が接合した30は器形や暗文の施し方から、暗褐色土出土の一群と区別することができない。上部の遺物の混入かもしれない。以上の瓦器椀を総括すると、暗褐色土とされる一群は近江俊秀による編年（近江1991）の1－2期を主体とし同3期のものが加わる比較的純粋な資料で、そこに1－5期ないし同6期の遺構が重複して形成されたとみられよう。つまり、11世紀後半～12世紀初めに形成されたところに、12世紀後半以後の新たな遺構が作られたと解することができる。

33～35は、いずれも暗褐色土層から出土した瓦器皿である。そのうち33は厚手で非常に丁寧な作りをしている。内面には格子目文状の暗文を密に施し、外反する口縁部は内面を密にヘラミガキしている。11世紀代にさかのぼるものだろう。

これに対して、34･35の2点は、ジグザグ状に内面見込みの暗文を施すもので、内面のヘラミガキも粗雑である。12世紀頃のものであろう。

このように、TO28から出土した暗褐色土層の土器は、土師器皿の1～7の一群の小皿と20～22の大皿からなるまとまりと瓦器の大半とがともに11世紀後半～12世紀初めの一括性をよくみせており、他地区の様相と大きな隔たりをみせている。おそらくこの3mグリッドに土器廃棄土坑といった類の大きな遺構があって、そこに包含される遺物が下層の遺構とともに、上を覆う暗褐色土と識別されないまま掘り上げられたものと判断される。

次に、KA55暗褐色土出土土器を報告する（Fig.129、PL.36）。TO28とは時期が異なるが、ここでもまとまりのよい大量の土器が出土している。大小2種類の土師器皿がほとんどで、それに若干の土師器羽釜と瓦器椀がともなっている。

1～12は、土師器大皿で、14～17は、小皿である。大皿は2～5のように外面に2段のナデによる凹凸が顕著に認められるものと、6～12のように1段のナデが目立つものとに分けられるが、両群の差は漸移的である。1段ナデのものも、6･7のように、ナデの下端が体部下位にまでおよんで、ほぼ平らな底部と段をもって直線的に立ち上がる体部という箱形の断面形に近いものから、ナデのおよぶ範囲が下から3分の1（8～10）、あるいは2分の1（11･12）のものまでばらつきがある。ナデの範囲が狭いほど、底部は丸みをもち、ユビオサエの痕跡が明瞭に残る。一方、1はその対極で体部外面全面に数段分のナデの痕が明瞭で、底部との段は逆にあいまいである。また、8や12は、底部がやや

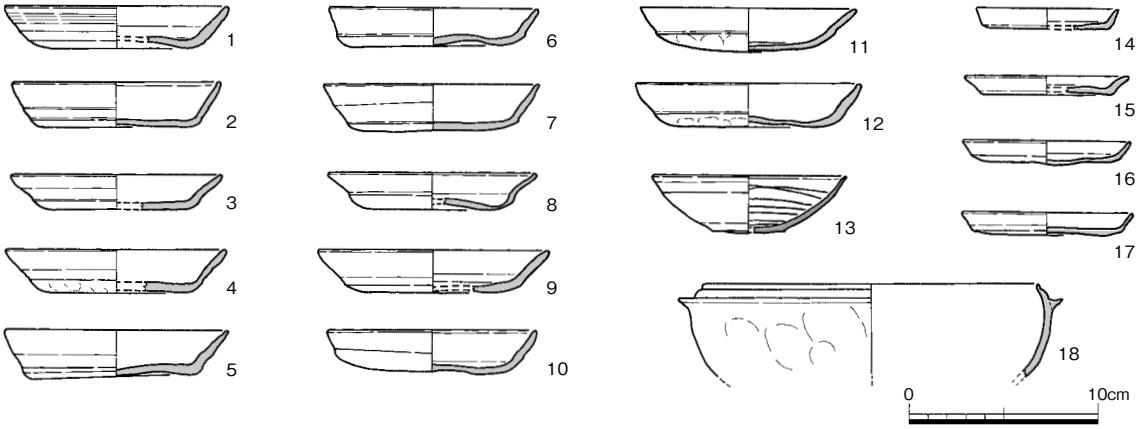


Fig. 129　KA 55暗褐色土　土師器・瓦器（1：4）

上げ底になっている。これらはいずれも淡褐色の胎土の製品で、平均の法量は口径11.5cm、器高2.3cmである。

小皿（14～17）はいずれも平らな底部から短く体部が外反気味に立ち上がるもので、1段のナデによりわずかな段を外面にとどめる。図示したもののうち14がやや小さく口径7.6cmを測るが、平均は8.6cmである。やはり淡褐色の胎土をもつ。

13は、瓦器椀である。ほとんど痕跡と化した断面三角形の貼り付け高台を有し、体部は深みをもたずやや直線的な開き方をみせる。口縁部に1段強めのナデが認められるが、それがおよぶ範囲には、内外面ともにミガキがおよばない。また、内面のミガキもまばらで、内面見込みの暗文も大振りなくずれた渦巻き文のようである。体部外面には、ミガキがまったく施されていない。口径10.4cm、器高3.1cm。

上述の土師器と瓦器は、13世紀後半から14世紀前半頃のものとみられる。土師器に白色系と赤褐色系の土器の共存が顕著になる前の段階とみられる。

18の羽釜は薄くて丹精な鍔がかなり上位に取り付いたもので、口縁の端部は外面に段をもって丸く収められたものである。端部の丸め込みが萎縮したものとも取れるが、端部を折り返したものではない。体部外面にはヘラナデが施されたようにみえる調整痕が観察される。胎土はきわめて精良であるが、これも、土師器皿や瓦器椀と年代的に併行するものとみてよい。復原口径17.6cmである。

以上のまとまりから、KA 55の暗褐色土として掘り上げられた多数の土器は、土坑や土器捨て場といった遺構内資料であった可能性が高い。

これ以外の暗褐色土層出土土器を次に報告する（Fig.130、PL.36）。TO 28やKA 55を除くと、それ以外の地区で出土した暗褐色土層出土土器は量的に乏しく、かつまとまりにかける。とくに、新しい時期の土器も含まれ、一括性に乏しいと判断されることから、1969年度出土品の中から代表的な出土品を呈示するにとどめた。

1～11が土師器皿、12～15が瓦器椀・皿、16・17が土師器釜、18が低火度釉の製品、19～21が須恵器、22が瓦器甕である。

土師器皿は大皿と小皿とに大別できる。大皿は底部が平らで、明瞭な底部と体部の境から直線的に開く1がもっとも古く、体部は2段のナデを施す。赤褐色の胎土をもつ製品である。口径11.2cm、器

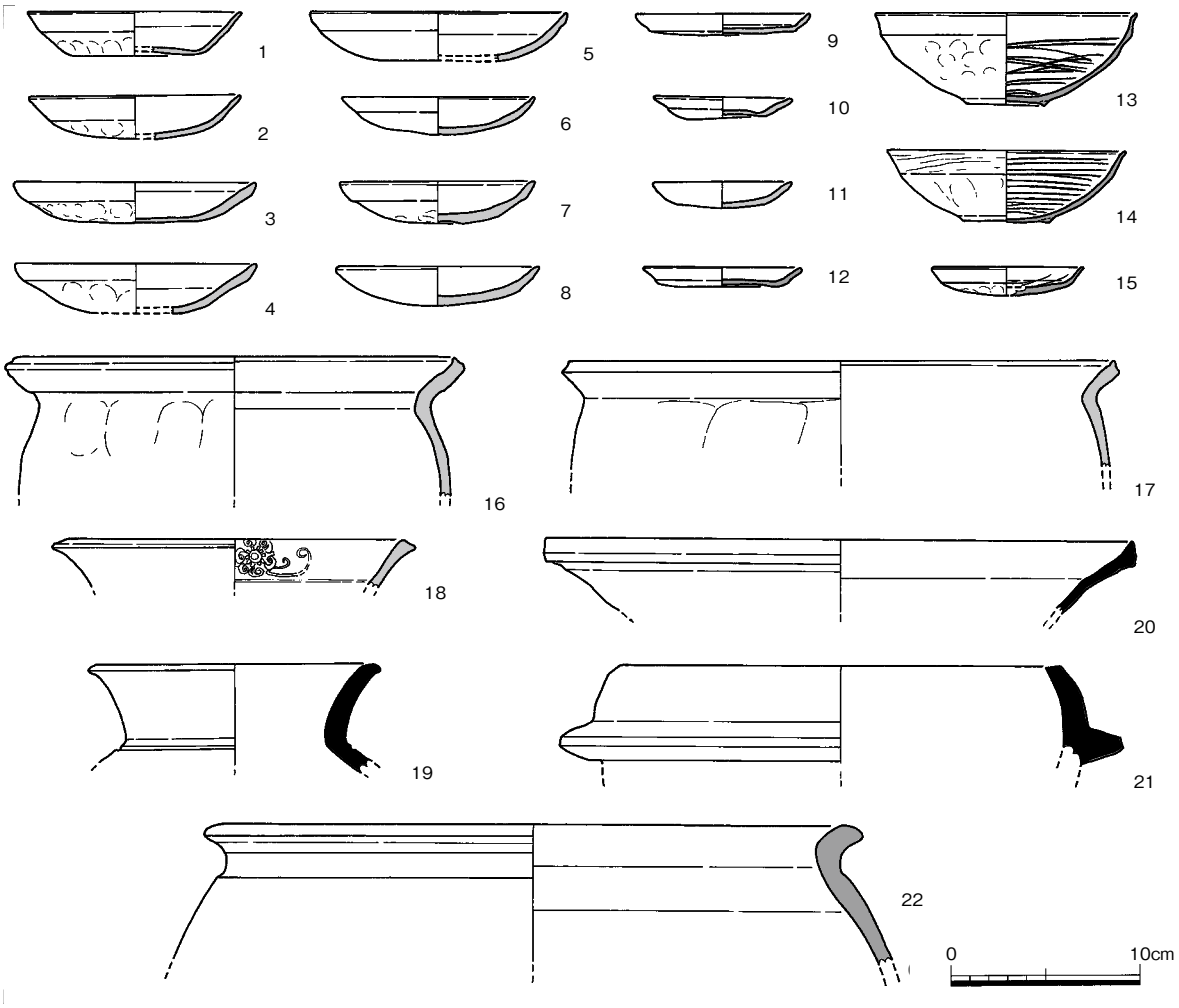


Fig. 130　暗褐色土　土師器・須恵器・瓦器・施釉陶器（1：4）

高2.3cmを測る。これに対して、2は白色系の胎土をもち丸みを帯びた器形で、体部のナデの範囲も狭い。口径11.2cm、復原高2.3cm。

この2点に対して、3～8は、いずれも白っぽい精良な胎土で作られた皿である。いずれも体部中ほどまでヨコナデを施し、丸みのある底部は体部にかけて外面に指頭圧痕を明瞭にとどめた焼き締まりのよい皿である。3～5は、6～8に比べて径が一回り大きく、平均口径13.1cm。体部下半のユビオサエが顕著である。口縁端部は外面に面をもつように薄く仕上げられている。3～8は、16世紀以後にまで下るものだろう。

径がやや小さい6～9は、丸みをもった底部と体部の境のない器形である。口縁部を除くと外面は乱雑なナデや指頭圧痕が観察できる。7は、口縁の残存部全周、8は、口縁端部の一部にタール状に煤が付着している。燈明皿として使われたことがわかる。平均口径10.4cm、器高2.1cm。

9～11が小皿。9は、赤褐色の胎土で、短い体部をヨコナデで整えるもの。口径9.2cm、器高1.1cm。これに対して10は、口縁が開きながら長く伸び、底部が上げ底になる白色系の小皿。へそ皿である。口径7.3cm、器高1.1cm。ともに、14～15世紀のものであろう。これに対して、11は底部と体部の境が不明瞭な個体で、白っぽい精良な胎土で厚ぼったく作られている。口縁の一部に煤が付着し

ており、燈明皿として用いられたことがわかる。先の６～８に対応する。口径７.４cm、器高１.４cm。

12～15、そして22は、瓦器である。そのうち13と14が椀である。ともに器壁が薄くなった新しい瓦器椀に属し、14は13に比べて体部は浅く、高台も痕跡的になっていて、より後出するものであろう。しかし、14の外面はヨコナデによりくぼんだ部分にのみ粗いミガキが施されているのに対して、13は外面のミガキは施されておらず、器壁の凹凸も激しい。また、13の内面ミガキは口縁端部までおよばず省略傾向にある。内面見込みの暗文はともに簡単な渦巻き文となっているようであるが、観察しづらい。13は口径13.8cm、器高４.９cm、14は口径12.６cm、器高３.９cmを測る。これに対して、12・15の瓦器小皿は、指頭圧痕の残る底部に短く外反する口縁を有するもので、体部のミガキは内外面ともに施されていない。内面見込みにはいずれもきわめて粗いジグザグ文が観察できる。12は口径８.４cm、器高１.０cm、13は口径８.４cm、器高１.７ cmである。

以上の瓦器は13～14世紀のものとみられ、土師器皿の１・２や９・10の年代に近い。

16・17は、土師器釜。ともに、よく似た器形だが、径がかなり異なる。16は23.０cm、17は28.６cmに復原される。薄い体部から「く」の字に屈曲する口縁は比較的厚みをもち、端部を上方につまみ上げる。体部外面はヘラナデ状のタタキ痕が多面体状に残る。どちらも鍔のつく羽釜で、大和Ⅰ型の羽釜と考えられる（菅原1983）。ともに胎土は精良だが、17は橙褐色を呈し、やや砂粒を含んでいる。土師器皿３～８や11などと同一時期のものであろう。

上述の土師器皿、釜や瓦器椀、皿類がいずれの地点でも比較的主体を占めるものである。これに対して、個体数は少ないもののそれ以外の器種も散見される。以下にその代表的なものを掲げる。

まず、18は、花状のスタンプ文を内面に施し、そこを中心に低火度釉を施して飾った軟質の器である。平底の鉢形になるのだろうか。中心の文様は、円文の周りに蓮弁状のものを10葉付け、さらに外側に「の」の字形の渦巻き文を６個配したもので、そこから蔓状の帯が少なくとも右側に２本伸びている。蓮弁の花芯と「の」の字形の文様部分には褐色の釉をかけており、それ以外の地の部分には黄緑色の釉を薄くかけてある。体部内面は主文様のすぐ下に沈線を１本入れている。舶載品の破片とみられる。復原口径17.８cm。

19～21は、須恵器である。このうち20に図示した鉢に類する破片は、比較的多いほうである。20は口縁端部が断面三角形状に整えられ、端面は幅広くほぼ直立する。本来片口を備えたものであろう。口縁端部下端は下方に肥厚せず、13世紀代にとどまるものと考えられ、これまでに取り上げた中では古い方の一群にあたるものと思われる。口径31.０cmを測る。

19は、小型の壺で、「く」の字に屈曲してやや長く伸びる口縁部を有する。端部はやはり外側に軽くつまみ出されているが、端面を整えることはしていない。頸部付け根のやや下の体部上端に一条の沈線が施されている。タタキ調整の痕は残存していない。珠洲系の須恵器に同形の口縁部をよく見る。なお、口縁部内面は自然釉がかぶる。口径14.８cm、口縁高４.０cm。

21は、石鍋の形を模倣した須恵器である。器壁は１.２cmと厚く、断面観察から、鍔を最後に付加するのではなく、体部上半の成形と同時に取り付けていることがわかる。口縁端部は鋭利な道具で水平に切っている。口径23.２cm。使用の痕跡は認められない。

22は、短くて外反する口縁をもつ厚手の甕で、須恵質にもみえるが瓦質の範疇で捉えるほうが妥当

1

9

Fig. 131　暗褐色土　軒丸瓦細部

である。体部の調整痕は不明。口縁端部は外側に軽くつまみ出されており、断面形はやや丸みをもつ。また、口縁と体部の境はナデによって外側が顕著にくぼんでいる。口径33.0cm。他地域産のものと思われ、和泉産の可能性がある。口縁部が萎縮していく和泉の瓦器甕の変遷観からすれば、14世紀の製品と位置づけられる（菅原1989）。（高橋）

軒丸瓦・軒平瓦について報告する（Fig.131～136）。

１～３は３Bb。１は、丸瓦が長さ3.5cm、幅12cmほど残存している。接合方法は片枘形ｂ（Fig.131－１）。丸瓦先端では、凹面からの切り込み面が確認できる。内面接合粘土はヨコ方向にナデツケ。瓦当裏面は中央がやや高くふくらみ、調整は不定方向ナデである。側面の調整はナデ。外縁は欠損している。筒部凸面の調整は瓦当付近のみヨコナデで、凹面は不明である。丸瓦は厚さ1.6cm。２は、裏面全面が剝離。側面調整はナデ。中房の蓮子に掌文があり、外縁上に笵端痕が認められる。３は、焼成は軟質で全体的に摩滅している。接合方法は片枘形ａ。丸瓦は残らず、内面接合粘土は剝離痕跡のみが残る。瓦当裏面は中央がやや高くふくらみ、調整は不定方向ナデ。側面の調整はナデ。瓦当面には所々に掌文が認められる。外縁上に笵端痕を残す。

４～８は３Bbか。４は、裏面全面が剝離し、丸瓦との接合状況は不明である。側面調整はナデ。外縁は欠損しており、瓦当面の蓮弁の一部に掌文がある。５は、接合方法が不明である。瓦当裏面の調整は不定方向ナデ、側面の調整はナデ。外縁は欠損しており、笵端痕の有無は不明である。成形の際に弁端点珠がつぶれる。６は、丸瓦が長さ7cm、幅10cmほど残存している。接合方法は片枘形ｂ。内面接合粘土はヨコ方向にナデツケ。瓦当裏面は中央がやや高くふくらみ、調整は不定方向ナデである。側面の調整は不定方向ナデ。外縁上に笵端痕は認められない。丸瓦は厚さ1.5cm。７は、瓦当面がほとんど欠損するが、わずかに残る中房と間弁から、３Ｂｂの可能性がある。接合方法は不明である。瓦当裏面はほぼ平坦で、調整は不定方向ナデ。８は、接合部にあたるか。内面接合粘土は瓦当裏面の粘土とともに剝離する。接合方法片枘形ａか。裏面の調整はヨコナデ。側面は欠損している。

９～16は、４Ａ。９は、丸瓦と瓦当の接合部の構造が良好にみられる（Fig.131－９）。接合方法は片枘形ｂ。丸瓦広端の一部が瓦当に貼りついて残る。内面接合粘土は痕跡のみ残る。瓦当裏面は中央がやや高くふくらむ。同心円状にゆるやかな凹凸がみられ、調整は回転ナデ後、不定方向ナデを施したと考えられる。さらに、下半部は周縁に沿ったナデ。側面はナデで、若干外反する。瓦当面蓮弁の一部と中房に掌文がある。蓮弁先端が二重になる部分があり、笵ズレと考えられる。外縁上に笵端痕。外縁上面に部分的に笵の木目痕あり。10は、接合方法片枘形ｂ。内面接合粘土は剝離痕跡のみが残る。瓦

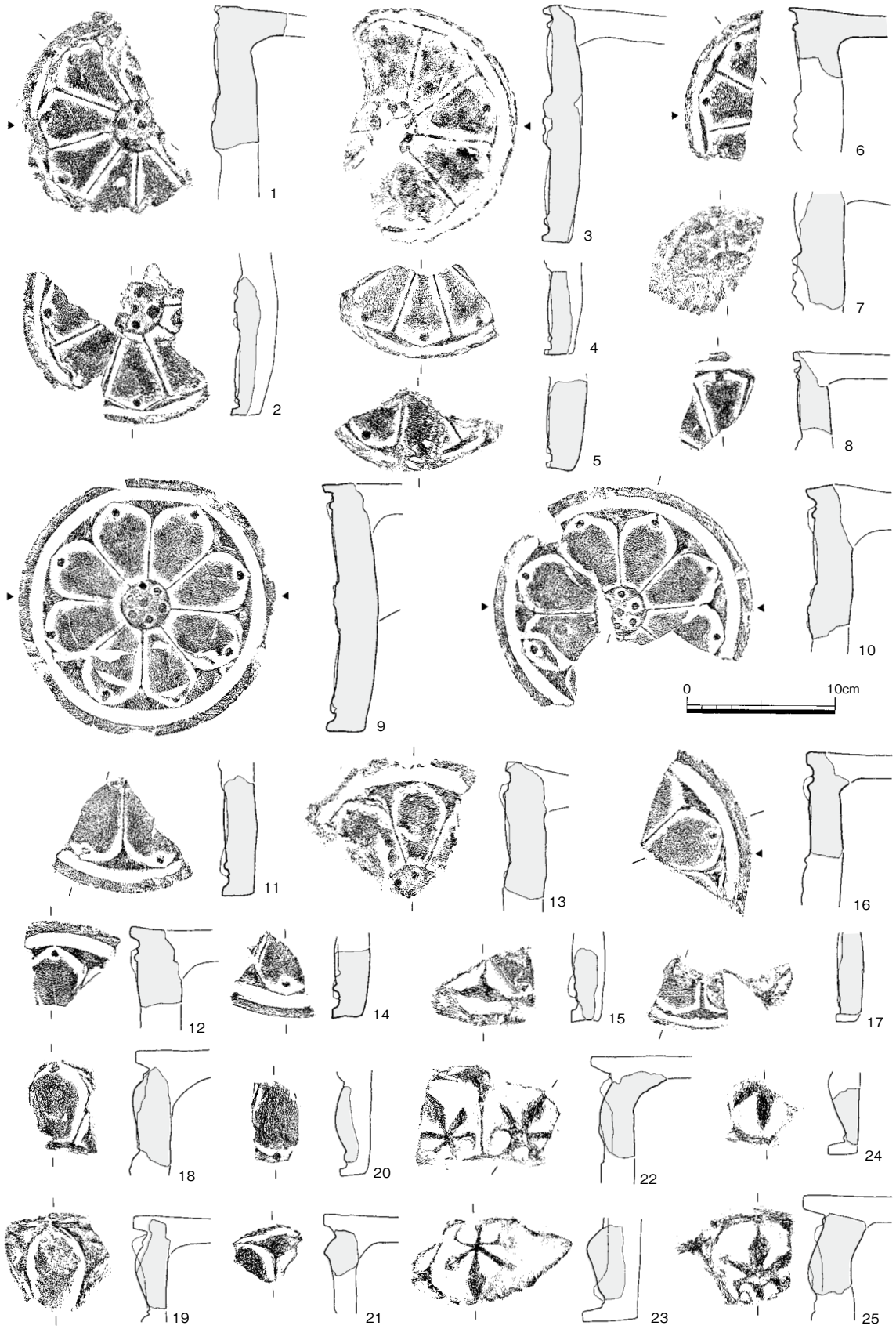


Fig. 132　暗褐色土　軒丸瓦１（１：４）

19

22

Fig. 133　暗褐色土　軒丸瓦細部

当裏面は中央がやや高く、調整は回転ナデ後に不定方向ナデ。側面はナデが施され、若干外反する。蓮弁先端は笵ズレかと考えられる。外縁上に笵端痕。外縁上面には部分的に笵の木目痕がある。11は、瓦当下半部。瓦当裏面は中央がやや高く、調整は回転ナデである。側面の調整はナデ。外縁上に笵端痕がわずかに認められる。12は、丸瓦と瓦当の接合部。接合方法は片枘形ａ。内面接合粘土は剝離痕跡のみが残る。瓦当裏面の調整は不定方向ナデ、側面はナデ。外縁上には笵端痕がわずかに認められる。13は、丸瓦との接合部。接合方法は片枘形ｂ。内面接合粘土はわずかに残り、横方向にナデつけられている。瓦当裏面の調整は不定方向ナデで、側面はナデ。外縁上に笵端痕なし。14は、瓦当下半部にあたり、丸瓦との接合方法は不明。瓦当裏面は中央がゆるやかにふくらみ、調整は周縁に沿ったナデ。側面はナデが施され、若干外反する。外縁上にはわずかに笵端痕あり。15は、瓦当裏面が摩滅し、どの部分か不明である。側面の調整はナデが施され、若干外反する。外縁上に笵端痕はない。16は、丸瓦との接合部。接合方法は片枘形ｂ。内面接合粘土が一部残り、横方向にナデつけられている。瓦当裏面はほぼ平坦で、調整は不定方向ナデである。側面の調整はナデ。瓦当面間弁の段差は笵ズレ、もしくは粘土の笵詰め不良によると考えられる。外縁上にはわずかに笵端痕がある。

17は、４Ｄ。瓦当下半部にあたり、裏面はほぼ平坦である。調整は不定方向ナデで、周縁にはさらにナデを施している可能性がある。側面は欠損している。

18は、６Ｃ。丸瓦との接合部か。接合方法は不明である。支持ナデツケは施されていない可能性が高い。瓦当裏面はほぼ平坦で、調整は不定方向ナデである。側面は欠損している。瓦当面間弁の段差は笵ズレ、もしくは粘土の笵詰めが不良であるためと考えられる。

19は、６Ｃか。丸瓦との接合部。接合方法は片枘形ｄか。内面接合粘土は剝離痕跡のみが残る。接合部にはナナメ、ヨコ方向のキザミが転写されている（Fig. 133－19）。瓦当裏面の調整は不定方向ナデである。側面のほか、瓦当面も大部分欠損している。

20・21は、６Ｄ。20は、裏面が剝離している。側面を欠いており、蓮弁、とくに点珠付近には掌文が認められる。21は、丸瓦との接合部。接合方法は楔形ａかｂ。支持ナデツケは施されていない。接合部にはタテ方向のキザミが転写されている。

22～25は、33Ａ。22は、丸瓦との接合部。接合方法は楔形ａ。内面接合粘土が残るが、支持ナデツケの有無は不明瞭。瓦当粘土は２層に分かれる。接合部にはタテ方向のキザミが転写されている（Fig. 133－22、瓦当が上）。瓦当裏面の調整は不定方向ナデ。23は、裏面が欠損し、どの部分にあたるかは不明である。焼成は軟質で、全体的に摩滅が激しい。24は、瓦当下半部にあたるか。厚さが非常に薄い。瓦当裏面の調整はヨコナデ。側面は欠損している。25は、丸瓦との接合部にあたる。接合方法は楔形ａ。支持ナデツケ、キザミ転写ともにあり。瓦当裏面の調整は不定方向ナデ。側面は欠損している。

26は、37Db。丸瓦との接合部。取り付け位置が高い。側面の調整は不定方向のナデである。

27は、53A。丸瓦との接合部。焼成は軟質で、全体的に摩滅している。丸瓦の接合溝が残る（Fig.134－27）。側面の調整は不明瞭である。

28～30は、89V。28は瓦当下半部。裏面は平坦で、調整はヨコナデである。側面はナデか。外縁外角は幅2mmほど面取りをしている。29は丸瓦が幅12cm、長さ12cmほど残存。接合部には外面と内面に接合粘土を付加（Fig.134－29）。丸瓦を設置後に瓦当裏面に薄く粘土が足される。丸瓦先端は未加工で、瓦当の丸瓦接着面にはかすかに布目圧痕が転写される。裏面は平坦で、調整はヨコナデを中心とした不定方向ナデである。側面はナデ。外縁外角は幅2mmほど面取りをする。筒部凸面はタテ方向のヘラケズリ後ナデ調整を施す。凹面は布目を粗くナデ。側面にはナデが認められ、凹面側縁は幅1cmほど面取りをする。外縁粘土の笵詰めは瓦当粘土の端を折り曲げておこなっているとみられる。瓦当面には離れ砂が付着する。丸瓦は厚さ2.0cm。30は瓦当下半部。瓦当裏面は平坦で、調整は回転ナデ後、ヨコナデを中心とする不定方向ナデ、周縁に沿ってナデ。側面はナデか。外縁外角を幅5mmほど面取りしている。

27

29

34

Fig. 134　暗褐色土　軒丸瓦細部

31は、19F。棟飾りか。裏面は平坦で調整はナデである。側面はナデ、外縁上面はヨコナデ。瓦当面菊花文の蓮弁に掌文がある。

32は、91F。瓦当下半部にあたる。瓦当裏面は平坦で、調整は不定方向ナデである。側面はナデ。瓦当面にはキラコ。

33・34は、91Y。33は丸瓦との接合部にあたる。瓦当裏面の接合面にはカキメがある。側面調整はナデ。瓦当面には離れ砂が付着する。外区珠文には笵傷がある。34は、丸瓦との接合部。瓦当裏面の接合面にはカキメがある（Fig.134－34）。裏面、側面ともに調整はナデ。外縁上面はヨコナデ。

35～37は、型式不明軒丸瓦。35は、中世末～近世のものか。瓦当下半部にあたる。裏面は平坦。周縁に沿って強めにナデ。瓦当面には離れ砂が付着する。36は、中世末～近世のものか。瓦当下半部にあたる。裏面は周縁に沿ってナデ。側面はナデで、若干外反する。外縁上面はヨコナデ。瓦当面には離れ砂が付着する。37は、近世のものか。丸瓦との接合部で、丸瓦が幅6cm、長さ3cmほど残存している。筒部凸面にはナデを施し、凹面は欠損している。側面はタテナデ。瓦当面珠文には笵傷。

38・39は、206A。38は、直線顎。唐草文中央にピン穴がわずかに残る。ケガキ線はみられない。凸面はヨコ方向のヘラケズリ後、タテナデを施す。39は、左側面がわずかに残る。瓦当面はヨコナデ後に施文しており、唐草文中央にはピン穴がある。ケガキ線はない。

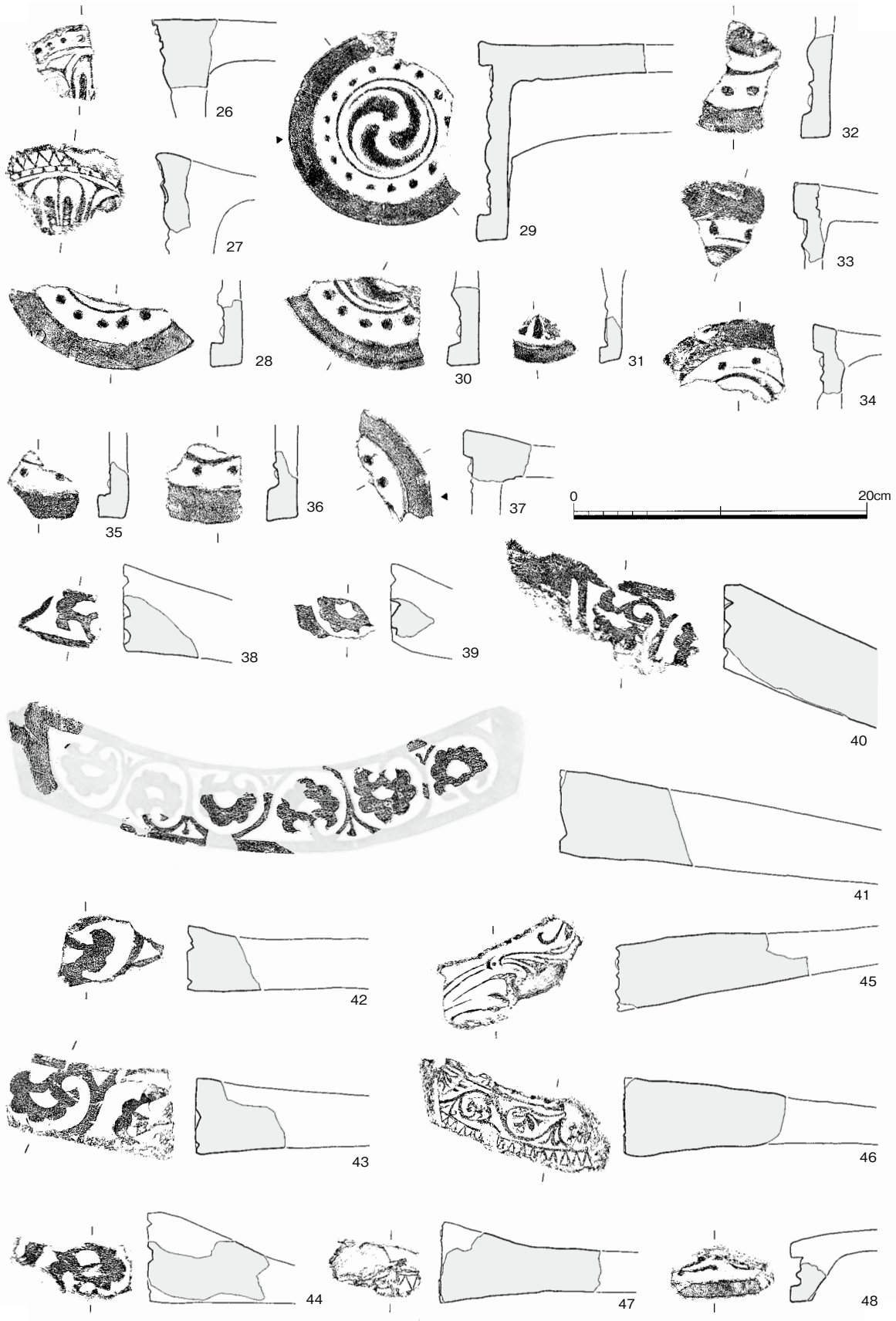


Fig. 135　暗褐色土　軒丸瓦２・軒平瓦（１：４）

40は、206Ｂ。直線顎。分割截線と考えられる切り込みが凹面に明瞭に残る（Fig.136－40）。瓦当面は施文前にヨコ方向のヘラケズリで調整する。唐草文中央にかすかにピン穴があり、文様輪郭にはケガキ線がある。凹面はタテ方向のヘラケズリで、瓦当付近のみヨコ方向のヘラケズリ、凸面・側面は狭端へ向けてタテ方向のヘラケズリで調整する。凹面側縁は幅0.5～1cmほど面取りをする。

41は、207Ａ。唐草文中央にピン穴、文様輪郭にはケガキ線がある。型紙の端のケガキ線も明瞭に残る（Fig.136－41）。蕾の輪郭にはケガキ線が認められず、この部分のみフリーハンドの可能性がある。瓦当面は、施文前にヨコナデを施し、凹面はタテ方向のヘラケズリで調整する。瓦当付近は5cmほどヨコ方向のヘラケズリ、さらに瓦当付近2cmほどのところで屈曲が変わっており、その部分のみヨコナデかと思われる。側面はタテ方向のヘラケズリで調整する。出土時は破片であるが、現在は石膏が入れられ完形に復原されている。

42は、208か。直線顎。ピン穴、ケガキ線はなく、唐草文の葉の輪郭の一部が彫り込まれていない。凹面はヨコ方向のヘラケズリで調整する。凸面はヨコ方向のヘラケズリ後ナデか。

43は、209Ａ。直線顎。ピン穴、ケガキ線はともになし。平瓦の残存部が少なく、凹面・凸面ともにヨコナデしか認められない。側面は欠損する。

40

41

48

Fig. 136　暗褐色土　軒平瓦細部

44は、305Ａか。右側面が残る。唐草文は7葉か。ピン穴、ケガキ線はともになし。凹面の調整は摩滅により不明瞭である。側面は瓦当面に向けてタテ方向のヘラケズリで調整している。凹面側縁を幅8ｍｍほど面取りか。

45は、216Ｃ。直線顎。凹面はヨコ方向のヘラケズリ後、瓦当付近のみナデを施す。凸面は狭端に向けてタテ方向のヘラケズリ後、瓦当付近のみナデ、側面はタテ方向のヘラケズリで調整する。

46は、240Ab。直線顎。凹面は未調整で布目圧痕が残る。凸面は摩滅により調整は不明瞭である。側面は瓦当に向けてタテ方向のヘラケズリで調整する。

47は、240Ａ。直線顎。瓦当面鋸歯文がわずかにしか残らず、AaかAbかが不明である。凹面はタテナデにより、布目圧痕をほとんど消している。凸面は狭端に向けてタテ方向のヘラケズリで調整する。

48は、284Ｃ。貼付段顎か。瓦当剝離面に、横方向のカキメが転写されている（Fig.136－48、瓦当が上）。瓦当面にはキラコ。外縁下側外角を幅1ｍｍほど面取りをしており、顎面、顎裏面はヨコナデで調整する。

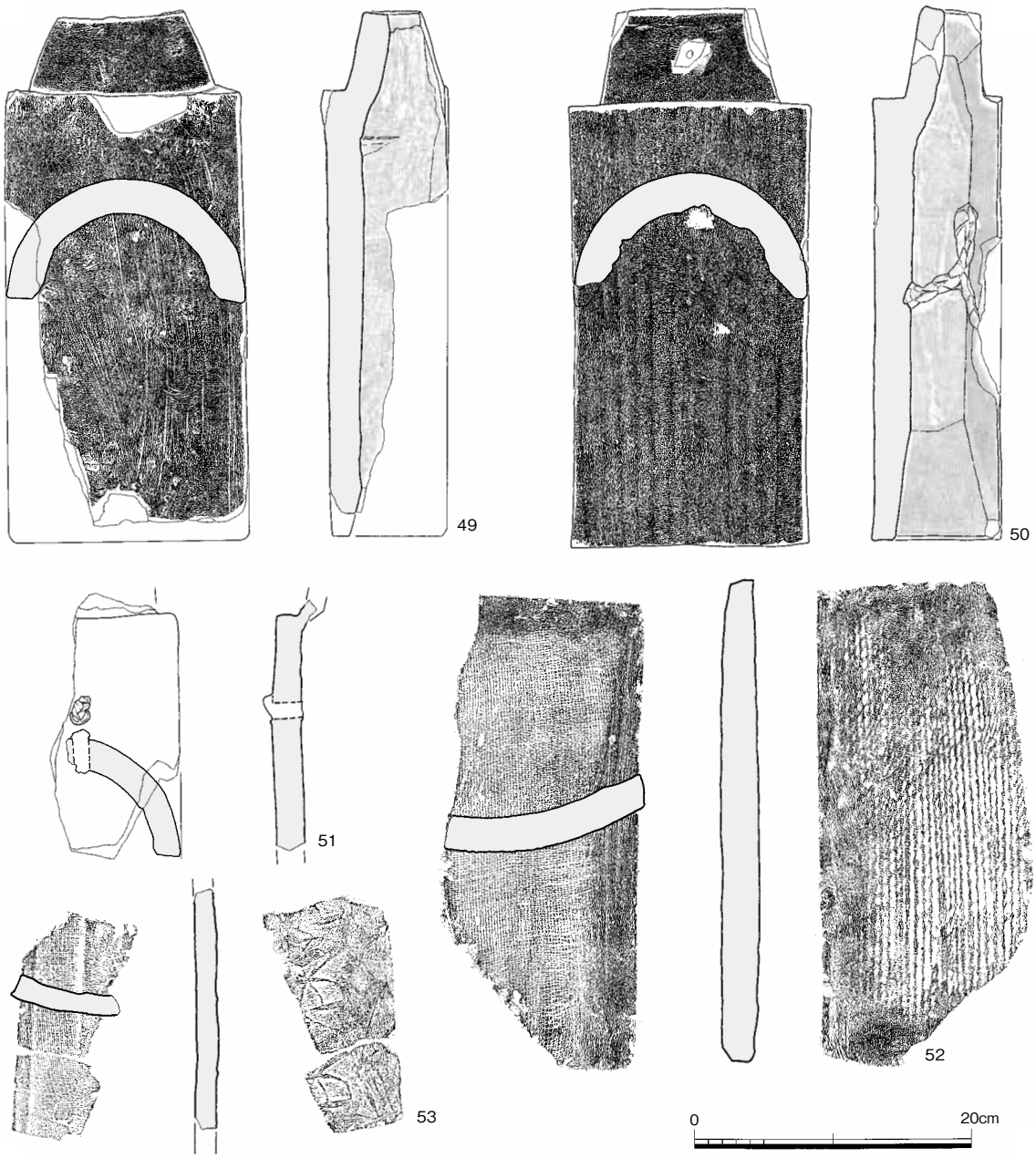


Fig. 137　暗褐色土　丸瓦・平瓦（1：5）

このほか、284か285が1点、瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片が8点出土している。（中川）

丸瓦・平瓦、それに道具瓦が出土しているので、報告する（Fig. 137・138）。

丸瓦の総出土量は5.7kgである。

49は、筒部凸面はタテ縄タタキ後に、全面タテナデで調整する。肩から玉縁凸面にかけては回転ヨコナデ、側面はヘラケズリで調整する。凹面側縁は面取りをしており、凹面は未調整で、糸切り痕跡が残る。凹面広端縁のほか、玉縁凸面側縁、玉縁凹面端縁も面取りする。平安時代に属する。

50は、筒部凸面はタテ縄タタキ後に、全面タテナデで調整する。肩から玉縁凸面にかけて回転ヨコナデで調整し、玉縁凸面端縁、凸面側縁を面取りする。玉縁の釘孔は焼成後にあける。側面はナデ、凹

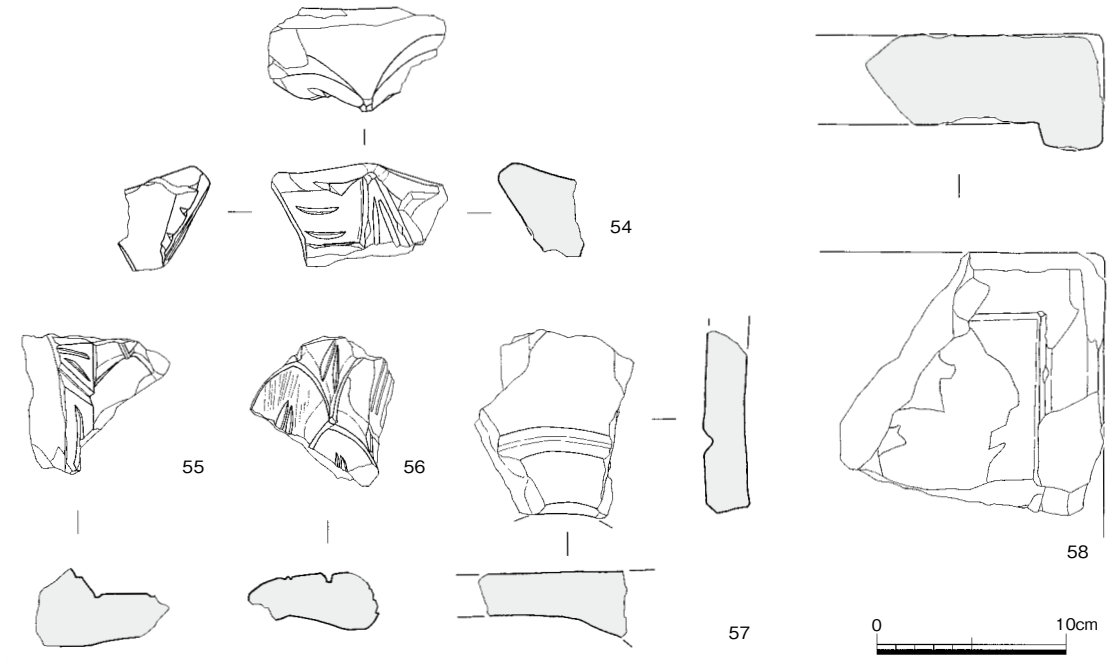


Fig. 138　暗褐色土　道具瓦（1：4）

面側縁は筒部から玉縁にかけて幅広く面取りをする。凹面は未調整で、布目圧痕と吊り紐痕跡が残る。凹面広端縁、玉縁凹面端縁も幅広く面取りをする。室町時代に属する。

51は、凸面ヨコナデ。狭端から7.0cmのところに鉄釘が残る。側面はヘラケズリ、凹面は未調整である。玉縁凹面基部をケズリ、面取りする。2IB、飛鳥前・中期に属する。

平瓦は総出土量27.3kgである。

52は、凸面タテ縄タタキで、端部付近は部分的にナデ消している。狭端面はヘラケズリ、広端面は未調整である。側面はヘラケズリで調整する。凹面は粗い布目圧痕で狭端縁と側縁は幅広くナデ調整、広端縁はわずかに面取りする。平安時代に属する。

53は、凸面には、文様タタキがある。側面は分割後未調整である。凹面は部分的にタテナデを施す。飛鳥時代に属する。

また、道具瓦が出土している。

54は、鴟尾の頂部と推定される。文様部分はやや斜め上方に突出し、頂部と前面に平坦面がある。

55は、鴟尾の縦帯部分である。縦帯以外の文様では、鱗状の文様をけずりだしている。

56は、鴟尾腹部の鱗文部である。裏面はナデ調整する。

57は、鴟尾頭部の破片である。棟の瓦を受ける刳りの一部が残存している。54～57はいずれも『至宝』の鴟尾1に相当し、飛鳥前期に属する。

58は、磚である。上面は平坦で、下面は辺縁に突帯がめぐり内側はくぼむ。突帯部分で厚み6.0cm、窪み部分で4.5cmある。飛鳥時代か。（今井）

褐色土　本土層は、第1次・第2次調査区に広く分布し、金属製品、銭貨、石製品、鉱滓、土器、瓦が出土した。

金属製品には、銅製品・鉄製品があるが、図示しえたのは銅製品1点である（Fig.139－1）。1は、

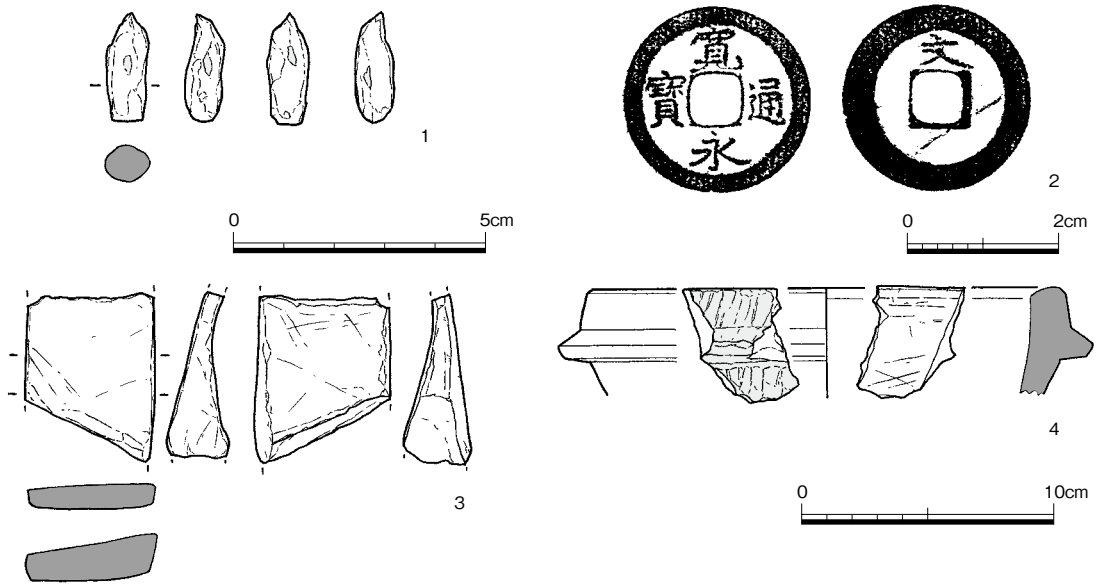


Fig. 139　褐色土　金属製品（1　2：3）・銭貨（2　1：1）・石製品（3・4　1：3）

長さ2.1cm、径0.8cmの筆先形を呈する小片で、基部の断面はわずかに杏仁形となり、先端は蓮弁状の反りをもつ。表面に鍍金の痕跡が残る。TQ50出土。鉄製品は26点出土したが、この中には丸釘や排水用皿など時代の下るものが多数含まれる。

銭貨には、寛永通宝が1点ある（Fig.139－2）。2は、「寛」字の12画と13画の頂部が離れ、「寶」字の最終画を「ハ」字状につくる「ハ寶」とよばれるもの。背面に「文」字をもち、1668年初鋳の「文銭」。背面には笵傷がある。TO40出土。

石製品には、砥石、石鍋片がある（Fig.139－3・4）。3は、流紋岩製の砥石。幅5.0cmに側面を加工し、表裏面に使用の痕跡が認められるが、片面は強い曲面をなし断面が梯形状になる。上下端を欠く。残存長6.4cm。TQ52出土。4は、滑石製石鍋の口縁部から体部上半にかけての小破片である。残存高4.4cm。口唇部は厚さ1.4cmでゆるやかな曲面をなし、体部にかけて器厚を減じる。口唇端部から1.4cm下位に幅1.4cm、断面台形で高さ1cm程の鍔をつける。推定口径19cm。外面は4cmほどの単位幅をもつ縦方向のケズリ、内面には横位の擦痕が多数認められる。外面全体に煤が付着する。TR50出土。

このほかに、鉄滓が1点出土している（PL.31－d、Tab.7）。（次山）

次に土器を報告する（Fig.140、PL.37）。

褐色土層には暗褐色土に比べてさらにまとまりにかける多様な土器類が混在している。せいぜいTO35での鍋、釜類が少々まとまるくらいであろう。ここでは1968年度出土品の中から目につくものを任意に抽出した。

1～11が土師器杯・皿類、12・13が瓦器椀、15～18が土師器の甕・鍋類、14が土師器甑、19が須恵器鉢である。

1は、深手丸底の土師器杯片で、口縁部は端面に内傾する面を有する。外面の一部と内面にハケメをとどめ、内面にわずかにミガキないし暗文の痕跡のようなものが残る。7世紀後半の土師器杯Cと思わ

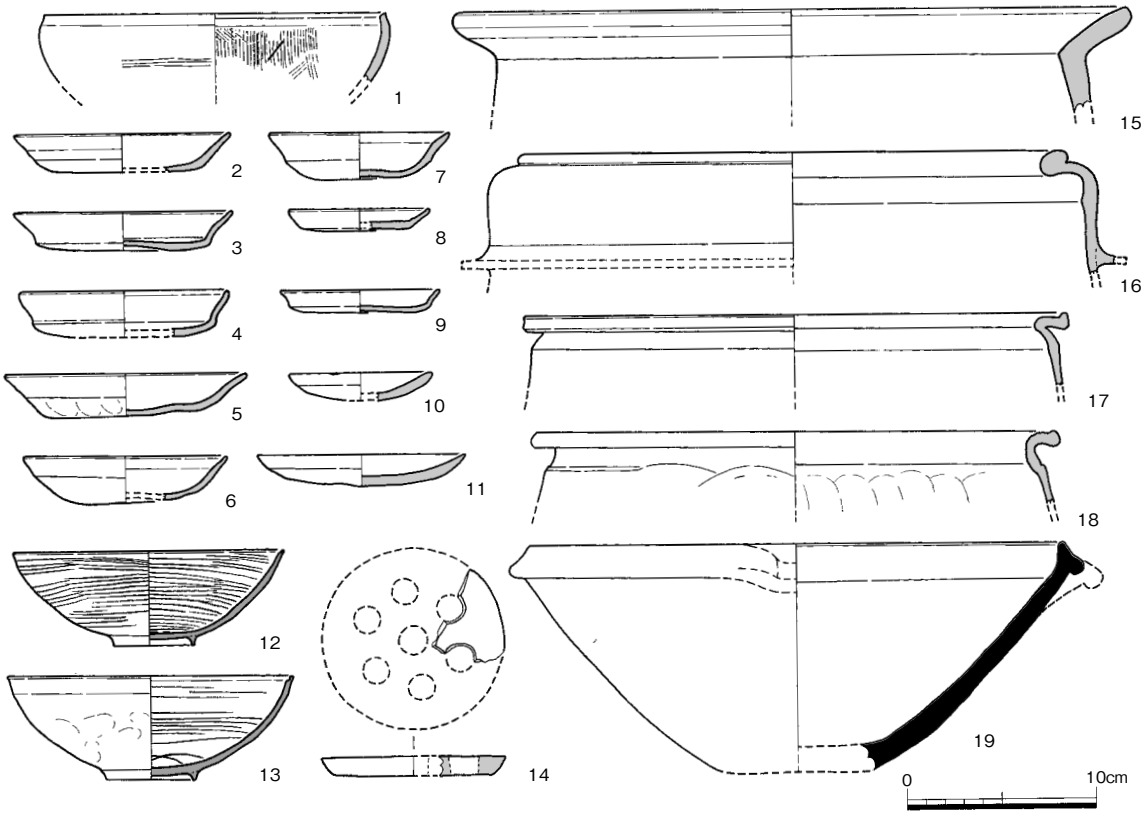


Fig. 140　褐色土　土師器・須恵器・瓦器（1：4）

れる。復原口径18.2cmを測る。

2～11が各時代の土師器皿である。

2は、外面に2段ヨコナデの痕跡が明瞭なもので、胎土は褐色を呈する。これに対して3・4はほぼ同様な径であるが、1段ナデで底部と体部の境を明瞭にみせるもので、橙褐色を呈する。前者が13世紀頃のものであるのに対して、後者は14～15世紀頃のものであろう。2は口径11.4cm、3は口径11.6cm、器高2.1cm、4は口径11.0cmである。

5～7も同じく橙褐色の胎土のものだが、外反気味に口縁が長く開き、ヨコナデの範囲が狭い。さらに時期の下るものと思われる。5は口径12.8cm、器高2.3cm、6は口径10.7cm、7は口径9.6cm、器高2.6cmを測る。また、11は白色で精良な胎土をもち、口縁を薄く引き延ばすもので、近世に属するものであろう。口径11.0cm、器高1.8cm。

こうした大ないし中皿の多様な中身に対応するように、小皿にもいくつか種類がある。まず、8・9は1段ナデ仕上げで橙褐色の胎土をもつもので、13～14世紀頃のもの。8は口径7.4cm、器高1.2cm、9は口径8.4cm、器高1.2cmを測る。これに対して、10は厚手ながら精良な胎土で作られた小皿。口縁の一部に煤が付着する燈明皿で、11に対応する。口径7.6cm、器高1.5cm。

12と13は、瓦器椀である。矮小化が進んだ小さい径の高台を有し、内面見込みには螺旋状の暗文を施している。18は、外面のミガキをすでに失っており、より後出のものとみられるが、それでも13世紀代におさまるのであろう。12は口径14.4cm、器高は5.6cm、13は口径15.2cm、器高5.5cmである。

14は、甑の底板で、図に復原的に示したように小円孔を計７個ほどあけるものであろう。孔は管状のもので抜くようにしてあけられている。底部がすぼまり気味の深鉢状の体部内側に落とし込んで使用したと考えられる。復原径は9.8cm、厚さ1.1cmを測る。

ところで、暗褐色土にはあまり含まれていなかった鍋、甕類が褐色土からはやや多く出土している。

15は、単純な「く」の字に屈曲する口縁をもつ厚手の甕の口縁である。復原口径35.4cm。距離にして30m以上離れた地点の破片が接合しており、褐色土が二次的に大きく乱されていることがわかる。時期を含め遺物の性格はわからない。

16は、口縁を強く内側に巻き込んだ後、端部を外側に丸く折り返し、玉縁状に仕上げる大和H型と呼ばれる釜である。薄い鍔の下側にも煤の付着が認められない未使用品と判断される。胎土は精良で白っぽい褐色を呈する。近世に下るものだろう。復原口径は28.5cm。17・18は、口縁がきつく外反し、水平に折れた口縁の端部を丸く上方につまむ釜で、いわゆるＢ１類に属するものである。18は体部外面に幅の広い面取り状の調整痕が残る。17は口縁部から体部外面にかけて、18は残存内外面全面に煤の付着が観察できる。口縁の形状から15世紀頃のものと思われる（菅原1983）。復原口径は17が28.8cm、18が27.4cmである。

19は、須恵器の鉢で、残存していないが片口がつくものと思われる。口径は29.2cm、器高12.1cmで、底面は平底と思われる。他の地点で出土する須恵器の鉢はほとんど端面が外傾する面を広くもつ東播系の製品であるのに対して、本例は端面下端を玉縁状に仕上げ、外面にロクロによるナデ調整の凹凸をみせる独特のものとなっている。胎土に砂粒を多く含み、灰色を呈している。産地は不明だが他の例と同じ13～14世紀頃のものなのであろう。（高橋）

軒瓦を報告する（Fig.141～146）。

１は、3Bb。瓦当下半部にあたる。裏面は中央がやや高くふくらみ、調整は不定方向ナデである。同心円状の凹凸がわずかにみられ、回転台を使用した可能性がある。側面の調整はナデであり、外縁上には笵端痕がある。

２・３も、3Bbか。２は瓦当下半部。裏面は中央がやや高くふくらみ、調整はナデである。瓦笵の粘土が部分的に層状に剝離する。側面の調整はナデで、外縁は欠損している。３は瓦当下半部か。裏面は大部分剝離し、調整は不明瞭である。側面も大部分欠損するが、かすかにナデが認められる。

４・５は、６Ｃ。４は、瓦当下半部である。裏面はほぼ平坦で、大部分はユビオサエで仕上げ、さらに周縁に沿ったナデを施す。側面はナデを施す。

6

Fig. 141　褐色土　軒丸瓦細部

５は、瓦当下半部である。裏面はほぼ平坦。大部分はユビオサエで仕上げ、周縁のみナデで調整する。側面はナデが施され、若干外反する。瓦当面には掌文あり。

６は、６Db。瓦当は外縁をのぞき、ほぼ完形である。接合方法は楔形ａ。内面接合粘土が良好に残り、支持ナデツケの有無は不明であるが、内面接合粘土と瓦当粘土が完全に密着してはいない

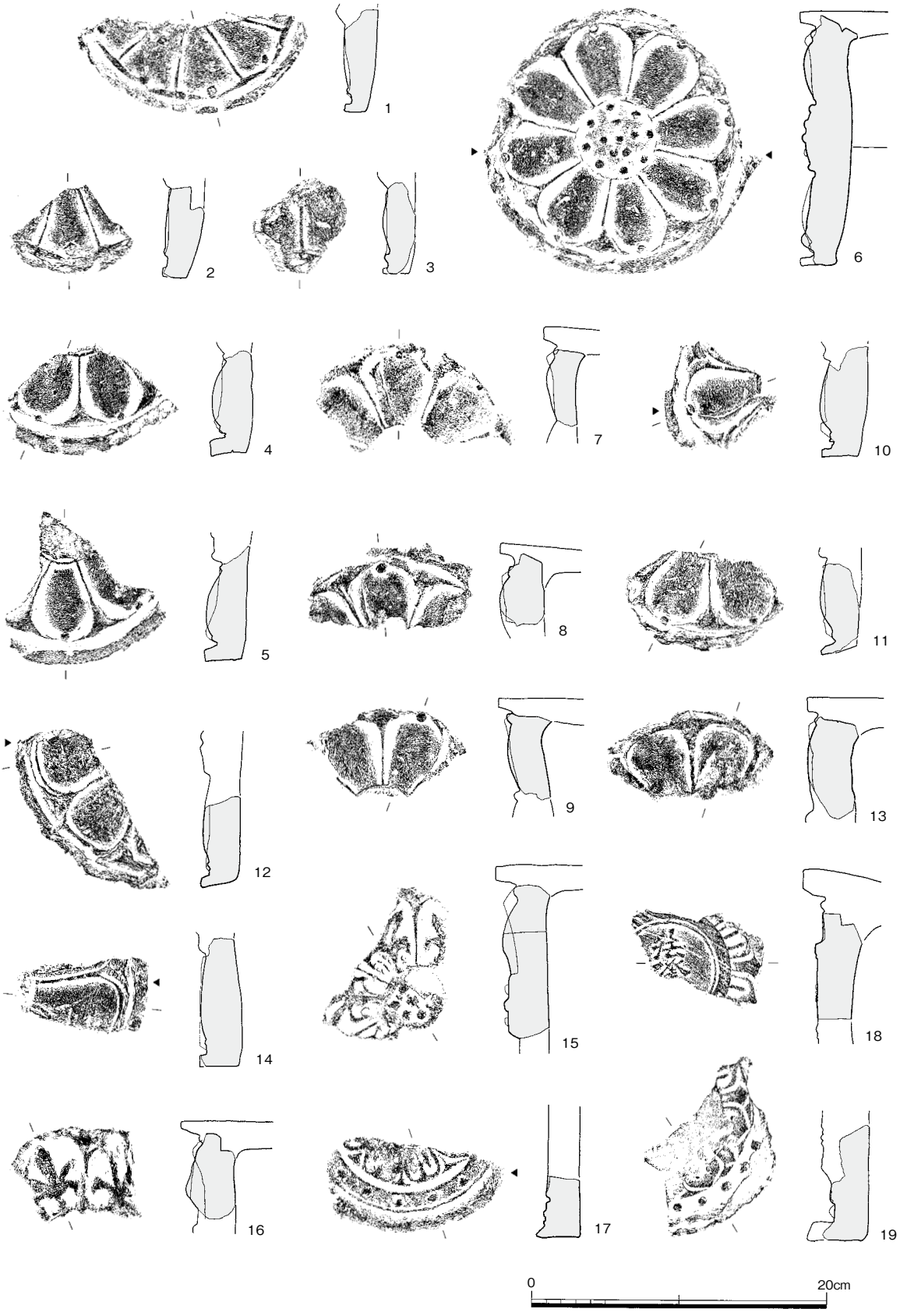


Fig. 142　褐色土　軒丸瓦１（１：４）

（Fig.141－6）。丸瓦側面が当たる部分のみキザミが転写される。瓦当裏面は中央がやや高くふくらむ。調整は中央部が不定方向ナデ、下半部は周縁に沿ってナデ。側面はナデが施され、外反する。瓦当面全面に掌文あり。

7～11は、6D。7は、丸瓦との接合部にあたる。外縁は欠損しており、接合方法は楔形aかb。内面接合粘土が残るが、支持ナデツケの有無は不明である。瓦当裏面は不定方向ナデ。内面接合粘土はヨコ方向にナデつける。8は、瓦当下半部である。裏面は大部分が剝離しているが、調整は不定方向ナデである。側面は欠損する。瓦当面には掌文あり。9は、丸瓦との接合部にあたる。外縁は欠損しており、接合方法は楔形aかb。内面接合粘土が残るが、支持ナデツケの有無は不明である。瓦当裏面は平坦で、調整は不定方向ナデ。内面接合粘土はヨコ方向にナデつける。瓦当面にはかすかに掌文あり。10は、丸瓦との接合部が残るが、接合方法は不明である。内面接合粘土がわずかに残る。瓦当裏面は中央がやや高くふくらみ、調整は不定方向ナデ。側面はナデが施され、若干外反する。瓦当面蓮弁には笵ズレがみられる。11は、瓦当下半部か。裏面の調整は不明である。側面はナデが施され、若干外反する。瓦当面には掌文あり。瓦当厚と外縁幅が6Dの中では薄手である。

12～14は、7A。12は、AaかAbか不明である。瓦当下半部にあたり、丸瓦との接合部をわずかにとどめる。裏面は平坦で、調整はヨコナデを中心とした不定方向ナデが施される。側面はナデで、若干外反する。瓦当面間弁には笵ズレがみられる。13は、AaかAbか不明である。丸瓦との接合部にあたり、焼成は軟質で、全体的に摩滅している。内面接合粘土が瓦当粘土とよく密着しており、支持ナデツケが施された可能性が高い。キザミの転写は不明瞭である。瓦当裏面は摩滅と剝離により、調整は不明瞭である。14は、AaかAbか不明である。丸瓦との接合部端が残る。瓦当裏面はほぼ平坦で、調整は不定方向ナデで、さらに周縁に沿ってナデ、側面にはナデが施され、若干外反する。

15・16は、33A。15は、瓦当中央部である。裏面はほぼ平坦で、剝離しているため明瞭ではないが、調整は不定方向ナデである。側面は欠損している。瓦当面中房の蓮子間に笵傷がある。16は、丸瓦との接合部にあたる。焼成は軟質で全体的に摩滅している。接合方法は楔形a。キザミ転写が認められるが（Fig.143－16）、支持ナデツケの有無は不明。裏面の調整は不明瞭である。側面は欠損している。

17は、54Ba。瓦当下半部である。焼成は軟質で、全体的に摩滅している。調整は裏面・側面ともに不明瞭で、外縁側面には笵端痕が巡る（Fig.143－17、瓦当面は左）。

18・19は、67B。18は、丸瓦との接合部。内面接合粘土をヨコにナデつけている。側面は欠損。瓦当面中房には糸切り痕を残す。瓦当面には離れ砂が付着する。19は、瓦当下半部にあたる。裏面は平坦で、調整は不定方向ナデが施される。側面にはナデが施される。

20～24は、89V。20は、丸瓦玉縁式で残りが良好である。丸瓦全長31.0cm、筒部厚さ2.0～2.3cm、玉縁長さ5.0cm、厚さ1.6cm。筒部中央、狭端から約10cmの位置に径1cmの釘穴がある。焼成後に凹凸両面から穿つ。筒部凸面はタテ方向のヘラケズリを加えた後、ナデを施す。凹面は布目圧痕を粗くナデ消す。糸切り痕が斜めに走り、吊り紐痕はみられないが、1.5～2cmの間隔をあけて紐状の破線が縦に複数走る（Fig.143－20）。凹面側縁は幅1～2cmほど面取りをする。筒部凹面段部付近には、半円形の滑り止め（引掛け）が取り付く（凹面側縁の面取り後に接合）。調整は、側面がナデ、段部、玉縁もナデ。玉縁端部凹面は1cmほど面取りをし、瓦当外縁外角は幅0.3cmほど面取り

をする。裏面はほぼ平坦で、調整は不定方向ナデである。21は、丸瓦との接合部にあたる。丸瓦先端は未加工で、キザミも施されていない。外面・内面ともに接合粘土を付加する。瓦当裏面は平坦で、調整は不定方向ナデである。側面はナデ。瓦当外縁外角は幅0.1～0.2cmほど面取りをし、外縁内角も部分的に幅0.2～0.3cmほど面取りをする。筒部凸面はタテ方向のヘラケズリ後ナデを施す。22は、丸瓦との接合部にあたる。接合方法は不明。カキメあり（Fig.145－22）。瓦当裏面は平坦で、調整は不定方向ナデで、さらに下半部は周縁に沿ってナデ。側面はナデ。外縁角には0.3cmほどの面取りがなされる。瓦当面巴文には掌文がある。瓦当裏面と側面の一部が銀化する。23は、丸瓦との接合部にあたり、丸瓦が幅8cm、長さ4cmほど残存している。丸瓦先端加工は施されていないと考えられるが、凸面の外面接合粘土が接着する部分にはキザミが、瓦当裏面の接合部にはカキメが施される（Fig.145－23）。外面、内面両方には接合粘土を付加。瓦当裏面はヨコナデ。側面は欠損している。瓦当面には離れ砂が付着する。筒部凸面・凹面ともに調整はナデであるが、筒部凹面には斜め方向に糸切り痕が走る。24は、瓦当下半部である。裏面は平坦で、調整は不定方向ナデで、さらに周縁に沿ってナデ。側面はナデ。外縁角には幅0.3cmの面取りが施される。

25は、89X。丸瓦との接合部にあたる。瓦当裏面にはカキメが施される。側面の調整はナデで、若干外反する。外縁上面には糸切り痕が残る。瓦当面には離れ砂付着か。

26は、90A。裏面は大部分欠損し、どの部分にあたるか不明である。瓦当面には離れ砂が付着する。

27・28は、96Iか。27は、丸瓦との接合部で、丸瓦が幅14cm、長さ9cmほど残存している。筒部凸面はタテ方向のヘラケズリを施した後、タテナデを施す。筒部凹面には鉄線切りの痕跡があり、布目圧痕はほぼナデ消されている。凸面側縁は幅5mmほど面取りをするが、凹面側縁の面取りの有無は欠損により不明である。丸瓦先端は未加工だが、凹面で内面接合部分の接着する部分にキザミを確認できる。先端には瓦当裏面のカキメが転写される。外面・内面ともに接合粘土を付加している。裏面はほぼ平坦で、調整はナデ。瓦当面には離れ砂が付着する。丸瓦は厚さ1.9cm。28は、丸瓦との接合部。外面・

16

17

20

Fig. 143　褐色土　軒丸瓦細部

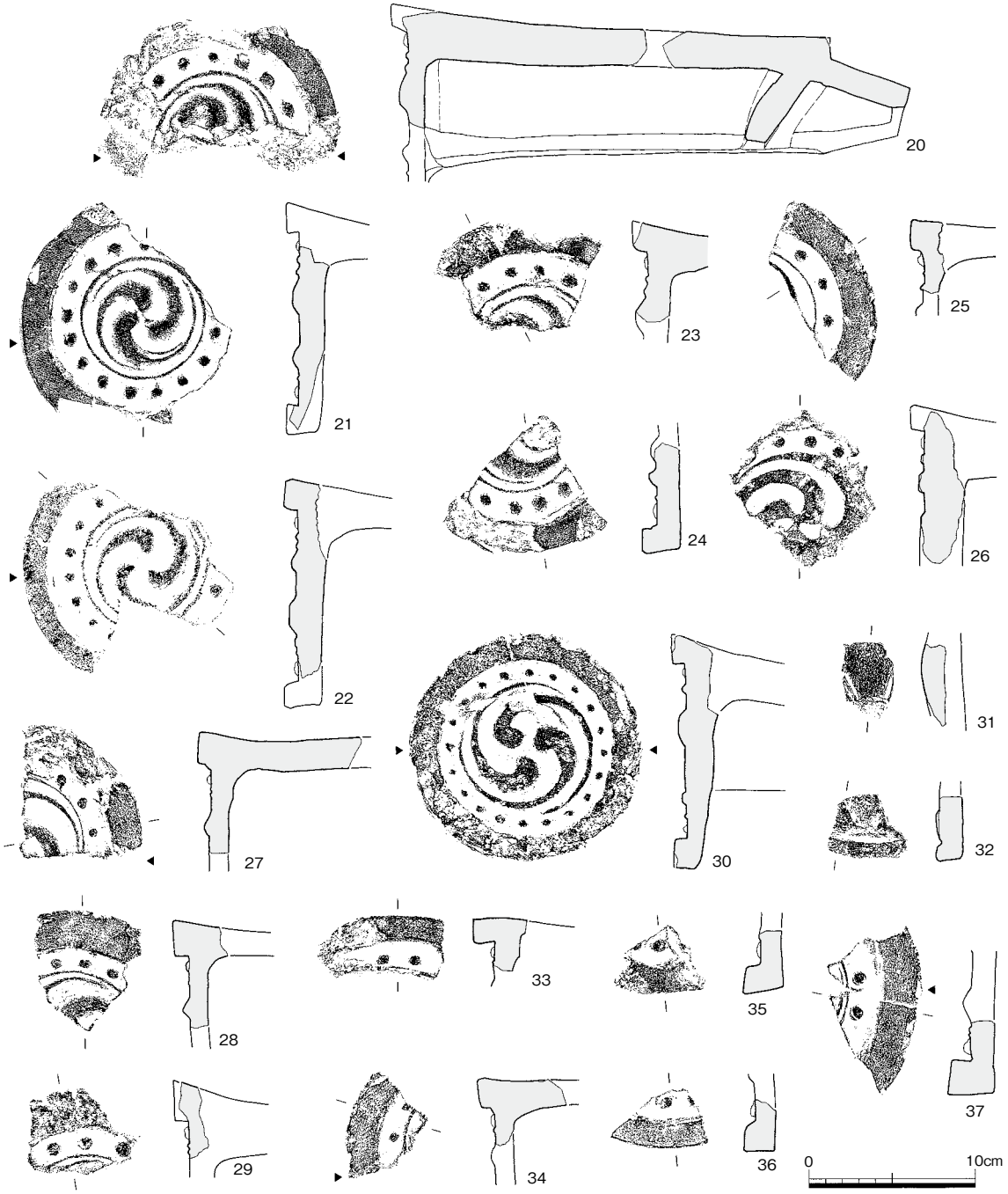


Fig. 144　褐色土　軒丸瓦２（１：４）

内面ともに接合粘土を付加。内面接合粘土には筒部凹面のキザミを転写する。瓦当裏面は平坦で、調整はナデ。側面はナデ。瓦当面との角度は鋭角をなす。外縁上面はナデ。

29は、96ⅠかX。裏面が剝離し、どの部分にあたるか不明である。側面にはナデが認められる。瓦当面には離れ砂が付着する。

30は、97D。瓦当がほぼ完存する。丸瓦との接合部には、タテ方向にキザミを密に施し、さらにヨコ方向にカキメを施す（Fig.145－30）。接合粘土の有無は不明である。裏面は平坦で、調整はヨコナデである。側面はナデ。瓦当面には離れ砂が付着する。巴文には掌文がみられる。

31～37は、型式不明軒丸瓦。31は、飛鳥時代軒丸瓦の蓮弁の一部か。裏面は剝離している。32は、瓦当下半部で、裏面は平坦である。飛鳥時代軒丸瓦の蓮弁と間弁の一部か。33は、外縁高が高く、珠文は大きく間隔は疎らである。裏面は全面に剝離し、どの部分にあたるかはわからない。側面調整は不定方向ナデ。外縁内面は瓦当面に対して垂直方向にナデ。瓦当面には離れ砂が付着する。室町時代のものか。34は、丸瓦との接合部にあたり、丸瓦が幅6cm、長さ5cmほど残存する。外面、内面ともに接合粘土を付加している。筒部凸面はタテ方向のヘラケズリ後、ナデを施す。その後、瓦当付近のみヨコナデ。筒部凹面側縁の面取りは明瞭ではないが、幅1cmほどと考えられる。瓦当面には離れ砂が付着する。室町後期～江戸前期のものか。丸瓦は厚さ1.7cm。35は、瓦当下半部である。瓦当裏面は平坦で、周縁の調整は回転ナデである。側面はナデ。外縁上面は円周に沿ってナデ。外縁角には幅0.3cmの面取りがなされる。中世のものか。36は、瓦当下半部である。瓦当裏面は周縁に沿ってナデ。外縁上面は円に沿ってナデ。瓦当面には離れ砂が付着する。中世のものか。37は、左巻き巴文。瓦当下半部である。瓦当裏面の調整は、中心寄りは雑な不定方向ナデ、さらに周縁に沿ってナデ。側面の調整はナデ。室町時代のものと考えられる。

38は、206か。凹面の調整はタテナデで、瓦当付近のみヨコ方向のヘラケズリが施される。

39は、213B。瓦当の一部。凸面が一部残るが、摩滅により調整は不明瞭である。

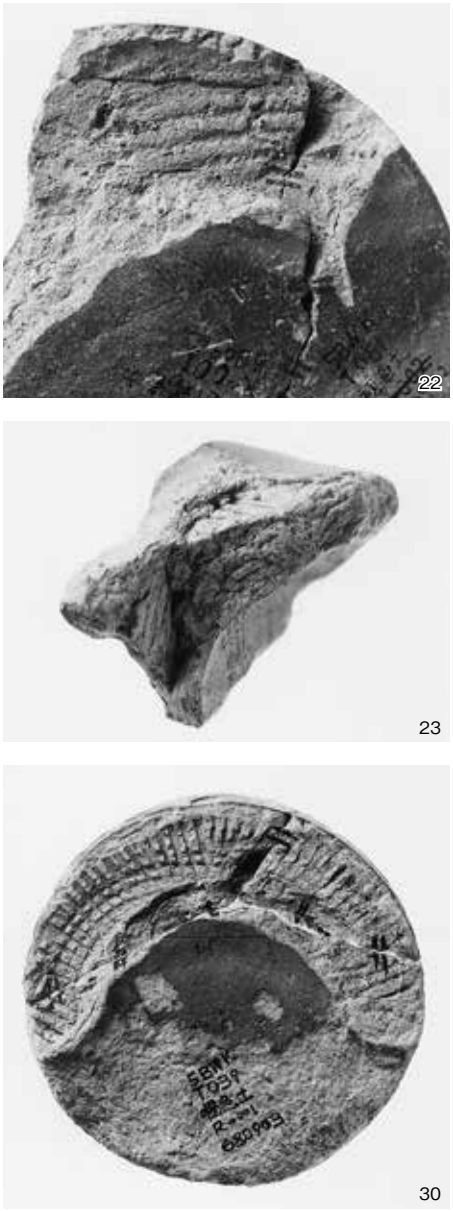


Fig. 145　褐色土　軒丸瓦細部

40は、229B。直線顎。凹面は粗くタテナデする。瓦当付近はヨコ方向のヘラケズリを施し、布目圧痕が残っていない。凸面は狭端に向けてタテ方向のヘラケズリ、側面は瓦当に向けてタテ方向のヘラ

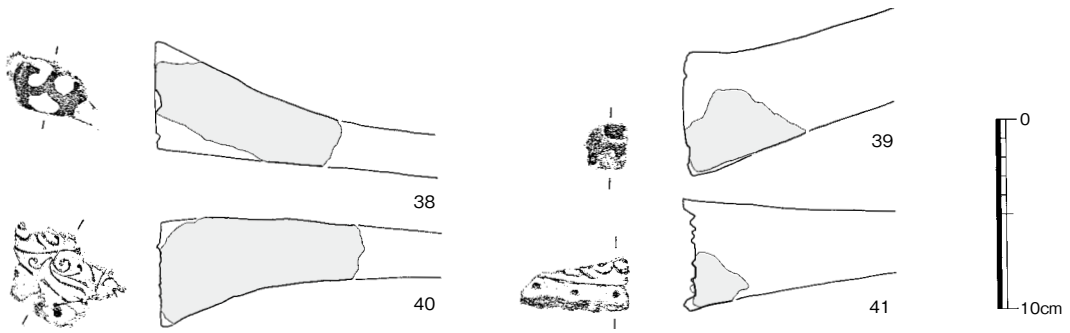


Fig. 146　褐色土　軒平瓦（1：4）

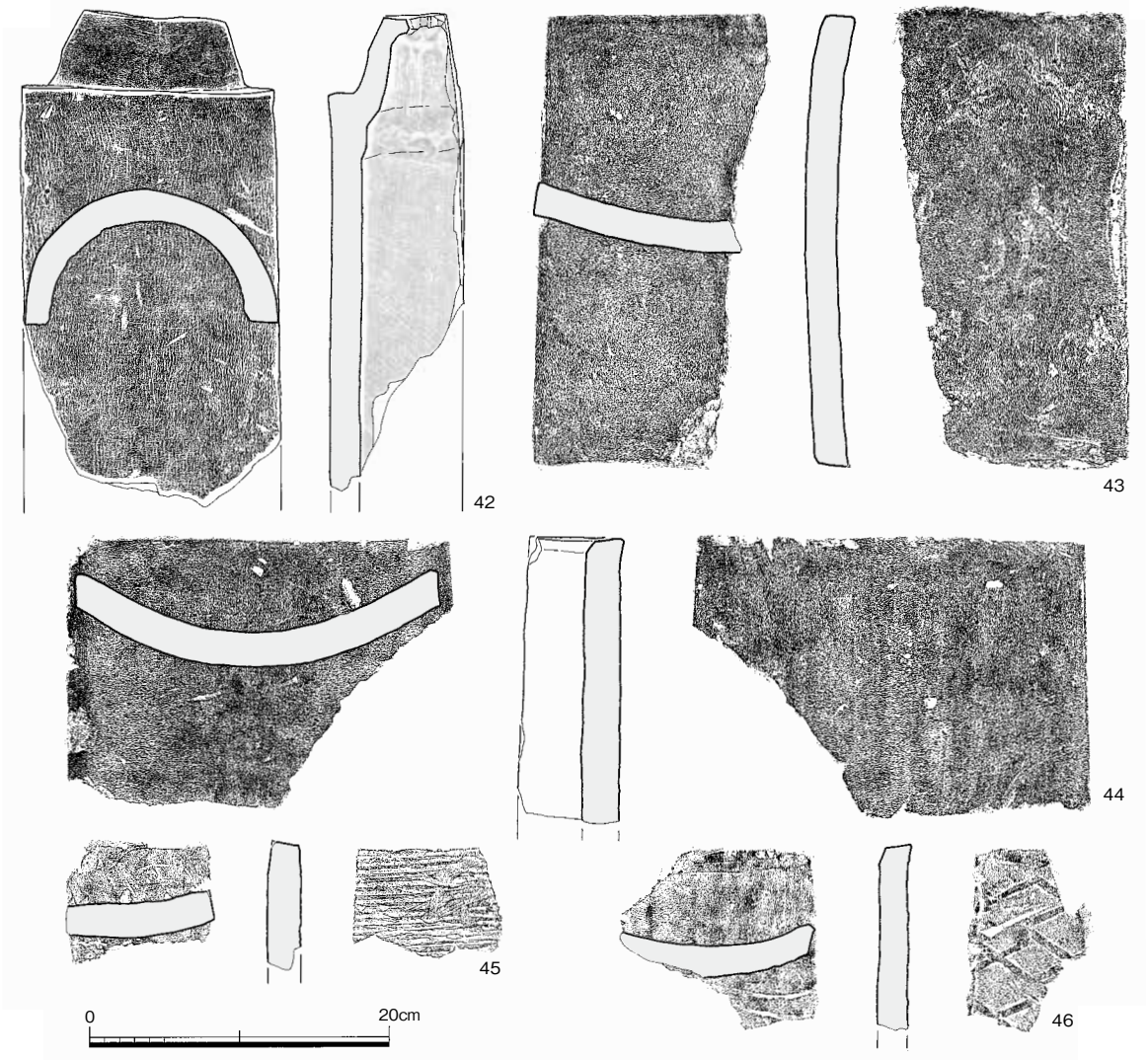


Fig. 147　褐色土　丸瓦・平瓦（1：5）

ケズリで調整する。凹面側縁を幅1.2cmほど面取りする。

41は、242A。瓦当中央下部にあたる。凹面側外縁外側を幅4mmほど面取り。凹面の調整はヘラケズリか。

このほか、266Aと284Bが各1点、瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片が5点出土している。（中川）

また丸瓦、平瓦、鴟尾、および道具瓦が出土した（Fig.147・148）。

丸瓦は総出土量は19.0kgである。

42は、筒部凸面はタテ縄タタキ後に部分的にヨコナデ。玉縁凸面端部側をケズリ後に肩から玉縁凸面にかけて回転ヨコナデする。側面はヘラケズリで調整し、筒部凹面側縁は面取りをする。凹面は未調整だが、玉縁凹面側縁も面取りをする。平安時代に属する。

平瓦は、合計107.2kgである。

43は、凸面はタテナデ、狭端面、広端面、側面はヘラケズリで調整する。凹面は全面ヨコナデで、狭端縁をわずかに面取りする。 鎌倉時代に属する。

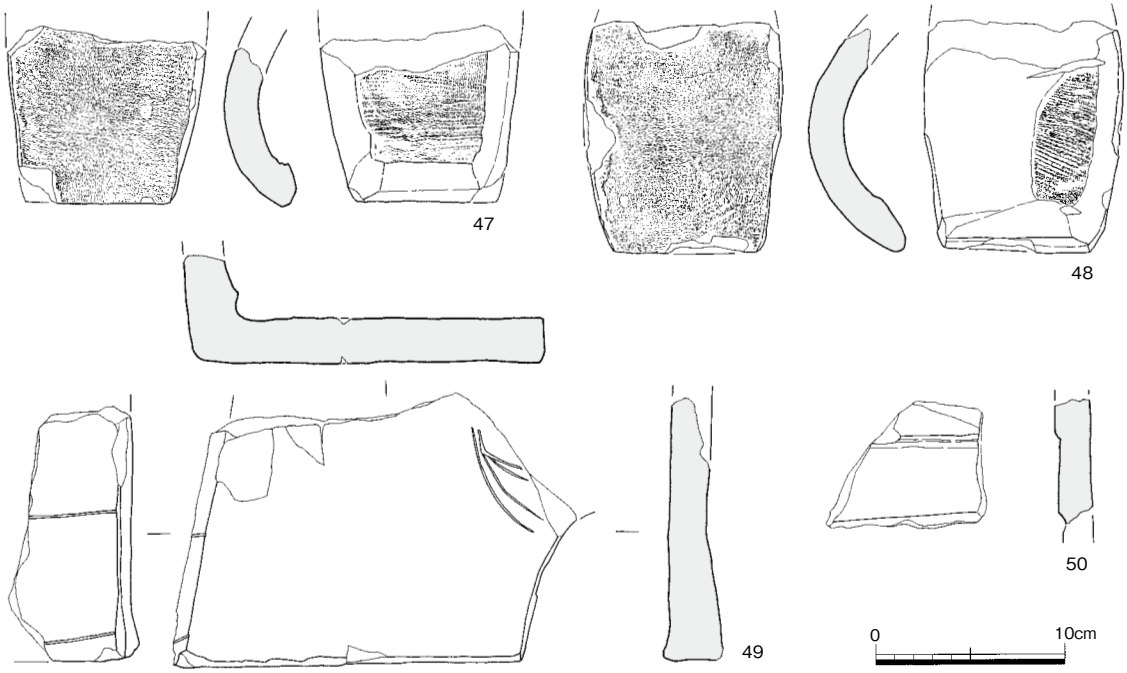


Fig. 148　褐色土　道具瓦（1：4）

44は、凸面タテナデ。狭端面と側面はヘラケズリで調整する。凹面は未調整で、狭端縁を面取り、凹面側縁をタテナデする。室町時代に属する。

45は、凸面に櫛状工具でカキメを施す。側面はナデ、凹面は不定方向のナデで、布目は見えない。時期は不明である。

46は、凸面に格子文。側面はナデ、凹面側縁はナデ、凹面端縁は面取りをする。鎌倉時代に属する。

道具瓦を報告する。

47は、面戸瓦。凸面はタテ縄タタキ、凹面は両側縁とも面取りをする。『至宝』の面戸12にあたる。

48は、面戸瓦。凸面はタテ縄タタキ、凹面は片側側縁のみ面取りをする。『至宝』の面戸12にあたる。47・48はいずれも室町中期に属する。

鴟尾は、2点出土している。

49は、鴟尾の頭部と胴部が残存している。頭部は中央の刳りが残り、刳りの上方にはヘラ描きの戯画がみえる。胴部の段は横位の沈線で表現する。頭部、胴部とも表面はヨコナデ、底部は粗いナデ、裏面はタテナデ調整。『至宝』における鴟尾4で、飛鳥中期に属する。

50は、鴟尾の鰭部分。表面はタテナデ調整。正段で裏面は粗いナデ。この個体は『至宝』には掲載されていないが、鴟尾3と同一個体の可能性がある。飛鳥時代に属する。（今井）

表土　金属製品、土器、瓦が出土した。

金属製品として、銅製品と鉄製品が出土している。鉄製品には釘、金具片等6点があるが、いずれも錆化が著しい。銅製品は円盤形の銅板が1点ある。（次山）

次に土器を報告する（Fig. 149）。

1・2は奈良時代の須恵器杯B蓋である。1は、つまみを欠損していて、ほとんど器高がないもので、端部は短く下向きに折り返されている。2は、つぶれた宝珠形のつまみだが、大きなものである。

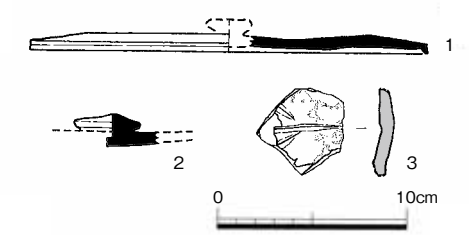


Fig. 149　表土　須恵器・施釉陶器（1：4）

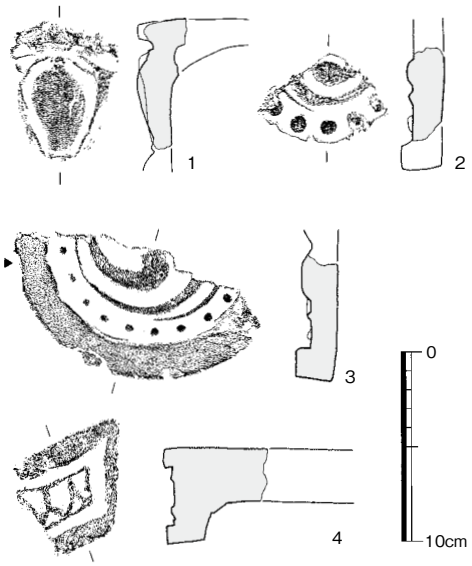


Fig. 150　表土　軒丸瓦・軒平瓦（1：4）

3は、緑色の低火度鉛釉を施した軟質の製品（PL. 37）。表面および図の上下端面に施釉されている。図上での中心部分に沈線を有し、右側端面は何かに接合してあったものが剝がれたようになっている。また、上辺と下辺は摩滅のためはっきりしないが、おそらく図の状態通りに完結しているようであり、そこに型の合わせ目状バリを残す。これらの形状から、容器類ではなく施釉の製品の一部ではないかと思われる。しかし、表土出土ということもあり、奈良三彩として認定できるかどうか疑わしい。（高橋）

軒瓦について報告する（Fig. 150）。

1は、6C。丸瓦との接合部にあたる。接合方法は片枘形bか。支持ナデツケが施されるが、キザミ転写はない。裏面の調整はユビオサエである。側面はナデ。瓦当面の蓮弁には掌文あり。

2は、91か92。瓦当下半部か。裏面は平坦で、調整はナデ。側面は欠損している。

3は、97D。瓦当下半部にあたる。裏面は平坦で、調整はヨコナデを中心とした不定方向ナデである。側面はナデ。瓦当面には離れ砂が付着する。

4は、204C。貼付段顎。凹面には布目圧痕が残るが、側面と瓦当面付近はナデ消す。凸面顎部はヨコナデ。平瓦部はタテナデ。凹面側縁は幅3mmほど面取りをする。瓦当縁には面取りがない。（中川）

その他の包含層

金属製品、石製品、土製品、軒瓦の順に報告する。

金属製品には、銅製品・鉄製品がある（Fig. 151－1）。1は、銅製品で本来は半円形を呈していたと考えられる板状の破片。長さ2.8cm、幅1.8cm、厚さ2cm。KH53石田トレンチで取り上げている。鉄製品は釘、火箸状品、釜片など6点がある。

石製品には、火打石・三角柱状石製品がある（Fig. 151－2・3）。2は安山岩製の火打石である。長さ6.9cmの厚みのある剝片を利用したもので、一側縁の全体と他側縁の2分の1ほどに打撃痕が認められる。出土地点不明。3は、周囲の3面を平坦に研磨することにより不整形な三角柱状を呈する石製品の破片。流紋岩製。各面が幅約7cm、6.5cm、6.1cmとなる。現状の厚さ約3.7cm。1面のみが黒灰色を呈する。KH53石田トレンチで取り上げている。

4は、長さ9.7cm、幅8.6cm、厚さ3.2cmほどの不整形な土製品片である（Fig. 151－4）。一部に灰褐色となる部分もあるが、全体に明橙褐色を呈する。被熱の程度は強くなく融解している箇所などはない。胎土は粘土分が高く砂粒と風化雲母粒子が目立つ。「実相院北トレンチ第3層」で取り上げている。（次山）

次に軒瓦を報告する。

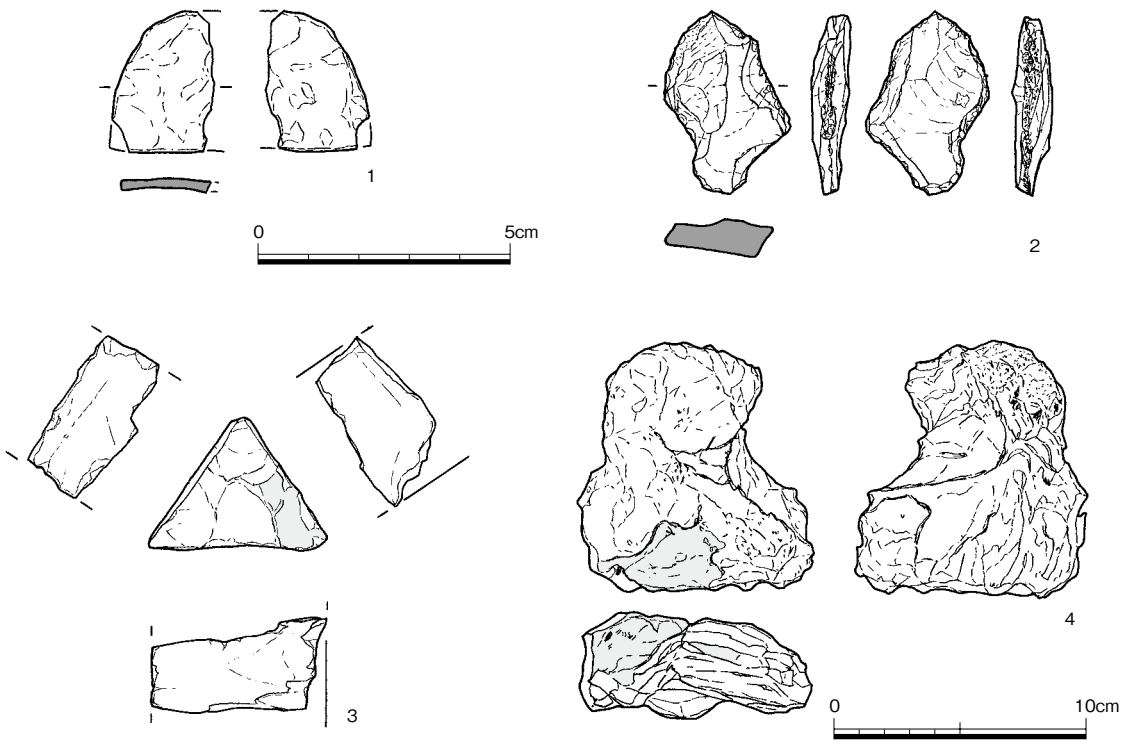


Fig. 151　その他の包含層　金属製品（1　2：3）・石製品（2・3　1：3）・土製品（4　1：3）

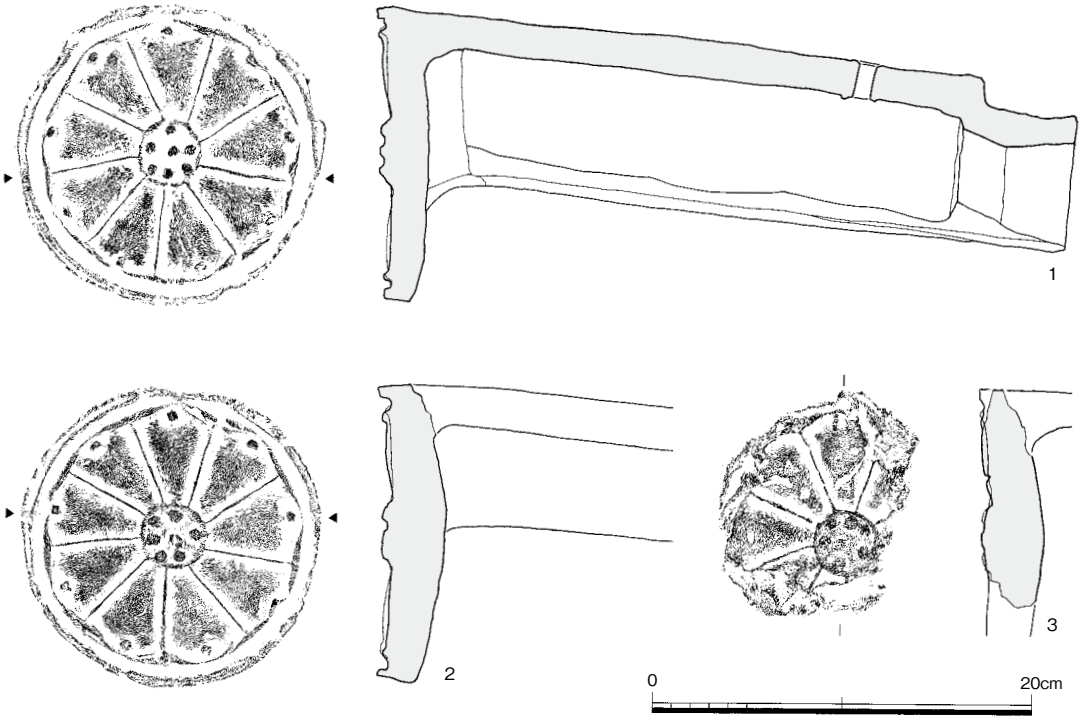


Fig. 152　その他の包含層　軒丸瓦1（1：4）

TS47地山直上　Fig.152－1・2は、3Bb。1は、丸瓦も含め完存している。丸瓦全長37.3cm、筒部厚さ1.8～2.0cm、玉縁長5.0cm、厚さ1.4～1.7cm。瓦当と丸瓦との接合方法は不明である。

Fig. 153　その他の包含層　軒丸瓦細部

瓦当裏面は中央にかけてやや高くふくらみ、調整は不定方向ナデ。側面はナデ。外縁上には笵端痕あり。内面接合粘土は瓦当と完全には密着せず、所々隙間を生じる。凸面段部から６cmのところに、径９cmの釘穴を穿つ。凸面から凹面への焼成前穿孔である。筒部凸面の調整はタテ方向のヘラケズリ後、瓦当付近と段部付近のみヨコナデ。凹面は大部分布目圧痕を残すが、一部粗くナデ消される。玉縁部凹面の調整はヨコ方向のヘラケズリ。側面は分割破面と分割截面を、瓦当接合前にヘラケズリするが､分割截面と破面の境はわずかに段差､もしくは線となって残る。凹面側縁は面取りを施す（Fig.153－１）。２は、瓦当が完存する。接合方法片枘形ａ。内面接合粘土は剝離し痕跡のみ。裏面は中央にかけて高くふくらむ。調整は回転ナデの後、不定方向ナデ（Fig.153－２）。側面はナデ。外縁上には明瞭に笵端痕あり。瓦当面中房の蓮子に掌文あり。

TP48小礎石周辺　Fig.152－３は、３Ｂｂ。丸瓦と瓦当の接合部にあたる。接合方法は片枘形ａか。内面接合粘土は剝離痕跡のみ残る。瓦当裏面は剝離するが、中央にかけてやや高くふくらむ。調整はナデ。瓦当側面は残りが悪く、調整は不明。外縁も残りが悪く、笵端痕は確認できない。

TP49地山直上　Fig.154－４は、６Ｄ。丸瓦との接合部にあたる。接合方法楔形ａかｂ。支持ナデツケ、キザミ転写は認め

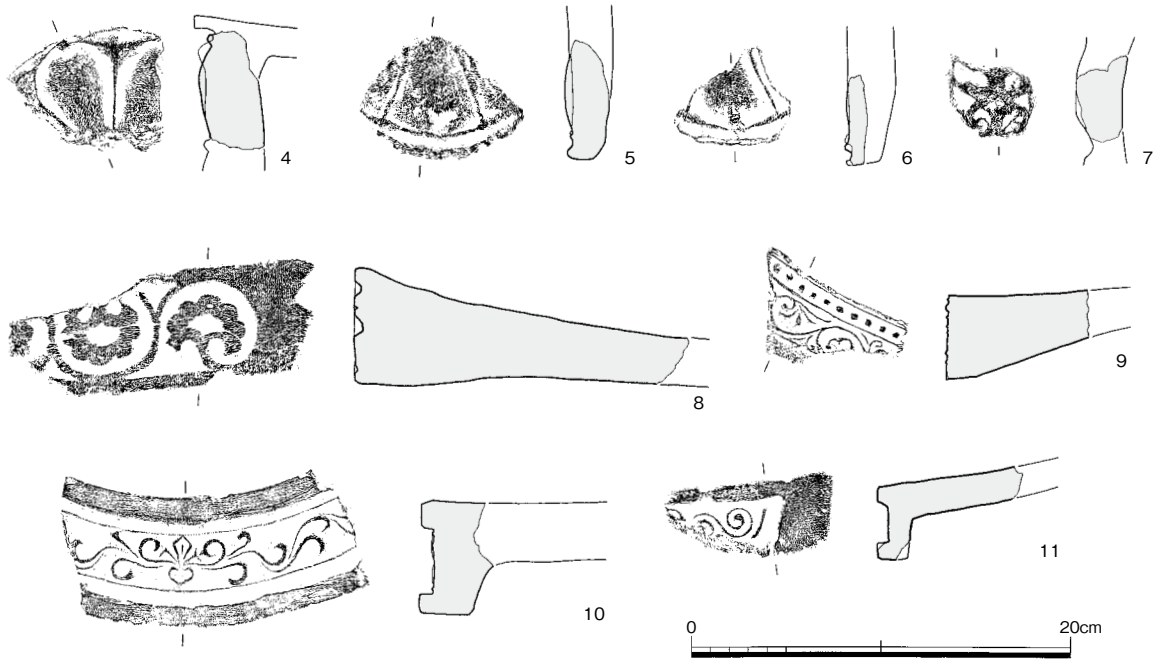


Fig. 154　その他の包含層　軒丸瓦２・軒平瓦（１：４）

ない。内面接合粘土が一部残る。裏面の調整は不定方向ナデ。側面は欠損。

TQ50バラス混じり褐色土　Fig.154－5は、3Cか。焼成は軟質で、全体的に摩滅。瓦当下半部にあたる。裏面・側面の調整は不明。外縁は摩滅により、笵端痕を確認できない。

Fig.154－10は、255A。貼付段顎。凹面は布目圧痕をタテ方向にナデ消す。瓦当上縁は幅3～7mmほど面取りを施す。顎面はヨコナデ。顎裏面側縁は幅5mmほど面取りを施す。顎裏面はヨコナデ。

KD53床土　Fig.154－6は、3Bbか。裏面全面が剝離している。側面の調整はナデ。瓦当面にはかすかに掌文を認める。外縁は欠損しており、笵端痕の有無は不明。

TR49石田北溝　Fig.154－7は、33A。裏面の上端部は外反し、内面接合粘土の一部にあたると推測される。調整は不定方向ナデ。

TQ47瓦層　Fig.154－8は、206D。直線顎。焼成は軟質で、全体的に摩滅。瓦当面をヨコナデ後に施文する。唐草文中央にはピン穴がある。文様輪郭にケガキ線はない。凹面は狭端へ向けてタテ方向のヘラケズリ後、瓦当付近のみヨコ方向のヘラケズリ。凸面の調整は不明瞭。側面は狭端へ向けてタテ方向のヘラケズリ。凸面で斜めに剝離がみられ、粘土板合わせ目の可能性がある（S型）。

TO30地山上暗褐色土　Fig.154－9は、240Aa。直線顎。凹面は枠板痕（幅2.3cm）と布目圧痕を残すが、瓦当付近幅3cmほどはヨコナデを施して消している。側縁付近は斜め方向にナデ。凹面側縁は幅7mmほど面取りを施す。凸面は瓦当に向けてタテ方向のヘラケズリで調整する。瓦当付近のみナデか。側面は狭端に向けてタテ方向のヘラケズリで調整する。

TP50灰褐色土　Fig.154－11は、262B。貼付段顎。接合面にわずかにカキメを認める。凹面側縁には縦桟が剝がれた痕跡あり。接合面にはカキメが転写される。凹面調整はタテナデ、瓦当付近のみヨコナデ、顎裏面はヨコナデ、凸面はタテナデ、瓦当付近のみヨコナデ、側面はタテナデで調整する。いずれの箇所にも明瞭な面取りはない。

KB47石田トレンチ（KC46・KJ52も含む）　Fig.155－12は、3C。接合方法片枘形b。瓦当裏面は中央にかけてやや高くふくらむ。調整は裏面、側面ともに摩滅により不明。瓦当縁端に笵端痕をわ

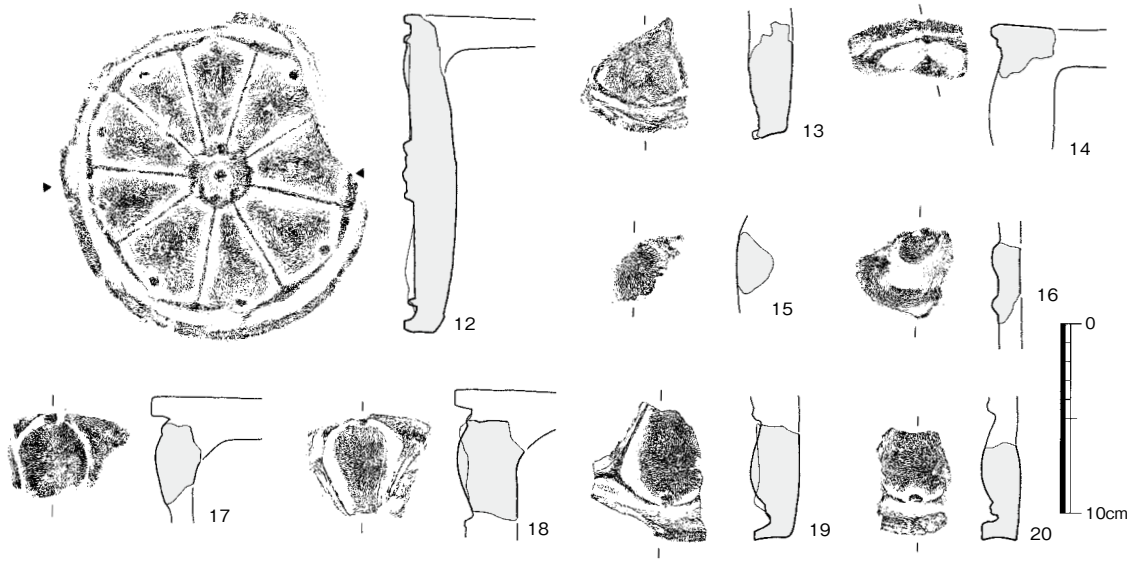


Fig.155　その他の包含層　軒丸瓦3（1：4）

Fig. 156　その他の包含層　軒丸瓦細部

ずかに認める。

13は、3Cか。全体的に摩滅。下半部にあたる。瓦当裏面・側面の調整は不定方向ナデ。側面は外反する。外縁は摩滅し、笵端痕は認められない。

14は、33A。丸瓦との接合部にあたり、丸瓦が一部残る。焼成は軟質で、全体的に摩滅。接合方法は不明。支持ナデツケ、キザミの有無も不明である。

15は、型式不明軒丸瓦。小片で、瓦当面の一部がわずかに残る。飛鳥時代軒丸瓦の蓮弁部にあたるか。

16は、型式不明巴文軒丸瓦。瓦当の中央部のみ残存。瓦当面には離れ砂が付着する。

KB47ライン畦　Fig. 155－17は、6Cか。礫敷中から出土。焼成は軟質で、全体的に摩滅。丸瓦との接合部にあたる。接合方法片枘形dか。内面接合粘土が一部のこり、支持ナデツケ・キザミ転写ともに認められない。側面は欠損している。

18は、6D。「黄褐色土面穴」で取り上げている。丸瓦との接合部にあたる。接合方法は楔形aかb。支持ナデツケ・キザミ転写ともに認められない。内面接合粘土が一部残る。瓦当裏面は不定方向ナデで調整する。側面は欠損する。瓦当面には掌文がある。

47Lトレンチ　Fig. 155－19・20は、6D。19は、瓦当下半部にあたる。裏面の調整は不定方向ナデ。側面の調整はナデで、若干外反する。側面の一部が剝離し、粘土を笵詰めする際に外縁の一部を貼り足した可能性がある（Fig. 156、瓦当が上）。20は、瓦当下半部にあたる。裏面の調整は不定方向ナデ。側面の調整はナデで、若干外反する。外縁上には笵端痕がわずかに認められる。

茶褐色土　瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片が、1点出土している。

KB48石田北溝　瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片を、1点取り上げている。

TR47石田東溝　瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片を、1点取り上げている。

KB－E47石田トレンチ　瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片を、1点取り上げている。

AC46石田東拡張トレンチ　瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片を、1点取り上げている。

出土位置不明　瓦当は欠損するが軒平瓦の一部と考えられる破片が、2点ある。（中川）

参考文献

宇野隆夫　1984　「後半期の須恵器」『史林』第70巻第3号　京都大学文学部史学研究会

近江俊秀　1991　「大和型瓦器椀の編年と実年代の再検討」『古代文化』第43巻第10号　古代学協会

川越俊一　1983　「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所

工藤圭章　1976　「古代の建築技法」『文化財講座日本の建築2　古代2・中世1』第一法規出版

佐原　真　1972　「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻第2号　日本考古学会

菅原正明　1983　「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所

菅原正明　1989　「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集　国立歴史民俗博物館

立石堅志　1989　「大和北部における中世土器について」『中近世土器の基礎研究』5　日本中世土器研究会

立石堅志・森下恵介　1987　「大和北部における中近世土器の様相－奈良市内出土資料を中心として－」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1986』奈良市教育委員会

田辺昭三　1966　『陶邑古窯址群』Ⅰ　平安学園考古学クラブ

中世土器研究会　1995　『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

中井淳史　1994　「畿内土器様相の中世的特質」『中近世土器の基礎研究』10　日本中世土器研究会

奈良市教育委員会　1981　「古市城跡発掘調査報告」『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和55年度

奈良市教育委員会　1983　「元興寺食堂推定地の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和57年度

西　弘海　1986　『土器様式の成立とその背景』真陽社

法隆寺昭和資財帳編集委員会　1992　『昭和資財帳　第15巻　法隆寺の至宝』小学館

吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』　吉川弘文館

Tab. 7　鉄滓計測表

PL.	地区	遺構名	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）	備考
32－1	TO 32	炭化物層	9.5	7.3	3.7	247.7	ガラス化
32－2	TO 32	炭化物層	6.3	4.3	2.6	126.9	内実質
32－3	TO 34	木炭層	4.8	3.6	2.7	34.9	
32－4	TO 35	木炭層	6.3	3.4	3.6	103.5	内実質
32－5	TO 35	木炭層	6.8	5.3	2.6	65.3	
32－6	TO 35	木炭層	4.8	3.0	1.9	28.1	
32－7	TO 35	炭化物層	4.0	1.8	1.5	8.3	
32－8	TO 35	炭化物層	2.7	2.5	1.5	5.9	
32－9	TO 35	炭化物層	3.3	1.8	1.7	12.5	
32－10	TO 35	炭化物層	5.0	3.8	2.1	36.5	炉底土付着
32－11	TO 35	炭化物層	5.8	4.8	1.4	27.9	
32－12	TO 35	炭化物層	6.0	3.9	3.2	100.9	内実質
32－13	TO 35	炭化物層	6.3	5.3	2.6	117.7	内実質
32－14	TO 35	炭化物層	9.2	7.8	1.5	120.4	椀形滓
32－15	TO 35	炭化物層	7.5	6.8	3.8	116.0	椀形滓、炉底土付着
32－16	TO 35	炭化物層	9.2	7.7	1.2	315.4	椀形滓、炉底土付着
32－17	TO 35	炭化物層	15.8	10.6	3.9	806.2	椀形滓、内実質
31－d	KA 46	バラス土	10.1	8.1	5.9	477.4	内実質
31－d	KB 45	バラス土	4.5	2.7	2.2	33.3	
31－d	TP 50	褐色土	5.7	4.4	2.7	64.7	

Tab. 8　銭貨計測表

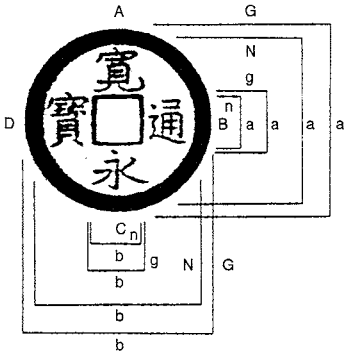
Fig.	PL.	銭種	外縁外径 平均G（㎜）	外縁内径 平均N（㎜）	内郭外径 平均g（㎜）	内郭内径 平均n（㎜）	外縁厚 平均T（㎜）	文字面厚 平均t（㎜）	重量 （g）
Fig. 80	33－b	寛永通宝	23．85	19．95	7．75	6．05	1．37	0．90	2．58
Fig. 127－2	33－b	寛永通宝	22．75	19．15	8．95	7．25	1．14	0．80	2．47
Fig. 139－2	33－b	寛永通宝	25．13	20．40	7．78	7．10	1．07	0．45	2．84

銭貨の各部測点については右のとおりである。

$$\text{外縁外径 } G = \frac{Ga + Gb}{2},\quad \text{外縁内径 } N = \frac{Na + Nb}{2},$$

$$\text{内郭外径 } g = \frac{ga + gb}{2},\quad \text{内郭内径 } n = \frac{na + nb}{2},$$

$$\text{外縁厚 } T = \frac{A + B + C + D}{4},\quad \text{文字面厚 } t = \frac{a + b + c + d}{4}$$



Tab. 9　金属製品他遺物ラベル表

Fig.	種類	遺構名（本報告書）	ラベル記載事項		
			地区	遺構名	日付
80	銭貨	ＫＧ49 土坑	ＫＧ49	土坑	691028
118－1	鞴羽口	炭化物層	ＴＯ35	炭化物層／木炭層	680831／680908
118－2	鞴羽口	炭化物層	ＴＯ35	炭化物層	680831
118－3	鞴羽口	炭化物層	ＴＯ35	炭化物層	680831
118－4	鞴羽口	炭化物層	ＴＯ35	炭化物層	680831
118－5	鞴羽口	炭化物層	ＴＯ35	炭化物層	680831
118－6	鞴羽口	炭化物層	ＴＯ35	炭化物層	680831
119－7	鞴羽口	炭化物層	ＴＯ35	炭化物層	680831
119－8	鞴羽口	炭化物層	ＴＯ35	炭化物層	680831
119－9	土製品	炭化物層	ＴＯ35	炭化物層／木炭層	680831／680908
119－10	土製品	炭化物層	ＴＯ35	炭化物層	680831
119－11	炉壁片	木炭層	ＴＯ34	木炭層	680903
123	凝灰岩片	黄褐色土	ＫＢ50	黄褐土	691018
127－1	銅製品	暗褐色土	ＫＥ53	暗褐土	691003
127－2	銭貨	暗褐色土	ＫＭ55	暗褐土	691010
127－3	石製品	暗褐色土	ＫＤ49	暗褐土	691028
127－4	石製品	暗褐色土	ＫＭ55	暗褐土	691011
127－5	石製品	暗褐色土	ＫＢ46	暗褐土	691009
127－6	石製品	暗褐色土	ＫＥ53	暗褐土	691003
139－1	銅製品	褐色土	ＴＱ50	褐色土	680826
139－2	銭貨	褐色土	ＴＯ40	褐色土	680821
139－3	砥石	褐色土	ＴＱ52	褐色土	680826
139－4	石鍋	褐色土	ＴＲ50	褐色土	680826
151－1	銅製品	その他の包含層	ＫＨ53	石田トレ	691003
151－2	火打石	その他の包含層	ＫＺ	Ｚ	691031
151－3	石製品	その他の包含層	ＫＨ53	石田トレ	691003
151－4	土製品	その他の包含層	実相院北トレンチ	第３層	691016

Tab. 10－1　土器ラベル表－1

Fig.	種類	遺構名（本報告書）	ラベル記載事項		
			地区	遺構名	日付
48	須恵器杯蓋	ＫＢ46整地層下端	ＫＢ46	整地層下端	691031
73	黒色土器椀	ＳＥ7074	ＫＡ61	井戸	691013
81－1	土師器皿	ＫＣ46 土坑	ＫＣ46	土坑	691013
81－2	土師器皿	ＫＣ46 土坑	ＫＣ46	土坑	691013
81－3	土師器皿	ＫＣ46 土坑	ＫＣ46	土坑	691013
84－1	土師器皿	ＫＨ62 小穴	ＫＨ62	小穴	691015
84－2	土師器皿	ＫＨ62 小穴	ＫＨ62	小穴	691015
86－1	須恵器甕	ＳＤ7058	ＫＧ53	東西溝	691003
86－2	瓦器皿	ＳＤ7058	ＫＧ53	東西溝	691003
86－3	土師器皿	ＫＦ53 東西溝	ＫＦ53	東西溝	691004
86－4	土師器皿	ＫＥ49 東西溝	ＫＥ49	東西溝	691023
86－5	土師器皿	ＫＥ49 東西溝	ＫＥ49	東西溝	691023
86－6	瓦器擂鉢	ＫＦ49 東西溝	ＫＦ49	東西溝	691022
86－7	土師器羽釜	ＫＥ49 東西溝	ＫＥ49	東西溝	691023
86－8	瓦器火鉢	ＫＥ49 東西溝	ＫＥ49	東西溝	691023
90－1	土師器皿	ＫＡ59 南北溝	ＫＡ59	南北溝	691008
90－2	土師器皿	ＫＭ53 南北溝	ＫＭ53	南北溝	691011
90－3	須恵器壺	ＫＭ53 南北溝	ＫＭ53	南北溝	691011
90－4	土師器皿	ＴＯ35 南北溝	ＴＯ35	南北溝	680831
90－5	土師器皿	ＴＯ35 南北溝	ＴＯ35	南北溝	680831
90－6	土師器皿	ＴＯ35 南北溝	ＴＯ35	南北溝	680831
90－7	土師器皿	ＫＡ59 南北溝	ＫＡ59	南北溝	691008
90－8	土師器皿	ＫＭ53 南北溝	ＫＭ53	南北溝	691011
90－9	陶磁器	ＫＭ53 南北溝	ＫＭ53	南北溝	691011
90－10	土師器皿	ＴＯ35 南北溝	ＴＯ35	南北溝	680831
90－11	土師器皿	ＴＯ35 南北溝	ＴＯ35	南北溝	680831
90－12	土師器皿	ＴＯ35 南北溝	ＴＯ35	南北溝	680831
90－13	土師器皿	ＴＯ35 南北溝	ＴＯ35	南北溝	680831
90－14	瓦器擂鉢	ＫＭ53 南北溝	ＫＭ53	南北溝	691011
90－15	土師器羽釜	ＴＯ35 南北溝	ＴＯ35	南北溝	680831
90－16	瓦器擂鉢	ＫＭ53 南北溝	ＫＭ53	南北溝	691011
90－17	瓦器擂鉢	ＫＭ53 南北溝	ＫＭ53	南北溝	691011
90－18	土師器羽釜	ＴＯ35 南北溝	ＴＯ35	南北溝	680831
90－19	土師器羽釜	ＴＯ35 南北溝	ＴＯ35	南北溝	680831
90－20	土師器羽釜	ＴＯ35 南北溝	ＴＯ35	南北溝	680831
102－1	須恵器杯身	ＫＣ45 瓦溜	ＫＣ45	瓦溜まり	691012
102－2	山茶碗か	ＫＣ45 瓦溜	ＫＣ45	瓦溜まり	691011
102－3	須恵器壺	ＫＣ45 瓦溜	ＫＣ45	瓦溜まり	691012

Tab. 10－2　土器ラベル表－2

Fig.	種類	遺構名（本報告書）	ラベル記載事項		
			地区	遺構名	日付
102－4	須恵器こね鉢	ＫＣ45瓦溜	ＫＣ45	瓦溜まり	691011
107－1	土師器皿	ＫＣ45瓦溜北凹み	ＫＣ45	瓦溜まり北凹み	691011
107－2	土師器皿	ＫＣ45瓦溜北凹み	ＫＣ45	瓦溜まり北凹み	691011
107－3	土師器皿	ＫＣ45瓦溜北凹み	ＫＣ45	瓦溜まり北凹み	691012
107－4	土師器皿	ＫＣ45瓦溜北凹み	ＫＣ45	瓦溜まり北凹み	691012
107－5	瓦器擂鉢	ＫＣ45瓦溜北凹み	ＫＣ45	瓦溜まり北凹み	691011
107－6	瓦器鍋	ＫＣ45瓦溜北凹み	ＫＣ45	瓦溜まり北凹み	691012
114－1	土師器皿	ＫＬ55凹み	ＫＬ55	凹み	691011
114－2	土師器皿	ＫＬ55凹み	ＫＬ55	凹み	691011
114－3	土師器皿	ＫＬ55凹み	ＫＬ55	凹み	691011
114－4	土師器皿	ＫＬ55凹み	ＫＬ55	凹み	691011
114－5	土師器皿	ＫＬ55凹み	ＫＬ55	凹み	691011
114－6	土師器皿	ＫＬ55凹み	ＫＬ55	凹み	691011
114－7	土師器皿	ＫＬ55凹み	ＫＬ55	凹み	691011
114－8	陶器椀	ＫＬ55凹み	ＫＬ55	凹み	691011
114－9	土師器皿	ＫＣ46北落ち込み	ＫＣ46	北落込み	691012
114－10	白磁椀	ＫＣ46北落ち込み	ＫＣ46	北落込み	691013
115－1	土師器皿	バラス土層	ＫＢ45	バラス下	691015
115－2	土師器皿	バラス土層	ＫＢ45	バラス下	691015
115－3	土師器皿	バラス土層	ＫＡ46	バラス土	691014
115－4	土師器皿	バラス土層	ＫＡ46	バラス土	691014
115－5	土師器皿	バラス土層	ＫＡ46	バラス土	691014
115－6	土師器皿	バラス土層	ＫＡ46	バラス土	691014
115－7	須恵器杯身	バラス土層	ＫＡ46	バラス土	691014
115－8	須恵器鉢	バラス土層	ＫＡ46	バラス土	691014
120－1	土師器杯	炭化物層	ＴＯ35	炭化物層	680831
120－2	土師器杯	炭化物層	ＴＯ35	炭化物層	680831
120－3	須恵器甕	炭化物層	ＴＯ35	炭化物層	680831
120－4	土師器皿	木炭層	ＴＯ34	木炭層	680831
124	黒色土器椀	黄褐色土	ＫＤ54	黄褐土	691023
128－1	土師器皿	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680830
128－2	土師器皿	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680831

Fig.	種類	遺構名（本報告書）	ラベル記載事項		
			地区	遺構名	日付
128－3	土師器皿	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680830
128－4	土師器皿	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680831
128－5	土師器皿	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680830
128－6	土師器皿	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680830
128－7	土師器皿	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680831
128－8	土師器皿	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680831
128－9	土師器皿	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680830
128－10	土師器皿	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680831
128－11	土師器皿	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680830
128－12	土師器皿	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680830
128－13	土師器皿	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680831
128－14	土師器皿	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680831
128－15	土師器皿	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680831
128－16	土師器皿	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680831
128－17	土師器皿	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	Ｅ3ピット	680902
128－18	土師器皿	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28？	暗褐土	680831
128－19	土師器皿	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680831
128－20	土師器皿	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680831
128－21	土師器皿	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680831
128－22	土師器皿	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680831
128－23	瓦器椀	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680830
128－24	瓦器椀	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680830
128－25	瓦器椀	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680830
128－26	瓦器椀	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680830
128－27	瓦器椀	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680830
128－28	瓦器椀	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680830
128－29	瓦器椀	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680830
128－30	瓦器椀	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	小ピット	680902
128－31	瓦器椀	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	西北ピット／東北ピット	680902
128－32	瓦器椀	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ29	凹みの穴	680903
128－33	瓦器皿	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680831
128－34	瓦器皿	ＴＯ28暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680831

Tab. 10－3　土器ラベル表－3

Fig.	種類	遺構名（本報告書）	ラベル記載事項		
			地区	遺構名	日付
128－35	瓦器皿	ＴＯ28 暗褐色土	ＴＯ28	暗褐土	680831
129－1	土師器皿	ＫＡ55 暗褐色土	ＫＡ55	暗褐土	691011
129－2	土師器皿	ＫＡ55 暗褐色土	ＫＡ55	暗褐土	691012
129－3	土師器皿	ＫＡ55 暗褐色土	ＫＡ55	暗褐土	691011
129－4	土師器皿	ＫＡ55 暗褐色土	ＫＡ55	暗褐土	691012
129－5	土師器皿	ＫＡ5 5暗褐色	ＫＡ55	暗褐土	691013
129－6	土師器皿	ＫＡ55 暗褐色土	ＫＡ55	暗褐土	691012
129－7	土師器皿	ＫＡ55 暗褐色土	ＫＡ55	暗褐土	691012
129－8	土師器皿	ＫＡ55 暗褐色土	ＫＡ55	暗褐土	691012
129－9	土師器皿	ＫＡ55 暗褐色土	ＫＡ55	暗褐土	691012
129－10	土師器皿	ＫＡ55 暗褐色土	ＫＡ55	暗褐土	691012
129－11	土師器皿	ＫＡ55 暗褐色土	ＫＡ55	暗褐土	691012
129－12	土師器皿	ＫＡ55 暗褐色土	ＫＡ55	暗褐土	691013
129－13	瓦器椀	ＫＡ55 暗褐色土	ＫＡ55	暗褐土	691011
129－14	土師器皿	ＫＡ55 暗褐色土	ＫＡ55	暗褐土	691012
129－15	土師器皿	ＫＡ55 暗褐色土	ＫＡ55	暗褐土	691012
129－16	土師器皿	ＫＡ55 暗褐色土	ＫＡ55	暗褐土	691011
129－17	土師器皿	ＫＡ55 暗褐色土	ＫＡ55	暗褐土	691011
129－18	土師器 羽釜	ＫＡ55 暗褐色土	ＫＡ55	暗褐土	691012
130－1	土師器皿	暗褐色土	ＫＤ49	暗褐土	691026
130－2	土師器皿	暗褐色土	ＫＦ46	暗褐土	691010
130－3	土師器皿	暗褐色土	ＫＭ55	暗褐土	691010
130－4	土師器皿	暗褐色土	ＫＭ55	暗褐土	691010
130－5	土師器皿	暗褐色土	ＫＢ46	暗褐土	691009
130－6	土師器皿	暗褐色土	ＫＭ55	暗褐色	691010
130－7	土師器皿	暗褐色土	ＫＭ55	暗褐色	691010
130－8	土師器皿	暗褐色土	ＫＭ55	暗褐色	691010
130－9	土師器皿	暗褐色土	ＫＢ46	暗褐土	691009
130－10	土師器皿	暗褐色土	ＫＤ49	暗褐土	691026
130－11	土師器皿	暗褐色土	ＫＨ62	暗褐土	691015
130－12	瓦器皿	暗褐色土	ＫＢ46	暗褐土	691009
130－13	瓦器椀	暗褐色土	ＫＢ46	暗褐土	691009

Fig.	種類	遺構名（本報告書）	ラベル記載事項		
			地区	遺構名	日付
130－14	瓦器椀	暗褐色土	ＫＢ46	暗褐土	691009
130－15	瓦器皿	暗褐色土	ＫＢ46	暗褐土	691009
130－16	土師器 羽釜	暗褐色土	ＫＬ55	暗褐土	691010
130－17	土師器 羽釜	暗褐色土	ＫＦ46	暗褐色	691011
130－18	施釉陶器か	暗褐色土	ＫＦ46	暗褐土	691014
130－19	須恵器壺	暗褐色土	ＫＢ46	暗褐土	691009
130－20	須恵器鉢	暗褐色土	ＫＢ46	暗褐土	691009
130－21	須恵器	暗褐色土	ＫＣ49	暗褐土	691017
130－22	瓦質土器甕	暗褐色土	ＫＦ46	暗褐土	691011
140－1	土師器杯	褐色土	ＴＲ50	褐色土	680824
140－2	土師器皿	褐色土	ＴＱ52	褐色土	680826
140－3	土師器皿	褐色土	ＴＯ48	褐色土	680820
140－4	土師器皿	褐色土	ＴＯ49	褐色土	680830
140－5	土師器皿	褐色土	ＴＯ46	褐色土	680818
140－6	土師器皿	褐色土	ＴＲ54	褐色土	680830
140－7	土師器皿	褐色土	ＴＲ54	褐色土	680830
140－8	土師器皿	褐色土	ＴＯ37	褐色土	680822
140－9	土師器皿	褐色土	ＴＯ50	褐色土	680902？
140－10	土師器皿	褐色土	ＴＯ50	褐色土	680902
140－11	土師器皿	褐色土	ＴＯ50	褐色土	680902
140－12	瓦器椀	褐色土	ＴＯ40	褐色土／地山上■土	680821／680826
140－13	瓦器椀	褐色土	ＴＯ41	褐色土	680824
140－14	土師器甑	褐色土	ＴＲ48	褐色土	680823
140－15	土師器甕	褐色土	ＴＯ39／ＴＲ50	褐色土	680820／680824
140－16	土師器 羽釜	褐色土	ＴＯ35	褐色土	680822
140－17	土師器 羽釜	褐色土	ＴＯ35	褐色土	680825
140－18	土師器 羽釜	褐色土	ＴＯ35	褐色土	680822
140－19	須恵器鉢	褐色土	ＴＯ35	褐色土	680821
149－1	須恵器杯蓋	表土	ＫＣ46	表土	691007
149－2	須恵器杯蓋	表土	ＫＣ46	表土	691007
149－3	施釉陶器	表土	ＫＣ46	表土	691018

Tab. 11－1　軒丸瓦観察表－1

Fig.	Fig.（写真）	PL.	型式	遺構名（本報告書）	ラベル記載事項			色調		焼成	砂礫	
					地区	遺構名	日付	munsell	色名		最大径（㎜）	量
50－1	51－1	39	3Bb	SD7040	KA46	斜行溝	691018	N6／0	灰	堅緻	2	極少量
50－2	51－2	39	3C	SD7040	TS47	溝内	680903	N4／0～2.5Y7／2	灰～灰黄	軟質	3	極少量
74－1	－	45	4A	SE7074	KA61	井戸	691013	N5／0	灰	良好	1	少量
74－2	－	45	6Db	SE7074	KA61	井戸	691013	N6／0	灰	良好	3	少量
74－3	75－3	45	7Ab	SE7074	KA61	井戸	691013	N6／0	灰	やや軟質	6	やや多め
74－4	－	45	7A	SE7074	KA61	井戸	691013	N5／0	灰	良好	2	やや多め
74－5	75－5	45	33A	SE7074	KA61	井戸	691013	N5／0	灰	良好	3	やや多め
74－7	－	45	7A	KA61土坑	KA61	土坑	691009	N6／0	灰	良好	4	やや多め
82	82	47	3C	SX7065	KI47	穴	691026	7.5Y5／1	灰	堅緻	5	やや多め
87	87	47	3Bb	KF49東西溝	KF49	東西溝	691022	N7／0	灰白	やや軟質	2	極少量
89	89	－	3Bb	KG46東西溝	KG46	東西溝埋土	691011	N6／0	灰	堅緻	2	極少量
95－1	－	47	6C	SX7096	TQ52	西南瓦溜まり	680826	N4／0～3／0	灰～暗灰	堅緻	1	極少量
95－2	－	47	6D	SX7096	TQ53	瓦溜まり	680902	N6／0～7.5YR7／4	灰～にぶい橙	堅緻	1	極少量
96	96	47	3Bb	KJ46新瓦溜	KJ46	新しい瓦溜まり	691015	N4／0	灰	堅緻	2	少量
99	99	47	89V	KE47瓦溜	KE47	瓦溜まり	691010	N4／0	灰	堅緻	7	少量
101－1	－	49	7A	KE46瓦溜	KE46	瓦溜まり	691011	5Y7／1	灰白	軟質	2	少量
103－1	－	49	3Bb	KC45瓦溜	KC45	瓦溜まり	691011	N5／0	灰	堅緻	2	極少量
103－2	－	49	3Bb？	KC45瓦溜	KC45	瓦溜まり	691011	N4／0	灰	堅緻	2	やや多め
103－3	－	49	3C	KC45瓦溜	KC45	瓦溜まり	691012	7.5Y8／1	灰白	軟質	1	少量
103－4	－	49	3C	KC45瓦溜	KC45	瓦溜まり	691011	5Y7／1	灰白	やや軟質	1	極少量
103－5	－	49	4A	KC45瓦溜	KC45	瓦溜まり	691011	N5／0	灰	堅緻	1	少量
103－6	－	－	4A	KC45瓦溜	KC45	瓦溜まり	691011	N6／0	灰	やや軟質	1	極少量
103－7	－	－	4A	KC45瓦溜	KC45	瓦溜まり	691011	N5／0	灰	堅緻	2	少量
103－8	－	49	4A	KC45瓦溜	KC45	瓦溜まり	691011	N6／0	灰	堅緻	1	極少量
103－9	－	－	6C？	KC45瓦溜	KC45	瓦溜まり	691011	N5／0	灰	良好	16	少量
103－10	－	－	6C？	KC45瓦溜	KC45	瓦溜まり	691012	N6／0	灰	良好	3	少量
103－11	－	－	6D	KC45瓦溜	KC45	瓦溜まり	691011	7.5Y5／1	灰	良好	3	少量
103－12	－	49	37Db	KC45瓦溜	KC45	瓦溜まり	691010	5Y6／1	灰	やや軟質	1	極少量
103－13	－	49	53A	KC45瓦溜	KC45	瓦溜まり	691012	2.5Y7／2	灰黄	やや軟質	1	極少量
108－1	－	－	6D	TR51瓦溜	TR51	瓦溜まり	680824	N5／0	灰	良好	1	少量
108－2	109－2	50	37C	TR51瓦溜	TR51	瓦溜まり	680823	N5／0	灰	良好	1	少量
108－3	－	50	48A	TR51瓦溜	TR51	瓦溜まり	680823	10YR6／4	にぶい橙	軟質	8	少量
108－4	－	－	91F	TR51瓦溜	TR51	瓦溜まり	680823	2.5Y7／2	灰黄	やや軟質	1	少量
112－1	－	50	72A	SX7097	KM54	大凹み	691012	N3／0	暗灰	良好	2	極少量
116－1	－	50	3Bb	バラス土層	KA46	バラス土	691014	7.5Y6／1	灰	良好	1	極少量
116－2	－	50	3Bb？	バラス土層	KI46	バラス土	691015	N5／0	灰	堅緻	2	やや多め
116－3	－	50	33A	バラス土層	KB49	バラス土	691017	2.5Y7／2	灰黄	軟質	1	極少量
116－4	－	50	89V	バラス土層	TQ50	バラス層	680831	5Y6／2	灰オリーブ	良好	1	少量
121－1	－	51	4A	炭化物層	TO35	炭化物層	680831	7.5Y7／1	灰白	良好	1	少量
121－2	－	－	6Db	木炭層	TO33	木炭層	680904	N5／0	灰	堅緻	2	少量
121－3	122－3	51	6D	炭化物層	TO35	炭化物層	680831	N5／0	灰	良好	3	少量
125－1	125－1	51	3Bb	黄褐色土	KI46	黄褐色土	691017	N5／0	灰	堅緻	3	少量
125－2	125－2	51	6Da	黄褐色土	KA47	黄褐色土	680824	7.5Y6／1	灰	良好	5	少量
132－1	131－1	52	3Bb	暗褐色土	KE46	暗褐土	691013	N6／0	灰	やや軟質	3	少量
132－2	－	52	3Bb	暗褐色土	KH48	暗褐土	691019	N5／0	灰	堅緻	3	少量
132－3	－	52	3Bb	暗褐色土	KI47	暗褐土	691019	7.5Y7／1	灰白	軟質	1	極少量
132－4	－	52	3Bb？	暗褐色土	KH48	暗褐土	691019	7.5Y7／1	灰白	堅緻	1	極少量
132－5	－	52	3Bb？	暗褐色土	KF47	暗褐土	691013	N5／0	灰	良好	2	少量

Tab. 11－2　軒丸瓦観察表－2

Fig.	Fig.（写真）	PL.	型式	遺構名（本報告書）	ラベル記載事項			色調		焼成	砂礫	
					地区	遺構名	日付	munsell	色名		最大径（㎜）	量
132－6	－	－	3Bb？	暗褐色土	KH48	暗褐土	691019	N5／0	灰	堅緻	2	極少量
132－7	－	－	3Bb？	暗褐色土	KA58	暗褐土	691006	5Y7／1	灰白	軟質	2	極少量
132－8	－	－	3Bb？	暗褐色土	KH48	暗褐土	691019	N6／0	灰	堅緻	1	極少量
132－9	131－9	52	4A	暗褐色土	KI47	暗褐土	691019	N5／0	灰	堅緻	2	少量
132－10	－	52	4A	暗褐色土	KG46	暗褐土	691011	N6／0	灰	堅緻	2	少量
132－11	－	－	4A	暗褐色土	KF45	暗褐土	691014	N5／0	灰	良好	2	少量
132－12	－	－	4A	暗褐色土	KH48	暗褐土	691019	N6／0	灰	堅緻	1	極少量
132－13	－	52	4A	暗褐色土	KH46	暗褐土	691010	N5／0	灰	良好	1	少量
132－14	－	－	4A	暗褐色土	KH48	暗褐土	691020	N5／0	灰	堅緻	1	やや多め
132－15	－	－	4A	暗褐色土	TQ50	暗褐土	680831	7.5Y7／1	灰白	軟質	2	少量
132－16	－	－	4A	暗褐色土	KH48	暗褐土	691019	5Y7／1	灰白	やや軟質	2	極少量
132－17	－	－	4D	暗褐色土	KF47	暗褐土	691013	7.5Y7／1	灰白	やや軟質	6	極少量
132－18	－	－	6C	暗褐色土	TO35	暗褐土	680831	N5／0	灰	良好	5	少量
132－19	133－19	－	6C？	暗褐色土	KF46	暗褐土	691011	2.5Y6／1	黄灰	やや軟質	7	少量
132－20	－	－	6D	暗褐色土	KB46	暗褐土	691009	5Y6／1	灰	良好	1	極少量
132－21	－	－	6D	暗褐色土	KK63	暗褐土	691015	N5／0	灰	堅緻	1	少量
132－22	133－22	52	33A	暗褐色土	KH61	暗褐土	691014	N4／0	灰	堅緻	5	やや多め
132－23	－	－	33A	暗褐色土	KB46	暗褐土	691009	N5／0～2.5Y7／2	灰～灰黄	軟質	1	極少量
132－24	－	－	33A	暗褐色土	KB49	暗褐土	691020	N5／0	灰	良好	2	やや多め
132－25	－	－	33A	暗褐色土	KB46	暗褐土	691009	5Y5／1	灰	良好	4	少量
135－26	－	－	37Db	暗褐色土	KM52	暗褐土	691005	5Y6／1	灰	堅緻	4	極少量
135－27	134－27	52	53A	暗褐色土	KF53	暗褐土	691003	2.5Y7／2	灰黄	やや軟質	1	極少量
135－28	－	－	89V	暗褐色土	KM53	暗褐土	691011	N4／0	灰	堅緻	1	極少量
135－29	134－29	52	89V	暗褐色土	KM52	暗褐土	691005	5Y4／1	灰	堅緻	3	少量
135－30	－	－	89V	暗褐色土	KE49	暗褐土	691022	N5／0	灰	堅緻	2	極少量
135－31	－	－	19F	暗褐色土	TO50	暗褐土	680902	N4／0	灰	堅緻	1	少量
135－32	－	－	91F	暗褐色土	KF46	暗褐土	691011	N4／0	灰	良好	1	少量
135－33	－	－	91Y	暗褐色土	KM55	暗褐土	691010	N5／0	灰	良好	1	少量
135－34	134－34	－	91Y	暗褐色土	KM52	暗褐土	691005	N4／0	灰	良好	2	少量
135－35	－	－	不明	暗褐色土	KH48	暗褐土	691020	N4／0	灰	やや軟質	1	少量
135－36	－	－	不明	暗褐色土	KH46	暗褐土	691010	N4／0	灰	良好	2	少量
135－37	－	－	不明	暗褐色土	KM53	暗褐土	691011	N4／0	灰	堅緻	2	少量
142－1	－	55	3Bb	褐色土	TP48	褐色土	680903	N5／0	灰	堅緻	2	やや多め
142－2	－	－	3Bb？	褐色土	TP50	褐色土	680826	7.5Y6／1	灰	良好	1	極少量
142－3	－	－	3Bb？	褐色土	TO41	褐色土	680821	N6／0	灰	堅緻	2	少量
142－4	－	55	6C	褐色土	TO49	褐色土	680830	7.5Y6／1	灰	良好	3	少量
142－5	－	－	6C	褐色土	TQ48	褐色土	680830	7.5Y6／1	灰	良好	3	少量
142－6	141－6	55	6Db	褐色土	TP52	褐色土	680826	N5／0	灰	良好	5	少量
142－7	－	－	6D	褐色土	TP50	褐色土	680826	5Y6／1	灰	良好	2	少量
142－8	－	－	6D	褐色土	TQ50	褐色土	680831	N6／0	灰	良好	3	少量
142－9	－	－	6D	褐色土	TQ51	畦畔褐色土	680903	2.5Y7／2	灰黄	やや軟質	1	少量
142－10	－	－	6D	褐色土	KA47	褐色土	680824	N5／0	灰	良好	3	少量
142－11	－	－	6D	褐色土	TO48	褐色土	680820	5Y6／1	灰	良好	2	極少量
142－12	－	－	7A	褐色土	TO35	褐色土	680822	7.5Y8／1	灰白	やや軟質	5	少量
142－13	－	55	7A	褐色土	TQ50	褐色土	680826	5YR7／8	橙	軟質	2	少量
142－14	－	－	7A	褐色土	TO50	褐色土	680902	10Y5／1	灰	良好	4	やや多め
142－15	－	55	33A	褐色土	TO50	褐色土	680902	7.5Y8／1	灰白	やや軟質	3	少量
142－16	143－16	－	33A	褐色土	TR47	褐色土	680821	2.5Y7／2	灰黄	軟質	3	少量

Tab. 11－3　軒丸瓦観察表－3

Fig.	Fig.（写真）	PL.	型式	遺構名（本報告書）	ラベル記載事項			色調		焼成	砂礫	
					地区	遺構名	日付	munsell	色名		最大径（㎜）	量
142－17	143－17	－	54Ba	褐色土	TR50	褐色土	680824	5YR8／3	淡橙	軟質	2	極少量
142－18	－	55	67B	褐色土	TO52	褐色土	680831	N3／0	暗灰	堅緻	1	極少量
142－19	－	－	67B	褐色土	TO48	褐色土	680819	N6／0	灰	堅緻	1	極少量
144－20	143－20	－	89V	褐色土	TP50	褐色土	680830	N3／0	暗灰	暗灰	1	少量
144－21	－	55	89V	褐色土	TO50	褐色土	680903	N3／0	暗灰	堅緻	3	極少量
144－22	145－22	－	89V	褐色土	TO51	褐色土	680902	N5／0	灰	堅緻	3	少量
144－23	145－23	－	89V	褐色土	TR51	褐色土	680823	N7／0	灰	堅緻	2	少量
144－24	－	－	89V	褐色土	TO50	褐色土	680903	N4／0	灰	堅緻	1	少量
144－25	－	－	89X	褐色土	TQ49	褐色土	680831	N3／0	暗灰	良好	2	少量
144－26	－	55	90A	褐色土	TQ50	褐色土	680901	N5／0	灰	良好	1	極少量
144－27	－	－	96I？	褐色土	TO50	褐色土	680902	N3／0	暗灰	良好	2	少量
144－28	－	－	96I？	褐色土	TO50	褐色土	680902	N3／0	暗灰	堅緻	1	極少量
144－29	－	－	96Iかx	褐色土	TR50	褐色土	680826	N3／0	暗灰	良好	3	少量
144－30	145－30	55	97D	褐色土	TO39	褐色土	680903	N3／0	暗灰	やや軟質	3	少量
144－31	－	－	不明	褐色土	KB53	褐色土	680902	7.5Y6／1	灰	良好	2	極少量
144－32	－	－	不明	褐色土	TO50	褐色土	680902	7.5Y7／1	灰白	軟質	1	少量
144－33	－	－	不明	褐色土	TQ52	褐色土	680901	N3／0	暗灰	堅緻	3	極少量
144－34	－	－	不明	褐色土	TO50	褐色土	680830	N3／0	暗灰	良好	1	極少量
144－35	－	－	不明	褐色土	TO49	褐色土	680831	5Y7／1	灰白	良好	2	少量
144－36	－	－	不明	褐色土	TO50	褐色土	680830	5Y6／1	灰	良好	1	少量
144－37	－	－	不明	褐色土	TP50	褐色土	680826	N3／0	暗灰	良好	2	極少量
150－1	－	－	6C	表土	KA46	表土	691007	7.5Y6／1	灰	堅緻	3	少量
150－2	－	－	91か92	表土	TP50	表土	680825	N4／0	灰	良好	1	極少量
150－3	－	56	97D	表土	KJ53	表土	691002	N4／0	灰	良好	10	少量
152－1	153－1	56	3Bb	TS47地山直上	TS47	地山直上	680903	5Y6／1	灰	堅緻	3	極少量
152－2	153－2	56	3Bb	TS47地山直上	TS47	地山直上	680903	N4／0	灰	堅緻	1	極少量
152－3	－	56	3Bb	TP48小礎石周辺	TP48	小礎石周辺	680905	N5／0	灰	良好	2	少量
154－4	－	－	6D	TP49地山直上	TP49	地山直上	680903	N5／0	灰	良好	3	やや多め
154－5	－	－	3C？	TQ50バラス混じり褐色土	TQ50	バラス混じり褐色土	680901	2.5Y8／2	灰白	軟質	1	極少量
154－6	－	－	3Bb？	KD53床土	KD53	床土	691004	2.5Y7／2	灰黄	やや軟質	1	極少量
154－7	－	－	33A	TR49石田北溝	TR49	石田北溝	680830	10Y5／1	灰	良好	3	やや多め
155－12	－	56	3C	KB47石田トレンチ	KC46	石田トレンチ	680825	2.5Y7／2	灰黄	軟質	1	極少量
155－13	－	－	3C？	KB47石田トレンチ	KJ52	石田トレ	691005	5Y7／1	灰白	やや軟質	2	極少量
155－14	－	－	33A	KB47石田トレンチ	KB47	石田トレンチ	680824	2.5Y7／3	浅黄	軟質	1	極少量
155－15	－	－	不明	KB47石田トレンチ	KJ52	石田トレ	691005	N6／0	灰	やや軟質	1	少量
155－16	－	－	不明	KB47石田トレンチ	KJ52	石田トレ	691005	N5／0	灰	やや軟質	2	少量
155－17	－	－	6C？	KB47ライン畦	KB47	ライン畦畔礫敷中	680906	7.5Y6／1	灰	軟質	1	少量
155－18	－	－	6D	KB47ライン畦	KB47	ライン畦黄褐土面穴	680906	N5／0	灰	堅緻	3	やや多め
155－19	156－19	－	6D	47Lトレンチ	－	47Lトレンチ	680824	N5／0	灰	良好	1	少量
155－20	－	－	6D	47Lトレンチ	－	47ライントレンチ	680826	10Y5／1	灰	堅緻	2	少量

Tab. 12　軒平瓦観察表

Fig.	Fig.（写真）	PL.	型式	遺構名（本報告書）	ラベル記載事項			色調		焼成	砂礫	
					地区	遺構名	日付	munsell	色名		最大径（㎜）	量
50－3	－	39	206 A	ＳＤ7040	ＫＡ46	斜溝	691023	2．5Ｙ6／2	灰黄	やや軟質	2	少量
50－4	51－4	40	206 C	ＳＤ7040	ＫＡ46	斜溝	691028	Ｎ5／0	灰	堅緻	1	極少量
50－5	－	40	206 C	ＳＤ7040	ＫＣ46	斜溝	691026	Ｎ5／0	灰	堅緻	2	少量
50－6	－	40	206 D	ＳＤ7040	ＫＣ46	斜溝	691026	Ｎ5／0	灰	軟質	3	やや多め
50－7	－	40	206か207	ＳＤ7040	ＴＳ47	溝内	680903	Ｎ3／0	暗灰	やや軟質	3	極少量
50－8	51－8	41	207 A	ＳＤ7040	ＫＡ46	斜行溝	691018	10ＹＲ7／2	灰白	やや軟質	3	やや多め
50－9	－	41	210 A	ＳＤ7040	ＫＡ46	斜行溝	691024	7．5Ｙ4／1	灰	やや軟質	3	少量
74－6	－	45	206 A	ＳＥ7074	ＫＡ61	井戸	691013	Ｎ6／0	灰	堅緻	2	極少量
79	79	47	217 B b	ＫＧ53土坑	ＫＧ53	土坑	691003	Ｎ5／0	灰	堅緻	1	極少量
91	－	－	210	ＫＭ53南北溝	ＫＭ53	南北溝	691011	10ＹＲ7／4	にぶい黄橙	軟質	2	少量
93	93	47	292 A	ＴＳ47地山斜溝	ＴＳ47	地山斜溝	680905	Ｎ4／0	灰	堅緻	2	やや多め
94	－	47	208？	ＫＡ46斜行溝上	ＫＡ46	斜行溝上	691018	Ｎ6／0	灰	やや軟質	2	少量
101－2	－	49	206 A	ＫＥ46瓦溜	ＫＥ46	瓦溜	691011	Ｎ5／0	灰	堅緻	2	やや多め
103－14	104－14	49	206 A	ＫＣ45瓦溜	ＫＣ45	瓦溜	691012	Ｎ4／0	灰	堅緻	2	少量
103－15	104－15	49	208 B	ＫＣ45瓦溜	ＫＣ45	瓦溜	691011	5Ｙ6／1	灰	堅緻	1	極少量
103－16	－	－	208？	ＫＣ45瓦溜	ＫＣ45	瓦溜	691012	Ｎ5／0	灰	堅緻	2	少量
103－17	－	－	210？	ＫＣ45瓦溜	ＫＣ45	瓦溜	691012	Ｎ4／0	灰	堅緻	2	少量
103－18	－	－	211 A？	ＫＣ45瓦溜	ＫＣ45	瓦溜	691012	Ｎ4／0	灰	堅緻	2	少量
108－5	－	50	213 B	ＴＲ51瓦溜	ＴＲ51	瓦溜	680823	10ＹＲ7／2	にぶい黄橙	やや軟質	7	少量
108－6	－	50	214 B	ＴＲ51瓦溜	ＴＲ51	瓦溜	680823	Ｎ5／0	灰	良好	4	少量
108－7	－	50	246 A	ＴＲ51瓦溜	ＴＲ51	瓦溜	680823	Ｎ6／0	灰	やや軟質	1	極少量
112－2	111－2	50	215 A	ＳＸ7097	ＫＬ55	大凹み	691012	Ｎ8／0	灰白	やや軟質	3	少量
112－3	－	－	240 A b	ＳＸ7097	ＫＬ55	大凹み	691012	Ｎ6／0	灰	やや軟質	3	極少量
121－4	－	51	213 B	炭化物層	ＴＯ35	炭化物層	680831	5Ｙ7／1	灰白	やや軟質	5	やや多め
125－3	－	51	206 A	黄褐色土	ＫＡ49	黄褐土	691023	10ＹＲ8／6	黄橙	軟質	4	少量
135－38	－	53	206 A	暗褐色土	ＫＭ53	暗褐土	691006	2．5Ｙ6／2	灰黄	やや軟質	1	極少量
135－39	－	53	206 A	暗褐色土	ＫＪ46	暗褐土	691016	Ｎ5／0	灰	堅緻	2	少量
135－40	136－40	53	206 B	暗褐色土	ＫＨ48	暗褐土	691020	Ｎ5／0～5ＹＲ7／4	灰～にぶい橙	良好	3	少量
135－41	136－41	53	207 A	暗褐色土	ＫＨ46	暗褐土	691010	Ｎ5／0	灰	良好	1	少量
135－42	－	53	208？	暗褐色土	ＫＨ48	暗褐土	691019	Ｎ6／0	灰	やや軟質	1	少量
135－43	－	53	209 A	暗褐色土	ＴＯ31	暗褐土	680902	Ｎ3／0	暗灰	良好	3	やや多め
135－44	－	53	305 A？	暗褐色土	ＫＦ46	暗褐土	691011	Ｎ4／0～7．5ＹＲ7／4	灰～にぶい橙	軟質	1	少量
135－45	－	53	216 C	暗褐色土	ＫＦ49	暗褐土	691022	Ｎ5／0	灰	堅緻	1	少量
135－46	－	53	240 A b	暗褐色土	ＫＡ54	暗褐土	691012	2．5Ｙ7／2	灰黄	やや軟質	2	少量
135－47	－	53	240 A	暗褐色土	ＫＡ55	暗褐土	691012	Ｎ7／0	灰白	堅緻	5	少量
135－48	136－48	－	284 C	暗褐色土	ＫＭ52	暗褐土	691005	Ｎ5／0	灰	良好	1	少量
146－38	－	－	206？	褐色土	ＴＯ49	褐色土	680831	2．5Ｙ7／2	灰黄	やや軟質	1	極少量
146－39	－	－	213 B	褐色土	ＴＯ35	褐色土	680822	7．5Ｙ6／1	灰	軟質	5	少量
146－40	－	－	229 B	褐色土	ＴＱ50	褐色土	680901	7．5Ｙ8／1	灰白	堅緻	1	少量
146－41	－	－	242 A	褐色土	ＴＯ41	褐色土	680820	Ｎ6／0	灰	やや軟質	1	少量
150－4	－	56	204 C	表土	ＴＱ50	表土	680825	Ｎ5／0	灰	良好	1	極少量
154－8	－	56	206 D	ＴＱ47瓦層	ＴＱ47	瓦層	680902	2．5Ｙ7／2	灰黄	やや軟質	2	少量
154－9	－	56	240 A a	ＴＯ30地山上暗褐色土	ＴＯ30	地山上暗褐色土	680831	Ｎ3／0	暗灰	堅緻	4	少量
154－10	－	56	255 A	ＴＱ50バラス混じり褐色土	ＴＱ50	バラス混り褐色土	680901	Ｎ5／0	灰	堅緻	2	極少量
154－11	－	56	262 B	ＴＰ50灰褐色土	ＴＰ50	灰褐色土	680830	Ｎ5／0	灰	良好	1	極少量

Tab. 13　丸瓦観察表

Fig.	Fig.（写真）	PL.	型式	遺構名（本報告書）	ラベル記載事項			色調		焼成	砂礫		布目	玉縁長	筒部長
					地区	遺構名	日付	munsell	色名		最大径（㎜）	量		（㎝）	
52－10	54－10－1・2	40－10	2ⅠB	SD7040	KB46	斜溝	691026	N4／0	灰	堅緻	3	少量	中	4.5	29.1
52－11	54－11	40－11	2ⅠB	SD7040	KA46	斜溝	691026	N4／0	灰	堅緻	3	少量	粗	6.4	30.5
52－12	－	40－12	2ⅠB	SD7040	KB46	斜溝	691026	7.5Y 6／1	灰	やや軟質	3	少量	粗	6.3	－
52－13	－	41－13	2ⅠB	SD7040	KA46	斜溝	691026	5Y7／2	灰白	やや軟質	2	少量	粗	－	32.5
52－14	－	－	2ⅠB	SD7040	KA46	斜溝	691026	N6／0	灰	良好	2	極少量	－	－	－
52－15	－	－	2ⅠB	SD7040	KA46	斜溝	691026	N6／0	灰	堅緻	3	少量	密	－	－
53－16	－	41－16	2ⅠB	SD7040	KA46	斜溝	691026	N6／0	灰	堅緻	5	少量	中	5.6	－
53－17	54－17	41－17	2ⅠB	SD7040	KA46	斜溝	691026	N5／0	灰	堅緻	3	少量	密	6.2	－
53－18	54－18	－	2ⅠB	SD7040	KA46	斜溝	691026	N4／0	灰	堅緻	5	少量	中	5.0	－
53－19	－	－	2ⅠB	SD7040	KA46	斜溝	691026	10YR 5／1	褐灰	やや軟質	2	極少量	中	4.4	－
53－20	－	－	2ⅠB	SD7040	KB46	斜溝	691026	N7／0	灰白	軟質	2	極少量	－	4.8	－
53－21	－	－	2ⅠB	SD7040	KB46	斜溝	691026	N5／0	灰	堅緻	3	少量	粗	5.6	－
53－22	54－22	－	2ⅠB	SD7040	KA46	斜溝	691026	N5／0	灰	堅緻	3	少量	粗	5.7	－
53－23	－	－	2ⅠB	SD7040	KA46	斜溝	691026	5Y7／1	灰白	やや軟質	4	少量	－	－	－
53－24	－	－	2ⅠB	SD7040	KA46	斜溝	691026	N5／0	灰	やや軟質	2	極少量	－	－	－
53－25	－	－	2ⅠB	SD7040	KA46	斜溝	691026	N4／0	灰	やや軟質	2	極少量	中	－	－
53－26	－	－	2ⅠB	SD7040	KA46	斜溝	691026	5Y4／1	灰	やや軟質	2	極少量	中	－	－
65－1	－	－	2ⅠB	第2整地土	TS51	黄褐整地土中	680906	N5／0	灰	堅緻	3	少量	中	5.7	－
71－1	－	－	2ⅠB	基壇内の下面	TR48	基壇内の下面	680903	N5／0	灰	堅緻	2	少量	中	5.5	－
76－8	－	46－8	1ⅡA	SE7074	KA61	井戸	691013	N5／0	灰	堅緻	3	やや多い	粗	－	41.2
76－9	－	－	2ⅠB	SE7074	KA61	井戸	691013	N6／0	灰	堅緻	1	極少量	－	6.3	－
83	－	－	2ⅠB	SX7065	KI47	穴	691022	7.5Y 6／1	灰	堅緻	2	極少量	粗	－	－
88	－	－	－	KE49 東石溝	KE49	東石溝	691023	N4／1	灰	堅緻	4	少量	－	4.4	－
98－1	－	－	2ⅠB	KH48 瓦溜	KH48	瓦溜	691019	N5／0	灰	堅緻	4	少量	粗	6.5	－
98－2	－	－	2ⅠB	KH48 瓦溜	KH48	瓦溜	691019	10R 4／1	暗紫灰	堅緻	3	少量	粗	6.3	－
98－3	－	－	2ⅠB	KH48 瓦溜	KH48	瓦溜	691019	10Y 7／1	灰白	良好	2	少量	中	－	－
100－1	－	48	－	KE46 新瓦溜	KE46	新瓦溜まり	691014	N5／0	灰	堅緻	3	少量	－	5.0	30.1
105－19	－	－	2ⅠB	KC45 瓦溜	KC45	瓦溜まり	691011	N5／0	灰	堅緻	3	やや多い	粗	5.3	－
105－20	－	－	2ⅠB	KC45 瓦溜	KC45	瓦溜まり	691011	N5／0	灰	堅緻	2	少量	粗	5.7	－
105－21	－	－	2ⅠB	KC45 瓦溜	KC45	瓦溜まり	691011	N5／0	灰	堅緻	2	少量	密	5.7	－
110	－	－	2ⅡAa	TR51 瓦溜	TR51	瓦溜まり	680823	N6／1	灰	良好	2	少量	－	4.8	－
126－4	－	－	2ⅠB	黄褐色土	TO34	黄褐土	680903	N5／0	灰	堅緻	2	少量	中	－	－
137－49	－	54－49	－	暗褐色土	KE46	暗褐土	691011	N6／0	灰	堅緻	4	少量	－	5.9	－
137－50	－	54－50	－	暗褐色土	KH48	暗褐土	691020	N4／0	灰	堅緻	4	少量	－	6.6	32.2
137－51	－	－	2ⅠB	暗褐色土	KI47	暗褐土	691019	N5／0	灰	良好	2	少量	密	－	－
147－42	－	－	－	褐色土	TP49	褐色土	680902	2.5Y 7／2	灰黄	堅緻	3	極少量	－	5.3	－

※布目の分類は飛鳥時代の瓦に限る（Fig.167）。

Tab. 14－1　平瓦観察表－1

Fig.	Fig.（写真）	PL.	型式	遺構名（本報告書）	ラベル記載事項			色調		焼成	砂礫		布目	全長（cm）
					地区	遺構名	日付	munsell	色名		最大径（mm）	量		
55－27	－	42－27	１ＩＡ１類	ＳＤ7040	ＫＡ46	斜溝	691026	Ｎ４／０	灰	堅緻	5	少量	極粗	35．7
56－28	－	42－28	１ＩＡ１類	ＳＤ7040	ＫＡ46	斜溝	691026	7．5Ｙ６／１	灰	堅緻	5	少量	極粗	37．7
57－29	64－29	42－29	１ＩＡ１類	ＳＤ7040	ＫＡ46	斜溝	691026	Ｎ４／０	灰	堅緻	5	少量	中	37．7
57－30	－	－	１ＩＡ１類	ＳＤ7040	ＫＡ46	斜溝	691026	7．5Ｙ７／１	灰白	良好	2	少量	粗	－
57－31	－	－	１ＩＡ１類	ＳＤ7040	ＫＡ46	斜溝	691026	Ｎ４／０	灰	やや軟質	3	極少量	粗	－
57－32	－	－	１ＩＡ１類	ＳＤ7040	ＫＡ46	斜溝	691026	Ｎ６／０	灰	良好	2	少量	極粗	－
57－33	－	－	１ＩＡ１類	ＳＤ7040	ＫＡ46	斜溝	691026	2．5Ｙ７／２	灰黄	良好	2	少量	極粗	－
58－34	64－34	43－34	１ＩＡ２類	ＳＤ7040	ＫＡ46	斜溝	691026	Ｎ５／０	灰	堅緻	5	少量	中	37．2
59－35	－	43－35	１ＩＡ２類	ＳＤ7040	ＫＡ46	斜溝	691026	Ｎ５／０	灰	堅緻	5	少量	粗	－
59－36	－	43－36	１ＩＡ２類	ＳＤ7040	ＫＡ46	斜溝	691026	Ｎ５／０	灰	堅緻	2	少量	粗	34．5
60－37	－	－	１ＩＡ１類	ＳＤ7040	ＫＡ46	斜溝	691026	Ｎ５／０	灰	良好	2	少量	極粗	－
60－38	－	－	１ＩＡ２類	ＳＤ7040	ＫＡ46	斜溝	691026	5Ｙ６／１	灰	良好	1	極少量	極粗	－
60－39	－	－	１ＩＡ２類	ＳＤ7040	ＫＡ46	斜溝	691026	Ｎ５／０	灰	堅緻	5	少量	密	－
60－40	－	－	１ＩＡ２類	ＳＤ7040	ＫＡ46	斜溝	691026	2．5Ｙ７／２	灰黄	良好	5	少量	極粗	－
60－41	－	－	１ＩＡ２類	ＳＤ7040	ＫＡ46	斜溝	691026	5Ｙ７／１	灰白	良好	3	少量	粗	－
60－42	－	－	１ＩＡ２類	ＳＤ7040	ＫＡ46	斜溝	691026	Ｎ５／０	灰	堅緻	2	少量	粗	－
60－43	－	－	１ＩＡ２類	ＳＤ7040	ＫＡ46	斜溝	691026	7．5Ｙ６／１	灰	良好	1	少量	粗	－
61－44	－	44－44	１ＩＡ３類	ＳＤ7040	ＫＡ46	斜溝	691026	10ＴＲ５／１	褐灰	やや軟質	3	やや多い	中	39．0
62－45	64－45	44－45	１ＩＢｂ	ＳＤ7040	ＫＡ46	斜溝	691026	Ｎ４／０	灰	堅緻	3	やや多い	密	37．3
63－46	－	－	１ＩＢｂ	ＳＤ7040	ＫＡ46	斜溝	691026	Ｎ４／０	灰	堅緻	3	やや多い	中	－
63－47	－	－	１ＩＡ３類	ＳＤ7040	ＫＡ46	斜溝	691026	Ｎ５／０	灰	やや軟質	3	やや多い	中	－
63－48	－	－	１ＩＡ３類	ＳＤ7040	ＫＡ46	斜溝	691026	2．5Ｙ７／１	灰白	やや軟質	3	少量	中	－
65－2	－	－	１ＩＡ２類	第２整地土	ＴＳ51	黄褐整地土中	680906	Ｎ５／０	灰	堅緻	1	極少量	－	－
65－3	－	－	１ＩＡ２類	第２整地土	ＴＳ51	黄褐整地土中	680906	5Ｙ７／１	灰白	良好	4	少量	粗	－
65－4	－	－	１ＩＡ２類	第２整地土	ＴＳ51	黄褐整地土中	680906	7．5Ｙ６／１	灰	良好	4	少量	粗	－
66－1	－	－	１ＩＡ２類	ＴＳ51地山面上	ＴＳ51	地山面上	680906	Ｎ４／０	灰	堅緻	5	少量	密	－
66－2	－	－	１ＩＡ２類	ＴＳ51地山面上	ＴＳ51	地山面上	680906	Ｎ５／０	灰	堅緻	3	少量	粗	－
71－2	－	－	１ＩＡ２類	基壇内の下面	ＴＲ48	基壇内の下面	680903	Ｎ５／０	灰	堅緻	3	少量	粗	－
71－3	－	－	１ＩＡ１類	基壇内の下面	ＴＲ48	基壇内の下面	680903	Ｎ５／０	灰	堅緻	3	少量	極粗	－
76－10	－	－	－	ＳＥ7074	ＫＡ61	井戸	691013	Ｎ５／０	灰	堅緻	2	少量	粗	－
76－11	－	－	１ＩＡ１類	ＳＥ7074	ＫＡ61	井戸	691013	Ｎ４／０	灰	堅緻	5	少量	粗	－
76－12	－	－	１ⅣＢ	ＳＥ7074	ＫＡ61	井戸	691013	Ｎ５／０	灰	堅緻	6	やや多い	粗	－
76－13	－	－	１Ⅳ	ＳＥ7074	ＫＡ61	井戸	691013	Ｎ５／０	灰	堅緻	3	少量	中	－
76－14	77－14	46－14	１ⅣＢ	ＳＥ7074	ＫＡ61	井戸	691013	Ｎ５／０	灰	堅緻	3	少量	中	－
76－15	－	－	１ⅣＢ	ＳＥ7074	ＫＡ61	井戸	691013	Ｎ５／０	灰	堅緻	5	少量	中	－
76－16	－	－	－	ＳＥ7074	ＫＡ61	井戸	691013	2．5Ｙ６／１	黄灰	やや軟質	1	極少量	－	－
76－17	－	－	－	ＳＥ7074	ＫＡ61	井戸	691013	7．5ＹＲ７／４	にぶい橙	堅緻	10	極少量	－	－
85	－	46	１ＩＢｂ	ＫＧ49大穴	ＫＧ49	大穴	691027	Ｎ６／０	灰	堅緻	2	やや多い	中	－
92	92	48	１ⅣＢ	ＴＯ35南北溝	ＴＯ35	暗褐色南北溝	680831	Ｎ７／１	灰白	堅緻	10	少量	－	40．0
97－1	－	48	－	ＫＩ62瓦溜	ＫＩ62	瓦溜まり	691015	2．5Ｙ４／１	黄灰	良好	2	少量	－	－
97－2	－	－	－	ＫＩ62瓦溜	ＫＩ62	瓦溜まり	691015	5Ｙ７／１	灰白	堅緻	3	少量	－	－
98－4	－	－	１ＩＡ３類	ＫＨ48瓦溜	ＫＨ48	瓦溜	691019	5Ｙ７／１	灰白	良好	3	少量	中	－
98－5	－	－	１ＩＡ１類	ＫＨ48瓦溜	ＫＨ48	瓦溜	691019	Ｎ５／０	灰	堅緻	2	少量	極粗	－
100－2	－	－	－	ＫＥ46新瓦溜	ＫＥ46	新瓦溜	691014	7．5Ｙ７／１	灰白	堅緻	3	少量	－	－
105－22	－	－	１ＩＡ２類	ＫＣ45瓦溜	ＫＣ45	瓦溜まり	691011	Ｎ５／０	灰	堅緻	1	極少量	密	－
105－23	－	－	１ＩＡ２類	ＫＣ45瓦溜	ＫＣ45	瓦溜まり	691011	5Ｙ７／２	灰白	良好	2	少量	中	－

Tab. 14－2　平瓦観察表－2

Fig.	Fig.（写真）	PL.	型式	遺構名（本報告書）	ラベル記載事項			色調		焼成	砂礫		布目	全長（cm）
					地区	遺構名	日付	munsell	色名		最大径（㎜）	量		
105－24	－	－	1ⅠA2類	KC45瓦溜	KC45	瓦溜まり	691011	N5／0	灰	堅緻	5	少量	粗	－
105－25	－	－	1ⅠA3類	KC45瓦溜	KC45	瓦溜まり	691011	N4／0	灰	やや軟質	3	少量	粗	－
105－26	－	－	1Ⅳ	KC45瓦溜	KC45	瓦溜まり	691011	5Y5／1	灰	堅緻	2	少量	粗	－
105－27	－	－	1Ⅳ	KC45瓦溜	KC45	瓦溜まり	691011	7.5Y 7／1	灰白	やや軟質	2	少量	粗	－
105－28	－	－	－	KC45瓦溜	KC45	瓦溜まり	691011	N4／0	灰	良好	2	少量	－	－
105－29	－	－	－	KC45瓦溜	KC45	瓦溜まり	691011	5Y7／1	灰白	堅緻	3	少量	－	－
113－1	－	－	1ⅠA1類	TQ47瓦敷	TQ47	瓦敷	680901	N5／0	灰	堅緻	2	少量	中	－
113－2	－	－	1ⅠA2類	TQ47瓦敷	TQ47	瓦敷	680901	5Y6／2	灰オリーブ	やや軟質	2	少量	粗	－
113－3	－	－	1ⅠA2類	TQ47瓦敷	TQ47	瓦敷	680901	N5／0	灰	堅緻	3	少量	粗	－
113－4	－	－	1ⅠA2類	TQ47瓦敷	TQ47	瓦敷	680901	N4／0	灰	堅緻	2	少量	粗	－
113－5	－	－	1ⅠA3類	TQ47瓦敷	TQ47	瓦敷	680901	N5／0	灰	良好	3	少量	中	－
113－6	－	－	1ⅠA3類	TQ47瓦敷	TQ47	瓦敷	680901	N5／0	灰	良好	2	少量	粗	－
113－7	－	－	－	TQ47瓦敷	TQ47	瓦敷	680901	N5／0	灰	良好	3	少量	－	－
113－8	－	－	1ⅠA3類	TQ47瓦敷	TQ47	瓦敷	680901	N5／0	灰	堅緻	2	少量	－	－
113－9	－	－	－	TQ47瓦敷	TQ47	瓦敷	680901	N5／0	灰	良好	2	少量	－	－
126－5	－	－	1ⅠA1類	黄褐色土	TS47	黄褐土	680824	5Y7／2	灰黄	やや軟質	3	少量	極粗	－
126－6	－	－	1ⅠA2類	黄褐色土	TS47	黄褐土	680824	N5／0	灰	堅緻	2	少量	中	－
126－7	126－7－1･2	51－7	1ⅠBb	黄褐色土	KA45	黄褐土	691017	N5／0	灰色	堅緻	3	少量	中	36.3
126－8	－	－	－	黄褐色土	TO34	黄褐土	680904	7.5Y7／1	灰白	堅緻	1	極少量	－	－
137－52	－	－	－	暗褐色土	TO33	暗褐土	680902	N4／0	灰	堅緻	1	極少量	－	35.3
137－53	－	－	－	暗褐色土	TO35	暗褐土	680831	7.5Y6／1	灰	良好	1	極少量	粗	－
147－43	－	－	－	褐色土	TO50	褐色土	680902	N4／0	灰	堅緻	3	少量	－	30.3
147－44	－	－	－	褐色土	TO50	褐色土	680902	N4／0	灰	堅緻	1	極少量	－	－
147－45	－	－	－	褐色土	KA47	褐色土	680821	N5／0	灰	堅緻	1	極少量	－	－
147－46	－	－	－	褐色土	TR51	褐色土	680823	N5／0	灰	堅緻	1	極少量	－	－

※布目の分類は飛鳥時代の瓦に限る（Fig.170）。

Tab. 15　道具瓦・用途不明品観察表

Fig.	Fig.（写真）	PL.	種類	遺構名（本報告書）	ラベル記載事項			色調		焼成	砂礫		長さ	幅
					地区	遺構名	日付	munsell	色名		最大径（㎜）	量	（cm）	
63－49	－	44－49	不明	SD7040	KC46	斜溝	691026	5Y 7／2	灰白	良好	1	少量	20.8	－
63－50	－	44－50	不明	SD7040	KA46	斜溝	691026	N5／0	灰	良好	1	少量	9.8	4.6
78－18	－	－	面戸瓦	SE7074	KA61	井戸	691013	5Y 6／2	灰 オリーブ	やや軟質	2	やや多い	－	11.3
78－19	－	45－19	鴟尾	SE7074	KA61	井戸	691013	7.5Y 6／1	灰	良好	1	極少量	－	8.2
106	－	49－30	鴟尾	KC45瓦溜	KC45	瓦溜まり	691011	5Y 6／2	灰 オリーブ	良好	1	極少量	16.7	16.7
113－10	－	－	不明	TQ47瓦敷	TQ47	瓦敷	680901	N5／0	灰	良好	1	極少量	10.0	5.5
126－9	－	－	不明	黄褐色土	TO34	黄褐土	680903	N8／0	灰白	良好	1	極少量	7.7	4.3
138－54	－	54－54	鴟尾	暗褐色土	KF46	暗褐土	691013	5Y 8／1	灰白	良好	5	少量	5.9	9.3
138－55	－	54－55	鴟尾	暗褐色土	KF46	暗褐土	691013	5Y 7／2	灰白	良好	5	少量	7.4	－
138－56	－	54－56	鴟尾	暗褐色土	KF46	暗褐土	691013	5Y 8／1	灰白	良好	1	少量	8.1	－
138－57	－	54－57	鴟尾	暗褐色土	KF46	暗褐土	691013	5Y 6／1	灰	良好	1	少量	9.7	－
138－58	－	54－58	磚	暗褐色土	KH48	暗褐土	691020	5Y 7／2	灰白	良好	1	極少量	13.3	13.5
148－47	－	－	面戸瓦	褐色土	TP50	褐色土	680830	N4／0	灰	良好	1	極少量	9.5	－
148－48	－	－	面戸瓦	褐色土	TO50	褐色土	680830	N4／0	灰	良好	1	極少量	12.2	－
148－49	－	55－49	鴟尾	褐色土	TO50	褐色土	680830	5Y 7／2	灰白	良好	1	少量	13.9	21.6
148－50	－	55－50	鴟尾	褐色土	KC39	褐色土	680821	N4／0	灰	良好	2	少量	－	8.1

第Ⅲ章　考　　察

1　若草伽藍の軒丸瓦・軒平瓦

中川　あや

はじめに

法隆寺若草伽藍の軒瓦については、すでに多くの論考がある（松下1972、森1983、花谷1987、花谷・佐川1991など）。型式分類から製作技法、同笵関係におよぶまで幅広く論究され、中でも、1992年に世に出た『法隆寺の至宝　瓦』（法隆寺昭和資財帳編集委員会1992、以下『至宝』と略す）は、それらの結晶である。

本書報告編では、若草伽藍跡で出土した飛鳥～江戸時代の軒瓦について、『至宝』での型式分類を全面的に踏襲し、遺構ごとに個別の記述をおこなった。本節では、若草伽藍跡出土軒瓦の中でも飛鳥時代の軒瓦について、型式別に諸特徴を再整理する。また、軒瓦各型式の所用建物を議論する際に重要な分布についてもデータを提示する。

軒丸瓦

型式分類

法隆寺における飛鳥時代の軒丸瓦に型式名を与え、体系的に分類したのは、『南都七大寺出土軒瓦型式一覧（1）法隆寺』（奈良国立文化財研究所1983、以下『一覧』と略す）が初めてである(1)。その後、花谷浩によって一部変更と新型式設定がおこなわれ（花谷1987）、それを『至宝』が引き継ぐ。これらの型式分類は有効で、今回の報告編でも踏襲した。ただ、これまでに各型式の分類基準が明確に提示されてきたとは言いがたい。『一覧』においては瓦当の拓本と断面実測図のみの提示であったし、『至宝』では、分類基準の提示というよりも、各型式の諸特徴の説明がなされた(2)。そのため、型式によっては蓮弁の形態や枚数に着目したり、中房の大きさ・形状にまで言及したり、なぜそれらが分かれるのか、について統一的な根拠が提示されたとは言いがたい。そこで、報告編で従来の型式を踏襲するにあたって、『一覧』や『至宝』で提示されていた各型式の諸特徴のうち、特に蓮弁数と平面形態に注目し(3)、それらを組み合わせることで各型式を定義しておく。

法隆寺飛鳥時代の軒丸瓦は、瓦当の蓮弁数と平面形態によって、大きく7型式に分けることができる（Fig.157）。

2型式：単弁（素弁）6弁蓮華文。弁端は丸く弧を描き、弁の肩はやや角張る。

3型式：単弁（素弁）9弁蓮華文。弁端と弁の肩が角張る。

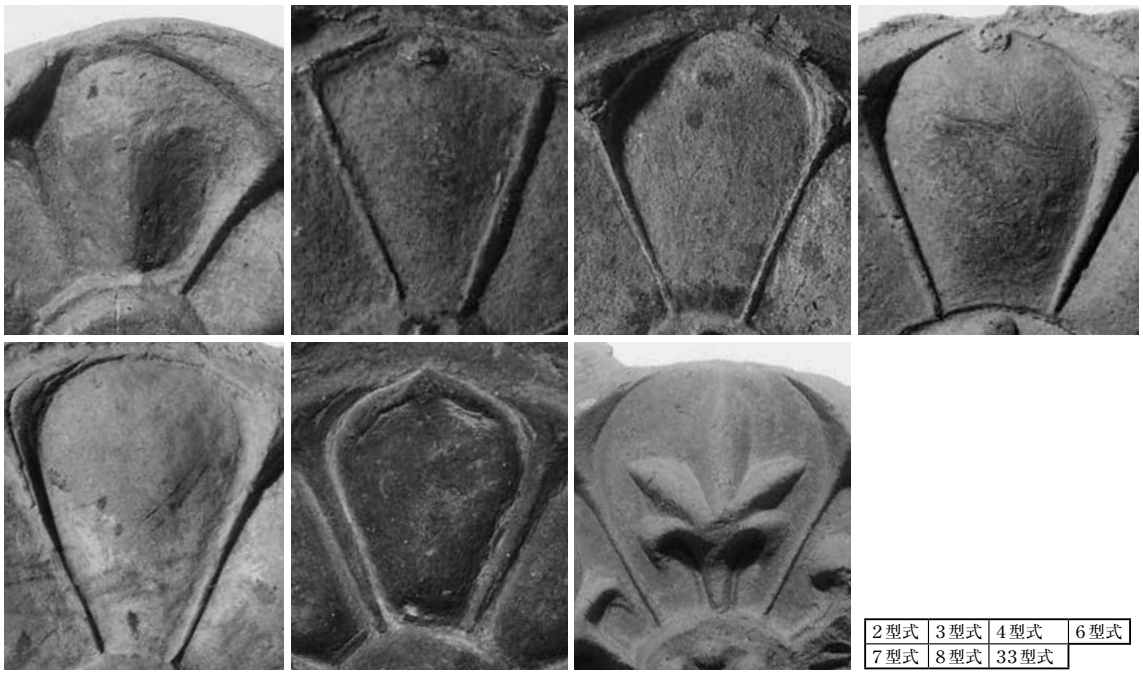


Fig. 157　若草伽藍跡出土軒丸瓦の蓮弁

4型式：単弁（素弁）８弁蓮華文と単弁（素弁）10弁蓮華文。弁端と弁の肩が角張る。

6型式：単弁（素弁）８弁蓮華文。弁端は丸く弧を描き、弁の肩には角がない。

7型式：単弁（素弁）８弁蓮華文。弁端は緩やかな弧を描き、弁の肩はやや角張る。

8型式：単弁（素弁）８弁蓮華文。弁端は丸く弧を描いて中央部が反転し、弁の肩はやや角張る。

33型式：単弁忍冬文装飾６弁蓮華文。弁端は丸く弧を描き、弁の肩はやや角張る。

次に、各型式の細分について明確にしておく。この細分は、笵の個体識別と同義である。

2型式－2A

3型式－3Bb：蓮弁が９弁。蓮子１＋６[4]。

3C　：蓮弁が９弁（弁の割り付けが3Bbよりも整斉)。蓮子１＋６。

4型式－4A　：蓮弁が８弁。蓮子１＋６。

4C　：蓮弁が10弁。蓮子１＋４。

4D　：蓮弁が10弁。蓮子は個数不明。

6型式－6A　：中房の周囲に凹溝と圏線をめぐらす。蓮子１＋４か。

6B　：中房の周囲に凹溝と圏線をめぐらす。蓮子１＋６。

6C　：中房と内区との境が突線。蓮子は１＋８で、各蓮子の配置が各間弁と対応。

6Da：中房と内区との境が段。蓮子は１＋８で、各蓮子の配置が各蓮弁中央と対応。

6Db：6Daに蓮子を５つ足して、１＋５＋８としたもの。

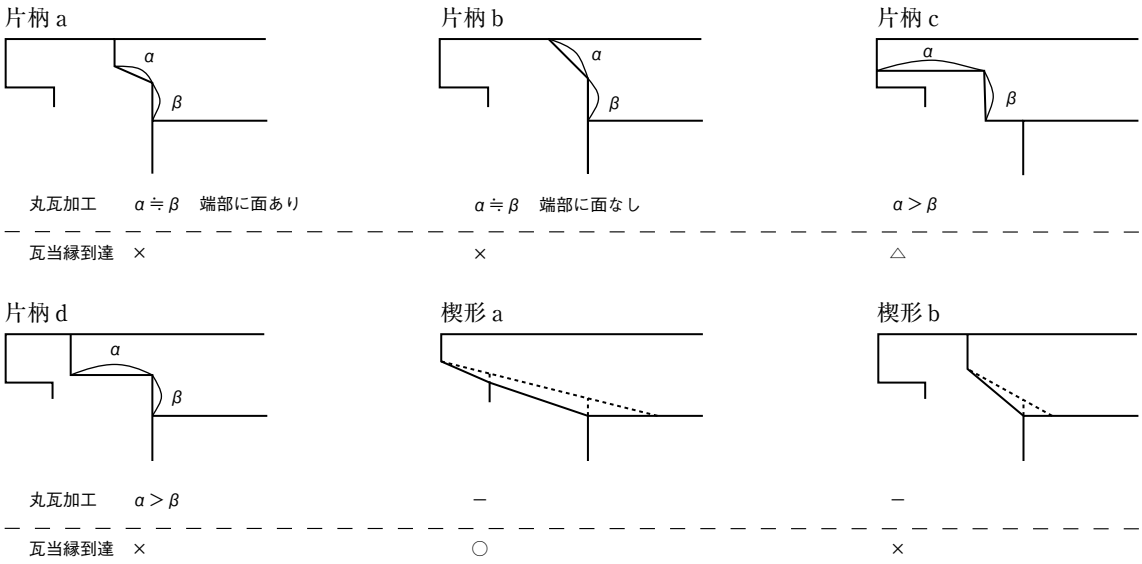
6E　：中房の周囲に凹溝と圏線をめぐらす。蓮子１＋４。

7型式－7Aa：蓮子１＋５。

7Ab：７Aaの中房輪郭に圏線を彫り加える。

8型式－8B[5]

丸瓦先端の加工



楔形については、実線と点線の２パターン存在する。

内面接合粘土の接着

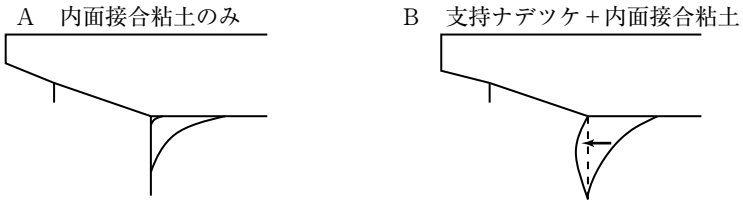


Fig. 158　軒丸瓦接合部模式図

33型式－33 A：６弁５葉蓮華文。

33 B：６弁３葉蓮華文。

各型式概説

以上の型式分類を踏まえ、軒丸瓦各型式の特徴について記述する。法隆寺飛鳥時代の軒丸瓦７型式17種類のうち､今回の発掘調査で出土したのは５型式８種類である。以下､本調査で出土した型式に限って話を進める（Fig. 159）。なお、今回の調査で出土した軒丸瓦は、丸瓦がはずれた状態で出土したものが大部分である。そのため、特徴についても、ほぼ瓦当に限ったものにならざるをえない。また、基本的に若草伽藍出土品によって特徴を記すが、情報が不足する部分は法隆寺所蔵品（以下寺蔵品と称する）および1978～1984年調査出土資料（法隆寺1985、以下、防災資料と称する）によって補足する。

３Ｂｂ　24点出土（うち、10点は３Bbの可能性が高いもの)。接合方法は片柄a（Fig. 158）。丸瓦の取り付き位置は特に180°間隔で２方向に偏る。丸瓦は玉縁式。瓦当裏面はゆるやかに盛り上がる。外縁上面に笵端痕を残すものがあり、Ｂ型笵（木村1969、近藤1982、毛利光1990）の使用が推測される。瓦当径平均は約15.６cm。色調は灰色～灰白色、焼成は堅緻なものが多い。

３Ｃ　７点出土（うち、２点は３Ｃの可能性が高いもの)。接合方法は片柄ｂ。丸瓦取り付き位置が１方向に偏るという、他の型式にはない特徴を持つ。防災資料により、丸瓦は玉縁式と判明。瓦当裏面は

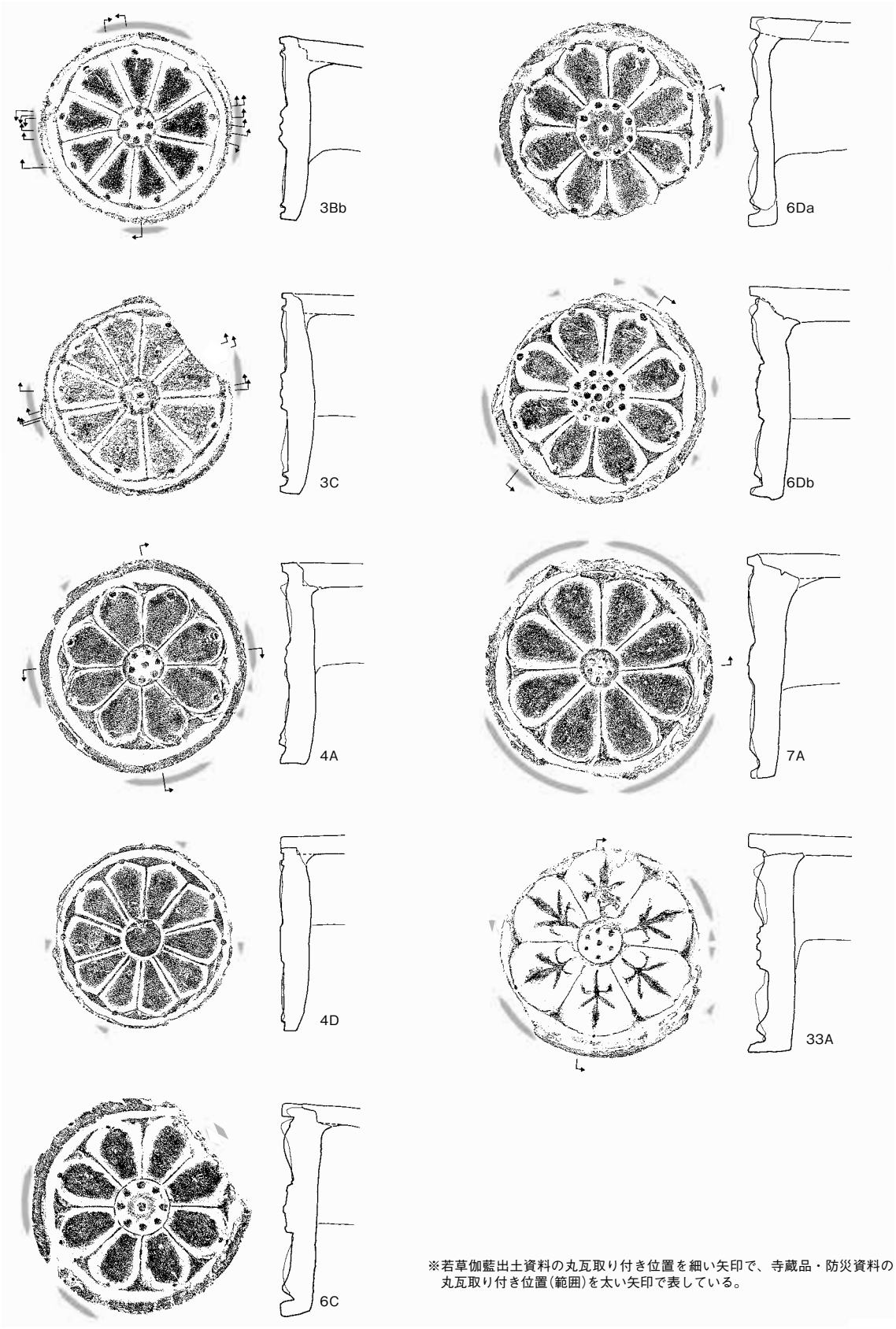


Fig. 159　若草伽藍跡出土軒丸瓦型式（1：5）

ゆるやかに盛り上がる。外縁上面に笵端痕を残すものがあり、B笵型の使用が推測される。瓦当径平均は約16.6cm。色調は灰白色～灰黄色、焼成は軟質なものが多い。

4A　14点出土。接合方法は片柄b。寺蔵品により丸瓦の型式は玉縁式と判明。瓦当裏面はゆるやかに盛り上がる。外縁上面に笵端痕を残すものがあり、B型笵の使用が推測される。瓦当径平均は約17.0cm。色調は灰白色～灰色、焼成は堅緻なものが多い。

4D　1点出土。接合方法は不明。寺蔵品・防災資料には片柄cが存在する。丸瓦の型式は不明。瓦当裏面はゆるやかに盛り上がる。B型笵の使用が推測される（寺蔵品・防災資料には、外縁上面に笵端痕を残すものあり）。瓦当径は約16.0cm。色調は灰白色で、焼成はやや軟らかい。丸瓦が瓦当の外縁よりも外側に取り付き、瓦当を正面からみると正円にならないのが特徴的。

6C　9点出土（うち、4点は6Cの可能性が高いもの）。接合方法は楔形a。丸瓦先端にキザミ、瓦当裏面には丸瓦凹面に沿って支持ナデツケが施されるものあり。丸瓦の型式は不明。瓦当裏面は平坦。笵型は不明。瓦当径平均は約17.8cm。色調は灰色、焼成は良好なものが多い。

6Da・b　19点出土（うち、Daは1点、Dbは3点、不明15点）。接合方法は楔形a。瓦当裏面には支持ナデツケが施されるものあり（寺蔵品には支持ナデツケとともに、丸瓦先端にキザミが施されるものがごく少数あり）。丸瓦取り付き位置は、Daが180°間隔で2方向に偏るのに対し、Dbは比較的ランダムに分散する。丸瓦の型式は不明。瓦当裏面はほぼ平坦。笵型は不明。瓦当径平均は約17.1cm。色調は灰色、焼成は堅緻なものが多い。白色砂粒を多く含む傾向にある。

7A　7点出土（うち、Abは1点、不明6点）。摩滅などにより、7AaとAbの識別は困難であるため、両者合わせた特徴を記す。接合方法は楔形a・b。丸瓦先端にキザミが施されているが、瓦当裏面の支持ナデツケについては不明（寺蔵品・防災資料には両者ともに施される）。丸瓦の型式は不明。瓦当裏面は平坦。B型笵の使用が推測される（寺蔵品には、外縁上面に笵端痕残るものあり）。瓦当径平均は約18.8cm。色調は灰白色～灰色、焼成はやや軟質なものが多い。白色砂粒を多く含む傾向にある。

33A　10点出土。接合方法は片柄a、楔形a・b。丸瓦先端にキザミが施されるが（寺蔵品にはキザミが施されないものが存在）、瓦当側にもキザミが施されている可能性がある。瓦当裏面には支持ナデツケが施される。丸瓦の型式は不明。瓦当裏面は平坦（防災資料にはゆるやかに盛り上がるものが存在）。瓦当径平均は約18.4cm。色調は灰色と灰黄色～浅黄色の2群に分かれ、焼成は前者が堅緻で、後者が軟質。

以上、型式ごとに特徴を述べたが、次に型式間で共有される特徴についてまとめておきたい。

まず、丸瓦の接合方法について（Tab.16）。丸瓦先端の切り欠き方法には、片柄＝丸瓦先端を凹面・端部の2方向から切り欠くものと、楔形＝端部のみから切り欠くものの2種類ある。片柄方式には、端部からの切り込みが凹面からの切り込みとほぼ同じ長さのもの（Fig.158の$\alpha \fallingdotseq \beta$。3Bb・3C・4A）と、端部からの切り込みが凹面からの切り込みよりも長いもの（同$\alpha > \beta$。4D・6C）があり、後者は、端部からのみ切り込む楔形方式（6D・7A・33A）に近いといえる。丸瓦先端のキザミは、6C・6D・7A・33Aにしかみられないが、6C・6Dは一部分の資料に限られるのに対し、7A・33Aではほぼ全資料にある。そして、内面接合粘土を貼り付ける前に、接合部を補強するために施される支持ナデツケも、6C・6D・7A・33Aにしかみられないが、6C・6Dは限定的であるのに対し、7A・33

Aではほぼ全資料にある。しかし、6C・6Dに関して、丸瓦先端キザミと支持ナデツケの両者が施されている資料は現時点でごく少なく、両者が完全に共存するのは7Aと33Aに限られる[6]。次に、丸瓦の接合位置に関しては、3Cのみ、1方向に偏るが、あとの型式は90°間隔でおおよそ4方向に偏る傾向にあり、なかには180°開いた2方向に偏るものがある。いずれにしろ、すでに指摘されていることであるが(森1984)、若草伽藍の軒丸瓦笵は方形であった可能性が高い。

Tab. 16　軒丸瓦各型式の特徴

若草伽藍出土型式	丸瓦接合法	接合粘土	キザミの有無
3Bb	片枘a	A	×
3C	片枘b	A	×
4A	片枘b	A	×
4D	片枘c	A	×
6C	片枘d	A・B	△
6Da	楔形a	A（Bも？）	？
6Db	楔形a	A・B	△
7Ab	楔形a・b	B	○
33A	片枘a 楔形a・b	B	○

×・・・なし、△・・・一部、○・・・全部、？・・・不明

次に、接合方法以外の諸特徴について。裏面の形態をみると、中央が緩やかに盛り上がるタイプと、平坦なタイプとに分かれる。前者は、3Bb・3C・4A・4Dであり、後者は6C・6D・7A・33Aである。裏面調整について、前者には回転台を使用してナデを施すものがある[7]。後者のうち、6Cは一部ユビオサエを施すが、その他の型式は不定方向のナデを施す。笵型については、3Bb・3C・4A・4D・7Aが外縁上面にバリを残すことからB型笵で、6C・6D・33Aには笵端痕跡が残らないために不明。瓦当径平均は、3Bbがもっとも小さく15.6cmで、4型式が16～17cm、6型式が17cm台、7・33型式が18cm台と差がある。いずれの丸瓦取り付き範囲をみても瓦当の半分を占めており、型式ごとに丸瓦の径も異なっていたことがうかがえる。

以上、若草伽藍で出土した軒丸瓦全型式の諸特徴を詳述した。接合方法、調整、笵、法量に注目したが、各型式の時間的前後関係を考える場合にもっとも重視すべきは、接合方法であろう。笵は移動するし、法量は笵に規制される。また、調整は残念ながら、バラエティーに乏しい。よって、接合方法のうち支持ナデツケ、キザミについて注目すると、「3・4型式」、「6型式」、「7・33型式」という大まかなグルーピングが可能である。また、丸瓦先端の加工についてみても、おおよそこのグルーピングがあてはまる。そして、型式間の前後関係については、支持ナデツケ、キザミに関して、①3・4型式では全く確認できない一方、6型式では一部で、7・33型式ではほぼ全資料に認められ、②若草伽藍に後続する西院伽藍塔･金堂の創建瓦37Aに支持ナデツケ･キザミが施されていることから、「3・4型式」→「6型式」→「7・33型式」という方向性が想定できる。丸瓦先端の加工についてみても、片枘a・b→片枘c・d→楔形という変遷が想定されることから、この方向性は妥当である。

軒平瓦

型式分類

軒丸瓦同様、法隆寺における飛鳥時代の軒平瓦に型式名を与え、体系的に分類したのは『一覧』が初めてである。その後、花谷浩と佐川正敏によって一部変更と新型式設定がおこなわれ（花谷・佐川

1991）、それを『至宝』が引き継ぐ。報告編でもこれらの型式を踏襲したため、軒丸瓦同様ここでは『一覧』や『至宝』で意図されていた分類基準を改めて明確にしておく。

『至宝』において、法隆寺飛鳥時代の軒平瓦は、主に瓦当文様（唐草文に関しては施文方法、葉数、唐草の流れる向き等）に基づき大きく12型式に分けられている。

201型式：４重弧文。

205型式：手彫り（型紙使用[8]）７葉左偏行唐草文。

206型式：手彫り（型紙使用）７葉右偏行唐草文。

207型式：手彫り（型紙使用）７葉右偏行・蕾付き唐草文。

208型式：手彫り（型紙不使用）４葉、５葉左偏行唐草文。瓦当面と凹面が鈍角。

209型式：手彫り（型紙不使用）４葉もしくは５葉右偏行唐草文。瓦当面と凹面が鈍角。

210型式：手彫り（型紙不使用）５葉左偏行唐草文。瓦当面と凹面が鋭角。

211型式：手彫り（型紙不使用）不明葉左偏行唐草文。唐草の蔓が２重。

213型式：型押し５葉唐草文。

214型式：軒丸瓦33Ａ笵型押し。

215型式：瓦笵使用均整唐草文。

305型式：手彫り（型紙不使用）７・８葉混在左偏行唐草文。

次に、各型式の細分に話を進める[9]。この細分は、挽き型、型紙、笵の個体識別と同義であるが、型紙不使用型式については施文がフリーハンドであるため、完全に一致する文様はない。そのため、近似する文様特徴を持つものを同一型式にまとめている。

201型式－201 A：挽き型イ（凹線断面がＶ字形）。

201 B：挽き型ロ（凹線底面が平坦）。

201 C：挽き型ハ（凹線底面が平坦で、挽き型ロよりも幅が狭い）。

201 D：挽き型ニ（凹線底面がＵ字形）。

201 E：挽き型ホ（凹線底面がＵ字形で、挽き型ニよりも幅が広い）。

205型式－205 A：型紙α（左端の唐草文が上向き）。

205 B：型紙β（左端の唐草文が下向きか[10]）。

206型式－206 A：型紙ａ。

206 B：型紙ａを右に１単位ずらして施文。脇を広く開ける。

206 C：型紙ｂ（脇を広く開ける）。

206 D：型紙ｃ（唐草文周囲の彫り込み幅が狭い）。

207型式－207 A

208型式－208 B：４・５葉唐草文。

208 D：４葉唐草文か。唐草文中央窪みが爪形。

208 E：４葉唐草文か。瓦当左端に下向き唐草文が半分。

208 F：４・５葉唐草文か。瓦当左端に上向き唐草文が半分。

209型式－209 A：４葉か５葉唐草文。

209B　：４・５葉混在唐草文。

210型式－210A　：５葉唐草文。

210B　：４・５葉混在唐草文。

211型式－211A

213型式－213Aa　：唐草蔓の結節が１つ。

213Ab　：Ａａの彫りなおし。

213B　：唐草蔓の結節が２つ。

213C　：唐草文が細身。

214型式－214A　：弁が下向き。

214B　：弁が上向き。

215型式－215A

各型式概説

以上の型式分類を踏まえ、軒平瓦各型式の特徴について記述する。法隆寺飛鳥時代の軒平瓦11型式28種類のうち、今回の発掘調査で出土したのは10型式13種類である。以下、本調査で出土した型式に限って話を進めるが、各型式の出土数が非常に少ないため、寺蔵品・防災資料によって補足する。

206A　７点出土。直線顎。瓦当面と凹面のなす角度が鋭角。粘土板桶巻作りで（寺蔵品に粘土板合わせ目を残すものあり）、分割後施文と考えられる。ヘラケズリにより、タタキメや布目圧痕をほとんどとどめない。色調は灰色と黄橙色～灰黄色のものがある。焼成は前者が堅緻で後者が軟質。

206B　１点出土。直線顎。瓦当面と凹面のなす角度が鋭角。粘土板桶巻

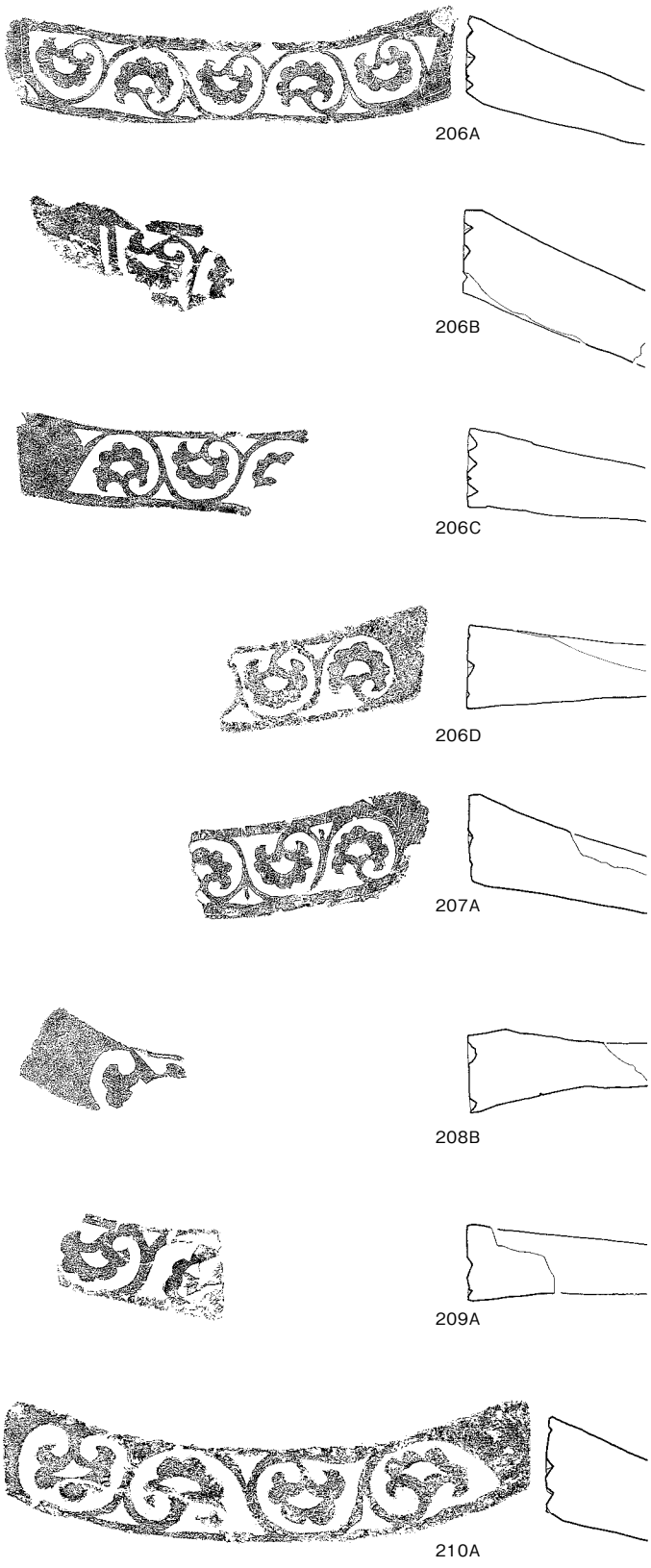


Fig. 160　若草伽藍跡出土軒平瓦型式１（１：５）

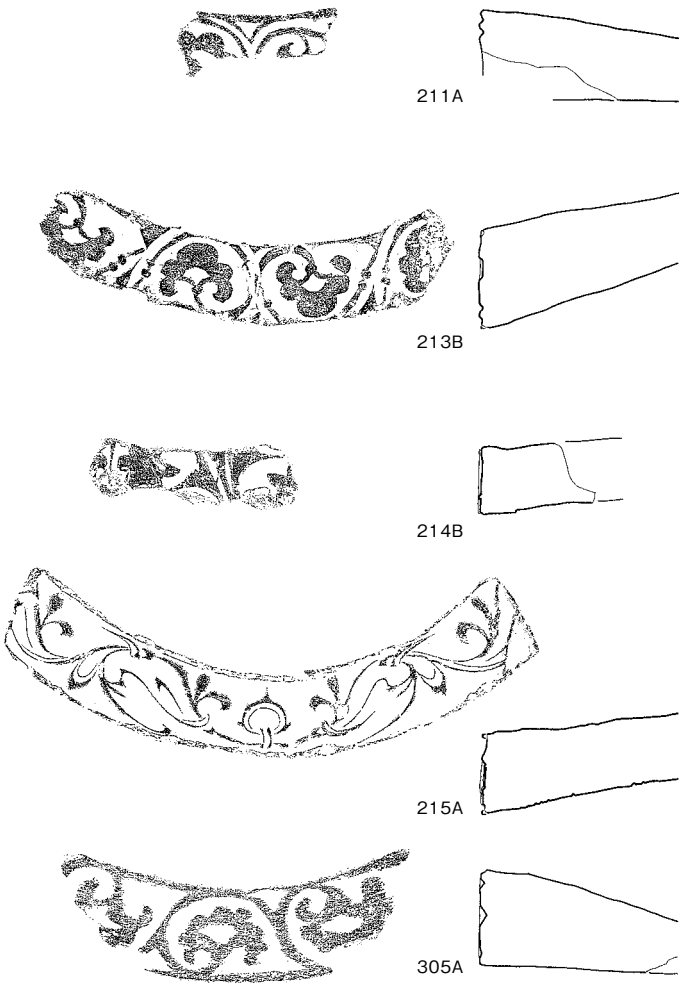


Fig. 161　若草伽藍跡出土軒平瓦型式２（１：５）

作りで（分割截線を残すものあり）、分割後施文と考えられる。ヘラケズリにより、タタキメや布目圧痕をほとんどとどめない。色調は灰色～にぶい橙色。焼成は良好。

206 C　２点出土。直線顎。瓦当面と凹面のなす角度が鋭角。粘土板桶巻作りで（粘土板合わせ目をもつものあり）、分割後施文と考えられる。ヘラケズリにより、タタキメや布目圧痕をほとんどとどめない。色調は灰色。焼成は堅緻。

206 D　2点出土（このほか、206で種類まで特定できないものが１点、206もしくは207の可能性のあるものが１点）。直線顎。瓦当面と凹面のなす角度が鋭角。粘土板桶巻作りで（粘土板合わせ目をもつものあり）、分割後施文と考えられる。ヘラケズリにより、タタキメや布目圧痕をほとんどとどめない。色調は灰色～灰黄色。焼成は軟質。

207 A　２点出土。直線顎。瓦当面と凹面のなす角度が鋭角。分割後施文と考えられる。ヘラケズリにより、タタキメや布目圧痕をほとんどとどめない。色調は淡褐色～灰白色。焼成は良好～やや軟質。

208 B　１点出土（このほか、208の可能性のあるものが３点）。屈折した直線顎。瓦当面と凹面が鈍角。粘土板桶巻（凹面に枠板痕、粘土板合わせ目をもつものあり）で、分割後施文か。凹面の瓦当近くのみをヘラケズリ。凸面はナデ調整の後、顎面にヘラケズリ。側面はヘラケズリ調整。色調は灰色。焼成は堅緻。

209 A　１点出土（このほか、209で種類まで特定できないものが１点）。屈折した直線顎。瓦当面と凹面が鈍角。分割後施文か。凹面の瓦当近くのみをヘラケズリする。凸面はナデ調整の後、顎面にヘラケズリ。側面はヘラケズリ調整。色調は暗灰色。焼成は良好。

210 A　１点出土（このほか、210で種類まで特定できないものが１点、210の可能性が高いものが１点）。直線顎。瓦当面が凹面に対し鋭角。分割前施文と考えられる。ヘラケズリにより、タタキメや布目圧痕をほとんどとどめない。色調は灰色。焼成はやや軟質。

211 A　211Aの可能性の高いものが１点出土。直線顎。瓦当面が凹面に対し鋭角。施文のタイミングは不明。ヘラケズリにより、タタキメや布目圧痕をほとんどとどめない。色調は灰色。焼成は堅緻。

213 B　３点出土。直線顎。瓦当面が凹面に対し鈍角。粘土板桶巻作りで（粘土板合わせ目を残すものあり）、分割前施文と考えられる。瓦当近くのみヘラケズリ。色調は灰白色～にぶい黄橙色。焼成はやや軟質。

214 B　１点出土。直線顎。瓦当面が凹面に対し直角に近い。粘土板桶巻作りで（防災資料に枠板痕を残すものあり）、分割前施文と考えられる。瓦当近くのみヘラケズリ。色調は灰色。焼成は良好。

215 A　１点出土。瓦当面が凹面に対し鈍角。粘土板桶巻作りで（粘土板合わせ目を残すものあり）、分割前施文と考えられる。色調は灰白色。焼成はやや軟質。大型品と小型品があり、笵傷から大型品が古いとされる。若草伽藍跡では大型品のみが出土した。

305 A　305Ａの可能性の高いものが１点出土。直線顎。瓦当面が凹面に対し鋭角。分割前施文と考えられる。ヘラケズリにより、タタキメや布目圧痕をほとんどとどめない。色調は灰色～にぶい橙色。焼成は軟質。

以上、型式ごとに特徴を述べたが、次に型式間で共有される特徴についてまとめておきたい。

まず、製作方法について。大部分の型式が粘土板桶巻作りで製作されたとみられる痕跡を有する。したがって、いずれの型式も粘土板桶巻作りによるとみてよいだろう(11)。しかし、そのありかたは一様でなく、４パターンに分けられる。206・207・210・211・305は瓦当面が凹面に対し鋭角で、緩やかな直線顎をもつという特徴を備える。このことから、円錐台形の桶に一端の厚い粘土板を、厚い方、すなわち瓦当が上端に来るように巻き付け、分割後に両側縁を瓦当が広端になるように切り縮めた可能性がある。208・209は瓦当面が凹面に対し鈍角で、粘土貼り足しによる屈折した直線顎をもつという特徴を備える。このことから、円錐台形の桶に厚さの均一な粘土板を巻き付け、桶の下端に粘土を貼り足して瓦当をつくりだした可能性がある。213・215は瓦当面が凹面に対し鈍角で、緩やかな直線顎をもつという特徴を備える。このことから、円錐台形の桶に一端の厚い粘土板を、厚い方が下端に来るように巻き付けた可能性がある。214は瓦当面と凹面とがほぼ直角で、瓦当から狭端までほぼ同じ厚みをもつという特徴を備える。このことから、円筒形の桶に厚さの均一な粘土板を巻き付けた可能性がある。次に、施文のタイミングについてみると、206・207・208・209・210・211・305、すなわち手彫りのものは分割後施文の可能性が高く(12)、213・214・215、すなわち型押し、瓦笵使用のものは分割前施文の可能性が高い。

次に、製作方法以外の諸特徴について。調整をみると、206・207・210・211・305は瓦の全面をタテ方向にヘラケズリ、瓦当付近をヨコ方向にヘラケズリし、布目圧痕や枠板痕跡が残らない。208・209・213・214・215は、凹面の瓦当付近のみをヨコ方向にヘラケズリし、布目圧痕をほとんど残す例が多い(13)。凸面はナデ調整ののち、瓦当付近のみヨコ方向にヘラケズリする。法量については破片資料が多いため、瓦当厚しか取り上げることができないが、208・209・215（大）の５cm前後が最小厚で、206・207・210・305は６cm前後にまとまりをもち、213の６．８cmが最大厚である。

以上、若草伽藍出土軒平瓦全型式の諸特徴を詳述した。従来の見解（花谷・佐川1991）通り、粘土板を桶に巻き付ける方法には４パターンある可能性を提示したが、これらのパターンは、瓦当が桶の上端に来る（206・207・210・211・305）か、下端に来る（208・209・213・214・215）かの２通りに大別でき、この違いは非常に大きいといえる。瓦当を桶の上端に向けて巻き付ける方法は、あと

で両側縁を切り縮めることになり、比較的手間がかかる。また、調整については、全面にヘラケズリを施すもの（206・207・210・211・305）と、瓦当付近にのみヘラケズリを施すもの（208・209・213・214・215）に分けられる。この違いは、桶に粘土板を巻いたときの瓦当の向きの違いに対応し、やはり前者の方が手間がかかることから、前者から後者へ変化したと考えるのが妥当である。

従来、軒平瓦の瓦当文様は、型紙を使用するもの（手彫りＡ－205～207）、型紙不使用で5・6葉か8葉の唐草文をもつもの（手彫りＢⅠ－210・211・305）、型紙不使用で4・5葉の唐草文をもつもの（手彫りＢⅡ－208・209）、型押しのもの（213・214）、瓦笵を使用するもの（215）、のようにグルーピングされてきた。桶巻の上下方向と調整にみる2分類は、「手彫りＡ・手彫りＢⅠ」と「手彫りＢⅡ・型押し・瓦笵使用」という文様分類に対応する。瓦笵を使用する軒平瓦が後出することは明らかで、若草伽藍の軒平瓦は、製作技術的な面からみても、瓦当文様の施文方法からみても、簡略化という流れをみてとることができる。さらに、手彫りと型･瓦笵使用の間には大きな画期があるといえ(14)、「手彫りＡ･手彫りＢⅠ」→「手彫りＢⅡ」→「型押し･瓦笵使用」のように、変遷を細分することができる。

分　布

今回の調査で出土した型式の分布状況を示した（Fig.162～165）。従来、若草伽藍所用の軒丸瓦・軒平瓦のセット関係、年代、使用建物については、若草伽藍の発掘調査成果のみならず、他の寺院の瓦との同笵関係や移動なども考慮されてきた。ところが、若草伽藍の調査成果が詳細に公表されてこなかったことが影響してか、セット関係や年代等の決定にあたり、どの事実が根拠となっているか不明瞭な部分もある。ここではセット関係や年代、使用建物について、今回の調査成果から明らかにしうる範囲を明確にしておきたいと思う。

まず、セット関係とその年代について述べたい。飛鳥時代の瓦のみ出土し、かつ瓦以外の遺物に関しても飛鳥時代よりも新しい遺物を含まない遺構に着目すると、SD7040に限られる。SD7040からは、3Bb、3C、206Ａ・C・D、207Ａ、210Ａ型式がまとまって出土した。この溝は、金堂基壇土造成後に掘られ、第2整地土で埋めたてられているという調査成果から、出土瓦の廃棄時期は金堂創建以降塔創建以前に限定してよい。すなわち、これらの瓦は、金堂に葺かれた（もしくは、金堂に葺くために用意された）可能性が極めて高いと考えられる。また、調査区全体でSD7040出土型式の分布をみても、金堂付近に偏る。これら以外の遺構については、時期的な絞り込みは困難である。セット関係についても、一つの遺構からの出土量が少なく、推測の域を出ない。

次に、分布に偏りがみられ、使用建物がある程度絞り込めるものについて述べる。分布図をみると、3Bb、3C、4Ａが金堂、33Ａが塔寄りに比較的まとまりを持つ。傾向をみるに充分な数ではないが、可能性としてそれらの出土地点に最寄りの建物に用いられたとしておきたい。また、6Ｄについて『至宝』では6Daが塔創建瓦、6Dbが塔補修瓦とされているが、6Ｄの分布は金堂付近にも認められる。ただし、Da・Dbの別が明瞭な資料が少ないため、このように分布する意味を具体的に解釈できない。また、軒平瓦については出土点数が少なく、分布から使用建物を絞り込むことが難しい。

これら以外の型式の年代については、他の寺院の瓦との同笵関係や類例の模索によって絞り込むしかない。そして、使用建物の比定についても、他の寺院の瓦等を用いて絞り込んだ各型式の年代を、若

草伽藍の各建物の創建年代に当てはめることでおこなうのが、現時点ではほぼ唯一の方策である。また、セット関係については、共伴関係や分布の偏り、出土数的にみて優勢な型式から推し量ることができない。軒丸瓦は３・４型式→６型式→７・33型式、軒平瓦は206・207・210・211・305型式→208・209型式→213・214・215型式という変遷をたどるが、この軒丸･軒平双方の変遷をかみ合わせ、セット関係を導き出すには、若草伽藍跡出土瓦以外の資料・史料を手がかりとしなければならない。本章第３節を参照願いたい。

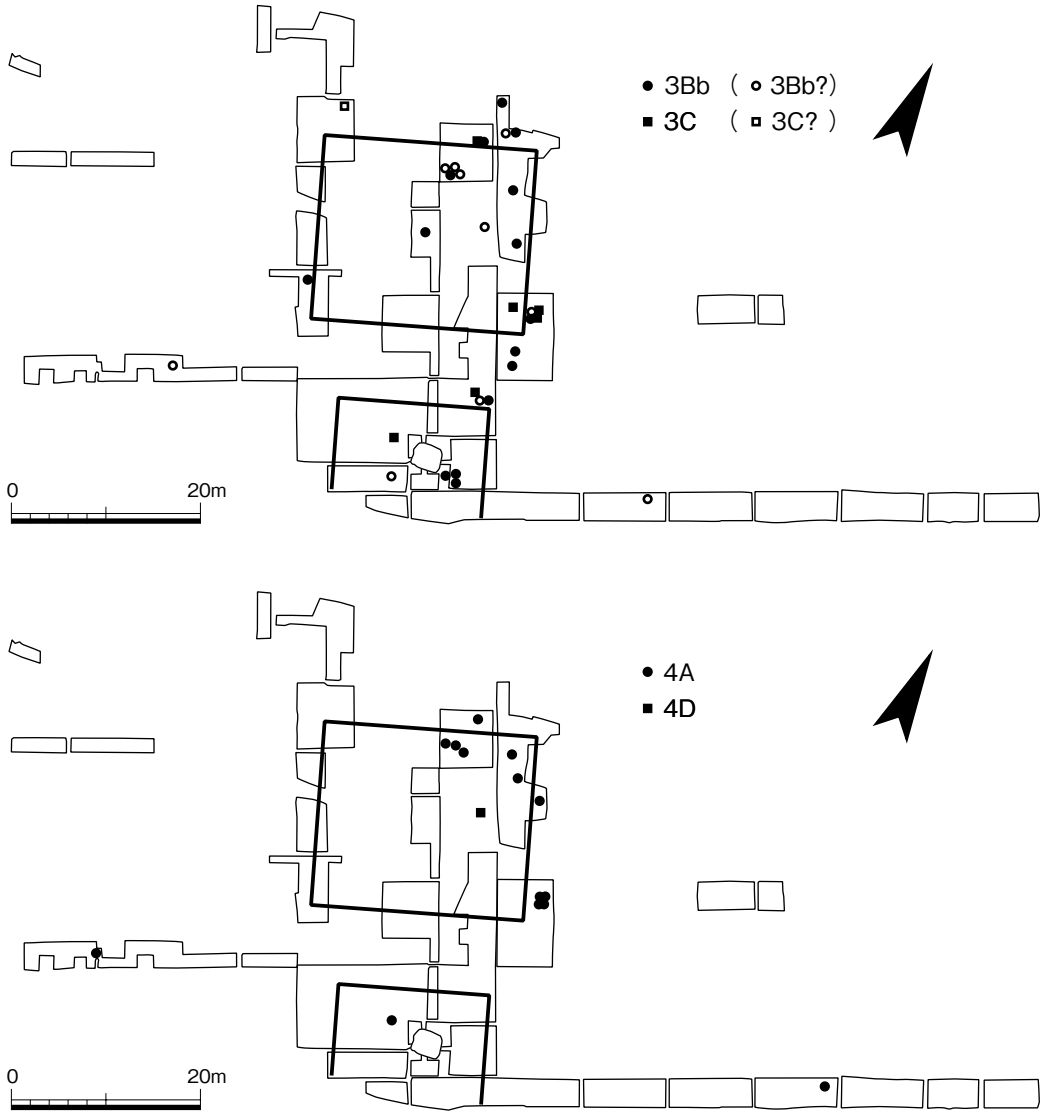


Fig. 162　軒丸瓦出土分布図１

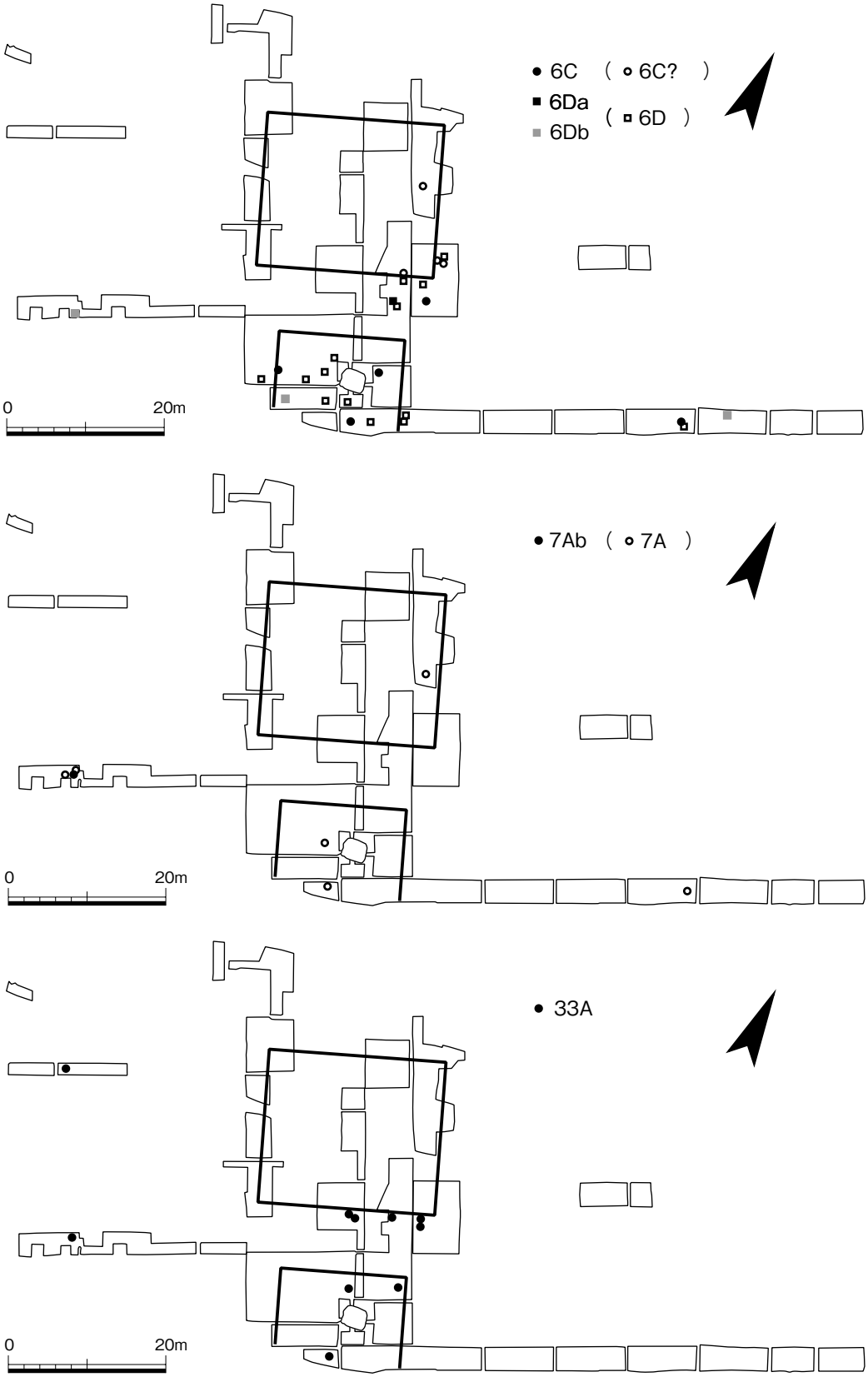


Fig. 163　軒丸瓦出土分布図 2

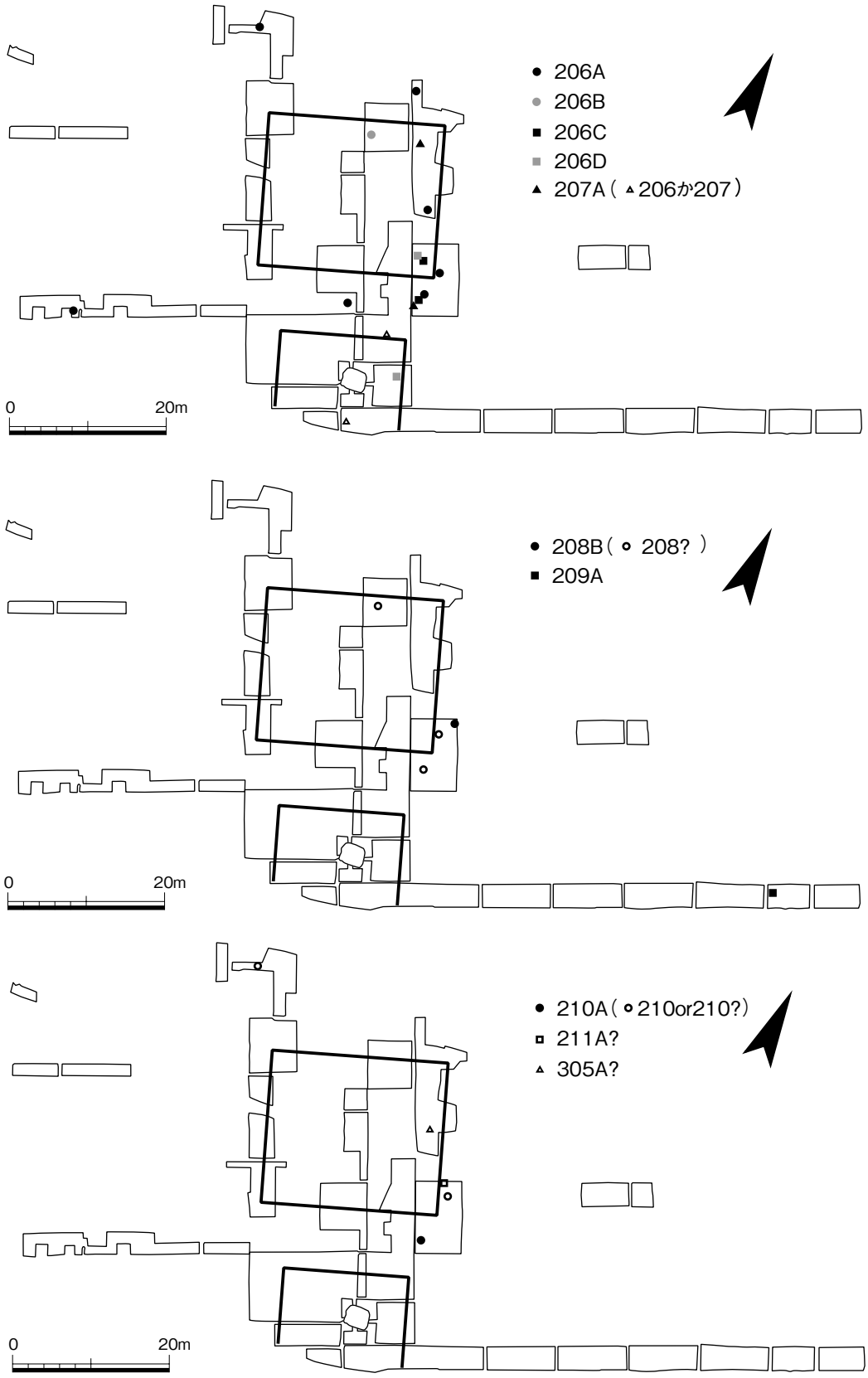


Fig. 164　軒平瓦出土分布図 1

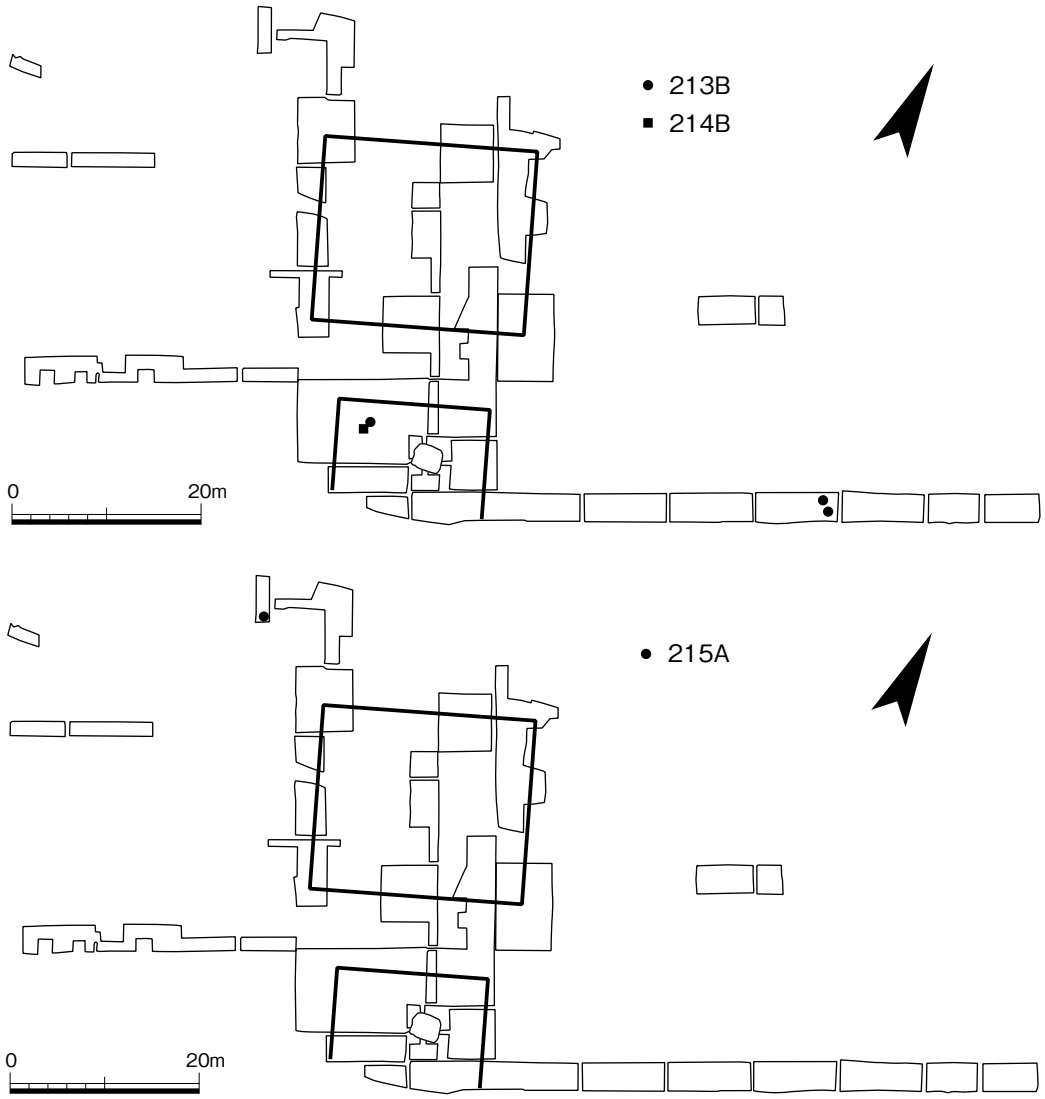


Fig. 165　軒平瓦出土分布図２

軒瓦にみる「焼亡」の痕跡

『日本書紀』天智天皇九年条の「夏四月癸卯朔壬申、夜半之後災法隆寺、一屋無餘、大雨来震」という記事が、法隆寺若草伽藍の焼亡の証左であると指摘されて久しい（詳細は本章第４節参照）。石田茂作は若草伽藍跡の発掘調査によって、伽藍中枢の配置を解明し、出土瓦の年代を飛鳥時代に比定したが、その際、出土瓦に「赤色焼瓦の混ずる事によって、嘗て火災に遭遇してゐる事も察しめる」（石田1941）と述べている。『日本書紀』の罹災記事と結び付く可能性のある遺物が、その時点で初めて出土したことになる。

さて、本調査における出土瓦についてはどうであろうか。石田の述べる「赤色焼瓦」という瓦が具体的にどのような状態の瓦を指すのか知り得ないが、今回の調査において明瞭な被熱痕跡のある軒瓦は１点も存在しなかった。これは丸瓦･平瓦についても同様の状況である(15)。「赤色」部分にのみ注目すると、それに近い橙色の色調を呈する軒瓦が若干存在するが、2004年におこなわれた若草伽藍跡西方の発掘

調査で出土した「溶けた金属や土などが付着した瓦や、火にかかって発泡して軽くなった瓦」(斑鳩町・斑鳩町教育員会2004)のようなものであるとはいえない。

今回のような伽藍中枢部の発掘調査において、被熱した痕跡を残す瓦が出土しなかったとはいえ、若草伽藍焼亡の痕跡は今後も探し求めていく必要があるだろう。

おわりに

本節は、若草伽藍跡出土軒瓦を報告するにあたって必要な型式とその分類基準を再整理した上で、諸特徴をまとめなおしたものに過ぎない。軒丸瓦の接合方法については、若干詳細な分類を試みたが、先行研究がベースにあることに間違いない。これは報告編を読む際の手引きとして位置づけていただければ幸いである。しかし、軒瓦の出土点数や、分布データを提示したことで、若草伽藍の軒瓦について、発掘調査から言及できる範囲を明確にすることができたと思う。また、年代観について、出土資料から述べられる限界を示すことができたと思う。これまでは、調査報告よりも研究が先行するという、本来あるべき姿とは順序が逆の状態であったが、今後はここに示した基礎データを元に研究がさらに深化することを願う。

注

⑴ 概報の段階でも、簡単な分類がなされている（文化庁1968・1969）。

⑵ 若草伽藍の瓦は、体系的な型式分類が提示される前に型式名称が定着してしまったため、説明的にならざるをえないのだろう。花谷浩は、2000年に再度型式分類の整理をおこなっている（花谷2000）。

⑶ 蓮弁の枚数、形状は、笵の上での文様の割り付け方に由来する重要な属性と考える。一方で、中房の形状・大きさや蓮子の数などは、工人の作意により比較的容易に変化しうるし、彫り直しによって後々変更も可能であるため、分類基準には採用しがたい。

⑷ ３Ａという細分類は奈良国立文化財研究所1983『一覧』で設定されておらず、その後も使用されていない。

⑸ ８型式にはＡ・Ｂあり、いずれも法輪寺所用であるが、Ｂのみ若草伽藍跡で出土。

⑹ 今回出土していない２Ａと８Ｂに関しては、２Ａは防災資料に、接合方法楔形ａで、支持ナデツケが施され、キザミのみられないものがある。８Ｂは寺蔵品に接合方法楔形ｂで、キザミのみられるものがある。

⑺ 全ての資料に回転ナデ、もしくは同心円状の凹凸がみとめられるわけではない。不定方向ナデによって消されている可能性もあるため、慎重を期した。

⑻ 松下正司は、「切り抜きの型紙状のものを使用」、「軟質な皮革等であったことが推測できる」とするが（松下1972）、すでに多くの研究で用いられている語であるため、本稿でも「型紙」という語を踏襲する。

⑼ 挽き型イや型紙α等の名称は、今回便宜的に用いるものである。

⑽ 破片資料しかないため推測にとどまる。

⑾ 製作方法が不明であるのは、いずれも残りや表面の状態が良好でないことが影響している。

⑿ 208・209に関しては、施文の時点で瓦当幅が決まっていたとしかわからない。施文が分割前か分割後かは決め手となる資料を欠く（花谷・佐川1991）。

⒀ 215Ａ小型品は全面ヘラケズリを施す。

⑭　手彫りＡ（型紙使用）と手彫りＢ（型紙不使用）との間に、手彫りＢＩから型（スタンプ）・瓦笵使用への変化ほどの画期、すなわちタイムラグを認めるべきか、難しい。実際にSD 7040でＡとＢＩが共伴しており、両方とも金堂に使用された（または、使用するために用意された）と考えられる。

⑮　KI62瓦溜で二次的に被熱したとみられる焼け膨れた瓦片がわずかに出土しているが、時期は明確でない（第Ⅱ章p. 76参照）。

参考文献

斑鳩町・斑鳩町教育委員会　2004　「若草伽藍跡西方の調査　現地説明会資料」

石田茂作　1941「法隆寺若草伽藍址の発掘に就て」『日本上代文化の研究』法相宗勧学院同窓会

木村捷三郎　1969　「平安中期の瓦についての私見」『延喜天暦時代の研究』

近藤喬一　1982　「瓦の笵と瓦当」『考古学論考』平凡社

奈良国立文化財研究所　1983　『南都七大寺出土軒瓦型式一覧（１）法隆寺』

花谷　浩　1987　「飛鳥～奈良時代の軒丸瓦について－法隆寺出土古瓦の調査速報（１）」『伊珂留我』法隆寺昭和資財帳調査概報７　法隆寺昭和資財帳編纂所（編）小学館

花谷　浩　2000　「斑鳩寺・四天王寺の創建瓦と高句麗系軒瓦」『古代瓦研究Ⅰ』奈良国立文化財研究所

花谷浩・佐川正敏　1991　「飛鳥・白鳳の軒平瓦について－法隆寺出土古瓦の調査速報（３）」『伊珂留我』法隆寺昭和資財帳調査概報13　法隆寺昭和資財帳編纂所（編）小学館

文 化 庁　1968　『法隆寺若草伽藍跡昭和43年度発掘調査概報』

文 化 庁　1969　『法隆寺若草伽藍跡昭和44年度発掘調査概報』

法 隆 寺　1985　『法隆寺防災施設工事発掘調査報告書』

法隆寺昭和資財帳編集委員会　1992　『昭和資財帳第15巻　法隆寺の至宝　瓦』小学館

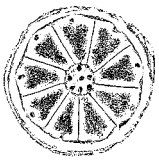
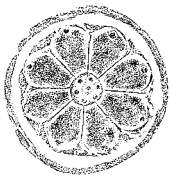
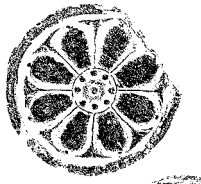
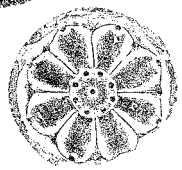
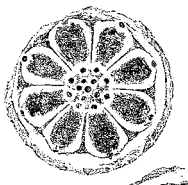
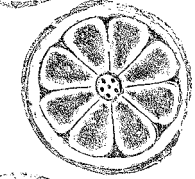
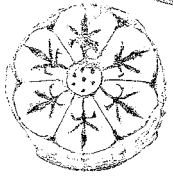
松下正司　1972　「手彫り唐草文瓦について」『奈良国立文化財研究所年報1972』

森　郁夫　1983　「若草伽藍の瓦」『法隆寺発掘調査概報Ⅱ』法隆寺

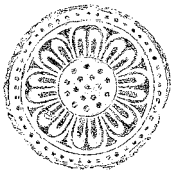
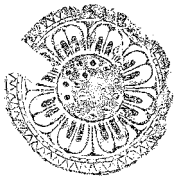
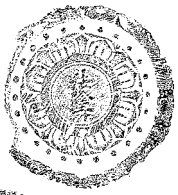
森　郁夫　1984　「若草伽藍創建の瓦」『伊珂留我』法隆寺昭和資財帳調査概報２　法隆寺昭和資財帳編纂所（編）小学館

毛利光俊彦　1990　「軒丸瓦の製作技術に関する考察－笵型と枷型－」『畿内と東国の瓦』京都国立博物館

Tab. 17－1　若草伽藍跡出土軒丸瓦型式一覧1

型式		直径（㎜）	内区				外区				
			中房径（㎜）	蓮子数「文字」	弁区径（㎜）	文様	広（㎜）	内縁		外縁	
								幅（㎜）	文様	高（㎜）	文様
3Bb		156	34	1＋6	135	T9	10	－	－	5	－
3C		166	35	1＋6	144	T9	11	－	－	5	－
4A		170	36	1＋6	143	T8	14	－	－	5	－
4D		160	30	1＋?	132	T10	14	－	－	4	－
6C		178	41	1＋8	149	T8	15	－	－	9	－
6Da		173	49	1＋8	148	T8	12	－	－	10	－
6Db		169	50	1＋5＋8	152	T8	13	－	－	10	－
7Ab		188	33	1＋5	154	T8	12	－	－	4	－
33A		184	43	1＋6	154	T6	15	8	－	14	－

Tab. 17－2　若草伽藍跡出土軒丸瓦型式一覧２

型式		直径（㎜）	内区				外区				
			中房径（㎜）	蓮子数「文字」	弁区径（㎜）	文様	広（㎜）	内縁		外縁	
								幅（㎜）	文様	高（㎜）	文様
37C		165	63	1＋7＋11	136	F8	15	9	LV 47	5	K1
37Db		173	62	1＋6＋10	137	F 8	18	13	S48	2	－
48A		(182)	48	1＋（6）	104	F (8)	38	14	S16	3	－
53A		(175)	73	1＋6＋11	146	F8	16	5	S	2	LV
54Ba		153	41	1＋8	100	F8	25	15	S16	9	LV30
67B		184	86	「法隆寺」	128	F8	28	12	S	13	－
72A		172	100	－	－	「法隆衆」	36	15	S28	12	－
89V		134	－	－	－	3左巴	32	16	S16	7	－
89X		142	－	－	－	3左巴	33	14	S14	5	－

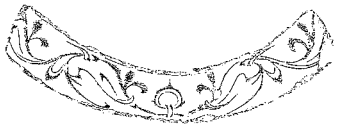
Tab. 17－3　若草伽藍跡出土軒丸瓦型式一覧3

型式		直径（㎜）	内区				外区				
			中房径（㎜）	蓮子数「文字」	弁区径（㎜）	文様	広（㎜）	内縁		外縁	
								幅（㎜）	文様	高（㎜）	文様
90A		139	－	－	－	3左巴	27	12	S17	10	－
91F		145	－	－	－	3左巴	35	15	S18	7	－
91Y		156	－	－	－	3左巴	33	12	S12	5	－
96I		160	－	－	－	3左巴	38	13	S16	10	－
96X		156	－	－	－	3左巴	34	14	S16	11	－
97D		144	－	－	－	3左巴	20	11	S20	9	－
19F		82	9	－	60	K14	10	－	－	17	－

T＝単弁蓮華文　F＝複弁蓮華文　K＝菊花文　S＝珠文　K＝圏線・界圏　LV＝凸線鋸歯文

（数字）は復原値

Tab. 18－1　若草伽藍跡出土軒平瓦型式一覧１

型式		瓦当部					狭端幅（㎜）	全長（㎜）	顎
		上弦幅（㎜）	下弦幅（㎜）	厚さ（㎜）	弧深（㎜）	内区文様			
206 A		312	300	62	25	ＨＮＫ （手彫り ７葉 ５単位 右偏行）	－	305	直線
206 B		－	－	(56)	－	ＨＮＫ （手彫り ７葉 ４単位？ 右偏行）	－	－	直線
206 C		－	－	53	－	ＨＮＫ （手彫り ７葉 ４単位？ 右偏行）	－	－	直線
206 D		－	－	57	－	ＨＮＫ （手彫り ７葉 ５単位？ 右偏行）	－	－	直線
207 A		－	－	61	－	ＨＮＫ （手彫り ７葉 ５単位？ 右偏行）	－	－	直線
208 B		－	－	52	－	ＨＮＫ （手彫り ４か５葉 単位数不明 左偏行）	－	－	直線
209 A		－	－	(50)	－	ＨＮＫ （手彫り ５葉 単位数不明 右偏行）	－	－	直線
210 A		354	359	64	42	ＨＮＫ （手彫り ５葉 ４単位 左偏行）	－	－	直線
211 A		－	－	－	－	ＨＮＫ （手彫り ５か６葉 単位数不明 左偏行）	－	－	直線
213 B		－	－	68	－	ＨＮＫ （型押し ５葉 単位数不明）	－	－	直線
214 B		－	－	－	－	ＫＮＫ （軒丸瓦３３Ａ 笵型押し）	－	－	直線
215 A		241	256	45	43	ＫＮＫ	－	－	直線
305 A		－	－	61	－	ＨＮＫ （手彫り ８葉 ４単位 左偏行）	－	－	直線

Tab. 18－2　若草伽藍跡出土軒平瓦型式一覧２

型式		瓦当部								狭端幅（㎜）	全長（㎜）	顎
		上弦幅（㎜）	下弦幅（㎜）	厚さ（㎜）	弧深（㎜）	内区文様	上外区 厚さ（㎜）	上外区 文様	下外区 厚さ（㎜）			
204 C		240	235	48	40	剣頭文	13	－	12	228	278	段
216 C		293	323	55	61	KNK	6	－	8	－	－	直線
217 Bb		(275)	(280)	53	35	KNK	12	－	9	－	－	曲線
229 B		294	297	54	54	HK	13	S20	14	－	－	直線段
240 Aa		280	290	51	62	KK	9	S (35)	13	－	－	直線
240 A b		256	283	60	60	KK	13	S (33)	19	－	－	直線段
242 A		260	282	57	45	KK	17	S13	13	－	355	直線
246 A		255	250	46	47	KK	15	S5	11	244	358	曲線段
255 A		261	266	57	45	KK	16	－	9	236	331	段

Tab. 18－3　若草伽藍跡出土軒平瓦型式一覧３

型式		瓦当部								狭端幅（㎜）	全長（㎜）	顎
		上弦幅（㎜）	下弦幅（㎜）	厚さ（㎜）	弧深（㎜）	内区文様	上外区		下外区			
							厚さ（㎜）	文様	厚さ（㎜）			
262Ｂ		246	245	36	25	ＫＫ	8	－	7	230	262	段
266Ａ		218	221	40	32	宝珠ＫＫ	11	－	8	202	278	段
284Ｂ		－	－	40	－	橘ＫＫ	7	－	8	－	－	段
284Ｃ		240	236	38	23	ＫＫ	9	－	7	229	269	段
292Ａ		258	272	67	44	「隆法寺」	18	－	12	245	346	段

ＨＮＫ＝偏行忍冬唐草文　ＫＮＫ＝均整忍冬唐草文　ＨＫ＝偏行唐草文　ＫＫ＝均整唐草文

（数字）は復原値

2　若草伽藍の丸瓦・平瓦

今井　晃樹

金堂基壇掘込地業東側で検出されたSD７040は、金堂の基壇土造成にともなう排水溝であり、第２整地土で埋め立てられていることから、この遺構から出土した瓦は金堂造営時にさかのぼる遺物となる。金堂は610年ごろまでには完成しているとすれば（本章第３節参照）、飛鳥時代でも早い時期に限定でき、『至宝』でいう飛鳥前期にあたる。本節では、こうした一括資料を分析し、若草伽藍創建期の丸瓦・平瓦の製作技法、調整法などをあらためて整理しておきたい。

以下の記述はSD７040から出土した丸瓦、平瓦の特徴を中心とし、適宜、関連資料にも言及していく。

丸　瓦

製作技法

SD７040から出土した資料はすべて玉縁式で、行基式は確認できなかった。ただし、本調査区内において行基式丸瓦は少数出土している（Fig.76－８）。

資料の凹面には糸切り痕跡が多くみられ、一部には粘土板合わせ目が確認できた。合わせ方は確認できたかぎり玉縁側からみてＺ型である。一方､粘土紐の痕跡はなかった。以上から丸瓦は粘土板を杵（模骨）に巻き付けて作成している。

玉縁凹面の基部を観察すると明確な段があり、その下面の布目は筒部凹面の布目圧痕と連続している。しかし、玉縁凹面には布目がないことから、丸瓦製作時の杵は玉縁部までおよばず、筒部の高さまでの形であったことがわかる。

玉縁は筒部の狭端部に別に用意した粘土を貼り付けて製作している。凹面玉縁基部を観察すると、布目のある基部下面と筒部凹面の間には粘土を接合した際に生じたとみられる隙間があり（Fig.166－１）、玉縁が接合する位置の筒部凹面側には帯状の凹みがみられる。また、破砕した資料の断面をみると、玉縁の基部が筒部の狭端に押しつけられる形で接合されていることが観察できる（Fig.166－２）。

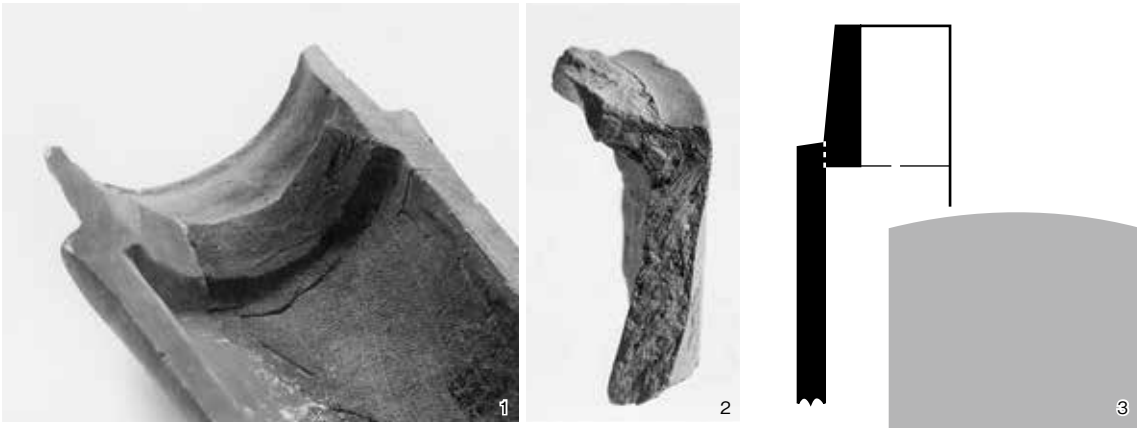
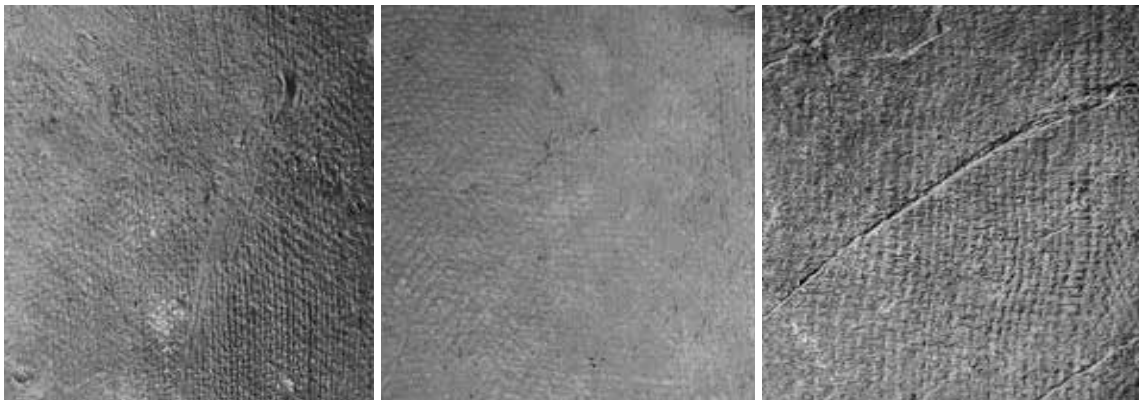


Fig.166　玉縁の接合状況（玉縁基部・断面）・玉縁接合法模式図



密　　中　　粗

Fig. 167　丸瓦凹面布目圧痕の分類（1：1）

以上の状況を総合したうえで、玉縁の製作技法を復原したのがFig.166－3の模式図である。杵に粘土板を巻き付ける際に、杵の頂部よりやや上方までの粘土板を用意し、別に用意した玉縁用の粘土を筒部の狭端に貼り付けた際に接合部がややくぼむ。玉縁部の粘土の厚みが基部の段となり、その下面に杵上面の布目が写しとられる。玉縁凸面に明確な凹凸や玉縁基部と筒部凹面の整合部に帯状の窪みがみられる資料があり、少なくともこうした特徴をもつ資料は玉縁部を粘土紐の積み上げによって作成したのであろう（『至宝』 p.357）。以下に示す法量や調整法の特徴から同一型式に属するほかの資料がすべて粘土紐積み上げによって作成されたかどうかは、ここでは判断を保留したい。

大多数の資料は破片で残存部位は筒部狭端側から玉縁にかけてである。そこで狭端内径と玉縁の長さを計測した（Tab.19）。玉縁長は5.0cm以下と5.5～5.7cm、6.2cm以上の3グループに分類できる。また、狭端内径も12.2cm、12.7～13.1cm、13.7～13.9cmに大別できそうである。複数の杵が使用されていた可能性が高い。

Fig. 168　玉縁基部のヘラケズリ調整

筒部凹面の布目は少なくとも3種ある（Fig.167）。3cm四方での糸の縦横の各本数を基準に密（36～40本）、中（31～35本）、粗（26～30本）に分類した（Tab.19）。ただし、凹面の状態は必ずしも良好ではないので同一の布袋を同定するにはいたらず、暫定的な分類である。この3種の布目と製作技法や調整技法との有意な相関関係は見いだせない。

調整技法

Fig. 169　未調整の玉縁基部

筒部凸面は全面ナデ調整で、明確なタタキの痕跡はみとめられず、一部に平行タタキの痕跡がのこるにすぎない。狭端から玉縁凹面や凸面にかけては回転ヨコナデをほどこす。粘土紐積み上げの痕跡と考えられる横方向の凹凸が玉縁凸面に残る例がある。

筒部側面は分割後に削るため、分割破面は残らない。分割界線や分割界点もみられなかった。筒部凹面側縁は面取りする。玉縁凹面は基部と側縁を幅ひろくヘラケズリ調整するところに大きな特徴がある（Fig.168）。ただし、SD7040には1点だけ、玉縁凹面基部

Tab. 19　SD 7040出土丸瓦の法量

Fig（図）	Fig（写真）	図版	分類	布目圧痕	筒部長	玉縁長	狭端内径
					(cm)		
52－10	54－10－1,54－10－2	40－10	2ＩB	中	29.1	4.5	－
52－11	54－11	40－11	2ＩB	粗	30.5	6.4	13.1
52－12	－	40－12	2ＩB	粗	－	6.3	－
52－13	－	41－13	2ＩB	粗	32.5	－	13.7
52－14	－	－	2ＩB	－	－	－	－
52－15	－	－	2ＩB	密	－	－	－
53－16	－	41－16	2ＩB	中	－	5.6	12.7
53－17	54－17	41－17	2ＩB	密	－	6.2	13.9
53－18	54－18	－	2ＩB	中	－	5.0	－
53－19	－	－	2ＩB	中	－	4.4	－
53－20	－	－	2ＩB	－	－	4.8	－
53－21	－	－	2ＩB	粗	－	5.6	12.8
53－22	54－22	－	2ＩB	粗	－	5.7	12.2
53－23	－	－	2ＩB	－	－	－	－
53－24	－	－	2ＩB	－	－	－	－
53－25	－	－	2ＩB	中	－	－	－
53－26	－	－	2ＩB	中	－	－	－

をヘラケズリ調整しない資料があった（Fig.53－18・169）。凹面広端縁は面取りをおこなう。

焼成と色調はよく焼き締まった須恵質の灰色（Hue Ｎ4／0～6／0）、やや軟質の灰色（Hue 7.5Ｙ6／1）あるいは灰白色（Hue 5Ｙ7／2、5Ｙ7／1）、軟質の褐灰色（Hue 10YR5／1）の3種がある。この焼成や色調と製作技法、調整技法は相関しない。

以上の特徴をもつ丸瓦は『至宝』の丸瓦2IB型式に相当する。ただし、SD 7040で共伴している3Cの瓦当をもつ軒丸瓦（Fig.50－2）の丸瓦部は、玉縁凹面の基部のみケズリ調整で面取りし、玉縁凹面側縁は面取りしない特徴をもつ2ＩA型式で、上述の丸瓦とはことなる。SD 7040では瓦当3Bbに対応する2IB型式の丸瓦と瓦当3Cに対応する2IA型式の丸瓦（Fig.50－2）が共存することから丸瓦の両型式は同時期に使用されたことがわかる。

2IB型式と同工の丸瓦は1956年の飛鳥寺の発掘調査（奈良国立文化財研究所1958）でも少量出土している（『至宝』pp.356～357）。軒丸瓦にみられる技法と同様に、丸瓦の製作技法においても飛鳥寺と若草伽藍とは共通点がある。

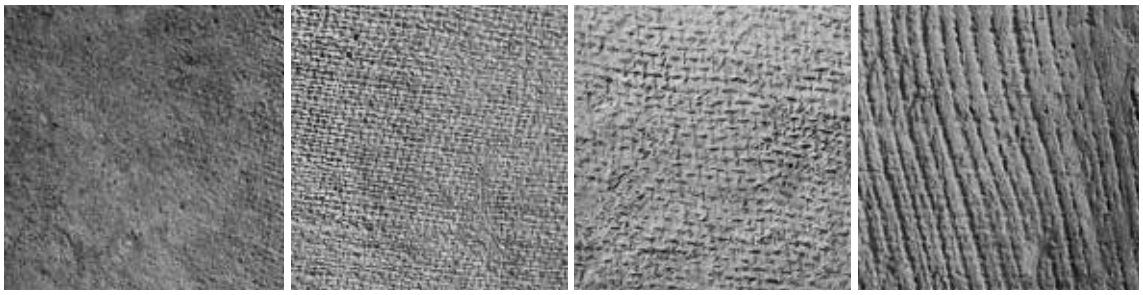
平　瓦

製作技法

SD 7040の出土品はすべて粘土板桶巻作りで、粘土板の合わせ方は桶の上方（狭端側）からみてS型とZ型の2種がある。凸面のタタキ痕跡はほとんど残らず、一部に平行タタキとおもわれる痕跡がみられるのみである。凹面の当て具痕跡はいずれもみられなかった。

凹面の状態は必ずしも良好ではないが、桶の形態を推測させる痕跡がみいだされる。桶は幅の狭い板を綴じ合わせて台形の桶を作るが、枠板の幅は一定ではない。瓦凹面の広端近くに点状の枠板綴紐の痕跡がいくつかみられたが、広端からの距離は一定せず、複数の桶があったと推測できる（Tab.20）。

凹面にみられる布目圧痕から少なくとも4種の布があったと考えられる（Fig.170）。3cm四方での糸の本数は密（36～40本）、中（31～35本）、粗（26～30本）、極粗（16～20本）である。しかし、



密　　中　　粗　　極粗

Fig. 170　平瓦凹面布目圧痕の分類（1：1）

布綴じ合わせ目などから布袋を同定するにはいたらなかった。また、布目と瓦の大きさや製作技法、調整技法は相関しない。

分割の際の目印は界点であり、分割界線の痕跡はみられなかった。界点の位置も一定せず、やはり複数の桶があることを推測させる（Tab. 20）。

完形品が少ないため推測の域をでないが、平瓦の大小には少なくとも2種は存在したことがわかる。小型は全長35cm前後、大型は37～39cmにおさまる（Tab. 20）。

調整技法

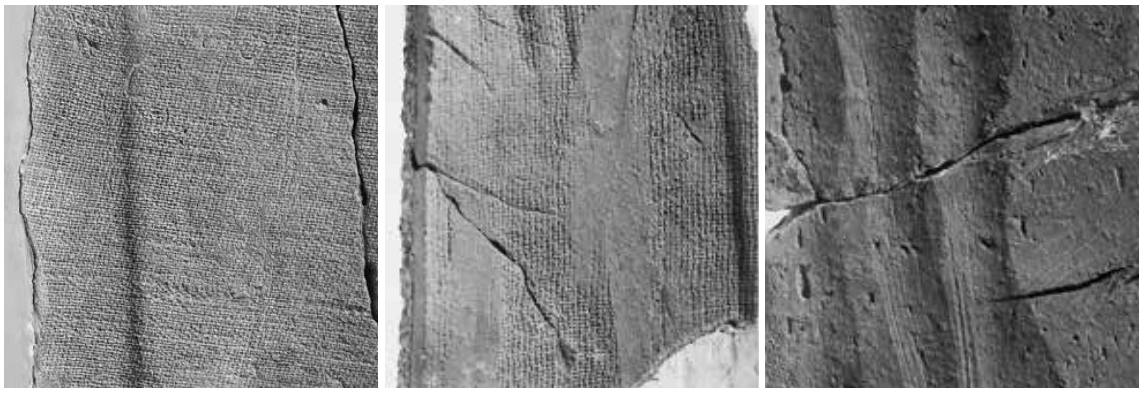
本報告ではおおむね『至宝』における平瓦の分類にしたがった。ここで『至宝』の分類を整理すると、1IA型式は台形桶を用いた粘土板桶巻作りで、凸面はタテナデ、側面は未調整、凹面未調整を特徴とし、さらに全長で400mm以上を1IAa、約350mmを1IAbに細分する。1IB型式は側面の分割破面を削る点で1IA型式と異なり、1IA型式と同様に全長で420mmを1IBa、350mmを1IBbとする。

『至宝』における型式分類の基準は文章を読むかぎり、若干の齟齬がある。1IA型式に属する平瓦1（1IAa）の説明では凸面ヨコナデとあるが、別の箇所では平瓦1、平瓦2（1IAb）とも凸面タテナデ、

Tab. 20　SD 7040出土平瓦の法量

Fig（図）	Fig（写真）	図版	分類	布目圧痕	全長	狭端幅	広端幅	界　点（cm）				枠板綴紐
					(cm)			狭左	狭右	広左	広右	広端から（cm）
55－27	－	42－27	1IA1類	極粗	35.7	23.3+	31.7	6.7	4.5	－	－	－
56－28	－	42－28	1IA1類	極粗	37.7	26.0+	37.5	－	－	－	－	－
57－29	64－29	42－29	1IA1類	中	37.7	－	－	－	6.1	－	8.3	－
57－30	－	－	1IA1類	粗	－	－	－	－	－	－	－	－
57－31	－	－	1IA1類	粗	－	－	－	－	－	－	－	10.0
57－32	－	－	1IA1類	極粗	－	－	－	－	－	－	－	－
57－33	－	－	1IA1類	極粗	－	26.0+	－	6.5	7.0	－	－	－
58－34	64－34	43－34	1IA2類	中	37.2	28.0	32.0	6.5	－	7.5	－	－
59－35	－	43－35	1IA2類	粗	－	－	33.8	－	－	8.7	7.9	10.4
59－36	－	43－36	1IA2類	粗	34.5	22.6	－	－	－	－	5.2	7.2
60－37	－	－	1IA1類	極粗	－	－	－	－	－	－	－	－
60－38	－	－	1IA2類	極粗	－	－	－	－	－	－	－	－
60－39	－	－	1IA2類	密	－	－	－	－	－	－	－	－
60－40	－	－	1IA2類	極粗	－	－	－	9.8	－	－	－	－
60－41	－	－	1IA2類	粗	－	－	－	－	6.5	－	－	－
60－42	－	－	1IA2類	粗	－	－	－	－	－	－	－	－
60－43	－	－	1IA2類	粗	－	－	－	－	－	－	－	－
61－44	－	44－44	1IA3類	中	39.0	－	－	－	－	－	－	－
62－45	64－45	44－45	1IBb	密	37.3	27.4	31.6	－	－	－	－	－
63－46	－	－	1IBb	中	－	－	－	－	－	－	－	－
63－47	－	－	1IA3類	中	－	－	－	2.9	－	－	－	－
63－48	－	－	1IA3類	中	－	－	－	－	－	－	－	－

※界点の位置は、狭端を上にした場合の凹面からみた左右で示した。狭は狭端から、広は広端からの位置を計測した。



1類　　2類　　3類

Fig. 171　平瓦凹面調整の分類

とある（『至宝』p. 357）。瓦を実見すると凸面はタテナデなので、2点ともタテナデが正しい。1IB型式については『至宝』によると、凹凸面の調整は平瓦1・2（1IA型式）と同じ、とあるが、実物をみると、平瓦3（1IBa）は凸面ヨコナデ、平瓦4（1IBb）は凸面タテナデである。

このたびSD 7040出土の平瓦を整理した結果、1IA型式の基準を若干変更した。SD 7040出土の1IA型式に属する瓦の凹面の調整には3種類あり、これが全長400mm未満の瓦にそれぞれ認められるため、全長ではなく凹面の調整法によって未調整（1類）、一部タテナデ（2類）、強いタテナデ（3類）のように分類した（Fig. 171）。

さて、SD 7040出土の平瓦の特徴を整理してみたい。もっとも多く出土したのは1IA型式である。凸面はタテナデ、側面は未調整だが、凹面の調整には3種ある。このうち2類の部分的タテナデについて、ナデをほどこす場所は枠板の痕跡がある、やや突出した稜線部分を撫でて平らにする傾向がみとめられる。3類は凹面の半ば以上を調整するが、瓦の凹面がくぼみ、砂粒が動くほどの強いタテナデであり、一部工具を用いた痕跡もみられた。色調と焼成は丸瓦と同様に須恵質の灰色、やや軟質の灰色、軟質の褐灰色があるが、調整法と焼成や色調は相関しない。

次に1IBb型式が少数出土している。凸面タテナデ、側面は分割後、1側面の一部ないし1側面全面をケズリ調整し、もう一方の側面は未調整である。凹面は強いタテナデを施す。また、この型式は狭端縁と広端縁を明確にヨコナデする傾向があり、薄手で須恵質の灰色を呈する。

SD 7040出土品の丸瓦・平瓦の特徴をみてきた。この遺構では丸瓦、平瓦とも各2型式ずつ確認され、構成が比較的単純であることが明らかになった。先に述べた特徴は、金堂造営時の丸瓦・平瓦をしめす基準となる。金堂造営以後の丸瓦・平瓦について特定することは非常に困難であるが、最後に若草伽藍全体の丸瓦、平瓦の変遷について考えてみたい。

Tab. 21　平瓦の型式属性一覧

部位	1IA			1IB		1IC	1IVA	1IVB	1IVC
	1類	2類	3類	a	b				
凸面	タテナデ	タテナデ	タテナデ	ヨコナデ	タテナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ
側面	未調整	未調整	未調整	ケズリ	一部ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ
凹面	未調整	一部タテナデ	強いタテナデ	未調整	強いタテナデ	一部タテナデ	未調整、一部タテナデ	未調整、一部タテナデ	未調整、一部タテナデ
凹面側縁	未調整	未調整	未調整	未調整	未調整	面取り	面取り	面取り	面取り
凹面端縁	未調整	未調整	未調整	未調整	未調整	未調整	面取り	面取り	面取り
全長	−	−	−	420㎜	350㎜	−	400㎜以上	400㎜以上	400㎜未満
桶	台形桶					円筒形桶	円筒形桶	台形桶	台形桶

丸瓦・平瓦の年代観と使用状況

丸　瓦

本報告が対象とした全発掘資料をみるかぎり、SD７040から出土した２IA、２IB型式に近い特徴をもつ丸瓦はほかにみあたらず、玉縁凹面基部に紐圧痕をのこす『至宝』の２ⅡＡ型式がごく少量出土しているにすぎない（Fig.110）。この型式は西院伽藍創建時の瓦当37Ａに伴うため、その時期のものであることは動かない。若草伽藍金堂所用の２IA、２IB型式と西院伽藍創建時の２ⅡＡ、２ⅡＢ型式の間を埋める特徴をもつ丸瓦は出土資料にはなく、若草伽藍金堂より遅れて造営される塔やそれ以後の若草伽藍諸建物の丸瓦も２IBを使用した可能性が高い。２IA、２IB型式は『至宝』が想定するように、飛鳥前・中期と考えるのが妥当であろう。

飛鳥前期に属する行基式の丸瓦はSD７040からは出土しておらず、発掘地区全体からみても出土量が少ないことから、若草伽藍の中心建物、金堂、塔においては補足的な瓦として使用されたと考えられる。

平　瓦

飛鳥時代から白鳳時代前期までの平瓦について、型式とその属性をまとめたのがTab.21である。１IA、１IB型式については本報告で修正したものをあげ、１IC、１ⅣＡ～Ｃ型式については『至宝』の記載と基準資料の観察から属性を示した。

若草伽藍金堂創建期（飛鳥前期）にあたるSD７040出土の１IA型式と１IBb型式に近い特徴をもつのは１IBa、１IC型式である。１IBa型式とSD７040出土品との大きな違いは、両側面を完全にケズリ調整することと、凸面を板状工具でヨコナデする点にある。とくにこのヨコナデの特徴は後につづく白鳳時代の瓦に踏襲されていく。この２つの属性からみると、１IBa型式は創建期の１IBb型式と比較しても時間差があると考えられ、『至宝』のように飛鳥前・中期とするか、あるいは飛鳥中期と考えてもよいかもしれない。

１IBa型式と１IC型式の差は桶の形態と凹面側縁を面取りする点にある。この２型式は時間的に大きな隔たりを考えることは難しく、また、飛鳥中期に属する軒平瓦214Ａ・Ｂ型式が円筒形桶で作成されていることから、１IC型式を『至宝』の想定どおり飛鳥中期としておきたい。

本調査の出土平瓦は細片が多く瓦の表面も摩滅しているため、型式を認定することは大変困難である。しかし、そうしたなかで型式を判別できた資料のうち、１IBa型式、１IC型式の瓦をみつけることはできなかった。状況からみて、この２型式の瓦の量は大変少ないということができよう。つまり、若草伽藍中心建物の所用平瓦は１IA型式、１IBb型式であり、そのほかは補足か補修に使用されたか主要建物以外に使用された可能性が高いと考えたい。また、凸面をカキ目調整する１ⅡＡ・Ｂ、凸面にタタキメを施す１ⅢＡ・Ｂ・Ｃは『至宝』では飛鳥前期～中期と想定されているが、これらの型式も出土量はわずかで、補足的に使用されたと考える。

参考文献

奈良国立文化財研究所　1958　『飛鳥寺発掘調査報告』　奈良国立文化財研究所学報第５冊

法隆寺昭和資財帳編集委員会　1992　『昭和資材帳第15巻　法隆寺の至宝　瓦』小学館

3　若草伽藍から西院伽藍へ－年代論の再整理－

林　正憲

はじめに

本章第１・２節では若草伽藍跡出土瓦に関して、主に技術的側面から型式学的な整理をおこなってきた。それらの整理をもとにしながら、若草伽藍跡出土瓦に年代的な位置づけをおこなうのが本稿の目的である。しかしながら、1968・69年の発掘調査以降、瓦の研究も著しく進展しており、若草伽藍跡出土瓦についても既に一定の年代観が定着しつつある。なかでも、『昭和資財帳第15巻　法隆寺の至宝　瓦』（以下、『至宝』と称する）でなされた整理は現在の研究の到達点ともいえよう（法隆寺昭和資財帳編集委員会1992）。ただし、資財帳という性格もあったせいか、年代論の詳述に関してはいくぶん割愛されている部分もある。そこで本稿では、若草伽藍跡出土瓦の年代観について諸研究をひもときながら再整理をおこない、現状での年代論をやや詳細に記すことにしたい。

ところで、若草伽藍を語る際に避けて通ることができないのが西院伽藍である。論争が長く続いた法隆寺の再建・非再建論争も数々の発掘調査を経て一応の決着を見つつあるが、それらの論争に大きく寄与し続けていたのが両伽藍から出土した瓦の年代論である。そこで、今回は若草伽藍跡出土瓦の年代観に加えて、西院伽藍の年代論も再整理することによって、両者の関係をより鮮明に浮かび上がらせることにしたい。

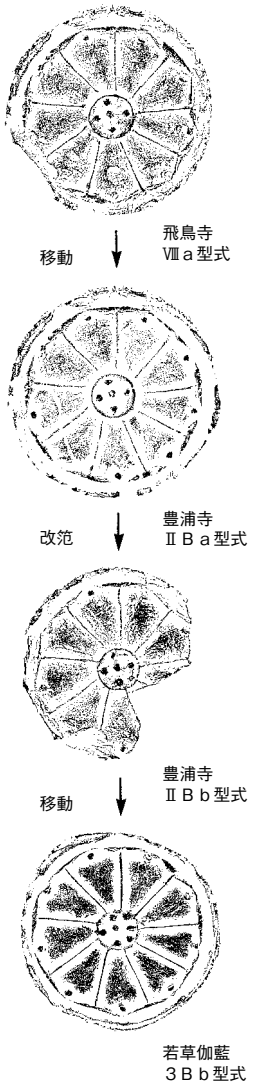


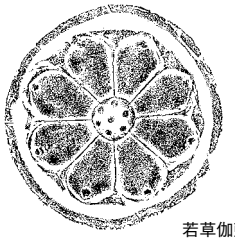
Fig. 172　３Bb型式の変遷

若草伽藍跡出土瓦の年代論

『至宝』では飛鳥時代の瓦に関して前期・中期・後期の３つに区分している（花谷1992ａ・ｂ）。具体的な年代として前期は592～622年、中期は622～643年、後期は643～670年という数値を与えている。以下ではこれらの根拠を記しつつ、かつ『至宝』以降明らかになった知見も交えながら議論を整理しておきたい[(1)]。

若草伽藍の創建年代

若草伽藍跡出土軒丸瓦の中で、最も型式学的に古相を示すのが３Bb型式である。この３Bb型式は、もともと飛鳥寺創建期に塔金堂院で用いられた瓦（Ⅷａ型式）の瓦笵が豊浦寺創建時に改笵（蓮子構成が１＋４であるⅡBa型式から１＋６であるⅡBb型式に変化する）されたのち、若草伽藍においても利用されるようになったものである。豊浦寺の創建年代の上限は、『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』に見る塔露盤銘から推古天皇四年（596）と推定される。したがって、若草伽藍の創建は必然的にそれ以降となるが、瓦笵の改修という


若草伽藍

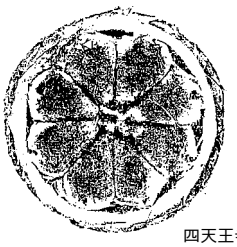

四天王寺

Fig. 173　4A型式の変遷

事実を考慮に入れると、わずかに年代を下げて考える必要があろう。そこで『日本書紀』に拠ると、若草伽藍東方域に存在していた斑鳩宮の造営が開始されるのが推古天皇九年（601）である。法隆寺の防災施設敷設に伴う発掘調査の成果では、斑鳩宮に関連する遺構の方位が若草伽藍の主軸方位と一致することが判明しており、斑鳩宮と若草伽藍が一連の計画のもとに造営されていたことがわかる（法隆寺1985）。したがって、若草伽藍の創建はほぼ601年前後といえ、これは先ほど指摘した豊浦寺創建年代との懸隔とも矛盾しない。

金堂の完成年代

若草伽藍で最初に建てられたのが金堂であることは本報告で述べたとおりであるが、その完成年代はいつ頃であろうか。ここで手がかりにしたいのが金堂所用軒丸瓦の1つである4A型式の年代である。この4A型式は若草伽藍で用いられた後、四天王寺で使用されたことが明らかとなっている。四天王寺で使用された4A型式は楠葉平野山瓦窯で須恵器と共に焼成されており、菱田哲郎はこの須恵器に610～620年という年代を与えている（菱田1986）。また、若草伽藍の金堂に安置されていたと考えられる薬師如来坐像の光背銘には「丁卯年」、すなわち推古天皇十五年（607）を示す紀年が記されていることから、金堂は607～610年頃には完成していたものと想定できる。

なお、この4A型式と組み合うと考えられる軒平瓦は、型紙を用いずに手彫りで忍冬唐草文が描かれる210・211・305型式であるが、このうち210型式が金堂東南部にあるSD7040から出土している。同じ溝からは3Bb型式やそれに組み合う206型式（型紙を用いた手彫り忍冬唐草文をもつ）が出土しており、ごく短期間の間に型紙の省略という技法変化が生じていたことがうかがえる。

塔の年代について

塔の創建開始年代に関して、『至宝』においては聖徳太子が没した622年という年代が想定されている。『至宝』ではそれ以上の細かい議論がなされていないが、純粋に瓦の年代論を議論した場合においても、概ね620年代に収まるようである。ここでは私見を交えつつ、その根拠となる瓦の年代論に関する議論の整理をおこないたい。

まず、『至宝』が中期とする622～643年の間に製作されたと考えられる瓦について、花谷浩がそれらのセット関係をまとめている（花谷1998）。なかには今回の発掘からは出土していない型式も含まれているが、議論するためには必要なので、それらについても触れつつ整理する。

①6C・Da－208・209：これらは『至宝』において塔創建時の所用瓦とされたセットである。軒丸瓦は金堂のものに比べるとかなりデザインが変化しており、技法においても新たな要素が加わっている（本章第1節参照）。軒平瓦は型紙を使わない手彫り技法だが、文様や技法においても軒丸瓦同様、新たな要素が加わっている。

②7Aa・Ab－213Aa・Ab・B：これらは『至宝』において若草伽藍北方建物所用とされたセットである。軒丸瓦は文様的にも技法的にも6型式の延長線上にあるといえよう。軒平瓦は手彫り技法から型押し技法へと変化するが、細かな製作技法に関しては手彫り技法と大差はない。

③33Ａ－215Ａ（大）：このセットは法隆寺に近接する中宮寺所用瓦である。したがって、これらは中宮寺からもちこまれた補修用の瓦と考えることができる。なお、日本で初めての瓦笵施文による軒平瓦215Ａ型式は大型品と小型品の両者があるが、33Ａと組むのは大型品である。

④33Ａ－214Ａ・Ｂ：これらは33Ａ型式の瓦笵が中宮寺よりもたらされることによって、若草伽藍所用として製作された瓦である。中宮寺出土の33Ａ型式が丸瓦先端を片枘状に加工しているのに対し、若草伽藍跡出土の33Ａ型式は丸瓦先端をナナメにけずって楔状に加工し、かつ笵傷も進行しているという特徴が認められる。なお、214Ａ・Ｂ型式は33Ａ型式の瓦笵を瓦当面に押捺することによってつくられる軒平瓦である。その際の瓦笵には若草伽藍出土の33Ａ型式と同じ笵傷が認められるため、このセットが時を同じくしてつくられたことが理解できる。

⑤2Ａ・33Ｂ－215Ａ（小）：これらはいずれも東院下層から出土する、いわゆる斑鳩宮所用のセットである。2Ａ型式は6弁蓮華文の小型軒丸瓦であり、33Ｂ型式は33Ａ型式が退化した小型品である。215Ａ型式の小型品は大型品と瓦笵を同じくするものの、瓦当面の厚さや幅が切りつめられており、笵傷からすると大型品より後出であることがわかる。

以上、5つのセットが存在するわけだが、これらは概ね①から⑤へと時間的に推移するとものと考えられる。ただし②と③に関しては、②が若草伽藍でのセットであるのに対して③が中宮寺のセットであることから、必ずしも前後関係と断定することはできず、併行関係にあった可能性も否定できない。そこで、若草伽藍跡出土と中宮寺出土の33Ａ型式の細かな技法を比較してみると、若草伽藍跡出土の33Ａ型式が7Ａ型式の延長線上に位置づけられるのに対し、中宮寺出土の33Ａ型式はむしろ6Ｃ・Ｄ型式の技法を引きずっている可能性が高い。つまり、若草伽藍では②→④へ、中宮寺では①→③へ、そして中宮寺から若草伽藍という③→④の推移が認められることから、①→②・③→④という関係が想定できる。また、③と⑤に関しても215Ａが大型品から小型品へと笵傷を進行させながら推

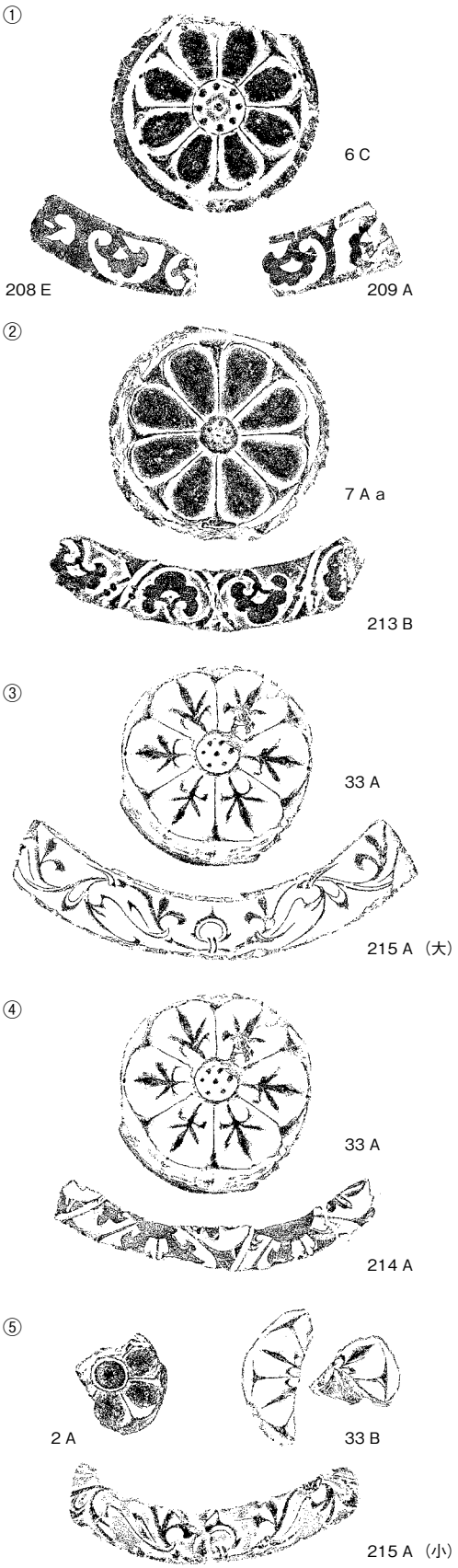
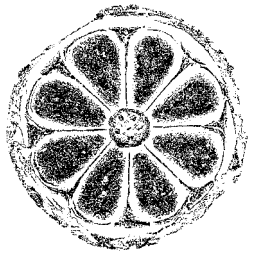
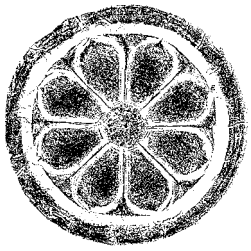


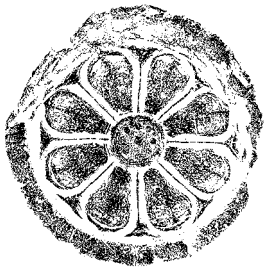
Fig. 174　飛鳥時代中期の瓦



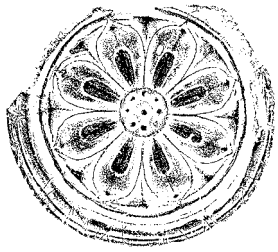
若草伽藍　７Ａａ型式



奥山廃寺　ⅣＡ型式



法輪寺　８Ｂ型式



百済大寺　ＩＡ型式

Fig. 175　７Ａ型式の変遷

移するため、③→⑤という関係が成り立つ。ただし、その推移が連続的であり、その間に大きな時間的懸隔を見てとることができないため、③→④→⑤というよりは③→④・⑤と考えるべきであろう。したがって、先の５つのセットは①→②・③→④・⑤という関係になろう。

以上で求めた各セットの時間的関係をふまえた上で、それらに絶対年代を当てはめていきたい。まず定点の１つとなるのが⑤のセットである。これらは斑鳩宮所用であるため、その下限は必然的に上宮王家滅亡時の643年となる。

次に注目したいのが７Ａ型式である。これまで、７Ａ型式の年代を示す直接的な証拠は存在していないが、その手がかりとして取り上げたいのが船橋廃寺式軒丸瓦である。船橋廃寺式軒丸瓦は７Ａ型式を祖形とし、後に法輪寺所用瓦（法隆寺における８Ｂ型式）を経由して百済大寺所用軒丸瓦の祖形となるものである（花谷1993、佐川1998、清水1999）。上田睦は船橋廃寺式軒丸瓦の祖形に関して、７Ａ型式ではなく６Ｃ型式を想定しているが、６型式自体が中房を大きくしていく方向性をもつのに対し、氏の言う「船橋廃寺Ａ型式」（上田2000）の中房はそれとはそぐわない。また、丸瓦先端の加工法の変化を説明する際に、必ずしも６Ｃ型式からの変遷に限定する必要性がないことから、本稿では船橋廃寺式軒丸瓦の祖形を７Ａ型式と推定して論を進めることにする。

船橋廃寺式軒丸瓦の中で、７Ａ型式に続く最古相を示すものは奥山廃寺ⅣＡ型式である。この奥山廃寺ⅣＡ型式は播磨の高岡窯で製作されたことが明らかになっている。そして、この高岡窯で瓦と共に製作された須恵器の年代について、菱田哲郎は630年代と比定している（菱田1986）。その後、船橋廃寺式軒丸瓦は河内や大和で変遷をとげ、最終的には百済大寺所用軒丸瓦へとたどり着く。百済大寺の創建が639年であることから、奥山廃寺ⅣＡ型式は630年代でも比較的古い段階まで遡りうるだろう。したがって、その奥山廃寺ⅣＡ型式の祖形となる７Ａ型式は630年代初頭には成立していたと考え得る。若草伽藍において７Ａ型式とセットとなる213Ｂ型式は押し型を用いて施文されるのが特徴だが、この押し型は若草伽藍で使用された後、百済大寺や木之本廃寺で使用されるにいたったことが明らかになっている。百済大寺所用軒平瓦が630年代末から640年代初頭に成立していたことを考えると、笵傷の進行度合や重弧文といった新たな要素が付加されているのも納得がいく。以上のことから、②のセットである７Ａ－213Ａ・Ｂは630年代初頭には成立していたと考えられよう。そして、このセットとほぼ同時期と考えられる③のセット、すなわち中宮寺所用の33Ａ－215Ａ（大）も同様の年代が与えられる[(2)]。

ここを定点にして、その前後である①のセット、および④・⑤のセットの年代を考えてみたい。まず①のセットだが、その軒丸瓦である６Ｃ・Ｄ型式の細かい技法を見ていくと、丸瓦支持ナデツケや丸瓦

端部を加工した後の刻み目、また瓦当裏面の平坦ナデなど、②のセットの７Ａ型式と共通する要素が非常に多い。したがって、両者の時間的懸隔は短く、ほぼ連続して製作された状況が想定できる。ここから、①のセットの年代を概ね620年代におくことができる。また、瓦の分布状況から塔がほぼ①のセットのみで葺かれていると考えられることと、かつ６Ｃ・Ｄ型式の中で技法差に新古が認められることを考慮に入れると、６Ｃ・Ｄ型式が比較的長期にわたって製作されたことがうかがえる。つまり、概ね620年代全般にわたって製作されていた可能性が高い。そしてこのことは、塔の創建から完成が620年代に収まることを示しているのである。

その場合、１つ問題となるのが金堂完成から塔の創建までに10年近い空白期が生じることである。そこで文献史料を繙いてみると、実はこの610年代が聖徳太子にとって「空白期」（石田尚豊1997、p.301）にあたることがわかる。すなわち、推古天皇十六年（608）の第四次遣隋使派遣から、推古天皇二十八年（620）に馬子と協議して『天皇記』『国記』等の編修をおこなうまで、聖徳太子関係の事績がほとんど認められないのである(3)。若草伽藍の造営に深く携わっていたであろう聖徳太子の活動停滞が、造寺活動に関しても何らかの影を落としていたのであろうか。その原因は明らかではないが、両者の関連性については指摘しておきたい。

それでは最後に、④・⑤のセットについて触れておこう。②のセットが630年代初頭には成立していたことと、上宮王家の滅亡が640年代初頭であることを考慮に入れると、概ねこれらのセットに630年代という数字が与えられる。このうち、⑤のセットについてはいずれも小型であることから、斑鳩宮の小仏堂などに用いられていたと推定されるが、④のセットが若草伽藍においてどのように使用されていたのかは明らかではない。しかも、３３Ａ型式の個体数に比して２１４Ａ・Ｂ型式の個体数は極めて少ない。したがって、セットとしてではなく、軒丸瓦のみが使用されていたと推定でき、こういった状況から、ある時期の金堂や塔の補修用と考えておきたい。

上宮王家滅亡から西院伽藍創建まで

６４３年、上宮王家が蘇我氏によって滅ぼされる。この際に若草伽藍も焼亡したとの説があったが、後述するように現状ではその説は成り立ちがたい。白雉元年（650）に金堂の四天王像が造られていることからも、上宮王家滅亡後も若草伽藍は継続して機能していたようである。

しかし、瓦の観点からこの時期について見た場合、不明な点が多い。『至宝』では643～670年に属する軒丸瓦として６Db、７Ab、８Ｂの３型式を、軒平瓦として２０１Ａ～Ｅの重弧文軒平瓦をあてている。このうち、８Ｂ－２０１Ｂは法輪寺所用のセットであり、８Ｂ型式が船橋廃寺式軒丸瓦の最新相にあたることから、６４０年代でも初頭の時期にあたると考えられ、その成立が中期末にまで遡る可能性は充分にある。７Ab型式に関しては、７Aa型式の成立自体が630年代初頭として、さほど笵傷が進まないうちに７Ab型式として補刻されることから、両者の時間差はさほど大きくなかったであろう。また、７Ab型式の瓦笵は笵傷が４段階におよぶまで使用されていることから、概ね中期に属するものの、一部は後期においても製作されていた可能性がある。一方、６Db型式を後期に比定することには再検討の余地がある。『至宝』においては６Db型式を後期とする根拠として、中房の蓮子が１＋５＋８という構成になることから、これに川原寺式の影響を認め、やや時期を遅らせているようである。しかし、６Da型式の段階で笵傷がほとんど進行しないため、６Da型式から６Db型式の時間差を大きく見積もる

ことはできない。さらに、6Db型式の製作技法は7A型式と極めて類似することから、6Da型式に後続するとはいえ、後期というよりはむしろ中期の段階に属するものとしてとらえられよう。

以上のように考えると、確実に後期に属するものとしては201A・C～Eの重弧文軒平瓦のみである。しかし、これらも個体数が極めて少ないことから、他の寺からの搬入品と考えられる。このことから、後期においては新たな瓦の生産がほとんどおこなわれていないことがうかがえる。

この時期には648年頃の食封三百戸の施入を皮切りに、650年には金堂に四天王像を造顕、651年には金銅観音像、654年には金銅釈迦像、666年には金銅如意輪観音半跏像が作られ、若草伽藍へと納められるなど、若草伽藍の機能は決して衰えてはいないようである。しかし、若草伽藍を支援してきた上宮王家の滅亡という現象は、寺院経営上致命的な痛手であったことは疑いない。それを補完する意味での食封三百戸の施入と考えられるが、それでも新たな建築物の造営にまではいたらなかったのではあるまいか。その影響が瓦の製作の低調化へと及んでいるのであろう。

西院伽藍出土瓦の年代論

西院伽藍の創建年代

『日本書紀』によると、天智天皇九年（670）「災法隆寺、一屋無餘」とある。この一文をめぐって法隆寺再建・非再建論争が展開されてきたといっても過言ではないが、近年では東野治之の研究などによって、史料的にもほぼ疑いがないものとして定着しつつある（東野2005）。

瓦から見た場合、かつては岡本東三や山本忠尚が述べてきたように、法隆寺式軒平瓦の型式組列を、斑鳩宮所用215A型式→西院伽藍所用216A型式→山村廃寺出土軒平瓦→法輪寺所用216D型式→西院伽藍所用216B型式と想定し、山村廃寺の軒瓦を660年代においた上で、216A型式の出現を650年代とし、ここから若草伽藍の焼亡を皇極天皇二年（643）の上宮王家滅亡時にともなうものとする論があった（岡本1983、山本1984・1991）。

しかし、現状においてはこの説に対して多数の論者から批判がある（上原1986など）。花谷浩は山村廃寺の軒平瓦が7世紀末以前のものには確認されていない包み込み技法で製作されていることから、216A型式の年代を670年代に求め、若草伽藍の焼亡を『日本書紀』にある天智天皇九年（670）と論じる（花谷・毛利光1992）[4]。また山村廃寺の軒瓦について論じた近江俊秀も、奥山廃寺の軒瓦と

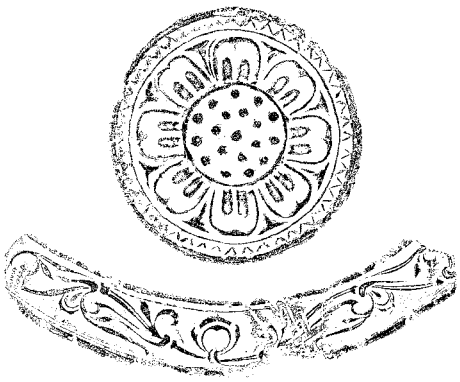


Fig. 176　37A－216A

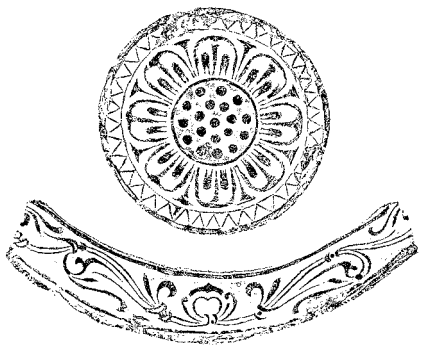


Fig. 177　37B－216C

の比較を進めた上で、山村廃寺の軒瓦の年代を７世紀末から８世紀初頭に置く（近江2004）。これらのことから、山村廃寺出土軒平瓦を660年代とする岡本・山本の説は成立しがたい。したがって、本稿においても若草伽藍の焼亡を天智天皇九年と理解するとともに、216Ａ型式の出現を670年代とする立場をとっておきたい。

この216Ａ型式と軒丸瓦である37Ａ型式はセットとなって、金堂に使用されることになる。この金堂の創建年代に関しては、近年興味深いデータが得られている。2004年、奈良文化財研究所において金堂の建築部材の年輪年代を測定したところ、外陣天井板の焼損古材から668～669年という値が得られた（本章第６節参照）。これはいずれも樹皮を残す古材であったため、ほぼ伐採年代にあたると考えてさしつかえない。その場合、天智天皇九年の焼亡以前にこの材は切り出されていたことになるが、その事実が西院伽藍の創建や若草伽藍の焼亡とどのような関係にあるのか、現状では定かではない(5)。ここではさしあたり、金堂の創建年代が668年を遡らず、金堂所用瓦もその年代を遡らないことを確認するのみにとどめておきたい。なお、金堂の完成年代については、680年以前と考えられるが、その論拠に関しては最終項で触れる。

塔に関する諸問題

塔に用いられた瓦は現状で２セットあったと考えられている。１つは、塔の解体修理に伴う調査において最も多く出土した37Ａ－216Ａのセットである。これは金堂と同じセットであり、塔の下層に用いられたと考えられる。もう１つは37Ｂ－216Ｃのセットである。このうち、216Ｃ型式はその幅が高麗尺の９寸（約32.5cm）であり、216Ａ型式の１尺（約35.5cm）と比較すると一回り小さい。そして、塔の解体修理がおこなわれた際に発見された五重目のものと推定される茅負の瓦繰り幅が、216Ｃ型式と同じく九寸であったことから、これらのセットは塔の上層に用いられたと考えられよう。

以上のように、塔の所用瓦は比較的簡単に導き出されるものの、これらに年代を与えようとした場合、議論は意外と複雑なものとなる。なぜなら、塔の解体修理によって明らかとなった建築学的知見を視野に含めながら議論を展開する必要があるためである。そこで、まずは議論の前提としてそれらの知見を簡単にまとめておこう。

まず、塔の建築技法や細部形式を金堂のそれと比較すると、様式的には新しいことが判明している。ではどの程度新しいのか、という点について明言している研究者は少ないが、福山敏男は金堂と塔の建築様式に「一世代ほど」の開きがあると述べている（福山1968、p.259）(6)。

次に注目しておくべき点として、塔の建設途中で一時工事が中断していた時期があるという事実である。これは解体修理において明らかになった点で、初重の柱や壁、扉口片付取り付き部などに風蝕痕が残されていたのである。この部分は本来なら外気に触れる部分ではないため、一旦軸部が完成した段階で工事が中断し、その過程で部材が風蝕したと考えられる。問題はこの中断がどの程度の期間であったかという点である。解体修理を主導した浅野清は、当初中断期間を「数十年」と見積もっていたが（浅野1953、p.105）が、後に「十数年」と表現を変更している（浅野1974、p.6）。

浅野がおこなったもう一つの重要な指摘が、法隆寺・法輪寺・法起寺における雲肘木の様式論である。それによると、これら３カ寺の建築に見られる雲肘木は、法隆寺金堂→法隆寺塔→法隆寺中門および法輪寺塔→法起寺塔の順に退化していく（浅野1961、p.152、浅野1974、ｐ.5）。そして最も

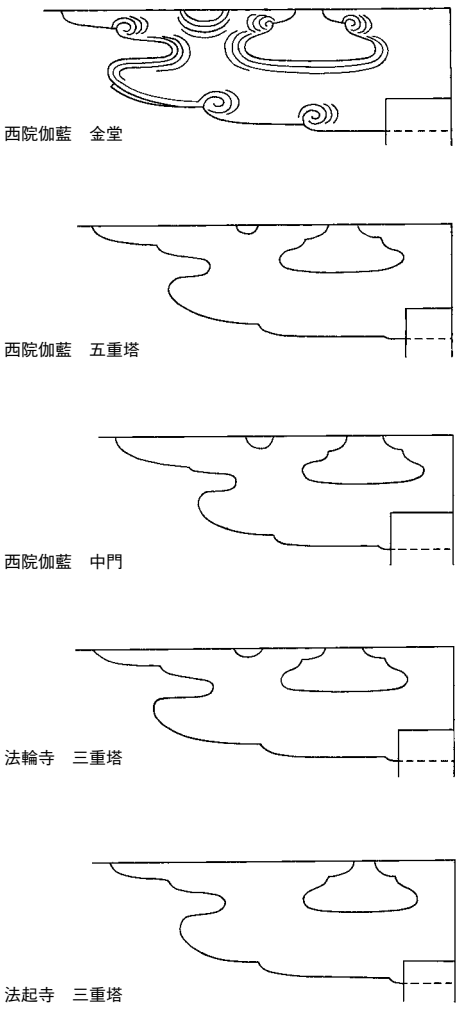


Fig. 178　雲肘木の変遷

退化した雲肘木が用いられた法起寺の塔は、露盤銘が會津八一によって復元されており、それによると慶雲三年（706）に露盤が作られ、塔が完成したとのことである（會津1931）。したがって、法起寺塔よりも様式的に遡る法隆寺の五重塔は、必然的に706年以前に完成していたと考えられよう。和銅四年（711）に塔内に四面塑像が造られたという記載も、このことに矛盾しない。

以上を整理すると、①塔の上限は金堂完成以降である、②塔は建設途中に中断期間がある、③塔の下限は706年代以前である、の3点に論点が絞られてくる。

そこで、まずは①の塔の築造年代の上限について考えてみたい。まず、塔における瓦の状況を振り返ってみると、塔で使われた37A－216Aと37B－216Cのセットを見るかぎり、後者が様式的にわずかに遅れるものの、製作技法などの点では差を見出すのが難しい。むしろ、葺かれる場所が異なっていたが故の差違に過ぎないと言うべきであろう。このように、瓦の様相からは金堂と塔の間に「一世代ほど」の時間差を認めることは難しい。

この想定を補強するのが塔の建築部材から得られた年輪年代である。塔の二層目の雲肘木から得られた年輪年代は673年という金堂の創建年代と近しい数値が出ている（本章第6節参照）。これは瓦の状況とも矛盾せず、金堂と塔が極めて継続的に造営されたことを示唆しているのである。ここから、福山の言う建築様式の差異は時間差に起因するというよりも、金堂と塔という建物の「格」とでもいうべきものの差異に因るものなのであろう。したがって、37B－216Cの上限年代を金堂築造とさほど時期を違えない670年代初頭においておきたい。

次に、②の中断期間について考えてみたい。というのも、風蝕が見られたのが初重の扉口付近に限られており、二重目以上の部材に風蝕痕が見られないということは、これらの部位は既に外気に触れない状況にあったと考えるべきであろう。すなわち、中断期間以前に瓦は既に葺かれていた可能性が高いのである。これはすなわち、中断期間の開始年代が37B－216Cの下限年代を示すことをも意味している。そして、ある程度の中断期間を経た後、初重の外側に板葺きの裳階が造られ、塔が完成したのであろう。

それでは、この中断はどのようにして生じたのであろうか。ここで注目したいのは、『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』における天武天皇八年（679）の記事である。それによると、「大化三年歳次戊申」に施入された食封三百戸が停止されたと記載されている。

寺院経営に際する主要な財源として、寺田と寺封があげられるが、竹内理三は寺田が寺院の経営・維持費の性質を帯びているのに対し、寺封は寺院の造営・造像費の性質をもっていたとする。その根拠と

しては、寺封が５年程度の短期間に限られている事例が多いことや、正倉院文書の中に封戸の仕丁が造寺事業に携わっていた例が見られることなどをあげている（竹内1932）。このような性格をもっていた寺封が、西院伽藍の再建中に停止されるとなれば、その影響は甚大なものであったろう。それを如実に反映しているのが塔の建設中断なのである。

その中断がいかなる経緯によって再開されたのかは定かではない。結局、停止された食封が復活するのは養老六年（722）であるから、何らかの財源を確保して西院伽藍の造営を再開していたことが窺える。それでは、造営の再開をもたらすにいたった財源とはいかなるものであったろうか。これについては西院伽藍造営の全体像にも関わってくる問題であるため、次項で詳述することにしたい。

さて、以上の議論をまとめておくと、天武天皇八年（679）に食封停止がおこなわれ、結果として塔の工事が中断したと考えられる。風蝕部分がそれほど広範囲に認められないことから、瓦は工事中断以前に葺かれていたと考えられる。したがって、塔所用の37A・B－216A・Cの下限年代を680年頃と考えておきたい。

なお、③塔の下限年代については特に異論がない。ただし、法起寺との差異から得られる706年以前という想定は、工事中断以前の年代を示しているに過ぎない可能性もあり、工事再開以降、完成までにどの程度の期間が要されたのかが不明なため、場合によっては塔内に四面塑像が造られた和銅四年（711）頃まで下限がずれこむ可能性もある。

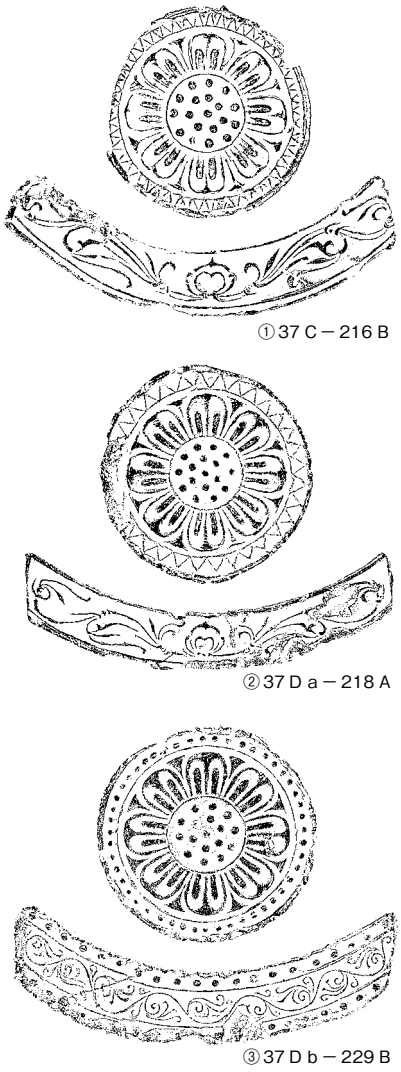


Fig. 179　中門および回廊所用瓦

中門と回廊

金堂、塔に続いて造られたのが中門と回廊である。『至宝』においては、中門・回廊所用瓦として①37C－216B、②37Da－218A、③37Db－229Bの３セットを想定している。37C－216Bに関しては金堂や塔で用いられた37A・B－216A・Cの後続型式であり、さらには37D型式へと変遷していく。37D型式においては外縁に線鋸歯文をもつ37Da型式から珠文の37Db型式へと変化し、それに伴うようにしてセットとなる軒平瓦も変遷を見せる。すなわち、これまでの均整唐草文を受け継ぐ218A型式から藤原宮式軒平瓦の影響下で成立したと考えられる偏行唐草文の229B型式へ変化するのである。この変化は文様のみにとどまらず、技法の面においても確認できる。特に顕著なのが軒平瓦で、216B型式の段階では直線顎であるのに対し、218A型式では削り出し段顎のものが確認されるようになり、229B型式では削り出し段顎が主流となる(7)。したがって、これらのセットは①→②→③という変遷を辿ると判断できる。

次に注目したいのは軒平瓦の幅である。216B型式が塔上層と同じ高麗尺９寸（約32.5cm）であ

るのに対し、218Ａ型式および229Ｂ型式は高麗尺８寸５分（約30.7cm）と差違がある。これまでこれら３種の瓦は一様に中門・回廊所用として位置づけられてきたが、金堂や塔において瓦の幅が厳密に設定されていた状況をふまえると、これらの軒平瓦も葺かれていた建物が異なっていた可能性が高い。となると、①の軒平瓦がやや大きく、かつ①のセットの個体数が②・③のセットよりも少ないことから、①のセットが中門に、②・③のセットが回廊に用いられたと考えられよう[8]。

ではこれらの建物の竣工時期から瓦の年代を探ってみよう。まず下限に関しては中門力士像の造像が和銅四年（711）であることから、自ずと定まってくる。上限は中門初重の大斗の年輪年代が手がかりとなる。測定された年代は685年であったが、測定した部材が辺材型で、かつ辺材幅2.5cmであったことから、おおよその伐採年代を690年代に求められることができよう。したがって、①～③のセットは概ね690～711年の幅に収まるといえる[9]。

次に注目したいのは、回廊を建てるに当たって伽藍の東西に存在していた谷地形を埋め立てる必要があったわけだが、その回廊整地土の中から中門所用の216Ｂ型式が出土している点である（法隆寺1985）。このことは、ある程度まで中門が建てられた後に、回廊建設のための整地がおこなわれたことを示している。そのため、回廊所用瓦の年代は比較的遅らせて考える必要があろう。そこで、本稿では中門所用の37Ｃ－216Ｂのセットの年代を概ね690年代に、回廊所用の37Da－218Ａおよび37Db－229Ｂの年代を700年代と推定しておく。

小　　結

それでは以上で述べてきた西院伽藍所用瓦の年代観を、簡潔に整理しておく。金堂および五重塔に用いられた37Ａ－216Ａ、37Ｂ－216Ｃの２セットは、西院伽藍の造営が開始された670年から伽藍造営工事が中断する679年頃のものと考えられる。その後、ある段階で造営工事は再開され、690年頃には中門の建設が開始されたといえる。したがって、37Ｃ－216Ｂをその段階のものとしてとらえておく。そして中門の完成が近づく頃に回廊部分の整地がおこなわれ、おって回廊の建設が始まる。この年代をほぼ700年代とし、回廊所用瓦である37Da－218Ａ、37Db－229Ｂの両セットをその段階のものとする。そして711年、西院伽藍は若草伽藍焼失から実に40年もの時間を経て、再興されるにいたったのである。

以上、若草伽藍跡出土瓦と西院伽藍出土瓦の年代観について、文献史料や建築学的知見などをもとにしながら整理をおこなってきた。そこで、以下では年代論以外に議論しておかねばならないいくつかの問題について触れておきたい。

若草伽藍と西院伽藍

瓦工人の問題

若草伽藍創建期の瓦が百済系工人の手によることは論を待たない。具体的に説明すると、飛鳥寺の造営に深く関わった瓦工人のうち、主に角端点珠蓮華文軒丸瓦の製作に携わっていた工人群の系譜を引く工人達が斑鳩の地において作成したのが、若草伽藍の瓦であろう（花谷1993など）。一方、西院伽藍の瓦を見てみると、軒丸瓦に関しては百済系文様からの脱却が見られるが、それに対して軒平瓦では若草伽藍や中宮寺で用いられた215Ａ型式の系譜を引く216Ａ型式、すなわち瓦笵施文技法を用いるな

ど、若草伽藍からの系譜を引いているように見受けられる。それでは、若草伽藍の瓦工人と、西院伽藍の瓦工人はいったいいかなる関係にあったのであろう。

そこで、これら西院伽藍で使用された軒瓦の製作技法を概観すると、実は若草伽藍の軒瓦の技術伝統を色濃く残していることが分かる。軒丸瓦は文様系譜を大きく異にするものの、瓦当を作る際に回転ナデを用いず、瓦当裏面をナデで平坦に仕上げる点や、丸瓦先端を斜めに削り、刻みを入れる点、そして丸瓦支持ナデつけをおこなう点などは、７Ａ型式と共通する要素である。軒平瓦に関しても、施文する際には瓦笵を上から押しつける方法を採る点や、分割に先行して施文がおこなわれる点などは、型押し忍冬唐草文の２１３Ａ・Ｂ型式と共通する。したがって、西院伽藍の創建瓦の背景には、若草伽藍の瓦の影響が見え隠れしているのである。

西院伽藍造営の前後、南大和では川原寺や本薬師寺のような官大寺が造営されるにいたるが、それらの瓦の影響を西院伽藍所用瓦に見ることはほとんどできない。むしろ、若草伽藍の技術伝統を受け継ぎつつ、独自の瓦生産を展開していた瓦工人の姿が浮かび上がってくるのである[10]。

同様の状況は建築様式においても見受けられる。西院伽藍の建築様式は百済の系譜を引く、いわゆる「飛鳥様式」を継承しているが、当時の官大寺であった川原寺や本薬師寺では中国からもたらされた唐の様式で造られている。このことから、西院伽藍の建築や瓦は若草伽藍以来の伝統を根強く残しており、南大和の諸寺とは一線を画しつつ、独自の展開を見せていたといえよう。

西院伽藍創建の背景

最後に、西院伽藍の創建主体について議論しておきたい。上宮王家滅亡後の若草伽藍について触れた際に、その時期の瓦の生産が低調であることから、上宮王家滅亡によって寺院経営に打撃を受けた結果、伽藍造営そのものがほとんど進まなかったと述べた。そのような状況の中で「一屋無餘」程の被災をうけ、そこから新たに西院伽藍を復興しようとする場合、当然の如く法隆寺単体では不可能であったろう。それでは、伽藍の復興を支援したのはどういった存在だったのであろうか。

この問題に関しては、法隆寺が官寺としての扱いを受けていたことから、国家的支援のもとに再建されたという説（田中1983など）と、一地方寺院であるため、在地氏族の援助のもとに再建されたという説（大西1980・若井1994など）の両者がある。しかし、天武天皇の病気にともなう誦経や、逝去後の無遮大会が大官大寺や飛鳥寺・川原寺でおこなわれたにもかかわらず、法隆寺でおこなわれなかった点や、法隆寺周辺氏族の名が記された命過幡が法隆寺に残されている点などから、むしろ在地氏族に支えられていた部分が大きかったと考えられる[11]。

そこで注目したいのが、37Ａ－216Ａの流れをくむ瓦、いわゆる「法隆寺式軒瓦」が全国に分布している点である。かつて石田茂作は法隆寺資材帳の記載をもとに、法隆寺の「庄倉」や「薗地」が所在している地域に法隆寺式軒瓦が分布していることを指摘した（石田茂作1946）。鬼頭清明はその石田の論をさらに発展させ、法隆寺式軒瓦と庄倉の関係の背後に、庄倉経営における在地豪族の影響を見るとともに、瓦当文様が独自に展開していく地域があることから、「地域における主体的独自的な展開」が見られることも指摘した（鬼頭1977、p.10）。また、「太田」という地名を持つ地域に法隆寺式軒瓦が見られることから、各地域の渡来系氏族が法隆寺を媒介にして、相互に関連を持っていたとする山崎信二の研究もある（山崎1983）。

しかしその一方で、各地域の法隆寺式軒瓦の研究が進展するにつれ、軒瓦の分布と庄倉の関係がそのまま適用できないことが明らかとなってきた。たとえば、従来「法隆寺式」と呼ばれてきた軒瓦の一部は「平隆寺式軒瓦」であったことが明らかになった伊予の例や（亀田1994a、妹尾2002）、新資料を加えた上で西日本の法隆寺式軒瓦を分析した亀田修一と妹尾周三は、軒瓦の分布と庄倉との関係は従来考えられてきたよりも希薄だったのではないかと説く（亀田1996、妹尾2004）。つまり、庄倉の分布を前提とせずに、軒瓦の分布を説明する必要が出てきたのである。

そこで考えられるのが、これら法隆寺式軒丸瓦を用いた寺院の造営に携わっていた在地豪族らが、西院伽藍造営に関与していた可能性である。先にも述べたように、西院伽藍の造営には法隆寺周辺の在地氏族の援助に負うことが大きく、かつ天武天皇八年（679）に食封が停止された際には造営工事が中断してしまうなど、法隆寺の経済力のみで造営事業を成し遂げることは極めて困難であった。そこで法隆寺周辺の在地氏族のみならず、それらとつながりのある各地域の氏族から経済的援助を受けていたことは想定に難くない。特に食封停止に伴う工事中断が再開へと向かうためには、それら地域氏族の援助が不可欠であったろう。そしてその関係性に伴って、「法隆寺式」という文様要素が各地域に伝播し、地域氏族が壇越となる地方寺院に、法隆寺式軒瓦が用いられることになるのである(12)。

その証左として指摘できるのは、法隆寺から実際に瓦笵が移動している点と、法隆寺式軒瓦の祖形と考えられるのが西院金堂所用の37A－216Aと塔上層所用の37B－216Cのセットという点である(13)。瓦笵の移動に関しては、既に『至宝』で指摘されているように、徳島県西原瓦窯において西院伽藍所用瓦よりも笵傷の進行した37A型式の同笵瓦が確認されている。西院伽藍においては37A型式が塔の下層にも使用されていることから、この瓦笵が移動したのは金堂が完成し塔の造営が中断された頃と考えられる。この瓦がどの寺院に用いられたかは明らかではないが、文様要素のみならず、瓦笵そのものまでが伝播していたことを表す好例といえる。また、法隆寺式軒瓦の祖形となるセットが金堂および塔所用瓦と想定できる点は、これらの文様要素の伝播が西院伽藍の創建から金堂および塔の完成以後に生じたことを示している。つまり、伽藍再建時や食封停止に伴う造営中断の際に、各地域の在地氏族が何らかのかたちで援助をおこない、その関係性の中で「法隆寺式」という文様要素が各地域に伝わり、地域ごとに受容ないし変容をとげていったのであろう。

このように、在地氏族の援助を受けながら造営された西院伽藍の建築や瓦は、必然的に朝廷によって造営された川原寺などの官大寺とは異なる独自性を展開するにいたる。そしてそれはとりもなおさず、前身たる若草伽藍から引き継がれてきた伝統の継続でもあったといえよう。

おわりに

以上、諸先学の成果を参考にしながら、若草伽藍と西院伽藍に用いられた瓦の年代を筆者なりに再整理し、かつその背景についても独自の見解を加えつつ、論を進めてきた。法隆寺に関する研究は考古学、文献史学、建築学などがそれぞれに進展しているため、どの分野で研究するにせよ、自ずと学際的にならざるを得ない。その点、考古学を専攻してきた筆者の手による本稿は、文献史学および建築学に関する部分についてはまだ不充分な点が多い。したがって、今後の法隆寺研究を進展させるためにも忌憚なき御叱正を乞うこととして、ここで筆を置くことにしたい。

注

⑴ 若草伽藍所用瓦の年代観については、すでに花谷浩や佐川正敏、毛利光俊彦によって大枠が示されている（佐川・花谷1991、花谷1987・1992ａ・1992ｂ・1998・1999、花谷・毛利光1992）。本稿はそれらを追認しつつ、改めてその論理過程を呈示することを目的としている。ただし、いくぶんかは筆者なりの私見を交えた部分もあるので、基本的に文責が筆者にあることを、予め御留意いただきたい。なお、本文中に掲げた瓦の拓本は縮尺１：６に統一している。

⑵ 215Ａ型式の年代観については異論もある。山崎信二は笵型施文の軒平瓦が重弧文軒平瓦の出現以前に遡るとは考えられないとした上で、その年代を斑鳩宮消失の643年以降とする（山崎1983）。ただしその場合、東院下層から215Ａ（小）型式が出土する経緯を説明する必要があろう。とはいえ、本稿の年代観に則ったとしても若干の問題点が残る。花谷浩も指摘するように、215Ａ型式とその後続型式である216Ａ型式との間に40年近い懸隔が開いてしまう（花谷1998）。今後、検討すべき課題であろう。

⑶ 『上宮聖徳太子伝補闕記』や『聖徳太子伝暦』には、この時期に『法華経』『勝鬘経』『維摩経』の義疏を撰述したとあるが、この記述の是非については未だ決着を見ていない（研究史は松田1997、最近の論考としては曾根2004など）。ただいずれにせよ、この時期に聖徳太子が政治や外交の面において活発には活動していなかったことがいえよう。

⑷ なお、岡本・山本両氏は法輪寺所用瓦である216Ｄ型式を西院伽藍塔所用の216Ｂ型式よりも古相に見ているが、現状ではこれも立論が難しい。216Ｄ型式は法輪寺三重塔焼失後におこなわれた発掘調査の成果から、三重塔所用瓦であったことが判明しているが、この三重塔の雲肘木は法隆寺五重塔よりも新しく、むしろ中門のそれに近い（浅野1974）。確かに、216Ｄ型式は216Ａ型式を比較的忠実に模倣した文様をもつが、先述の建築学的見地から考えると、法隆寺で金堂と塔の建設が一段落ついた時点でそれらの瓦が法輪寺にもたらされ、それをモデルによく似た瓦を新たに作ったと考えた方が理解しやすい。法輪寺から37Ａ型式が出土していることも、それを裏付けていよう。

⑸ なお、鈴木嘉吉は西院伽藍金堂の建設が斉明朝（655～661年）頃に既に着手されていたと想定している（鈴木1995、ｐ.207）。年輪年代の成果から金堂創建年代が斉明朝まで遡らないとしても、若草伽藍焼亡以前に金堂の建設が開始されていたかどうかは慎重に議論すべきであろう。ただし本稿においては、金堂に礎石の転用が見られることや基壇が地山削り出しによるなど、いかにも急造の状況がうかがえることから、焼亡以降に建設が着手したものとの立場をとる。

⑹ ここで参考にした福山敏男の1968年の文章は、1952年に書かれた文章に加筆･修正を加えたものだが（福山1952）、1952年の段階では金堂と塔との時間差について具体的な論究はなされていない。

⑺ ただし229Ｂ型式では笵傷がかなり進んだ段階になると、再び直線顎となるようである。

⑻ 花谷浩は回廊に使われた瓦のセットとして、上記の①～③のセットにくわえ、塔に用いられていた37Ｂ－216Ｃも使われていた可能性を指摘している（花谷・毛利光1992）。しかし、西院伽藍においては建物の種類や葺かれる位置によってかなり厳密に瓦が使い分けられている可能性が高いことは既に述べた。その観点からすると、瓦幅が高麗尺９寸の216Ｃが回廊に使われていた可能性は低く、もし用いられていたとするなら同じ大きさの瓦（＝216Ｂ）が葺かれる中門であったろう。

⑼　かつて、『至宝』においては白鳳時代を前期と後期にわけ、両者の境を690年頃に想定している。そして37Ｃ－216Ｂのセットを前期に、37Ｄａ－218Ａおよび37Ｄｂ－229Ｂのセットを後期に比定しているが、本文で述べたような状況をふまえる限りは、いずれのセットも後期に比定すべきであろう。

⑽　ここで、亀田修一や森郁夫によって朝鮮半島系と指摘されている33Ａ型式や、日本初の瓦笵施文による215Ａ型式について触れておきたい（亀田1994、森2002）。これらの型式の文様は、確かにそれまでの文様系譜からは生まれ得ず、明らかに外部からもたらされた要素であろう。しかし重要なのは、これらの型式の製作技法がそれまでの技術伝統から決して逸脱しない点である。特に215Ａ型式は瓦笵施文ということで技術革新が生じたように見えるが、「瓦笵の大きさ」以外に213Ａ・Ｂ型式や214Ａ型式と技術的な差異はない（中川報告参照）。むしろ「均整忍冬唐草文」という文様を施すために、それまでの「型押し」を「瓦笵」という形に拡大したにすぎないのである。また、33Ａ型式に関しても７Ａ型式などに比べて技法的な差異はほとんど認められない（中川報告参照）。したがって、新たな文様要素のみが導入されたにすぎず、技術系譜にまで影響が及ばなかったといえよう。

⑾　なかでも、平群郡に本拠を置いていた山部氏の功績は大きかったと考えられる。山部氏の名は法隆寺の命過幡にも見られ、それらの年代は若草伽藍焼失を若干遡る頃だと推定されている（狩野1984、ただしこの説には東野1995などの異論もあり）。そしてその職掌からして、木材の調達などに深く関わっていることから、西院伽藍造営に際しては重要な役割を果たしていたと考えられている（岸1988、仁藤1998）。また、法隆寺と同じ斑鳩に拠点を置いていた膳氏や、聖徳太子と深い関わりのあった秦氏なども造営に参加していたことであろう（加藤1967、横田1974など）。

⑿　ここで重要なのは、伝播したのはあくまで「法隆寺式」という文様要素であり、法隆寺周辺域以外では技術伝統の伝播までは認められない点である。すなわち、伝播の背景に工人の移動などは考えにくく、むしろ「法隆寺式」という図像なりイメージなりが情報として伝わった結果としてとらえておくべきであろう。

⒀　当然のことながら、法隆寺式軒瓦の中には地域での変容が進んでしまい、祖形が明らかでないものもある。また、先にあげた２つのセット以外のものを祖形とする例もわずかながら存在する。しかし、以上をふまえた上でも先のような傾向は指摘できると考える。この問題に関しては奈良文化財研究所2005を参考にした。

参考文献

會津八一　1931　「法起寺塔露盤銘文考」『東洋学報』第十九巻第一号　東洋協会学術調査部

浅野　清　1953　『法隆寺建築綜観』京都大学文学部考古学叢書第一冊　便利堂

浅野　清　1961　「26　雲形肘木」『世界美術全集２　日本⑵飛鳥・白鳳』角川書店

浅野　清　1974　「西院伽藍の年代とその様式」『奈良の寺１　法隆寺西院伽藍』岩波書店

石田尚豊　1997　「総論　聖徳太子の生涯と思想」『聖徳太子事典』石田尚豊（編）　柏書房

石田茂作　1946　「法隆寺式忍冬唐草紋宇瓦の分布」『伽藍論攷』養徳社

上田　睦　2000　「河内の船橋廃寺式軒丸瓦」『飛鳥時代の瓦づくり　Ⅲ』第３回古代瓦研究会シンポジウム発表要旨集

上原真人　1986　「仏教」『集落と祭祀』岩波講座日本考古学４　岩波書店

近江俊秀　2004　「山村廃寺式軒瓦の分布とその意味－７世紀末における造瓦体制の一側面－」『研究紀要』第８集　（財）由良大和古代文化研究協会

大西修也　1980　「再建法隆寺と薬師銘成立の過程」『佛教藝術』 133号

岡本東三　1983　「法隆寺天智九年焼亡をめぐって－瓦からみた西院伽藍創建年代－」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集　同朋社

加藤謙吉　1967　「上宮王家と膳氏について」『続日本紀研究』第193号　続日本紀研究会

狩野　久　1984　「法隆寺幡の年代について」『伊珂留我』法隆寺昭和資財帳調査概報３　法隆寺昭和資財帳編纂所（編）　小学館

亀田修一　1994ａ　「地方への瓦の伝播－伊予の場合－」『古代』第97号　早稲田考古学会

亀田修一　1994ｂ　「瓦から見た畿内と朝鮮半島」『古代王権の交流５　ヤマト王権と交流の諸相』荒木敏夫（編）　名著出版

亀田修一　1996　「中国・四国地方の法隆寺式軒瓦」『シンポジウム「天平の宇佐」－宇佐虚空蔵寺と古代仏教－』別府大学附属博物館・宇佐市教育委員会

岸　俊男　1988　「山部連と斑鳩の地」『日本古代文物の研究』塙書房

鬼頭清明　1977　「法隆寺の庄倉と軒瓦の分布」『古代研究』 11　元興寺文化財研究所考古学研究室

佐川正敏　1998　「吉備池廃寺の調査」『奈良国立文化財研究所年報』 1998－Ⅱ　奈良国立文化財研究所

佐川正敏・花谷浩　1991　「飛鳥・白鳳の軒平瓦について」『伊珂留我』法隆寺昭和資財帳調査概報13　法隆寺昭和資財帳編纂所（編）　小学館

清水昭博　1999　『「蓮華百相」－瓦からみた初期寺院の成立と展開－』春季特別展図録　奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

妹尾周三　2002　「伊予、松山平野の寺院造営－平隆寺式軒瓦の広がりと在地豪族－」『究班』Ⅱ（埋蔵文化財研究会25周年記念論文集）　埋蔵文化財研究会

妹尾周三　2004　「西瀬戸内の法隆寺式軒丸瓦－その広がりと背景－」『考古論集』河瀬正利先生退官記念論文集　河瀬正利先生退官記念事業会編

曾根正人　2004　「黎明期の日本仏教と聖徳太子」『和国の教主　聖徳太子』日本の名僧１　本郷真紹（編）　吉川弘文館

竹内理三　1932　『奈良朝時代に於ける寺院経済の研究』大岡山書店

田中嗣人　1983　「法隆寺の造営」『聖徳太子信仰の成立』吉川弘文館

東野治之　1995　「法隆寺伝来の幡墨書銘－追善行事との関連にふれて－」『日本古代の創世と社会関係の基礎的研究』平成６年度科学研究費補助金（一般Ａ）研究成果報告書　大阪大学文学部

東野治之　2005　「文献史料からみた法隆寺の火災年代」『日本古代史料学』岩波書店

奈良文化財研究所　2005　『飛鳥白鳳の瓦づくりⅧ－法隆寺式軒瓦の成立と展開－』第８回古代瓦研究会シンポジウム発表要旨集

仁藤敦史　1998　「「斑鳩宮」の経済的基盤－『法隆寺資財帳』よりみた－」『古代王権と都城』吉川弘文館

花谷　浩　1987　「飛鳥－奈良時代の軒丸瓦について」『伊珂留我』法隆寺昭和資財帳調査概報７　法隆寺昭和資財帳編纂所（編）　小学館

花谷　浩　1992ａ「飛鳥時代の瓦」『昭和資財帳第15巻　法隆寺の至宝　瓦』小学館

花谷　浩　1992ｂ「若草伽藍の造営」『昭和資財帳第15巻　法隆寺の至宝　瓦』小学館

花谷　浩　1993「寺の瓦作りと宮の瓦作り」『考古学研究』第40巻第2号　考古学研究会

花谷　浩　1998「斑鳩寺の創建瓦」古代瓦研究会第2回シンポジウム資料（奈良文化財研究所2000『古代瓦研究Ⅰ』に所収）

花谷　浩　1999「畿内の飛鳥・白鳳時代の瓦とその年代－大和を中心に－」『飛鳥・白鳳の瓦と土器－年代論－』帝塚山大学考古学研究所歴史考古学会・古代の土器研究会共催シンポジウム資料集

花谷　浩・毛利光俊彦　1992「西院伽藍の造営」『昭和資財帳第15巻　法隆寺の至宝　瓦』小学館

菱田哲郎　1986「畿内の初期瓦生産と工人の動向」『史林』69巻第3号

福山敏男　1952「法隆寺」『毎日ライブラリー　日本の美術』田中一松（編）毎日新聞社

福山敏男　1968「法隆寺の創立」『日本建築史研究』墨水書房

法 隆 寺　1985『法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書』

法隆寺昭和資財帳編集委員会　1992『昭和資財帳第15巻　法隆寺の至宝　瓦』小学館

松田和晃　1997「聖徳太子研究史」『聖徳太子事典』石田尚豊（編）柏書房

森　郁夫　2002「法隆寺初期瓦当文様に見る多様性」『藤沢一夫先生卒寿記念論文集』藤沢一夫先生卒寿記念論文集刊行会

山崎信二　1983「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集　同朋社

山本忠尚　1984「西院創建瓦とその系譜－瓦からみた再建年代－」『特別展観法隆寺昭和資財帳調査宝展』2　法隆寺

山本忠尚　1991「軒平瓦の創作」『研究論集Ⅸ』奈良国立文化財研究所学報第49冊　奈良国立文化財研究所

横田健一　1974「滅亡前における上宮王家の勢力について」『日本歴史』第312号　吉川弘文館

若井敏明　1994「法隆寺と古代寺院政策」『続日本紀研究』第288号

4　法隆寺再建・非再建論争史と若草伽藍

島田　敏男

非再建と再建

明治になって学問的に建築史編年がおこなわれるなかで、法隆寺西院伽藍が日本最古の建築であることは衆目の一致するところで、その様式が８世紀以降の建築とは異なっている点でも異論はなかった。ただし、『日本書紀』の天智天皇九年条に「夏四月癸卯朔壬申、夜半之後災法隆寺、一屋無餘、大雨来震」とある罹災記事、さらに『七大寺年表』にある「依詔造太宰府観世音寺。又作法隆寺。」および『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』にある「合金剛力士形貳躯在中門右和銅四年歳次辛亥寺造者」の記事と、西院伽藍の建築年代との関係をめぐって多くの論考が発表されてきた。特に、天智天皇九年（670）の罹災記事を認めるか否かに端を発し、西院伽藍の造営を天智天皇九年以降と考える再建論者と天智天皇九年以前と考える非再建論者との間で激しい論争がおこり、西院伽藍の建築年代については今なお様々な説が論じられている。これら議論のなかで若草伽藍の発掘調査が果たした役割は大きく、論争を時系列に整理することにより、若草伽藍発掘の意義が明確となる。

建築史における法隆寺の様式－明治20年代－

明治20年代に、最初に法隆寺の建築年代について言及したのは、菅政友と黒川眞頼で、聖徳太子の建立と語られていた西院伽藍について、『日本書紀』の天智天皇九年の記述を信ずるべきとし、西院伽藍は天智天皇九年以降に造営されたものであると論じた（菅1887・黒川1890）。また、小杉榲邨は美術史の立場から、西院伽藍金堂内の壁画の制作年代を天智天皇九年以降と位置づけた（小杉1896）。

いっぽう、この時期に建築史の体系づくりをおこなっていた伊東忠太は、法隆寺西院伽藍の実測調査をおこなった上で、西院伽藍の様式上の位置づけをおこなっている（伊東1893）。そのなかで、６世紀から８世紀を３つの時期に分類し、仏教伝来から孝徳朝までを百済を介して大陸文化の影響を受けた「推古様式」と命名し、孝徳朝から元明朝までを「天智様式」、元明朝から桓武朝までを「天平様式」と命名して、後者の２様式は唐からもたらされた文化の影響を受けたものとした。その上で、西院伽藍を推古様式（なお、以下では、西院伽藍および法起寺にみられる特徴的な建築様式を指す場合には「飛鳥様式」という呼称に統一する）に位置づけ、天智天皇九年の罹災記事については別寺に関する記事と考えた。伊東は、天智天皇九年の罹災記事を信ずるべきとの論や金堂壁画の年代が天智天皇九年以降と位置づけられるとの論の存在もふまえた上で、建築年代の議論よりも、飛鳥様式を建築史上どのように位置づけるかが重要であるという立場をとった。

以上のように、この段階では、西院伽藍の建築年代と天智天皇九年の罹災記事との関係については、明確な論争までには至らず、様式上は唐様式の流入以前のものとしてとらえられていた。なお、この時期には大きな議論にはならなかったものの、明治33年に北畠治房が若草伽藍の存在を指摘し、西院伽藍を法隆寺、若草伽藍を斑鳩寺にあてて、西院伽藍と若草伽藍のふたつの伽藍が併存したことを指摘し

ていることが注目される（北畠1900）。

本格的な論争のはじまり－明治38年～－

非再建論

伊東忠太の様式論が発表されて後、つぎは建築年代を軸に激しい論争が始まった。まずは、建築史学の関野貞および歴史学の平子鐸嶺が、西院伽藍は天智天皇九年の罹災後に再建されたものではないことを論じた。関野は伊東の様式論を前提に、西院伽藍が唐様式流入前の様式であること、屋根裏から発見された瓦が飛鳥様式であること、造営計画に大化改新以前に使用されていた高麗尺が使用されていること、唐様式流入以後の天智天皇九年以降に復古様式でこれだけのものがつくれるかという疑問から、西院伽藍が天智天皇九年以降の建築とは考え難く、薬師如来座像銘の推古天皇十五年（607）に建築されたものとした（関野1905ａ）。平子は、西院伽藍建築は推古様式であるとともに、『上宮聖徳太子傳補闕記』にある「庚午年四月卅日夜半、有災斑鳩寺。」の記事をもとに、『日本書紀』の天智天皇九年の罹災記事は、本来推古天皇十八年（610）の火災であったものを、『日本書紀』の編者が干支を一巡間違えて、天智天皇九年条に誤記したものと解釈した（平子1901・1905）。

再 建 論

これに対して、喜田貞吉が文献史学の立場からの反論をおこなった。主として、様式論からは推古天皇十五年の建築であることは断定できないこと、高麗尺の使用が7世紀後半におよばないとは断定できないこと、平子が論拠に使用した『上宮聖徳太子傳補闕記』の記述こそ誤謬が多く『日本書紀』の記述が信頼性の高いものであること等から、西院伽藍は天智天皇九年の罹災後の建築であると反論した（喜田1905）。

非再建論・再建論の応酬

再建論から非再建論への文献解釈についての批判に対して、関野は、文献解釈上は再建・非再建ど

Tab. 22　明治期における「再建」・「非再建」論の主張

	再建	非再建
『日本書紀』	認める。	干支を一巡誤解した誤記とする。
建築様式	様式上、白鳳時代といっている薬師寺東塔の建築年代が、実際には天平時代であれば、その一時代前の推古様式のものが天智天皇九年以降の建築であってもかまわないのではないか。	法隆寺西院の建築は六朝の影響下にあり、天智天皇九年以降の建築ならば唐の影響下にあるはず。
尺度	大尺の使用の下限が大化とは限らない。また、西院伽藍で大尺が使用されたかどうかも疑問。	西院伽藍建築の平面計画は大尺を使用している。建物の個々の部材寸法も大尺で設計されたと考えられる。
西院瓦	編年への疑問。様式と製作年代は必ずしも一致しないこともある。	飛鳥様式である。
焼失の痕跡		火事の痕跡がない。
仏像の解釈	天智天皇九年に罹災した伽藍にあったものが、罹災を免れて、西院伽藍に安置された。	罹災時に、仏像は搬出できたとしても、天蓋（飛鳥様式）まで罹災を免れたとは考え難い。
壁画	壁画の様式が白鳳期と考えられ、金堂も白鳳期の造営と考えるべき。	壁画の時代が降るのは、工事の時期差とみる。

ちらとも解釈できるとし、さらに、現在の法隆寺で火災の痕跡がないことを非再建の傍証とした（関野1905ｂ）。この他、文献・細部様式にわたって多くの議論がたたかわされたが、主たる論点はTab.22に示した通りである。このなかで、西院伽藍金堂に安置されている推古天皇十五年の銘のある薬師如来坐像(1)および推古天皇三十一年（623）の銘のある釈迦三尊像(2)については、非再建論の立場では非再建の証拠として扱われ、再建論の立場では前身伽藍の罹災から免れたものが再建された西院伽藍金堂に安置されたものと解釈された。なお、再建・非再建の直接の論拠にはならなかったが、喜田が西院伽藍の様式があくまでも斑鳩地方に限定されたものであることを指摘した点は注目すべき問題提議であった（喜田1915）。

焼失伽藍と若草伽藍－大正14年～－

以上の論争のなかで、短期間に多くの論文が発表された(3)が、双方ともに論拠となる資料が限られていたため、議論は平行線で進んだ。そして、大正9年から始まった西院伽藍の修理事業を契機に、新たな視点での議論がうまれた。すなわち、修理事業のなかで基壇内部や礎石等に火災を受けた痕跡がないことが明確となり、関野貞は、西院伽藍に先行する罹災した建物の痕跡を確認し得なかったので、西院伽藍は罹災していないと論じた（関野1922）。そこで、西院伽藍は天智天皇九年に罹災した伽藍上に建てられたものではないという前提で、つぎに天智天皇九年に罹災した伽藍がどこにあったかが議論の焦点となった。

関野は天智天皇九年の火災記事を認め、その時に罹災した伽藍を、かつて北畠治房が論じた若草伽藍に充てて、本来は西院伽藍が薬師如来坐像（推古天皇十五年銘）を安置した伽藍で、若草伽藍が釈迦三尊（推古天皇三十一年銘）を安置した伽藍と考えた（関野1927）。これに対して、喜田貞吉は、天智天皇九年に焼失した伽藍は斑鳩宮内にあった斑鳩寺のこととし、その復興事業として西院伽藍が造営され、罹災を免れた釈迦三尊像・薬師如来坐像が西院伽藍に移されたものと考えた（喜田1931）。なお、喜田は、後には天智天皇九年に罹災したのは若草伽藍であるとの立場をとる。

このように、『日本書紀』の天智天皇九年の罹災記事に対する議論は、記事を認める方向で収束し、

Tab.23　大正～昭和初期における「再建」・「非再建」論の主張

	再建	非再建
『日本書紀』	認める。	認める。
罹災した伽藍	斑鳩宮にあった斑鳩寺の伽藍。	若草伽藍。
建築様式	従来の見解通り。	従来の見解通り。
西院瓦	推古朝の瓦であるが、古い瓦が再建に使用されても差し支えない。	従来の見解通り。
焼失の痕跡		若草伽藍にあり。
仏像の解釈	いずれも、斑鳩宮にあった斑鳩寺のもので、罹災後、再建西院伽藍に集められた。	釈迦三尊はもともと西院金堂に安置、若草伽藍に安置されていた薬師如来像は、罹災を免れて後、西院金堂に安置された。
若草伽藍	論ぜず。	山背大兄建立の太子追悼の伽藍。

論点は天智天皇九年に焼失した伽藍をどこに求めるかに移ったものの、西院伽藍が天智天皇九年焼失の伽藍と併存していたのか（非再建）、また天智天皇九年以降に建築されたのか（再建）についての結論を得るには至らなかった。

なおこの時期に、會津八一が天智天皇九年の記事についての信憑性についての疑義を論じた（會津1933）が、建築史家の福山敏男から天智天皇九年の罹災記事を認めるべきとの見解が出され（福山1933）、天智天皇九年焼失記事についての議論はほぼ終焉した。また、この時期には瓦の編年の研究が進み、保井芳太郎や藤沢一夫によって、西院伽藍の瓦の年代がかなり絞り込まれた（保井1932・藤沢1938）が、西院伽藍の年代決定までには至らなかった。

新非再建説と若草伽藍の発掘－昭和14年～－

足立康は、昭和14年に、これまでの議論をふまえて[4]、新非再建論を発表した（足立1939）。基本的な考えは関野貞と同様に、若草伽藍を天智天皇九年に罹災した伽藍としたが、関野とは逆に、若草伽藍に推古天皇十五年銘の薬師如来坐像が安置され、西院伽藍に推古天皇三十一年銘の釈迦三尊像が安置されたものと考えた。ただし、西院伽藍金堂は推古天皇三十一年に釈迦堂として建立されたもので、若草伽藍の罹災後に塔や回廊が建てられて伽藍として整備されて現状の西院伽藍となったものとした。これにより、和銅年間に西院伽藍が完成した記述に対して整合性を与えた。すなわち、天智天皇九年以前は、若草伽藍と釈迦堂（西院伽藍金堂）が併存し、西院伽藍金堂のみが天智天皇九年より遡るものと考えた。

これに対して、喜田貞吉も、天智天皇九年に焼失した伽藍を若草伽藍と考えたが、若草伽藍の方位が西院伽藍の方位と異なること、西院伽藍の建築様式が慶雲三年の露盤銘をもつ法起寺三重塔の様式に近いことから、天智天皇九年以前に遡る前身釈迦堂の存在を積極的に認める必要性を否定した（喜田1939）。

このようななか、昭和14年に石田茂作らによって、若草伽藍の発掘調査がなされ、若草伽藍が四天王寺式伽藍配置をとること、出土瓦が7世紀初頭に位置づけられることが判明した（石田1940）。このことにより、若草伽藍が創建法隆寺伽藍で、天智天皇九年に罹災した可能性が高くなった。そして議

Tab.24　昭和期における「再建」・「新非再建」論の主張

	再建	新非再建
『日本書紀』	認める。	認める。
罹災伽藍	若草伽藍。	若草伽藍。
建築様式	従来の見解通り。	いわゆる推古様式の上限を天智天皇九年以前とみる。
西院瓦	保井の説で問題なし。	保井の説で問題なし。
仏像の解釈	釈迦三尊・薬師如来ともに、若草伽藍にあったものが、罹災を免れて、西院伽藍に安置された。	釈迦三尊像は釈迦堂（西院伽藍金堂）にあったもので、若草伽藍にあった薬師如来坐像は、罹災を免れた後に西院金堂に安置された。
焼失前の建物は？	若草伽藍。	若草伽藍。
二伽藍併存か？	方位が異なるのはおかしい。	方位の違いは、時期差と地形的要因を示すもので、すなわち併存否定にはならない。

論の内容は、西院伽藍が若草伽藍焼失後に造営されたものか、それとも天智天皇九年以前に若草伽藍と同時並存したかに集約された。そして建築様式上、飛鳥様式がいつまで降り得るのかが論点となった。また、瓦編年に関しては、保井芳太郎の見解を軸に、天智天皇九年を遡るかどうかが論点となった。

西院伽藍金堂・塔の調査成果と建築年代－昭和27年～－

戦前期までの議論で、天智天皇九年の罹災記事については、若草伽藍の罹災を記述したものとしてほぼ統一的な見解が得られ、再建・非再建についての明確な議論は下火になる。このようななか、戦前期から戦後にかけて西院伽藍建築の解体修理がおこなわれ、新たな知見が得られた。金堂については、裳階は創建後の改造時に付加されたもので、壁画もその時期のものであることが判明した（法隆寺国宝保存委員会1962）。塔については、柱が立ってから側柱筋の扉等の造作がなされるまでに工事の中断時期があったこと、文献上和銅四年（711）に完成した須弥山は創建後の改造であること、裳階は創建後の改造時の付加であることが判明した（法隆寺国宝保存委員会1955）。したがって、塔は造営途中に一時期工事の中断があり、現在のかたちになったのは和銅年間（708～715）と推定された。これらの成果から、造営過程が復原されたものの、建築年代が天智天皇九年以前に遡ることを示す明確な証拠は得られなかった。

これをうけて、この時期の建築史学のリーダー的な存在であった、村田治郎（村田1960）、太田博太郎（太田1972）、浅野清（浅野1953・74）、福山敏男のうち、福山が一時期非再建の立場をとった[5]以外は、明確に再建論というかたちではないものの、西院伽藍はおよそ天智天皇九年の罹災後に再建されたという認識のもと、主として再建のプロセスについて議論がおこなわれた。そのなかで天智天皇九年以降の造営開始に対して、造営期間が短かすぎるのではないかとの疑問が出されたものの、積極的に天智天皇九年以前の造営であるとする論は発表されなかった。このことにより、飛鳥様式が8世紀初頭までは残っていたことが共通認識となった。したがって、西院伽藍が様式的に天智天皇九年以前である必然性はなくなったものの、天智天皇九年より遡るかどうかについては、確証を得られないままであった。

近年の研究－昭和57年～現在－

昭和53年から58年にかけて、法隆寺境内の防災工事の事前調査として、境内の発掘調査がおこなわれた。調査では、若草伽藍の外郭施設と推定される区画施設と、その外側の外周溝を検出している。そこで注目されたのは、この外周溝が西院伽藍造営時の整地層に埋め立てられている事実が確認されたことである。これにより、若草伽藍と西院伽藍（厳密には西院伽藍の東部）は同時並存しないことが明らかとなった（法隆寺1985）。

その一方で、建築年代に関わる新たな研究として瓦の編年研究がすすみ、西院伽藍金堂の創建時に使用されたと考えられる軒平瓦の編年について、天智天皇九年を挟んだ議論がおこなわれた。そのなかで、金堂創建瓦を天智天皇九年以前に位置づけることにより、いくつかの非再建論が出された。岡本東三は、天智天皇九年の記事について干支一巡遡り説をとって、西院伽藍を7世紀第Ⅲ四半紀の建築とみた（岡本1983）。山本忠尚も同様に干支一巡遡り説をとった上で、若草伽藍の罹災に対しても疑問を呈し、推古天皇十八年の火災は若草伽藍ではなく、僧坊・大衆院の火災と考えた（山本1993）。そし

て、西院伽藍は大化四年（648）頃に、この時期になっても完成していなかった若草伽藍にかわって新たに西院伽藍を造営したと考えた。さらに、鈴木嘉吉は、金堂と五重塔の様式の差を建築年代の隔たりととらえ、足立康の新非再建説に近い考えで、西院伽藍金堂の前身は斉明期（655～662）に建築された釈迦三尊像を祀った釈迦堂と考え、天智天皇九年以降に金堂以外の伽藍を整備したと考えた（鈴木1995）。

その一方で、毛利光俊彦と花谷浩は、西院伽藍創建に使用されたと考えられる軒平瓦・軒丸瓦の年代を天智天皇九年以後と位置づけ、西院伽藍の造営時期は、従来の再建説で問題がないとの見解を出している（毛利光1992・花谷1992）。また、大橋一章は、7世紀後半以降の法隆寺・法輪寺・法起寺の伽藍造営過程の復原検討をおこない、そのなかで西院伽藍を天智天皇九年以降の造営と位置づけた（大橋1989）。同時に、飛鳥様式を7世紀後期の段階では、斑鳩の大工集団が古様式を持ち続けたローカルスタイルであったことを述べている。

このようななか、平成13年に、五重塔心柱の年輪計測によって、心柱の伐採年代が594年に限りなく近いと判明した。また、平成14年には五重塔雲肘木材の伐採年代が673年に近いということも判明した（本章第6節参照）。この結果をいかに解釈するかが問題となったが、松浦正昭はこの心柱は当初相輪塔として建てられたもので、天智天皇九年後の新伽藍造営時に、塔心柱にこれを再利用したと考えた。同時に仏像の動きを軸に、再建論に立脚したかたちで仏像の動きを説明しようと試み、釈迦三尊像は天智天皇九年に罹災した若草伽藍にあったものでなく、その安置堂として北堂なる堂を想定した（松浦2004）。なお、平成14年には、金堂の天井板が668年～669年に伐採した木材であると判明し、その解釈については、今なお議論を呼んでいる。

議論の現状と若草伽藍

以上のような長い議論のなかで、ほぼ肯定されたのは以下の内容である。

①『日本書紀』の天智天皇九年の記事は信頼できるものである。
② 天智天皇九年に焼失した伽藍は若草伽藍である。
③ 西院伽藍のうち、金堂以外の建物は、天智天皇九年火災以後の建築である。
④ いわゆる飛鳥様式とは、少なくとも斑鳩地方では、8世紀初期まで存在した様式である。

そして、残る議論は金堂の建築を天智天皇九年より古いとみるかどうかに集約されている。

まず、建築様式上は、基準となる類例がないために、編年的にいつまで遡るかの決定はむずかしい。西院伽藍の造営期間についても解釈的な要素が多く、年代を決める根拠とはなりにくい。また、年輪年代に示された木材の伐採年代は、建築年代の上限を明確に示すものの、下限についてはある程度の幅を持つ可能性がある。残る可能性は、金堂創建時に使用された瓦の編年観であるが、研究者によって天智天皇九年をはさんだ議論がつづけられており、今後の研究次第では、瓦の年代観が今以上に絞られる可能性がある。また、若草伽藍と西院伽藍の方位の違いをいかに解釈するかについては、古代条里制の研究が一つの手がかりになる可能性がある。仏像については、釈迦三尊像が本当に罹災を免れたのか、罹災痕がないのはなぜかという疑問が残っている。これは、若草伽藍にあったものでなく、まったく別の堂（北堂）にあったものを移動させたという松浦正昭の説があり、一つの可能性を示している。

以上の研究史のなかで、若草伽藍の発掘調査は『日本書紀』の天智天皇九年の罹災記事を裏付けるものとして大きな意味をもった。また、その方位が西院伽藍と異なることが明らかとなり、西院伽藍の成立を考える上での糸口を示すこととなった点で、その意義は大きい。

注

⑴ 釈迦三尊像光背銘に、「(前略)、癸未年三月中、如願敬造釈迦三尊像并俠侍及荘厳具竟、(後略)」とある。

⑵ 薬師如来坐像光背銘に、「(前略)、小治田大宮治天下大王天皇及東宮聖王大命受賜而歳次丁卯年仕奉」とあるが、銘文および仏像の年代に関して疑問視する意見があり、その決着はついていない。

⑶ 明治38年代には、主として『歴史地理』および『宗教界』上で、両論がたたかわされた。

⑷ この時期までの論争史については、足立康が『法隆寺再建非再建論争史』(1941、龍吟社)にまとめている。

⑸ 福山敏男は、若草伽藍の焼失を皇極天皇二年(643)ととらえ、西院伽藍の造営をその直後ととらえている。(福山1952)

参考文献

會津八一　1933　『法隆寺法起寺法輪寺建立年代の研究』東洋文庫

浅野　清　1953　『法隆寺建築綜観』便利堂

浅野　清　1974　「西院伽藍の年代とその様式」『奈良の寺1　法隆寺西院伽藍』岩波書店

足立　康　1939　「法隆寺再建論と新非再建論」『建築史』1－3

石田茂作　1940　「法隆寺若草伽藍址の発掘に就て」『日本上代文化の研究』法相宗勧学院同窓会

伊東忠太　1893　「法隆寺建築論」『建築雑誌』83

太田博太郎　1972　「法隆寺の歴史」『奈良六大寺大観　第一巻　法隆寺一』岩波書店

大橋一章　1989　「法輪寺」『日本の古寺美術15　斑鳩の寺』保育社

岡本東三　1983　「法隆寺天智九年焼亡をめぐって－瓦からみた西院伽藍の創建年代－」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所30周年記念論文集　同朋舎

喜田貞吉　1905　「関野平子両氏の法隆寺非再建論を駁す」『史学雑誌』第16巻第4号

喜田貞吉　1915　「法隆寺古建築は果たして推古朝か」『歴史地理』26ノ2

喜田貞吉　1931　「斑鳩寺と斑鳩宮に関する雑考」『夢殿』第2冊

喜田貞吉　1939　「今の法隆寺伽藍は焼失後の再建」『歴史地理』74ノ1

北畠治房　1900　「法隆寺二寺説」(足立康1941『法隆寺再建非再建論争史』龍吟社に紹介)

黒川眞頼　1890　「法隆寺」『国華』第9～11号

小杉榲邨　1896　「法隆寺金堂壁画の説に就きて」『国華』第79号

菅　政友　1887　「法隆寺」『菅政友全集雑稿第三』(足立康1941『法隆寺再建非再建論争史』所収、龍吟社)

鈴木嘉吉　1995　「法隆寺新再建論」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所40周年記念論文集　奈良国立文化財研究所

関野　貞　1905ａ　「法隆寺金堂塔婆及中門非再建論」『史学雑誌』第16巻第2号

関野　貞　1905ｂ　「法隆寺堂塔の建立年代に就いて」『宗教界』1ノ3

関野　貞　1922 「法隆寺堂塔非再建の新證據」『建築雑誌』第427号
関野　貞　1927 『アルス大建築講座』（足立康1941 『法隆寺再建非再建論争史』所収、龍吟社）
花谷　浩　1992 「若草伽藍の造営」『昭和資財帳第15巻　法隆寺の至宝　瓦』小学館
平子鐸嶺　1901 「大和法隆寺再造説につきての疑」『新仏教』第二巻第一一号
平子鐸嶺　1905 「法隆寺草創考」『国華』第177号
福山敏男　1933 「法隆寺問題管見」『東洋美術』第19号
福山敏男　1952 「法隆寺」『毎日ライブラリー　日本の美術』毎日新聞社
藤沢一夫　1938 「法隆寺瓦一組の年代に就て」『夢殿』第18冊（『総合古瓦之研究1』）
法 隆 寺　1985 『法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書』
法隆寺国宝保存委員会　1962 『国宝法隆寺金堂修理工事報告書』
法隆寺国宝保存委員会　1955 『国宝法隆寺五重塔修理工事報告書』
松浦正昭　2004 『飛鳥白鳳の仏像　古代仏教のかたち』日本の美術455　至文堂
光谷拓実　2001 「法隆寺五重塔心柱の年輪年代」『奈良文化財研究所紀要2001』奈良文化財研究所
村田治郎　1960 『法隆寺』毎日新聞社
毛利光俊彦　1992 「西院伽藍の造営」『昭和資財帳第15巻　法隆寺の至宝　瓦』小学館
保井芳太郎　1932 「法隆寺」『大和上代寺院志』大和史学界
山本忠尚　1993 「若草伽藍非焼失論」『論苑考古学』天山舎

5　斑鳩地域の発掘調査と地割

山本崇・鶴見泰寿・平田政彦・大林潤

はじめに

斑鳩は、大和盆地北西の縁辺部にあり、北を矢田丘陵に画され、そこから大和川に向かって続く緩やかな傾斜地で、東を富雄川、西を竜田川がそれぞれ南流する地域である。この地域には、北で西に傾く偏向地割が存在している。この地割は、大和盆地の条里地割の研究においては、大和盆地に広がる正南北方向の統一条里とは異なる、盆地の縁辺部や、狭小な河谷盆地などに展開する小規模条里区の一つと理解されている（奈良県立橿原考古学研究所1981ａ・ｂ、奈良県史編集専門委員会1987）。斑鳩の周辺では、東方の額田部地域の地割が同様の小規模条里に属するものとされ、この地割が斑鳩の地割と方位を等しくする偏向地割であることは注目される（山口1996、金田1998、仁藤2001）。額田部地域は、斑鳩とともに古代の平群郡に属し、歴史的にも地理的にも近接する地域であるが(1)、その詳細な検討は別に譲り、ここでは斑鳩の地割を中心に検討をすすめる。

斑鳩偏向地割論は、元来は古道の痕跡と現地表面に遺る遺存地割から構築された学説であり、その方法上の限界からして、古代の地割が現在まで連続することを直接に実証するものではなかった。ただ、北で西に約20°傾く偏向地割は、法隆寺東院下層の斑鳩宮推定地で確認された７世紀初頭にさかのぼる遺構や、本報告書の主たる検討対象である法隆寺若草伽藍の造営方位がいずれも西偏することと関連づけられた結果、この地域の古代開発史が土地に刻まれたものとして、先学の注目を集めてきたのである。

本節は、本報告書の刊行に機会を得て、近年つとに進展している発掘調査成果を整理し、斑鳩地域の地割を論じるための基礎資料の提示を目的とするものである。

斑鳩偏向地割の学説史と課題

斑鳩の偏向地割は、田村吉永によりはじめて本格的に論じられた(2)。田村は、まず「條里より見たる法隆寺」において、法隆寺付近において、20°の傾きを有する道路の存在を指摘し、これと同じ方位に造営された斑鳩宮・若草伽藍を同時期のものと考えた（田村1949・1962）。田村は、この地域の条里が正南北であるとの認識をもとに、条里制地割の実施を若草伽藍の建立より現法隆寺造立の間と指摘しており、偏向地割と条里との関係を論じる視角が、初発の段階から確かに存したことに注意したい。また田村は偏向地割のおよぶ46町余の範囲＝法隆寺寺辺所領説を唱え、一貫して偏向地割は条里にあらざるものとの理解を堅持した点は注目される(3)。その後、田村の指摘は、弥永貞三や今宮新らにより条里制成立時期論へと取り込まれ（弥永1956、今宮1957）、斑鳩の偏向道路は、条里制の起源論とのからみで偏向地割論へと主たる論点を移動させていくことになる。

次いで、大和統一条里を４世紀後半の開拓ないしそれの延長開拓の所産とみる落合重信は、10°程度の傾斜地割が斑鳩地域に卓越すると理解し、これを条里の施行におくれた斑鳩宮を中心とする宅地造成と理解した（落合1967）。服部昌之は、幸前地区から東里地区のＮ10°Ｗの方位を示す約10坪ほど

の小規模地割を斑鳩の条里地割と認定し、微地形と水利により先行地割が残存したものと理解している（服部１９８３）。近年条里制の起源論は活発ではないが、初期の諸研究の中で、斑鳩偏向地割をめぐるさまざまな論点が提出されたことに留意したい。

斑鳩地域の地割研究は、岩本次郎の専論が到達点といえる（岩本１９８３）。岩本は、大縮尺の地図と、国土座標値による精緻な検証を基礎に、斑鳩偏向地割論を確実に深化させた。斑鳩の１辺１０６ｍの計画地割の内部に条里地割は認められず、その範囲は高安道と奈良街道に挟まれた部分に限られることを指摘するとともに、法隆寺地区の偏向地割は、筋違道（太子道）・龍田道や若草伽藍の方位に近いおよそＮ２０°Ｗのものと、現法隆寺の伽藍およびそれに関連するおよそＮ８.５°Ｗのものとの２種類に大別され、前者が上宮王家の、後者が７世紀末から８世紀初頭における膳氏の開発による、とする理解を示した。また、稲垣晋也の指摘を継承し、地割の「偏向」の要因は地形の制約と明言した点は留意さるべきである[4]。このように、斑鳩偏向地割論は、田村が提唱し、岩本によって体系化された。論者により力点の置き方や意味づけは異なるものの、事実として偏向する地割が現地表面に遺存すること、さらに、この地域に遺存する偏向地割には方位を異にするものが混在していること、この２点は動かしがたい指摘といえる。

以上の如く従来の諸研究を整理するとき、いくつかの課題がうかびあがる。第１は、偏向地割の要因について、必ずしも検討が深められていないことである。第２に、これは第１の点とも密接にかかわる問題であるが、偏向地割のおよぶ範囲について曖昧さを残し、かつ斑鳩偏向地割の設定時期を、暗黙の前提として７世紀初頭頃の斑鳩宮造営の時代と７世紀後半から８世紀前半までの法隆寺伽藍の造営時期のみに限定してきた点である。

第１について。斑鳩偏向地割論は、条里との関連で深化してきた経緯があり、無前提に田地開発との関連で理解されてきたことは否めない。田地開発説は古くから確認でき、その認識は、偏向地割が令前の代制により設定された寺領の残存したものとする田村の理解に確認できる。その後、渡辺久雄は条里制の起源としての阡陌地割に注目し、千田稔は、その旧説においてミヤケ開発との関連を推定した（渡辺1968、千田1983・1991ａ）。先行諸説は、大和統一条里との先後関係では意見の一致をみないものの、斑鳩の偏向地割が令前の代制による田地開発にともなう古地割の残存したものとみる点では、概ね理解を共有していたのである。

ところで、通説的な位置を占めてきた斑鳩偏向地割＝代制地割説の背景には、飛鳥の方格地割論の影響が認められる（岸1988ａ・ｂ）[5]。代表的論者たる岸俊男の方格地割論は、令前の代制地割論、飛鳥の方格地割、上ツ道・中ツ道・下ツ道という大和盆地の幹線道路の設定基準、古道に沿って設定された倭ミヤケの比定など、７世紀の大和盆地開発史を包括的に説明する構想をもち、加えて、都城制の起源とも密接にかかわって提唱された点に特徴が認められる[6]。一方、斑鳩偏向地割を田地開発とみる説への批判として、都市計画説がある。千田稔は、その新稿で旧説のミヤケ起源説を撤回し、斑鳩地域の地勢をもとに、斑鳩偏向地割は、古代朝鮮の中国型都城を意識した方格地割都市、都市計画とみる理解を提出した（千田2004ａ）[7]。この理解も岸の指摘のうち、後者の理解を発展させたものと理解できる。

ところが、斑鳩偏向地割がさまざまな観点で継承してきた岸の方格地割論は、近年修正を余儀なくされている。井上和人は、飛鳥地域の遺存地割と発掘遺構を詳細に検証した結果、飛鳥の方格地割の存

在を理念上のものも含め、現状では全く確証しがたいと断じた（井上和人2004ａ）。相原嘉之は、飛鳥の宮や寺院が、設定された道路を基準に設置されたものであることを実証した（相原1998・1999）。近年の論調は、飛鳥の方格地割の存在に否定的で、方格地割に都市的空間をみる理解は沈黙した感が強い。これらの見解が提出される背景には、条里とともに方格地割を論じ、古代の国府域を方形方格に推定してきた国府形態論が、国府域の考古学的調査の進展と、それに対する歴史地理学の立場からの再検証により、軌道修正されてきたことが大きな影響を与えていたと思われる（金田2002）[8]。井上による飛鳥方格地割論の再検討は、斑鳩偏向地割の否定へと展開する。井上は、斑鳩偏向地割の先行研究を整理した上で、その到達点ともいうべき岩本の論考を丹念に検証し、斑鳩に存在した代制の方格地割への疑問を提出した（井上和人2004ｂ・ｃ）。ただ、井上の批判は、代制方格地割の否定に主眼がおかれたものであり、都城や条里地割の直接の前提となる方格地割には有効とはいえ、令前の方格地割すべてを否定するものではない点には、留意せねばならない。

第２について。主に文献史学の立場により斑鳩偏向地割の検討をおこなった山本は、現地表面に確認される正南北の地割は12世紀以降に施行された大和統一条里に由来するとの認識から、斑鳩地域に設定された地割とその施行範囲を段階的に把握する理解を示している（山本2004ａ。以下、前稿と称する）。７世紀初頭における偏向地割は、太子道（筋違道）と、それにほぼ直交し、地形に制約されて偏向する龍田道を基準に設定されたもので、ミヤケ開発に由来するとともに、斑鳩宮や寺院の基準ともされた。田地開発にともなう地割の範囲は、田村の指摘にしたがい、後に法隆寺寺辺所領となる46町余に限定されていたと理解した。従来の田地開発説には積極的な根拠が示されない弱点があったが、山本は、代制地割がミヤケで採用された技術とする理解により、斑鳩偏向地割の成因をミヤケ開発に求める立場をとる（山本2004ｂ）[9]。斑鳩の本格的開発は、丁未の役後の物部宗家旧領の没官を契機とした上宮王家の進出後に、王家が主導したものであり[10]、王家の直轄地であるが故にミヤケ開発の技術が導入されたと理解する。したがって、令前のミヤケにともなう46町余の偏向地割（後の法隆寺寺辺所領）周辺の、より広範囲の現地表面に確かに認められる偏向地割は、これより後の所産とみたのである[11]。

以上、斑鳩偏向地割の学説史を概観してきた。学説史の顕著な特徴は、初発において田村が着目した偏向道路が、条里制の起源論争の根拠として用いられる中で、偏向地割論へと展開していったことである。田村や岩本が偏向地割を限定的に把握した点は傾聴に値する指摘であるが、その意図するところは、なお条里制起源論争に引きずられている感が否めない。しかし、近年の研究によると、条里地割の成立が律令国家成立期から大きくさかのぼるとみる理解は退場しており、とりわけ本節と深くかかわる大和国条里の成立時期は、さらに降って宝亀年間頃とみる金田章裕説が穏当と思われる（金田1985・1993）。かかる研究動向によるならば、７世紀初頭の偏向地割が大和国統一条里に先行することはもはや疑う余地はなく、我々は、条里制の起源論争とは一線を画した上で、７世紀初頭から８世紀末にいたる斑鳩地域の地割の変遷、さらには中世にいたる当該地域の開発史を復原する視角が有効といえる。山本は前稿において、その当否は今後の発掘調査による埋没地割の発見に期待せざるを得ないと指摘した。本節は、かかる問題認識によるものである。

作業の概要

本節の分析対象と作業方法について記しておく。基本的な視角は、かつて岩本がおこなった作業を追試するものにすぎない。ただ、1978年から５ヵ年にわたりおこなわれた法隆寺防災施設工事にともなう発掘調査では、若草伽藍の区画施設と考えられる遺構を検出するなど、事例の蓄積がすすんでおり、岩本論文発表以後の発掘事例の整理は必須である。また、岩本が、偏向地割を寺院の伽藍との関連で把握し、その時代もおよそ現法隆寺建設以前に限定して理解したため、斑鳩地域全域において検証するという視角に乏しかった点も課題として残されている。以上の問題関心により本節では、あらためて同様の基準による発掘遺構の網羅的蒐集と整理をおこなうとともに、従来の研究により推定されている偏向地割の分布範囲にかかわらず、斑鳩地域の全域を対象として検討することとした。以下、本節における距離および角度の計測は、遺構図に示された座標値を元に、朝日航洋株式会社作成の遺跡管理システム上で展開したラスター画像データから求めたものである(12)。

ベースマップは、斑鳩町および大和郡山市域の、２,500分の１都市計画図（斑鳩町：1989年測量・1999年修正、大和郡山市：1990年測量・1997年修正）と、安堵町域の、２,500分の１安堵町全図（安堵町：1990年測図・1999年修正）とを合成して用いた。また、遺存地割の検討のために、上記より作製年の古い2,500分の１都市計画図（斑鳩町：1970年測量、大和郡山市：1978年測量）、法隆寺近辺の１,000分の１実測図（法隆寺文化財保存事務所作製、1958年）をあわせ用いるとともに、『大和国条里復原図』（斑鳩地域の該当図幅は、No.38・39・40・45・46・47の計６面）に示された、復原・調査成果を常に参照、活用したことを明記しておく。

Tab.25－１～５は、斑鳩地域でおこなわれた主な発掘調査を整理したものである。調査機関の刊行された、報告書、概報、年報など（以下、報告書等と総称する）を対象としたが、一部、整理途中の調査成果の使用をお許しいただいたものがある。このうち、本節での検討対象は、分析の精度を保つため、遺構図が報告書等に掲載されるなどして公表されているものでも、国土方眼座標が明示されているものに限ることとした。加えて、公表資料に座標の示されないもののうち、野帳などの記載から、国土方眼座標を検証できたものは資料として同列に示し、遺跡ごとの局地座標など国土方眼座標以外の測量成果に依拠した調査や、座標値が明記されない調査は、基壇など動かない目標物や地割などを手がかりに、地図上に調査区を復原できたもののみ、参考資料として用いることとした。なお、2003年度以降採用されている世界測地系による調査成果は、本報告書で採用した座標変位量、南北方向（Ｘ座標）が＋346.431ｍ、東西方向（Ｙ座標）が－261.326ｍを用いた（本書p.10・11参照）。

法隆寺の発掘調査は、戦前の解体修理工事にともないおこなわれた東院下層の調査にみるまでもなく、学史的にも注目すべきものであり、対象とした調査のうち、もっとも古いものは戦前の防火設備水道工事である。しかしながら、これらの調査は、測量方法やその精度において問題が多く、今回は参考までに表に掲げるにとどめざるを得なかった。また、小規模調査の多くは、平面図や調査の詳細が未報告であり、結果的に表に示した調査の大半を検討対象から外さざるを得なかった。後日の正式報告書の刊行に俟ち、あらためて検証を深めたいと思う。

Tab.25－1　斑鳩地域の発掘調査（1）

No.		遺　跡　名	所 在 地	調査期間	調 査 機 関	図面	備　考	報告書等
1	1	若草伽藍跡	斑鳩町法隆寺山内	1887.5	堺県官員吉田某	—	詳細不明	9
	2	若草伽藍跡	斑鳩町法隆寺山内	1939.12	石田茂作・末永雅雄	—		1
	3	若草伽藍跡（68年度）（平城54 - 4次）	斑鳩町法隆寺山内	1968.12 - 1969.1	国営調査	○	本報告書	110,112
	4	若草伽藍跡（69年度）（平城62 - 5次）	斑鳩町法隆寺山内	1969.10 - 1969.11	国営調査	○	本報告書	111,112
	5	若草伽藍跡（平城123 - 40次）	斑鳩町法隆寺山内	1980.8	奈文研	△		48,49
	6	若草伽藍推定地（試掘）	斑鳩町法隆寺山内	1986.10	橿考研	○	関連遺構なし	75
	7	若草伽藍跡（平城225次）	斑鳩町法隆寺山内	1991.4 - 1991.7	奈文研・橿考研	○	西院関連遺構	56,57
	8	若草伽藍跡（町93 - 1次）	斑鳩町法隆寺一丁目	1993.12	斑鳩町教委	●	軒丸瓦	97
	9	若草伽藍跡（町97 - 1次）	斑鳩町法隆寺一丁目	1997.10	斑鳩町教委	●	軒平瓦	101
	10	若草伽藍跡（町97 - 2次）	斑鳩町法隆寺一丁目	1998.1	斑鳩町教委	●	近世遺構	102
	11	若草伽藍跡（町99 - 1次）	斑鳩町法隆寺一丁目	1999.9	斑鳩町教委	△	東西溝SD01（平安時代溝ヵ）	93,103
	12	若草伽藍跡西方 〔法隆寺周辺遺跡（町04 - 1次）〕	斑鳩町法隆寺一丁目	2004.9 - 2005.3	斑鳩町教委	●	斜行溝、焼壁土・壁画	94,108,109
2	1	法隆寺東院礼堂・東院鐘楼 〔斑鳩宮推定地（1次）〕	斑鳩町法隆寺山内	（1934.5 - 1935.7）、 （1935.1 - 1935.8）	国宝事務所	—		14,36
	2	法隆寺東院南門・四脚門 〔斑鳩宮推定地（1次）〕	斑鳩町法隆寺山内	1939.10 （1939.4 - 1940.6）	国宝事務所	—	東院伽藍草創期中門	17,36
	3	法隆寺東院伝法堂・舎利殿・絵殿 〔斑鳩宮推定地（1次）〕	斑鳩町法隆寺山内	1939.1 - 1940.5 （1938.11 - 1943.3）	国宝事務所	△		18,36
	4	法隆寺夢殿・東院回廊 〔斑鳩宮推定地（1次）〕	斑鳩町法隆寺山内	1938.3 - 1938.12 （1937.6 - 1939.7）	国宝事務所	△		19,36
	5	法隆寺北室院本堂・表門 〔斑鳩宮推定地（1次）〕	斑鳩町法隆寺山内	（1940.7 - 1942.3）	国宝事務所	—		20,36
	6	斑鳩宮推定地（2次） （中宮寺宝蔵建設）	斑鳩町法隆寺山内	1963.9 - 1963.10	奈良博	●		37
	7	法隆寺東院隣接地 〔斑鳩宮推定地（3次）〕	斑鳩町法隆寺山内	1977.11	橿考研	●	中世遺構ヵ	63
	8	法隆寺東院隣接地 〔斑鳩宮推定地（4次）〕	斑鳩町法隆寺山内	1978.10	橿考研	●	関連遺構なし	65
	9	法隆寺防災工事 〔防災＝斑鳩宮推定地（5次）〕	斑鳩町法隆寺山内	1978.12 - 1984.3	奈文研・橿考研	○	4 - 8～13に別掲	35他
	10	法隆寺境内東院西面築地 （平城118 - 35次）	斑鳩町法隆寺山内	1979.8 - 1979.9	奈文研・橿考研	△		35,46,47
	11	法隆寺東院隣接地1979 - 1次 〔斑鳩宮推定地（7次）〕	斑鳩町法隆寺山内	1979.9	橿考研	△	布留式期の溝、中世遺構	66
	12	法隆寺東院隣接地1979 - 2次 〔斑鳩宮推定地（6次）〕	斑鳩町法隆寺山内	1979.9 - 1979.10	橿考研	●	関連遺構なし	66
	13	法隆寺東院大垣	斑鳩町法隆寺山内	（1983.6 - 1985.6）	県文保	—		31
	14	斑鳩宮推定地（8次）	斑鳩町法隆寺山内	1986.12 - 1987.2	橿考研	○		75
	15	斑鳩宮推定地（9次）	斑鳩町法隆寺山内	1987.2	橿考研	○		75
	16	法隆寺旧境内	斑鳩町法隆寺山内	1993.7	橿考研	○	関連遺構なし	81
	17	斑鳩宮推定地（町94 - 1次）	斑鳩町法隆寺北一丁目	1994.8 - 1994.9	斑鳩町教委	●	顕著な遺構・遺物なし	98
	18	斑鳩宮推定地（町94 - 2次）	斑鳩町法隆寺北一丁目	1994.9	斑鳩町教委	△	飛鳥時代斜行溝	98
	19	斑鳩宮推定地（町95 - 1次）	斑鳩町法隆寺北一丁目	1995.10	斑鳩町教委	●		99
	20	斑鳩宮推定地（町97 - 1次）	斑鳩町法隆寺北一丁目	1997.6	斑鳩町教委	●	近世瓦出土	101
3	1	法隆寺西円堂	斑鳩町法隆寺山内	（1935.9 - 1936.11）	国宝事務所	—	基壇の一部発掘。階段検出	15
	2	法隆寺大講堂	斑鳩町法隆寺山内	1936.7 - 1936.11 （1935.8 - 1938.11）	国宝事務所	—		16
	3	法隆寺聖霊院	斑鳩町法隆寺山内	1946.8 - 1946.10、 1947.2 （1943.3 - 1948.5）	国宝事務所	—		21
	4	法隆寺東室	斑鳩町法隆寺山内	（1957.1 - 1960.3）	県文保	—		22
	5	法隆寺福園院	斑鳩町法隆寺山内	1959.11 - 1959.12	石田茂作・村田治郎	●		4
	6	法隆寺妻室	斑鳩町法隆寺山内	（1960.4 - 1963.1）	県文保	—		23
	7	法隆寺綱封蔵	斑鳩町法隆寺山内	（1963.2 - 1966.10）	県文保	—	奈良時代末～平安時代初期の掘立柱建物検出	24
	8	法隆寺境内（新宝庫建設予定地） （平城39 - 4次）	斑鳩町法隆寺山内	1966.10	奈文研	△		—
	9	法隆寺西院東南隅子院築垣	斑鳩町法隆寺山内	（1968.7 - 1970.6）	県文保	—		25
	10	法隆寺西院大垣南面（南大門東方） （平城62 - 13次、平城74 - 15次）	斑鳩町法隆寺山内	1969.5 - 1969.8、 1971.8 （1967.6 - 1974.6）	県文保・奈文研	—		26
	11	法隆寺西院大垣東面・南面（南面西方）・西面	斑鳩町法隆寺山内	（1974.7 - 1976.12）、 （1976.1 - 1979.8）	県文保	△		29
	12	法隆寺大湯屋・大湯屋表門・西南隅子院築垣	斑鳩町法隆寺山内	（1972.1 - 1974.11）	県文保	—		27

Tab.25－2　斑鳩地域の発掘調査（2）

No.		遺　跡　名	所 在 地	調査期間	調 査 機 関	図面	備　考	報告書等
3	13	法隆寺境内（寺務所新営計画事前調査）（平城98 - 25次）	斑鳩町法隆寺山内	1976.9 - 1976.10	奈文研	△	顕著な遺構・遺物なし	40,41
	14	法隆寺境内（寺務所新営計画事前調査）（平城98 - 26次）	斑鳩町法隆寺山内	1976.11 - 1976.12	奈文研	△		40,41
	15	法隆寺境内（西大門脇番所跡）（平城103 - 20次）	斑鳩町法隆寺山内	1977.8	奈文研	△		42,43
	16	法隆寺旧境内（中院）	斑鳩町法隆寺山内	1978.9	橿考研	●	中世溝ヵ	65
	17	法隆寺西院東南隅子院築垣・西院西南隅子院築垣	斑鳩町法隆寺山内	（1980.9 - 1983.5）	県文保	—		30
	18	法隆寺境内（収納庫建設）（平城151 - 38次）	斑鳩町法隆寺山内	1983.10 - 1983.12	奈文研	○		34,53,54
	19	法隆寺旧境内	斑鳩町法隆寺山内	1988.2	橿考研	—		76
	20	法隆寺旧境内（弥勒院庫裏）	斑鳩町法隆寺山内	1990.7 - 1990.8	橿考研	—		79
	21	法隆寺境内北方子院跡（百済観音堂）（平城226次）	斑鳩町法隆寺山内	1991.6 - 1992.3	奈文研・橿考研	○		56,57
	22	法隆寺旧境内（西院伽藍）	斑鳩町法隆寺山内	1991.	奈文研・橿考研	●	詳細不明	—
	23	法隆寺旧境内	斑鳩町法隆寺山内	1995.3	橿考研	—		84
	24	法隆寺境内（喜多院東面築地）（平城226次補足）	斑鳩町法隆寺山内	1995.10	奈文研・橿考研	—		58
	25	法隆寺旧境内（政南院跡）（旧、東茶所）	斑鳩町法隆寺山内	1999.6 - 1999.7、2000.3	橿考研	○	中世近世遺構	87
	26	史跡法隆寺旧境内（町02 - 1次）	斑鳩町法隆寺山内	2002.11 - 2003.1	斑鳩町教委	●	近世遺物出土	106,107
	27	法隆寺旧境内（県2003 - 1次）	斑鳩町法隆寺一丁目	2003.8 - 2003.9	橿考研	○	中世以降遺構	90
	28	法隆寺旧境内（県2003 - 2次）	斑鳩町法隆寺一丁目	2004.2 - 2004.5	橿考研	○		91
	29	史跡法隆寺旧境内（町03 - 1次）	斑鳩町法隆寺山内	2004.2	斑鳩町教委	●		108
	30	史跡法隆寺旧境内（町05 - 1次）	斑鳩町法隆寺山内	2006.2 - 2006.3	斑鳩町教委	○	東西溝から焼けた瓦・壁土出土	95
4	1	法隆寺防火設備水道工事	斑鳩町法隆寺山内	1924.2 - 1927.10	防火事務所	—	瓦など出土	12,13
	2	法隆寺旧境内（防災幹線敷設）	斑鳩町法隆寺山内	1977.12	橿考研	—		63
	3	法隆寺旧境内（大湯屋周辺渡り廊下）	斑鳩町法隆寺山内	1978.1	橿考研	●		63
	4	法隆寺旧境内(地蔵院北および東築地）	斑鳩町法隆寺山内	1978.1	橿考研	●		63
	5	法隆寺旧境内(福園院山門および築地）	斑鳩町法隆寺山内	1978.3	橿考研	●		63
	6	法隆寺旧境内（律学院山門）	斑鳩町法隆寺山内	1978.3	橿考研	●		63
	7	法隆寺旧境内(寺務所西門および築地）	斑鳩町法隆寺山内	1978.3	橿考研	●		63
	8	法隆寺防災工事（78年度）	斑鳩町法隆寺山内	1978.12 - 1979.1	奈文研・橿考研	○	（1カ所）	35,44,45
	9	法隆寺防災工事（79年度）	斑鳩町法隆寺山内	1980.2 - 1980.4	奈文研・橿考研	○	（3カ所）	35,46,47
	10	法隆寺防災工事（80年度）	斑鳩町法隆寺山内	1980.6 - 1981.3	奈文研・橿考研	○	（33カ所）	35,48,49,67
	11	法隆寺防災工事（81年度）	斑鳩町法隆寺山内	1981.6 - 1982.3	奈文研・橿考研	○	（48カ所）	32,35,50,51
	12	法隆寺防災工事（82年度）	斑鳩町法隆寺山内	1982.4 - 1983.3	奈文研・橿考研	○	（43カ所）	33,35,52,53,71
	13	法隆寺防災工事（83年度）	斑鳩町法隆寺山内	1983.5 - 1984.3	奈文研・橿考研	○	（26カ所）	34,35,54,55
5	1	中宮寺跡（1次）	斑鳩町幸前	1963.9 - 1963.10	石田茂作・稲垣晋也	○		6,8
	2	中宮寺跡（2次）	斑鳩町幸前	1972.11 - 1972.12	橿考研	△		8
	3	中宮寺跡	斑鳩町幸前	1977.11	橿考研	△		64
	4	中宮寺跡（3次）（県1次）	斑鳩町幸前旧殿	1983.2 - 1983.3	橿考研	△		70
	5	中宮寺跡（4次）（県2次）	斑鳩町幸前	1984.2 - 1984.3	橿考研	△		72
	6	中宮寺跡（5次）（県3次）	斑鳩町法隆寺旧殿	1984.4 - 1984.5	橿考研	△		73
	7	中宮寺跡（県4次）	斑鳩町幸前	1987.5 - 1987.8	橿考研	○		92
	8	中宮寺跡（県5次）	斑鳩町幸前	1990.1 - 1990.3	橿考研	—		78
	9	中宮寺跡（県6次）	斑鳩町幸前字田殿	1994.12 - 1995.1	橿考研・斑鳩町教委	○	斜行溝	82,98
	10	中宮寺跡（県7次）	斑鳩町法隆寺東字旧殿・赤門前	1997.2 - 1997.3	橿考研・斑鳩町教委	○		85,100
	11	中宮寺跡（県8次）	斑鳩町法隆寺東二丁目・幸前一丁目	1997.2 - 1997.3	橿考研・斑鳩町教委	○		86,101
	12	中宮寺跡（町04 - 1次）	斑鳩町法隆寺東二丁目	2004.6 - 2004.9	斑鳩町教委	●		108
6	1	法輪寺旧境内（1次）主要堂宇	斑鳩町三井	1950.12	石田茂作	—		2,3
	2	法輪寺旧境内（2次）講堂基壇	斑鳩町三井	1958.	石田茂作・稲垣晋也	—		7
	3	法輪寺旧境内（3次）講堂基壇	斑鳩町三井	1965.	竹島卓一	—		—
	4	法輪寺三重塔基壇〔法起寺旧境内4次〕（平城79 - 23次）	斑鳩町三井	1972.10 - 1972.11	奈良博・奈文研・橿考研	△	塔基壇	11,39
	5	法輪寺旧境内（5次）	斑鳩町三井	1974.8 - 1974.10	橿考研	—		60
	6	法輪寺（次数外）	斑鳩町三井	1975.12 - 1976.1	橿考研	—		62
	7	法輪寺旧境内（6次）	斑鳩町三井	1977.10	橿考研	—		64

Tab.25－3　斑鳩地域の発掘調査（3）

No.		遺　跡　名	所 在 地	調査期間	調 査 機 関	図面	備　考	報告書等
6	8	法輪寺旧境内（7次） （法輪寺南地区遺跡）	斑鳩町三井	1982.7 - 1982.8	橿考研	△	中世石列	69
	9	法輪寺旧境内（8次）〔史跡三井〕	斑鳩町三井	1991.	橿考研	—	立会調査	—
	10	法輪寺旧境内（9次）（町93 - 1次）	斑鳩町三井	1993.7	斑鳩町教委	●	顕著な遺構・遺物なし	97
	11	法輪寺旧境内（10次）（町94 - 1次）	斑鳩町三井	1994.7	斑鳩町教委	●	顕著な遺構・遺物なし	98
	12	法輪寺旧境内（11次）旧金堂基壇	斑鳩町三井	2000.8 - 2000.12	斑鳩町教委	●		104
	13	法輪寺旧境内（12次）旧講堂基壇東面	斑鳩町三井	2001.8 - 2002.3	斑鳩町教委	●		105,106
	14	法輪寺旧境内（13次）旧金堂基壇東面、旧講堂基壇北面など	斑鳩町三井	2002.11 - 2003.3	斑鳩町教委	●		106,107
	15	法輪寺旧境内（14次）旧中門基壇西面など	斑鳩町三井	2004.2 - 2004.5	斑鳩町教委	●		108
7	1	法起寺旧境内（1次）金堂・講堂基壇	斑鳩町岡本	1961.7 - 1961.8	奈良博	●		5
	2	法起寺旧境内（2次）築地及び内濠（県道新設）（平城54 - 6次）	斑鳩町岡本	1968.12 - 1969.1	奈良県・奈文研	△		38,59
	3	法起寺旧境内（3次）（三重塔解体修理工事）	斑鳩町岡本	1973.1 - 1973.3 （1972.2 - 1975.1）	奈良県	●		28
	4	法起寺旧境内（4次）（三重塔防災工事）	斑鳩町岡本	1976.11 - 1976.12	橿考研	△		61
	5	法起寺旧境内（5次）回廊東北隅（宝物館建設）（平城123 - 42次）	斑鳩町岡本	1981.3 - 1981.4	奈文研・橿考研	○		48,49
	6	法起寺旧境内	斑鳩町岡本	1983.1	橿考研	—		71
	7	法起寺旧境内（6次） （電線地下埋設工事）（町93 - 1次）	斑鳩町岡本	1993.12	斑鳩町教委	●	石組斜行溝	97
	8	法起寺旧境内（6次 - ②）	斑鳩町岡本	1994.2	斑鳩町教委	●	溝	98
	9	法起寺旧境内（6次 - ③）	斑鳩町岡本	1994.5	斑鳩町教委	●	飛鳥時代軒丸瓦出土	98
	10	法起寺旧境内（7次）	斑鳩町岡本	1994.2 - 1994.3	橿考研・斑鳩町教委	○		81,98
	11	法起寺旧境内（8次）	斑鳩町岡本	1994.12	橿考研・斑鳩町教委	○		82,98
	12	法起寺旧境内（9次）	斑鳩町岡本	1994.12 - 1995.2	橿考研・斑鳩町教委	○		82
	13	法起寺旧境内（10次）	斑鳩町岡本	1995.3	橿考研・斑鳩町教委	○		82
	14	法起寺旧境内（11次）	斑鳩町三井・岡本	1995.9 - 1995.10	橿考研	○		83
	15	法起寺旧境内（12次）	斑鳩町三井・岡本	1996.3	橿考研	○		83
	16	法起寺旧境内（13次）（町98 - 1次）	斑鳩町岡本	1998.8 - 1998.9	斑鳩町教委	●	飛鳥時代柱穴、奈良時代溝	102
8	1	法隆寺周辺遺跡 〔中宮寺境内（庫裏新築）〕	斑鳩町法隆寺北	1988.6	橿考研	—		77
	2	法隆寺近接地（町93 - 1次）	斑鳩町法隆寺北一丁目	1993.7	斑鳩町教委	●		97
	3	法隆寺近接地（町93 - 2次）	斑鳩町法隆寺二丁目	1993.8	斑鳩町教委	●		97
	4	法隆寺近接地（町94 - 1次）	斑鳩町法隆寺北一丁目	1994.4	斑鳩町教委	—	鎌倉時代井戸	98
	5	法隆寺東院近接地（町94 - 1次）	斑鳩町法隆寺北二丁目	1994.6	斑鳩町教委	●	顕著な遺構・遺物なし	98
	6	法隆寺旧境内隣接地	斑鳩町法隆寺一丁目	1995.7	橿考研	●	近世斜行溝	83
	7	法隆寺隣接地（町96 - 1次）	斑鳩町法隆寺北一丁目	1996.10	斑鳩町教委	●	中世溝、手彫り忍冬唐草文軒平瓦	100
	8	法隆寺隣接地（町98 - 1次）	斑鳩町法隆寺一丁目	1998.6	斑鳩町教委	●	顕著な遺構・遺物なし	102
	9	法隆寺隣接地（町98 - 2次）	斑鳩町法隆寺西一丁目	1998.6	斑鳩町教委	●	近世溝	102
	10	法隆寺隣接地（町98 - 3次）	斑鳩町法隆寺北一丁目	1998.6	斑鳩町教委	●	古墳時代溝	102
	11	法隆寺周辺遺跡（町99 - 1次）	斑鳩町法隆寺北一丁目	1999.6	斑鳩町教委	●	顕著な遺構・遺物なし	93,103
	12	法隆寺周辺遺跡（町00 - 1次）	斑鳩町法隆寺北一丁目	2001.1	斑鳩町教委	●		105
	13	法隆寺周辺遺跡（町01 - 1次）	斑鳩町法隆寺一丁目	2001.4	斑鳩町教委	●	顕著な遺構・遺物なし	105
	14	法隆寺周辺遺跡（町01 - 2次）	斑鳩町法隆寺一丁目	2001.4	斑鳩町教委	●		105
	15	法隆寺周辺遺跡（町01 - 3次）	斑鳩町法隆寺一丁目	2001.6	斑鳩町教委	●	顕著な遺構・遺物なし	105
	16	法隆寺周辺遺跡（町01 - 4次）	斑鳩町法隆寺北一丁目	2002.3	斑鳩町教委	●		106
	17	法隆寺周辺遺跡（町02 - 1次）	斑鳩町法隆寺西一丁目	2002.11	斑鳩町教委	●	溝	106
	18	法隆寺周辺遺跡（町02 - 2次）	斑鳩町法隆寺一丁目	2002.11	斑鳩町教委	●	顕著な遺構・遺物なし	106
	19	法隆寺周辺遺跡（町02 - 3次）	斑鳩町法隆寺一丁目	2002.12	斑鳩町教委	●	顕著な遺構・遺物なし	106
	20	法隆寺周辺遺跡（町04 - 1次）	斑鳩町法隆寺一丁目	2004.9 - 2005.3	斑鳩町教委	●	若草伽藍跡1 - 12として掲載	94,108,109
	21	法隆寺周辺遺跡（町04 - 2次）	斑鳩町法隆寺一丁目	2004.10	斑鳩町教委	●		108
	22	法隆寺周辺遺跡（町04 - 3次）	斑鳩町法隆寺一丁目	2004.12 - 2005.3	斑鳩町教委	●		—
	23	法隆寺周辺遺跡（町05 - 1次）	斑鳩町法隆寺二丁目	2005.6	斑鳩町教委	●		109
	24	法隆寺周辺遺跡（町05 - 2次）	斑鳩町法隆寺一丁目	2005.6 - 2005.7	斑鳩町教委	●		109
	25	法隆寺周辺遺跡（町05 - 3次）	斑鳩町法隆寺一丁目	2005.8 - 2005.9	斑鳩町教委	●		109
	26	法隆寺周辺遺跡（町05 - 4次）	斑鳩町法隆寺二丁目	2005.12	斑鳩町教委	●		109
	27	法隆寺周辺遺跡（町05 - 5次）	斑鳩町法隆寺一丁目	2006.1 - 2006.3	斑鳩町教委	●		—

Tab.25－4　斑鳩地域の発掘調査（4）

No		遺　跡　名	所 在 地	調査期間	調 査 機 関	図面	備　考	報告書等
8	28	法隆寺周辺遺跡（町05 - 6次）	斑鳩町法隆寺二丁目	2006.2	斑鳩町教委	●		—
9	1	法隆寺裏山遺跡（町04 - 1次）	斑鳩町大字法隆寺	2004.8 - 2005.8	斑鳩町教委	—	火葬墓	108
	2	法隆寺裏山遺跡（町05 - 1次）	斑鳩町大字法隆寺	2005.12 - 2006.2	斑鳩町教委	—	顕著な遺構・遺物なし	109
10	1	中宮寺跡隣接地（町98 - 1次）	斑鳩町法隆寺東二丁目	1998.8	斑鳩町教委	●	中世ヵ土坑	102
	2	（仮称）神ノ木遺跡（町98 - 1次）	斑鳩町法隆寺北二丁目	1998.12	斑鳩町教委	●	飛鳥～奈良掘立柱建物群	102
	3	中宮寺跡隣接地（町98 - 2次）	斑鳩町法隆寺東二丁目	1999.2 - 1999.3	斑鳩町教委	●	溝	103
	4	中宮寺跡周辺遺跡（町99 - 1次）（旧、（仮称）神ノ木遺跡）	斑鳩町法隆寺北二丁目	1999.6	斑鳩町教委	△	斜行建物	93,103
	5	中宮寺跡周辺遺跡（町99 - 2次）（旧、（仮称）神ノ木遺跡）	斑鳩町法隆寺北二丁目	1999.10	斑鳩町教委	△	溝のみ	93,103
	6	中宮寺跡周辺遺跡（町01 - 1次）	斑鳩町法隆寺東一丁目他	2001.12 - 2002.2	斑鳩町教委	●	大型掘立柱建物群・溝	105,106
	7	中宮寺跡周辺遺跡（町03 - 1次）	斑鳩町法隆寺東二丁目	2003.7	斑鳩町教委	●	顕著な遺構・遺物なし	107
11	1	西里遺跡（1次）	斑鳩町法隆寺	1984.11 - 1984.12	橿考研	●		73
	2	西里遺跡（2次）	斑鳩町法隆寺	1985.8 - 1985.10	橿考研	△		74
	3	西里遺跡（3次）	斑鳩町法隆寺西山	1990.6 - 1990.7	橿考研	●		79
	4	西里遺跡（4次）	斑鳩町法隆寺西一丁目	1990.7 - 1990.8	橿考研	●		79
	5	西里遺跡（町93 - 1次）	斑鳩町法隆寺西一丁目	1993.5	斑鳩町教委	—		97
	6	西里遺跡（町93 - 2次）	斑鳩町法隆寺西一丁目	1993.8	斑鳩町教委	—		97
	7	西里遺跡（町93 - 3次）	斑鳩町法隆寺西一丁目	1993.8 - 1993.9	斑鳩町教委	—	飛鳥時代土器	97
	8	西里遺跡（町93 - 4次）	斑鳩町法隆寺西一丁目	1993.9	斑鳩町教委	—		97
	9	西里遺跡（町93 - 5次）	斑鳩町法隆寺西一丁目	1994.3	斑鳩町教委	—		98
	10	西里遺跡（町94 - 1次）	斑鳩町法隆寺西二丁目	1994.6	斑鳩町教委	—		98
	11	西里遺跡（町94 - 2次）	斑鳩町法隆寺西一丁目	1994.12	斑鳩町教委	—		98
	12	西里遺跡（町94 - 3次）	斑鳩町法隆寺西一丁目	1995.1	斑鳩町教委	—		99
	13	西里遺跡（町95 - 1次）	斑鳩町法隆寺西一丁目	1995.4	斑鳩町教委	—		99
	14	西里遺跡（町96 - 1次）	斑鳩町法隆寺西一丁目	1997.3	斑鳩町教委	●		101
	15	西里遺跡（町98 - 1次）	斑鳩町大字法隆寺	1998.8 - 1998.10	斑鳩町教委	●	飛鳥時代掘立柱列	102
	16	西里遺跡（町00 - 1次）	斑鳩町法隆寺西二丁目	2000.4	斑鳩町教委	●		104
	17	西里遺跡（町00 - 2次）	斑鳩町法隆寺西一丁目	2000.7	斑鳩町教委	●		104
	18	西里遺跡（町00 - 3次）	斑鳩町法隆寺西一丁目	2000.8	斑鳩町教委	●		104
	19	西里遺跡（町01 - 1次）	斑鳩町法隆寺西一丁目	2001.5	斑鳩町教委	—		105
	20	西里遺跡（町01 - 2次）	斑鳩町法隆寺西二丁目	2001.7	斑鳩町教委	—		105
	21	西里遺跡（町02 - 1次）	斑鳩町法隆寺西一丁目	2002.8	斑鳩町教委	●	飛鳥時代軒丸瓦	106
	22	西里遺跡（町02 - 2次）	斑鳩町法隆寺西一丁目	2002.9 - 2002.10	斑鳩町教委	●		106
	23	西里遺跡（町02 - 3次）	斑鳩町法隆寺西一丁目	2003.1	斑鳩町教委	●		107
	24	西里遺跡（町02 - 4次）	斑鳩町法隆寺西二丁目	2003.1	斑鳩町教委	●		107
	25	西里遺跡（町03 - 1次）	斑鳩町法隆寺西一丁目	2003.6 - 2003.8	斑鳩町教委	●		107
	26	西里遺跡（町03 - 2次）	斑鳩町法隆寺西一丁目	2003.8	斑鳩町教委	●		107
	27	西里遺跡（町03 - 3次）	斑鳩町法隆寺西一丁目	2003.11	斑鳩町教委	●		107
	28	西里遺跡（町05 - 1次）	斑鳩町法隆寺西一丁目	2005.12	斑鳩町教委	●		109
12		西里北遺跡	斑鳩町服部～法隆寺西	1994.2	橿考研	△	関連遺構なし	81
13	1	東里遺跡（試掘）	斑鳩町法隆寺	1991.11 - 1992.1	斑鳩町教委	—	弥生期竪穴住居跡、弥生土器	—
	2	東里遺跡（92 - 1次）	斑鳩町法隆寺	1992.7 - 1992.10	斑鳩町教委	—	弥生期竪穴住居跡、弥生土器	—
	3	東里遺跡（試掘）	斑鳩町法隆寺	2000.12	橿考研	●	顕著な遺構・遺物なし	88
14		（仮称）極楽寺遺跡（町94 - 1次）	斑鳩町法隆寺北一丁目	1994.8 - 1994.10	斑鳩町教委	●	飛鳥期土器、中世以降	98
15		（仮称）天満山遺跡（町98 - 1次）	斑鳩町法隆寺北一丁目	1999.1 - 1999.3	斑鳩町教委	—	飛鳥～奈良時代掘立柱建物	103
16		法隆寺北2丁目試掘	斑鳩町法隆寺北二丁目	1993.1	橿考研	●	顕著な遺構・遺物なし	80
17		藤ノ木古墳隣接地	斑鳩町服部	1994.12	橿考研	●	顕著な遺構・遺物なし	82
18		法起寺南遺跡	大和郡山市小泉町	1982.10	橿考研	△	古墳時代ヵ	69
19		岡原遺跡	斑鳩町三井地内秋葉川	1996.8	橿考研	●	顕著な遺構・遺物なし	85
20	1	上宮遺跡（1次）	斑鳩町法隆寺南三丁目	1991.4 - 1991.11	斑鳩町教委	△	奈良時代掘立柱建物群	96
	2	上宮遺跡（2次）	斑鳩町法隆寺南三丁目	1991.10	斑鳩町教委	●	顕著な遺構なし	—
	3	上宮遺跡（3次）	斑鳩町法隆寺南三丁目	1992.2 - 1992.3	斑鳩町教委	●	溝	—
	4	上宮遺跡（4次）	斑鳩町法隆寺南三丁目	1993.12 - 1994.1	斑鳩町教委	●		97
	5	上宮遺跡（5次）	斑鳩町法隆寺南三丁目	1994.9	斑鳩町教委	●		98

Tab.25－5　斑鳩地域の発掘調査（5）

No.		遺　跡　名	所 在 地	調査期間	調 査 機 関	図面	備　考	報告書等
20	6	上宮遺跡（6次）	斑鳩町法隆寺南三丁目	1995.3	斑鳩町教委	●	飛鳥時代溝、奈良時代柱穴群	99
	7	上宮遺跡（7次）	斑鳩町法隆寺南三丁目	1995.11 - 1996.1	斑鳩町教委	●	大型掘立柱建物	99,100,101
	8	上宮遺跡（8次）	斑鳩町法隆寺南三丁目	1996.11 - 1997.1	斑鳩町教委	●	奈良時代～中世溝	100,101
	9	上宮遺跡（9次）	斑鳩町法隆寺南三丁目	1997.3	斑鳩町教委	●	中世河川跡	101
	10	上宮遺跡（9次②）	斑鳩町法隆寺南三丁目	1997.5	斑鳩町教委	●	中世河川跡	101
	11	上宮遺跡（10次）	斑鳩町法隆寺南三丁目	1997.6 - 1997.7	斑鳩町教委	△	飛鳥時代井戸、古墳～飛鳥時代ヵ溝	101
	12	上宮遺跡（10次②）	斑鳩町法隆寺南三丁目	1998.10 - 1999.1	斑鳩町教委	●	奈良時代大型建物、飛鳥時代溝	101,102
	13	上宮遺跡（11次）	斑鳩町法隆寺南三丁目	1998.5	斑鳩町教委	●	飛鳥時代軒平瓦	102
	14	上宮遺跡（11次②）	斑鳩町法隆寺南三丁目	1998.10	斑鳩町教委	●	顕著な遺構・遺物なし	102
	15	上宮遺跡（12次）	斑鳩町法隆寺南三丁目	1998.6 - 1998.7	斑鳩町教委	●	飛鳥時代井戸	102
	16	上宮遺跡（12次②）	斑鳩町法隆寺南三丁目	1999.3	斑鳩町教委	●		103
	17	上宮遺跡（13次）	斑鳩町法隆寺南三丁目	1998.6	斑鳩町教委	●	顕著な遺構・遺物なし	102
	18	上宮遺跡（14次）	斑鳩町法隆寺南三丁目	2000.1 - 2000.3	斑鳩町教委	○	南北溝、木簡	93
	19	上宮遺跡（15次）	斑鳩町法隆寺南三丁目	2001.3	斑鳩町教委	●	成福寺環濠、近世墨書鍵札	105
	20	上宮遺跡（16次）	斑鳩町法隆寺南三丁目	2002.2 - 2002.3	斑鳩町教委	●	溝	106
	21	上宮遺跡（17次）	斑鳩町法隆寺南三丁目	2003.8	斑鳩町教委	●	弥生時代溝・土器	107
21		（仮称）五百井遺跡（町97 - 1次）	斑鳩町五百井一丁目	1997.7 - 1997.8	斑鳩町教委	△	7世紀末～8世紀初埋没の斜行溝	101
22		（仮称）正隆寺遺跡（町00 - 1次）	斑鳩町興留二丁目	2000.4	斑鳩町教委	―	東西溝	104
23	1	（仮称）新家遺跡（町94 - 1次）	斑鳩町興流十丁目	1994.5	斑鳩町教委	●	遺物散布地	―
	2	（仮称）新家遺跡（町94 - 2次）	斑鳩町興流十丁目	1994.9 - 1994.11	斑鳩町教委	●	性格不明の近世土坑群	―
24	1	目安遺跡	斑鳩町目安	1982.1 - 1982.3	橿考研	△	中世近世土坑群	68
	2	目安遺跡（町01 - 1次）	斑鳩町目安三丁目	2002.3	斑鳩町教委	●	顕著な遺構・遺物なし	106
25		龍田神社隣接地	斑鳩町龍田一丁目	1998.5 - 1998.6	斑鳩町教委	●	中世池、漆器	102
26	1	清水前遺跡（1次）	斑鳩町小吉田一丁目・二丁目	2001.1 - 2001.3	橿考研	○	中世条里	88
	2	清水前遺跡（2次）	斑鳩町小吉田一丁目	2002.9	橿考研	○	中世以降溝	89
27		法隆寺線（町99 - 1次）	斑鳩町小吉田二丁目	1999.12	斑鳩町教委	●	顕著な遺構・遺物なし	93,103
28		（仮称）服部遺跡（町01 - 1次）	斑鳩町小吉田二丁目他	2002.2 - 2002.3	斑鳩町教委	●	弥生期ピット群・溝、弥生土器	106
29		（仮称）稲葉遺跡（町98 - 1次）	斑鳩町稲葉車瀬二丁目	1998.4 - 1998.5	斑鳩町教委	●	鎌倉時代土坑、瓦器	102

【斑鳩地域の発掘調査表　凡例】

1．この表は、斑鳩地域において発掘調査がおこなわれた、飛鳥時代以降の主な遺跡を調査次数別に整理したものである。周知の遺跡でも、古墳時代以前を中心とする遺跡や、報告書等や発掘記録を実見できず調査内容の詳細を確認できなかった調査、立会調査は、原則として表から除いた。

1．記載内容は、調査機関の発行する報告書等によるが、野帳・日誌などの記録により一部改めた部分がある。

1．遺跡の排列は、法隆寺旧境内（若草伽藍・東院伽藍・西院伽藍など、防災工事など全域にわたるもの）、中宮寺跡、法輪寺旧境内、法起寺旧境内、その他とした。その他は、概ね、法隆寺周辺遺跡（旧、法隆寺近接地･法隆寺隣接地）、中宮寺跡周辺遺跡（旧、中宮寺跡隣接地）、法隆寺旧境内の周辺、東北から西南方向の順とした。

1．各遺跡の調査次数について､法起寺旧境内の調査次数は､宮原晋一「法起寺境内調査一覧」(文献80所収)､法輪寺旧境内の調査次数は、平田2003をそれぞれ参照した。中宮寺跡の調査次数は、注15を参照のこと。

1．調査機関は、次の略称を用いた。国宝事務所＝法隆寺国宝保存工事事務所、県文保＝奈良県文化財保存事務所、防火事務所＝法隆寺防火設備水道工事事務所、奈良博＝奈良国立博物館、奈文研＝奈良国立文化財研究所、奈良県＝奈良県教育委員会、橿考研＝奈良県立橿原考古学研究所、斑鳩町教委＝斑鳩町教育委員会。

1．建造物修理工事にともなう発掘調査の調査期間は、発掘調査（ないし地下調査）の期間が特記されているものはそれを採ったが、原則として、修理工事全般の期間でこれに代え、(　　)で区別した。

1．図面欄の記号は、国土座標による測量成果にもとづくものは○、局地座標などによる実測図のうち検証を経たものは△、調査位置のみを図1に示したものは●、詳細不明なものは―で示し区別した。

1．備考欄には、遺構や遺物のうち特筆すべきものを掲げた。

1．報告書欄の番号は、p.204～205に掲げた報告書等文献一覧の番号と一致している。

報告書等文献一覧（Tab.25－1～5の文献番号と対応）

【個人の著作】
1．　石田茂作1944　「法隆寺若草伽藍址の発掘」『總説飛鳥時代寺院址の研究』第一書房
2．　石田茂作1951　『法輪寺伽藍の発掘』写真帳
3．　石田茂作1955　「奈良県生駒郡法輪寺三重塔址」『日本考古学年報』第3号
4．　石田茂作・村田治郎1959　『法隆寺福園院址第2回発掘調査概報』
5．　石田茂作・小泉顕夫他1961　『法起寺第2回発掘調査概報』
6．　石田茂作・稲垣晋也1963　『中宮寺址発掘調査概報』
7．　稲垣晋也1958　『法輪寺講堂址発掘調査報告』
8．　稲垣晋也1973　「旧中宮寺跡の発掘と現状」『日本歴史』第299号
9．　荻野三七彦1940　「法隆寺献物御物の目録に就いて―附、若草伽藍発掘記事」『画説』第40号
10．中村春寿・稲垣晋也1960　「法起寺の発掘成果」『奈良県観光』第48号
11．西山卯三・鈴木嘉吉1972　『法輪寺三重塔調査報告書』観光資源保護財団

【建造物修理工事報告書】
12．奈良県1924　『奈良県史蹟名勝天然記念物調査会報告第九回 法隆寺出土古瓦の研究』
13．法隆寺国宝保存事業部1928　『法隆寺防火設備水道工事竣功報告書』
14．法隆寺国宝保存事業部1937　『法隆寺国宝保存工事報告書第三冊 国宝建造物東院礼堂および東院鐘楼修理工事報告』
15．法隆寺国宝保存事業部1938　『法隆寺国宝保存工事報告書第四冊 国宝建造物法隆寺西円堂修理工事報告』
16．法隆寺国宝保存事業部1941　『法隆寺国宝保存工事報告書第六冊 国宝建造物法隆寺大講堂修理工事報告』
17．法隆寺国宝保存事業部1942　『法隆寺国宝保存工事報告書第七冊 国宝建造物法隆寺東院南門及四脚門修理工事報告』
18．法隆寺国宝保存事業部1943　『法隆寺国宝保存工事報告書第八冊 国宝建造物法隆寺東院舎利殿及絵殿並伝法堂修理工事報告』
19．法隆寺国宝保存事業部1943　『法隆寺国宝保存工事報告書第九冊 国宝建造物法隆寺夢殿及東院回廊修理工事報告』
20．法隆寺国宝保存事業部1945　『法隆寺国宝保存工事報告書第十一冊 国宝建造物北室院本堂及表門修理工事報告』
21．法隆寺国宝保存委員会1955　『法隆寺国宝保存工事報告書第十二冊 国宝法隆寺聖霊院修理工事報告』
22．奈良県教育委員会文化財保存課1961　『重要文化財法隆寺東室修理工事報告書』
23．奈良県文化財保存事務所・奈良県教育委員会1963　『重要文化財法隆寺妻室修理工事報告書』
24．奈良県文化財保存事務所・奈良県教育委員会1966　『重要文化財法隆寺綱封蔵修理工事報告書』
25．奈良県文化財保存事務所・奈良県教育委員会1970　『重要文化財西園院客殿他二棟修理工事報告書』
26．奈良県文化財保存事務所・奈良県教育委員会1974　『重要文化財法隆寺西院大垣南面（南大門東方）修理工事報告書』
27．奈良県文化財保存事務所・奈良県教育委員会1974　『重要文化財法隆寺大湯屋・大湯屋表門・西南隅子院築垣修理工事報告書』
28．奈良県文化財保存事務所・奈良県教育委員会1975　『国宝法起寺三重塔修理工事報告書』
29．奈良県文化財保存事務所・奈良県教育委員会1980　『重要文化財法隆寺西院大垣（東面・南面西方・西面）修理工事報告書』
30．奈良県文化財保存事務所・奈良県教育委員会1983　『重要文化財法隆寺西院東南隅子院・西南隅子院築垣修理工事報告書』
31．奈良県文化財保存事務所・奈良県教育委員会1985　『重要文化財 法隆寺東院大垣修理工事報告書』
※建造物修理工事関係に伴う調査は、原則として「地下調査」ないし「発掘調査」の立項されるものを対象とした。

【法隆寺防災施設工事関係】
32．法隆寺発掘調査概報編集小委員会1982　『法隆寺発掘調査概報Ⅰ』
33．法隆寺発掘調査概報編集小委員会1983　『法隆寺発掘調査概報Ⅱ』
34．法隆寺発掘調査概報編集小委員会1984　『法隆寺発掘調査概報Ⅲ』
35．法隆寺1985　『法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書』

【国立博物館】
36．国立博物館1948　『法隆寺東院に於ける発掘調査報告書』
37．奈良国立博物館1963　『史跡法隆寺旧境内の現状変更（中宮寺新堂・宝蔵建設に伴う発掘調査）調査概報』

【奈良国立文化財研究所】
38．奈良国立文化財研究所1970　『奈良国立文化財研究所年報1970』
39．奈良国立文化財研究所1973　『奈良国立文化財研究所年報1973』
40．奈良国立文化財研究所1977　『昭和51年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
41．奈良国立文化財研究所1977　『奈良国立文化財研究所年報1977』
42．奈良国立文化財研究所1978　『昭和52年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
43．奈良国立文化財研究所1978　『奈良国立文化財研究所年報1978』
44．奈良国立文化財研究所1979　『昭和53年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
45．奈良国立文化財研究所1979　『奈良国立文化財研究所年報1979』
46．奈良国立文化財研究所1980　『昭和54年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
47．奈良国立文化財研究所1980　『奈良国立文化財研究所年報1980』
48．奈良国立文化財研究所1981　『昭和55年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
49．奈良国立文化財研究所1981　『奈良国立文化財研究所年報1981』
50．奈良国立文化財研究所1982　『昭和56年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
51．奈良国立文化財研究所1982　『奈良国立文化財研究所年報1982』
52．奈良国立文化財研究所1983　『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
53．奈良国立文化財研究所1983　『奈良国立文化財研究所年報1983』
54．奈良国立文化財研究所1984　『昭和58年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』

55．奈良国立文化財研究所 1984　『奈良国立文化財研究所年報 1984』
56．奈良国立文化財研究所 1992　『1991年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
57．奈良国立文化財研究所 1993　『奈良国立文化財研究所年報 1992』
58．奈良国立文化財研究所 1996　『1995年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』

【奈良県・奈良県立橿原考古学研究所】
59．奈良県 1969　『法起寺旧境内緊急発掘調査概要』
60．奈良県立橿原考古学研究所 1976　『橿原考古学研究所年報 昭和49年度（1974）』
61．奈良県立橿原考古学研究所 1977　『奈良県遺跡調査概報 1976年度』
62．奈良県立橿原考古学研究所 1977　『橿原考古学研究所年報2 昭和50年度（1975）』
63．奈良県立橿原考古学研究所 1978　『奈良県遺跡調査概報 1977年度』
64．奈良県立橿原考古学研究所 1978　『橿原考古学研究所年報4 昭和52年度（1977）』
65．奈良県立橿原考古学研究所 1979　『奈良県遺跡調査概報 1978年度』
66．奈良県立橿原考古学研究所 1981　『奈良県遺跡調査概報 1979年度』
67．奈良県立橿原考古学研究所 1982　『奈良県遺跡調査概報 1980年度（第2分冊）』
68．奈良県立橿原考古学研究所 1982　『奈良県遺跡調査概報 1981年度（第2分冊）』
69．奈良県立橿原考古学研究所 1983　『奈良県遺跡調査概報 1982年度（第1分冊）』
70．奈良県立橿原考古学研究所 1983　『奈良県遺跡調査概報 1982年度（第2分冊）』
71．奈良県立橿原考古学研究所 1983　『橿原考古学研究所年報9 昭和57年度（1982）』
72．奈良県立橿原考古学研究所 1984　『奈良県遺跡調査概報 1983年度（第1分冊）』
73．奈良県立橿原考古学研究所 1985　『橿原考古学研究所年報11　昭和59年度（1984）』
74．奈良県立橿原考古学研究所 1986　『西里遺跡』（奈良県文化財調査報告書第50集）
75．奈良県立橿原考古学研究所 1989　『奈良県遺跡調査概報 1986年度（第2分冊）』
76．奈良県立橿原考古学研究所 1989　『橿原考古学研究所年報14 昭和62年度（1987）』
77．奈良県立橿原考古学研究所 1990　『橿原考古学研究所年報15 昭和63年度（1988）』
78．奈良県立橿原考古学研究所 1991　『橿原考古学研究所年報16 平成元年度（1989）』
79．奈良県立橿原考古学研究所 1992　『橿原考古学研究所年報17 平成2年度（1990）』
80．奈良県立橿原考古学研究所 1993　『奈良県遺跡調査概報 1992年度（第1分冊）』
81．奈良県立橿原考古学研究所 1994　『奈良県遺跡調査概報 1993年度（第1分冊）』
82．奈良県立橿原考古学研究所 1995　『奈良県遺跡調査概報 1994年度（第1分冊）』
83．奈良県立橿原考古学研究所 1996　『奈良県遺跡調査概報 1995年度（第1分冊）』
84．奈良県立橿原考古学研究所 1996　『橿原考古学研究所年報21 平成6年度（1994）』
85．奈良県立橿原考古学研究所 1997　『奈良県遺跡調査概報 1996年度（第1分冊）』
86．奈良県立橿原考古学研究所 1998　『奈良県遺跡調査概報 1997年度（第1分冊）』
87．奈良県立橿原考古学研究所 2000　『奈良県遺跡調査概報 1999年度（第1分冊）』
88．奈良県立橿原考古学研究所 2001　『奈良県遺跡調査概報 2000年度（第1分冊）』
89．奈良県立橿原考古学研究所 2003　『奈良県遺跡調査概報 2002年度（第1分冊）』
90．奈良県立橿原考古学研究所 2004　『奈良県遺跡調査概報 2003年度（第1分冊）』
91．奈良県立橿原考古学研究所 2005　『奈良県遺跡調査概報 2004年度（第1分冊）』

【斑鳩町教育委員会】
92．斑鳩町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所 1988　『斑鳩町中宮寺跡―第4次発掘調査概報』
93．斑鳩町教育委員会 2002　『斑鳩町内遺跡発掘調査概報 平成11年度』
94．斑鳩町教育委員会 2004　『若草伽藍跡西方の調査』
95．斑鳩町教育委員会 2006　『史跡法隆寺旧境内の調査』
96．奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会 1992　『平成3年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』
97．奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会 1994　『平成5年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』
98．奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会 1995　『平成6年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』
99．奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会 1996　『平成7年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』
100．奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会 1997　『平成8年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』
101．奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会 1998　『平成9年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』
102．奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会 1999　『平成10年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』
103．奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会 2000　『平成11年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』
104．奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会 2001　『平成12年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』
105．奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会 2002　『平成13年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』
106．奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会 2003　『平成14年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』
107．奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会 2004　『平成15年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』
108．奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会 2005　『平成16年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』
109．奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会 2006　『平成17年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』

【国営調査の概報・報告書】
110．文化庁文化財保護部記念物課 1968　『法隆寺若草伽藍跡 昭和43年度発掘調査概報』
111．文化庁文化財保護部記念物課 1969　『法隆寺若草伽藍跡 昭和44年度発掘調査概報』
112．奈良文化財研究所 2007　『法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告書』（奈良文化財研究所学報第76冊）（本報告書）

No.	遺　跡　名	No.	遺　跡　名
1	若草伽藍跡	15	（仮称）天満山遺跡
2	法隆寺東院伽藍（斑鳩宮推定地）	16	法隆寺北2丁目試掘
3	法隆寺西院伽藍	17	藤ノ木古墳隣接地
(4)	（法隆寺防災工事関連）	18	法起寺南遺跡
5	中宮寺跡	19	岡原遺跡
6	法輪寺旧境内	20	上宮遺跡
7	法起寺旧境内	21	（仮称）五百井遺跡
8	法隆寺周辺遺跡 （旧、法隆寺近接地・法隆寺隣接地）	22	（仮称）正隆寺遺跡
		23	（仮称）新家遺跡
9	法隆寺裏山遺跡	24	目安遺跡
10	中宮寺周辺遺跡（旧、中宮寺跡隣接地）	25	龍田神社隣接地
11	西里遺跡	26	清水前遺跡
12	西里北遺跡	27	法隆寺線
13	東里遺跡	28	（仮称）服部遺跡
14	（仮称）極楽寺遺跡	29	（仮称）稲葉遺跡

【斑鳩地域の発掘調査位置図　凡例】
1．斑鳩地域において発掘調査がおこなわれた、飛鳥時代以降の主な遺跡を示したものである。
1．（4法隆寺防災工事関連）は、法隆寺境内全域にわたる調査であるが、便宜上単独の項目をたてた。

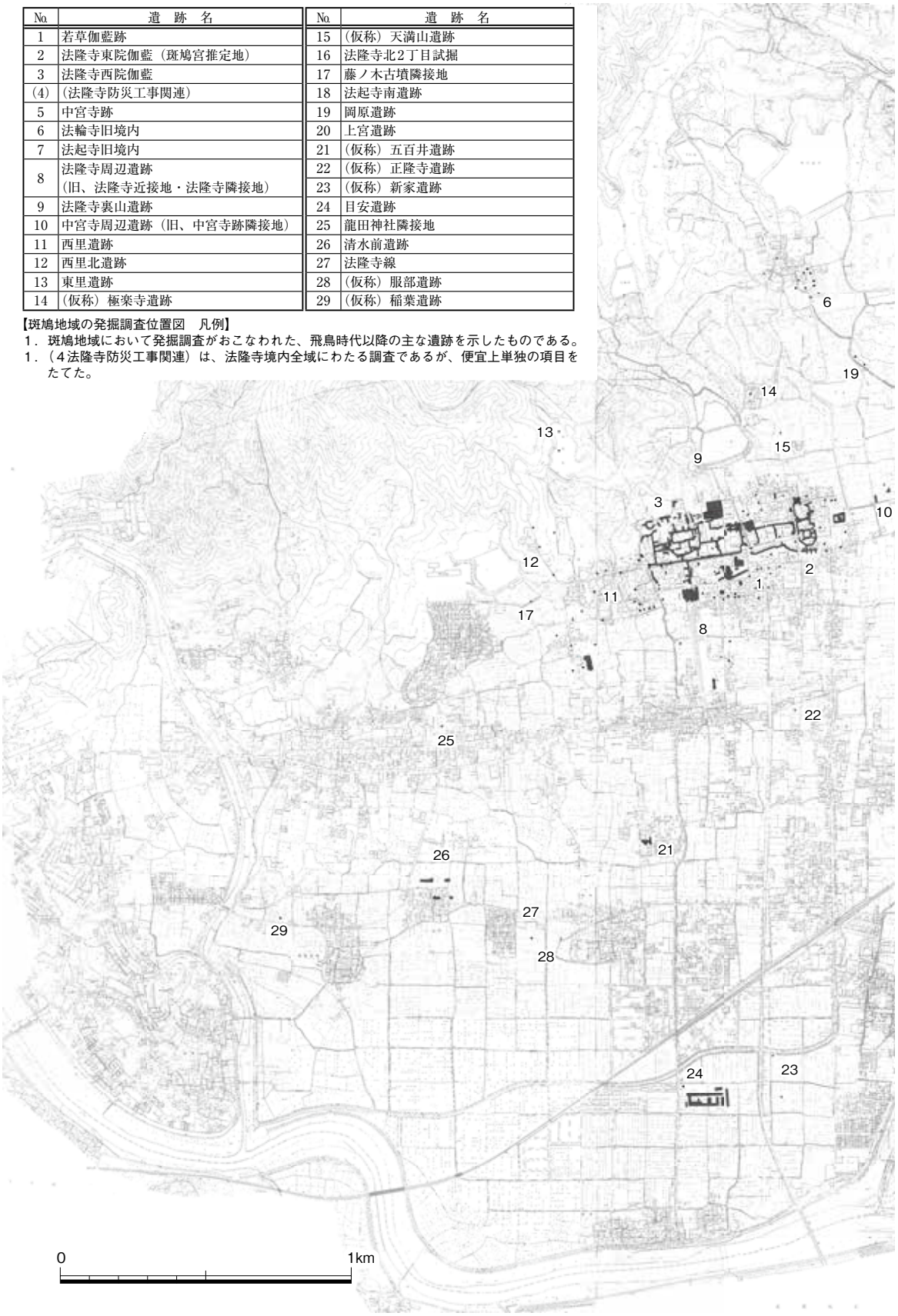


Fig. 180　斑鳩地域の発掘調査位置図（1：20，000）

6
7
19
18
14
16
15
10
5
2
1
20
22
23

Tab. 26　斑鳩の偏向する遺構（抄）

	遺構名	調査次数	既報告の振れ	今回の計測値
若草伽藍跡	SA3555	防災	W20° 19′ 39″ S	W20.55° S
	SA4850	防災	W23° 8′ 45″ S	W22.54° S
	SA4855	防災	N23° 13′ 47″ W	N22.73° W
	SA12	防災	N25° 51′ 51″ W	N25.91° W
	SB2115	防災	N22° 57′ 50″ W	東西 W17.51° S
	SA2145	防災	N31° 15′ 18″ W	N29.55° W
	SB5110	防災	W26° 23′ 55″ S	東西W21.66° S、南北N21.97° W
	SD60	法隆寺2003 - 2次	北で西に21° 30′	N16.57° W
	SD07	法隆寺2003 - 2次	北で西に6°	N5.93° W
	SD02	町若草04年 - 1次	磁北より約15° 西	未計測
法隆寺東院下層	SB2901	斑鳩宮1次	磁北より 11° 40′	南北N17.12° W東西W17.70° S
	SB2902	斑鳩宮1次	磁北より 11° 40′	南北N16.77° W東西W16.69° S
	SB2903	斑鳩宮1次	磁北より 11° 40′	南北N16.44° W東西W16.52° S
	SD1001 SD1151	防災	未記載 約18°	N18.86° W
	SD1250	防災	未記載	N9.56° W
	SD1300	防災	W20° 37′ 14″ S	E19.91° N
	SD1300B	防災	約16°	E16.69° N
	SA1301	防災	未記載	N20.9° W
	SA2500	防災	15°	W15.74° S
	SA2506	防災	15°	W14.93° S
	SA2802	防災	9° 程度	N16.29° W
	SD2804	防災	15°	N17.62° W
	SD6160	151 - 38次	未記載	W31.48° S
	SD6191	151 - 38次	未記載	N32.71° W
	SB01	斑鳩宮推定地8次	E15° 15′ N	南北N14.35° W東西W14.35° S
	SB02	斑鳩宮推定地8次	E17° 53′	南北N17.99° W東西W17.95° S
	SB03	斑鳩宮推定地8次	N15° W程度	南北N14.57° W東西W14.47° S
	SA04	斑鳩宮推定地8次	未記載	南北N17.51° W東西W16.73° S
	河川跡	斑鳩宮推定地94 - 1次	未記載	未計測
中宮寺跡	南北棟建物	中宮寺跡4次	未記載	未計測
	南北溝	中宮寺跡6次	未記載	N6° W
	SD14	中宮寺跡7次	西から約19° 南	W21.00° S
	SA15	中宮寺跡7次	約7° 西	N6° W
	SA20	中宮寺跡7次	約8° 西	N8° W
	SA40	中宮寺跡8次	未記載	N6° W
	SD46	中宮寺跡6・7・8次	未記載	W10° S
	SD48	中宮寺跡8次	未記載	W17° S
法起寺下層	南北溝	法起寺1次	20° 西	未計測
	SA133	法起寺2次	磁北より約20° 西	N24.75° W
	SB134	法起寺2次	SA133と同じ傾き	N24.00° W
	SD04	法起寺3次	28° 西	N26.69° W
	SA01	法起寺4次	SD01に直交	W22.87° S
	SD01	法起寺4次	北から約20° 西	N26.61° W
	SD04	法起寺5次	西に28°	N26.82° W
	石溝	法起寺6次	未記載	未計測
	SD06	法起寺7次	W21° S	南北N22.89° W東西W14.28° S
	SD07	法起寺7次	SD06と平行	南北N23.10° W東西W15.58° S
	柱穴	法起寺8次	22° 程度西	N24.00° W
	足跡	法起寺9次	約21° 西	N23.92° W
	溝	法起寺9次	20° 前後西	N23.46° W
	柱列	法起寺10次	N21° W	N22.74° W
	SB03	法起寺11次	20° 西	N23.57° W
	SA01	法起寺12次	北から22° 西	N22.18° W
	SA02	法起寺12次	西から約21° 南	W21.00° S
	SB01	法起寺12次	約21° 西	N21.00° W
	SD01	法起寺12次	北から約23° 西	N25.59° W
	SD03	法起寺12次	北から約38° 西	N38.96° W
	SD04	法起寺12次	北から約23° 西	N24.30° W
その他	SB01	中宮寺周辺遺跡町99 - 1次	北で東に約10°	N8.00° E
	SA04	中宮寺周辺遺跡町99 - 1次	未記載	N17.01° E
	SD01	五百井遺跡町97 - 1次	未記載	N41.48° W
	SX01	法隆寺旧境内隣接地県95年調査	未記載	W3.90° N
	SD02	法隆寺旧境内隣接地県95年調査	北で西に偏向する	N34.26° W
	SD03	法隆寺旧境内隣接地県95年調査	北で西に偏向する	N42.35° W
	SD04	法隆寺旧境内隣接地県95年調査	北で西に偏向する	W23.00° N
	SD05	法隆寺旧境内隣接地県95年調査	未記載	N24.14° W
	SD250	清水前遺跡（試掘）	N27 ～ 32° W	未計測
	SD251	清水前遺跡（試掘）	N27 ～ 32° W	未計測
	SD252	清水前遺跡（試掘）	N27 ～ 32° W	未計測
	SD253	清水前遺跡（試掘）	N27 ～ 32° W	未計測
	SD501	清水前遺跡（試掘）	約35° 東	W34.00° S
	SD600	清水前遺跡（試掘）	約36° 西	N36.86° W

なお、本節で用いる基準方位は、本報告書で示される若草伽藍塔－金堂から推定した伽藍中軸線を用いた。前述の如く、中軸線は世界測地系に対してＮ25°2′6″WとＮ23°5′43″Wと計測され、その振れに2°前後の幅が生じるため（本書p.63参照）、暫定的にその平均値Ｎ24°3′55″Wを用いて検討をすすめており、後述の通り、検出遺構や遺存地割との関係から若干の補正をおこなっている。

偏向する遺構

ここでは、斑鳩地域の発掘調査で確認された偏向する遺構を抽出し、あらためてその示すところを検討してみたい。偏向する遺構の検出例は相当数にのぼるため、主に現存する寺院に先行する下層遺構と、時代の降るものでは明瞭な偏向地割に限定し、比較的周知に属する法隆寺西院伽藍・東院伽藍にかかわる遺構や、振れが数度程度の遺構は割愛している。岩本次郎が検討した遺跡は、若草伽藍跡のほか、東院下層遺構、西院伽藍、法起寺とその下層遺構、法輪寺、中宮寺跡であったが、本節では、斑鳩地域全体に対象を拡げ、あらためて検討した。以下、Tab. 26に掲げた遺構によりつつ、遺跡の特徴を略述する[13]。

若草伽藍跡　若草伽藍の造営方位は、早くも1939年の調査において、磁北から20°西偏することが指摘されている。この振れが、法隆寺西院伽藍・東院伽藍の造営方位と大きく異なることは、前身寺院の存在を確実ならしめ、法隆寺再建・非再建論争に終止符を打つこととなった。またこれ以後、周辺において検出した同様の振れをもつ下層遺構は、若草伽藍にかかわる遺構との認識が定着した。法隆寺防災施設工事では、若草伽藍の区画施設と推定される偏向する遺構を検出しており、参道地区第255区の南北塀SA 3555は伽藍の西を限る区画塀、大宝蔵殿西側広場地区第225区の東西塀SA 4850は伽藍中枢部北限の塀と理解され、高麗尺75尺を基準とした寺域の推定も試みられている（岡田1983、菅谷1985、本中1985）。さらに、

Fig. 181　若草伽藍の関連遺構（1：2，500）

町若草04－1次調査で検出した南北溝SD02は、南北方向に流れる自然河川SD01の堆積層を掘削したもので、寺域の東西を高麗尺600尺とする推定案では、伽藍の西端付近にあたると指摘される。

今回の計測によると、若草伽藍にかかわる西偏する遺構の振れはN20．5°W～N26°Wの範囲に収まる。概して、遺構の検出部分が短いことからすれば、まとまった分布を示すと理解できる。

法隆寺東院下層　法隆寺東院では、1934年にはじまる東院礼堂・東院鐘楼の修理工事にともない、1935年に発掘調査がおこなわれた。これを嚆矢として、1942年までに断続的に5回の発掘調査がおこなわれており、その成果は『法隆寺東院に於ける発掘調査報告書』に詳述されている。この報告書で、下層建物は振れが磁北に対して西へ11°40′で現東院伽藍の造営方位とも異なることが指摘され、あわせて焼土を含むことから斑鳩宮にかかわる遺構と推定されている。法隆寺防災施設工事においても、確実に法隆寺以前にさかのぼるとみられる遺構を検出しており、検討対象の増加が指摘できる。

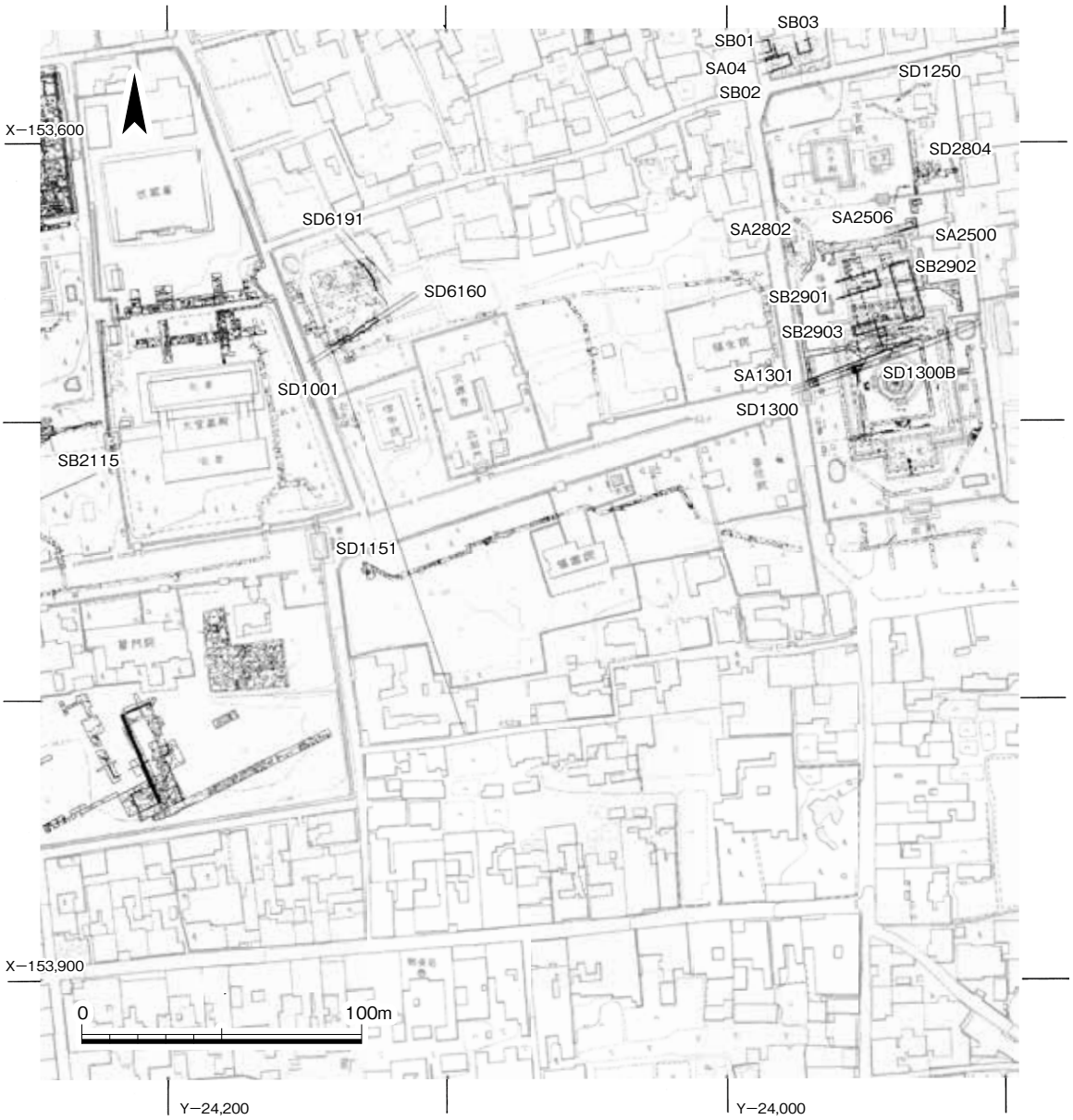


Fig. 182　法隆寺東院下層の斑鳩宮関連遺構（1：2，500）

今回の計測によると、遺構の振れはＮ９.５°Ｗ～Ｎ２０°Ｗを示しているが、大きく異なるSD１２５０、SD６１６０、SD６１９１およびSD１３００とそれに沿うSA１３０１を除いた遺構は、Ｎ１４°Ｗ～Ｎ１８°Ｗの範囲に収まる。斑鳩宮にかかわる遺構の造営方位は、若草伽藍の造営方位と比べ平均でおよそ８°の差があると理解すべきであろう[14]。

中宮寺跡　中宮寺跡では、１９６３年に金堂・塔、１９７２年に西面築地の調査がおこなわれ、伽藍中枢と寺域の推定が可能になった。その結果、金堂は北で１．５°東に振れ、塔はほぼ磁北と一致して建立されており、その造営方位が若干異なるが、その心々を結んだ中軸線と築地の造営方位は、北で２．６°東に振れると指摘されている。１９８３年以降、寺域の範囲確認および内容確認を目的とした数次の発掘調査が実施され、多くの成果を得た[15]。従来指摘される斑鳩偏向地割の範囲にありながら伽藍が西偏しない点、４次調査以降、寺域の東南部を中心に中宮寺造営以前の方位の異なる遺構を検出している点は、

この地の土地利用を考える上で注目される。

伽藍周辺の前身遺構を計測したところ、遺構の振れはＮ８°Ｗ～Ｎ10°Ｗで、中宮寺の造営方位と比しても数度程度西偏しているほか、Ｗ21°Ｓの振れをもつSD14の存在は注目される。

法起寺下層遺構　これまでの発掘調査により、法起寺の伽藍中軸線は、西へ3°12′振れていると指摘されている。寺域の東方・南方には、12世紀頃以降と推測される正南北方向の大和条里の地割が遺存しており（吉川1999、山本2004ａ）、いわゆる偏向地割の範囲には含まれない。1961年の１次調査で、金堂前身遺構西側の石敷溝を検出したのにはじまり、その後の調査では、多くの西偏する下層遺構を検出した。下層遺構の性格は、岡本宮の遺構とする理解が有力であるが、２次調査で検出したSA133・SB134などの遺構は、伽藍西限溝の西側にも及んでいることから、『聖徳太子伝私記』にみえる「膳臣住宅」とする見解もある（高田1974）。

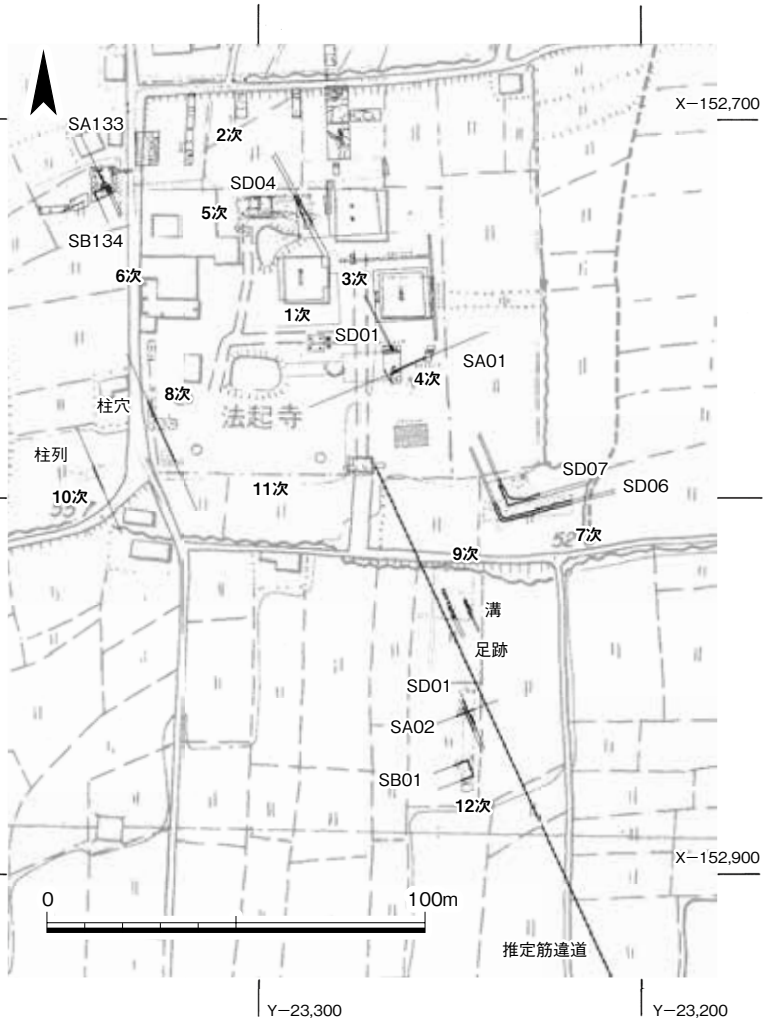


Fig. 183　法起寺下層の偏向する遺構（1：2，000）

次の２点に注目したい。第１は、安堵町高安付近に遺る筋違道と推定される遺存地割を北に延長すると、法起寺付近へいたることである（以下、推定筋違道と称する）。第２に、９次調査と12次調査で検出した２条の偏向する溝は西偏する南北道路の東西側溝にあたると理解され、その振れが推定筋違道ときわめて近いことである[16]。

今回の計測によると、遺構の振れはＮ20°Ｗ～Ｎ26°Ｗに収まり、若草伽藍の造営方位とも近しい、きわめてまとまった分布を示すと理解できる。

その他の遺跡

上記の遺跡以外で検出した偏向する遺構について述べる。

中宮寺周辺遺跡[17]　町99－１次調査で、北で東に偏向する遺構を検出した。SB01は、トレンチの中央で検出した、３間×３間の総柱建物か、東側に庇をもつ東西棟建物と推定される。柱間は１．２～１．５ｍ。遺構の振れは、Ｎ９°Ｅ。SA04は、調査区南端で検出した南北塀で、２間以上と推測され、柱間

は推定１．１ｍ。遺構の振れは、Ｎ15°Ｅ。

五百井遺跡　町97－１次調査で、北で西に偏向する遺構を検出した。SD01は、調査区中央で検出した南北溝で、幅３～５ｍ程度、深さ約０．４ｍ。７世紀後半から８世紀前半までに埋没している。東側を囲むようにわずかに弧状を呈すること、埴輪が東側斜面に集中することから、埋没古墳の周濠の可能性も指摘されるものの、検出部分が狭く詳細は不詳である。遺構の振れは、Ｎ41°Ｗ。

次の２遺跡では、中世条里に関連する偏向する遺構を検出した。

法隆寺旧境内隣接地　県95年調査で、北で西に偏向する遺構を検出した。SX01は、調査区西南隅で検出した流路。SD02・SD03・SD04は、調査区中央で検出した素掘溝。これらはほぼ平行ないし直交している。なお、ほぼ東西方向に掘られた素掘溝ＳＤ06も検出した。遺構の振れは、Ｎ34～42°Ｗ、ないしＷ23°Ｓ。

清水前遺跡（試掘調査）　中世の条里地割に関連する遺構を確認している。上層遺構は、南北・東西方向のほか、北西－南東方向の素掘小溝であるが、下層にて北で西に偏向する遺構を検出した。SD250～253は、11トレンチ素掘小溝群の下層で検出した素掘小溝群。幅20cm～30cm、深さ８cm。Ｎ27～32°Ｗ。SD501は、11トレンチ東部で検出した溝。幅70cm、深さ20cm、約８ｍ検出。Ｎ34°Ｅ。SD600は、14トレンチ中央で検出した溝。幅50～60cm、深さ５cm～35cm、約４ｍ検出。Ｎ36°Ｗ。いずれも時期は不詳である。

以上、斑鳩地域の発掘調査で確認されている偏向する遺構について略述した。ここでの知見は、次のように整理できる。

第１。遺構の振れについてまとめてみると、若草伽藍跡と法起寺下層の遺構群は、Ｎ20°～26°Ｗのほぼ同じ振れを示している。これに対して、若草伽藍跡と同時期の造営とみられ、斑鳩宮に比定される法隆寺東院の下層遺構は、およそ８°振れが異なり、Ｎ15°Ｗ～Ｎ18°Ｗの振れに集中している。また、中宮寺下層の前身遺構やその周辺では、数度程度西偏するか、あるいは東偏する遺構が散在している。つまるところ、斑鳩地域の地割全体に目を転じてみるとき、いわゆるＮ20°Ｗとして一括される偏向する遺構は、若草伽藍跡と法起寺下層遺構に限られるのであり、必ずしも面的な分布を示しているとはいえない。付言するならば、これまでの研究において、同じ造営方位と理解してその性格を論じる傾向が否めない若草伽藍跡と斑鳩宮推定地の遺構は、両者の造営方位が異なることをあらためて確認した上で、議論を深めることが望まれる[18]。

第２。偏向する遺構を限定的にとらえる理解は、いわゆる偏向地割を考える上でも留意が必要となる。子細に検討すると、７世紀の開発に由来しその地割を遺すとされるいわゆる偏向地割46町余の範囲にも、さまざまな振れをもつ遺存地割や発掘遺構が点在している。また、さらにその外側では、現地表面の遺存地割とも異なる、中世以降の条里にともなうより振れの大きい地割が確認される。

以上の２点は、約めていえば、斑鳩地域に歴史的に形成された地割は、Ｎ20°Ｗ、Ｎ8.5°Ｗの偏向地割と、それよりも時代が降ると理解してきた正南北地割のみでは説明できない、思いのほか複雑な様相を呈している、となろうか。以下、その意味するところにつき、憶説を述べておきたい。

翻って考えてみると、斑鳩偏向地割論は、偏向する道の痕跡を端緒とした学説であった。そこであらためて道に注目してみると、推定筋違道の振れが、若草伽藍中軸線ときわめて近い振れを示しているの

に対して、いわゆる龍田道の遺存地割を東へ延長しても推定筋違道とは直交せず、西で南に約２．７°振れていることに気づく。詳論は空中写真などを用いたさらに精緻な検討に俟たねばならないが、基準とされる道にそもそも振れが認められる点は、斑鳩の偏向地割を考える上で留意せねばならない。また、本節で強調した通り、斑鳩の諸寺院の造営方位は必ずしも一致するわけではなく、その前身遺構の造営方位にもむしろばらつきが目立つ。してみれば、少なくとも斑鳩の偏向地割に方格地割都市や都市計画をみる理解は、再考を余儀なくされるのではなかろうか。むろんかかる指摘は、現段階では斑鳩の地割をめぐる理解のうち都市計画説への疑問を呈したにすぎず、斑鳩偏向地割論のすべてを否定するものとはならない。さしあたり、古くから指摘される田地開発説は、現段階で古代にさかのぼる明確な地割を検出していないことから検証できていないし、ミヤケ開発に求める理解もいまだ論理的要請にすぎず鉄案とはいいがたい。さらなる実証が必要と思われる。

次におよそ20°偏向する遺構について。法起寺下層遺構は、やはり筋違道との関係から理解すべきで、偏向道路を基準に設定された確かな事例といえよう。今後の調査における、古代にさかのぼる道路痕跡の検出や、遺存地割の検討が切望される。一方、若草伽藍と法起寺下層遺構の振れがきわめて近しいのに対し、ごく近接する若草伽藍と斑鳩宮推定地とで造営方位が異なる点は、いかに理解すべきか断案をもたない。造営方位の差がすべて造営時期の差に解消しうるとは単純にすぎるが、かかる観点から、斑鳩の諸宮・諸寺の造営時期や性格を、再検討してみることも可能ではなかろうか。

結　び

本節では、斑鳩地域の発掘調査成果の網羅的蒐集と整理により、主として歴史地理学や文献史学の立場から提唱されてきた斑鳩偏向地割について検討してきた。報告書としての性格と執筆担当者の能力および準備不足から、事実の提示にとどめざるを得ず、偏向地割の分布を示し、その性格についての憶説を述べたにすぎない。また、発掘調査で検出した遺構はさほど多くなく、現段階の分析と知見のみから、偏向地割の有無や範囲を確定することは困難といわざるを得なかった。学際的研究に相応しい、微地形復原や現地表面の遺存地割との総合的な検討も、不充分である。さらなる調査知見、検出遺構の蓄積とともに、考古学・文献史学・歴史地理学など諸研究の進展に俟ち、偏向地割の有無、範囲、そして成因を確定する作業が必須と思われる。すべて今後の課題とし、後日を期したい。

展望を述べるならば、１２世紀頃に推定できる大和統一条里の検証は、その当否も含め、今後の発掘調査による洪水や埋没地割の痕跡など、考古学的方法にゆだねざるを得ない。斑鳩地域の地割の解明にとって核心は、７世紀初頭の開発により設定された偏向地割の地区のさらなる調査事例の進展とともに、これまでにさほど調査がすすめられていない斑鳩地域東半地区、すなわち、より広範囲に正南北地割が遺存する地区の埋没遺構であると思う。

付　記

本節で検討した発掘調査事例は、山本が作成した一覧をもとに、各調査機関において増補・修正をお願いして整理したもので、整理過程において、奈良県立橿原考古学研究所および斑鳩町教育委員会のご理解とご協力により、野帳など発掘調査にかかわる一次資料の閲覧をお許しいただいたものもある。調査図面のデジタル化は、奈良文化財研究所都城発掘調査部が平城地区の遺構管理に導入しはじめている遺構管理システムを斑鳩地域にも応用し、その読みとりや新たな機能の開発は朝日航洋株式会社地図コンサルタント部の白井正孝・有賀秀貴両氏に依頼した。本節で提示した発掘調査のデータは、遺構研究室が管理している。

以上の準備作業をうけ、実際に膨大な発掘調査資料の整理にご協力いただいた奈良県立橿原考古研究所資料室の鶴見泰寿、斑鳩町教育委員会生涯学習課の平田政彦、奈良文化財研究所都城発掘調査部遺構研究室の大林潤の各氏に共同執筆者としての参加をお願いし、４者による意見交換を経て山本が執筆を担当した。なお、編集上の統一に従い、本文中に引用した先学の敬称はすべて省略に従った。

末筆ながら、斑鳩地割をめぐる通説を築かれた岩本次郎をはじめ、出田和久、井上和人・河角龍典・金田章裕・佐藤亜聖の各氏からは、貴重なご助言をいただいた。篤くお礼を申し上げる次第である。

注

⑴　令前の額田部地域には、飽浪評がおかれていた（『日本書紀』天武天皇五年（676）四月辛丑（４日）是日条）。狩野1990参照。

⑵　これより先に石田茂作は、若草伽藍の方位について「伽藍の東南に二十度偏してゐる事は、東院の鵤宮掘立柱と称せらるものゝ配列方位に相近く、かつ従来不審とされてゐた、法隆寺東門を出て夢殿に通ずる道の急に北折せる事とも連関して両者の共存関係を察せしむべく興味ある課題を提供する」と述べる（石田1944）。また、現法隆寺の指す方位が大和平野の条里の示す方向と一致するとの猪熊兼繁の指摘を紹介している（石田1944註７）。寺院の造営方位と条里地割との関係を指摘した早い事例であり、その後も、現法隆寺の造営方位が大和条里の方位とみる理解は散見する。

⑶　田村は、はじめ「東院の鵤宮掘立柱と称する配列が二十度の傾きを有する」と述べており、事実認識に曖昧さを残していたが（田村1949）、後に、「磁北に対して西に十二度の振をもった」と修正し、「二十度傾の地割内の小異変」と理解して詳論を避けている（田村1960）。

⑷　稲垣晋也は、「斑鳩条里」への疑問を呈した上で、地形による偏向を示唆しており（稲垣1981）、岩本もその理解を踏襲したものであろう。

⑸　飛鳥の方格地割論は、1970年代前半以降相次いで提唱されたが、論者によりその設定基準が異なる（秋山1971、網干1977、千田1981）。

⑹　大和盆地の古代道路を論じた近年の研究は、山川1996を参照。

⑺　千田2004ａにおいて提起され、同2004ｂにおいて詳論されている。

⑻　古代国府方形方格説に対しては、従来から文献史学による根強い批判があった（八木1986、井上満郎1987）。なお、近年再び飛鳥の方格地割を検証せんとする試みもあるが（黒崎2005ａ、黒崎2005ｂ）、井上和人による再批判も提出されている（井上和人2007）。

⑼　方格地割とミヤケ開発との関連は、水野1971参照。山本2004ｂで私見の概要を述べた。

⑽　没官については、古尾谷2006を参照。上宮王家の斑鳩進出にかかわる近年の論考は、仁藤1998ａ・ｂ・ｃ・ｄ、鷺森2001をあげる。

⑾　法隆寺寺辺所領の46町余からはるか東方の大和郡山市小泉町、興福寺領菩提庄の比定地には、鎌倉時代中期以前に、Ｎ20°Ｗの偏向地割が存在したと推測されている（吉川1999）。また、額田寺伽藍並条里図にも、偏向する東西方向の道路が描かれている（山口1996、山本2004ａ）。

⑿　朝日航洋株式会社作成の遺跡管理システムの仕様は、次の通りである。

（１）ラスター画像データは、奈良文化財研究所が保管する原図、および各調査機関が刊行された報告書掲載の遺構図面（以下、遺構図と総称する）を400dpiの解像度で、非圧縮のTiff形式、モノクロにて取得した。

（２）システム上の画像データの座標系は、遺構図に記述されている日本測地系で展開し、世界測地系への移行は現時点ではおこなっていない。また展開後のラスターデータは一度GeoTiff形式への変換をおこなった。

（３）画像データのシステムへの展開は、基本的には遺構図上の座標グリッド４点を元にアフィン変換により展開した。ただし、以下の場合を除く。

①遺構図上に座標値が１点あるいは２点しかなく、かつスケールバーがある場合には、その既知である座標位置からスケールバーを用いて残りの３点（あるいは２点）の座標位置を特定し、展開した。

②遺構図に記述された座標値が明らかに誤記と判断される場合には、周囲の座標値より修正した座標値にて展開した。

③座標情報が一切なく、かつスケールバーがある場合には、スケールバーより遺構図の尺度を特定し、位置については報告書掲載の位置図を参照して展開した。

（４）なお、上記（３）③により展開したデータは、参考にとどめ、本節の分析対象には含めていない。

⒀　遺構の詳細は、すべて当該調査にかかわる報告書等による。煩瑣にわたるため、各遺構について詳細な内容と、典拠となる報告書等の注記を省略した。Tab．25および表末の報告書等文献一覧をご活用いただきたい。

⒁　東院下層遺構は、遺構の重複関係と掘立柱の大きさから、少なくとも２時期の遺構が存在したと推測されている。その性格や時期は、福山1957、小笠原1979、岡本1983などを参照。

⒂　中宮寺跡の発掘調査は、調査次数が一部重複している。参考に供するため、史跡指定域内の既往の発掘調査について、整理した表を掲げる。中宮寺跡の調査一覧は、斑鳩町教育委員会・荒木浩司氏にご教示いただいた。

No.	次数	調査期間	調査箇所	調査原因	調 査 機 関
1	1	1963.9－1963.10	塔、金堂	学術調査（内容確認）	石田茂作
2	2	1972.11－1972.12	寺域西限施設	県道新設	奈良県教委
3	(県１次)	1983.2－1983.3	寺域北・東・西限施設、南門推定地、北門推定地	学術調査（範囲確認）	橿考研
4	(県２次)	1984.2－1984.3	北門・講堂推定地、回廊推定地（北側）、寺域東北隅	学術調査（範囲確認）	橿考研
5	(県３次)	1984.4－1984.5	塔・金堂・中門推定地、回廊推定地（西側）	学術調査（内容確認）	橿考研
6	4	1987.5－1987.8	南門推定地、前身遺構	学術調査（内容確認）	橿考研
7	5	1990.1－1990.3	寺域東限施設、東北隅	学術調査（範囲確認）	橿考研
8	6	1994.12－1995.1	寺域東限施設、東南隅・西南隅、南門前	学術調査（範囲確認）	橿考研・斑鳩町教委
9	7	1997.2－1997.3	寺域南辺	学術調査（範囲確認）	橿考研・斑鳩町教委
10	8	1997.2－1997.3	寺域東限施設、東南隅	学術調査（範囲確認）	橿考研・斑鳩町教委
11	—	2004.6－2004.9	旧中宮池内部の遺構確認､中門推定地､回廊推定地（南側）	学術調査（内容確認）	斑鳩町教委

⑯ 調査担当者の名倉聡は、道路の存在に注意を喚起するにとどめ、その性格の推断は避けている（奈良県立橿原考古学研究所1996）。むろん遺構の年代比定には慎重であらねばならないが、道路遺構が周辺の正南北方向の地割に先行することは確実で、法起寺下層遺構とのかかわりを重視するならば、筋違道の北端部にあたるとの理解もあながち的はずれではないのではなかろうか。試みに、従来指摘されている、筋違道の遺存地割を北へ延長し、法起寺南辺の道路遺構と結んだラインは、Ｎ24.5°Ｗを測り、本報告書が採用した若草伽藍中軸線の振れと近似する。

⑰ 中宮寺周辺の史跡指定地外は、2000年度に重要遺跡「中宮寺跡周辺遺跡」として認定される以前は、「中宮寺跡隣接地」の名称が使用されていた。

⑱ 法隆寺1985にFig.62として掲載された「斑鳩宮・若草伽藍・東院の推定復原範囲」は、同報告書が採用した若草伽藍中軸の方位に統一してこれらの遺跡の推定範囲を図示したものである。

参考文献

相原嘉之　1998　「飛鳥地域における古代道路体系の検討－都市空間復原へ向けての基礎研究」『郵政考古紀要』第25号

相原嘉之　1999　「飛鳥の道路と宮殿・寺院・宅地－飛鳥の都市景観についての一視点」『条里制・古代都市研究』第15号

秋山日出雄　1971　「『飛鳥京と大津京』都制の比較研究」『飛鳥京跡一』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第26冊

網干善教　1977　「倭京（飛鳥）地割の復原－飛鳥地方の寺院跡を中心として」『関西大学考古学研究紀要』第3号

石田茂作　1944　「法隆寺若草伽藍址の発掘」『總説飛鳥時代寺院址の研究』第一書房（1977年復刻、初出1941年。同『伽藍論攷　仏教考古学の研究第一』養徳社、1948年にも掲載）

稲垣晋也　1981　「法隆寺の創建」『奈良新聞』1981年12月20日付

井上和人　2004ａ　「飛鳥京域論の検証」『日本古代都城制条里制の実証的研究』学生社（初出1986年）

井上和人　2004ｂ　「条里制地割施行年代考」『日本古代都城制条里制の実証的研究』学生社（初出1994年）

井上和人　2004ｃ　「条里制総論」『日本古代都城制条里制の実証的研究』学生社

井上和人　2007　「『飛鳥の道路遺構と方格地割』説批判」『条里制・古代都市研究』第22号

井上満郎　1987　「国府と都市規制」『古代文化』第39巻－10号

今宮　新　1957　『上代の土地制度』至文堂

弥永貞三　1956　「条里制」『奈良時代の貴族と農民』至文堂

岩本次郎　1983　「斑鳩地域における地割の再検討」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集　同朋舎

小笠原好彦　1979　「畿内および周辺地域における掘立柱建物集落の展開」『考古学研究』第25巻－4号

岡田英男　1983　「西院伽藍と若草伽藍の造営計画」『法隆寺発掘調査概報Ⅱ』

岡本東三　1983　「法隆寺天智九年焼亡をめぐって」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集　同朋舎

落合重信　1967　「大和平野の条里制開拓」『条里制』吉川弘文館
狩野　久　1990　「額田部連と飽浪評」『日本古代の国家と都城』東京大学出版会（初出1984年）
岸　俊男　1988ａ　「飛鳥と方格地割」『日本古代宮都の研究』岩波書店（初出1970年）
岸　俊男　1988ｂ　「方格地割の展開」『日本古代宮都の研究』岩波書店（初出1975年）
金田章裕　1985　『条里と村落の歴史地理学的研究』大明堂
金田章裕　1993　『古代日本の景観』吉川弘文館
金田章裕　1998　「大和国額田寺伽藍並条里図」『古代荘園図と景観』東京大学出版会
金田章裕　2002　『古代景観史の探究－宮都・国府・地割』吉川弘文館
黒崎　直　2005ａ　「飛鳥の道路遺構とその範囲」『遺跡学研究』第２号
黒崎　直　2005ｂ　「飛鳥の方格地割とその範囲」『飛鳥文化財論攷』納谷守幸氏追悼論文集刊行会
鷺森浩幸　2001　「法隆寺の所領」『日本古代の王家・寺院と所領』塙書房
菅谷文則　1985　「若草伽藍について」『法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書』
千田　稔　1981　「道と地割の計画－河内磯長谷の古墳配置の問題に関連して」『河内古道と伊勢みち』法蔵館
千田　稔　1983　「条里地割と古地割」『条里制の諸問題Ⅱ－条里制研究会記録２』
千田　稔　1991ａ　「磐余と斑鳩（付論）斑鳩宮についての小考」『古代日本の歴史地理学的研究』岩波書店
千田　稔　2004ａ　「古代朝鮮の王京と藤原京－中国型都城成立の契機」『古代日本の王権空間』吉川弘文館（初出1991年）
千田　稔　2004ｂ　「わが国における方格地割都市の成立－朝鮮半島との関連で」『古代日本の王権空間』吉川弘文館（初出2001年）
高田良信　1974　「法起寺小志（上）」『聖徳』第59号
田村吉永　1949　「條里より見たる法隆寺」『綜観法隆寺』近畿日本鉄道編纂室　河原書店
田村吉永　1960　「若草伽藍と法隆寺々地についての一考察」『史迹と美術』第302号
田村吉永　1962　「條里制の起源について」『日本歴史』第164号
奈良県史編集専門委員会　1987　『奈良県史　第４巻　条里制』名著出版
奈良県立橿原考古学研究所　1981ａ　『大和国条里復原図』
奈良県立橿原考古学研究所　1981ｂ　『大和国条里復原図　解説－大和国条里の総合的研究　地図編』
奈良県立橿原考古学研究所　1996　『奈良県遺跡調査概報 1995年度（第１分冊）』
仁藤敦史　1998ａ　「『斑鳩宮』について」『古代王権と都城』吉川弘文館（初出1985年）
仁藤敦史　1998ｂ　「『斑鳩宮』の経済的基盤」『古代王権と都城』吉川弘文館（初出1987年）
仁藤敦史　1998ｃ　「『斑鳩宮』の経営について」『古代王権と都城』吉川弘文館（初出1990年）
仁藤敦史　1998ｄ　「上宮王家と斑鳩」『古代王権と都城』吉川弘文館（初出1991年）
仁藤敦史　2001　「額田部氏の系譜と職掌」『国立歴史民俗博物館研究報告』第88集
服部昌之　1983　「大規模周辺地域の条里－大和盆地の場合」『律令国家の歴史地理学的研究』大明堂（初出1971年）
平田政彦　2003　「斑鳩地域における飛鳥時代寺院の一様相－法輪寺創建年代私考」『橿原考古学研究所論集第14』八木書店

福山敏男　1957 「建築」『図説日本文化史大系』第２巻　小学館

古尾谷知浩　2006 「国家反逆罪における没官物の処分について」『律令国家と天皇家産機構』塙書房（初出 1997年）

法 隆 寺　1985 『法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書』

水野時二　1971 「条里制の田積」『条里制の歴史地理学的研究』大明堂

本中　真　1985 「若草伽藍とこれに関連する遺構の方位」『法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書』

八木　充　1986 「国府・国庁・国衙」『日本古代政治組織の研究』塙書房（初出1985年）

山川　均　1996 「大和における七世紀代の主要交通路に関する考古学的考察」『ヒストリア』第150号

山口英男　1996 「額田寺伽藍並条里図」『日本古代荘園図』金田章裕ほか編　東京大学出版会

山本　崇　2004 a 「斑鳩の歴史的・地理的特質－道・宮・地割」『日本の名僧１　和国の教主 聖徳太子』本郷真紹編　吉川弘文館

山本　崇　2004 b 「書評 井上和人著『古代都城制条里制の実証的研究』」『条里制・古代都市研究』第20号

吉川真司　1999 「行基寺院菩提院とその寺田」『日本古代社会の史的展開』薗田香融編　塙書房

渡辺久雄　1968 「古代阡陌開発に関する一考察」『条里制の研究―歴史地理学的考察』創元社（初出1962年）

6　年輪年代法による法隆寺西院伽藍の年代調査

光谷　拓実・大河内隆之

はじめに

法隆寺西院伽藍の創建年代については、長年にわたって建築史、美術史、考古学、文献史学、歴史地理学など多くの研究者によって論争が繰り広げられてきた。1939年以降本格化した発掘調査や解体修理によって、現在の西院伽藍は670年の火災後に再建したものであることが通説となっている。一方、金堂だけは670年の火災前からすでに造営が始まっていたとする、若草伽藍と西院伽藍草創期の併存説を主張する研究者（鈴木1995）もあり、今なお完全決着を見ていない。一体なぜ、こうも長いあいだ論争が戦わされてきたのか、それは法隆寺西院伽藍の創建年代に直接結びつく確たる年代情報が見出せなかったからである。今後も、新たな文字資料などから創建年代を示唆するような年代情報が出てくる可能性はきわめて低いと言わざるをえない。しかし、ここで、建物に使われている部材そのものから１年単位の年代情報を直接的に知ることのできる方法があれば、法隆寺論争に与える影響は大きい。これに応えうるものに樹木年輪を使った年輪年代法がある。

奈良文化財研究所では、1980年からヒノキ年輪を使った年輪年代法の研究に着手し、1985年にはヒノキ年輪を使った年輪年代法の実用化に成功した。この年代法は、これまでに多くの古建築部材の年代側定に応用され、成果をあげてきた（光谷・田中・佐藤1990、光谷2002・2003a・2003b・2004・2005a・2005ｂ・2006a・2006b、大河内2005）。奈良文化財研究所の年代学研究室では、2002年から2004年の２ヵ年にわたって、法隆寺金堂、五重塔、中門の建築部材の年輪年代法による総合的な年代測定調査を実施した。

本稿では、日本における年輪年代法の実用化にいたった経緯、および法隆寺論争に対して先学達が取り込んできたこれまでの年輪年代学の試行的研究、ならびに昭和の大修理の際に採取されていた五重塔心柱の円盤標本に辺材が残存しているかどうかの確認や年輪年代の確定にいたった経緯について報告する。さらに金堂、五重塔、中門の取りはずされていた古材や現在の建物に使われている各種部材についての年輪年代法による総合的な年代調査をおこなったので、その結果について報告する。

ヒノキ年輪を使った年輪年代法の実用化

年輪年代法は、20世紀初頭にアメリカで創始された自然科学的年代法である。この方法は放射性炭素年代測定法などと違い、誤差のない高精度の年代を確定できる点で大変優れている。

奈良文化財研究所では、歴史学の編年研究に資するため1980年から年輪年代法の実用化を目指して研究を開始した。約３年間におよぶ試行研究の結果、大方の予想に反してわが国では、ヒノキやスギが年輪年代法の研究に適していることがわかった。つぎに応用段階に入る前の下準備として、年輪パターンの共通する地域とその範囲を現生木で確認する作業のほか、長期の暦年標準パターン(1)の作成作業についても長年にわたっておこなってきた。その結果、ヒノキやスギの年輪パターンは広域に共通して

いることが確認された（光谷1987）。一方で、1985年11月にはヒノキの年輪を使って、現在から紀元前37年までの約2000年間にわたる暦年標準パターンを作成し、これを使って滋賀県甲賀市に所在する宮町遺跡出土のヒノキの柱根が743年に伐採されたものであることを明らかにした。この年代値は、『続日本紀』記載の紫香楽宮造営年に1年新しい、まさに造営期間中に伐採された柱材であることがわかり、この遺跡こそ聖武天皇が造った紫香楽宮の最有力候補地である、と指摘できた。その後、これを契機に宮町遺跡の本格的な発掘調査がおこなわれ、出土した柱根の多くは743年に伐採されたものであったが、なかには『続日本紀』記載の742年に伐採されたものも見つかり、宮町遺跡が本命の紫香楽宮跡である蓋然性がさらに高まった（光谷・田中1986、光谷1989・1990ａ）。そうしたなか、ついに2000年11月には、宮町遺跡の中央部で南北に並列する2棟の朝堂クラスの長大な建物跡の発見があり、宮町遺跡は真の紫香楽宮跡であることが考古学的にも実証された（光谷2004ａ、栄原2005）。この結果をもとに、2005年3月には19．3haが史跡に追加指定され、保存されることになった。

この事例からも、1985年11月に完成した約2000年間のヒノキの暦年標準パターンは文献記録とも合致し、1年の狂いもなく作成されたものであることは明らかである。このほかにこの暦年標準パターンが正確に年代づけされたものであることを検証した例としては、東大寺南大門国宝金剛力士像（吽形）の制作年代（文献記録によると1203年完成で、使用木材には1201年に伐採されたものも見つかった。）（光谷1990ｂ）、あるいは鳥取県三佛寺投入堂の重文蔵王権現立像（正本尊）は納入文書に仁安三年（1168）と記載されているので、この年に制作されたものであることがわかる。この像の光背に使われていたヒノキの板材からは1165年の伐採年代が得られた。これは文書の記年銘より3年古い年代である（光谷2002）。この2つの事例をみるかぎり、仏像が完成した年と木材の伐採年との間に2年ないし3年の開きがあるが、これは伐採してから完成までの年代差であって、暦年標準パターンの年代づけが間違っているわけではない。これらのいわば無作為抽出された事例を通してこの暦年標準パターンが正確なものであることが検証できた。したがって、この約2000年間の暦年標準パターンは1年のズレもなく年代づけされたものであり、年代を割り出す際の基準パターンとしては全く問題の無いことが検証されている。このことは、約2000年間の暦年標準パターンが一種の歴史年表になったことを意味すると同時に、これを使った年輪年代法が考古学、建築史学、美術史学などの歴史学研究に正確な暦年を提示できる点でその果たす役割はきわめて大きい。

昭和大修理における五重塔心柱の標本採取の経緯

法隆寺五重塔は、1941年から第二次世界大戦をはさんで1952年までの12年間にわたって解体修理がおこなわれた。その際、地中深く埋められていた心柱の基部が長年のあいだに腐朽して大きな空洞になっていたため、根元から約2．1ｍを切断したうえで、新材で根継ぎされ、地上部は往時の状態に復元された。このとき、法隆寺国宝保存委員会の幹事をつとめた関野克の考えにもとづいて切断した心柱の頂部から約10cmの厚さで円盤標本が採取された（Fig.184・185）。それは、心柱の年輪を調べれば法隆寺の建築年代が判るのではないか、という目的のためであったという。その際切断された心柱の標本の年輪調査は、1950年に京都大学木材研究所（現在、京都大学生存圏研究所）に託された。当時、年輪調査を担当したのは、京都府立大学に勤務し、京都大学木材研究所とも共同研究をしていた小原二

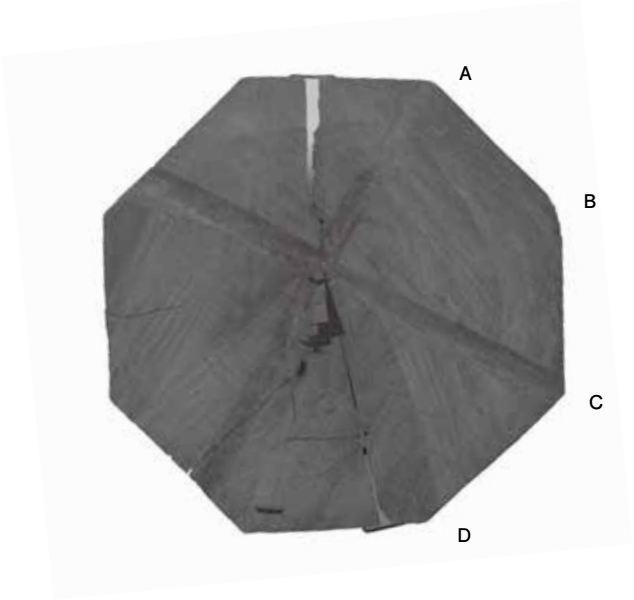


Fig. 184　心柱の標本

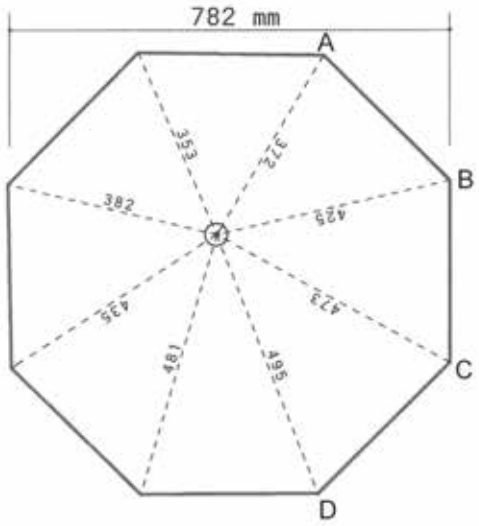


Fig. 185　心柱の形状

郎（現在、千葉工業大学理事）であった。

このように、心柱の標本（八角形、対辺間の幅：約78cm、髄の位置は偏在）（Fig. 184・185）が採取された背景には、関野克が、東京大学で建築史の教鞭をとっていたなかで新しい研究法のひとつとして早くから年輪年代学に強い関心を持っていたという事情があった。当時すでに、関野克は自宅にあった法隆寺中門の柱の残材や百万塔の年輪を自ら計測し、それを図表化するなど年輪年代学の手法を試行していた（佐原1983）。このように、関野克は日本における年輪年代学研究の草分け的な研究者でもあった。こうした経緯もあって、心柱の標本が年輪調査のため京都大学木材研究所に託された。ちなみに、関野克が計測した古材や百万塔は、法隆寺から非再建論者として有名な関野貞に寄贈されたものであった、という。関野克は、心柱の件だけではなく、当時修理中の全国の文化財現場へも修理古材を京都大学へ送るように、と要請されたりもしており、こうした積極的な取組みは各時代の建造物に使われていた木材の年輪の比較・検討によって、日本の年輪年代学が生まれることを期待してのことだったという（鈴木2002）。なお、京都大学へ集められた多くの古材は、現在、奈良文化財研究所で保管されている。

年輪による心柱の履歴に関する草分け的研究

1950年に小原二郎の手元に届いた心柱の円盤標本は、円盤の中心を通る4方向に側線を定め、読取顕微鏡によって中心から年輪幅および秋材（晩材）幅を0．01mmまで読み取り、4方向の平均値をもって、当該樹齢の年輪幅ならびに秋材（晩材）幅とし、各種検討をおこなった。このときの調査目的は「法隆寺建立の年代を推定する何等かの資料が得られるのではないか」といったところであったが、調査そのものは、心柱の推定樹齢を算出し（調査の結果、樹齢は422～455年の間にある、と推定）、さらに原木の成長経過についての考察にとどまり、結果としては、「創建年代の推定に対する何等かの結論を引き出すことは、なお多くの困難が在するもの」、と述べるにとどまった（小原1958・2002）。

じつは、小原論文が発表される6年前の1952年、西岡秀雄（現在、慶応大学名誉教授）は心柱の円盤標本から年輪幅を測定し、年輪年代学的な手法を用いて心柱の年輪年代を推定し、日本考古学協会第

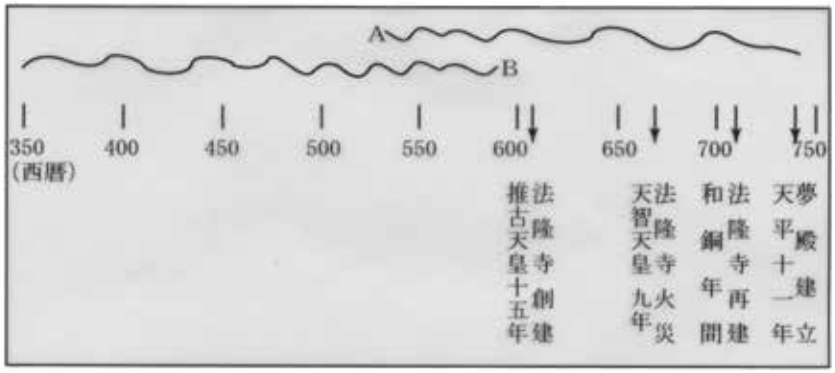


Fig. 186　法隆寺夢殿桁材（A）および五重塔心柱（B）の年輪成長曲線（西岡 1974）

注　A曲線およびB曲線とが西暦550年前後の部分にて一致することに注意

十回総会で「年輪より観たる法隆寺五重塔の創建年代」と題する研究を発表していた[2]。ガリ版印刷による発表要旨ではあるが、学史的にも重要なので以下にその全文を紹介しておこう（西岡秀雄 1952）。

「法隆寺五重塔が解体され、腐朽した心柱を切断した機会に、著者は心柱の年輪について計測を実施し、これを同じく法隆寺夢殿の桁材の年輪実測と比較した結果、五重塔心柱の伐採年代は、推古天皇十五年以前と判断される。

すなわち夢殿の桁材の年輪を調査した結果、夢殿が建立された天平時代から約二百年を遡った期間の年輪成長曲線、換言すれば、概ね西暦六世紀後半より西暦八世紀前半にわたる期間の樹木の成長の良好期不良期が判明し、これを基準曲線とする。

次に再建か非再建が問題である法隆寺五重塔の心柱の年輪を検するに、この心柱は約250年を算して、その年輪成長曲線を求めて夢殿の基準曲線と比較した場合、所謂「和銅再建説」が正しいとするならば、心柱は常識的に少くも西暦700年頃に伐採された樹木であって、基準曲線の700年頃以前の部分と一致するはずである。

しかしながら事実は心柱の外側部分が、夢殿桁材の西暦600年以前の部分と相似であり、五重塔心柱が推古天皇十五年以前に伐採された樹木であることを裏書きしている。

従って、現存する法隆寺五重塔を奈良朝時代再建のものと主張するならば、心柱は山から伐採して概ね百年も放置した材木を用いたと強辯するか、基準にした夢殿の創建年代について、天平十一年より降る平安初期のものと常識を改めるかせねばならず、法隆寺五重塔に関する限り、所謂「再建説」は不利の感が深い。法隆寺金堂の柱については、著者は未だ年輪計測の機会を得ていないので、「再建」「非再建」いずれに有利であるか、遺憾ながら今回は述べられない。

しかしアメリカなどでは、大学でも博物館でも極く普通に知られている年輪計測法が、日本では未だ活用の域に達せず、日本における歴史時代の基準曲線すら用意されていないので、日本の学界にも重要な自然科学的研究手段として利用されることが望ましい。」と結んでいる。

現在のように、精密な年輪読取器やコンピュータのない時代におこなった西岡のこの研究発表は、日本における最初の年輪年代法の応用研究として高く評価できるものである。しかし、年代を割り出すにあたっての手続きには大きな問題があった。それは、なによりも暦年代を確定する暦年標準パターンがあらかじめ準備されていなかったことである。つまり、夢殿の桁材の年輪も、心材の年輪と同じように

年代が明らかではなかった点である。それにもかかわらず、夢殿の桁材の年輪パターンをあたかも暦年標準パターンのように扱ったのである（Fig.186）（西岡1974）。この２つの年代不明の年輪パターンを照合し、そこから法隆寺の「再建」、「非再建」の結論を導き出すのは方法論的にもいささか無理があったと言わざるをえない。このためか、当時西岡のこの研究に対しての学界での反応はひどく否定的であった、という。しかし、1952年当時、すでに法隆寺論争に対して年輪年代法からのアプローチのあったことは、論争解決に向けての切り札的な手段としてその可能性を追求した帰結であり、またその実用化が切望されていたことへの証でもあった。

暦年標準パターンを応用した心柱の年代測定

奈良文化財研究所では、心柱の円盤標本が京都大学木材研究所で保管されていることは早くから知られていた。そこで、研究を開始してから３年目の1982年にはこれを借り出し、専用の年輪読取器を使って年輪幅を10μm単位で計測し、351層分の年輪データを収集していた。その後、この年輪データに暦年が確定したのは、ヒノキの暦年標準パターン（紀元前37年～1984年）が完成した年の1985年11月であった。

351層分の年輪パターンは暦年標準パターンとの照合の結果、双方は高い相関で合致し、心柱の残存最外年輪は591年、と判明した。ただし、この時点では八角形に成形された心柱は、心材（赤身）に続く辺材（白太）が八角形にした段階で大きく削り取られてしまうから、当然のこととして辺材がすべて失われているものと理解した。実際、標本の木口面を肉眼で見るかぎりでは、心材と辺材の差をあらわす色調の明僚な違いは確認されなかった。したがって、辺材が全く無いものと考え、591年の年輪のさらにその外側に50層ないし100層の年輪を加算することになるから、この年代値を五重塔の創建年代として扱うには無理がある、と考えた。このため、1986年に公表（光谷･田中1986）した後も、研究者の間で注目されることはなかった。

ソフトＸ線撮影装置を用いた心柱の辺材確認調査

1980年代、奈良文化財研究所では、平城宮跡の整備事業の一環として朱雀門や東院地区の建物が復原された。このとき、原木から八角形に加工された柱を観察する機会がたびたびあった。これらをよく見ると、八角形のうちのいくつかの角には辺材が完存しているか、あるいは辺材の一部が残存していることがわかった。このことが契機となり、法隆寺五重塔心柱の円盤標本にも辺材が残っているのではないかと考え、2001年に京都大学木材研究所（当時）から再び借り出し、ソフトＸ線透過撮影装置を使って心柱の撮影を試みた。ソフトＸ線透過撮影時の設定条件は、電圧：50kv、電流：２mA、照射時間：60秒、フィルムＸ線焦点間距離：１．２mである。撮影は、八角形に成形したときに外周部の削除が少ない心柱の右半分（角Ａ、角Ｂ、角Ｃ、角Ｄ）に対しておこなった。その結果、角Ｂ、角Ｃ、角Ｄの外側部分で中心部とは明らかにちがってＸ線が透過しにくい画像が白っぽく写し出された（Fig.187）。

この写真を見ると、角Ｂ、角Ｃ、角Ｄの外側部分においてそれぞれ０．７cm、３．６cm、２．０cmほどが白っぽく、これに続く内側部分は全体的に黒っぽく写し出された。この差が特に顕著にあらわれた角Ｃ、角Ｄについて両者の境界部を示す同一年輪に着目し、この年輪を角Ｄ～角Ｂにかけてたどってみ

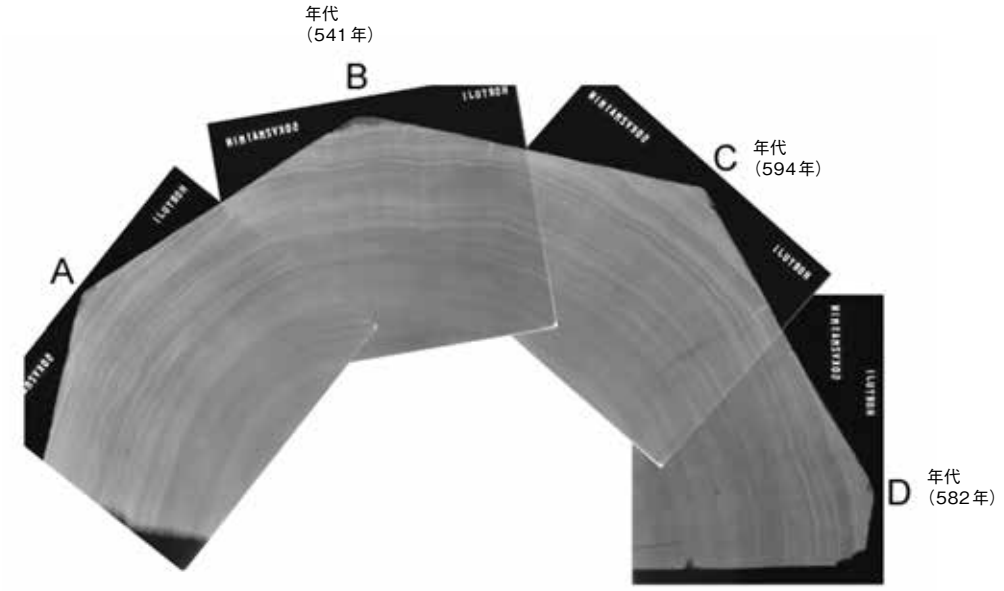


Fig. 187　心柱のソフトＸ線撮影写真（角Ｃ、角Ｄに注目）

ると、その年輪の出入りはほとんどない状況から判断して、これこそ期待していた心材と辺材の境界域を示すものであり、白っぽく写し出された箇所は辺材そのものであると判断した。普通、樹齢200年～300年以上の木曽ヒノキであれば、平均的な辺材幅は３．０cm前後である。これに比べて、角Ｃの残存幅、３．６cmはかなり広いので、辺材はほぼ樹皮直下まで残っているものと判断した。

ここで、年輪幅が極端に広い個体であれば辺材幅が４．０cm程度のものもたまにはあるが、あったとしてもきわめて珍しい部類に入る。これに比べてこの心柱の形状は、個体的特徴の少ない、標準木と見なし得るものである。ここで、心柱とほぼ同じ大きさをした八角形の標本がたまたま当研究室にあるので、参考までに紹介しておこう。朱雀門の復原に際しては心柱より少し細めの丸柱（八角形の段階で対辺間の幅：73．0cm）が16本使用され、その根元側にあたる元口部分（八角形）の断片が奈良文化財研究所に保管されている。このうち、八角形の段階で成型された柱のなかの１点は奈良県東吉野産で樹齢は388層あり、その樹齢や大きさからみてほぼ心柱と同じ形状のものである。この八角形の一角には辺材が完存しており、その幅は３．３cmあってこの中に刻まれていた年輪数は36層であった。一方、心柱の角Ｃの幅は３．６cmあり、その中の年輪数は41層であった。両者は、ほぼ似かよった大きさであることから、この例を見ても、心柱の角Ｃに残っていた辺材幅からは完存とまでは断言できないにしてもほぼ樹皮直下に近いところまで残っているものとみて間違いない。

赤外分光撮影装置を用いた心柱の辺材確認調査

さきに、ソフトＸ線撮影写真から、心柱に辺材が残存していることを確認したが、異なる方法によっても同じ箇所で心材と辺材の識別が可能かどうかの検討をおこなった。使用した機器は、ポリライトPL10（オーストリア、ROFIN社製）の赤外分光撮影装置である。この装置の出力波長は400nm～680nmの範囲で出力可能である。心柱の調査にあたっては、さきのソフトＸ線撮影写真で辺材部が最も広く残っていた角Ｃや角Ｄについておこなった。

Fig. 188　心柱の角Ｃ部分における赤外分光撮影写真

その結果、650nm（近赤外光）あたりの波長域で、ソフトＸ線撮影写真で確認した角Ｃおよび角Ｄの外側において確認されたまさにその箇所でも内側部分に比べて外側部分が全体的に黒っぽく写し出された。このことから、この部分は赤外分光撮影写真でもはっきりとその違いが現われたので、この部分は辺材の可能性が高い（Fig.188）。赤外分光撮影の特徴は、物体表面の比較的深い部分からの反射光をとらえるため、表面のざらつき等に左右されにくく、反射率の差異を画像として可視化できることにある。今回、この効果を心柱でもはっきり認めることができた。

以上のように、ソフトＸ線撮影写真や赤外分光撮影写真によっても、心柱の角Ｃにおいては紛れもなく辺材がほぼ完存しているものと判断された。この発見は、心柱の年輪年代が伐採年に近い年代を示すことになるので、俄然注目されることになった。そこで、この機会に再び心柱の年輪計測をおこなった。1982年に計測したときの心柱の角Ｃに設定した測線から計測収集した年輪数は351層分であった。今回、この箇所を注意深く観察したところ、角Ｃの木口面の最外層のさらにその外側（後背面のやや下寄り）に３層分あることが確認できた。この残存している箇所は年輪読取器では計測できないこところであったので、年輪の数だけをカウントすることにした。この角Ｃ方向の351層分の年輪パターンとヒノキの暦年標準パターン（Ａ）との照合は高いt値（11.7）で成立した。したがって、この角Ｃの残存最外年輪は591年＋３層となり、594年であることが最終的に確定した（Fig.189）（光谷2001、光谷・高妻・大山2001）。また、角Ｂ、角Ｄの年輪年代は、角Ｃの測線で計測した351層分の年輪パターンを基準パターンにし、これとの照合によって、それぞれ角Ｂは541年、角Ｄは582年と判明し、角Ｃの594年よりいずれも古い年輪年代を示した。この年代差は加工時における削除年輪数の差である。したがって、心柱の伐採年代は正確に求めることはできないものの、594年を上限とし、その外側にさらにあと数層分を考慮しておけば、心柱の伐採年代の範囲におさまるものとおもわれる。この心柱の年輪年代は、いちはやくマスコミ等に大きく報道され、歴史学研究者のあいだでも話題となった。その後、この結果をうけての論考がいくつか発表されたが、これまでのところ多くの賛同を得たものとはなって

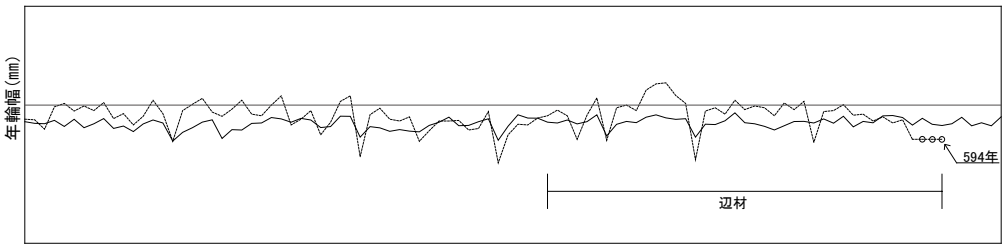


Fig. 189　ヒノキの暦年標準パターングラフ（実線）と心柱の年輪パターングラフ（破線）

いない（大橋 2002、岡本 2002、竹原 2003、松浦 2004）。

ところで、心柱のソフトＸ線透過撮影による調査では、辺材部とみられる箇所でＸ線が吸収されにくいことが判った。この発見によって、角Ｃの外側部分に辺材部が残存していたことを知るきっかけになったが、この理由のひとつとしてつぎのようなことが考えられる。普通、現生の木材の辺材部と心材部との水の吸収能力は辺材部の方が高い。このことは、心柱が長年土中にあったために、辺材部における水分を吸い上げる能力が心材部よりも高いため、土中の微量元素などを長年にわたって吸い上げた結果、辺材部にだけ蓄積した可能性が考えられる。この点は今後、各種の分析法を通して明らかにされることを期待したい。

年輪年代法による西院伽藍の総合的年代調査

昭和の大修理は、金堂、五重塔が1945年から開始され、五重塔は1952年に終了、金堂は1954年に終了した。中門は、すでに明治年間に修理されていた。法隆寺には、この一連の大修理の際に取りはずされた古材が大切に保管されている。その量は膨大である。また、修理中に発生した金堂火災のときに焼損した古材も保管されている。このたびの年輪年代法による調査は、こうした保管古材を主対象とした。さらに、最近では高精細なデジタル一眼レフカメラの登場によって、手持ちのまま現場で建物の部材の年輪画像を手軽に撮影できるようになった。そこで、金堂や五重塔の内部に入り、辺材が残存している当初材を見つけ出して、その選定部材の年輪画像を撮影し、年輪計測に備えた。調査期間は2002年９月20日～2004年６月14日までの約２ヵ年に及んだ。以下に調査結果の概略について報告する。

調査対象部材と年輪年代の測定方法

調査対象部材は、昭和20年代の大修理の際に取りはずされ、大切に保管されていた金堂、五重塔、中門の古材のなかから、まず優先的に年輪が約100層以上あり、辺材が残存しているものを選定した。さらに辺材が無いものでも樹齢の多いものは、年代測定の候補部材として選び、これらを年代学研究室に搬入し、専用の年輪読取器を用いて、年輪幅を10μm単位で計測し、年輪データを収集した。さらに、つぎの計測方法としては、高画質のデジタル一眼レフカメラ（キャノン　EOS－1DS、有効画素数1，110万画素）を金堂や五重塔の内部に持ち込み､年代測定用に選定した部材の年輪画像を撮影した。このカメラで撮影した画像は、４，064×２，704画素で構成されるため、一枚あたりの撮影範囲を４cm×２．７cm程度に定めれば、１画素あたり約10μmに相当するので、専用年輪読取器とほぼ同じ精

度が保てる。このようにして撮影した年輪画像データはコンピュータに入力し、モニターに写し出された年輪画像を見ながら半自動的に年輪データを計測する方法（奈良文化財研究所と千葉大学工学部とで開発した年輪計測ソフトを使用）（光谷・大河内2004）と、年輪画像を出力したカラープリントから、年輪読取器で計測する方法とを併用した。調査した部材点数は、金堂－49点（デジタル計測：11点)、五重塔－48点（デジタル計測：10点)、中門－10点（デジタル計測：0点）の総数107点である。これらの選定部材から計測収集した部材ごとの年輪データの照合に際しては、宮町遺跡出土の柱根の年輪年代の確定にその威力を発揮したヒノキの暦年標準パターン（A）（紀元前37年～838年）と別のヒノキの暦年標準パターン（B）（512年～1322年）とを用いた。さらに、スギについては、ヒノキの暦年標準パターン（A）との照合によって年代付けされたスギの暦年標準パターン（158年～736年）を使って樹種別に各部材の年輪年代を確定した。ちなみに、このスギの暦年標準パターンを構成する年輪データは正倉院宝物の木工品（おもに櫃類）から計測収集したものを使って作成したものである。つぎに、各部材の年輪年代を割り出すにあたってはコンピュータによる年輪パターンの照合と目視による年輪パターングラフの比較照合とを併用しておこなった。コンピュータによる年輪パターンの照合法はヨーロッパで年輪年代学研究者が広く採用している方法にならい、つぎの相互相関分析手法によった。

①コンピュータによる年輪パターンの照合

樹木の年輪は、同じ年に形成された年輪でも樹齢差や生育環境条件によって個体的な特徴が生じる。そのため、計測した生データをそのままに比較するのではなく、個体差を除去するため、年輪データの規準化処理をおこなう。ヨーロッパにおける研究ではこの処理法に5年移動平均による傾向曲線をあてはめて規準化する方法が広く用いられている（Baillie and Pilcher 1973、Baillie 1982、光谷･田中･佐藤1990）。この方法によって、年輪データを規準化するには、ある年の年輪幅データx_iを、その前後各2層の連続する5年分の平均年輪データで割った比率で表される。この計算は樹心部の3番目からスタートさせ、樹皮部にむかって1層ずつずらしながら最外層の手前の3番目の年輪データまで順に計算する。こうして規準化された数値データは自然対数に変換する。実際には、（1）式によってあらわされる式によっておこなわれる。

$$x_i = \ln\left\{ 5a_i/(a_{i-2}+a_{i-1}+a_i+a_{i+1}+a_{i+2}) \right\} \quad \cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots (1)$$

こうして、規準化された数値データは、相互の類似の程度を知るために（2）式で定義される相関係数rによって算定される。

$$r = \left(\sum x_j y_j - N\bar{x}\bar{y}\right) \Big/ \sqrt{\left(\sum x_j^{\,2} - N\bar{x}^{2}\right)\left(\sum y_j^{\,2} - N\bar{y}^{2}\right)} \cdots\cdots\cdots (2)$$

（2）式による計算は、一方の規準化済み数値データを基準に比較照合するもう一方の規準化済みの数値データを樹皮部にむけて1年ずつずらしながらrを算出する。ここで、（2）式で求めた相関係数rの有意性の判定は（3）式のt検定によっておこなう。

$$t = r\sqrt{(N-2)/(1-r^2)}$$ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（３）

rは（２）式によって求めた相関係数、Ｎは比較照合の際に重複するデータ区間の長さである。（３）式によって得られた（以下t値とする）は、その値が大きければ大きいほど相方の年輪パターンの類似度が高いことを示す。ヨーロッパにおける研究では、自由度が60以上の場合、t≧３．５になれば、相方の年輪データのあいだに有為な相関関係がある、とみなしている。このときの危険率は０．１％である。

実際に、年代不明の木材試料の年輪パターンを比較照合する場合、t値が３．５以上になる箇所が複数箇所以上になることが多い。このような場合、コンピュータで検出されたt値のなかのいずれの年代位置で相方が正しく照合しているかは、最も高いt値になるところがその可能性の高い場合が多い。しかし、t値が３．５～４．５あたりで最大のt値を示すときには必ずしも正しい重複位置を示しているとは限らず、断定しがたい。そこで、コンピュータによる照合法では、とりあえずt値が３．５以上になるところをすべて検出することにしている。このとき、t値が３．５から４．５あたりの値を示す場合は、両者の年輪パターンが正しく重複しているかどうか、判定しがたいので、一応の基準としてt値を５．０前後以上に設定し、さらに重複部分がおよそ100層以上になっているかどうかを調べることで照合の成否を決定することにした。また、t値が５．０以上になるような場合でも、必ず目視によって年輪パターングラフの重複状況を詳細に確認し、最終的に年輪年代を確定することとした。ちなみに、t値が５．０前後以上の年輪パターンの重複状況を示すものは目視でも容易に正しく重複していることが確認できる程度の類似度である。

つぎに、年代測定結果を見るまえに、古材の形状（おもに辺材の有無）によっては年輪年代の解釈が違ってくるので、試料形状と年輪年代との関係についても整理しておく。

②部材の形状と年輪年代

コンピュータで検出した照合位置で、双方の年輪パターンが一致していることが明らかになると、暦年標準パターンの暦年を部材の年輪パターンにそのままあてることができるから、部材に刻まれていた年輪に暦年が確定することになる。こうして得られた年輪年代は、部材の形状の違いによって伐採年や枯死年にならない場合がある。そこで、対象となる部材の形状をタイプ別にわけて、それぞれの違いを把握しておかなければならない。

樹木の横断面を見ると、中心部に髄があって、それから外方向に心材部（赤身）、辺材部（白太）、樹皮と続く。この樹木の構造と年輪年代法で扱う試料の形状との関係は、大きくつぎの３通りにわけられる。

樹皮型：樹皮または最外年輪の一部が残存しているもの。

辺材型：試料の一部に辺材部をとどめているもの。

心材型：心材部のみからなるもの。

樹皮型の木材から得られる年輪年代は、原木の伐採年ないし枯死年を示すから問題はない。ただし、問題が一つある。年輪１層のなかの木材組織は、大型で細胞壁の薄い仮道管からなる早材部と、小型で細胞壁の厚い仮道管からなる晩材部とからなっている。早材部は春から夏にかけて形成され、晩材部は夏から秋にかけて形成されるのが普通である。したがって、最終形成年輪が早材部のみからなり、晩材部がまだ形成されていないものは、原木の伐採時期を夏期以降と特定し、年輪年代法で推定できたその

年輪の形成年を試料の原木の伐採年とすることができる。また、早材部につづく晩材部がわずかでも形成されておれば、その伐採時期をその年の夏から秋にかけてと推定してよかろう。このような事例では、ときには最終形成年輪の早材部と晩材部との年輪構造を細胞レベルで確認することが必要になる。しかし、最終形成年輪の早材部と晩材部との１組が完全に形成されている場合に問題が生ずる。その伐採時期は、生育環境の違いや樹種によって差異はあるが、ほぼ11月ごろから翌年の４月ごろまで、暦年の２年にまたがった時期が想定できる。試料からだけでは、原木の伐採年がこの２年のいずれか、それを特定することはできない。それを誤ると、暦年を１年誤ることになる。辺材型の試料では、その年輪年代は原木の伐採年に比較的近いとみてよい。ところが、木材の多くは樹皮型や辺材型のものではなく、圧倒的に多いのが心材型のものである。この形状の年輪年代は、原木の伐採年より古い年代を示すことになるから、その解釈にあたっては注意を要する。

この他に、原木の伐採後、現場までの運送期間、加工するまでの乾燥期間、あるいは古材の再利用の有無などについても勘案し、年輪年代を評価しなければならない。

なお、本稿では、デジタル一眼レフカメラで撮影した年輪画像からの年輪計測は一部においてまだ未計測のものがあったり、調査部材の名称等のつき合わせが十分にできていないものがあるなどしておりここでは2004年７月15日（報道発表日）段階において発表した年輪年代の結果についてのみ報告する。とくに、法隆寺論争を展開するにあたって重要な年代値となる樹皮型と辺材型の部材からだけのものをとりあげ、報告することとする（Tab.27、Fig.190）。

結　果

各部材の年輪パターンとヒノキの暦年標準パターンおよびスギの暦年標準パターンとの照合はいずれも*t*値が５．０以上の高い類似度で成立し、それぞれの年輪年代が確定した。このうち、年輪年代が確定したものが金堂－46点、五重塔－47点、中門－８点であった。このなかで、樹皮型や辺材型のものは金堂－15点、五重塔－６点、中門－２点の総数23点であった。これらの数少ない部材から得られた年輪年代は、法隆寺西院伽藍の創建時代を読み解くうえできわめて貴重な年代情報となる。本稿では、各建物の年代を考察していくうえで、特に重要と思われる12点（金堂－６点、五重塔－４点、中門－２点）について報告する。以下、各建物ごとに結果を見ていきたい。

Tab.27　法隆寺金堂・五重塔・中門の年輪年代測定結果

建物	部材名	樹種	計測面	年輪数	形状	辺材幅	年輪年代
金堂	上重の雲肘木（東面　南から三）	ヒノキ	木口	176	辺材型	1.9㎝	661年
	上重の尾垂木掛（南面東側）	ヒノキ	柾目	136	辺材型	3.1㎝（斜距離）	651年
	外陣の天井板（焼損古材）	スギ	木口，柾目	272	樹皮型	4.7㎝	667～668年（生育停止期間）
	外陣の天井板（焼損古材）	ヒノキ	木口，柾目	203	樹皮型	3.0㎝	668～669年（生育停止期間）
	庇の西側扉口北側の辺付	ヒノキ	柾目	161	辺材型	3.0㎝	650年
	初重の垂木（北面　東から十五）	ヒノキ	柾目	259	辺材型	2.6㎝	1201年（後補材）
五重塔	心柱	ヒノキ	木口	354	樹皮型or辺材型	3.6㎝	594年
	二重北西の隅行雲肘木	ヒノキ	木口，柾目	165	樹皮型or辺材型	2.8㎝	673年
	三重の垂木（南面　東から三十）	ヒノキ	柾目	200	辺材型	2.5㎝	663年
	裳階の腰長押（東面内側）	ヒノキ	柾目	147	辺材型	2.1㎝	650年
中門	初重の大斗（ハ一）	ヒノキ	木口	140	辺材型	2.5㎝	685＋14→699年（推定）
	初重の大斗（ホ四）	ヒノキ	木口	189	辺材型	2.9㎝	678年

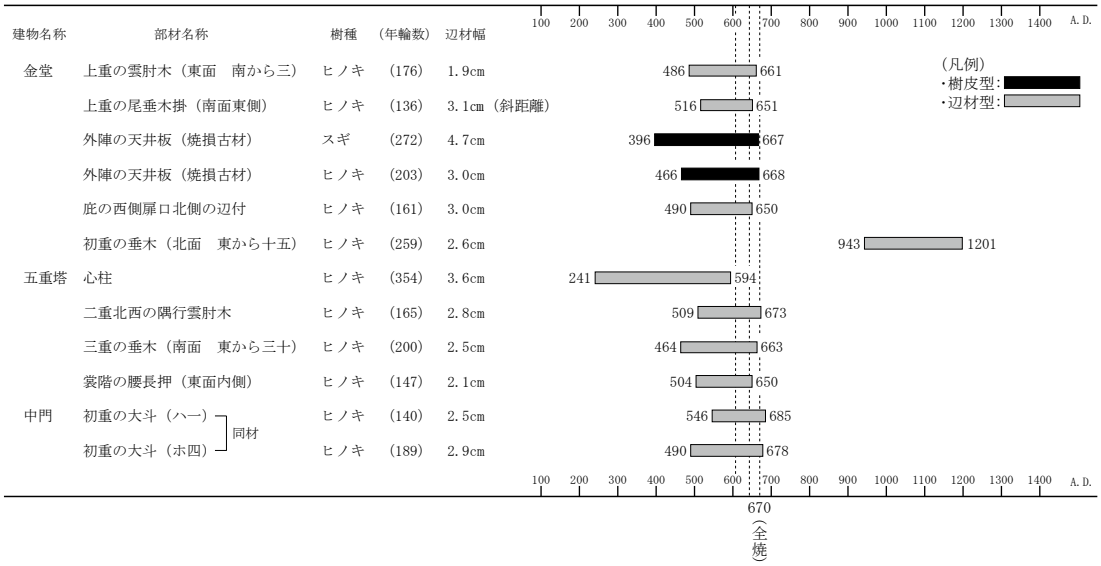


Fig. 190　法隆寺金堂・五重塔・中門の年輪年代測定結果

金堂部材の年輪年代

調査した部材の総数は49点（デジタル計測：11点）で、このうち年輪年代が確定したものは46点あり、調査対象部材の約9割が判明した。伐採年代の得られる樹皮型のものは外陣の天井板（焼損古材）の2点であった（Fig. 191）。このうち、スギの天井板の最外層には内樹皮が残っていたのでこれから得られた年輪年代、667年は伐採年代を示す（Fig. 192～195）。さらに、この部材の最外年輪の仮道管の形成状況を顕微鏡でみると、早材と晩材の1組が形成されているので、伐採年は667年～668年にかけての生育停止期間中の2年にまたがった年代を考えなければならない。一方、ヒノキの天井板の年輪年代は1年違いの668年であった（Fig. 196～200）。この部材も同様に検鏡したところ、これもまた668年～669年にかけての生育停止期間中のものであることが判明した。この天井板2点から得られた年輪年代は670年の法隆寺火災の記事より数年前の伐採年を示しており、法隆寺論争にとっては大変微妙な年輪年代である。このように、当初部材の伐採年代が判明したことは、画期的なことであり、西院伽藍の創建年代を考えるうえではきわめて貴重な年代情報である。

次に、辺材型のものは4点あり、いずれも670年より古い年輪年代が確定した。これらのなかには伐採年代の可能性を秘めているものもあるかもしれないが、伐採した年に形成された最外層の年輪が確認できていないので、正確な伐採年を明らかにすることはできない。しかし、いずれも原木の伐採年代に近い年代情報として認められるものばかりである。この形状から得られた年輪年代が、法隆寺論争とどうかみ合っていくのか、この点も今後の大きな課題のひとつとなろう。

Fig. 191　金堂外陣天井板の焼損古材
（上がスギ、下がヒノキ）

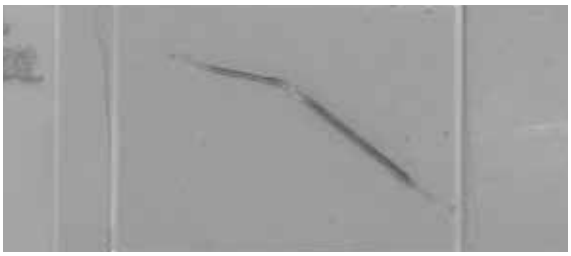


Fig. 192　金堂外陣天井板（スギ）から
採取された内樹皮

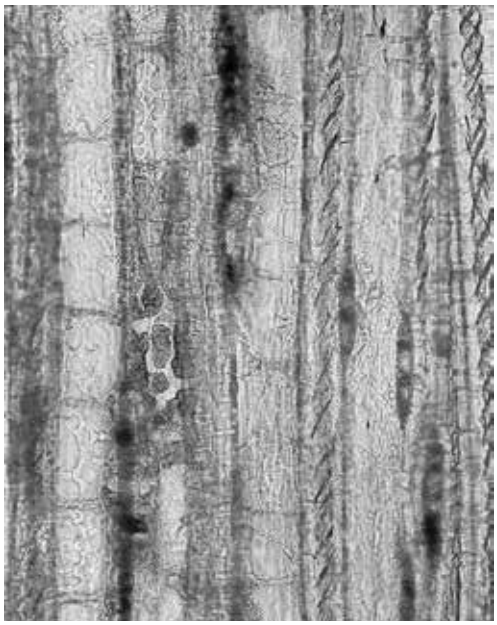


Fig. 193　金堂外陣天井板の内樹皮顕微鏡写真（X 200）

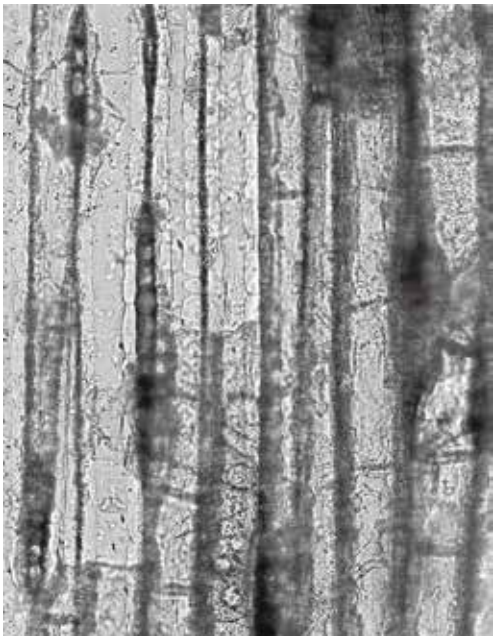


Fig. 194　現生スギの内樹皮顕微鏡写真（X 200）

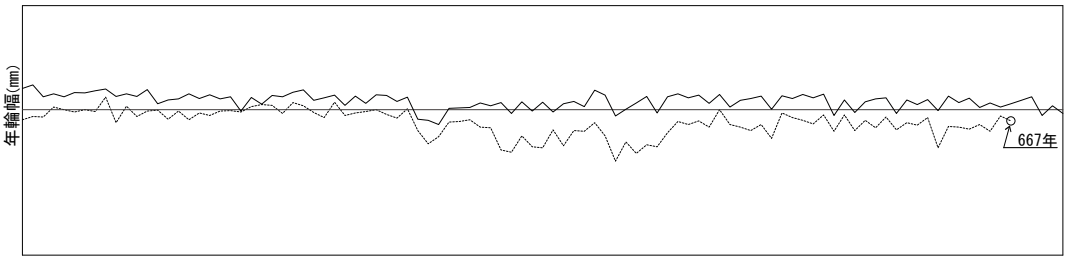


Fig. 195　スギの暦年標準パターングラフ（実線）と法隆寺金堂外陣天井板（スギ）の年輪パターングラフ（破線）

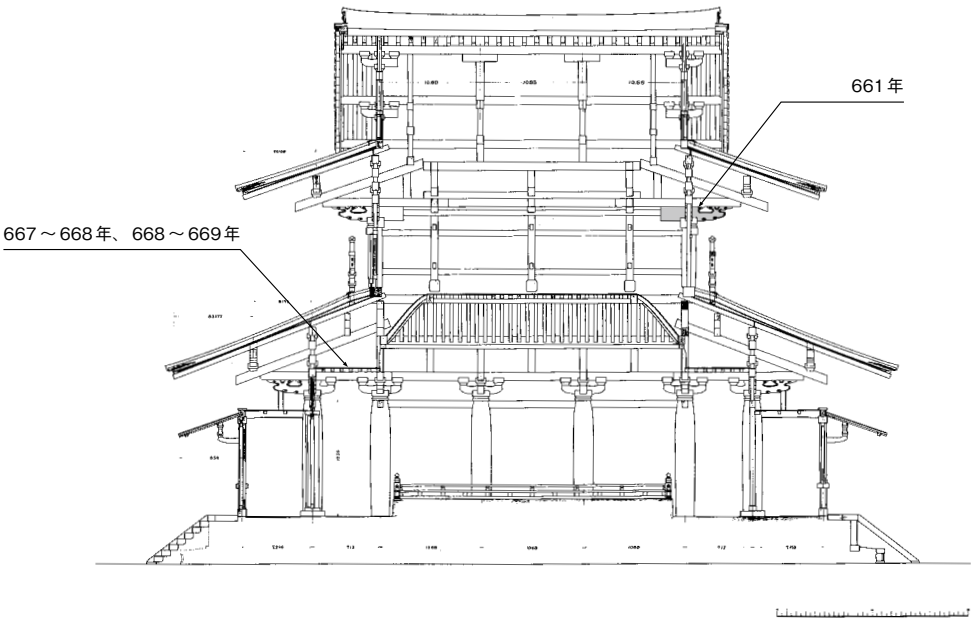


Fig. 196　法隆寺金堂桁行断面図

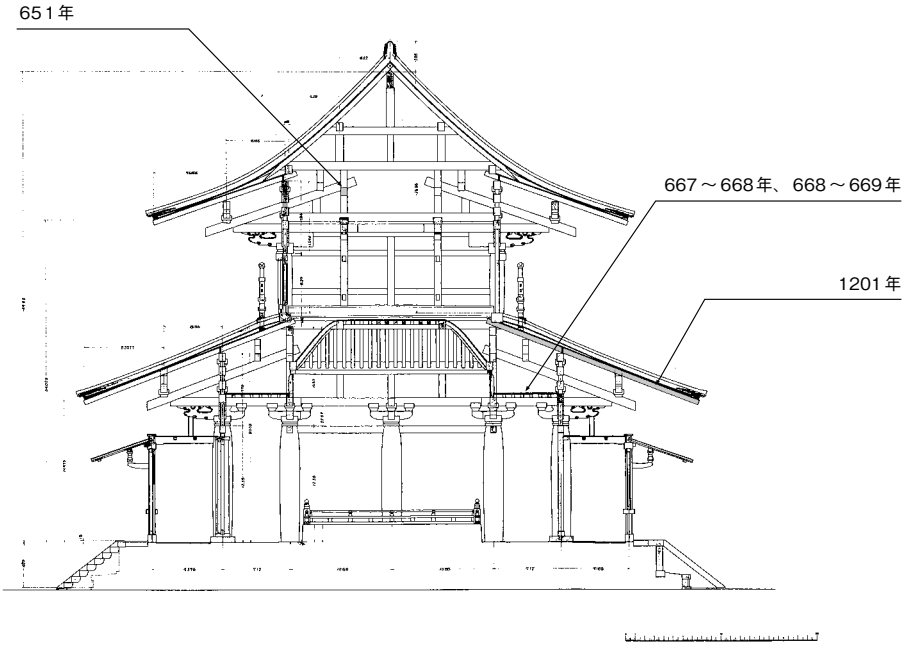


Fig. 197　法隆寺金堂梁行断面図

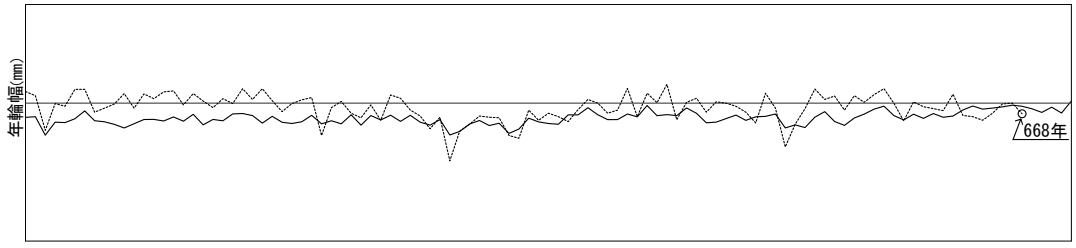


Fig. 198　ヒノキの暦年標準パターングラフ（実線）と金堂外陣天井板（ヒノキ）の年輪パターングラフ（破線）

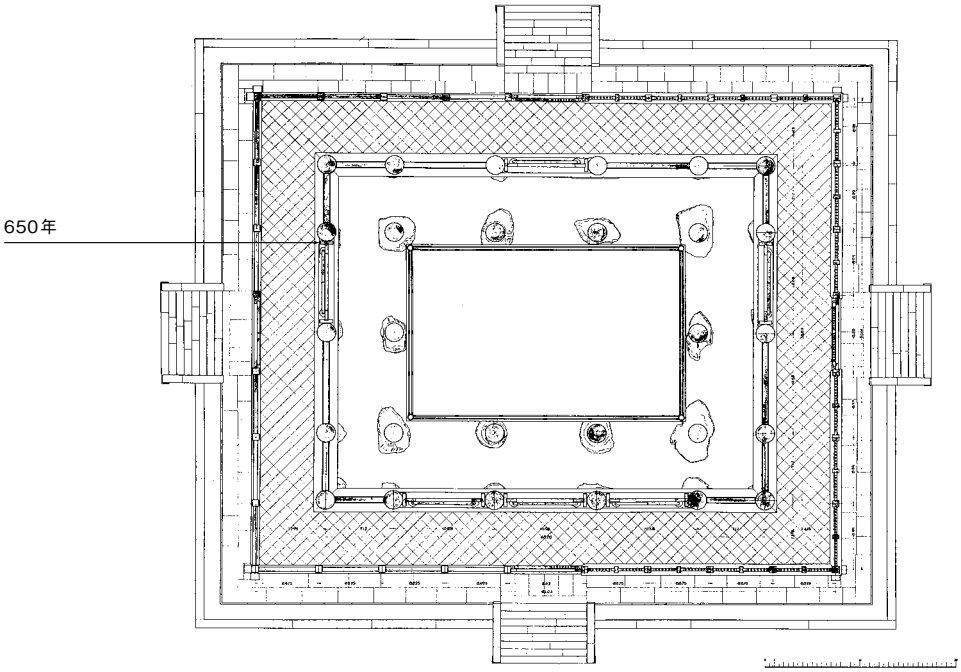


Fig. 199　法隆寺金堂初重平面図

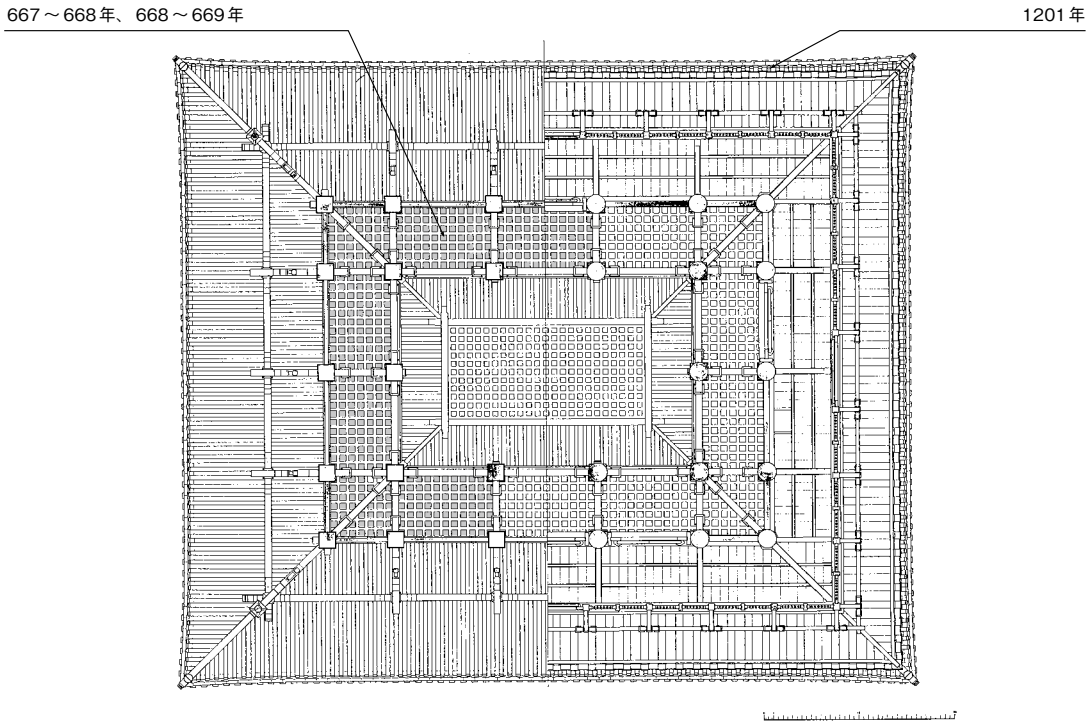


Fig. 200　法隆寺金堂初重見上図

今回の年代調査では、当初部材だけを対象にしたわけではない。普通、年輪年代法による建築部材の年代調査では、当初材の年輪年代ばかりではなく後世の後補材の年輪年代も建物の改修年代を明らかにするために重要である。金堂の調査結果をみてみると、初重の垂木（北面　東から十五）から、1201年の年輪年代が得られた。これは辺材型であるから、伐採年代に近い年代と解釈できる。この結果は13世紀初め頃に垂木を取り替えるような大きな修理のあったことを示している。

五重塔部材の年輪年代

調査した部材点数は48点（デジタル計測：10点）で、このうち年輪年代が確定したのは47点であった。結果をみてみると、本調査のきっかけにもなった心柱の調査については、前段で詳しく述べたとおりである。心柱の594年の年輪年代から推定して、この原木は聖徳太子（574年～622年）が20才代前半に伐採されたものである可能性が高い。つぎに、辺材型の部材3点のうちの1点（二層北西隅雲斗雲肘木）から得られた年輪年代は673年であった（Fig. 201 ～ 203）。この部材は、五重塔の内側の木口面から見るかぎり、樹皮直下の最外年輪まで残っている可能性が高い。となると、この部材の年

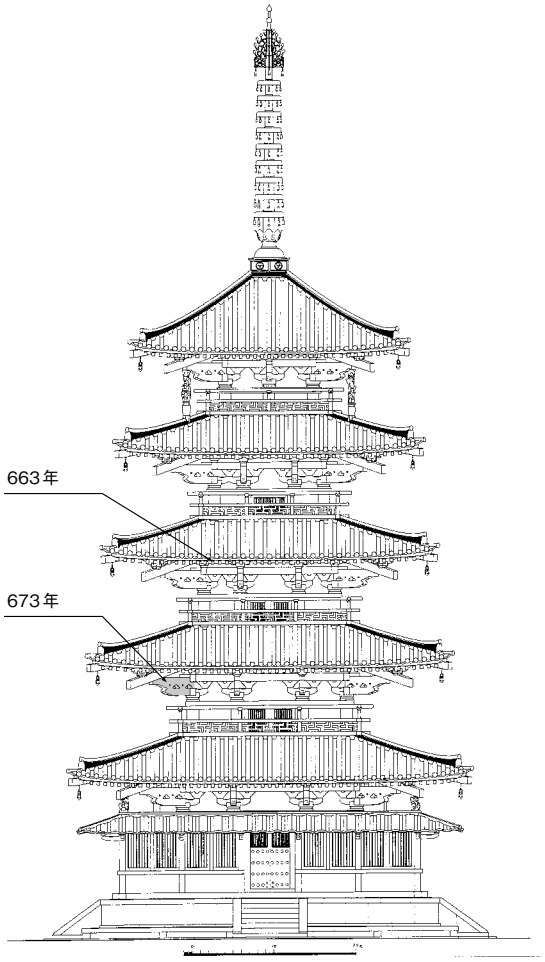


Fig. 201　法隆寺五重塔立面図

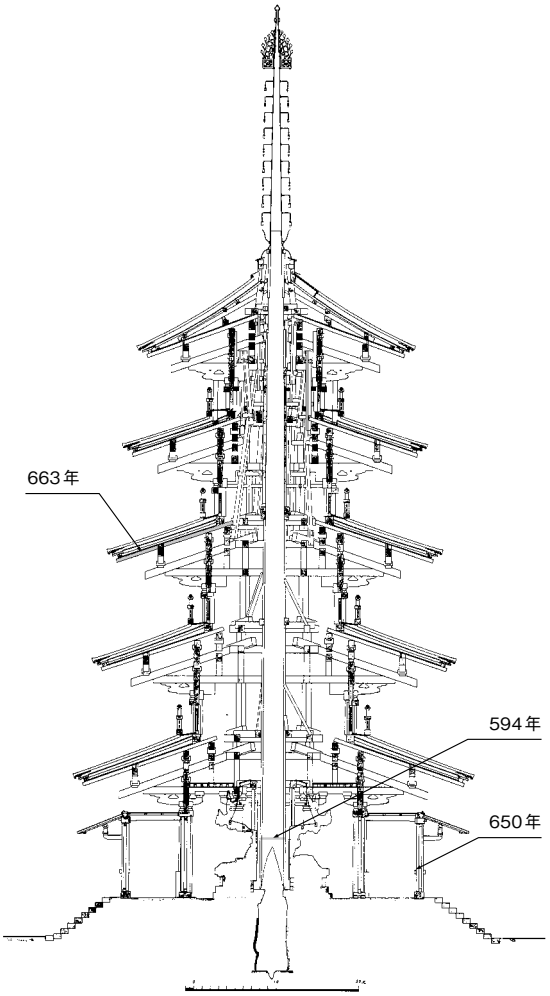


Fig. 202　法隆寺五重塔断面図

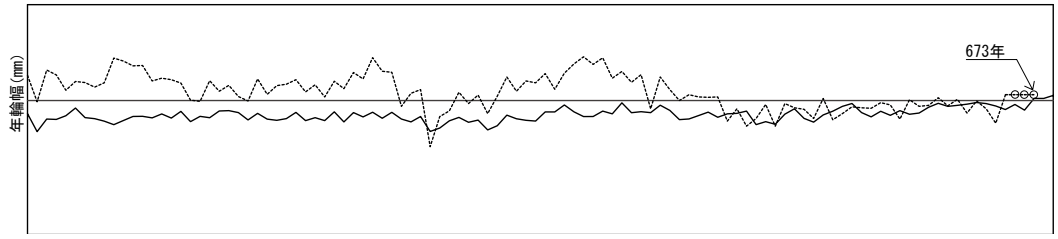


Fig. 203　ヒノキの暦年標準パターングラフ（実線）と法隆寺五重塔雲斗雲肘木の年輪パターングラフ（破線）

輪年代は、670年の火災から3年後あたりに伐採されたことを示し、再建説を裏付ける結果となった。

このように、4点の年輪年代からはさきの雲斗雲肘木の年輪年代が決定的な年代を示したことから670年の火災の文献記載を裏付ける結果になった。しかし、五重塔の心柱だけが突出して古い年代を示しているという点が新たな問題として注目される。と同時に、このことが法隆寺西院伽藍の造営経緯を研究するうえで新たな謎として今後検討されるべき重要課題を年輪年代学の側から提供することになった。

中門部材の年輪年代

明治修理のときに取りはずされた古材の中から、10点を選定し年代測定をおこなったが、このうち8点に年輪年代が確定した。このなかでも、辺材型の大斗2点（ハ－一、ホ－四）は相互の年輪パターンが酷似していたので同材（$t = 18.4$）であることがわかった。このうち、新しい方の年輪年代はハ－一の大斗から得られたもので685年＋α年と判明した（Fig. 204・205）。

ここで、この大斗の伐採年代を推定してみることとする。この大斗の辺材幅は2.5cm、この中には21層分の年輪が刻まれていた。したがってこのなかの平均年輪幅は約0.8mmであった。仮に、この部材の辺材幅が心柱の場合と同様に3.6cmほどあったとすると、1.1cmが削除されたことになる。この失わ

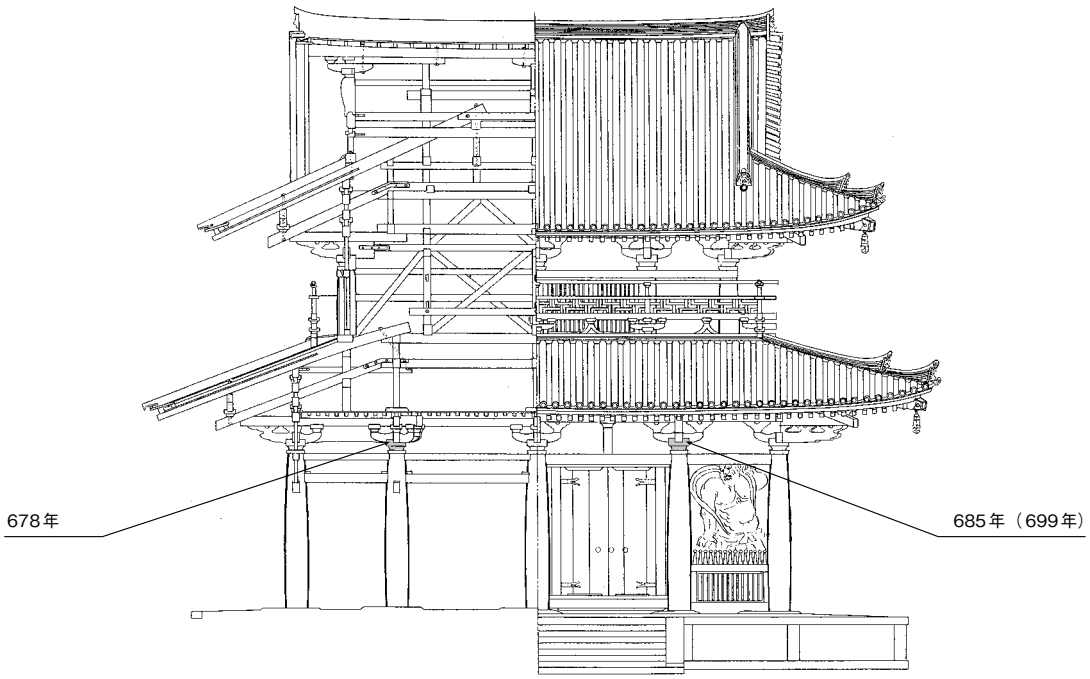


Fig. 204　法隆寺中門立・断面図

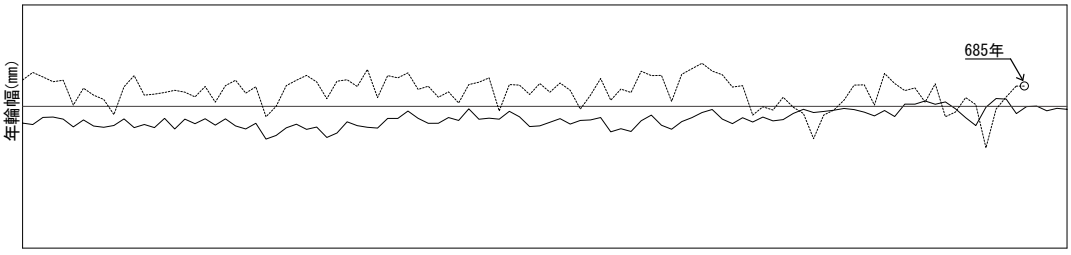


Fig. 205　ヒノキの暦年標準パターングラフ（実線）と法隆寺中門大斗（ハ－一）の年輪パターングラフ（破線）

れた辺材部のなかの年輪を算出するには、さきの平均年輪幅（0．8mm）で割ると約14層分の年輪があったことになる。となると、この大斗の推定伐採年は685年＋14層で、699年前後の年代が推定される。

まとめ

本稿では、今から約50余年前の関野克、西岡秀雄や小原二郎らによる年輪年代学の先行研究および五重塔の解体修理に際し、輪切り標本にされた心柱の伐採年代の絞り込みにいたった経緯、ならびに年代学研究室にとって年輪年代法の集大成として位置づけて取り組んだ法隆寺西院伽藍の総合的年代調査の結果についてみてきた。金堂、五重塔、中門部材の年代調査でわかったことは、金堂の創建は外陣天井板の伐採年代から668年以降、五重塔は二層北西隅雲斗雲肘木の年輪年代から673年以降とわかった。この年輪年代は五重塔が673年以降に本格的な造営が開始されたことを示している。一方、五重塔心柱の年輪年代は594年と判明したが、なぜか他の部材と比べて突出して古い年代であり、この点が新たな謎として法隆寺論争に加わることになった。中門は大斗（ハ－一）の年輪年代から685年以降ということが明らかになった。

また、各建物の年輪年代から、原木を山から伐り出した年代が金堂、五重塔、中門という順であったことも明らかになった。このように、部材の伐採年代や推定伐採年代を明らかにできたことは、これまでの法隆寺論争には出てこなかった新事実であり、論争の核心にせまる画期的な成果となった（Mitsutani・Suzuki・Okochi・Hoshino 2004）。

しかし、これまでのところ金堂に使われている当初部材の年輪年代からは、670年以降のものは1点も見つかっていない。そこで、金堂の創建年代については、はたして670年の火災前なのか、あるいは後なのかといった大きな問題が未解決のまま依然として今後に残る。しかし、今回の年輪年代法による総合的な年代調査によって得られた結果は、これまでにない格段に質の高い年代情報が提示できた点で評価されよう。

法隆寺論争は今後、こうした新しい年代情報をもとに歴史学研究者がどのようなシナリオを描くかということにかかってきたといって良いであろう。これを機に再び論争が活発になることを期待してやまない。

謝　辞

今回の年輪年代調査にあたっては、じつに多くの方々のご理解とご協力があって成し得たことである。ここに関係者各位に対し心より御礼を申し上げる。なかでも法隆寺大野玄妙管長や古谷正覚執事長、ならびに林野了三氏をはじめとする法隆寺関係者の皆様方に心より感謝申し上げる。また、金堂や五重塔の建物に立ち入ってのデジタルカメラを用いた年輪撮影作業や保管古材の調査対象部材の選定等にあたっては毎回鈴木嘉吉先生（元奈良国立文化財研究所長、建築史）の立会のもとに、各選定部材に対するご教授、ご指導をいただいた。ここに厚く御礼を申し上げる。奈良県教育委員会事務局文化財保存事務所法隆寺出張所の長谷川晋平、幹田秀雄、高宮邦寛の諸氏、ならびに、奈良県主任技能員の浜口大就などからは多大なご協力を得て実施できた。以上の方々に対し感謝申し上げる。また、金堂外陣天井板の最外年輪外側から発見された樹皮の同定については、伊東隆夫京都大学名誉教授（木材組織学）のご教示を仰いだ。ここに記して感謝申し上げる。また、心柱の標本の形状寸法を実測していただいた財団法人文化財建造物保存技術協会の諸氏に対し、感謝申し上げる。心柱や天井板の写真は当

研究所企画調整部写真室の牛嶋茂、西大寺フォトの杉本和樹に、また、心柱の心材と辺材の識別にあたって、ポリライトを使用した撮影は同じく企画調整部写真室の中村一郎によった。ここに記し感謝申し上げる。

注

⑴　年代を割り出す際に基準となる暦年の確定した標準パターンをいう。

⑵　西岡が計測した年輪データは、残念ながら戦後の混乱のなか失われてしまったということである。

参考文献

大河内隆之　2005　「年輪年代測定調査」『重要文化財錦織神社本殿他二棟保存修理工事報告書』財団法人文化財建造物保存技術協会

大橋一章　2002　「法隆寺五重塔心柱伐採年の意義」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第47輯第三分冊

岡本東三　2002　「再建法隆寺の年代」『古代寺院の成立と展開』日本史リブレット17　山川出版社

小原二郎　1958　「法隆寺五重塔心柱材の成長過程について」『古文化財の科学』第15号

小原二郎　2002　「法隆寺五重塔心柱材の調査記録－伐採年代の確認と推定－」『佛教藝術』263号

栄原永遠男　2005　『新よみがえれ紫香宮』甲賀市教育委員会

佐原　真　1983　「エックシュタイン先生を迎えるまで」『日本文化財科学界』第3号

鈴木嘉吉　1995　「法隆寺新再建論」『文化財論叢Ⅲ』奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集奈良文化財研究所

鈴木嘉吉　2002　「法隆寺五重塔心柱の年代をめぐって」『佛教藝術』263号

竹原伸二　2003　「法隆寺若草伽藍と西院伽藍に関する二題」『考古学に学ぶⅡ』同志社大学考古学シリーズⅧ、同志社大学

西岡秀雄　1952　「年輪より観たる法隆寺五重塔の創建年代」『日本考古学協会第十回総会研究発表要旨』

西岡秀雄　1974　「法隆寺論争と年輪」『気候700年周期説』寒暖の歴史第19版増補改訂・改題　好学社

松浦正昭　2004　「年輪に秘められた法隆寺創建」『飛鳥白鳳の仏像　古代仏教のかたち』日本の美術No.455至文堂

光谷拓実　1987　「わが国における年輪年代学の確立とその応用（第2報）－産地を異にするヒノキ相互間およびヒノキと異樹種間との年輪変動パターンの相関分析－」『木材学会誌』33－3

光谷拓実　1989　「年輪年代測定法による宮町遺跡出土柱根の年代測定結果について」『宮町遺跡発掘調査報告Ⅰ－紫香楽宮関連遺跡－』信楽町文化財報告書第3集、信楽町教育委員会

光谷拓実　1990ａ　「宮町遺跡の柱根と角材の年輪年代について」『宮町遺跡発掘調査報告Ⅱ－紫香楽宮関連遺跡－』紫香楽町文化財報告書第4集、信楽町教育委員会

光谷拓実　1990ｂ　「東大寺南大門吽形像の年輪年代」『南都佛教』第64号、南都佛教研究会

光谷拓実　2001　「法隆寺五重塔心柱の年輪年代」『奈良文化財研究所紀要』奈良文化財研究所

光谷拓実　2002　「年輪年代法による国宝三仏寺奥院（投入堂）･納経堂･木彫物等の年代解明」『文化財論叢Ⅲ』奈良文化財研究所創立50周年記念論文集　奈良文化財研究所

光谷拓実　2003ａ　「年輪年代法による正倉院正倉の建築部材の調査」『正倉院紀要』第25号、宮内庁正倉院事務所

光谷拓実　2003ｂ　『古年輪』奈良文化財研究所、飛鳥資料館

光谷拓実　2004ａ　『聖武天皇の夢と謎』紫香楽シンポジウム　新人物往来社

光谷拓実　2004ｂ　「国宝大崎寺八幡宮拝殿天井板の樹種調査・年代調査」『国宝大崎八幡宮本殿・石の間・

拝殿・保存修理工事報告書（本文編）』財団法人文化財建造物保存技術協会
光谷拓実　2005ａ「年輪から国宝鶴林寺太子堂の創建年代にせまる」『奈良美術研究』第二号　早稲田大学奈良美術研究所
光谷拓実　2005ｂ「年輪年代法による国宝平等院鳳凰堂部材の年代調査」『鳳翔学叢』第２輯　平等院ミュージアム鳳翔館
光谷拓実　2006ａ「年輪年代法による正倉院正倉の建築部材の調査（２）」『正倉院紀要』第28号　宮内庁正倉院事務所
光谷拓実　2006ｂ「年輪から法隆寺西院伽藍の年輪年代を読み解く」（『法隆寺研究の原点から最先端へ』法隆寺再建非再建論争百年記念シンポジウム報告書　早稲田大学會津八一記念博物館
光谷拓実・大河内隆之　2004「年輪年代法と最新画像機器－古建築・木彫仏・木工品への応用－」『埋蔵文化財ニュース』116　奈良文化財研究所埋蔵文化財センター
光谷拓実・高妻洋成・大山幹成　2001「法隆寺五重塔心柱の年輪年代」『日本文化財科学会第18回大会』研究発表要旨集
光谷拓実・田中琢　1986「古年輪学研究（１）」『京都大学防災研究所年報』第29号
光谷拓実・田中琢・佐藤忠信　1990『年輪に歴史を読む－日本における古年輪学の成立－』（奈良文化財研究所学報第48冊）同朋舎出版
M.G.L.Baillie and J.R.Pilcher 1973 “A Simple Crossdating Program for Tree-Ring Research” , TREE-RING BULLETIN, VOL.33
M.G.L.Baillie 1982 “Tree-Ring Dating and Archaeology”, London, Canberra
Takumi Mitsutani, Kakichi Suzuki, Takayuki Okochi and Yasuharu Hoshino 2004 “Tree-Ring dating of Horyuji, the oldest wooden building in the world”, Abstracts EuroDendro 2004, in Germany

原図出典

Fig. 196　文化庁　1979『国宝・重要文化財（建造物）実測図集　奈良県その16』298　法隆寺金堂　竣工　横断面図　図面番号2116
Fig. 197　文化庁　1979『国宝・重要文化財（建造物）実測図集　奈良県その16』299　法隆寺金堂　竣工　縦断面図　図面番号2117
Fig. 199　文化庁　1979『国宝・重要文化財（建造物）実測図集　奈良県その16』294　法隆寺金堂　竣工　初重平面図　図面番号2112
Fig. 200　文化庁　1979『国宝・重要文化財（建造物）実測図集　奈良県その16』300　法隆寺金堂　竣工　初重見上図　図面番号2118
Fig. 201　文化庁　1979『国宝・重要文化財（建造物）実測図集　奈良県その16』323　法隆寺五重塔　竣工　正面図　図面番号2081
Fig. 202　文化庁　1979『国宝・重要文化財（建造物）実測図集　奈良県その16』298　法隆寺五重塔　修理前　横断面図　図面番号2075
Fig. 204　奈良文化財研究所保管『奈良県所蔵建造物図面　焼付　4』818　法隆寺中門

7　部材からみた法隆寺西院伽藍各建造物の建設年代

清水　重敦

はじめに

2004年7月15日、奈良文化財研究所古環境研究室により、法隆寺西院伽藍の金堂、五重塔、中門についての部材の年輪年代調査結果が報道発表された。この調査により、金堂外陣天井板2点に木材最外層の樹皮が残存していることが確認され、その伐採年代が667－8年の間、および668－9年の間であることが明らかにされた。法隆寺670年火災説がほぼ定説化しつつある状況において、法隆寺西院伽藍の建築年代をめぐる議論に新たなよりどころを与える、画期的な成果であった（前節参照）。

ここでは、まず、年輪年代調査が明らかにした年代と、建造物の建設年代との関係について、確認しておきたい。年輪年代調査が明らかにする年代とは、生物としての樹木が伐採によりその生命を終えた年代を意味する。伐採された木は、この後、乾燥、木取り、加工の工程を経て部材となり、建造物として組み立てられる。この伐採以降の年数を一般化することができれば、年輪年代調査によって得られる伐採年代を、建造物の建設年代と関連づけることが可能となる。しかし、この間の年数の一般的傾向を示すことは不可能ではないにしても、個々の建造物には個々の建設事情があり、一般的傾向はあくまでも推定の域を出るものではない。例えば法隆寺五重塔は、建設中に一旦放置され、数十年後に工事が再開されたことが、昭和の解体修理によって明らかにされている。このような建設経緯を持つ建造物の場合、個々の部材がいつの段階で組み立てられた部材であるかを特定しない限り、その部材の年輪年代が着工年、竣工年のいずれと関連させうるものかすら、明らかにならない。

厳密に言えば、年輪年代調査が明らかにする伐採年代が、建造物の建設年代に関して確実に明らかにすることは、その伐採年代以前に建造物の竣工年代が遡ることはない、という点のみに限られる。この事実に関しては、明確に認識しておく必要がある。今回の年輪年代調査によって得られた年代からすれば、金堂、五重塔、中門の竣工年は、それぞれ669年以降、673年以降、685年以降となるが、各建物の計画開始年、着工年をここから明らかにすることはできない。

ただし、年輪年代調査が投げかける問題は、建設年代の問題に限るものではなく、むしろ年代以外に問題が広がるところに、その意義があるように思われる。例えば、法隆寺金堂の部材に670年の火災を遡る時期に伐採されたものが含まれていることからは、部材の調達方法や、金堂における各部材の意味など、これまでの研究とは異なる角度からの問題が、新たに導かれてくる。

本稿では、年輪年代調査の成果を受け、法隆寺西院伽藍の建造物の建設年代のとらえ方に対し、部材の観点を中心として問題提起を試みてみたい。西院伽藍の各建造物は、その意匠上の特異性ゆえに、これまでは様式細部が個々に切り離されて論じられる傾向があった。議論の出尽くした感のあった法隆寺の建造物であったが、近年、村田健一により、構造の視点から再び総合化が試みられつつある（村田2005・2006など）。本稿は、この研究状況に同調し、古代建築の研究に更なる展開を与えるべく、部材に関する一つの視点を提示しようと試みるものである。

西院伽藍各建造物の年代差再検討

まず、法隆寺西院伽藍各建造物の年代差の再検討から始めることとしたい。西院伽藍各建造物の年代差は、法隆寺昭和大修理に際しての解体修理時の知見と、細部意匠および技法の比較検討により推定されているが、両者の関係が整理されていない面があるように思われるからである。以下に、既往の研究において指摘されてきた各建造物の建設年代の判定根拠を挙げ、根拠相互の関係を検討しておきたい。

絶対年代

法隆寺の焼失および再建年代については、若草伽藍焼失を天智天皇九年（670）とするのがほぼ定説化しつつあるが、金堂単体に関しては、火災以後の再建とする説に加えて、火災以前から建設に着手されていたとする説も唱えられている（福山1968・鈴木1995）。

建設年代に関して、文献上から確かめられるのは、次の項目である。まず、670年の火災により法隆寺が焼失した（『日本書紀』『上宮聖徳太子伝補闕記』）。若草伽藍の焼失がこれにあたるものと見られ、西院伽藍の伽藍全体計画についてはそれ以降に立てられている。持統天皇七年（693）には、天皇が仁王会のために経台、蓋、帳を施入しており（『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』）、このときまでには金堂が竣工していたものと判断される。和銅四年（711）には、五重塔内四面塑像と中門金剛力士像が造られており（『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』）、この時までに五重塔、中門が竣工していたことが知られる。以上より、670年火災後、まず金堂が竣工し、711年までに五重塔、中門が竣工したこととなる。以上に加えて、法起寺三重塔において、天武天皇十四年（685）に寶塔を構え立て、慶雲三年（706）に塔の露盤を営作したとの記録があり（『聖徳太子伝私記』法起寺塔露銘）、これが法起寺三重塔の建設計画開始と竣工にほぼ対応するものと解されている。

各建造物の建設事情

次に構造、意匠、技法から判断される建造物ごとの建設事情を確認しておこう。

金堂　金堂は、他の建造物に先行して短期間に建設されたものと考えられている（法隆寺国宝保存委員会1962・竹島1975）。その根拠は、一つには、建設用材に転用材や不完備な材料が用いられていることから、短期間にそれらが確保されたものと判断されたことである。転用材としては、焼痕の残る礎石の使用、壁小舞における他の建造物の部材の転用が挙げられる。不完備な材料については、基壇外装のうち上成基壇羽目石が二段積みになっていること、転用礎石上に作り出した柱座が不揃いなこと、上重雲肘木内部側に筏組のえつり穴が残されており木取りした材料を目一杯使用したこと、が挙げられる。いずれも金堂の建設に際し、逼塞した経済状況と建設を急ぐ必要があったことを示している。もう一つは、金堂のみ、地山を削り出して基壇の下部を形成していることで、伽藍が金堂の位置を優先して計画されたことが読み取れる。

五重塔　五重塔は、２点の特異な建設事情が解体修理により確認された。１点は、建設を開始してから造作に取りかかる前に工事を中断した期間があったことである（浅野1953）。解体修理の際、外気に触れないはずの柱の壁、扉口辺付取り付き部に風蝕が認められた。五重塔初重扉口は、金堂と異なり、軸部組み立て後に挿入する形式となっていることと合わせると、この風蝕が軸部組み立て後、柱間装置を組み入れる前に放置された期間があったことを意味するものと解された。加えて、須弥山内部に覆わ

れている四天柱にも風蝕が認められた。法隆寺金堂の火災前に解体修理にともなう調査を担当した浅野清は、風蝕から想定される工事中断の年隔を「数十年」と想定したものの、後には「十数年」と言い換えている（浅野1953・1974）。

もう1点は、掘立式の心柱下部において、基壇上面より地下式の礎石までの間が空洞化しており、五重塔着工時よりそれほど時期を経ずにそこを補強、改造した痕跡が認められたことである（浅野1953・法隆寺国宝保存委員会1955）。空洞は大正15年に発見され、調査がなされたが、その後の解体修理により詳細な知見が得られた。まず、空洞上部に平石が四周から挺出していた。この状況は、心柱根元の腐朽が発見された際、基壇土の一部を掘り起こして心柱中心部を残したまま周囲の腐朽部を除去し、凝灰岩切石および自然石の平石を四周から挿入して応急修理したものの、後に下部が腐って空洞化した結果と見られた。関連して、現状の日乾煉瓦製須弥壇以前に木製壇が築かれていたことが判明した上、その時点では四天柱が露出しており、その四天柱が風蝕を受けていることも知られた。心柱の腐朽には立柱後ある程度の年隔が必要であるが、四天柱の風蝕とあわせて考えると、工事中断期間と関連するものと見られ、工事再開後に心柱下部の腐朽が判明し応急修理を施したのと同時に須弥壇を改造したものと解されている。

なお、中門については、明治35－36年の解体修理以降、本格的な修理がなされておらず、建設事情に関する知見は得られていない。

相対年代

建造物相互の年代差については、細部意匠と技法の比較から論じられている。その要点は、以下の6点にほぼ集約される。

（1）雲肘木の意匠
（2）柱の胴張り
（3）天井蓮華文の意匠
（4）基準尺長
（5）壁小舞の技法
（6）軒廻りの技法

これらの点の比較を根拠に、金堂→五重塔→中門の順で建設に着手されたと考えられている。このうち、金堂と五重塔については意匠、技法上の差異が大きいとされ、福山敏男は両者の間に「一世代」に相当する年隔があるものと論じている（福山1968）。

建設事情と上記の相対年代から想定される建設順序と年隔を整理してみると、①中門は最後に着工された、②五重塔は中門より前に着工されたが、途中に「数十年」ないし「十数年」の工事中断期間があった、③金堂は五重塔着工より「一世代」前に竣工した、ということになる。

この年隔を、例えば五重塔の工事中断期間を20年、「一世代」に相当する年隔を20年と、短めに見積もってみたとしても、金堂の着工を670年火災以降とすることが難しくなり、時代を遡らせる必要が生じるのである。しかも、この度の年輪年代調査により、金堂外陣天井板が667－8年の間に伐採されたことを確定する結果が出たため、670年焼失前に金堂が着工されていた、とする既往の論に有利な物証が与えられたかにみえる。

しかし、以上の様式および技法にともなう年隔の推定にはいくつかの問題点がある。五重塔については、建設が長期にわたっているため、その意匠、技法を一時期のものとみるべきではなく、部分を個別に比較した上で、時期差を総合的に判断することが必要である。また、金堂と五重塔間の様式差を示す「一世代」という表現、そして五重塔の風蝕期間を示す「数十年」ないし「十数年」という表現は、いずれも経験に基づくとはいえ、絶対年代としては提示し得ないものである。

意匠、技法比較の再検証

そこで、各建造物間の意匠、技法を、それぞれの建設事情を加味しながら個別に比較しておきたい。

雲肘木の意匠　雲肘木の意匠比較については、玉虫厨子のそれを元に分析を加えた上原和の整理が説得力に富む（上原 1968）。玉虫厨子では、雲肘木側面に肘木部と斗部を区切る朱線が入れられており、斗部では輪郭線を左右対称にしている。すなわち、雲肘木が、肘木と斗からなる三手先斗栱を一体化した上で、平面的に表現したものであることが明瞭に読み取れ、輪郭線の雲形表現をその本質とするのではないことがわかる。

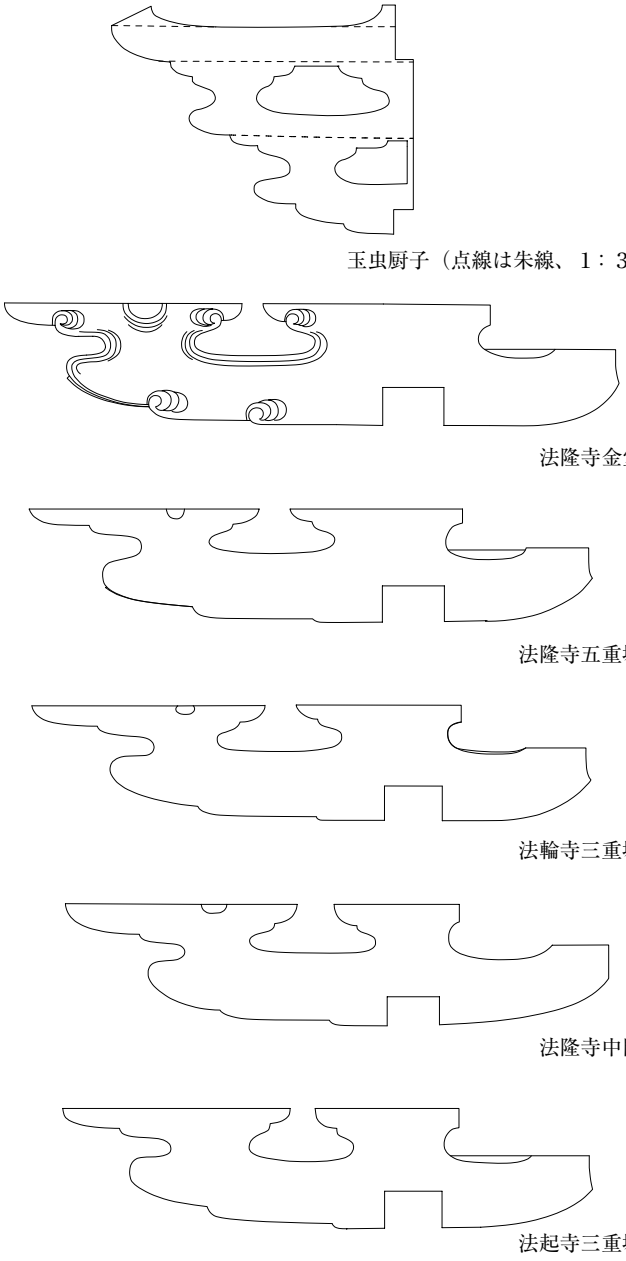


Fig. 206　雲肘木の比較（国宝・重要文化財建造物実測図、奈良県所蔵建造物図面よりトレース、1：30）

この表現と比較すると、金堂以下の各建造物の雲肘木は、斗部の輪郭線が左右非対称となり、斗と肘木を区別せずに一体のものとして表現しようとしており、変形が進んでいることが明らかに見て取れる。金堂では、側面に渦文状の筋彫りが施され、意匠の古さを象徴するものと見られてきたが、玉虫厨子と比較すると、雲肘木の本質から離れて異形化し、雲形表現を志向するものとなっていることが窺え、筋彫りが必ずしも古さを示すものではないことが理解される。そこで、筋彫りを除き、輪郭線のみから雲肘木を比較すると、斗と肘木の組み合わせからの変形の度合いからすれば、金堂と五重塔は比較的近い表現となっており、中門と法起寺三重塔は斗の表現の異形化がさらに進んでいることが窺える。また、先端側の斗に掘られた半円の彫り込みが、法起寺三重塔にはないこと、木口先端の舌が金堂、五重塔にのみあることも、各建造物

間の年代差を示している。以上の意匠、技法差からみると、金堂と五重塔の間の差異よりも、五重塔と中門および法起寺三重塔の間の差異の方が明瞭である。すなわち、各建造物間の年隔に大小を想定するならば、金堂－五重塔間よりも、五重塔と中門の間に、大きな年代差を認めるのが妥当である。

なお、五重塔では、雲肘木と力肘木を一木で造り出す技法が一部で用いられている。各重隅の斗栱と、４重以上の全斗栱でそれが見られる。構造強化を図る技法であるが、かなりの大径材を必要とするため、見逃せない技法差といえる。あるいは、３重以下と４、５重とで建設時期に差があることを示すものかもしれない。

柱の胴張り　金堂の胴張りが他の建造物に比して際だって強い曲線を持つことは、常に指摘されるところである。これについては、解体修理に際して発見された、側柱における側面の工作に注意して解釈する必要がある（法隆寺国宝保存委員会1962・竹島1975）。側柱筋の壁を解体したところ、柱の壁に接する面に突起が発見され、これが壁の下塗りをした後に柱の胴張り曲線を修正するための作業にともなう削り残しであったことが判明した。これは、柱に強い胴張りを与えたために、壁のチリ際曲線が胴張り曲線と干渉したため、その視覚矯正として実施された仕事と判断された。五重塔も金堂同様に側廻りに壁が入るが、金堂に引き続いて建設が開始されたため、着工時よりこの曲線問題の回避が認識され、柱に強い胴張りを与えなかったのではなかろうか。このように考えると、両者の胴張り曲線の差は、必ずしも「一世代」におよぶ時期差を示すものではなく、むしろ連続を示すものと解すことができる。

天井蓮華文の意匠　金堂と五重塔の天井蓮華文は明らかな年代差を示すが（福山1953）、これはそれぞれが描かれている天井板の年代差を示すものであり、建造物自体の年代差という問題と同一視すべきではない。西院伽藍各建造物の場合、天井板は軸部組み立て後、造作工事として張ることが可能である。五重塔に関しては、工事中断時期を挟んで天井板が張られたと考えれば、金堂の天井板との間に十分な時期差が想定できる。とはいえ、金堂の外陣天井板から670年を遡る伐採年が確認されたことについて、何らかの説明を加える必要があろう。これについては次節で触れたい。

基準尺長　金堂、五重塔では、垂木割の１支寸法である高麗尺７寸５分を平面計画の基準とする[(1)]。これは後述する規格材の長手寸法と一致する。しかしながら、平面から高麗尺の基準尺長を取ると、金堂で曲尺1.186尺、五重塔で同1.175尺とわずかに異なっている。中門ではさらに小さく、1.163尺となる。この差異を時期差によるものとする解釈が一般的であったが、『営造法式』に記載される、建物の格に応じて基準尺長を使い分ける考え方との関連についての指摘もある（澤村1981）。時期差によるとしても、３棟の年代が異なることを示唆するのみで、年隔についてはここから明らかにはならない。

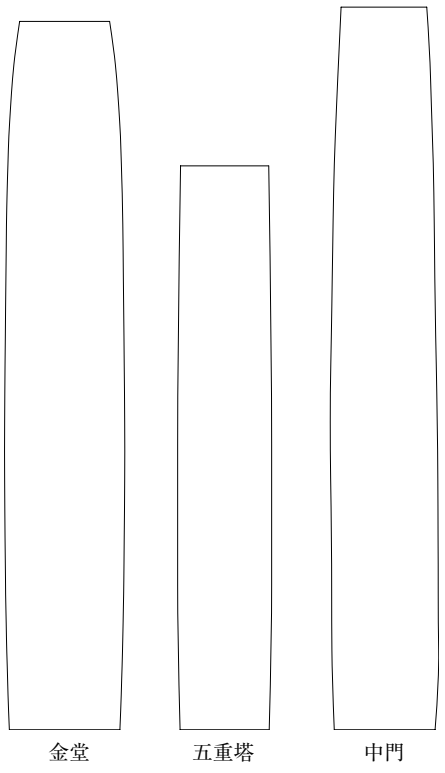


Fig. 207　法隆寺建造物の胴張りの比較（1：40）

壁小舞の技法　金堂と五重塔の壁では小舞を編む材料が異なっており、金堂は藤蔓、五重塔は藁縄となっている。この技法差は、確かに両者の時期差を示している。しかし、五重塔須弥山背後から発見された、須弥山改造前の前身須弥山内壁の小舞が、金堂同様の藤蔓で編む形式となっていた。これは、五重塔着工時期が金堂建設から大きく隔たらず、まず軸部および前身須弥山が施工され、その一方で壁については五重塔着工から時期が大きく降ってから施工されたことを示している。

軒廻りの技法　垂木の支割と茅負曲線に関して、金堂と五重塔との間に関連が指摘されている（鈴木1972）。金堂は垂木の割り付けを１支高麗尺７寸５分で正確に守っているのに対し、五重塔では１支寸法を等しくするものの、枝外垂木でやや広くしている。隅の反り上がりを考慮した視覚矯正と解釈されているものである。また、五重塔では軒の出についても、側桁からの出を揃えるのではなく、軸部から独立して各層の軒先線を揃える調整をおこなっており、木割の厳格な適用よりも、全体の形の調整を優先していることが窺える。茅負曲線については、五重塔では金堂の曲線を援用していることが明らかにされている。これらの状況は、五重塔において、金堂の技法を用いつつ、意匠の自由度を増していることを示している。これは、金堂と五重塔の前後関係と連続を示すものではあっても、両者の年隔を示唆するものではなかろう。

これらの他に、裳階の屋根板の技法の差異をもって金堂と五重塔の時期差の傍証とする意見もあるが、金堂の裳階は竣工から時間を置いて設置されたものであり、ここでの議論からは除外すべきである。

以上の各部意匠、技法の検討から、各建造物の年代差について、次のような理解が導かれる。

（1）金堂と五重塔の間に様式上「一世代」の差異が認められる、とする考え方は、各建造物の建設事情を含み込んでおらず、誤解を与える見解というべきである。

（2）五重塔は軸部組み立てから竣工までの間に大きな年隔があり、軸部については金堂からは遅れるものの連続性が認められる。むしろ、五重塔軸部と中門および法起寺三重塔との間に、大きな年代差が認められる。

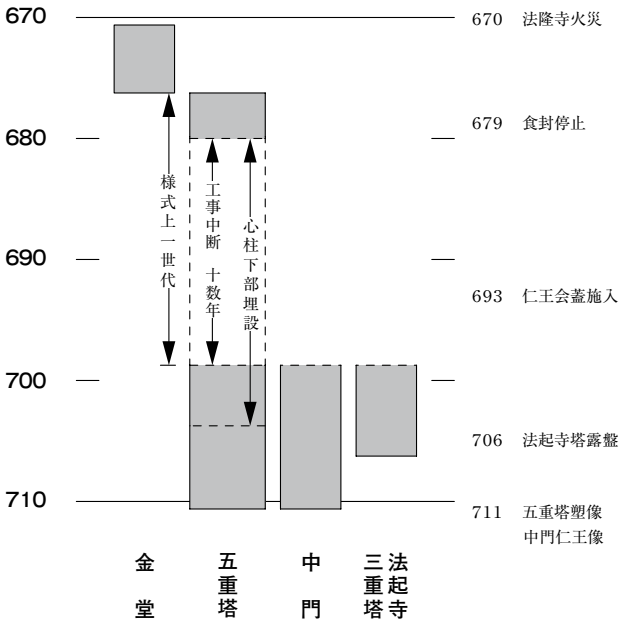


Fig. 208　法隆寺金堂・五重塔・中門および法起寺三重塔の建設過程と年代

（3）五重塔の造作材である壁、天井には、金堂との間に大きな年代差が認められる。

（4）つまり、金堂を短期間で建設した後、続いて五重塔に着工したものの、軸部を組み上げた時点で何らかの理由により工事が中断され、しばらく後に五重塔造作工事に取りかかり、この造作工事と並行して中門および法起寺三重塔が相次いで着工された、という順序が読み取れる。

（5）すると、五重塔の工事中断期間こそが、福山の言う「一世代」にあたる年隔を生んだ原因であることになる。つまり、これまで建造物間の年代差を示してきた福山の「一世代」と浅野の「数十年（十数年）」

という２つの表現は、実は同一の期間を指していたことになる。

この考察を踏まえて、金堂、五重塔、中門および法起寺三重塔の建設過程と年代とを、史料上より確認される年代を元に想定すると、670年火災後の再建とみたとしても、「一世代」、「数十年」、そして五重塔心柱の腐朽期間を十分に含み込むことが可能であることが理解されよう。意匠、技法上より言って、金堂の建設を670年以前に押し上げねばならない理由は、存在しないことになる。とはいえ、逆に金堂を670年以降の着工とする根拠も、意匠、技法上からは必ずしも明確とはいえないのである。

そこで改めて問われるのが、667－８年という、金堂外陣天井板の伐採年代である。伐採が金堂建設を目的としておこなわれたものであるなら、少なくとも金堂の計画を670年以前に求めなければならないことになる。この問題に対する一つの解釈を与えるために、次節で部材の問題を検討してみたい。

西院伽藍各建造物における規格材

金堂、五重塔、中門は、部材の使用方法に関して共通する重要な特徴を持つ。それは、使用される部材の多くに一定の断面形状、寸法が用いられていることである[(2)]。特に、構造的役割を担う部材にそれが多く見られる。

金堂を例に語ろう。金堂は、側柱筋の組物上に通肘木を４段重ねて軸部を固める構法を採っているところに一つの特徴があり、そのため長尺の横架材が比較的多数用いられている。これらの長尺部材、具体的には側桁、入側桁、母屋桁、棟木、通肘木、天井桁、支輪桁が、すべて同一の断面寸法を持っている。曲尺で８寸９分×７寸１分の寸法で、高麗尺の７寸５分×６寸に当たる。

これらの横架材を支える束も、ほとんどが同一断面の材となっている。また、手先を支える部材である、尾垂木と力肘木も、同一断面の直材である。

以上の比較的長い部材に加え、短尺材の中にも、入側柱筋上の肘木、側柱筋の壁付き肘木および雲斗、出桁下雲肘木のように、外形に装飾的な曲線を持つ部材でも同一の断面寸法を持つものがあり、同一断面の木材から削り出されたことが確認できる。雲肘木については、これらの部材よりもせいが高いため同一断面にはならないが、材の幅は７寸１分と、同一になっている。

また上重の小屋組に使用される部材のうちにも、同一断面のものが多数見られる。上下の小屋梁、平側正背面を繋ぐ繋梁、尾垂木尻押えがそれで、ほとんどの部材が共通断面になっていることになる。

すなわち、金堂においては、８寸９分×７寸１分の断面を持つ直材が、構造的役割を担う部材として各所に用いられていることとなる。これを規格材と呼ぶことに、何ら支障はなかろう。規格材を各所に用いていることは、金堂のみならず、五重塔、中門にも共通して確認され、西院伽藍建造物に共通する特性となっている。ただし、五重塔の規格材は金堂と同寸法であるが、中門の規格材は曲尺７寸６分×６寸と細い。

規格材の全面的な使用は、結果として金堂の構造を不安定かつ無理のあるものとしている。とりわけ上重に顕著で、小屋梁中間に束の支持が不可欠であること、正背面間の繋ぎ材が３本の繋梁しかないこと、初重上部に大断面の梁がなく、上部荷重を受けられないこと、といった点が指摘できる。竹島卓一が指摘したように、この構造的脆弱さゆえ、建設後、早期に補強を余儀なくされ、それが逆に金堂を生きながらえさせる理由となったともいえる（竹島1975）。

古代寺院建築において、部材の一部を同一断面形状とすることは、比較的広くおこなわれた手法であった。しかしながら、奈良時代以降の建築では、部材の担う荷重に対応して断面形状を変える上、尾垂木や虹梁には反りを付けるなど、個別の木取りが必要となる部材が多数用いられ、規格材の使用は一部に限られる。法隆寺西院伽藍の各建造物の場合、規格材が全面的に用いられ、むしろ個別の木取りを必要とする材の方が限られることに一つの重要な特徴を認めることができる。

規格材の使用が建設の合理化を目的とするものであることは、まず疑いない。しかし、西院伽藍の建造物のように、荷重の流れを棚上げしてまで規格材を徹底して使用している状況を見ると、むしろ規格材の使用自体が目的化されているようにも思われるのである。この場合、例えば、特定の建造物における使用を意図せずに、一定規格の部材を大量に生産、貯蔵し、それらを利用して建造物の設計をおこなう、という方法を想定することも可能であろう。すなわち、部材と建造物との間に、必ずしも一対一の関係が結ばれなくてもよいことになる。ここからは、当時の建築生産の体制と建造物の造営の関係という、古代建築史の新たな視点も提供することになろう。

この規格材という観点を踏まえ、年輪年代調査によって年代が得られた辺材を残す部材を検証してみよう。670年から711年の間に各建造物が建設されたとみる立場をとるとき、検証すべき年輪年代調査部材は、金堂では外陣天井板（伐採年代667－8年および668－9年）、五重塔では二重隅行雲肘木（辺材最外輪673年）、中門では初重大斗（辺材最外輪685年）である。以上の部材の他にも多数の部材が調査されているが、ここには規格材といえる材が多数含まれているわけではない。年輪年代測定による伐採年の確定には、辺材の残存を必要とするため、比較的大きな部材が対象となることが多いためである。

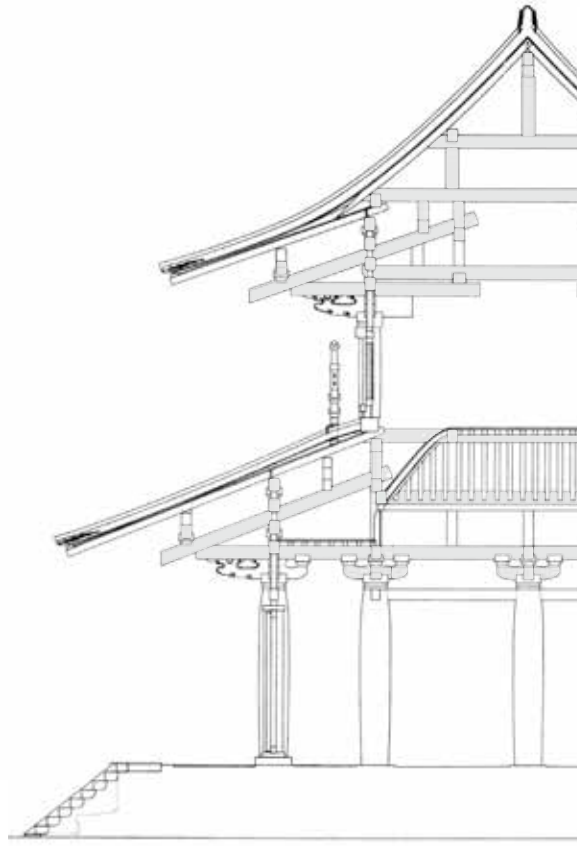


Fig. 209　法隆寺金堂における規格材（復原図）

金堂外陣天井板　金堂外陣の天井は、組入天井の形式をとる。格縁を東西、南北に組み、側廻りは一の肘木に上面揃いで大入れに、他は力肘木および入側通肘木上面に架けている。外陣の構造に組み込まれているというよりは、構造材上に載せられている状況である。天井板は、組子上に釘打ちで張られている。格縁の組み込みに引き続いて天井板が張られたか、あるいは屋根を葺き終わった後に造作として張られたものか、明らかにはし得ないが、天井上の空間、板の張り付け状況よりすれば、いずれの順序でも施工は可能である。板下面の格間に当たる箇所には蓮華文が描かれる。

年代調査を実施した部材の形状は、幅26～28cm、すなわち9寸前後、厚さ2.5～3.0cmである。この幅は、規格材の長手寸法8寸

９分と概ね一致する。金堂の天井格縁は垂木一支寸法を基準として割り付けられるが、この寸法は故意か偶然か、８寸９分と、規格材寸法と同寸であるため、天井板幅と規格材寸法が一致することとなる。外陣では納まりの関係上、格縁割り付けが垂木一支より若干大きくなるものの、天井板自体は幅９寸前後となっている。この状況を合理的に解釈するならば、一支寸法を規格材寸法と合致させることで、天井板を規格材から取ることを可能とすることが目論まれたのかもしれない。つまり、外陣天井板は、２点とも、規格材を割って取られた部材の可能性が考えられるのである。材の伐採が670年を遡ることについては、これが金堂建設とは別の目的で加工され、貯蔵されていた材木で、金堂建設に当たり、建設用資材として利用された、と考えれば説明が可能である。

五重塔二重隅行雲肘木　力肘木と一木で作り出された雲肘木である。大径材から切り出されたもので、規格材ではない。先述の通り五重塔軸部は金堂竣工に引き続いて組み上げられたと見られるので、この部材は比較的早期に組み上げられたはずである。辺材最外輪が673年を示していることはこのことと矛盾しない。

中門初重大斗　大斗は規格材には納まらず、中門建設のために切り出されたことになる。また、着工後、比較的早期に組まれたはずである。辺材最外輪が685年を示していることは、中門の着工が金堂および五重塔よりかなり遅れるとする見方と矛盾しない。

おわりに

本論では、年輪年代調査の成果を踏まえつつ、西院伽藍各建造物の建設年代の再検証をおこなった。結果として、細部意匠、技法、年輪年代のいずれをとっても、西院伽藍各建造物の建設が670年の火災後に開始され、711年までのうちにすべて竣工した、とする枠組みで理解することが可能であることを示した。年代論に関して幾分の知見を付け加えることができたものと思うが、後半に論じた規格材という視点は、今後の研究に一つの展開をもたらすことができるものと考える。

法隆寺金堂の部材に多数の規格材が用いられている様相は、これまでは木割の厳格な適用の結果として理解されてきたが、むしろ個別の材料調達が困難であった状況を示していると考えられないか。法隆寺金堂における規格材の広範な使用は、建設の合理化という目的を越えて、構造上の無理を来しているほどで、執拗とさえみえる。しかし、金堂が670年火災直後の着工だと考えた場合、この不可解さも幾分解消されるように思う。明らかに材料調達に困難を来していた状況にあって、できる限り早急に金堂を復興するには、別の目的で伐採、製材され、備蓄されていた木材をかき集めるようにして利用すればたしかに早道となろう。となれば、規格化された材料を備蓄、供給する建築生産体制が存在し、その規格に沿って建物を設計していく、という建設順序が採られた、という想定も不可能ではなかろう[(3)]。

金堂における規格材が、このような方法で製材され、利用されたことを実証的に論じるためには、さらに詳細な部材自体の検証が必要なことはいうまでもない。しかし、規格材という切り口が、法隆寺西院伽藍の問題、そして古代建築一般の問題に新たな光を与えうるものだという可能性については、本稿で示せたように思う。

注

⑴　高麗尺は、唐大尺（いわゆる天平尺）の１．２倍に合致する。この尺長は、701年制定の大宝令により「大尺」として定義されるため、厳密に言えば701年以降については「大尺」と呼ぶべきである。本論では煩雑を避けるため、便宜的に「高麗尺」の呼称で統一する。

⑵　法隆寺西院伽藍建造物に同一規格の部材が多数用いられていることについては、すでにいくつかの指摘があるが（鈴木1972・澤村1981）、既往の解釈では、木割の厳格な適用によるものとみなされている。

⑶　法隆寺西院伽藍の建設には在地氏族による援助が想定されており、中でも平群郡山部郷を本拠とする山部氏は、山林監守を職掌とすることから、材木の調達等に寄与した可能性が指摘されている（岸1988・仁藤1998）。西院伽藍における規格材使用の背景の一つとして考慮できるだろう。

参考文献

浅野　清　1953　『法隆寺建築綜観』便利堂

浅野　清　1974　「西院伽藍の年代とその様式」『奈良の寺　1　法隆寺　西院伽藍』岩波書店

上原　和　1968　「玉虫厨子白鳳説を再批判する－村田治郎博士の批判に答えて－」『成城文芸』51号
（上原　和　1968　『増補玉虫厨子の研究』巌南堂書店に収録）

岸　俊男　1988　「山部連と斑鳩の地」『日本古代文物の研究』塙書房

澤村　仁　1981　「法隆寺金堂」『日本建築史基礎資料集成　4　仏堂Ⅰ』中央公論美術出版

鈴木嘉吉　1972　「金堂」『奈良六大寺大観　第1巻　法隆寺1』岩波書店

鈴木嘉吉　1995　「法隆寺新再建論」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集　同朋舎

竹島卓一　1975　『建築技法から見た法隆寺金堂の諸問題』中央公論美術出版

仁藤敦史　1998　「『斑鳩宮』の経済的基盤－『法隆寺資財帳』よりみた－」『古代王権と都城』吉川弘文館

福山敏男　1953　「法隆寺金堂の装飾文様」『法隆寺金堂建築および壁画の文様研究』美術研究所研究報告

福山敏男　1968　「法隆寺の創立」『日本建築史研究』墨水書房

福山敏男　1982　『寺院建築の研究』上　中央公論美術出版

法隆寺国宝保存委員会　1955　『国宝法隆寺五重塔修理工事報告』

法隆寺国宝保存委員会　1962　『国宝法隆寺金堂修理工事報告』

村田健一　2005　「古代の建築技法の変遷と終焉」『都市・建築・歴史　2　古代社会の崩壊』東京大学出版会

村田健一　2006　『伝統木造建築を読み解く』学芸出版社

第Ⅳ章　結　　語

文化庁が1968年と1969年に主催しておこなった法隆寺若草伽藍跡の発掘調査は、石田茂作博士が1939年の調査で検出した金堂・塔基壇の掘込地業を、再度確認することとなった。金堂基壇の掘込地業は、やや不整形であるが基本的に東西に長い長方形を呈する。東西長22．00～22．80ｍ、南北長19．05～19．95ｍである。また、塔基壇の掘込地業は、東西長が15．90ｍで、南縁部は調査区外にある。ここから若草伽藍は、金堂の南に塔を配する伽藍配置であり、掘込地業の状況から、その中心線が世界測地系で、北で西に23°5′43″から25°2′6″程度に振れていたことを明らかにした。なお、この振れに関しては法起寺下層遺構と筋違道がその振れに合うものの、東院下層遺構は約8°違うことが明らかになっている。

調査区において、地上部分の基壇外装等は後世の削平によって完全に失われていた。また講堂や回廊についても､その遺構は検出するにいたらなかった。ただし金堂･塔の周辺に集中する黄褐色整地土（本報告の第２整地土）が金堂北方域にかけて分布する点は、伽藍の広がりを想定する上できわめて示唆的である。また調査区全域にわたって地山上面高の最高値がほぼ近似した値であった。この数値は若草伽藍の造営にともなう整地の範囲とその徹底ぶりを如実に示している可能性が高い。

本調査の成果の一つに、土層の堆積状況から金堂と塔の施工順を決定するにいたった点があげられる。すなわち、まず原地形に削平をともなう整地があって、この後に金堂基壇掘込地業→２回目の整地（第２整地土）→塔基壇掘込地業の順で、施工されていたことが判明した。なお、金堂中央部の版築上にも黄褐色整地土が広く覆っているとする原図の記載については、金堂掘込地業と黄褐色整地土の間に掘削された基壇外周にある溝（SD 7040）に多量の瓦が投棄されている事実と、金堂基壇掘込地業版築土と黄褐色整地土が近似しているとの注記から、本報告では、この部分の黄褐色整地土は版築土に含められるべきものと判断した。この理解により、黄褐色整地土がおよぶのは版築土縁辺部に限られており、金堂の版築は掘込地業内から基壇土の積み上げが完了するまで連続的になされたと推定した。それから金堂を建設し、周囲を整地してこのSD 7040を埋め立て、そして基壇外装を整えたと推定する。このように理解するとすれば、SD 7040中の多量の瓦の存在は、金堂の瓦葺き工程終了後の状況を示している蓋然性が高いことになる。なお、この溝からは単弁蓮華文軒丸瓦（３Ｂｂ型式、３Ｃ型式）、手彫り唐草文軒平瓦（206Ａ型式、206Ｃ型式、206Ｄ型式、207Ａ型式、210Ａ型式）、そして多量の丸瓦・平瓦が出土している。これらの瓦は、斑鳩宮の造営が開始された601年前後の年代を与えることができる。

1939年にみつかっていた金堂周辺の礫敷は、本調査区においても検出された。この礫敷に対応するバラス土層からは14－15世紀に下る土器が出土していること、また調査時にこの土層で覆われた小穴から瓦器の出土が確認されていることから、その性格は不明ながら、礫敷が年代的に若草伽藍と直接かかわらないことが明らかになった。

黄褐色整地土は、金堂基壇の一部を埋めており、塔はこの整地土を掘り込んで地業がなされた。金堂基壇と塔基壇の掘込地業底の標高はほぼ一致するので、地表下にあって基盤強化の役割をになう土層の厚さは、両者でほとんど変わらなかったことを示している。

塔部分において、塔心礎の据付痕跡は検出されなかった。心礎の高さは、1．36ｍ以上あるので、仮に柱座を地上に露出していたとしても、基壇上面は、遺構検出面より少なくとも１ｍ以上あったことになる。なお石材は、弱片麻状中粒黒雲母花崗岩で、法隆寺近辺に分布する一般的な岩石である。

塔に葺かれていた瓦は、遺構から直接に決定することはできない。ただし、分布状況と型式変遷を勘案して、単弁蓮華文軒丸瓦（６Ｃ型式、６Ｄａ型式）と手彫り唐草文軒平瓦（208型式、209型式）が塔に使用された瓦と推定できる。これらの瓦の製作年代は620年頃と考えられる。

若草伽藍以後については遺構・包含層で時期決定のできるものが少なく、若草伽藍以後の遺構変遷を詳細に示すことはできない。このうち最終的には包含層とされた炭化物層・木炭層で、１－10・11区で集中的に出土した鞴羽口、炉壁片、鉄滓などの鍛冶関係遺物が多量に出土している。これにともなう土器が７世紀後半にあたる可能性があり、若草伽藍との関連で注目される。

法隆寺については、『日本書紀』天智天皇九年条の焼亡記事をめぐって、明治時代以来広範な分野の研究者によって再建・非再建論争がなされてきた。焼亡記事に結びつくような瓦の被熱資料は、今回の調査で出土した軒瓦には見あたらなかった。とはいえ、若草伽藍こそこの焼亡したとされる法隆寺であることは動かない。ただし、焼亡後に再建される西院伽藍の造営過程については、未だ検討すべき課題が多く残されている。今回の年輪年代の分析によって、西院伽藍五重塔心柱の伐採年代が594年に限りなく近いことが判明した。この年代は若草伽藍造営以前にさかのぼるものであることから、若草伽藍と西院伽藍を結ぶ資料となる可能性が高い。若草伽藍から西院伽藍への移行過程を明らかにしていくことこそ、今後究明すべき課題といえよう。（森・深澤）

Report of the archaeological excavations at the Wakakusa Garan, the Horyuji temple in 1968 and 1969

The Agency of Cultural Affairs carried out archaeological excavations at the Wakakusa Garan in the Horyuji Temple in 1968 and 1969. This research examined the structures of underground foundations at the main hall and pagoda platforms that have been firstly revealed by Dr. Mosaku Ishida in 1939. The underground foundation of the main hall platform was irregular rectangular shape measuring 22.00 — 22.80 meters (east to west) by 19.05 — 19.95 meters (north to south). The underground foundation of the pagoda platform measured 15.90 meters (east to west); however, the southern part was not uncovered due to a restriction of the excavation area. The pagoda was located to the south of the main hall, and the axis of two buildings was in west oblique direction for 23°05′43″ — 25°02′06″ from the north-south direction determined by the Japanese Geodetic Datum 2000. The axis corresponded to the plan of the lower archaeological feature of the Hokkiji temple and the Sujikaimichi road in the Ikaruga region, but not corresponded to the plan of the lower archaeological feature of the Tohin Garan in the Horyuji temple.

Upper structures of the platforms such as exterior stones of the platform were lost due to disturbance in a later period. No archaeological features of auditorium or ambulatory were found. The existence of yellowish-brown soil that was added for ground leveling (referred as “the 2nd additional soil” in the main text) concentrated to the north of the main hall suggests the extent of the temple area. The elevations of the original ground were constant in the most parts of the site. This implies that the ground was carefully prepared for the temple construction.

The excavations revealed the construction order of the main hall and pagoda by examining the stratigraphy: First, the ground was leveled. Second, the main hall underground foundation was prepared and the platform was built. Third, the yellowish-brown soil was added for ground leveling again. Finally, the pagoda underground foundation was prepared and the platform was built. It appeared that rammed earths of the main hall platform were covered by a yellowish-brown soil; however, this soil was not identical to the additional soil for ground leveling. The main hall platform was built before the addition of the yellowish-brown soil since the rammed earths for the underground foundation and the raised platform were identical and uniform. Many roof-tiles were dumped in the drainage ditch SD 7040 that surrounded the main hall platform. This ditch was dug before the addition of the yellowish-brown soil. The roof-tiles in the ditch were discarded during

the construction of the main hall building. Therefore, the ground leveling by the yellowish-brown was carried out after the finishing of the main hall construction, and finally exterior of the platform was finished. Many roof tiles were obtained from the ditch including the round eave tiles in the monopetalous lotus 3Bb and 3C styles, the flat eave tiles in the hand-made arabesque 206A, 206C, 206D, 207A, and 210A styles. These roof-tiles date back to the period around AD 601 when the Ikaruga palace construction was started.

Scattered gravels were observed around the main hall platform, which has also been recognized during the excavation in 1939. They were not associated with the Wakakusa Garan, since some pottery of the 16th century were associated with the gravels and some Gaki pottery that date back to the 14 — 15th century were obtained from a pit that was filled by the gravels.

The yellowish-brown soil buried the lower part of the main hall platform, and the pagoda underground foundation was prepared by excavating the yellowish-brown soil. The depths of both underground foundations were approximately same.

The excavation did not revealed any features of depression to settle the pagoda foundation stone. The existing foundation stone was over 1.36 meters high. Given that the top of the stone was exposed on the ground floor of the platform, the height of the platform was estimated to have been more than 1 meter. The raw material of the pagoda foundation stone was gneissoid biotite granite which is widely distributed around the site.

No roof-tiles were associated with the archaeological feature of the pagoda; however, the round eave tiles in the monopetalous lotus 6C and 6Da styles and the flat eave tiles in the hand-made arabesque 208 and 209 styles were assumed to have been used for the pagoda, since they were obtained around the pagoda. These roof-tiles date back to around AD 620.

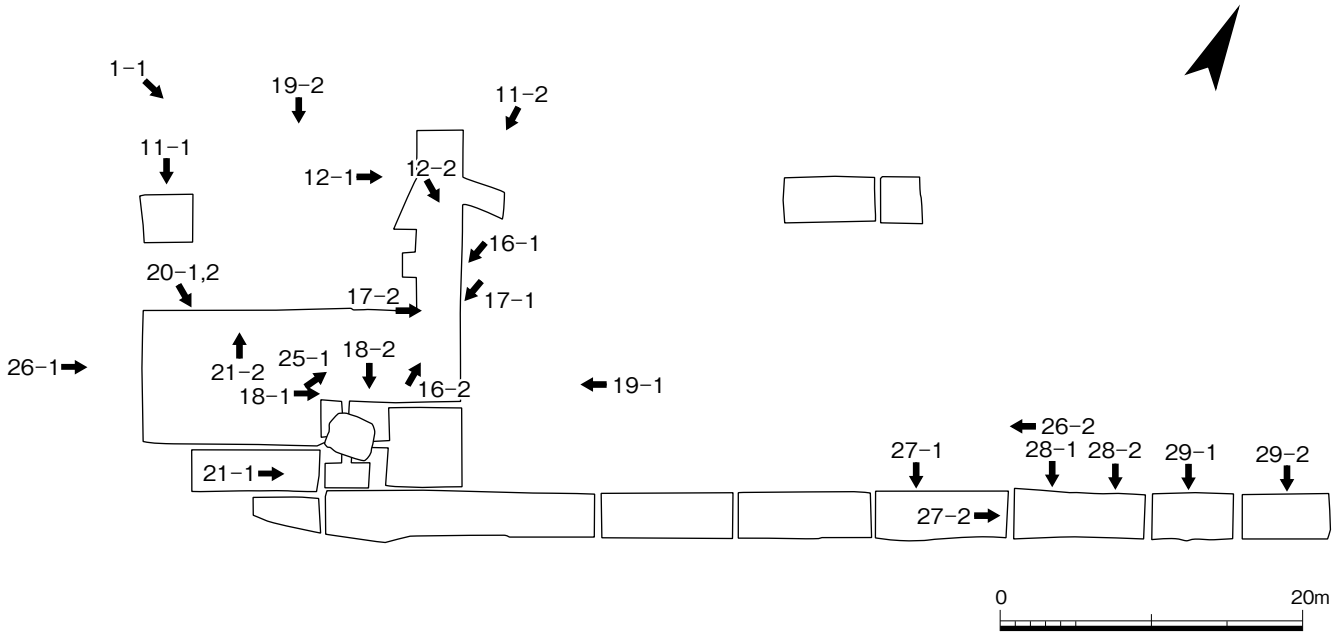
The history of the site after the abandonment of the Wakakusa Garan has been unclear, since there were few archaeological features that belong to a later periods. Many blacksmith artifacts including bellows tuyeres, smelting wastes, and fragments of furnace wall were obtained from the later deposit including charcoals in the units 1 — 10 and 11. Some pottery that may date back to the late 7th century was also obtained from the deposition. This deposit may be associated with the destruction of the Wakakusa Garan.

Concerning about the article of Tenji 9 (AD 670) in the Nihon Shoki, there has been long dispute

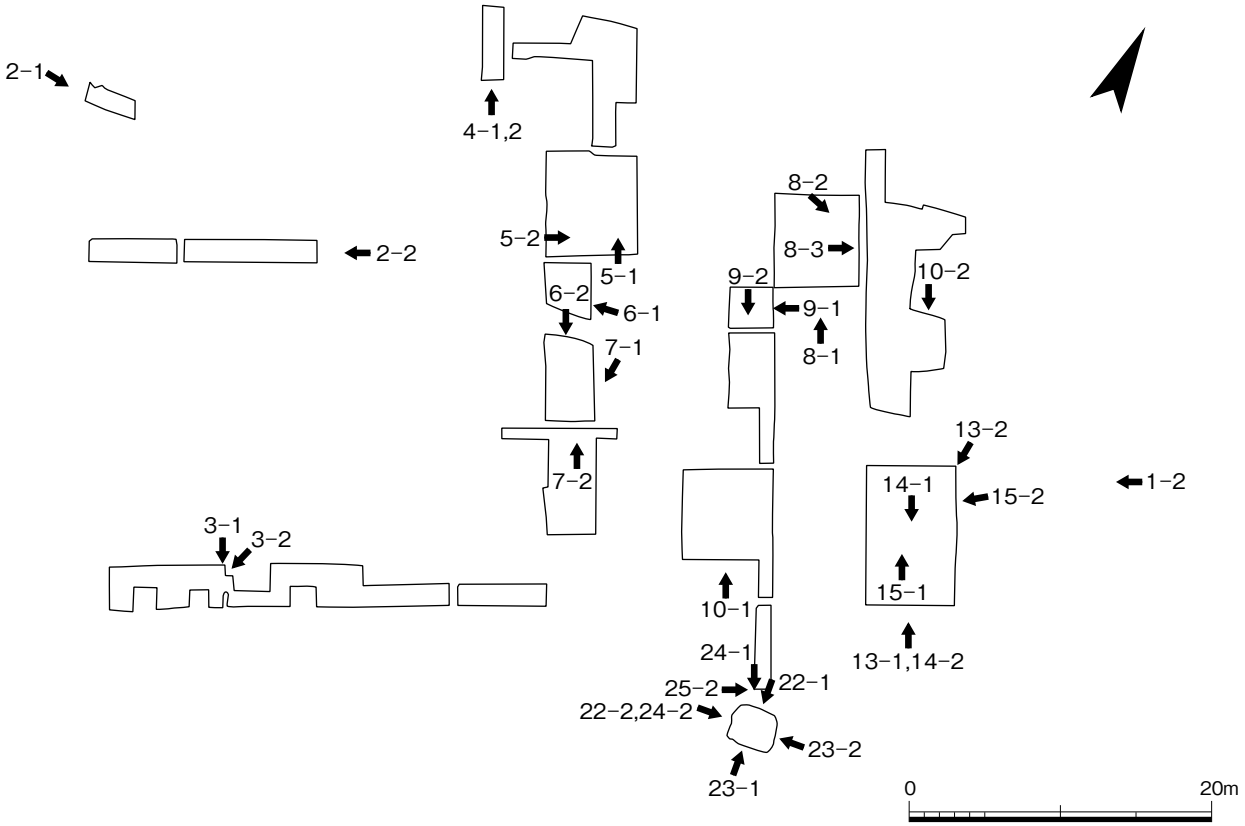
among many researchers since the Meiji era (AD 1868-1912) whether the Horyuji temple was destroyed by fire and rebuilt or not. No examples of roof tiles showing evidence of re-firing were obtained; however, in terms of other archaeological evidence, we can extract the conclusion that the Wakakusa Garan was the original Horyuji temple that was destroyed by fire. In the meantime, there still have been many unsolved questions about the reconstructed Saiin Garan. The analysis of dendrochronology revealed that the timber for the main pillar of the five-tiered pagoda in the Saiin Garan dates back to AD 594, which is prior to the construction of the Wakakusa Garan. Future studies will focus on the transition from the Wakakusa Garan to the Saiin Garan.

(Ikuo Mori and Yoshiki Fukasawa, translated by Tomo Ishimura)

図　版



第１次調査撮影位置



第２次調査撮影位置

1　第１次調査区全景（北西から）

2　第２次調査区全景（北東から）

PL. 2

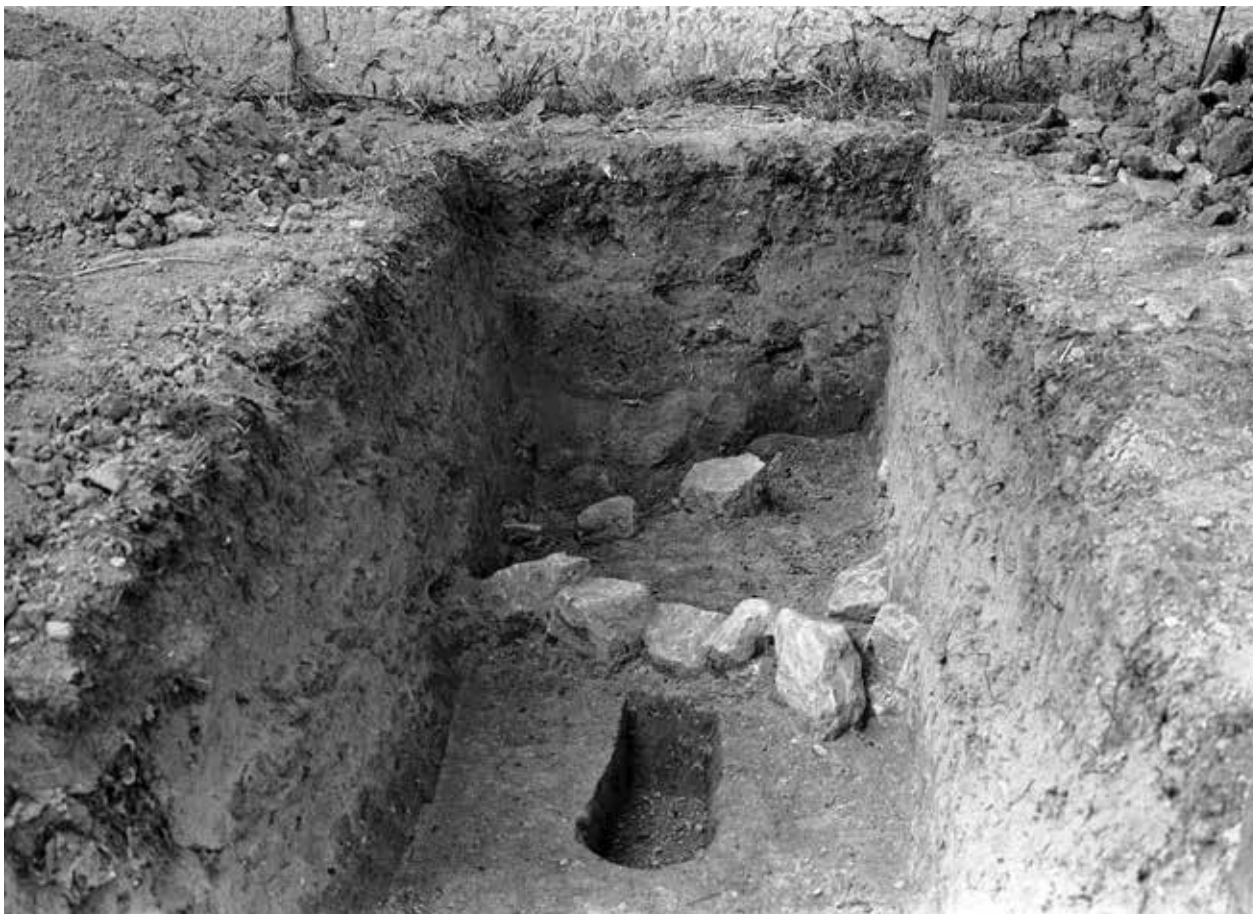
1　２－１区全景（西から）

2　２－２・３区全景（北東から）

1　2－4区SE 7074（北西から）

2　2－4区SE 7074（北から）

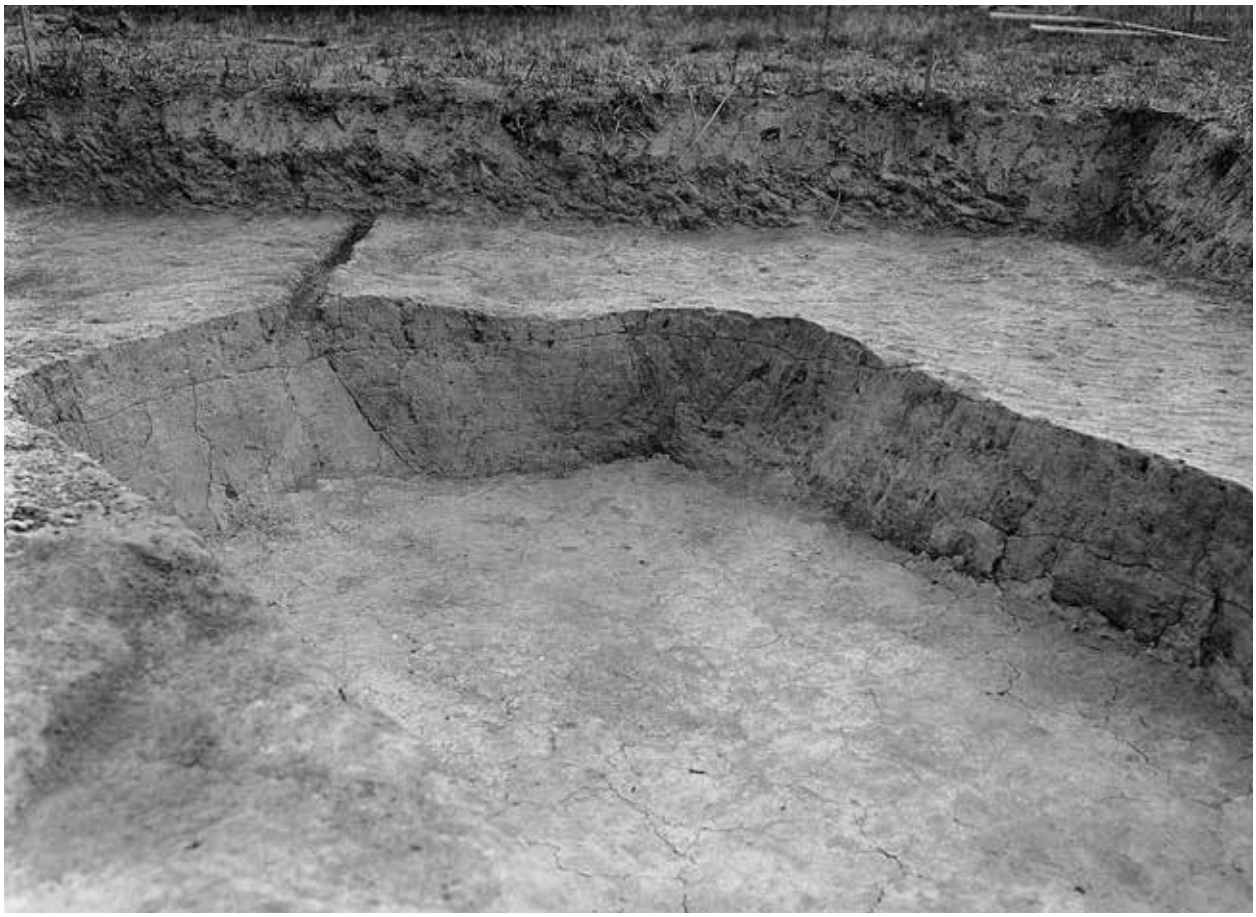
PL. 4



1　2－6区SD 7095（南東から）

2　2－6区SX 7097（南東から）

1　２－７・８区金堂SX 7100北西隅（南東から）



2　２－８区金堂SX 7100北西隅（南西から）

PL. 6

1　2－9区金堂SX 7100を横断するSD 7058（東から）

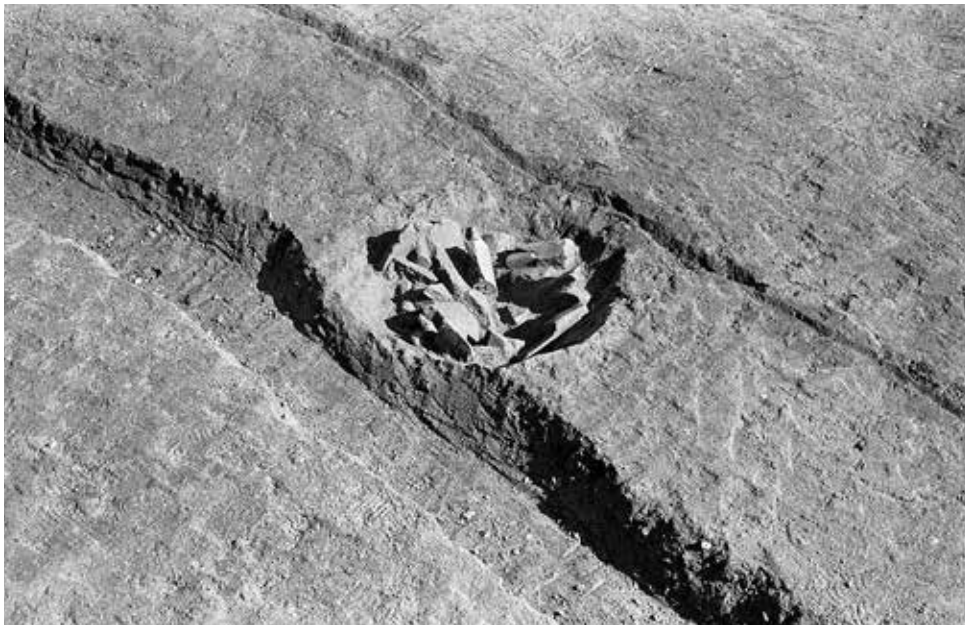
2　2－10区金堂SX 7100西辺の状況（北西から）

1　2－10・11区金堂SX 7100西辺および南西隅（北から）

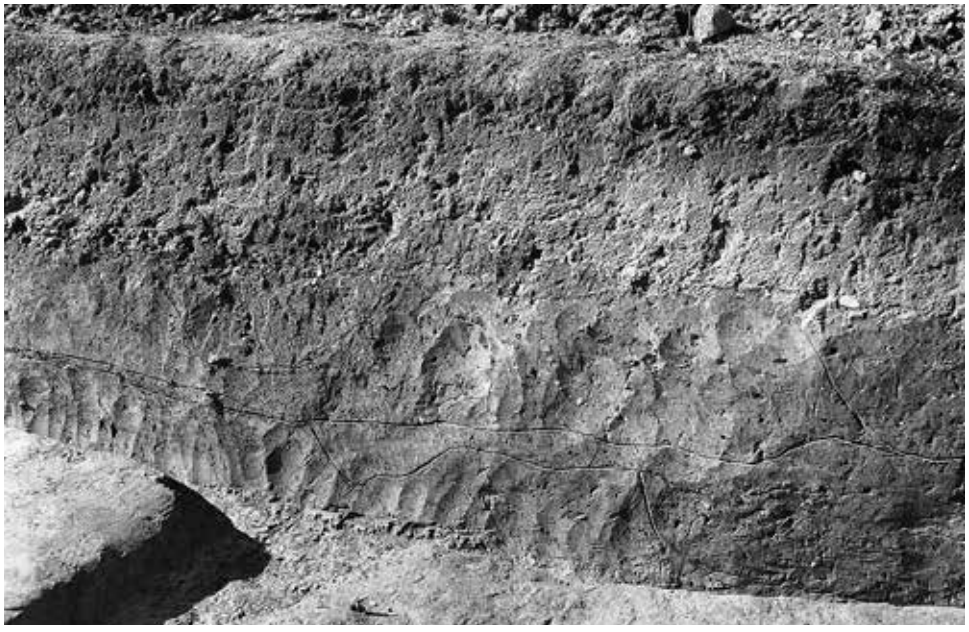
2　2－11区北壁面に見える金堂SX 7100西辺（南東から）

PL. 8

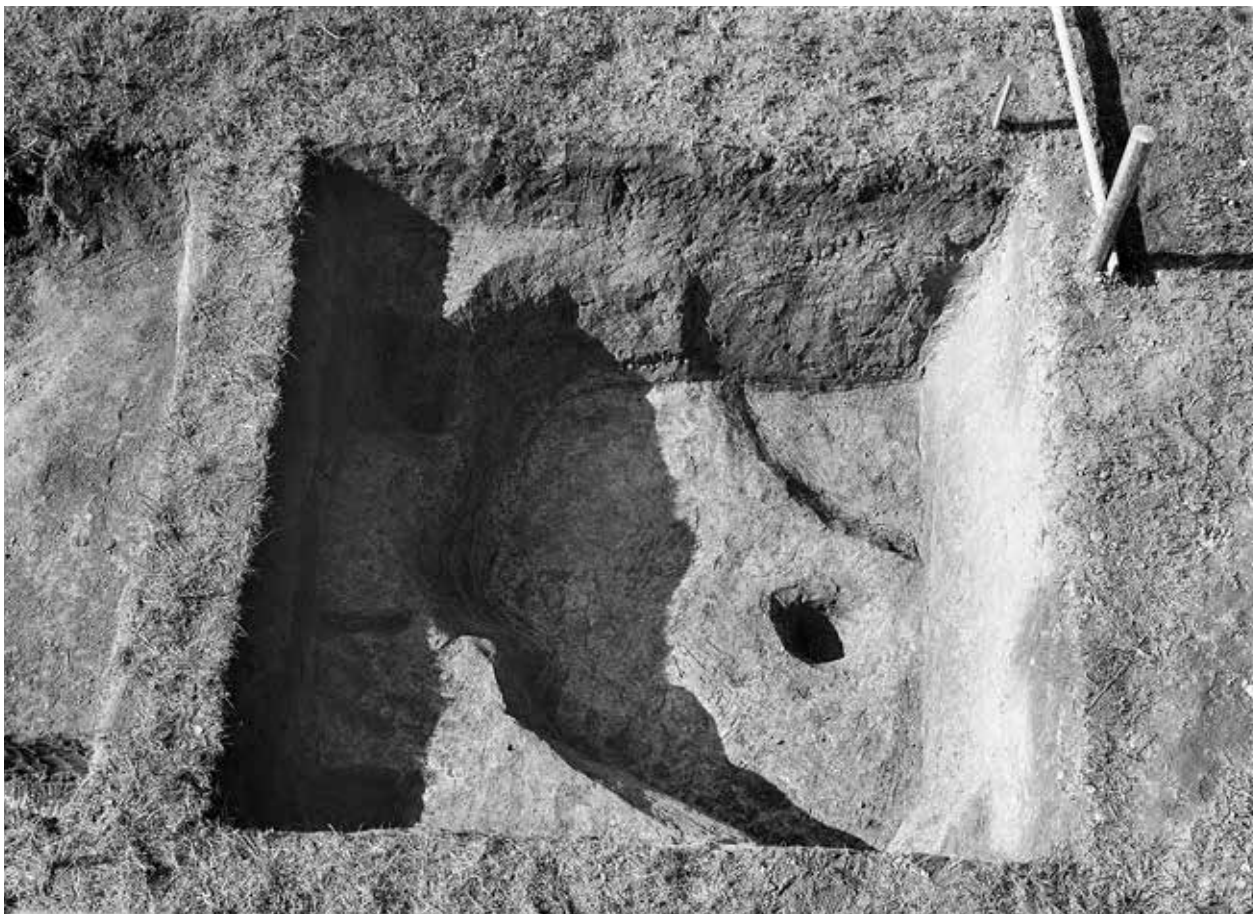
1　2－12区
金堂SX 7100北辺と
SX 7065（南東から）



2　2－12区
SX 7065と
SD 7055（西から）



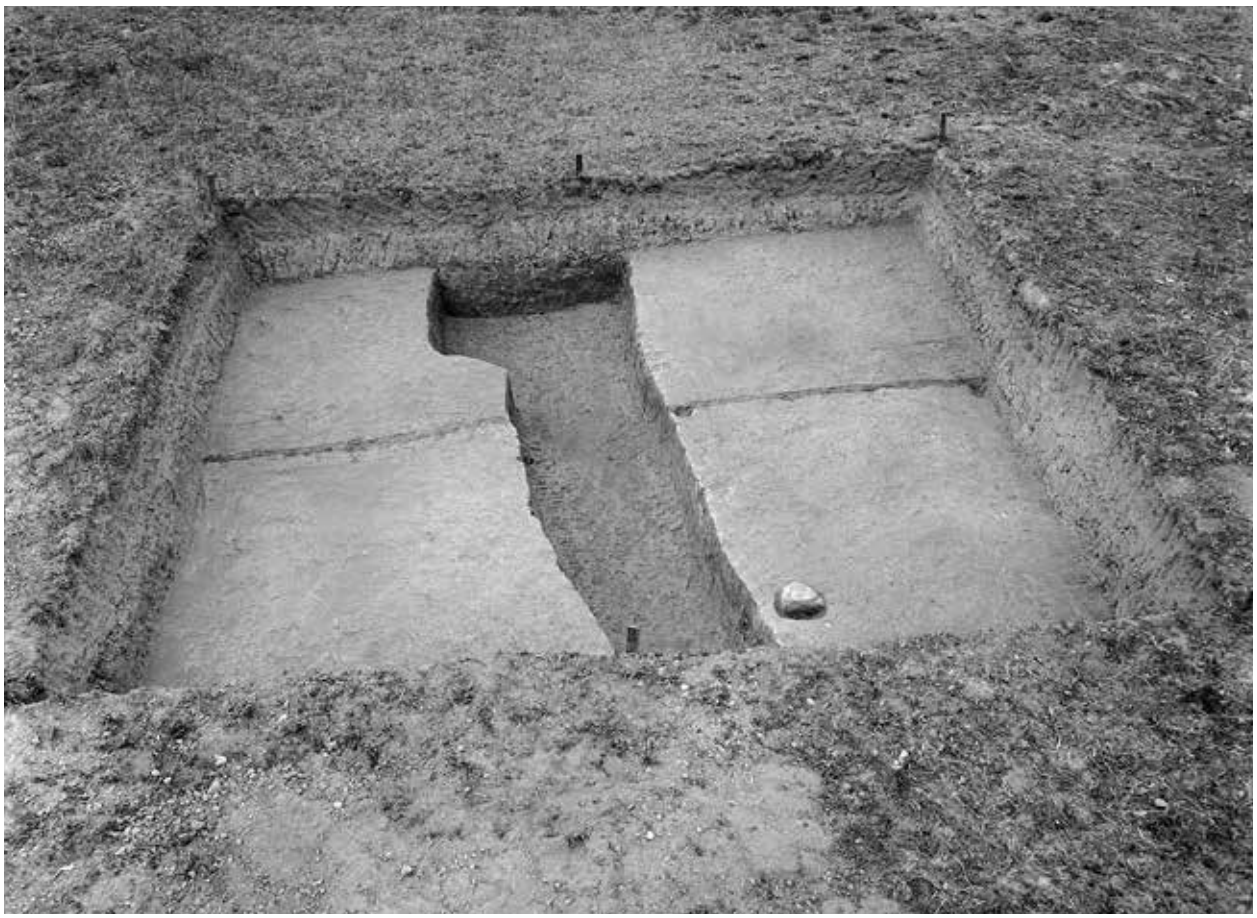
3　2－12区東壁面に
おける金堂SX 7100
北辺の土層（南西から）



1　2－13区完掘状況（北東から）

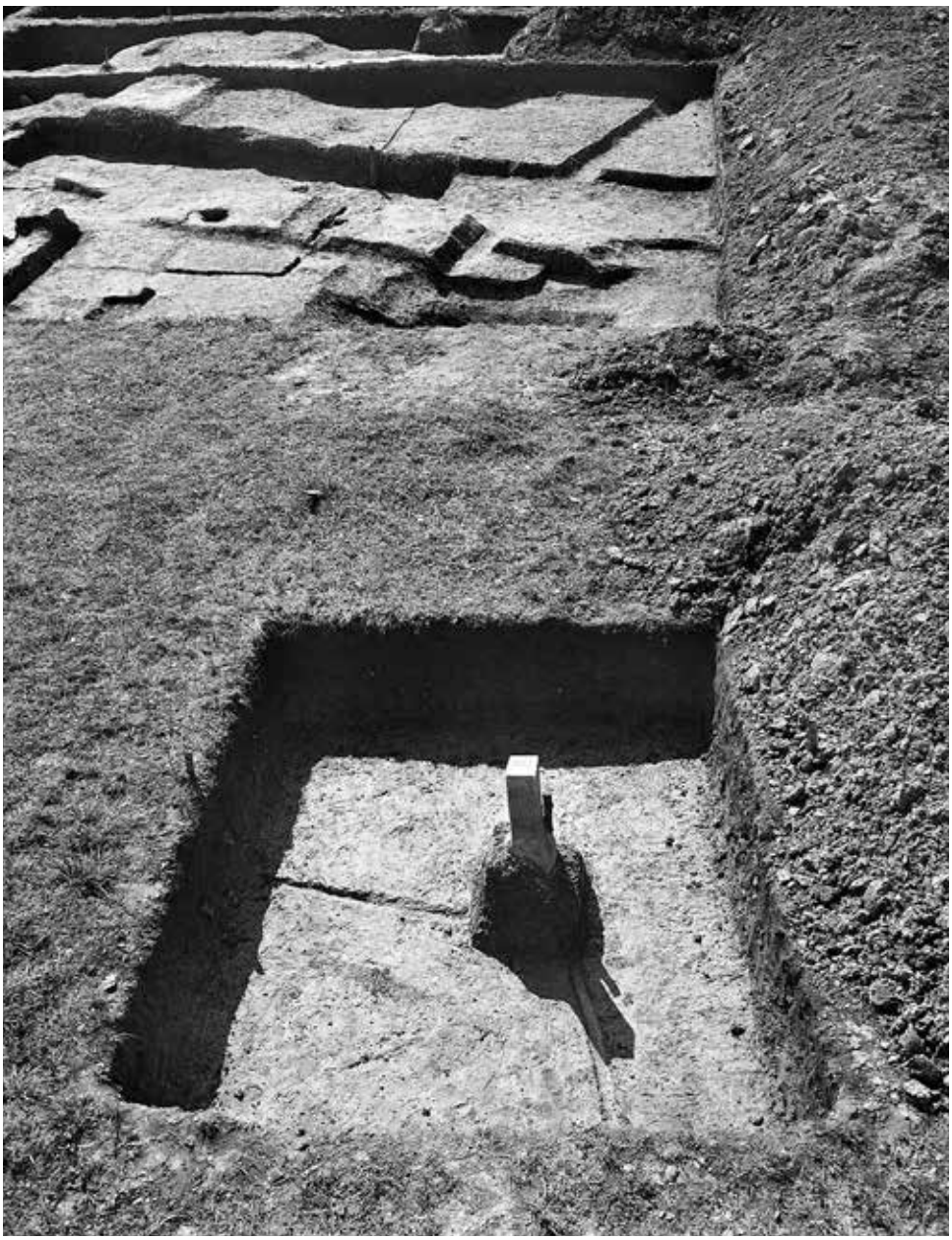
2　2－13区土坑内に見える金堂SX 7100版築土層（北西から）

PL. 10



1　2－15区金堂SX 7100南辺と1939北北西溝（南東から）

2　2－17区金堂SX 7100東辺およびSD 7040（北西から）



1　1－1・2区
金堂SX 7100南西隅と
塔SX 7000（北西から）

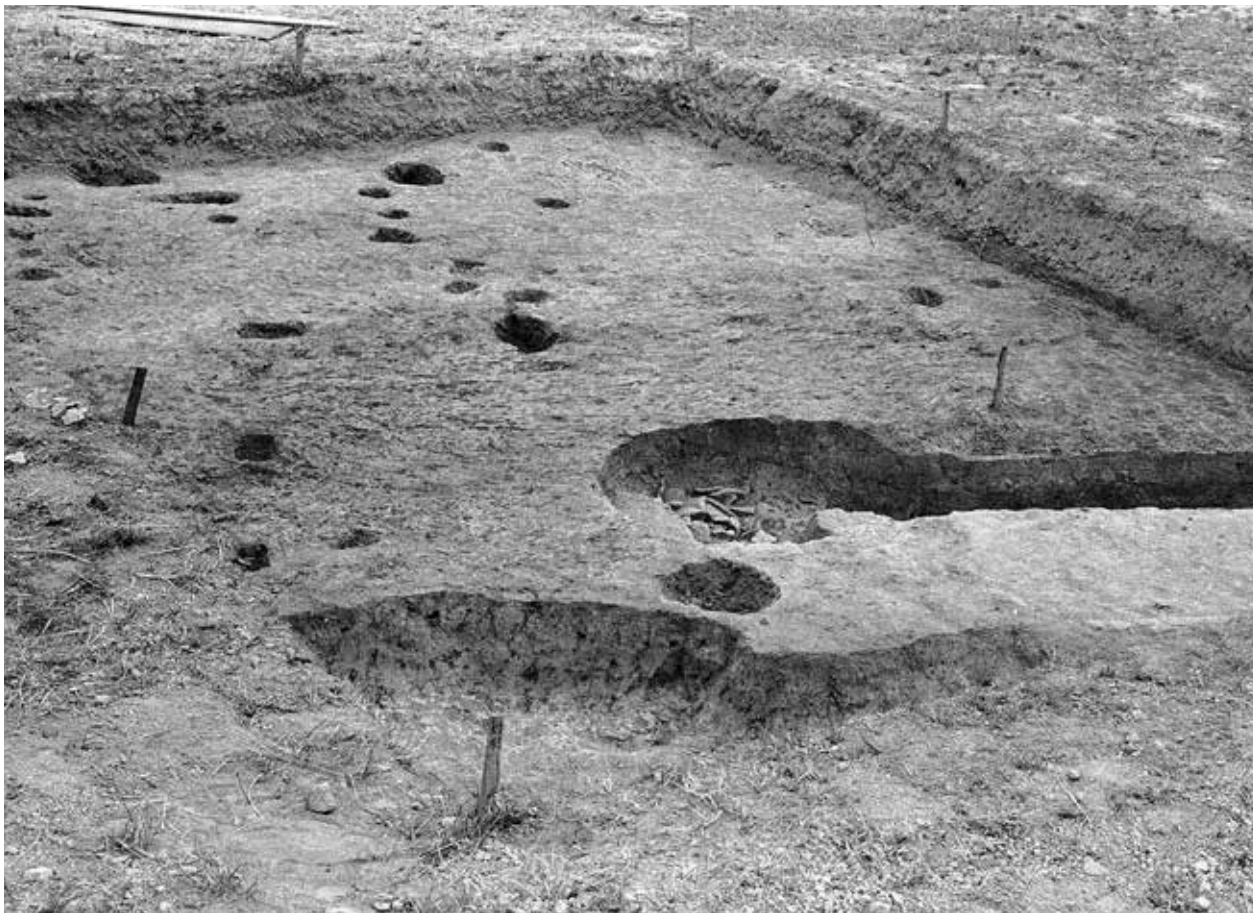
2　第1次調査区
中心部全景（北から）

PL. 12

1　1－2区1939北溝2と東拡張溝（南西から）

2　1－2区1939北溝2東壁面における金堂SX 7100と瓦層（北西から）

1　2－18区上層調査状況（南東から）



2　2－18区上層調査状況（北から）

PL. 14

1　2－18区SD 7040の瓦出土状況（北西から）

2　2－18区金堂南東隅およびSD 7040・SD 7050（南東から）

1　2－18区SD 7040の瓦出土状況（南東から）

2　2－18区金堂SX 7100南東隅およびSD 7040・SD 7050（北東から）

PL. 16

1　1－2区塔SX 7000北東隅とSD 7040（北から）

2　1－2区塔SX 7000北東隅とSD 7040瓦出土状況（南西から）

1　1－2区
SD 7040 の瓦出土状況
（北から）

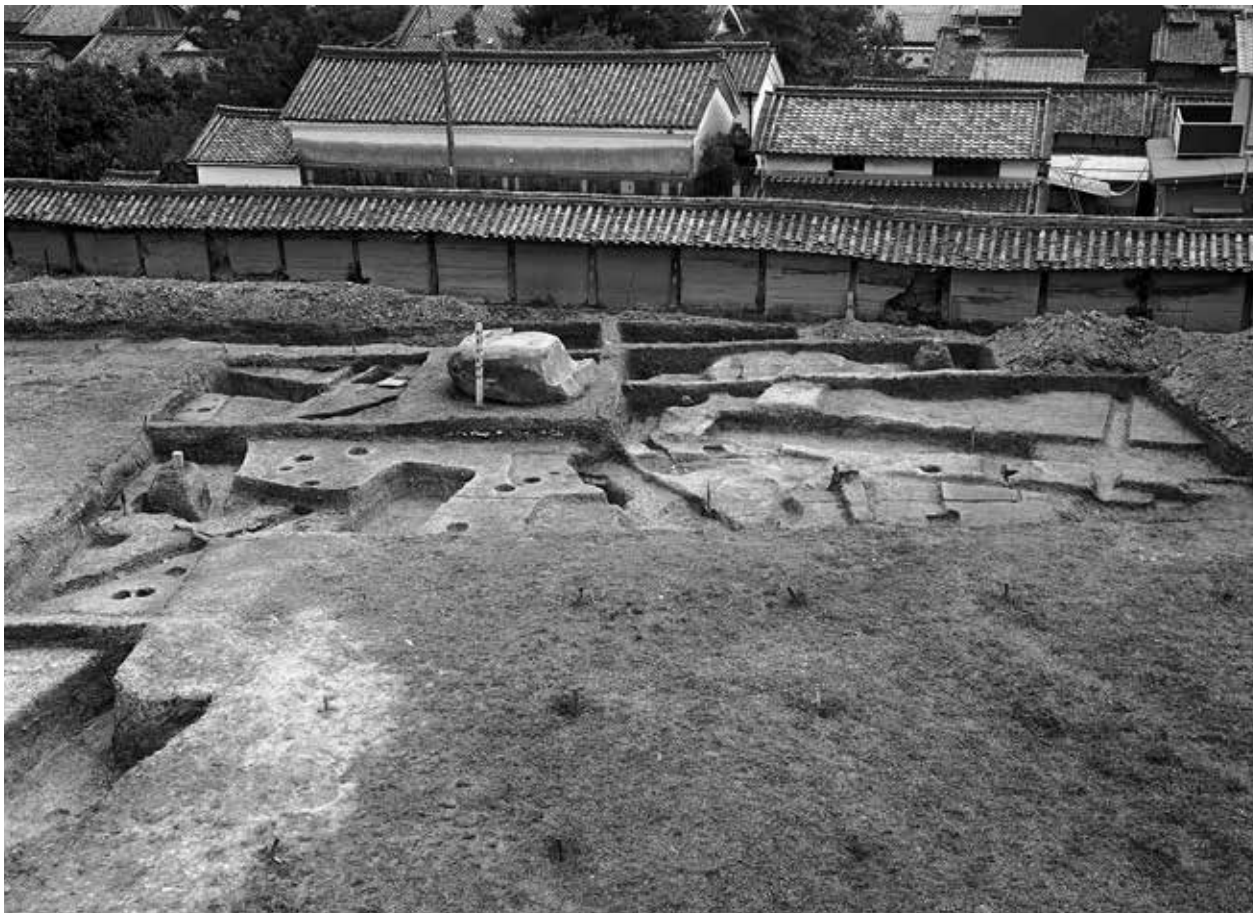
2　1－2区
SD 7040 の瓦出土状況
（西から）

PL. 18

1　1－2区
塔心礎北側の基壇下で
検出されたSD 7040
（南西から）

2　1－2区
塔心礎北側の基壇下で
検出されたSD 7040
（北から）

1　第１次調査区塔SX 7000 全景（北東から）



2　第１次調査区塔SX 7000 全景（北西から）

PL. 20

1　1－2区塔SX 7000北辺（西から）

2　1－2区塔SX 7000北西隅と1939西溝（西から）

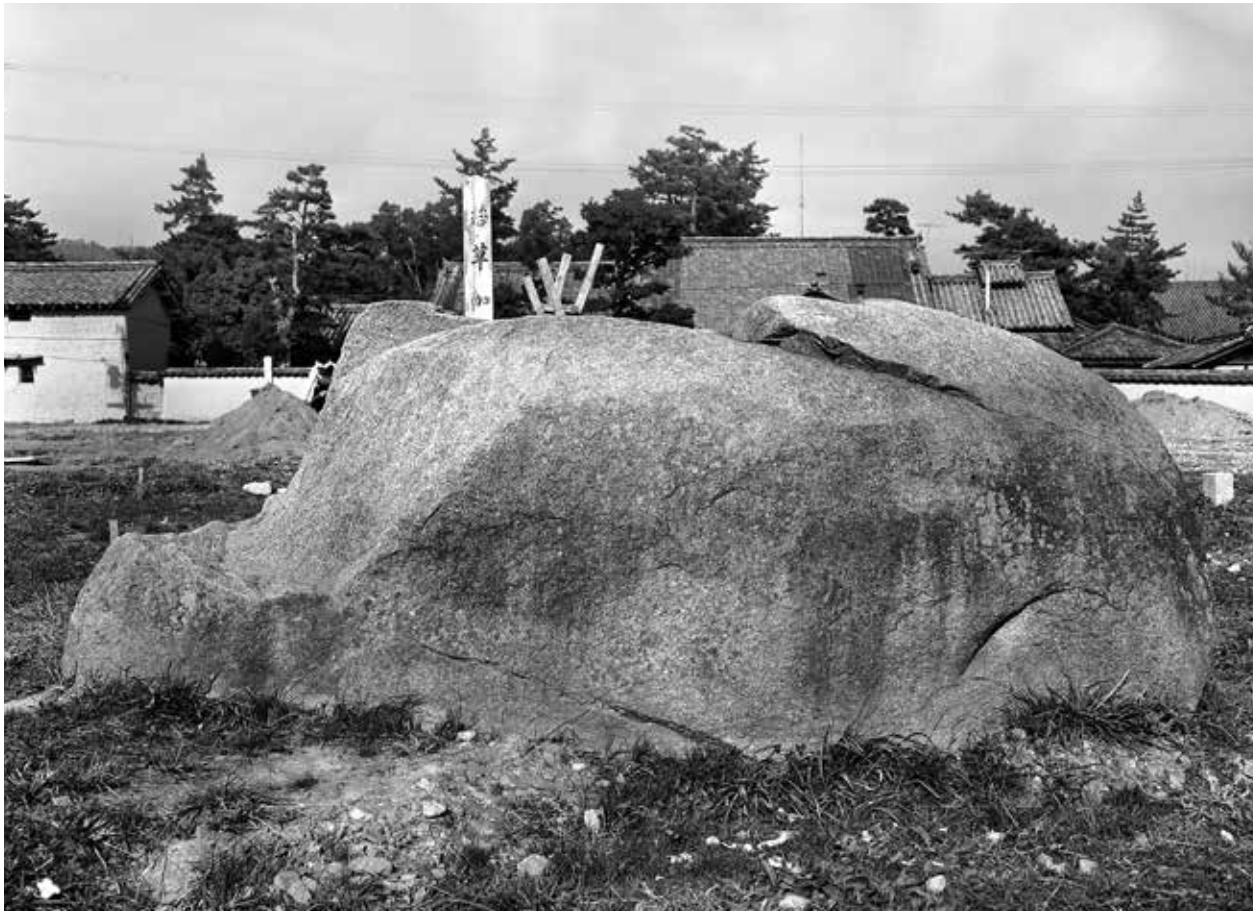
1　１－３･４区塔心礎南側地山検出状況（南西から）

2　１－２区塔心礎西側地山検出状況（南東から）

PL. 22

1　塔心礎（北から）

2　塔心礎（西から）



1　塔心礎（南から）

2　塔心礎（東から）

PL. 24

1　塔心礎（北西から）

2　塔心礎（西から）

1　1－2区SX 7030内の版築の状況（南西から）

2　2－16区塔SX 7000断割状況（南西から）

PL. 26

1　第１次調査区全景（南西から）

2　第１次調査区全景（北東から）

1　1－10区調査状況（北西から）

2　1－10区東壁面における炭化物層の堆積状況（南西から）

PL. 28

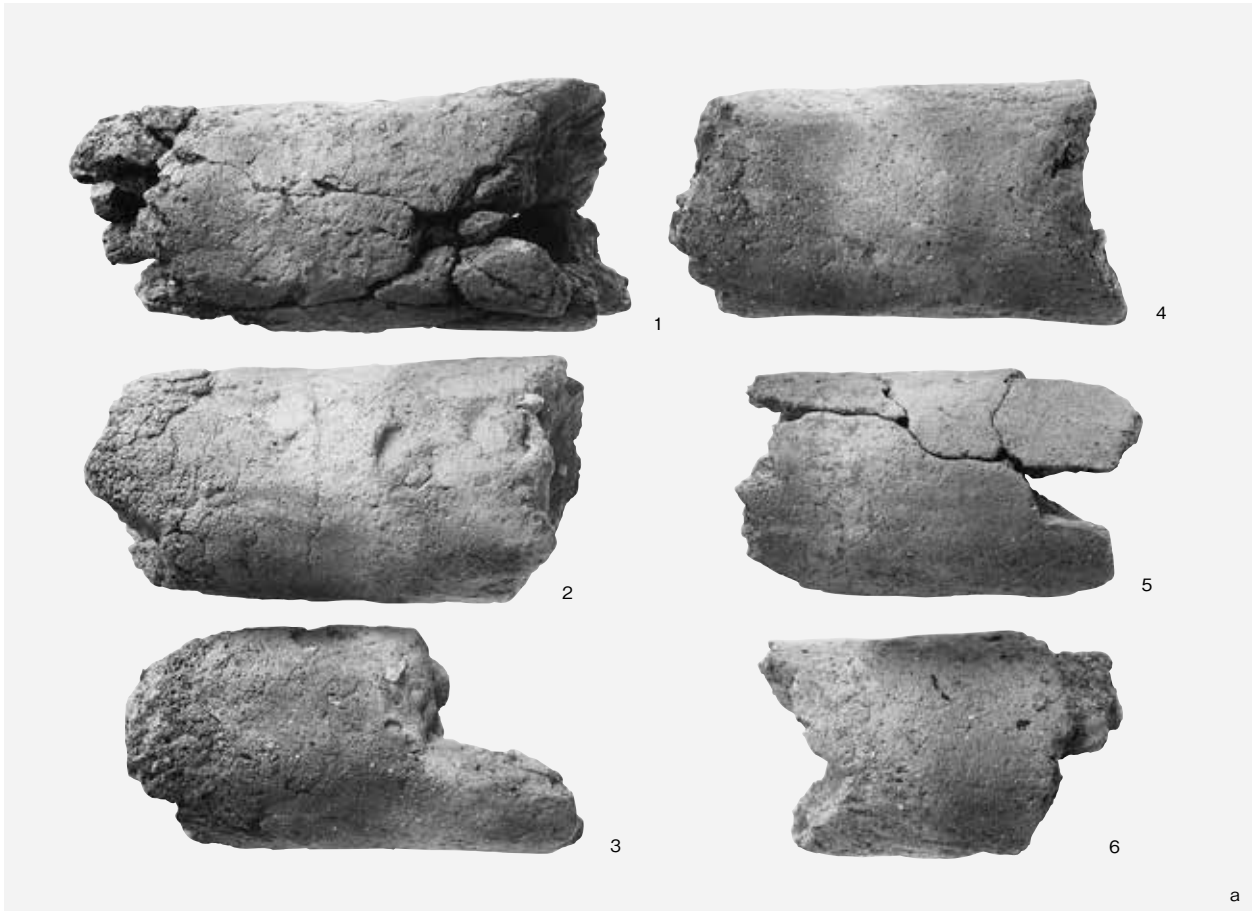
1　1－11区調査状況（北西から）

2　1－11区調査状況（北西から）

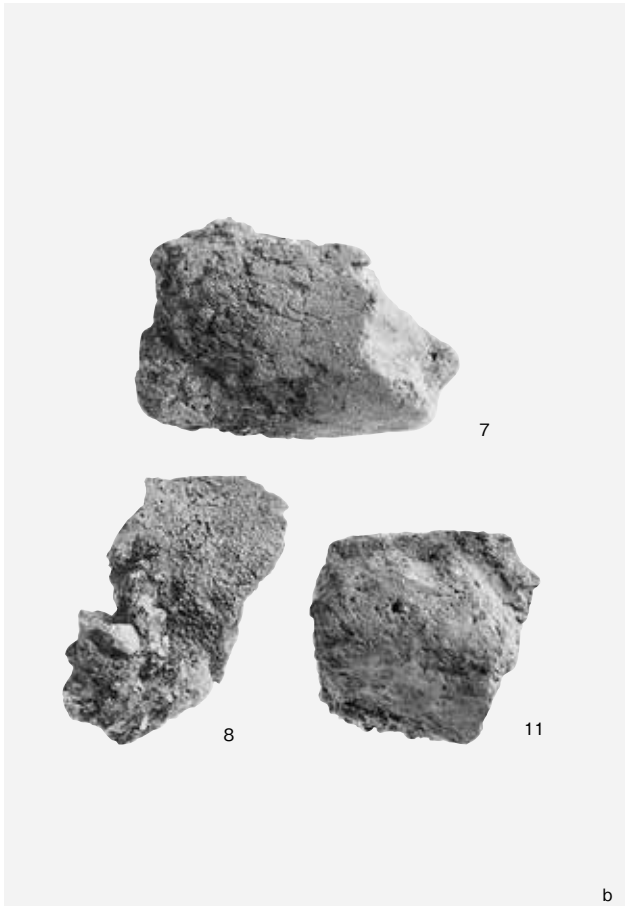
1　1－12区調査状況（北西から）

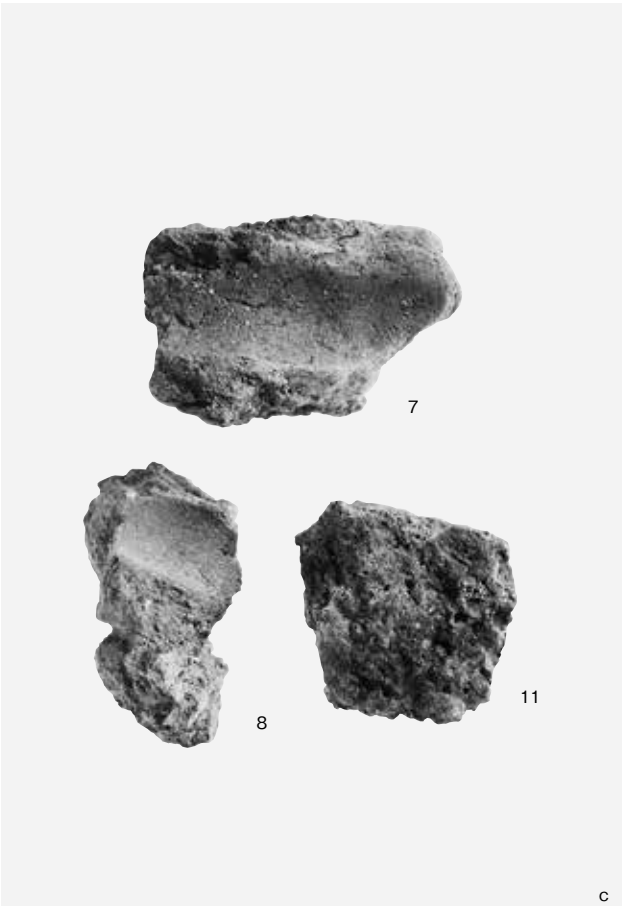
2　1－13区調査状況（北西から）

PL. 30

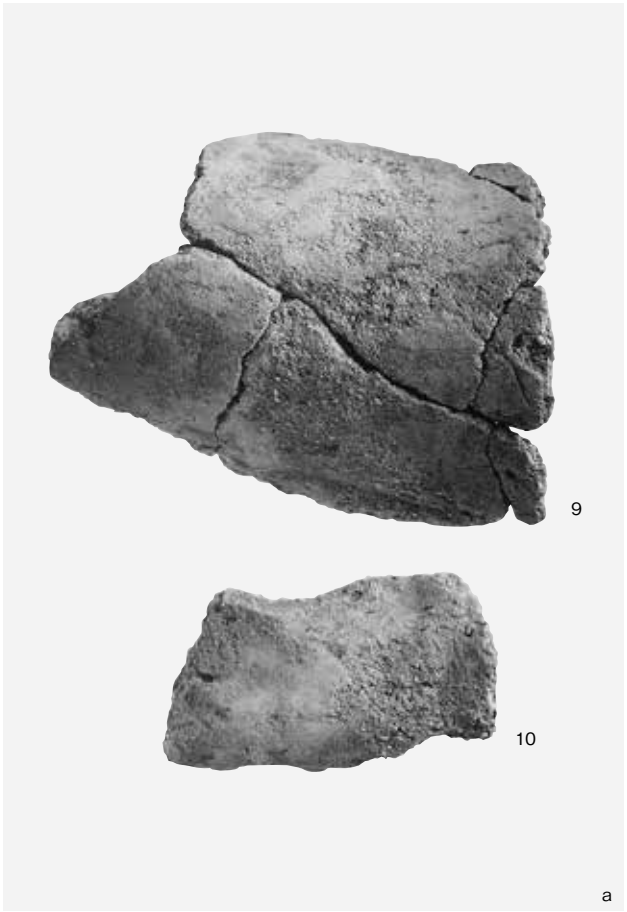


炭化物層・木炭層　鍛冶関係遺物（羽口）

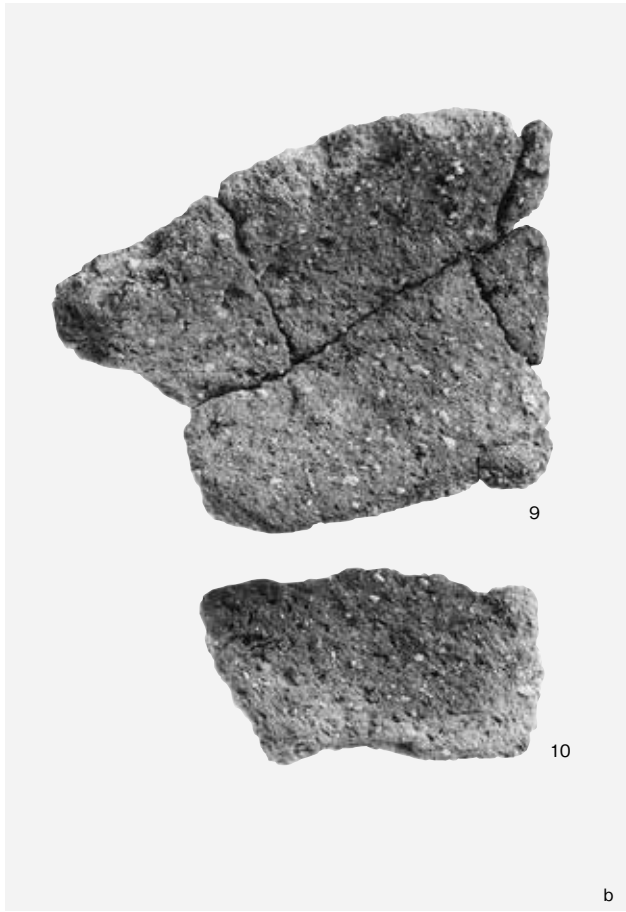




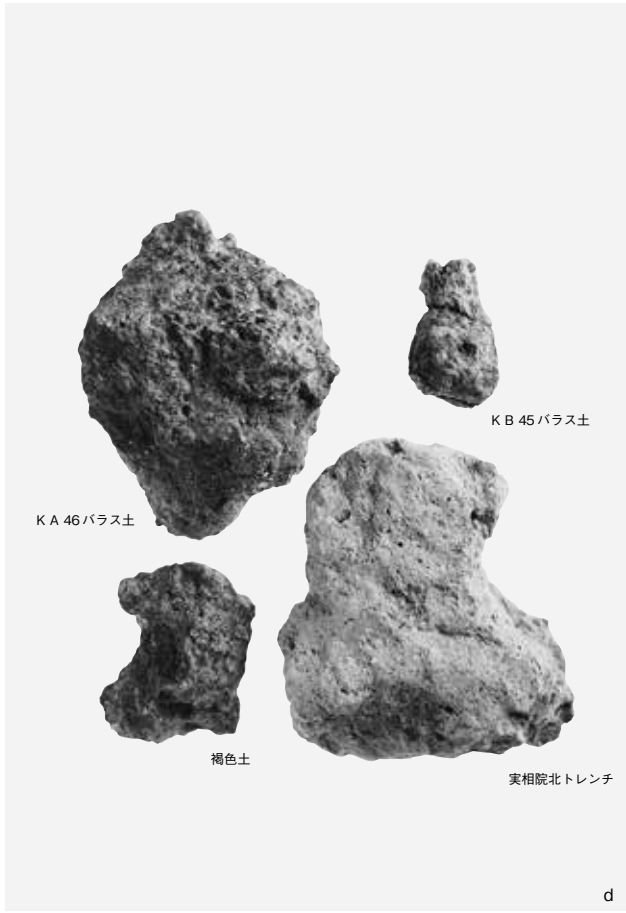
炭化物層・木炭層　鍛冶関係遺物（羽口・炉壁片）



炭化物層・木炭層　鍛冶関係遺物（半筒形土製品）

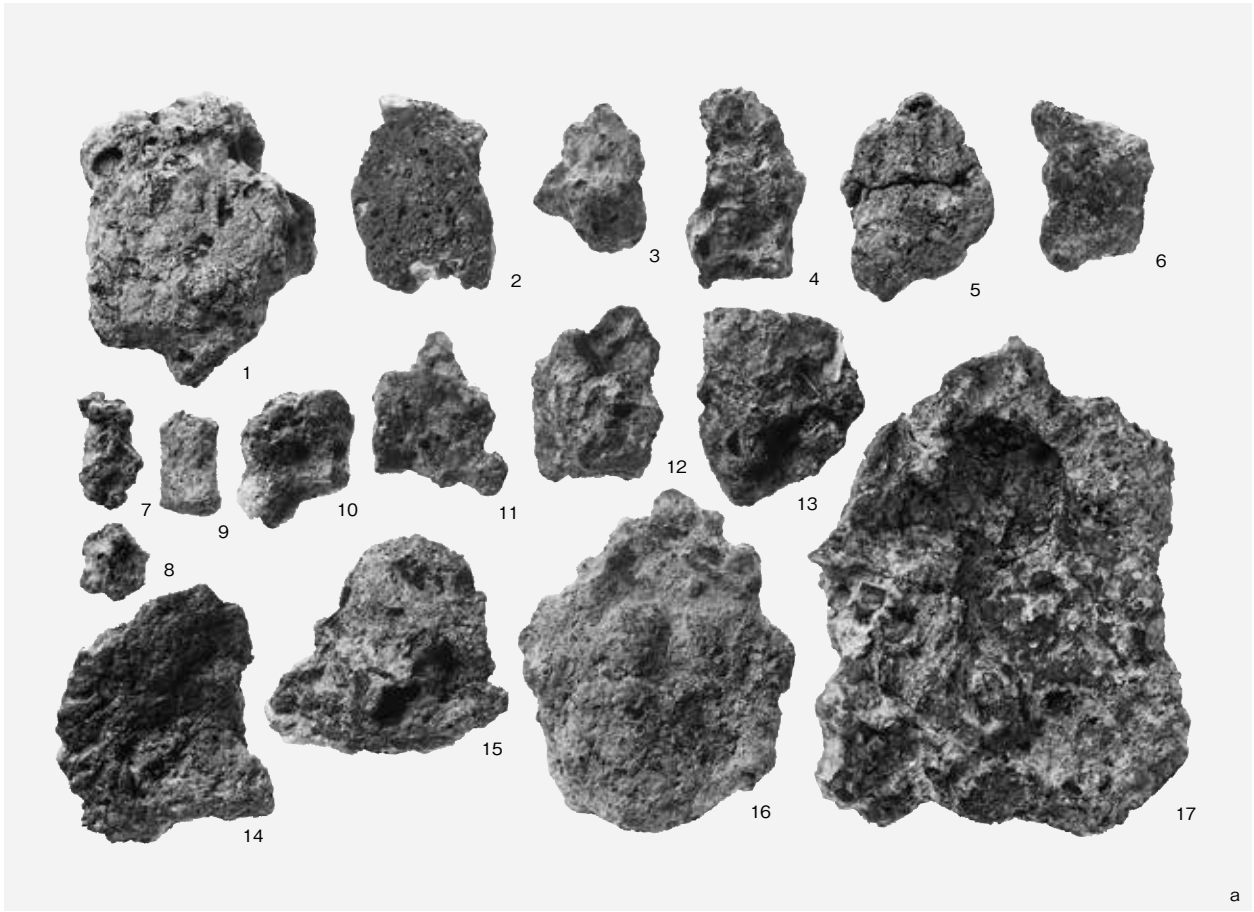


炭化物層・木炭層　鍛冶関係遺物（椀形滓）

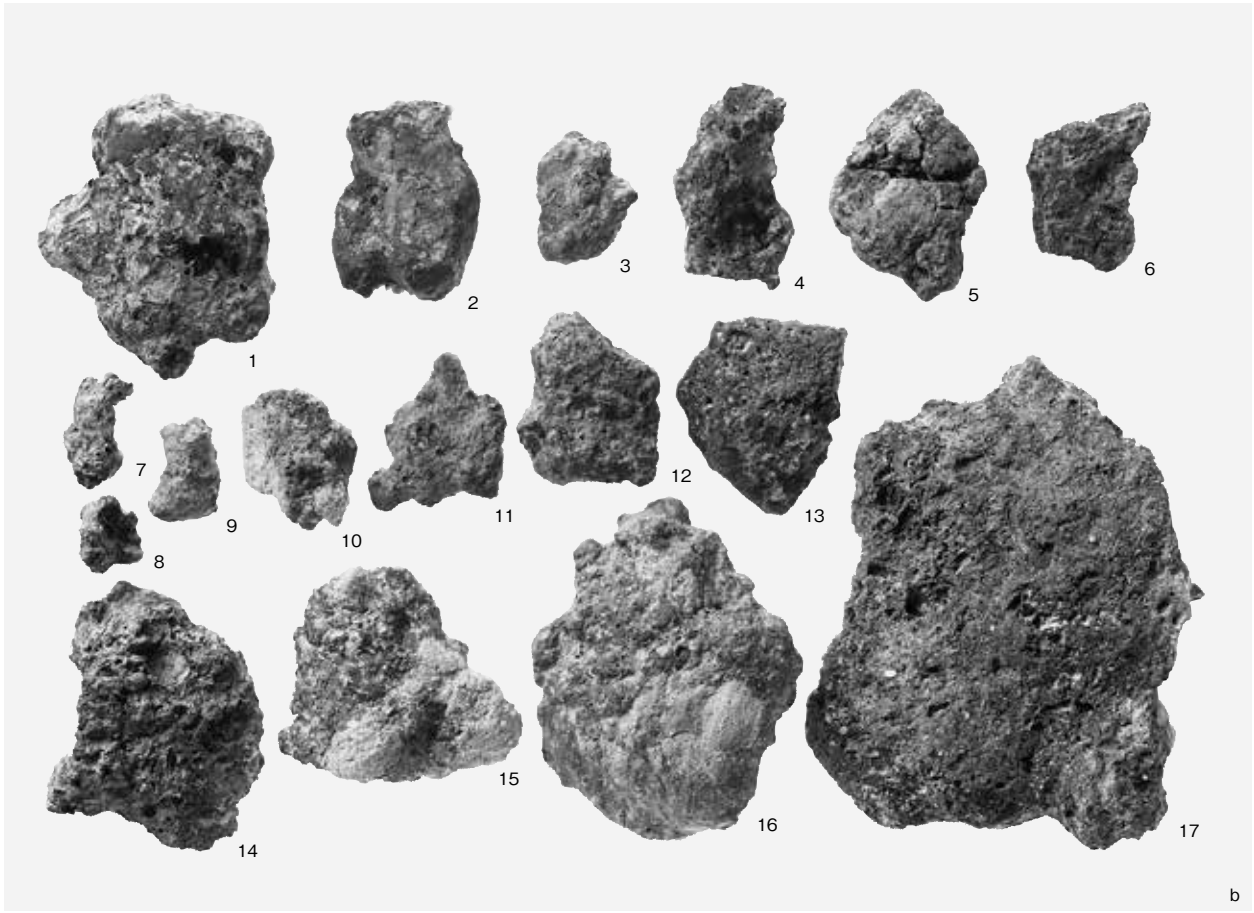


各包含層　鍛冶関係遺物・土製品

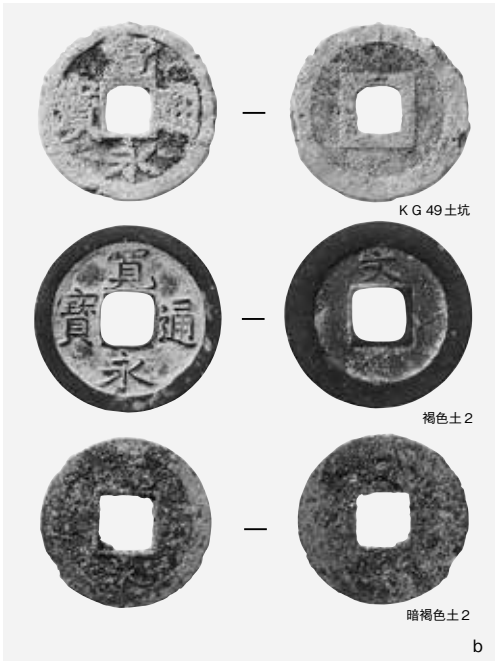
PL. 32

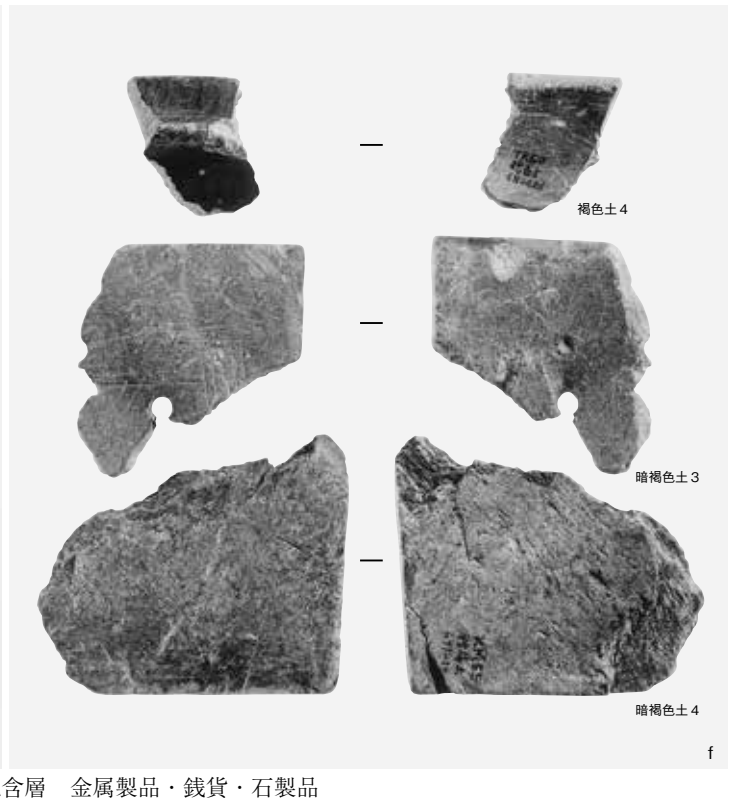


炭化物層・木炭層　鍛冶関係遺物（鉄滓）



炭化物層・木炭層　鍛冶関係遺物（鉄滓）





各遺構・包含層　金属製品・銭貨・石製品

PL. 34

SE 7074　黒色土器

KH 62 小穴　土師器

炭化物層・木炭層　土師器

KE 49 東西溝　土師器

KC 45 瓦溜北凹み　土師器

KM 53 南北溝　土師器

TO 35 南北溝　土師器

KC 46 北落ち込み　土師器・磁器

6

7

8

KL 55 凹み　土師器・陶器

2

13

4

15

6

34

7

35

9

26

TO 28 暗褐色土　土師器・瓦器

PL. 36

5

10

7

16

12

13

KA 55暗褐色土　土師器・瓦器

7

12

8

18

21

13

暗褐色土　土師器・須恵器・瓦器・施釉陶器

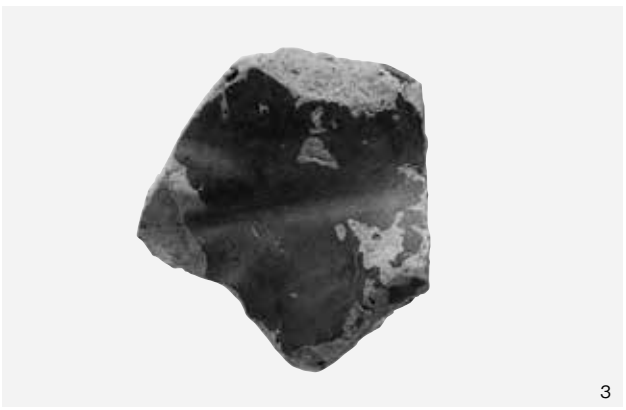
5

9

12

13

6


3

19

褐色土・表土　土師器・須恵器・瓦器・施釉陶器

PL. 38

SD 7040 出土瓦

1

2

3

SD 7040　軒丸瓦・軒平瓦

PL. 40

4

5

6

7

10

11

12

10

11

12

SD 7040　軒平瓦・丸瓦

8

9

13

16

17

13

16

17

SD 7040　軒平瓦・丸瓦

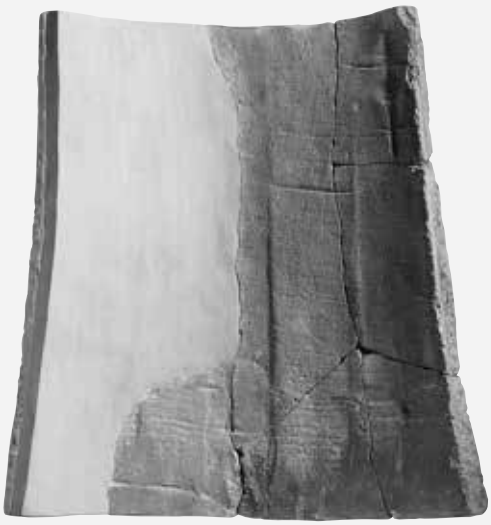
PL. 42

27

27

28

28



29

29

SD 7040　平瓦

34

34

35

35

36

36

SD 7040　平瓦

PL. 44

44

44

45

45

49

50

SD 7040　平瓦・用途不明品

1

3

2

5

7

4

6

19

SE 7074・KA 61 土坑　軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦

PL. 46

8

8

14

14

SE 7074　丸瓦・平瓦

KG 49大穴　平瓦

SX 7065　軒丸瓦

KE 47 瓦溜　軒丸瓦

KF 49 東西溝　軒丸瓦

KJ 46 新瓦溜　軒丸瓦

KA 46 斜行溝上　軒平瓦

SX 7096　軒丸瓦

KG 53 土坑　軒平瓦

TS 47 地山斜溝　軒平瓦

PL. 48

TO 35 南北溝　平瓦

KI 62 瓦溜　平瓦

KE 46 新瓦溜　丸瓦

4

1

2

KE 46瓦溜　軒丸瓦・軒平瓦

1

2

3

8

5

12

15

13

14

30

KC 45瓦溜　軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦

PL. 50

2

3

5

6

7

TR 51 瓦溜　軒丸瓦・軒平瓦

1

2

SX 7097　軒丸瓦・軒平瓦

1

2

3

4

バラス土層　軒丸瓦

1

3

1

4

炭化物層・木炭層　軒丸瓦・軒平瓦

3

2

7

7

黄褐色土　軒丸瓦・軒平瓦・平瓦

PL. 52

1

3

4

5

2

13

9

10

22

27

29

暗褐色土　軒丸瓦

41

40

43

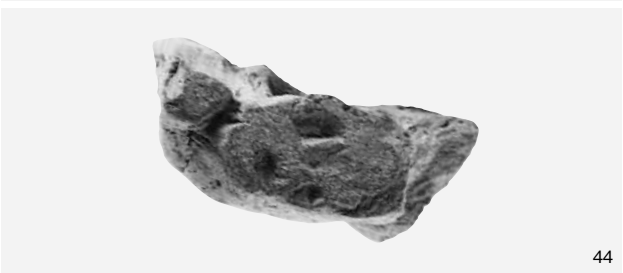
38

39

42

45

46


44

47

暗褐色土　軒平瓦

PL. 54

49

49

50

50

54

55

56

57

58

暗褐色土　丸瓦・道具瓦

1

6

4

13

15

18

21

26

50

30

49

褐色土　軒丸瓦・道具瓦

PL. 56

1

2

TS 47 地山直上　軒丸瓦

12

KB 47 石田トレンチ　軒丸瓦

3

TP 48 小礎石周辺　軒丸瓦

8

TQ 47 瓦層　軒平瓦

9

TO 30 地山上暗褐色土　軒平瓦

10

TQ 50 バラス混じり褐色土　軒平瓦

3

表土　軒丸瓦・軒平瓦

4

11

TP 50 灰褐色土　軒平瓦

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ほうりゅうじわかくさがらんあとはっくつちょうさほうこく
書　　名	法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告
副 書 名	
巻　　次	７６
シ リ ー ズ 名	奈良文化財研究所学報
シリーズ番号	
編 著 者 名	森郁夫・深澤芳樹・次山淳・高橋克壽・中川あや・今井晃樹・林正憲・肥塚隆保・山本崇・島田敏男・大林潤・光谷拓実・大河内隆之・清水重敦・石村智・牛嶋茂・中村一郎・杉本和樹・鶴見泰寿・平田政彦・南部裕樹
編 集 機 関	独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所
所　在　地	〒６３０－８５７７　奈良県奈良市二条町２丁目９番１号 ＴＥＬ．０７４２－３０－６７３３（奈良文化財研究所庶務係）
発 行 年 月 日	２００７年3月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	データ		北緯	東経	調査 期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
わかくさがらんあと 若草伽藍跡	ならけん 奈良県 いこまぐん 生駒郡 いかるがちょう 斑鳩町	29344	7-D-70	34°36′47″	135°44′09″	1968年 8月16日～ 9月19日 1969年 9月30日～ 11月25日	902.75㎡	学術 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
若草伽藍跡	寺院	飛鳥時代	金堂・塔の基壇 掘込地業	軒瓦、道具瓦、丸瓦、平瓦、土師器、須恵器、石製品、金属製品など	金堂と塔が南北に並ぶ伽藍配置。整地土の重複関係から、まず金堂を造営し、次に塔を建設したことが判明した。

２００７年3月３１日　印刷

２００７年3月３１日　発行

法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告

奈良文化財研究所学報第７６冊

著作権所有
発行者　奈良市二条町２丁目９番１号
独立行政法人　文化財研究所
奈良文化財研究所

印刷　奈良市南京終町３丁目４６４番地
株式会社　明新社

ISBN－９７８－４－９０２０１０－５３－４